

---

# 虹に届くまで

爽風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹に届くまで

### 【Nコード】

N6290P

### 【作者名】

爽風

### 【あらすじ】

遙かなる時の中で私はあなたに出逢った。

逢いたかった…

逢いたかった…

やっと…逢えた…

それはまるで虹に追いつくような奇跡。

みなせまこと

水瀬真実<sup>みなせまこと</sup>は、京都旅行で幕末にタイムトリップ（！？）してしまう。そこで出会ったのはなんと新撰組！

はじめは怪しまれ信用してもらえなかった真実<sup>まこと</sup>だけど、持ち前の腕  
っ節と度胸で困難を切り開いていく内に徐々に仲間として受け入れ  
られ、自分の想いに気づいていく。  
まことのタイムスリップの謎が徐々に明らかになる中、新撰組もま  
ことの恋も時代の激流に容赦なく巻き込まれていく。  
… 動乱の幕末を舞台にそれぞれの誠が、それぞれの恋が、複雑に交  
差する。

あたしはどうすればいいの!?

ここで何をすればいいの?…

ありきたりなトリップものです。

史実通りではない部分もありますがご容赦を。

物語も終盤に差し掛かってきました。

最後まで、ぜひお付き合いください。

恋愛に焦点を当てて書きますので、くどいと思われる方もいらっし  
やるかもしれませんがあしからず。

## プロローグ

ねえ、私たちはなんで出会ったんだろうね…？  
絶対に会えるはずなかったのに…  
なのに逢えたね。

ずっと探してた。

わたしの心の半分。

見つけた。

魂の片割れ…ベターハーフ。

逢いたかった、逢いたかった。

…逢えた…

あなたに逢えてほんによかった。

願わくば、明日も明後日もあなたが笑っていてくれますように…。  
そしてその隣にいられるだけで他には何もいらないから。

遙かなるこの時の流れの中で…

私たちは出逢った。

それはまるで虹に追いつくみたいな奇跡…

## 第一章 1 水瀬家の朝

水瀬家の朝：それはまさに戦場。

「つー兄！あき兄！すー兄！

何回起きろって言わせんの！！

いい加減の起きて！！！！」

扉を蹴破る勢いで8畳のつーにいの部屋に乗り込む。

昨日の夜は3人仲良くつーにいの部屋で寝たらしく、ガタイのいい男3人が雑魚寝している。

「「「んーもうちよつと」「」」

(三人そろって同じ反応しやがる…)

「はもるな！！！！そしていい加減に起きろ！！！！」

あきにいが抱きついてた掛け布団をひきはがして床に蹴落とし、寝ぼけて抱きついてきたすーにいには背負いをかける。つーにいに腕ひしぎ十字固めをかける。

そこでようやく3人とも目を開けるのだ。

「「「もつと優しく起こせよ」「」」

「地球が爆発してもあんたたちは起きないでしょ！！！！！！  
そんななら一生寝てる！！！！」

勘違いしてはいけない。

これは喧嘩ではなく水瀬家ではごく普通の朝の光景。

寝起きの悪いこの人たちはあたしの兄たち。

長男：水瀬司（28）医者。この秋結婚予定、口数は少なくクールに見られがちだが実は何も考えていない。

二男：水瀬明（26）警察官。人懐っこい爽やか青年に見られるが、実は毒舌。

三男：水瀬昂（23）大学院生。剣道馬鹿。以上。

そしてあたし水瀬真実（20）「真実」と書いて読み方はまこと。都内の大学に通う花の女子大生…。とはとても言い難い。

この名前のせいなのかこの劣悪な環境のせいなのか、性格は友達いわく「男前」。

それもそのはず、3歳のころから3人の兄とともに柔道と剣道を習ってきて、高齢の師範のかわりに師範代を務めるまでにうでをあげた。

もちろんそれに仁義なき兄弟げんかが一役買っていることは否めない。

ふつつ末っ子の女の子なんてかわいがられるもんじゃないのか。と思うが世の中はそんなに甘くない…

まさに弱肉強食！！荒波でもまれて育ってきたのだ。

そして極めつけは…

半開きのドアから顔をのぞかせるおでこの砂漠化が進んだ中年男性。

「いやあ、朝から元気がいいな。

はやく朝飯食わないと新幹線に遅れちゃうぞ。

あ、まこ、お父さん鞍馬亭のおしんこがないと朝は調子でないんだ。切ってくれるか??？」

この惨状を見てなおマイペースにおしんこの心配をするこの人はあたしのお父さん。

天然。マイペース。

じと目で呆れているあたしをしり目ににこにこしている。

きつとにが起こつても朝ごはんの心配をしているのだろう。

一応優秀な外科医なのに時折それは出まかせなのではないかと思つてしまう。

「あー、まこのせいで首いてえ。朝飯食べねえな、」

「あ、おれおしんこじゃなくてかつ井がいい。」

「かつ井より牛井じゃね？」

「朝つぱらからぼけんな！かつ井も牛井もない！！！！早く朝ごはん食べていくつつつてんの！！！」

「若いつて言うのはいいな。父さんはそんなに食べられないよ」

「お父さんも混ぜつかえさないで！！！」

この父にしてこの息子たちあり。

3人の兄も総じてマイペース。

なまじスタイルや顔だけ見ればなかなか3人ともイケメンなわけでそれがまたたちが悪い。

女の人たちがほつといても寄ってくるし三人とは似てないあたしは巻き込まれて修羅場に巻き込まれたことも。

こんなすちゃらかな兄たちだけど、なぜか憎めなのは彼らの人徳だろうか。

あたしはといえば、5歳のころに事故で死んだお母さんに顔も性格も似ているらしく、お父さんやつーにいなんかはあたしが怒るたびに、今だにお母さんに怒られたような気分になるといふ。

切れ長の目はともすると「怒ってる」と思われがちで…どちらかと  
言うところ中性的な顔に

に肩より少し長めに伸ばした髪。

お兄ちゃん達に比べればあまりに平凡なのが哀しい限りだけど。

いつものようにあわただしい朝。

でも今日は少し違う。

つー兄が婚約したのを京都に住むおばあちゃんに報告しに行くのだ。  
こんな風に家族そろってなんてもうなかなか行けないから、どうせ  
だからみんなで休みをあわせて京都観光も兼ねて。

このときは気付かなかった。

まさか、この旅がとんでもないものになるとは。



## 第一章 2・2010年京都：八木邸

「あー京都だあ。」  
東京から3時間弱、ようやく京都に到着。

おじいちゃんとの約束の時間まではまだしばらくある。  
今回は京都観光も兼ねてるから、この時間にどっか名所に行こうと  
いうことになった。

「なあ、俺さア、八木低行ってみたい。」  
とあき兄。

「明は新撰組好きだからなあ。」  
とお父さんが破顔しながら言う。

「まあ俺も剣道好きとしては、新撰組は外せないな。」  
すー兄も珍しく主張。

「あー、こっからそんなに遠くないみたいだし行ってもいいんじゃないか。」  
携帯で地図を見ながらつー兄が言ったことで八木低に行くことになった。

歩きながらあき兄の袖を引っ張った。

「ねえ、しんせんぐみってその八木低ってどこにいたの？」  
あたしは正直歴史には疎いからよく分かんない。

「まこは歴史に弱いな。新撰組は男のロマンだぜ。」  
「あたしだって新撰組くらい知ってるよ。沖田総司とか、近藤勇とかでしょ。」

正直名前と池田屋事件くらいしか知らない。

「まあ、新撰組じゃなくても幕末って時代はすげえよ、みんなそれぞれ、日本の行く末を考えてその信念のために闘ってたんだからさ。近藤勇も土方歳三もさ、もとは農民なんだよ、それが誰よりも武士らしく武士道を貫いたんだからかつこいいよな。」

「ふうん」

男のロマンねえ、正直よくわかんないけど、あたしも剣道をやってるから、沖田総司は知ってる。

もっとも新撰組随一の剣豪で結核で死んだ人っていうくらいの知識にすぎないけど。

八木低の門構えはさすがに重厚感があつて、どっしりしていてまるでそこだけ時間が巻き戻ったような空気が流れている。

歴史を感じさせる立派な桜の木から花びらがはらはら雪みたいに降り注いでいて雅な雰囲気あたりを包んでいる。

…カエツテキタ…

「あれ？なんだろこの感じ…なんか…」

「どうした、まじ」

「うん？なんか…ここずっと知ってる気がしただけ。なんていうか還ってきたみたいだな。」

「八木低は超有名どころだからな。テレビなんかで見たんじゃないか？」

「…うん、そうかも」

還ってきた、そんな既視感が体を廻った。

なんだ、これ？

もちろん何にもあるはずはなく、あたしは首をかしげて邸内に入っ  
て行った。

「ほなごゆつくり」  
入場料を払い、おばちゃんからパンフを受け取るとゆつくりと邸内を見物して回る。

パンフには新撰組の隊士の名前が載っていて指でそれをおつ。

…新撰組副長、土方歳三…

…ヤットアエタ…

何??今の。

「土方歳三はさ、その生き様がすげえんだ。なんていうか、滅びの美学みたいなさ。時流を見てれば幕府が崩れるのは明らかで、たぶん、土方歳三もそれはわかってたんだと思う。でも自分の信念貫き通したなんてかつこよすぎだろ。」

新撰組マニアのあき兄が熱弁振るってるけど、あたしの耳にはうまく届かない。

だってあたしは知ってるから。

この人を。

見聞きしたとかじゃなく、あたしの心が知ってる。

「…でさ、つてまこなんで泣いてんの??」

「えっ??」

あき兄に言われて初めて泣いてることに気づく。

あわてて手の頂で頬を触ると濡れていた。

「…ほんとだ、なんでだろ。哀しくないのにな、なんか懐かしい。」

哀しくはないのに、なぜか涙が止まらないのだ。

「懐かしいって一回も来たことないだろ？」  
つー兄がびっくりして聞き返す。

確かにそうなんだけど、この気持ちを表す言葉をあたしは知らない。

「ここはまこの心の故郷なのかもなあ。」

お父さんがしみじみと穏やかに言った。

「心のふるさと??」

「そうさ、人と人が結ばれる縁ってのはすごく不思議なもんだろ。気の遠くなるような偶然の積み重ねで人間は生きてるんだよ、だから行ったことのない場所に懐かしさを感じてもなんの不思議もないさ。だから、心の故郷は心が求めてやまない場所なんだよ。」

「おやじってそんなスピリチュアルだっけ??」

あき兄が茶化すように笑ったけど、あたしは妙に納得してしまった。

心の故郷、心が求めてやまない場所

あたしにとってはそれがここなのだろう。

「あたし前世は新撰組にいたのかもね。」  
なんとなく笑って茶化した。

「まこ落ち着いたか？」

つー兄があたしの頭にそつと手を載せて言った。

つー兄はいつもこんな感じだ。

決して口数は多くはない。むしろ無口で無愛想。

ただ、優しく見守って、待っていてくれる。

つー兄、由紀子さんと結婚するんだな。

幸せになってほしいな。

由紀子さんなら言葉足らずでもあったかいつー兄と温かい家庭を

築けるだろう。

あたしはつー兄の婚約者の由紀子さんを思い浮かべてあったかい気持ちになって顔がゆるんでしまった。

「なんだよ」

「なんでもないよ、」

さあ、もうおじいちゃんち行こう！時間なくなっちゃー！」

「『変な奴』」

三人のはもりを背にあたしは八木低を後にした。

## 第一章 3・2010 京都：桐生家

あたしたちがおじいちゃんちに着いた時には日が傾きかけていた。ここは母方のおじいちゃんとおばあちゃんが住んでいる。

平屋の築50年の純日本家屋。

「よおきたなあ。誠一郎君」  
ちなみに誠一郎はお父さんの名前。おじいちゃんはこのころお父さんを出迎えている。

おじいちゃん、桐生源次郎は、居合の達人で、その世界では知らぬものはいないと言われているほどの重鎮なのだ。普段はニコニコした白髪のご老人なのに、道場に入った瞬間に二重人格かと思わせる変貌を遂げる。

「よおきはったなあ。東京からやと遠かったやろ。はよあがり。」

おばあちゃん桐生きよは優しい優しい笑顔をおあたしたちに向けてくれる。

それはひなたの縁側みたいであったかくて幸せな気分になる笑顔だった。

おばあちゃんとお母さんも似ていて、あたしとお母さんは瓜二つ、つてことは将来あたしはおばあちゃんみたいになれるのかな。

だったらなんか嬉しいと思う。

こんな笑顔を人に向けられる人になりたいと思う。

「まこちゃんおおきゆうなって別嬪さんになったなあ。ほんまに若い時の有子にそっくりや。」

あたしの頬をしわしわの手で挟んでニコニコわらうおばあちゃん。

「べっぴんさん」だなんて完全に身内の欲目だけど、すごくくすく

つたい気分だ。

なによりお母さんにそっくりはあたしにとってなによりうれしい。あたしはお母さんのことをおぼるげにしか覚えていないから、あたしの中にお母さんがいてくれる気がしてほっとするから。

あたしたちは荷物を客間に置き、一通り挨拶とつー兄の結婚報告を終えて居間でくつろいでいると、おじいちゃんに声をかけられた。

「4人とも、道着に着替えて、一人ずつ道場に来んさい。」

（（（きた）））

そう、これはおじいちゃんち来た時の恒例行事。

もともとあたしたちが剣道や、合気道を習いだしたのはおじいちゃんの影響。

おじいちゃんちに行くたびに手合わせをしてもらうのが恒例になっていた。

手合わせというのはもちろん控え目な言い方で、実際はおじいちゃんに一方的に、あるいは気を抜けば一瞬でやられるわけだけど、それでも手合わせするたびにあたしたちの成長を感じられるらしい。

「手合わせをすればどんな生き方をしてきたのが大体分かる」なんて正直信じられないけど、でもおじいちゃんと木刀を手に向かい合うとすべてを見透かされているようなそんな気持ちになるからあながち大げさでもないのかもしれない。

なぜかあたしは兄弟の中でも、剣道が性に合っていたのが最近ではおじいちゃんとうちあえるまでになっていた。

もちろんまだおじいちゃんから一本をとったことはないのだけれど。

## 桐生道場

古びて黒くなった木の板に墨でかなりの達筆で書かれている。これはおじいちゃんの師匠が書いたものらしい。

道場の横には桜の大木があつて、暗闇に満開の桜がぼんやりと浮かび上がっている。

その様子はどこまでも優しく、たおやかだった。

夜風が花びらを散らし、それは儚さとともに永遠を思わせるものだった。

道場の敷居をまたぎ、一礼をして道場に入る。

板張りの床はひんやりとしていて、はだしの足には少し冷たい。

あたしは深呼吸をして道場に端座した。

道場に入ると空気が変わる。

皮膚に突き刺さるような清冽な空気は、私の心を静かに落ち着かせる。

どこまでも清浄な空気があたりに満ちていて、その空気に自分が洗われていくような気分になる。

防具をつけ木刀を手にすると一礼しておじいちゃんに向き合う。

剣を持つおじいちゃんは一分の隙もなく、向き合っているだけで鳥肌が立つ。

それは冴え凍る月。

揺らがないその姿に畏怖を覚え、しりごみしそうになるほどだ。

ゆらいだ心そのままでは一瞬でやられる。

先を急ぐな。



待て。

一瞬の隙を見逃すな。  
心を統一して、動揺を悟られるな。

おじいちゃんが動く。

速っ！

その速さは、80近い老人とは思えない。

あたしはその剣をかるうじて受け、流しながらおじいちゃんの懐に飛び込む。

おじいちゃんはそれを予測して、難なくかわし、あたしの肩に剣を振り下ろす。

それをギリギリでうちかえし、後ろに下がりが間合いを取る。

そんな攻防を、攻防と言うより、あたしが一方的に挑んでいるのだが、どれだけ続けただろう、あたしはいい加減息が上がっているが、おじいちゃんは少しの乱れもない。

手のしびれも、防具の息苦しさも、ただこの冴え凍る月に触れて一瞬にして何も感じなくなる。

ただ、あるのは、己の息遣いと、木刀の重みのみ。

それすらもこのどこまでも清冽な空気に溶け合って、自分を感じなくなる。

おじいちゃんに木刀を振り下ろすたびに、おじいちゃんがそれを受け止めるたびに、ただ心だけが溶け出していく、あたしの心があらわになっていく。

永遠に続くような錯覚さえ覚えるこの時間は言葉よりもなお雄弁にあたしの心を語り、おじいちゃんへと流れ出していく。

おじいちゃん、あたしはね、今の生活に何の不満もないよ。

大学に通い、道場で剣道や合気道をして、家事をして、もしかしたらこの先恋とかするのかもしれない、今は全然想像できないけどね。でもこの満たされなさは何なのかな。何かが足りない。欠けたものを取り戻したくて、剣道に必死に打ち込んで、でも焦燥は一層強まるばかりなんだよ。あたしはすごく焦ってる。

一瞬だった。

目に汗が入り、瞬きをしたその刹那

「隙あり！」

おじいちゃんの木刀が胴に入り立ち合いが終わるを告げたことを知った。

「だいぶ腕上げたなあ。」  
「防具をとりながらおじいちゃんが言う。」

「そう？道場でちびっこに教えたりしてるしね」  
「だが、まだまだや。」

心が不安定やなあ。心技体一体になって初めて剣道はその意味をもつんや。いまの真実は技におぼれとる。なんにあせてんのや。焦りはなあんもいいことあらへんで。」

「わかんないよ。それが分かってたら苦労しないって。今が不満なわけじゃない、でも満たされないみたいな。」

「若さゆえやなあ。」

己に悩むんは若いがゆえやで。

でもこれは人として成長する助走期間みたいなものなんやで  
悩んで悩んで悩みぬきや。

そんなとき真実が大きくなってくれたらうれしいわ。  
ゆっくり考えたらええ。いろんなことを。

自分の心も、先のことも、

ああ、男のこともな。

いろんな人に逢って、惑って、回り道、道草、いっぱいして、いろ  
んなこと経験したらええわ。

人生は悩んだもん勝ちやで。 まあ気張りや。 」

「なにそれ、てか男って生々しすぎだつて。 」

くすくす笑いながらおじいちゃんを見る。

おじいちゃんも剣を握った時の険しさは微塵もなく、ただ静かに笑  
っていた。

道場を出ると、外は激しい雨が降っていた。

立ち合いでほてった体に雨が降りしきり、急激に熱を冷ましていく  
の気持ちいい。

やっぱりおじいちゃん強いなあ。

でも剣を握った時、あたしは完全に体を感じなくなっていたし、  
こんな感じはよっぽど集中してるときでないとなしな。

体の中にはまだ熱いものが駆け巡っているようで、肌にあたる雨を  
蒸発させ、自分から湯気が出てるんじゃないかとさえ思う。

心地よい疲労感

体の中の熱いもの。

悩んだらいいんだね、お母さん。

あたしを見守っててね。

あたしはチェーンに通したお母さんの形見の指輪をぎゅっと握りしめた。

道場の横の桜にも雨は容赦なくたたきつけていて、花びらを次から次へと散らしていく。

桜散っちゃうじゃん。

木の下に歩み寄って何気なく花を見上げたその刹那。

一瞬の閃光が走り

次の瞬間には

すさまじい轟音があたりに響いた。

やばい！！雷だ！

そう思った瞬間には体中に激しい衝撃が走り、何も分からなくなった。

第一章 4・1863年京都・壬生寺

…

…。

……！

……ッ！

…誰…？

…体痛い。

バシッ！！

頬に熱い痛みが走って目が覚める。

「ああ、よかつた。

大丈夫ですか？

家はどこです？

送りましょう。」

いろいろ矢継ぎ早に聞かれるけど、あたしはその質問よりも、目の前の人に目を奪われる。

時代劇みたいな傘をあたしにさしかけてる男の人。

傘までいいとしても、

だって…何で…サムライスタイル？？

着物に袴、腰にはなんて物騒なもの…刀

レプリカかもしれないけど、コスプレにしてはガチ過ぎて怖い。

あれっ？あたしおじいちゃんちにいなかった？

周りを見回すと明らかに知らない風景。

「…」

「は？壬生寺ですよ。」

「みぶでら…」

壬生寺は知ってるけど

なんであたしここにいるの??

「あなたの家はどこですか？」

「家…」

おじいちゃんちの住所わかんないけど、壬生寺は近所でなんども行ってるからわかる。

「家はこの近所です。」

「ああ、よかった。送りますよ。立てますか？」

「はい。」

稽古着は雨を含んでぐっしより濡れて重い。

そのとき肩がふわっと温かくなった。

ふと見るとその男の人は羽織をあたしの肩にかけてくれていた。

「かぜひきますよ」

「…すみません、ありがとございます。」

コスプレマニアだなんて思ってしまったって申し訳ない。

春とはいえ、雨が降ってかなり気温も下がっているので、羽織物はありがたい。

歩き出すと体がきしんで痛い。

男の人はあたしに傘をさしかけてくれて並んで歩きだした。

「いったい何があったんです？こんな雨の中あんなところで。」

歩きながら、その人はあたしに話しかける。ガチコスプレにはびっくりだけど、優しいその声色やしぐさにホッとできる安心感がある。

「おじいちゃんと稽古中に雷にあつて…」

あたしはかすれながらも声を振り絞る。

「あの雷ですか？よく無事でしたねえ。」

「体だけは頑丈なので」

「あははははは、面白い人だな。」

あたしのよくわからない返しにその人は大爆笑している。

ああ、そうだ、あたし雷に打たれたんだなあ。

雷に打たれて何にもないなんてあたしって運いい？

壬生寺をでて少し歩くと、明らかな違和感に不安になった。

あたしの知ってるおじいちゃんちの近所じゃない。

だってなんで、電柱とか、ポスターとかないの??

だんだん無口になるあたしを気遣わしげにその人が見ているのを感じたけど、それどころじゃない。

あたしはその人が呼びとめるのも気にせず走り出した。

だって、

なんで

無いの？

家が…

おじいちゃんちがあるはずのところは

…荒地だった。

「なんで…家がないの??  
みんなどこ行ったの!?!」

いやだいやだいやだ!!!!!!

理解できないこの状況に涙が出てくる。

「どこどこ?!」

こんなところ知らない!!!!!!」

地面がぐらり揺らいたような気がした。

あたしはひざから崩れ落ちて、その場へたり込んだ。  
ぬかるんだ地面の感覚が妙に冷静に伝わってくる。

ようやく追いついてその人があたしの肩を抱き安心させるように言  
う。

「落ち着いて、大丈夫だから。」

今夜はとにかく私たちのところにとまりなさい。」



何にも考えることができなくて、あたしはただうつむくことしかできなかった。

体は芯まで冷え切っていて、ただ目頭だけが熱くて痛かった。

あたしは肩を抱かれるようにその人に連れられて行った。

第一章 5・1863年京都・壬生浪士組屯所

しばらく歩くと大きな門が見えてきて、その人はそこで立ち止った。門の前には「壬生浪士組」と書かれた看板がかかっている。

壬生浪士組ってなんかきいたことがある気がするけどなんだっけ。

頭がうまく働かない。

このコスプレの人にもすごい迷惑かけて申し訳ないな。

「さあつきましたよ。とにかく中に入って冷えた体をどうにかしましょう。」

「すみません……。」

寒くて歯の根があわなず、あまり言葉が続かない。

屋敷に入るとそこは中庭も含めかなり大きくて和室が何部屋もある。くねくねいろんな所を回ってふすまを開けて部屋に入る。

ものは置かない主義なのか余計なものは一切ない。

その人は奇麗にたたまれた着物をあたしの前に置いた。

「ここは私の部屋です。とにかくこれに着替えてここで待っていてください。」

副長に報告してきますから。」

ふくちよう？

「あ、申し遅れましたが、私は壬生浪士組副長助勤沖田総司です。とにかく安心して今日はゆっくり休みなさい」

そこまで言つとぶすまをしめて出ていった。

あたしはそれを聞いて瞠目する。

沖田総司！！！！！！

新撰組の？！

そんなのありえない。

だって沖田総司は幕末の人だもん。

こんなところにいるはずがない。

でも

どこを探して見当たらないおじいちゃんち

現代のものが一切ない見なれない京都の町並み

着物に刀の時代劇みたいなかつこ

壬生浪士組と書かれた看板

沖田総司と名乗る男

…

そこから導き出される符号…

…タイムトリップ…

マジか！！

まるで漫画の世界じゃん

ていうより、あたしこれからどうすればいいの??

元の世界に帰らなきゃ。

でもどうやって??

それよりもどうやってここで生きていけばいいの??

新撰組って…怖いよ…

ホントのこと言う??

でも未来から来たなんて信じてもらえない。

なによりあたしが新撰組がたどるこれからの未来を知ってることはものすごい危険なことなんじゃない??

あき兄が言ってたけど新撰組は鉄の掟で統制された組織。

利用できそうな情報があるならどんな手を使ってでも聞き出すだろう。

拷問とか???

無理無理!!

怖い!!!

なんであたしがこんな目にあわなきゃいけないの!??

ばたばた

畳に涙が落ちる音が静かな部屋の中に妙に大きく聞こえる。

「怖い…

つー兄、あき兄、すー兄…お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん…

だれか…助けて…帰りたいよ…」

声に出してもただ闇が広がっているだけでなににも変わらない。

「こわい、こわい、こわい…  
もうやだよ…」

「どれだけ時間が経ったのか。」

「沖田さんはまだ帰ってこない。」

「涙が枯れるまで泣き切ってしまうと不思議なもので少しだけ気持が落ち着いてきた。」

「怖いけど、泣いてばかりもいられない。」

「これからどうするか考えなきゃ。」

「へっくしゅん」

「しばらく泣いてたことでぬれた稽古着から体温が奪われて冷え切ってる。」

「このままじゃ絶対風邪ひく。」

「沖田さんが貸してくれた着物ありがたく借りよ。」

「中の下着まで雨で濡れていたのでキャミとブラは外して濡れた稽古着の中にしまっておく。」

「帯の結び方がよくわかんないけどはだけなきゃいいし、こんな感じでいいか。」

「帯を2周巻き切って体の前で固結びにしておく。」

「濡れてぼさぼさに乱れたポニーテールを縛りなおして一息つくと膝をかかえて丸くなった。」

「乾いた着物はおひさまのおいがして、一瞬安心感をもたらしたが、すぐにさみしさを誘い、鼻の奥がつんと痛くなる。」

泣いてはいけないと思うのに、涙が止まらない。  
いったん涙腺が緩むと自分の意志では止まらないのだ。

もう泣いちゃだめなのに

まだ涙がでる

強くならなきゃ。

生きてもう一度みんなに会ったから。

涙をこらえるためにきつく膝を抱えて瞼を膝に押し付けているうち  
にあたしの意識は遠のいていった。

## 第一章 6・副長室にて：土方歳三

外は季節外れの嵐が桜を散らしている。

灯りがそろそろ切れるので持ってこさせようかと考えていたところに、ふすまがいきなり開いた。

自分に対してこんな無礼な人間は一人しかいない。

「総司、戸をあける前には、一言声をかけろっていつもいってんだる。」

「申し訳ありません、以後気をつけます。」

「ところでですね、妙な拾いものをしたんです。」

いつも通り小言を言うのと、さも気にしていないように総司はさらりと流してすぐに本題に入った。

「総司、おめえはまたわけわかんねえもんを拾ってきやがったのか！」

「嫌だなあ、物じゃなくて人ですよ。」

「そういふ問題か！」

「でどんな奴なんだ。」

「名前は？年は？出自は？」

「さあ、まだ聞いてないのでわかりません。」

「おめえは馬鹿か！そんな怪しい奴屯所に入れんじゃねえ！！！」

沖田総司という男はなんともつかみどころのないやつだと思う。

のほほんとしてうすらボケっとしているが刀を持たせれば人が変わったように強くなる浪士組でも1、2を争う剣豪である。

浅黒い顔に白い歯をみせてにこにこわらっている普段の姿を見ていただけではとても想像できないが。

もうかれこれ10年の付き合いになるが、話しているとかならず奴の調子に巻き込まれる。

「まあまあ、そんなに怒らないでくださいよ。さつき壬生寺に雷が落ちたでしょう。」

わたしはその時ちょうど巡察の帰りだったので様子を見に行っただす。

そしたら桜の木の下に人が倒れてたんですよ。

花びらが雨に打たれてドンドン散っててその下に倒れてるんで、なんだか妙に雅でしたね。

近くに寄ってみると、まだ年若い少年なんですよ。

着物がすこし煤けていたんで雷に打たれたみたいで。

体も冷え切っていたので、最初は死んでると思ったんですが、息をしていたのでゆり起したんですよ。

そしたら様子がおかしいんです。

家はこの近所だと言うので送って行くとそこにはなんにもありません。

こんなところ知らないと言いきだしてしまいましたね、とにかくこの雨だしほっともおけないので連れて帰ってきたんです。」

なるほど、妙なやつだ。

夜の壬生寺なんぞ不逞浪士たちがうようよ闊歩している

そんな中に子供一人がいるなんて、一体どういうことだ？

しかも家があると言っというところには家がない。

長州の奴がここに忍び込むための作戦か？

それにしちゃあ、危険が大きすぎる。

第一総司が通りかかるのなんて偶然にすぎん。

「なるほどな。」

で、そのガキはいまどうしてんだ？」

「私の着物を出してやって、とりあえず待たせてあります。」

「会いますか？」



「ああ、言つとくがな、総司、怪しいと思つたら」「わかつてますよ」

「斬ります。あの子が敵ならね。」

総司は俺をさえぎつてぞくりとするような不敵な笑みを浮かべた。

これだからこいつは侮れねえ。

昼行燈みたいのにのりくらりしながら一瞬にして冴え凍る月に変わる。

「ふん、わかつてんじゃねえか。」

おれたちの敵なら容赦はしない。

たとえそれがガキでもだ。

俺たちはこれから先へ行かなきゃいけねえんだ。

そのためなら何だつてしてやるぜ。

総司の部屋の前になると、総司が声をかける。

「入りますよ。」

「…」

返事がない。

まさか逃げたか…？

ふすまを開けると部屋の隅のほうにうずくまっている人間が見えた。膝を抱えてじつと動かない。

なるほど、総司の言うようにまだガキだ。

年の頃は15、6か？

ゆっくり近寄ってみると

…そいつは寝ていた…

頬には涙の跡が見え、目が腫れている。

髪をかきあげると、その寝顔はあどけなくて、額や口元に幼さを残していた。

泣き疲れて寝ちまったのか。

近づいても起きねえのはホントに鈍いからか、ふりなのか。

「おやおや、泣き疲れてしまったみたいですね。かわいい顔して。」

総司が困ったような笑顔を見せて布団を敷き始めた。

「いろいろ聞くのは明日ですねえ。副長？」

総司がそいつを布団に寝かせながらからかうように言った。

「ふん、今たたき起こして泣かれても面倒だしな。」

明日、こいつに洗いざらいはかせてやるう。

俺は総司の部屋を後にした。

外を見やると雨はもう上がっていて、雲間から月が顔をのぞかせていた。

## 第一章 7 過去に生きる

「…ん…」

ゆっくりと目をあけると、昨日泣きすぎたせいで、目が痛くて腫れぼったいのが分かる。

見なれぬ天井。

ああ、そうだ…

あたしタイムトリップしたんだ。

目がさめたらもとの世界に戻れるんじゃないかという淡い期待を打ち砕かれ、少し落胆する。

ゆっくり体を起こすと雷の後遺症なのか体のあちこちが痛い。

今何時くらいなんだろう？

布団、沖田さんにかけてもらったのかな。

お礼を言わなきゃ。

髪を縛りなおし、胸元と裾を直して部屋をきよろきよろ見回していると、ふすまがすつと開いた。

隙間から光が部屋に差し込んできて目に刺さった。

人影が近づいてきてそれが沖田さんだと知れる。

「ああ、起きたんですか。

どうですか、体は。」

「大丈夫です。昨日は助けていただいたいて、着物や寝る場所まで本当にありがとうございました。」

「

「いえいえ、大事ななら何よりです。  
ところでお名前伺ってもいいですか？」

「あ、申し遅れました。」

水瀬真実と申します。」

「では水瀬さん、局長と副長がお話を聞きたいそうなので一緒に来てもらえますか。」

「はい。」

あたしは裾の長い沖田さんの着物を手で少したくしあげ沖田さんについて行く。

もしかしたら斬られるかも。

ってどうかその可能性大だろうな。

だって明らかに怪しいし。

でも覚悟を決めない。

長い廊下の先の部屋の前に来ると、沖田さんが声をかける。

「近藤先生、土方副長、沖田です。」

「はいね。」

ふすまを開けると奥に座っている人が二人見える。

目が部屋の暗さに慣れなくて部屋の中がうまく見えない。

ようやく眼が慣れてきてそのうちの1人の顔が見えたその刹那：

あたしの全身を電流が流れた。

…ヤットアエタ…

「おい、呆けてねえで座れ。」

「……！」

その人の声で我に返り、その場に腰を下ろした。

今の感覚。

前川邸のパンフ見たとき時と同じ感じ。

目の前にいる人。

この人は土方歳三だ。

パンフに顔写真が載ってたし、何よりあたしは知ってる。

この人を。

どうしてかは分かんないけど。

心のどこかで、否心の底からこの人を懐かしいと感じている。

歴史上の、ピンボケした白黒の写真でしか知らないはずのこの人に、

あたしは逢いたくてたまらなかったのだ。

あまりの懐かしさに、涙腺がまたしてもゆるんで鼻の奥がつんと痛くなる。

あたしがこの時代に来たのはこの人が関係していると直感でそう思った。

泣くな。

変に思われる。

奥歯を痛いほどかみしめてうつむいた。

土方歳三は、言われた通り美形だった。

切れ長の二重の目、

すっと通った鼻筋、

酷薄そうな薄い唇

そのどれもがおそろしくととのって、はつきり言っただけじゃイケメン。

その形のいい眉を歪めてあたしを見ている。もといにらんでいる。

正面に座っているのは近藤勇だろう。

写真で見たよりも若くて土方歳三とは違った重厚な威圧感がある。

「おまえ、名前は何だ。」

「水瀬真実と申します。」

「なんであんなところに倒れて居やがった。」

「倒れていたのは雷にあったからです。」

「家は近所だとぬかしたが何にもねえ、荒地だったそうじゃねえか。」

「それは…」

「はつきり言わねえと斬るぞ。」

刀を首先につきつけられる。

首筋にぴりりとした痛みが走った。

「としっ！」

近藤勇が土方歳三をいさめる。

覚悟を決めよう。

あたしは未来から来たことを隠す。

自分を守るために、この先の歴史を守るために。

隠し通そう。

絶対に。

「私のもとといた場所は東…の、江戸です。幼いころに母を亡く

し、父と3人の兄と暮らしていましたが、今は身寄りはありません。父から壬生寺の近くに祖父が暮らしていると聞いていましたが、訪れてみると荒れ地で…、親戚もいないので途方に暮れて壬生寺に戻ってこれからどうするか考えていたところ、あの雷に打たれました。」

「ほとんどは事実。」

「家族には会えない。」

「150年という時、それは死よりも遠い別れ。」

「もう永遠に会えないかもしれないんだと思うと視界がぼやけてくる。」

「ふん、それが本当だと信じられる根拠は？」

「ありません。」

「この世に私を知る人はもういませんから。」

「誰もいない。」

「自分とつながる人は。」

「あたしは全然違う世界に来てしまったんだ。」

「それは、辛かろうなあ。」

「いままで黙っていた近藤勇がしみじみ言った。」

「あたしは奥歯をかみしめた。」

「だめ。」

「優しい言葉なんてかけないで。」

「泣いちゃっじゃん。」

「なあ、とし、この子をここに置いてやれないか。」

「勝つちゃん！！何言つてんだ！！  
こんな素性も知れない怪しい奴おけるわけないだろ。」

ズキン

確かにその通りなんだろう。

あたしは未来から来たこと隠してるし、そうでなくとも怪しい人間を置くなんて考えられない。  
でも自分勝手なのはわかってるけど、拒絶されるってつらい。

「いいじゃないすか、置いてみれば。」

シリアスな雰囲気突き破ったのは沖田さんののほほんとした面白がるような言葉。

「総司、これは遊びじゃねえ。もし近藤さんの身に何かあってからじゃ遅いんだ！」

「させませんよ。そんなこと。」

わたしや土方さんがいるでしょう。

気になることが出てきたらすぐに斬ればいい。ただそれだけです。  
「…！」

信じてもらえるなんて思わない。

だれもない。

これから先は孤立無援。

幕末はこういう世界なんだ。

膝の上の手をぎゅっと握りしめる。

「ふん、いいだろう。大将が決めたことだからな。」

ただおまえを信じるわけじゃねえ。少しでも妙なまねを試みる、  
わかってんな。」



「…はい。」

負けるもんか。

ここで生きること、過去にいきるっていうのは「こう」いうことだ。

「時に水瀬さん、あなたをここに置く以上、隊士として置くことになりません。」

入隊試験を受けてもらいましょう。どうですか。近藤先生、土方副長。」

「ああ、だが時に水瀬君、剣術の心得はあるのか？」

「えっと…」

「ありますよ。」

と答えたのは沖田さん。

なんで知ってるの？

「きのう寝かせたときにあなたの手をみたら、剣ダコがありましたからね。」

どの程度のものなのか見せてください。あなたの腕を。」

沖田さんはぞくりとするような笑顔があたしを貫いた。

## 第一章 8・生か死か、入隊試験

小さな道着と袴を身につけ、防具を貸してもらおう。

道場には多くの人が集まっていて、ひそひそ言葉を交わしているのが虫の羽音に聞こえて耳障りだ。

「なんだ、あのちいせえの。」

「入隊志願者らしいぜ」

「へえ、あんな女みたいなやつが無理に決まってるんだろ。」

うるさい。

女みたいじゃなくて女なの。

だめだ。こんな雑念持ってたなら勝てない。

落ち着け、落ち着け。

あたしは今何のために剣を持つのか。

それは自分を守るため。

この世界で生き抜くにはどの道を選んでも絶対に険しいに違いない。あたしが帰る力ギは土方歳三だと思う。

だからこの人のそばにいて絶対に帰ってやるんだ。

信じろ、自分を。

つー兄、あき兄、すー兄、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、  
…お母さん、あたしを見守ってください。

あたしは目を閉じてお母さんの形見の指輪をぎゅっと握りしめた。

「ではそろそろ始めましょう。」

勝負は1本勝負。審判は永倉さんお願いします。」

ぼさぼさの髪をまとめ、無精ひげを生やした年齢不詳の人が前に進

み出る。

「おう、承知した。  
だがよ、総司。」

こんな細っこいガキおまえの剣を受けたら死んじまうんじゃねえか？  
ちゃんと手加減しろよ？」

何だと？

手加減？

あたしが今どんな気持ちでここにいると思っただ。

あたしは永倉と呼ばれた年齢不詳男を面の中からにらみつけた。

「くすくす

さあ、どうでしょうねえ。」

沖田さんはさっきから意地悪い笑みを見せている。

馬鹿にされてる

そう思うと顔に血が上るのが分かる。

でも無駄に心を揺らがせればそれはこの勝負において命取りになる  
だろう。

明らかにあたしに分が悪い。

あたしが闘うのは伝説の剣豪沖田総司。

万に一つも勝ち目はないかもしれない。  
でもやるしかない。

沖田さんも土方さんもきつとあたしが本当の素性を話していないこ  
とに気づいている。

そのうえで、あたしをここに置くかどうかを試そうとしているんだ。  
すなわち負けは死。

ここに飛ばされた時から常にあたしは死に追いかけられている。  
だから何としてでもこの勝負逃げるわけにはいかない。  
女は度胸！

さあ、真実！覚悟を決めろ！！

「では両者まえへ」

あたしたちは木刀を構え、沖田さんと向き合った。

すい…

防具をつけていてもその殺気は肌まで伝わって鳥肌を立てる。

この人めちやくちや強い…！！

でも逃げられないんだから、だからぶつかるとのみ！！

「始め！」

お互い動かない…

否

あたしに関しては動けない。

下手に自分から斬りこめば確実に一瞬でやられる。

「なかなかの構えだ

あなたが来ないならこちらから行きますよ？」

沖田さんは何の揺らぎもなく面白そうに言いつと斬りこんできた。

速っッ！！！！

重ッ！！！！

あたしはどうか沖田さんの剣をはじいたけど、あまりの剣の圧力に手がジンジン痛む。

揺らぐな！

逃げるな！

見るんじゃない、感じる！

あたしは一瞬のすきを見つけ、沖田さんの胸に飛び込む。

沖田さんはあたしの剣を流しその返して小手を狙う。

あたしはギリギリでそれをかわしすぐさま態勢を立て直しすかさず斬りこむ。

斬りこんではかわし、返して攻撃に転じ、その繰り返し永遠に続くかに思われた。

どれだけ時間がたったかわからない。

あたしも沖田さんも息を乱し互いに間合いを取る。

あれ？

わずかな違和感が走る。

構えが変わった？

そう思った瞬間沖田さんが目の前にいた。

何？！

ガキヤ

やば！！！！

寸前で突きをかわし、後ろに跳び退る。

体勢の崩れをつくように沖田さんは2度3度と猛然と打ち込んでく  
る。

やばい！！！！！！

もう駄目だ！！！！

…！！

一瞬床に落ちた汗に足滑らせ前のめりに倒れる！

その隙に沖田さんは面に木刀を振り下ろした。

その刹那。

その木刀の剣筋が妙にゆっくり見えた。

空いてる！

あたしは左半身をひねって倒れながら右手の木刀を逆手に持ちかえ  
る。

体を倒す勢いにのせ、渾身の力で胴に木刀を入れた。

「胴！」

「面！」

「バシッ！」

ほぼ同時に沖田さんの木刀はあたしの左肩に。

あたしの木刀は沖田さんの胴に入る。

「そこまで！

沖田一本！！！！」

「「「おおお！！！！」

道場の中が揺れる。

… 負けたんだ。あたし。

ジンジンする肩を押さえてたちあがる。  
死ぬんだな。

でもこれはあたしの精一杯だ。

「異議あり。」

その声に道場が静まり返った。

「今のは私の剣は面に入っていないませんよ？」

沖田さんだった。

「総司のほうが一瞬速かったぞ？」

「でも実際の戦いなら、私は胴を真つ二つに斬られてますけど、水瀬さんは腕の失うだけですから。やはり水瀬さんの勝ちです。」

沖田さんは面をとるとあたしに歩み寄って手を差し出した。

「おめでとう、そしてようこそ壬生浪士組へ。」

「いいですよね？土方さん。」

「ふん、仕方ねえ。」

「「「わあ！！」「」」

「あのわっぱすげえな。」

「総司と互角に闘えるなんてあいつ何もんだ？」

「女みたいな顔してんのにすげえな。」

道場が揺れた。

え？

あたし死ななくていいの？

あたしは面をとってきよろきよろあたりを見回す。

「なにおかしな顔してるんです？」

「だって…あたしは…こんな怪しいのに…」

死ななくていいんですか？」

「もちろん不穏な行動をすれば斬ります。でもそれはどの隊士にも言えたこと。あなただけに限った事ではありませんよ。この試験はあなたの覚悟と技術を測るもの。あなたは予想以上の腕と度胸を持っていましたけど。」

目の前が揺らいだ。

奥歯をぎゅっとかみしめた。

「くすくす、こらこら

君はこれから武士なのだからこれしきの事で泣いてはいけませんよ。

「  
沖田さんはあたしの頭に手をポンと置くと優しく言った。

だめだ。

そんなことされたら泣いちゃう…

昨日からあたしの涙腺ぶっ壊れてんだから。

武士になんてなれないよ、あたしは。

でも嘘をついてる分この人たちを裏切らない。

こうしてあたしの生死をかけた入隊試験はどうか無事に終わりを迎えた。



## 第一章 9・嗚呼、勘違い!

「水瀬さん、これからとりあえず、副長室に来てください。  
近藤先生や土方さんからお話があると思いますから。」

試合を終えて隊士の人たちの質問攻めから解放されて外に出ると沖田さんに呼び止められた。

沖田さんと一緒に副長室に入ると近藤勇と土方歳三が座っていた。

「水瀬君、改めて君を隊士として歓迎しよう。」

私は壬生浪士組局長の近藤勇だ。」

近藤先生はいかつい顔を破顔させて自己紹介をした。

その笑顔はすごく武骨で、でも不器用な優しさがにじんんでいた。

「副長の土方歳三だ。怪しい動きをすれば容赦はしない。」

土方さんは相変わらず眉をしかめておもしろくなさそうに言った。

「まあまあトシ、それにしても君の腕には正直驚きを隠せないよ。」

総司から1本とるなんて、氣迫と言うかなんというか、なんという流派の剣なんだ?」

「たまたま足が滑つてもたらしたもので私の実力ではありません。」

私の剣には決まった流派はないです。」

祖父の教えと昔住んでいた家の近くで習っていた先生の流派が混ざっていますから。」

「それにしても頼もしい仲間が入ってきたものだ。」

「そうですね、また手合わせをしましょう。」

今度は負けませんから」

沖田さんはいたずらっ子のように浅黒い顔を破顔させてえくぼと白い歯を見せて笑った。

意地悪な冷たい笑顔じゃなくてこんなふうにくぼをみせて笑うと

おひさまみたい。

…！

そのときあたしは気付いた。

沖田総司は結核で死ぬという歴史を。

目の前にいる青年はあまりにそのイメージからかけ離れていて今まで気がつかなかった。

「どうしました？」

「いえ、沖田さんは昼と夜みたいな人だなあと思ったんです。」

「昼と夜？」

「真昼の太陽みたいな明るいたずらっ子みたいな一面と、冴え凍るような冬の夜の月みたいな冷徹な一面です。」

「くすくす、よく人を見る目をお持ちだ。」

ああ、でた。そのくすくす笑い。

「また夜ですね。」

「ところで、水瀬、おまえ総司の木刀肩に受けたろ。

手当てしてやるから着物脱げ。」

「えっ…??？」

土方さんの言葉に絶句。

何いってんの。

いくらあたしが男みたいだからってそれはさすがにうら若き乙女に言うせりふじゃない。

「何赤くなってるんだ。きもちわりいな。肩じゃ自分で湿布や包帯まけねえだろ。」

総司の馬鹿力受けたらしばらく腕上がんねえぞ。」

って言っても…。

「私だって水瀬さんの胸はかなり痛かったですよ。」

「おめえは頑丈だから大丈夫だ。」

「そんな、ひどい。」

土方さんと沖田さんのやり取りが聞こえるけどやっぱり恥ずかしい。男の人の前で着物脱ぐなんて…しかもブラしてないからさらしだけだし。

「水瀬君、ここはトシの言つとおり手当てをしておきなさい。」

近藤先生がお父さんみたいに言った。

「はい。」

うん、そうだよね、

折角好意で言ってくれてるのに恥ずかしがるほうが失礼だし。

「ではお言葉に甘えてよろしくお願いします。」

あたしは土方さんに背を向けると袴を少し緩めて稽古着の紐を解いて袖を抜き左肩を出した。

「よろしくお願いします。」

「…」

ん？

聞こえなかったのかな。

「あの、お願いします。」

「…」

…！男の前で肌を見せるくらい若き乙女の気持ちにもなれってんだ！  
無視しないでよ！

あたしはしびれを切らして勢いよく後ろを振り向いた。

「あの…！」

そこには

あたしを見て固まってる男子が約3人。

沖田さんなんかは顔を真っ赤にさせて目を見開いている。

そんなに動揺するなら最初から言わなきゃいいのに。

「あの…おまえ…女だったのか。」「

は…？

はい…？

はいッ…？！！

「は…？…？…？…？…？…？」

「なんで黙ってた…！！！」

土方さんが渋い顔してどなる。

「は…？…？」

「おめえ、そんなこと、女だなんて一言も言っていなかっただろ！」

まさか…

あたし…

ずっと男だと思われてた???  
マジかよ!!!!!!!!!!

確かに顔も中性的だし、剣道ずっとやってたから「男のこみたい」とは言われることは多かったけど、まさか20歳にもなって間違えられるとは思わなかった。

「男だと思ってたんですか…?」  
衝撃的すぎて声が震える。

「って、おめえ、疑う余地がどこにあるよ。  
稽古着に袴、髪を総髪に結って、剣もつええ。  
拳句に名前もまことだろ？」

これで胸がもうちよっとでもありや疑ってたかもしれんが…  
おめえ、ホントに男じゃねえのか？」

ここまで来てまだ疑うか!!!この野郎!!!  
暗に貧乳と言われたようでこの上なく不愉快な気分になる。

「貧乳で悪かったですね。  
まことはおじいちゃんが自分なりの真実を見つけてすすめるように  
つつけてくれた名前です!!!  
それに自己紹介するときにいちいち自分が女かどうか言わないでし  
よう?」

「ったく、なんで女なんだ。」  
「女だと何かまずいですか？」

「ここは女人禁制だ!!!」  
「つうか、勝ちちゃん、総司、おめえらもなんか言えよ。」  
「いやあ、なんというか、見事な男装っぷりだから。」

してないです。  
そんなつもりありませんから。

「…私は…ちょっと…顔洗ってきます!」  
沖田さんは顔を真っ赤にして脱兎のように飛び出して行った。

「あいつはうぶだからなあ。」  
そこかい!!

「まあとにかく肩の手当てをしてやるからむこう向け。」  
土方さんは苦々しげにそういうと、湿布を貼って包帯を巻いてくれた。

手当てが済むと土方さんはあたしにむかってこう言った。

「水瀬、おめえ、男装する気はあるか？」

「えっ？」

「おまえの腕は確かに俺らにとって必要なもんだ。  
だが女のままでここにいればおまえにとっても笑い事じゃすまねえ  
こともでてくる。」

「そこでだ、おまえが男装するなら、ここに置いてやる。」

「でも、すぐにわかると思いますけど。」

「いや、そのままならばねえよ。」

断言!!!

そんなにあたし男ですか!!!

「うむ、たしかにそれがいい。」

近藤さんまで!!!

「女だとばれたら、ここには置けねえ。」

どうする？

男装なんて、20歳超えたあたしができんの？

でもここにいないと未来に帰る方法もわかんないし…

覚悟決めるしかないのか…

「…はい。」

男なんて無理に決まってるのに！！！！

一難去ってまた一難。

勘違い、先入観って恐ろしい…。

## 第一章 10・女の意地

衝撃の勘違いから少したつて、日がかなり落ちた時、あたしの処遇と覚悟が決まりつつあった。

すべての隊士に男装で通すのはさすがに無理があるから、一応女であることを幹部クラスまでには伝えるとのこと。

ただし女扱いはしない。

稽古にも巡察にもきちんと参加して隊士としての役割を果たすこれはあたしが望んだ譲らない条件だ。

女人禁制の隊に女として身を置くことはできない。

でも私が男になることはできない。だから男と同じだけの働きを、ううん、それ以上の働きをしてみせる。

女だから、とかそんなんじゃない、あたしは、「水瀬真実」という一人の人間としてきちんと向き合おうと思っている。

とそんな旨を近藤先生と土方さんに伝えた。

近藤先生と土方さんは、あたしを紹介するために幹部を部屋に集めた。

土方さんの部屋は6、7畳で幹部の人が7人も集まってしまうばぎゆうぎゆう、寿司づめ状態だ。

さつき飛び出していった沖田さんも隅のほうでむくれている。

「みんなも知っているとかが、新しく入隊した水瀬だ。」



「さつき総司と試合した奴だろ？」

「顔は好みだが、肉付きがよくねえ。」

「何の話してんだよ」

「話はまだ終わっちゃいねえ、

始めに言っておくがこいつは女だ。」

「「「「「?????」「」「」「」

みんなの顔に一瞬？が浮かび、すぐにぼさぼさがみのワイルドな人が顔を口にして笑いだした。

「土方さんも冗談言うようになったなあ。

でも冗談きついで。こいつのどこが女なんだよ。

顔は綺麗だが腕っぷしもつええし、どこからどう見ても男だろ。」

そつくるか!!

この時代の男は何見てんだよ。

他の人も反応はまちまちだが総じて「何の冗談？」という気持なのだろう。

「みんなが信じられないのも無理はねえが、確かにこいつは女だ。

だがこいつの剣の腕は俺たちに助力するだろうし、何かと使えるから女を特別に隊士にした。

全員に隠し通すのは無理だからおまえたちだけには事実を話しておく。」

みんなだんだん事実気付いたのか、驚いてあたしと土方さんを交互に見ている。

「「「うそだろ!!」「」」

そんなに否定しなくてもいいのに。  
あたしって一体???

「ただいまご紹介にあずかりました、水瀬真実です。  
女であることは否定しませんが、隠し通します。  
稽古も隊務もきちんとなします。  
ふつつかものですがよろしくお願いいたします。」

そう言っであたしは頭を下げた。

「みな混乱することもあるかも知れないが、私が信じた子だ。よく  
導いてくれ。」

近藤さんが言った。

私が信じた子だなんて、なんてこと言ってくれるんだろう。  
あたしは目頭が熱くなった。

それから、山南さん、原田さん、永倉さん、井上さん、藤堂さん、  
斎藤さんが自己紹介をして

みんな仕方なくという感じだったけど、とりあえずは認めてもらえ  
たみたいだ。

沖田さんはあたしと目も合わせないで

「昨日もう名前は言いましたから」  
と冷たく言っって場の空気を凍らせたけど。

これがあたしの新撰組の歴史の?ページ。

女は意地と度胸!!!

これから頑張るしかない。

## 第一章 11・異質なもの

一通り自己紹介が済むと、土方さんはあたしに今後どんな風にここで暮らすかを説明し、最後に沖田さんと相部屋になることを告げた。この決定は近藤先生と土方さんが出したものなんだけど、沖田さんは顔を真っ赤にして拒絶した。

「いやですよ！相部屋なんて。」

「しかし総司、今は部屋も手狭だし、どこにも空き部屋はないし、さすがに大部屋で寝起きさせるわけにもいかんだろう。」

「でもなんで私の部屋なんです？土方さんだって部屋空いてるでしょー！」

「それはまずいだよ。」

それまでやり取りを聞いていた原田さん（佐之と呼んでくれと本人は言った。）も、永倉さん、藤堂さんがハモッてさえぎった。

「土方さんと相部屋なんて大部屋以上に危険すぎる。襲われるに決まってるんだよ。」

と永倉さん。無造作ヘアに無精ひげ。一重の切れ長な目は完全にヤクザ。

髪とひげをどうにかしたら結構醤油顔のイケメンになる気がするけど。

「土方さんだけずるいぜ…じゃなくて、襲われて土方さんにはらまされたらどうするんだ、そんなら俺の部屋に「サノさん、話すり替えないでよ」

なにやらとんでもないことを口走ったのがサノさんこと原田さん。

ぼさぼさのワイルドヘアを髷にしているけどやっぱり彫りの深いイケメンで、ただお笑い芸人みたいな印象。

「新入りの隊士がいきなり副長と同室なんて怪し過ぎる。色小姓と  
思われるだけだ。」  
サノさんをさえぎって唯一まともな意見を言ったのが藤堂さん。色  
白で小柄。大きめの猫みたいな目はまだ幼さを残していて、女の子  
みたい。

「おめえらは俺を何だと思ってんだ。俺はこいつが脱ぐまで女だつ  
て気づかなかつたんだ。」

「こんな色気も胸もねえガキに誰が手えだすか！」

「脱ぐ!!!??つてやっぱり襲ったのか!!!」

「襲つてねえ!!!」

この三バカトリオが!!!

あんたらの関心ごとはそこかい!!

あたしは猛烈に突っ込んだ。

土方さんは耐えかねたように三人に向かって怒ったけど、ひどすぎ  
でしょ!!!

色気も胸もつて、あたし女としてどうなんだよ。

「雨と風がしのげればどこでも大丈夫です。幸い色気も胸もありま  
せんので。」

あたしはこめかみがびくびくするのを感じながら多少の毒を混ぜて  
言った。

「まあまあ、落ち着きなさい。話がそれたがやっぱり総司の部屋が  
一番だろう。」

これは決定事項だ。頼んだぞ、総司。」

「先生がそうおっしゃるなら。」

近藤先生が苦笑しながら、この話は終わりだというように言うと、  
沖田さんはしぶしぶ受諾した。

やっぱりあたしが思っている以上にあたしは異分子で異質な存在なんだなあと思う。  
前途多難。

\*

それからあたしは沖田さんについて部屋に入った。

沖田さんは一言も話さない。

沈黙はすごく重苦しくて、沖田さんが黙々と布団を敷く衣擦れの音だけが響いている。

手伝おうとしたら「いりません」と一蹴され気まずさはさらに増しただけだった。

あたしは沈黙に耐え切れなくなって口を開いた。

「…あの…」

「なんです？」

沖田さんは手を止めずに黙々と作業をしている。

「すみません、嫌な思いをさせて…部屋のこととか、入隊のこととか。」

「別に私は上司の命令に従うだけです。嫌な思いというのは的外れです。」

取り付く島もないというのはこのことだ。

あたしが女だとばれる前は普通に話してくれてたのに。

「…あの「私は」」

あたしがなんとか言葉をつなごうとしたとき沖田さんはあたしをさ

えぎって言った。

「わたしは女子が嫌いです。

そしてあなたは女子です。いくら剣が使えても、どんなに男の格好をしても、あなたは女子だ。

女子に浪士組の、武士の仕事が務まるはずがない。

だから私はあなたがここににいることに賛成はしません。」

あたしは瞠目した。

完全なる拒絶。

それはあたしが怪しいからではなく、女だから。

昨日助けてもらったとき、昼間立ち会ったとき、冷たい一面があつてもどこか優しい人だと思っていたけど、相手が女かどうかでこんなに変わるんだろうか？

男だから

武士だから

力があるから

丈夫だから

それはそんなにえらいことなの？

あたしはふつつふつと怒りがわいてくるのを実感していた。  
顔に血が上ってくる。

それは女だからという理由で拒絶されたことへの怒りでもあつたし、自分の身におきた理解しがたいタイムトリップという現実、

一人つきりだという心細さ、不安。

帰れないかも知れないという絶望。

そんなものすべてが今になって湧き上がってきて、抑えきれない  
激情は怒りに変わり、涙として噴出した。

勝手なこと言わないでよ！  
知らないわよ！！

あたしはこちらを見ようとしてもしないで着物の整理をしていた沖田さんの肩をつかみこつちに向けると不意のことで驚いている沖田さんを尻目に怒りに任せて背負い投げをかました。

「男が何ぼのもんじゃ！  
勝手な言うんじゃないわよ！！！！」

沖田さんはきれいに回転して布団の上に仰向けになった。

何が起きたのかわからないというような顔をしていて、切れ長の瞳をめいっばい開いている。

「女女つて馬鹿にしないでよ。

あたしはあたし。女とかそんなもんの前に水瀬真実つて一人の人間よ。

女だ男だなんてそんなつまないもんに縛られて何が武士だ、笑わせんな！！！！

あたしはあたしとして、自分の信じる真実に進むだけだから！！」

なにが言いたいのかわかんないけど涙がぼろぼろあふれてくる。

完全な八つ当たりだ。

この時代の価値観では女と男の間には現代では考えられないような壁があるに違いなくて、

そこにあたしの価値観をぶつけて、さらに背負い投げまでして…。

ああ、あたし最悪だ。

「…ごめんなさい。」



冷静になると自分のしたことが恥ずかしくなってくる。  
あたしは自分の置かれている状況が納得できなくて、駄々こねてる  
子供みたいだ。

沖田さんは相変わらずあたしを驚いたように下から見上げていた。

「…あの…どこかいためましたか？」

「ぶっ、あははははは」

沖田さんははじかれたように笑い出した。

今度はあたしがびっくりする番だ。

笑いながら体を起こしあたしと目を合わせる。

「ほんとに変わった人だなあ。」

「は？」

「私は女子は苦手なんですよ、それこそ触れられるのも嫌なくらい  
に。」

なのにあなたときたら、

私と剣で互角に張り合い、

私を投げ飛ばすなんて何者なんですか？

男の子だと思っていた人が実は女で、自分でも驚くくらい落胆して  
いて、

それはせつかく仲良く慣れるかも知れないのに、相容れないだろう  
など思うからで。

こんな怪しいやつなのに、自分でも不思議なくらいですよ。」

沖田さんは面白くて仕方ないと言ったようにくっくっ笑っている。

それは冷たい意地悪な笑いではなく、こちらまで笑ってしまうよう  
ないたずらっ子みたいな笑顔で、浅黒い顔に浮かぶえくぼが妙にか  
わいらしくてあたしも顔を緩めて笑った。

「総司と呼んでください。」

「え？」

唐突に沖田さんが言ったものだから、あたしは首をかしげた。

「たぶん水瀬さんとは年もそんなに変わらないでしょう。敬語も要りません。」

なんだかうれしくなって笑顔でうなづいた。

「だったら、沖田さんも…総司も私のこと”まこと”とか”まこ”って呼んでください。敬語もなしで。」

「はい、まこと。」

雨降って地固まる。

そんなことわざがあたしの中に浮かんだ。

ねえ、お母さん、

あたしはここではすごく異質な存在だよ。

でもあたしはあたしなりに自分のことをして、精一杯誠実にその人と向きあっていけばいいのだと思う。

だから見守っていてください。

この遙かなる時を越えた空の下で。

## 第一章 12・月明かり：沖田総司

今夜は満月だ。

暗い部屋に青白い月の明るさが冷たく感じる。

私は部屋の隅で壁に背を預け、うつらうつらしていたのだが、ふとめがさめてしまった。

部屋の中央にある布団がこんもりと盛り上がって丸くなっている。枕は布団から押し出されていて布団から小さな手が出ている。

寝相悪いよなあ。

昨日も思っただけ。

私は笑みを浮かべてその様子を見ていたのだけれど、正直こんなに穏やかな気持ちでいられることが不思議でならない。まったくおかしい人間が入ってきたと思う。拾ってきたのは自分なのだから自業自得なわけだけれど。

雨の壬生寺。

境内の桜。

雷。

そんな中で雨に打たれて倒れているなんて、どんないきさつがあったのか。

荒地の前で慟哭する姿はとても芝居しているようには見えなくて、本当に行き場がなくて困っているようで、思わず屯所へつれてきてしまった。

自分の身の上を話しているときは、悲壮感が漂っていて、でも何か心に秘めたものを守ろうとしているのが感じられて怪しかったから斬ろうかとも思っただけれど、人を信じやすい近藤先生だけでなくあの用心深い土方さんが斬らずにいることに驚いていた。

そしてなんとなく成り行きで立会いをすることになった。

立ち会ってみると、見た目の華奢な姿からは想像もつかないような豪胆な剣を振るうことに驚かされた。

自分と互角か、それを上回る速さ、

力はそれほどでもないけれど、勘と間合い、何よりとっさの判断力は驚嘆するものがあり、正直ひやりとするものがあつた。

そしてわたしの二面性を指して「昼と夜」という洞察力。

たいていの人は剣をもたない私のことは「優しい」とか「人当たりがいい」という。

ただそれは私の本質ではない。

自分はひどく無機質な、人間らしい感情が欠如していると思うことがある。

鬼と呼ばれる土方さんのほうがよっぽど人間らしいと思わないでもない。

その自分を見抜かれたような気がした。

にもかかわらず女子だという。

土方さんの言うとおり女子独特の色気とか、そういった類のものが一切感じられなかった。

本人は男だと思われていることにすら気づいていなかったらしく、驚いていたが、

男装しているわけでもないのだという。

女子が剣を振るうことなど理解しがたいが、自分がそれに負けたということもこれまでの根本を揺るがすようで腹立たしかった。

女子など何を考えているかわからない。

自分は女子が嫌いだと本人に言うとなんと今度は私を投げ飛ばしてきた。

そして自分は自分だという。

確かに、女子だと気づく前は怪しいとは思いながらも興味を感じていた。それを女子だと気づいた瞬間から切り捨てた私の態度は武士である前に人として礼節を欠くものだったのかも知れない。完敗だ。

そう思ったら無性におかしくなってきた、このわけのわからない人間をもっと深く知ってみたいと思うようになった。

「総司と呼んでください」などとなぜ言ったのか自分でもわからない。

深く考えるのはあまり得意ではない。

ただなんとなく勘なのだろう。

理由はない。

真実と書いてまことと読むらしい。

不思議な女子だ。

「くしゅ」

春とはいえまだ夜は冷える。

くしゅの音に目が覚めたのが、布団がもぞもぞ動いて中からまこととが這い出てきてこちらに近づいてきた。

「どうしました？」

そう問うと寝ぼけてかすれた声で言った。

「やっぱり、申し訳ない。布団使ってください。」

「あなたはなれない環境で疲れているんです。入隊早々風邪でもひかれてはこちらが困りますから早く戻って寝なさい。」

数刻まえも繰り返したやりとり。

余りの布団が屯所にはなくて、とりあえず今日のところはというこ  
とで、まことに使ってもらっていた。

「でも、総司だって寒いんじゃないの。」

「大丈夫ですから」

こんな押し問答を続けている内に、まことは私の手をとって布団まで連れてくるとさりととんでもないことを言った。

「じゃあ、もう一緒に寝ちゃおう。寒いし。」

「は？」

この子は何を言っているのだろう。仮にも女子で、私は男なのに。

「風邪引いて困るのは総司も一緒でしょう？」

こんなこといつてるうちに朝になっちゃうよ。」

さあ、と促されてしぶしぶ布団に入ると暖かくて私は誘惑に負けた。隣ではまことがもぞもぞ布団を引き上げ、安心したように笑った。

「なんです？」

「ちいさいころおにいちゃんたちと一緒に寝たのを思い出したの総司ってなんかあきにいに似てる……」

独り言のように思い出し笑いをしている内に寝てしまったのだろう、穏やかな寝息が聞こえる。

手を動かした隙にまことの小さな手に図らずも触れてしまい、あわてて引つ込める。

滑らかで小さくて、男のそれとは明らかに違うのだなあといまさらながら実感する。

男とひとつの布団で眠るなんてこの子は何を考えているのだろう。

無防備過ぎて心配になる。

こんなんでこのさきこの男所帯でやっていけるのか。

まことの首筋が月明かりに浮かび上がり、そこはことさら白く見えて私は目をそらした。

女子は苦手なのになあ。

このむずがゆいような落ち着かないきもちは何なのか良くわからな  
いが深く考えるのはめんどくさい。

淡い青白い光に包まれながら私たちは眠りに落ちた。

## 第一章 13・日だまり：土方歳三

屯所の桜がこの前の雨でだいぶ散ってきた。

縁側で趣味と言つにははばかれるくらいの発句をしながら手を止め、庭の桜に目をやった。

まったく妙なやつが入隊してきたものだ。

数日前、総司の奴が妙な人間を拾ってきた。

華奢で女みたいなやつと思っていたら、実際女だった。

素性もよくわからないが、ただ剣の腕は総司と並ぶような才能をもつていて…とにかくよくわからない奴だ。

ただ今駆けだしたばかりのおれたちには腕のたつ奴が1人でも多いほうがいい。

そのためにはなりふり構っていられないというのが実際のところで、問題はまだまだ山積みだ。

あいつに関しては不思議なことばかりで、正直自分の気持ちが付いていかない。

水瀬真実が総司とともにこの部屋に入ってきたとき、どう言い表しているのかわからないような不思議な感覚が体中を駆け巡った。

強いて言うのならば

強烈な懐かしさ。

渴望していた。

この逢ったこともない人間に再びめぐり合うのを。

そんな血迷った錯覚さえ覚え、一瞬にしてそんな自分にいら立った。



馬鹿か、おれは。

こんな見ず知らずの怪しいガキになんでこんなこと考えたんだ。

でも驚いたことにそいつは俺を見て一瞬ひどく懐かしそうなそんな顔をした、気がした。

気のせいだったのかもしれないが。

身寄りのないというそいつに総司が立ち合いを申し込んだときは正直肝が冷えた。

総司の剣は木刀でもまともにくらえれば死ぬ。

こいつを死なせるわけにはいかない

こんな怪しい奴排除するに限ると理性がそう告げるのだが、なぜかおれの本能とも言うべき勘がそれを否定した。

実際立ち合いを見ると鳥肌がたった。

間合い、速さ、判断力はどれをとっても並み以上で、総司の剣をかわし、何本かは総司自身もひやりとするような突きを見せた。

こいつは使える

剣士としておれたちのこれからに必要な奴だ。

そう直感した。

全く見た目は華奢で折れそうな手足のくせにどっからその力をだしてんだ。

未恐ろしいガキだ。

さらにびっくりしたことはこいつが女だったこと。

自慢じゃないが女に関してはかなり場数を踏んだと自負するおれも全く気付かなかった。

確かに華奢で線は細いし、顔も綺麗な顔立ちをしているが、女のに

おいと言つか、女くささみたいなものが全く感じられない、こんな女初めてだ。

ただこいつが女だということに妙にホツとしているというか、安心している自分がいて、

そんな自分にいら立った。

この女に出会ってから妙に調子を狂わされる。

「はあ」

嘆息して、先ほどから少しも進んでいない筆をあきらめて置く。筆の先の墨はもうすでに乾き始めている。

らしくねえ。

こんなに考えがまとまらないなんて今までにはないことだ。

目の前に集中しろ！

今はまだ考えるべきことが山のようにある。

この走り出したばかりの浪士組をどうするか。

芹沢一派をどう抑えるか。

軍資金をどうするか。

山は大きければ大きなほどいい。

おもしろえじゃねえか。

俺はやる。

やってやるうじゃねえか。

俺は目の前を散って行く桜をにらみながら、袴を握りしめた。

## 第二章 1・私の仕事

いち、にい、さん

遠くから掛け声と共に素振りの音が聞こえる。  
稽古の最中なのだろう。

あたしはというと隊士のみんなの洗濯の真っ最中。  
洗濯板に洗い物をごしごし擦り付けもみ洗いを繰り返す。  
ずっとしゃがみこんでの作業だから腰から背中にかけて結構負担が  
来るもので、一端立ち上がって伸びをした。

「ふわぁー」

ああ、洗濯機がほしい…

文明の利器って素晴らしいな。

まあ家事は得意だし、やることがあった方が気が紛れるから全然問  
題ないんだけど。

空は抜けるように青くて雲の形がはつきりしてきた。風はもう初夏  
の匂いがする。

あたしが来た頃はまだ咲いていた桜がすっかり散ってしまったっていて  
若葉が芽吹いてきている。みずみずしい萌黄色の若葉は目にまぶし  
くて百五十年の時を越えても空や風や自然はほとんど変わらないの  
だということを実感させられ、不覚にも涙ぐみそうになる。

あたしがここに来てからもう2週間がたった。

あれからすぐに未来から来たことを隠すために、あたしはつけてい  
た下着を薪と一緒にかまどで燃やし、お母さんの形見の指輪のネツ

クレスは布に包んでこつそり壬生寺にあずかってもらった。  
あたしはいろんなことをこれから隠して生きていくんだろうな。

もとの時代にいたら、ちょうど大学の新学期が始まる頃だ。

あのまま大学に通っていたら大学3年になるはずで、熱心にとまではいけないものの、

就活やいろいろやらなきゃいけないことをたくさん残してきてしまった。

「焦つてもしょうがない、か…」

あたしは独りごとをいうと迷いを振り切るように再び残りの洗濯ものに取りかかった。

ここであたしに任された仕事は主に家事。隊士の人たちの身の回りのお世話をすることだった。

とはいえ隊士の数も20人近くいるもんだから炊事にしろ洗濯にしろ大家族もビックリな量だ。

洗濯、炊事、掃除で1日が終わってしまうのだけれど、何かに没頭しているうちは余計なことを考えずに済むのありがたい。

戸惑いながらもみんなよくしてくれているとおもつ。

近藤先生は武骨だけど優しく温かい、お父さんみたいな人だと思う。器が大きくて、あたしみたいな怪しい人間を信じると言ってくれたこと、すごく嬉しかった。

山南さんはおだやかでいつもニコニコしていて優しい、わからないことは何でも聞きなさいと気を使ってくれる、みんなに慕われて頼りにされている先生みたいな人。

総司はあき兄に似てる。人当たりが良くて、でも何考えてるかつかめないところが特に。でも時折見せるやんちゃな子供みtainな笑顔はきつと彼の本質なんじゃないかと思う

剣をもつと冷徹で無機質な鬼になる、でも優しくて不器用な一面があることも事実で…

あたしと相部屋になったことではじめはよそよしくて喧嘩（あたしが一方的にぶん投げて言いたいこといっただけ）もしたけど、それが効を奏したのかだいたいぶ打ち解けることができてきたとおもう。年も同じ二十歳なんだけど、何て言うか男友達というより兄弟みtainな感覚だ。同室だつてこともあつて、一番いろんなこと話せるひとかもしんない。

サノさんは一言で言えばワイルドなムードメーカー。変に構えずにあたしにも話しかけてくれるからすごくありがたい。ただエロいと、三枚目になりすぎるのが魅力？でもあり、玉に傷なわけ。

永倉さんは冷静かつクール。なんだかつー兄に似てる。口数は多くはないけど回りをよく見てるところとか、ボソツと渋い突っ込みいれたりするところは特に。

一見サノさんとは正反対に見えるけど、二人ともお酒と女好きつていう共通項をもつていてすごく仲良しだ。ボケと突っ込みがうまくはまっついて見ていてすごく楽しい。

平助君（平助と呼んでと彼は言った）は総司と同じで二十歳だけど、小柄で色白、猫目な感じはすごく可愛くて、女の子みたい。本人は気にしているらしいけど。

真面目で一本気、竹を割つたみたいで性格で、思い込んだらことんみtainな一途な情熱家だ。

斎藤さんは無口でまだあまり話したことがない。挨拶をしても無視されることがほとんどで…。  
背が高くて、切れ長の一重の目は鋭くて、その目で睨まれると動けなくなってしまう。

にらまれると石にされてしまうギリシャ神話のメデューサみたい。  
何もかも看透かされてしまうような深い深い瞳が印象的で、誰とも関わろうとしていない孤高の狼だ。

そして土方さん。

土方さんは正直よくわからない。

初めて会ったときの強烈な憧憬は何だったのか、今だに自分でも理解できないのだ。

もつともあたしは初日以来直接土方さんとあつていなくてどんな人なのかよくわからないけど。

ただ、厳しくて冷徹というのは隊の中でも評判らしくて、隊士たちはみんな緊張するらしい。

まだまだあたしは彼らを知らない。

彼らもあたしを知らない。

私たちの日々はまだ始まったばかり。

これからいろんなことが知れるといいな。

そんなことを考えているうちに洗濯が終わった。

何かをやり終えるのは気持ちいい。

青空の下に洗濯物が風にはためいている。

腰に手をあてて満足げに眺めていると、後ろから声をかけられた。

「洗濯終わった？」

振り返るとそこには稽古終わりの総司がいた。

よほど白熱したのか稽古着が汗で色が濃くなっている。

「稽古お疲れ様です。」

「あんまり黙々とやってるから終わるまで声かけそびれちゃったよ。」

「見てるなら手伝ってくれればいいのに。」

「洗濯するとおなか痛くなるんだ。」

「なにそれ。変なの。」

総司は頬にえくぼを見せていたずらっ子みたいな笑顔を浮かべた。

この笑顔憎めないなあ。

すごいかつこいってわけでもないんだけど、すごく人を引き付ける笑顔だと思う。

人当たりもいいしもてるんじゃないかなあ。

「これから暇？」

「ううん、今から夕食の準備。今日はいろいろ作るから準備が大変なんだっておトキさんが言ってたから。」

おトキさんは八木邸の台所を任されている女中さんだ。

あたしはお母さんの記憶はないから想像でしかないんだけど、あつたかくて「おかあさん」みたいな人だ。

「なんだ、せっかく甘味にでも行こうと思ったのに。」

でも今日は真実の歓迎会だからおトキさんも張り切ってるんだよ。」

「あたしの歓迎会？」

なにそれ？

「あれ、のびのびになってた歓迎会が開かれるって言わなかったっけ？」

「知らないよ、そんなの」

「まあ、今日は芹沢先生の一派も来るから十分気をつけてね。」

「…うん。」

芹沢鴨：新撰組筆頭局長。

酒乱による狼藉で大和屋を焼き討ちにしたり力士を切ったりやりた  
い放題だったらしい。

会津の密命により暗殺される…

どんな人なんだろう??

芹沢鴨：

なんか怖いな。

あたしの不安はその夜の中することになる。



## 第二章 2・歓迎会の夜

夕食の座敷にばらばらと人が集まってきた。

はじめましての人も結構いるわけで、あたしのことをじろじろ見ていく人も多い。

「何緊張してんだよ、堂々としてねえと男に見えねえぞ。」  
サノさんが耳元で囁いて去って行った。

う、鋭い。

確かに視線にびくびくしていても怪しまれるだけだし。

その時ふすまが乱暴に開き、かつぶくのいいおじさんが入ってきた。その瞬間周りの空気が一変する。

一瞬部屋中が水を打ったような静けさに包まれて、そののちまたしらじらしいようにみな話しだす。

常に獲物を狙っているような鋭い目は仄暗く猛禽類を思わせる。

なんて目してるんだらう。

あたしは直感した。

この人が芹沢鴨だ…  
すごい威圧感。

芹沢鴨は当然と言わんばかりに上座に悠々と座る、

近藤先生や土方さんまでもその圧倒的な空気にもまれてしまっているようにさえ見える。

あらかた人が集まったのを確認して土方さんがたちあがって話しました。

「今日集まってもらったのは、浪士組に新たな隊士の紹介を皆にするためである」

あたしは土方さんを見ながら、これから新撰組が進むであろう歴史について考えていた。

歴史はあたしがこないだ資料館で見たいに、本当にあの通りに進むのかな。

あたしはその時どうするんだろう。

あたし、なんで新撰組の歴史なんて知ってしまったんだろう。

前みたいに知らなかったら、こんなにいろいろ嘘つかなくてもよかったのかもしれないのに。

あたしは雑念を振り払うように顔をあげ、土方さんの話に耳を傾けようとした。

ドキン

心臓がはねた。

ああ、やっぱりこの人を見ると、ドキドキする。

こんなこと今までなかった。

ただあの人の整った顔や、影のある雰囲気にはドキドキしてるだけなんだろうか。

馬鹿じゃん、

まるであたしが土方さんのこと好きみたいじゃん。

あたしは一人で舞い上がってたのが恥ずかしくて顔に血が上るのを感じて、思わずうつむいた。

「…せ、

…なせ、

おい、水瀬、聞いてんのか!!!」

は？

突然名前を呼ばれてはつとずる。

顔を上げると土方さんがこっちを怖い顔をしてにらんでいる。

土方さんだけでなくみんなこっちを向いて様子をうかがっている。

え？

「呆けてんじゃねえ、きちんと挨拶しろつつつたんだ。

何回もいわせんな。」

「は、はい。

申し訳ありません。

失礼いたしました。」

やばい、あなたに見とれて聞いてませんでした、なんて言えない。

あたしは深呼吸をして事前に総司や近藤先生と打ち合わせた挨拶をした。

「ただ今ご紹介にあずかりました、水瀬真実と申します。

近藤先生の奥様の遠縁にあたるものにございます。

若輩者ではありますが、みなさまの志に恥じぬよう、誠心誠意努めさせていただく所存にございます。

ふつつかものですが、幾久しくよろしくお願い申し上げます。」

緊張して息を継がずに一気にまくし立てたもんだから酸欠で苦しい。

しかも最後の方は、結納みみたいな挨拶になってしまった。

「私の息子のような存在なのだ、みなよく導いてやってくれ。

では今宵は無礼講だ。大いに飲んでくれ。  
ただし明日の隊務があるものは程々に。」

「「「「おつ」「」「」

近藤先生が後を引き継いで乾杯の音頭をとり、宴会が始まった。

みんな待っていましたと言わんばかりのどんちゃん騒ぎが始まる。

そしてものの30分もしないうちに部屋のあちこちで酔っ払いたちが騒いで暴れはじめた。

その中心にはサノさん、と永倉さん、平助君がいることは言うまでもない。

サノさんは腹踊りを始めるし、永倉さんは何やら猥談をしているし、平助君は熱く日本がどうあるべきかを語っている。

いつまでたつても、酔っ払いつて変わんないんだなあ。

あたしは隅っこで平隊士の人の質問にあたりさわりなく答えながら、その様子を見てくすりと笑ってしまった。

と、その時、ひよろりとした色白の男が近づいてきた。

酒が入って顔が赤らんでいるが目が粘着質の蛇みたいで気持が悪い。

「おぬし、水瀬とかいったか、

芹沢先生がお主と話したいとおっしゃっておる。

こちらに來い。」

横柄で高飛車な感じがカチンとくるけど、そんなことで騒ぎを起すわけにはいかない。

「はい、ただ今。」

失礼ですが、お名前を伺ってもよろしいですか。」

「ふん、拙者は副長の新見錦だ。」

「新見先生ですね。水瀬真実と申します。よろしく願います。」

にいみにしき

なんか舌かみそう。

あ、芹沢鴨の腹心。

確か、芹沢の前に切腹させられるんじゃないかなかったです。

それにしてもなんか高飛車で感じ悪い。

それにあんまり芹沢鴨にも関わらないほうがいいと思うけれど、断るのもおかしな話だし仕方がない。

「ついてこい」

あたしは、新見先生に連れだって席を立ち、どんちゃん騒ぎの酔っ払いたちの間を縫って宴会部屋をでた。サノさんや永倉さんはすでに出来上がっていて、平助君は眠っている。総司はいなくなってるし、近藤先生や土方さんはもう席を立っている。

どうしよう、このまま一人でこの人について行くのはかなり危険だ。でも知ってる人がいないし…

一瞬斎藤さんと目があつたけど、すぐに目をそらされてしまった。

仕方がない、

覚悟を決めていくしかない。

あたしは新見先生のあとをついて宴会部屋を後にした。

## 第二章 3・対面、芹沢鴨

あたしは既に別の部屋に席を移して酒盛りをしている芹沢鴨の前に座った。

部屋には芹沢のほかにも2人いて、一人は目に眼帯をしていて、もう一人はかなり年のいったひよろひよろのおじさんだった。

芹沢鴨はもうかなりお酒がまわっているのか、赤ら顔で、目がすわっている。

吐く息が酒臭くて思わず顔をしかめそうになった。

「おまえが近藤の遠縁の、なんといったか…」

「水瀬真実と申します。」

「何とも麗しい若衆じゃのう、そう思わんか、新見。」

「そうですなあ」

にやにやとまとわりつくような、粘着質ないやらしい視線が向けられているのが感じられて気持ちが悪い。

気持ち悪い、嫌だ。

生理的にこの空間が耐えられなくて目を伏せる。

「時にお主、沖田とも互角に渡り合ったと皆が噂しておったがまことか。」

ひよろひよろおじさんが助け船を出すようにあたしに質問を投げかける。

おじさん、ナイス！

「いえ、あれは偶然です。」

沖田先生にもだいぶん手加減していただきましたし。私の腕など実践では全く役に立ちません。まだまだ修業が必要です。」

「そんなつまらぬ話はやめろ。平間、野口、お主らは外せ。水瀬、おまえはこちらに来て酌をしろ。」

このような美童に酌をされれば太夫にも勝る夢心地よのう。」  
芹沢はひよろひよろおじさんを一瞥して、あたしに赤ら顔を向けた。顔はいやらしく緩んでいるけれど、目は有無を言わせない力をもっている。

眼帯の男とひよろひよろおじさんは気遣わしげにあたしを見て部屋を出ていった。

こんな圧力に負けるもんか。

こんなの腹を立てて、熱くなったほうが負けに決まってる。冷静になれ。

「喜んで。」

あたしは挑むように笑い、視線外さずに芹沢の前に席を移し、お酌をした。

「ふん、おぬし、よい目をするな。」

武士に美童などといえは大抵のものはいら立つものだが。

だが、これではどうだ。」  
不意に酔っ払いとは思えぬほどすばやい動きであたしの手を前にひいた。

ドサ

あたしはとっさのことで体勢が保てず、芹沢の腕の中にすっぽり収

まる形になっている。

「なっ！」

なに！？

芹沢は、あたしの背後に手をまわし、背中からお尻にかけてなでまわした。

！！！！

「やつ、なにを！！！！」

全身総毛だって、パニックになる。

気持悪！！！！！！

触んな、この変態野郎！

あたしは芹沢を全力で押し返そうとしたけれど、びくともしない。その時あたしの耳元であたしにだけ聞こえるように芹沢は底冷えのするような声色で言った。

「おぬし、女子であろう。」

！！！！！！

ばれた！！！！

「気付かぬとも思ってたか。

このこと知れば、ここにはいらねまい。

近藤も困った立場にたとうの。

わしの言う通りにすれば、許してやる。」

ねっとりとした絡みつくような視線と声。

面白がるようにくつくつ地獄のかまどみたいな笑い声をあげている



けれど、  
目は一切笑っておらず、仄暗い闇をたたえている。  
この闇にからめ捕られてしまう。

始めから知っていたのか。

ちくしょう。

どうする。

どうする。

かんがえろ。

こんな奴の取引に応じられるはずはない。

落ち着け、落ち着け、

隙は必ずある！

！

押してダメなら引いてみる

おじいちゃんの教えがふと頭をよぎった。  
そうだ。

あたしが力むから力を込められるんだ。  
全身の力を緩め、すべての体重を芹沢にゆだねてみる。

「？」

いまだ！！

あたしは芹沢の力が一瞬緩んだ隙に、体をひねり腕の中から抜け出した。

そして、部屋の隅にあった奴の脇差をとり、さやから抜く。

「!」  
「貴様何をする!」

二人ともとっさのことに何が起きたのか気付いていないようだ。

ざまあみる。

刀を身から離すからそういうことになるんだ。

女をなめんなよ!

あたしは瞠目する二人をしり目に脇差しを自分の首に押し当てた。  
首にピリツとした痛みが走り、生温かいものが首を伝うのが感じられる。

「!」

「私は確かに嘘をついています。

しかし、それが明らかになるとときには死をもって償う覚悟してここにおります。

このことは近藤先生も土方副長も知らないこと、すべては私一人のはかりごとです。

でも、あの方たちは、わたしを信じてここにおいてくださるといつてくださった。

その恩義のために尽くすことが私の誠です。

私のことでご迷惑おかけするならここで自決してその覚悟見せましよう。

「!」

芹沢たちはさらに瞠目してあっけにとられている。

明らかに動揺している様子が見て取れる。

もうひと押し。

あたしは挑むように笑顔をつかべた。  
脇差をさらに首に押し当てて。

ぱた、ぱた

畳にあたしの首から脇差しを伝って血が落ちる音がする。

ぱた、ぱた、

先にしびれを切らしたのは芹沢だった。

「分かったからもうやめろ。  
わしの負けじゃ。」

まったく…自分の首に脇差しを引き当てるなんて…なんて女だ。  
水戸の武士にもそれだけ肝のすわった奴はおらんわ。」

芹沢は苦笑しそくに、けれど笑いながらそういうと  
手ぬぐいを投げてよこした。  
今までみたくないやらしい笑いじゃない、  
困った子供を見るようなちよっと不器用な笑い方で意外だった。

あたしは目を伏せてそれを受け取ると首に押し当てた。

「ふん、おぬし女にしておくには惜しいほどの度胸をもっておるな。

気に入ったぞ。水瀬。

その脇差しは、敗北記念じゃ。

おまえにくれてやる。」

芹沢はそういうと、不敵な笑みを見せて、新見と一緒に部屋を出て言った。

「ふう……」

はあ、危なかった。

あたしは手ぬぐいを首に押し当てたままその場にへたり込んだ。  
今更ながら震えがくる。

我ながら、綱渡りだなあ……

ばたばたばたばた

廊下をかける音がしたと思ったらふすまが勢い良く開いた。

スパン！

「水瀬！！！」

「まこと！！！」

「まこと君！」

そこには息を切らした近藤先生と土方さんと総司がいた。

「近藤先生、総司、ふくちよ……」

あたしは言い終わらないうちに視界が遮られて誰かの腕の中にすっぽり収まってしまった。

肩越しには総司と近藤先生が驚いたようにこちらを見ている。  
と、いうことは…

！！

土方さん！？

「！！！！」

「馬鹿野郎！！なんて無茶しやがる！！！！」

「うわ、ごめんなさ…」

こ、怖い。

まさに鬼の形相。

「芹沢んとこに一人でのこのこ着いてくなんて何考えてんだ！！！！  
なんかあつてからじゃおせえんだぞ！！」

「なんかつて…」

「おめえは女なんだ！無防備なのもたいがいにしろ！！！！だいたい  
おめえは…「まあまあ、トシ」「」

「そんなに怒るんじゃない。」

近藤先生が苦笑しながらいさめる。

先生は腰を折るとあたしと目線を合わせて手を頭に置いて言った。

「自分の首に脇差しを当てるなんてなんて無茶するんだ。」

君が女子だとわかってもきちんと守りぬくことはできるんだから、  
一人で抱え込まなくてもいいんだ。

俺たちは君を家族のように思っているから君ももっと頼ってくれて  
いいんだよ。

それからとしがここまで怒るのも君を心配したからだよ、わかるな。

「

「はい。」

「ご、ごめんなさい…。」

もうしません。」

声が震えたのは、安心したのか、優しい言葉をかけられたことなのか。

ただひどくあたしは温かい気持ちになったことは事実で、

うれしかった。

すごく。

「ところで土方さん、いつまでそうしているつもりですか。」

総司がおかしそうに言った。

「「！！！！」」

あたしと土方さんは同時にこの異常事態に気付いたのか、ぱっと飛びのいた。

あたしは顔が真っ赤なはずだし、土方さんも心なしか顔が赤い。

「ふん、世話がやけるぜ。」

「まったくまことは無茶するんだから。」

寿命が縮んだよ。しっかりお説教しようと思ったけど、土方さんが私の分まで怒ってくれたから多よしとしましよう。」

総司は苦笑いを浮かべながらもホツとした様子であたしの頭をなでた。

「斎藤さんが知らせてくれなかったらどうなっていたか。」

「斎藤さん？」

「まことが新見先生に連れだされるのを見て様子をうかがっていてくれたんだよ。」

もう一歩で踏み込んで止めるところだったと言っていたけれど、ど

うにか、芹沢先生が折れてくれたから入らなかったと言っていたけれど。」

「斎藤さんが…あたしを見ててくれたの？」

「みんな見えますよ。」

なんだか信じられない。

あたしのことなんていつも無視するのに…

総司の笑顔がぼやける。

目がしらが熱くなって大粒の涙があふれた。

あたし見守られてる。

いろんな人に。

それはなんてありがたくて幸せなことが。

全然知らない場所にタイムスリップしたことは災難だったと思う。

今でもおかしくなりそうなくらい家族に会いたい。元の時代に帰りたい。

でも

こんな温かい人たちに出会えたのは、

この上ない幸せ

ありがとう。

ありがとう。

本当に。

あなたたちのこの優しさにあたしは自分の精一杯を返すと今誓います。

## 第二章 4・警戒心：斎藤一

最近妙な人間が浪士組に入隊してきた。

しかも女。

世も末だ。

生粋の誠の志を持った武士の集団であるはずの壬生浪士組になぜ女だ。

女と言うことを隠して入隊させるなど局長も副長も正直何を考えているのかと、頭が痛くなった。

おれはいら立った。

その女は沖田さんと仲がいいらしい。

今まで一切女と関わりを持たなかった女嫌いの沖田さんにどう取入ったのか。

しかもそいつは剣術がめっぼう強いらしい。

普段の華奢な姿からは想像ができないが。

あいつが入ってきて数日後、朝稽古の後にたまたま通りかかったとき、女中と台所で朝食の支度をしていた。

袴をつけて、髪を頭の上のほうで結びあげて男装していたが、確かに華奢な体つきや、細くて白い首筋などを見れば、なるほど女子なのかと実感した。

炊事に慣れていないのか、女中にいろいろなことを聞きつつ、せわしなく動いていた。

こちらからは横顔しか見えなかったが、通った鼻筋とふっくらとし



た口もと、涼しげな切れ長の眼からは長いまつげが伸びていて、女の着物を着せたらさぞ美しいだろうと思ひ、そんなことを考えた自分に腹が立った。

ふと女が視線を感じたのかこちらを見た。

女はぺこりと小さく会釈して「おはようございます、稽古お疲れ様です。」と言ったのだが、

俺はあわてて目をそらしそのまま走り去った。

いらいらした。

こんな得體も知れぬ女も、それに動揺する自分も。

何を馬鹿なことを考えている

こんなことを考えていては肥後守様直々の密命もおぼつかん。

俺の仕事はこの組織がうまく機能するよう内部事情を探ることだ。

こんな得體も知れぬ女、怪しいとあれば斬るのみだ。

今日はあの女の歓迎会が催された。

あの女はそわそわして緊張している様子だったが、副長が話し出すと、何やら憧憬とせつなさが入り混じったような表情を浮かべて、うつむいた。

くだらん。

見目良い副長になびいているのか。

しょせんは頭の軽いただの女だ。

俺はいら立ち、軽蔑した。

しかし女の挨拶を聞いて多少なりともおどろきが走った。

もともと用意していたのかもしれないが、しっかりとした口調で見事な挨拶をした。

沖田さんとじゃれているときの砕けた幼い様子からは想像もできない。

なんなんだ、あの女。

それからしばらく経ってみな盛り上がりを見せていた中、

芹沢の腰巾着新見があの女に近づくのが見えた。

赤ら顔に蛇のような目をした狡猾な男だ。

女は新見にはしっかりと対応しているようだったが、困ったような顔をしてあたりを見回し、そして俺はあいつと目があつた。

俺はすぐに目をそらし、何事もなかったように酒を口に運び、そちらを見ないように心がけた。

不意にそちらに目をやると、女は新見に連れられ、部屋を出るところであつた。

新見が独断でそのようなことをするはずがない。

芹沢が大方珍しがってあの女を呼び寄せたのだろう。

面倒なことにならねばよいが。

俺の知つたことではない。

のこのこ着いて行くほうが悪いのだ。

くそっ

俺は悪態をついて奴らを追いかけた。

なぜおれがここまでせねばならん。

これは浪士組のため、ひいては肥後守様のためだ。

断じてあの女が心配だということではない。

芹沢たちが酒盛りをしている部屋にたどり着いたとき、

トサ

という物音が聞こえ、俺は無性に焦った。

「気付かぬとでも思ったか。

このこと知れば、ここにはいらぬまい。

近藤も困った立場にたとうの。

わしの言う通りにすれば、許してやろう。」

あの外道！

だから言わんこつぢやない。

芹沢と向かい合って女が無事でいられるはずがないんだ！

沈黙…

何があつた。

今入るのは得策ではないか。

ガサ、ドサ！

「貴様、何をする！」

「！」

あれは新見の声か。

何があつた。

俺はふすまに手をかけ開けようとしたその刹那。  
凜としたあいつの声が響いた。

「私は確かに嘘をついています。

しかし、それが明らかになるときには死をもって償う覚悟してここに  
おります。

このことは近藤先生も土方副長も知らないこと、すべては私一人の

はかりごとです。  
でも、あの方たちは、わたしを信じてここにおいてくださるといつてくださった。  
その恩義のために尽くすことが私の誠です。  
私のことでご迷惑おかけするならここで自決してその覚悟見せましよう。」

それは静謐。

微塵の揺らぎもない。

ただ一つの真実。

忠義を尽くすことが己の誠…

鳥肌がたった。

その言葉にただ一つの偽りも感じられぬ。

自決？

死ぬ気か？

止めねば、と思つのに体が動かない。

あいつの圧倒的な凜とした微塵の揺らぎもない静謐に息をすることも忘れてしまった。

ぱた、ぱた

何かが滴り落ちるような音、  
血か？！

「分かったからもうやめろ。  
わしの負けじゃ。」

まったく…自分の首に脇差しを引き当てるなんて…なんて女だ。  
水戸の武士にもそれだけ肝のすわった奴はおらんわ。」

「ふん、おぬし女にしておくには惜しいほどの度胸をもっておるな。  
気に入ったぞ。水瀬。」

その脇差しは、敗北記念じゃ。

おまえにくれてやる。」

芹沢の聞いたこともないほど穏やかな声。

これが芹沢か？

それよりもまったく、なんて女だ。

芹沢を引かせるために自分の首に脇差しを引き当てた？

それも近藤局長たちをかばいながら？

なんて女

まるで戦国の世の武士のようだ。

水瀬真実

芹沢たちが帰って行くのを見届けると俺は部屋に背を向けた。

会えぬ。

この女には今は面と向かつては会えぬ。

そう思った。

そのあと縁側で酒を飲んでいた局長、副長それにたまたま水瀬を探  
していたのだろう、沖田さんに事情を話すと、3人とも焦って駆け  
だして行った。

人情家の局長はわかるが、副長と沖田さんまでもあんなに慌てる

は意外だった。

副長は冷静沈着でどこまでも己を殺せる人間だ、焦ったり慌てたりするところなど想像できなかったし、沖田さんも人当たりがいいように見えて人への線引きがはっきりしていて特定の人間に入れ込むことなどありえないから、正直驚きを隠せなかった。

二人とも水瀬には特別なものを感じているのやも知れぬ。

そう思うとなぜか心が波立つ。

俺は水瀬のことも、新撰組の人間のこともまだまだ知らぬことばかりだ。

知りたい。

そう思った。

他人と関わるのをわずらわしいと思っている俺にしては珍しい、自分自身のそんな感情に驚いていた。

その夜俺はなかなか寝付かれなかった。

### 第三章 1 小休止・一夜明け…

昨日の対決から一夜明け、空は快晴。

からっと晴れた日本晴れだ。

障子の隙間からも日差しが差し込んでいる。

昨日はあの後部屋に帰ると首の当てをされてから、総司にたつぷりとお説教をされたわけで、正直まだ眠いけど起きて朝ごはんの支度しなきゃ。

あたしは観念して目をあけると、なぜか総司の寝顔が近くにあった。

？

意外にまつげ長いんだなあ。

顔立ちは精悍で、男っぽいのに目を閉じるとこんなにあどけないんだ。

じゃなくて

なんでこんなに近くにいらんだっけ？

そもそもなんで同じ布団で寝てんだっけ？

あれ？あたしいつ寝た？？

どうも昨日のことが思い出せないのだけれど、

とりあえず起きるかと思って起きようとする右手に違和感。

ん？

何かと思えば、総司があたしの手をしっかりと握っている。

これでは起きられないので苦笑しながら左手で総司を揺さぶって起こす。

「総司、起きて。」

「ん〜…もうちょっと…」

「ねえってば！」

なんだか懐かしい朝の光景。

強めにゆすって起こすが、起きない。

腕ひしぎか、地獄攻めで起こすしかないのかしら。

と危険な起床方法が頭に浮かんだ。

その時、

！

目に映る光景が反転した。

総司が寝ぼけてあたしの上に覆いかぶさっているのだ。

って、やばいってこの状況は！

仮にもあたしは女で総司は男だ。

しかももう子供じゃないわけで。

総司に対して恋愛とかそんな気持ちは一切ないけど、

こんなに間近で、しかも覆いかぶさってるなんて

心臓に悪いよ！！

どいてよ。

いよいよ苦しくなってきたあたしは総司の下から抜け出そうともがく。

その瞬間総司の手があたしの首の傷にあたった。

く！！！！

「あ”っ”」



ばか！  
死ぬほど痛いっつもの！！

悶絶！

目に涙が浮かんでくる。

「何すんのよ、やめてよ。」

あたしは涙目のまま総司の手をつかんで押し返した。  
その時

スパン

障子が勢いよく開いた。

「おい、まことだいたいじょうぶか？？」

昨日大変だっ…って！！おめえら何やってんだ！！！！  
さのさんが目をかっぴらいてあわあわしている。

あたしは総司の肩越しにサノさんと目が合う。

なんか、もしかして、あたしすごい誤解されてない？？

「っだっ！！おまつ…」

サノさんはあたしと総司を交互に見て顔を青くした。

ああ、やばいかも…

だって総司はあたしに覆いかぶさっていて、あたしはそれから抜け出そうとしていて  
しかも涙目だし。

はやく誤解を解かないと。

「っサノさん！あの、これにはわけが…！」

「総司！！っのやる！！起きやがれ！！」

おまえ、いくらこいつが女で男所帯だからって仲間を襲うなんて最低だ！！！」

サノさんは総司に蹴りを入れて怒った。

違うのに…！！

これにはさすがの総司もたまらず目をさます。

「…！！」

何するんですか…！！

朝っぱらから…！！って…！！」

体の下にいるあたしを見て見る見るうちに顔を赤くする。

「…！！！！」

なんでっ…！！って、あ、だから…！！！！」

しどろもどろってまさにこういう状況のことを言っただろうっ。

「おめえ！何考えてんだ…！！！！」

サノさんが青筋立てて怒ってる。

「何でおめえが先に抱こうとしてんだ！

俺が先に決まっただろ…！！！！」

「なっ…！！！！」

何だと…！！

この野郎！

「勝手なこと、言っただけじゃ、ねえ…！！！！」

あたしは真っ赤になって拳動不審の総司を押しつけサノさんに肘鉄を食らわせると、

そのまま、一本背負いに持ち込んだ。  
さのさんは奇麗に中を舞って畳に沈んだ。

なんだか非常に懐かしい朝の光景。  
合掌。

\*

「まこと」

呼び止められて振り向くと、総司がいた。

「…何？」

正直今日の朝はびっくりしたけど、寝ぼけてのことなんだろうし、  
ここで取り乱すのもおかしな話なわけで、あたしは何でもないよう  
に表情を取り繕った。

「あの子、今日の朝のことホントごめん。」

寝ぼけたとは言え、年頃の女子に私は…本当に…

ごめんなさいっ!!」

「うん、まあ正直びっくりしたけど、寝ぼけただけなのはわかって  
るし…」

そんなに謝らなくて大丈夫だよ。」

あたしは総司の慌てぶりがおかしくて、なんだかかわいそうになっ  
てそう言った。

「お詫びに甘味おごらせてよ。」

「そんなに気い使わなくていいよ。」

「私がそうしたいんだ。」

頼むから。」

「？」

そんならいいけど。」

なんか真っ赤な顔で、切羽詰まったような顔で言っもんだから了承

してあたしたちは町に行くことになった。

### 第三章 2・得手不得手、恋バナ？

京の町は華やかだ。

街ゆく人もどこか優雅で、ゆったりとした流れの中に見えるように見える。

新撰組の屯所から少し歩いたところに総司行きつけの甘味屋さんがあった。

このみたらし団子は絶品！と絶賛するので、あたしは2本、総司はなんと5本（！）頼んでお茶と一緒にいただいた。

実際甘すぎず、辛すぎず、餡のとろみもほどよくて、すごくおいしかった。

「おいしいでしょう？」

「うん！！すごく。」

「よかった、まことが笑ってくれて。

今朝のことで気ままずくなりたくなかったから。」

「そんなこと…そりゃあ、確かにちよつとは驚いたけど、あたしたち友達なんだしいつまでも気にするわけないじゃん。」

「…そっか。」

「そうだよ。」

総司は口の端を引き上げて少し伏し目がちに笑った。

おいしいみたらし団子を堪能してお店をでると少し日が傾いて風が出てきた。

川沿いを他愛もない話をしながら歩いていたのだけれど

ふと沈黙が訪れ、あたしは総司の少し後ろを歩きながらその背中を見つめた。

総司は背が高く、でもがっしりと言うよりはひよろつとしている。髪はポニーテールみたいにしていて、後ろからおくれ毛が数本首にかかっている。

首の筋なんかを見ると、細いけれどやっぱり男の子なのだなあと思う。

総司、首の後ろに黒子あるんだ。

そんなとりとめもないことを何ともなしに考えていると、突然総司が立ち止った。

「わっぷ!!」

あたしはとっさのことに立ち止れず総司の背中に顔をぶつける。

「なになに、突然止まんないで」あのさ、「」

鼻をさすりながら苦情を言いかけたあたしをさえぎって、総司が意を決したように言った。

「なに？」

「まことは、江戸にいたとき、恋仲の人とかいなかったの？」

「こいなか？」

「だって二十歳だし、普通ならお嫁に行ったりする年頃だろ？そうしないのは何か事情があるのかなと思って…言いにくかったら言わなくていいんだけど。」

こいなか

恋仲って恋人のことか。

この時代の人は15、6で結婚なんてざらにいる、二十歳にもなれば完全に生き遅れなんだろう。

でも21世紀に生きていたあたしには正直その感覚わかんないわけ…

どういえばいいのかな？

そもそも、なんで総司はこんなこと聞こうと思ったんだろ？

「ん…と、彼氏、じゃなくて、恋仲の人がいたこともあった、かな。うまくいなくて、別れちゃったけど。」

「どうして？親が決めた人じゃなくて自分で好きになった人なんですよ？」

恋仲にまでなったのなら普通結婚するだろ？」

「どうしてって…」

この時代はそういうもんなんだろうか。

高校時代にちょこつと付き合った人はいたにはいた。

剣道部の先輩で、なんとなくカッコいいなと思っていたら、

向こうもそう思っていてくれたらしく告白されて、うれしくて付き合いました。

一緒に帰ったり、デートしたり、初めはそういうのがうれしかったりもしたけれど、

だんだんそういうのが儀礼的なものを感じて、

付き合っているんだから手をつながなきゃ、キスしなきゃ、とか

「好き」って言わなきゃ、とか

彼女なんだから、こうしなきゃ、とか

そういう変なお芝居みたいなのがだんだん負担に感じてきた。

彼自身は理想のカップル像にしようといういろいろ努力してくれたと思うけど。

今思えば彼もあたしも恋に恋した、みたいなありきたりな状態に陥ったのかもしれない、

疑似恋愛に高揚していることに満足しているみたいなの。

そんな感じで、会っていてもあまり話さない、とか、そんな状態が続いて、

ああ、終わるんだろうな

って言うのがどこか人ごとみたいに感じられた。

だから彼から別れを告げられてもあまり哀しいと思わなかった  
どちらが切りだすか様子見みたいな感じだったし。

来るべき時が来たか、みたいな。

「もうおれら付き合っけていても意味ないよ、わかれよ」  
とすぐありきたりに告げられた。

別れ自体には傷つかなかったけれどそのあとの彼の言葉には結構傷  
ついた。

「まことつてさ、付き合ってみると全然楽しくないよ。

顔がいいだけで、女のくせに中身全然女らしくないし。」

確かにその通りだと思う。

ただ彼女としての女らしさとかそういう一般的なものがあたしには  
理解できなくて…

あたしには恋をする能力が欠如してるんじゃないかと思わないでも  
ない。

とまあ、あたしの唯一の恋愛、と呼んでいいかもわからないくらい  
の経験なんだけど、

決して楽しいものでもないし、

増して未来から来たことを隠してるあたしにそんなことが言えるは  
ずもなく…

「どうしてって一言では言えないけど…彼も私も子供だったってこ  
となのかなあ、

まあ、今なら大人の恋ができるのかって言われたら怪しいけど…」

「その人のこと、まだ好きなの？」

「それはないかな、

さらに言えばその時も本当に好きだったのかは怪しい、かも。」

「それって本当に恋仲なの？」

「うーん、そう言われると…」

鋭い突っ込みに閉口してしまう。



恋なんてよくわからない。

唯一そうかなって思ったものは苦い思い出し。

あたしはみんながするような恋なんてできないんじゃないかと思っ  
ているし、

正直それもしようがないかなあともおもう。

だって人には得手不得手があるもので、あたしは恋する能力が欠け  
ているのだろう。

とあきらめにも似た感情で今まで思っていたけど。

黙ったあたしを総司は傷ついたと思ったのか慌ててフォローした。

「ご、ごめん、傷つけるつもりはなかったんだよ。」

ただなんか辛いことでもあったのかと思っただ。

「あ、ううん。傷ついてなんかいないよ。」

別に辛いことなんてなかった、本当に。

ただ人には得手不得手があるでしょう？

恋するのも得意な人と不得意な人がいるんじゃないかと思ってるん  
だ。

あたしはたぶん恋愛するのが苦手なほうなんだと思うの。」

あたしは自分の思っていることをゆっくりとかみしめるように言っ  
た。

「ああ、なんかわかるな、それ。」

総司はほっとしたように言い、ふっと花が咲いたように笑った。

「私もたぶんそうだと思う。」

なんで世の中の人はみんな恋をしたがるんだろうと不思議だったよ。

「

「総司が恋バナなんてなんか意外。」

「こいばな？」

それって何の花？」

「ああ、と、恋愛話かな。」

でも何だって急にそんなこと聞いてきたの？」

「別に深い意味はないよ、ただまことくらいイイコならお嫁の貰い手くらいいくらでもあるだろうになんてかなと思っただけ。」

ふてくされたようにそう言った。

「あはは、ありがとう。行き遅れの心配してくれたんだ。

でももしあたしがいいっていつてくれる人がいてくれればお嫁にくだらうし、いなけりやどうしようもないし。こればかりは自分の力だけじゃなんともなんないから。」

あたしは総司がなんか一生懸命になってるのが可愛くて、笑ってしまった。こんな表情をする総司は年よりも幼く見える。

「もし…」

「え？」

「もしそう言う人がいなかったら私が貰ってあげるから心配しなくてもいい。」

「は？」

総司はくすくす笑いながら冗談とも本気ともつかない意地悪な笑みを浮かべて言った。

「だから、も・し！」

これって遠回しなプロポーズ？

でもめっちゃ笑ってるし。行き遅れ（この時代では）のあたしを心配してくれたのか。いいところあるじゃん。

「ふふふ、総司は女の子嫌いなんじゃなかったの？  
でもありがとう。」

もしあたしに嫁の貰い手が現れなかったら頼むわ。」

あたしは未来の人間なのだから総司と結婚するなんて絶対にありえない。  
だってあたしが生まれたときにはとくに死んで歴史上の人物になつてる人なんだから。  
決して来ない未来だということはわかりきっているけど、総司の気遣いは素直に嬉しかった。

「私はおなごは苦手だよ。」

「でもあたし女だよ？」

「違う。」

まことはまことだから。

だからいいんだよ。」

「…! ……うん。」

あたしはあたしだから…いい。

なんか不覚にもドキドキしてしまった。

なんかずるい。

あたしの一番よわいとこ突くんだから。

女らしさとかそういうんじゃないかってあたし自身を見てくれる、そのことが死ぬほどうれしかった。

夕日があたしたちの背中を暖め、影を長くしていた。

「急いじう。」

「うん。」

### 第三章 3・夕焼けと剣と血と

あたしたちは道を急いだ。

屯所までもう少しと言ったところで、橋に差し掛かった。

橋の上には数人の侍がいる。

「まこと、たぶんあの鬚の結び方は長州の連中だ。今はこちらは無勢だから、

関わらないほうがいい。もし、危なくなったら走って逃げるんだ。

いいね。」

「う、うん。」

長州は新撰組にとって敵なんだ。

でも総司一人でこの人数をどうするつもりなのか。

とにかく怪しまれなければいいんだ。

あたしたちは橋で待たちとすれ違った。

とその時。

ヒュッ

ガキヤ

風を切る音がしたと思ったら、

総司があたしの後ろで一人の侍の剣を受けていた。

もとは紺色なのかもしれないけど、洗いざらして色の薄くなった着物を着ている総髪の侍だ。

「怪しい奴、おまえら何者だ。」

高飛車で高圧的。

「さあ、いきなり人を切りつけるような人に名乗る名はありませんね。」  
総司が一分の揺らぎもなく冷たく言い放つと、  
男がふと視界から消えた。  
と思う間もなく空が朱に染まった。

総司が

その男を

斬った…。

そう気付く頃には男は、すでに息をしていなかった。

男からは、否、先ほどまで男であったものからは血が噴水みたいに吹き出し紺色の着物がみるみるうちに黒く染まっていく。

総司は眉ひとつ動かさないうで、視線をその男の仲間に向けた。

紅い…

人の血はこんなにも紅いのか。

あたしは瞠目したまま息もできずにただ橋の木の間に河に滴り落ちていくであろう男の血を凝視したままであった。

怖い…

ただそう思った。

ダレガ？

わからない

ナニヲ？

わからない

人を斬る総司のことが怖いのか  
こんなに赤い血が怖いのか  
自分でもよくわからなかった。

ただ怖かった。

あたしはすこしも動くことができずにただ朱に染まる光景を見るこ  
としかできなかった。

何もかもだ遠い。

これは何？

こんなの知らない。

映画の殺陣みたいに金属が重なる音がしていて、あたしはぼんやり  
と遠くで聞きながらあたしは何も考えることができなかった。

目の前では総司が3人の男と闘っている。

いくら総司でもこれは無理なんじゃないだろうか。

あたしも何かしなきゃ、そう思うのにできない。

動けないのだ。

「おめえ動くんじゃないやねえ。」

その時、ぼんやりしていたあたしの首筋に刀が当てられた。

！

しまった。

こんなにぼんやりして、逃げ出すこともしないで、  
あたしは馬鹿だ！

昨日手当てしたばかりの包帯の上あたりに真一文字に刀が当てられ、その冷たさに鳥肌が立った。

「まこと！」

一瞬こちらに注意を向けた総司。

不逞浪士のリーダー格の男がその一瞬を見逃さず総司に斬りつけた。総司はかるうじて体をひねってその剣をよけるけど、腕をかすめ、総司の朽ち葉色の着物が血で赤く染まっっていく。

「総司！」

あたしは前に駆けだそうとして、腕を後ろにひかれ、首に刃が押し付けられる。

「このガキの命が惜しけりゃ刀を捨てな。」

こんな時の決まり文句を言う男がにくらしい。でもこんな状況を作った自分をもっと腹が立つ。

畜生！！

総司は刀を捨てた。

「やめて！」

お願いだから！！！！」

リーダーの男はかなりの剣の使い手だ。

ひゅつと風を斬る音。

総司はギリギリのところまでよけるけど着物の裾をそいつの剣が斬り裂く。

相手は3人

いつまでもこんなことが続けられるはずがない。

総司が死んじゃう。

あたしのせいだ。

あたしはもがくけど腕をしっかりとからめ捕られてて首にあたる刃が  
食い込むだけだ。

やめて、やめてよ。

と、そのときだった。

ふとあたしの拘束が緩んだ。

驚いて振り返ると

あたしを拘束していた男は後ろに倒れていき、河に落ちていった。

そこには黒い羽織を着て

厳しい鬼のような形相をした

土方さんが立っていた。

その瞬間に総司は落ちていた剣を拾い

リーダー以外の浪士2人を切り捨てる。

リーダーは総司の剣を受け流した、と思ったら

ぞくりとするような不吉な笑みを浮かべて

身をひるがえし

川へと

何のためらいもなく

飛び込んだ。

「!!!」

水音の後は、ただ静寂だけが  
あたりを満たしていた。



### 第三章 4・甘え・剣を持つということ

日はすっかり落ちて風が出始め、肌寒くなってきた。

始めに動いたのは土方さんだった。

「馬鹿野郎！」

パシ

総司の頬が乾いた音を発する。

土方さんは総司を平手打ちしたのだ。

「それが一番隊長のすることか。おめえの行動は一步間違えば新撰組の名前に泥を塗るところだったんだぞ。剣士が剣を放すときは死ぬときだけだ。次にそんなふざけたまねを試してみる、切腹させるかな。」

何の感情もこもらない冷え切った声だった。

「すみません、副長。」

総司は目を伏せてつぶやいた。

違うんです。

あたしのせいなんです。

あたしは舌が喉に張り付いたようになって声すら出せない。

喉の奥に砂を詰められたような息苦しさ。

土方さんはあたしを一瞥すると何も言わずに背を向けて一言

「帰るぞ。」

と言っただけだった。

総司があたしの背中をポンとたたき「行くよ」と言った。

あたしは何も言うことができずただうつむくことしかできなかった。  
遠かった。

総司も。土方さんも。

あたし、最低だ。

あたしのせいで総司にけがさせて、もうちょっとで殺されるどころ  
だった。

何にもできないなら逃げればいいのに、それすらしないで…

ただ突っ立ってるだけなんて。

ふがない。

みんながいくら優しくしてくれたって…

あたしはお荷物でしかなくて…

ここでは異分子でしかない。

甘えてたんだ。

どこかで。

気を抜けば殺される。

そんなのわかりきってたはずなのに。

みんなの優しさに甘えていい気になってたんだ。

泣きたい。

でも泣けない。

ふがないかった。

何もできない自分がただふがないくて、どうしようもないくらい腹  
立たしかった。

\*

屯所に戻るとみんなが心配してくれていたけれど、今のあたしには

それも申し訳なさ過ぎて辛かった。

総司も土方さんも何も言わない。

だれかあたしを罰してほしい。

総司のけがはそんなに深出のものはなかった。

けれどさすがに気を張っていたのか、手当てをするとすぐに眠ってしまった。

あたしはここにいてだけで歴史を変えてしまう。

あたしは何のためにここにいるの？

泣くなんてできない。

泣いたって何も変わらないもの。

眠れない…

目を閉じれば瞼の裏が赤くて血の匂いがよみがえってくる。

人が死ぬ。

人を殺す。

怖かった。

でも一瞬でも総司を怖いと思ってしまった自分が恥ずかしい。

だめだ、目が冴えて眠れない。

あたしは布団を出ると、総司にもらった竹刀を手に取り、そっと部屋に出た。

道場借りて素振りをしよう。

こんなもやもやしたままじゃどうしようもない。

夜の空気はひんやりしていて少し寒い。

あたしは下ろしたままの髪を低い位置で結んで道場に一礼して敷居をまたいだ。

この道場は、おじいちゃんちの道場に似ている。この空気が。

道場の埃っぽい臭いをかいだ瞬間に不意に家族の顔が思い浮かんだ。

帰りたい…

帰りたい…!!

おじいちゃん、あたしここにいていいのかな。

何にもできない、みんなに迷惑かけるだけなのに…

あたしは泣きそうになって唇をきつくかみしめた。

泣いちゃ、だめ。

泣くことで自分をすっきりさせるくらいなら、事実を受け止め、この罪悪感抱えていけ。

あたしは顔をあげ、竹刀を握りなおした。

びゅっ

びゅっ

腕がしびれても素振りをやめない、やめたくなかった。

竹刀が闇を斬り裂く、

ふがない弱虫のあたしの心も斬ってくれればいいのに！

どれくらい時間がたったのか、もうつでの感覚はほとんどない。

ただ息が上がって、額に汗が伝った。

その時、道場の扉が開いた。

「なにしてる。」

声のほうを振り向くとそこには斎藤さんが立っていた。

「斎藤さん……」

斎藤さんは切れ長の瞳に何の感情も宿していない。

「そんなに素振りをしたところで、おまえに人は斬れんだろう。

その覚悟もないのに、この道場に入るな。道場がけがれる。」

「……！」

あたしは何も言えない。

だってそれは本当のことだから。

あたしは何も言えずうつむくことしかできない。

「おれたちの剣はおまえの剣のような遊びの剣じゃない。

人を斬るための剣だ。

人を傷つけ、人を殺し、また自分もそれにやられる、その覚悟のない者にここに入る資格はない。

逃げることもできずに仲間を傷つけることしかできない甘ったれが

竹刀なんぞ持つな。

身の程をわきまえろ。」

「……」

斎藤さんの言葉はすべての的を射ていてあたしに突き刺さる。

心が痛い。

喉の奥に砂を詰め込まれているようで、苦しくて息もできない。

このまま消えてしまいたいとさえ思う。

斎藤さんはそのままぐるりと背を向けて道場を後にした。

後には静寂、

ただ冷たい空気が汗をひかせ、寒いくらいだった。

今自分が竹刀を持っていることさえもなんだか滑稽でしらじらしく感じる。

馬鹿みたい……

あたし…

なにしてんだろ…

何の覚悟もないくせに…

あたしは立っていられなくてその場にしゃがみ込み瞼をきつく膝に押し付けた。

泣きたい

でも泣けない

あたしには

泣く資格もないから…

唇をきつくかみしめると

かすかに血の味がした。

夜は長い…

あたしには永遠に朝は来ない気がした。

### 第三章 5・覚悟、ここにいる理由

あの日からあたしは竹刀を握れなくなった。ただ黙々と日々の洗濯や炊事をこなしていた。幸いやることはたくさんあって、洗濯や炊事、掃除をして手を動かしているときはあまり余計なことは考えなくてすんだから。

みんなは何事もないように接してくれる。

総司はけがが治り、すぐに隊務に復帰した。冗談を言ったり、つかみどころがなかったりするのは相変わらずだ。

さのさんや永倉さん、平助君はあたしの仕事中に茶化したり、エロい事を言ったりしてあたしを笑わせた。

近藤さんや山南さんは優しくして土方さんは何も言わなかった。

そして斎藤さんは相変わらずあたしと目が合うと黙って目をそらした。

前と何も変わらない

でも何かが違う。

それはあたしがかわったからなのかな。

洗濯を終わらせて立ち上がるとふらっと立ちくらみがした。

目の前が一瞬暗くなり、目をつむる。

最近、あんまり眠れないからだ。

眠ろうと思っても眠れない…

暗闇が、無性に怖かった。

ここにいる資格…

自分の存在意義…

そんなものどこにもない。

それが苦しくて苦しくて…

ただ辛かった。

布団の中で丸虫みたいに丸まってただ時が過ぎるのを待った。

空が白みだすとうとうとするのだけれど、

すぐに起床の太鼓が鳴り、目が覚める。

そんな日がもう1週間以上続いている。

夕食の支度までまだ一刻以上あるからゆっくりしなさいとおトキさんに言われ、柔らかな午後の日差しが差し込む縁側に膝を抱えて座り込んだ。

「ふう…」

溜息を一つ。

何も考えたくない…

瞼を膝に押し付けていると温かさに誘われて少し眠気が襲ってきた。

あつたかい。

誰？

つー兄？

お父さん？

違う。

あつたかいな。

頭に置かれる男の人の手の感覚。

大きくて硬くて、でもあつたかい。

泣きたくなるくらい優しい手。

ねえ、助けて…

お願い…

あたしを帰して。



その手で連れてって。

お願い…

「泣くな、大丈夫だから。」

低くてかすれたような、でも心地よい声。

頭をなでられる優しい手が安心感を与える。

…

ふと目が覚める。

「夢…」

すごく温かくて心地よい夢。

あたしの願望の現れ何だろう。

そう思うと苦笑してしまう。

ムシのいい夢。

ふと身じろぎすると肩から何かが滑り落ちた。

それは黒い羽織だった。

だれの？

家紋も入っていないし、誰のものかわからない。

ただその羽織はあつたかくておひさまの匂いがした。

あたしはその羽織をぎゅっと抱きしめた。

とその時、庭を山南さんが通りかかった。

「どうしたんです？」

「山南先生、時間が空いたので休んでいたらいつの間にか寝てしまつたみたいで。」

「最近顔色が良くなかったですからね、つかれていたんでしょう。」

「大丈夫ですよ。」

あたしはいつも通りの笑顔を浮かべた。

「ここにいるのは辛いですか？」

山南さんはあたしに視線の高さをあわせると、穏やかに聞いてきた。

「！」

あたしは目を合わせていられずにつつむく。

「全然…辛…くないといえばウソになります。」

「それは私たちが怖いからですか？」

「そんな…！違います。自分の…問題なんです。」

あたしは…ここにいる資格がないから。」

声が震えるのを抑えることができない。

鼻の奥がつんと痛くなり、目の前の視界が揺らぐ。

「資格がないとはどういうことですか？」

山南さんの声はどこまでも穏やかで優しい。

「総司に、けがをさせたのはあたしのせいなんです。」

総司は逃げるつて言ったのに、あたしは逃げることもしなくて。

剣を持つ覚悟もないのに、竹刀を持ったりして…

あたしはなんのためにここにいるのかわからないんです。

みんなに迷惑かけるだけで…」

なにが言いたいのか自分でもわからない。

うつむいた瞬間にこらえきれず涙がこぼれおちる。

「総司のけがのことは聞いています。」

総司が水瀬さんをかばって剣を捨てたみたいですね。」

「…はい。」

「なぜそうしたかわかりますか？」

「え？」

「大事だからですよ。あなたのことが。」

「…！」

「それだけではダメですか？」

ここにいる理由になりませんか？」

「…でも…！」

「武士が何のために剣を持つかと言われれば、それは守るためなんですよ。」

自分の身や仲間や大切な人をね。

もちろん、そのために人を傷つけたり、殺したり、自分が殺された

りすることもあるんです。

でもそれが武士と言う、剣に殉ずるものの宿命なのですよ。」

「…怖くはないですか？」

「怖いですよ。」

人を斬り、殺すのは怖くて苦しい。

でもその痛みや苦しみは生涯負っていかねばならぬものなのです。

それが武士ですから。」

穏やかで、けれど一分のゆるぎないもない信念。

ああ、この人は武士なんだ。

”武士ですから”

何の説明にもなっていないようで、なんかすべてを納得させられてしまう。

「あなたの作るお味噌汁、すごくおいしいと評判ですよ。」

「え??？」

唐突過ぎて、突然何の話かと目を丸くしてしまう。

「あの偏食家の土方君も水瀬さんの料理だけは残さず食べるんです。」

山南さんはさもおかしいと言った風情でくすくす笑いながら言った。

「はあ…」

「いつ斬られ、いつ殺させるか、死ぬか生きるかで闘っている私たちにはあなたの笑顔がすごく救いなんですよ。あの気難しい土方君や斎藤君も君にはすごく救われていると思いますよ。」

「そんな…!」

あたしなんか…何も…

みんなに迷惑かけるだけで…

土方さんも斎藤さんもあたしのこと嫌ってる…思っていました。」

「本当に迷惑で、嫌っているなら

もうとつくにどこかにやるか、斬っていますよ。

あの2人ならね。

斎藤君や土方君が厳しくなるのは、あなた自身を守るためですよ。ここにいる限り、ちよつとした甘えが命の危険につながる。

油断や躊躇は仲間も自分をも傷つけるんです。だから普段から油断がないように、甘えが出ないように厳しくなるんです。

そこまで言うのは、あなたが大事だからですよ。」

「…!!」

あたしは涙をこらえることができなかった。

馬鹿だ、あたし

こんなにしてもらってるのに…

「その羽織…」

「え?」

「誰のかわかります?」

あたしは黙って頭を横をふる。

「土方君ですよ。」

「…!!」

じゃあ、あの夢は…

あの優しい手は…

「まったく不器用なんですわね、本当は水瀬さんが元気がないのが心配でしょうがないくせに

辛気臭いから私に様子を見に行ってくれだなんて。」

山南さんは穏やかに、でも面白そうに笑った。

「あたし…こんなに迷惑かけてるのに…何もできないのに…」

「水瀬さん、私はね、”迷惑”と自分で言うことは、自分が何かをできないことの言い訳になってしまつように思うのですよ。

人を傷つけるのが、自分が死ぬかもしれないのが、怖くて耐えられないなら、ここを出なさい。

どこか安全なところを私たちで探しますよ。

でもあなたがそこまで悩んで、自分の存在が”迷惑”になると考えるのはどうしてですか?」

「この…人たちが好きだから…」

私のせいで傷ついてほしくないんです…。」

「では…あなたはどうしたいんですか？」

「あたし…ここに…いたいです。」

「それだけで十分なんですよ。」

「ここが好き、ここに居たい。」

それがあればここにいる十分な理由になりますよ。

…では、今夜の夕餉楽しみにしていますから。

おいしいのよろしくお願いしますね。」

山南さんは優しく言ってあたしの肩を優しくたたいて去って行った。

その拍子に涙がぱたりと縁側に落ちて音を立てた。

…この人たちが好き…

…ここに居たい…

それがあたしの真実だ。

そのためには？

あたしがすべきことは？

それは

覚悟を決めること

何の覚悟？

誰かを傷つける覚悟

自分が傷つく覚悟

そしてみんなを信じ抜く覚悟…

あたしは顔をあげた。

目の前の景色が涙できらきらして見える。

涙ですごい不細工な顔になってるだろうけど、  
心は不思議とすっきりしている。

強くなろう。

覚悟を決められるように。

ここに居続けられるように。

あたしは長いトンネルからようやく抜けられたように感じた。

あたしは夕食の準備をするために台所へと走り出した。

### 第三章 6・自覚：斎藤一

言いすぎた。

水瀬を前にするとどうも傷つけるものいいしかできぬ。

水瀬は沖田さんにけがを負わせたことを気に病んでいたのだ。

それに対してなぜあんな言い方しかできなかったのだ。

もともと他人とかかわるのは苦手だ。

だがもつと別の言い方があったのではないか。

あの夜の道場で会った日以来水瀬は目に見えて元気がない。

話しかけられれば笑顔で応じるものの、一人でいるときなどはぼん

やりしていることが多い。

どうしたもののか。

俺はため息をひとつついた。

今日の夕餉は水瀬が作ったものだ。

水瀬は江戸の出らしく、味付けがおれたちの舌に合っているのだから。

中でも魚の煮つけは臭みもなくなかなかうまかった。

夕餉の給仕をしている水瀬はくるくるとせわしなく動き回っている。

「水瀬、飯のおかわりくれ」

「あ、こっちは味噌汁」

「あ、おれも。」

あちこちからおかわりの催促だ。

「はいはい、ただ今。」

それらに嫌な顔一つ見せずに対応する水瀬は男装してはいるものの、

やはり年頃の女子なのだと思う。

なぜだろう、今日の水瀬はつきものが落ちたようにすっきりしている。

水瀬の笑顔は輝くようで、思わず箸を止め、それに見入る。

ふとこちらを見た水瀬と目が合い、おれはあわてて目をそらす。

こんなことをしているから水瀬を傷つけるのだ。

性懲りもなく同じことを繰り返す自分に腹が立った。

夕餉を終え、大部屋を出ようとしたとき、後ろから声をかけられた。

「斎藤さん」

振り返るとそこには水瀬がいた。

「なんだ。」

俺は何でもない風に装っていたが正直鼓動が速くなるのを感じた。

水瀬がここにきてから一カ月近くがたつが、こんな風に会話をするのは初めてではないだろうか。

「あの、ありがとうございます。」

「何のことだ。」

礼を言われるいわれはない。

「芹沢先生とのこと、見ていてくださったそうで。お礼遅くなってすみません。」

それから、この間道場で斎藤さんがおっしゃってたこと、ずっと考えてたんです。

斎藤さんがおっしゃるようにあたしはやっぱり甘えてるんです。

何の覚悟もなくて、ただ足手まといにしかねない自分がふがいなく、どうしようもなかったんです。でも、いろいろ考えても、やっぱりあたしはここに居たいんです。みんなが好きだから。

だから、そのために、自分のできることとできないことをきちんとわきまえて、できることを増やしていこうと思うんです。



斎藤さんの言葉がなかったらきつとそんな風には思えなかったと思うんで、だからありがとうございます。」

水瀬は一気に言つと最後に輝くような満面の笑みでぺこりと頭を下げた。

その拍子に白い首筋が目に入り俺はあわてて目をそらした。

俺はなんだか落ち着かない気分になり、何も言えない。

「水瀬：おまえが思っているほど甘い道のではないぞ。」  
なぜこんなことしか言えぬ。

自分が齒がゆかった。

「！」

水瀬は形のよい瞳を一瞬見開いた。

傷つけたか。

「なんだ。」

「初めて…」

「え？」

「斎藤さん、初めて私の名前呼んでくれましたね。」

自分が甘ったれなのは承知の上です。でも私ここが好きですから、できる限り頑張ってみたいんです。」

ぱつと花が咲いたような無邪気な笑顔に顔が熱くなるのを感じた。

”好きですから”

なぜかその言葉にこそばゆい気分になる。

「勝手にすればよい。」

話はそれだけか？俺は部屋に戻る。」

俺はそれ以上水瀬と対峙することができずに背を向けた。

「お時間とらせまして申しわけありません。」

ありがとうございました。」

背中にかけられる水瀬の声には返さず、おれは足早に自室に戻った。

ちくしょう。

何なんだ、この気持は。

未熟者。

女一人に動揺してどうする。

俺はたぶん水瀬真実という人間に興味を持っているのだ。

およそ女子らしからぬ行動と服装をしているこの人間が物珍しく感じているのだろう。

だが心のどこかでは俺はこの気持が何なのか気付いている。

ただ認めるわけにはいかぬ。

断じて、このように揺らぐわけにはいかぬのだ。

### 第三章 7. つながらぬ手：土方歳三

まったく辛気くせえ。

水瀬の奴、いつまでしょぼくれてやがる。

総司がけがをしたのを自分のせいと思い込んでいるのだろう。

実際あいつが逃げていればけがをしなかっただろうが、初めてああいう斬りあいの現場に遭遇した奴は腰抜かして動けなくなるもんだ。あいつに限った事ではない。

ただ総司があいつのために刀を置いてまで守ろうとしたことには正直驚きを隠せなかった。

女一人のためにそんなことをすりゃあ、いざって時に必ず、揺らぐもんだ。

「水瀬君もやはり女子だったんだなあ。」

勝っちゃんが安心したように言っていたが、おれもその事実になぜかホツとしたのを覚えている。

俺らはいつが女だということをつい忘れる。

こないだ芹沢とのひと悶着あった時も、自分の首に脇差しを押し当ててみせたことにはさすがに度肝を抜かれたが、何でそんなことをしたのか聞いても「なんとなく、ただとっさのことでしたから」とひょうひょうと答えたあいつは、つかみどころがなく得体の知れぬ生き物のように思えた。

自分の根本を揺らがされるようなそんな気分にはさせられた。

こいつは女なはずなのに、おれが知っている女とは根本的に違う。

俺が知っている女って生きもんは、良くも悪くも自分のことを知っていて、すべてが曲線で構成された華奢な体や壊れそうな小さな顔なんかは儚くて守ってやりたいとさえ思うのに、びっくりするくらいしいたたかで、駆け引きなんかがそこらの幕臣なんかよりずっと

まい、なんていうか生臭い生き物だ。

そのやり取りが刺激的で、女と体を重ねているときは自分が生きて  
いることを実感できる、女つてのは俺にとってそういう存在だ。

勝ちゃんなんかはなんていうか単純というかお人よしだから、女を  
侮くて弱いだけだと思っっているらしいが、何のことはない、女つて  
のは男よりもよっぽど強靱でしたたかな生き物だぜ。

ただ水瀬に限っては俺の知っている女とは一味もふた味も違う。

まず男の格好をしているなんて常識ではありえないし、なにより女  
くさくねえ。

度胸も潔さも並みの男以上だった。

そんなあいつが見せたもろさがこの前の総司のけがの場面だったろ  
う。

たぶんあいつは人が斬られるのをはじめて見てそれに動揺したんだ。  
俺らを人斬りと思い怖いと思うなら隊を抜けさせるまでだ。

あいつもやっぱりただの女だったってことだろう。

それはまあ、残念ではあるものの、心のどこかでホツとする部分  
がある。

勝ちゃんが言った「女だったんだなあ」にホツとするのはそういう  
理由からだ。

今日偶然縁側を通りかかったらあいつが丸まって眠っていた。

眠りながらも泣いているあいつを見たら、なぜか胸の奥が疼いてせ  
つない気分になった。

こいつを見るとときなにか忘れていた大切なものを思い出せるような、  
心の琴線に触れるのだ。

俺はそつと自分の羽織を脱ぎ水瀬の肩にかけた。

水瀬は「帰りたい…」と寝言でつぶやいた。

俺は水瀬の頭にそつと手をのせた。

あいつの髪は絹糸みたいに細くて柔らかく手に吸いつくようになじ

む。

水瀬のつむった目から涙がこぼれおちた。

俺はなんだか落ち着かない気分になって、思わず「泣くな」とつぶやいた。

自分でも腹が立つくらい声がかすれていて、誰に見られたわけでもないのになぜか恥ずかしくなった。

辛気くせえ。

柄にもねえな。

俺にはこういう役は似合わねえ。

こういうのは人望の厚い山南さんがにあう。

俺は山南さんに水瀬の様子を見に行ってくれと頼むと、山南さんは

「土方君が私に頼みごととは珍しいね。」とらしくもなく俺をからかいながら去って行った。

食えねえ奴だぜ。

あの人は学者肌で武士じゃねえ、

おれとは根本的などころで相いれない人だとは思っているが、別に嫌っているわけじゃない。

嫌われ役なんざ、おれ一人で十分だったことだ。

あいつどうしてるかな。

夕飯の時は割かしすつきりした顔でいやがったが、山南さんがうまくやったんだろう。

あの人が適任だったってことだろう。

部屋に帰ってから見るともなしに書類に目を通していると、ふすまの外に人の気配がした。

「土方副長、水瀬です。よろしいですか。」

「はいね。」

ふすまが開くと、水瀬が茶と何かを持って入ってくるのが見えた。

「お茶をお持ちしました。」

「おう。そこおいといてくれ。」

「副長、あの…。」

「なんだ？」

こいつといるとなんだか落ち着かない。

懐かしいようなせつないようなそんな気分させられる。

「羽織、ありがとうございます。」

「なんのことだ？」

おれは何でもないことのように装うが内心はおかしいくらい動揺していた。

「山南さんからこれは副長のだと教えていただいたんで。」

ち、山南さんめ、余計なことしやがる。

「ありがとうございます。」

それから、ご心配おかけしてすみません。」

「ふん、まあ、これからは辛気くせえ顔すんじゃねえぞ。」

おめえはわらってりゃいいんだ。」

「はい！」

花が咲いたようにぱつと笑って水瀬は元気に返事をした。

こいつはいろんな表情をする。

まっすぐな一点の曇りもないような凜とした武士みtainな顔したかと思えば

こんな風は無邪気な子供みtainな笑顔を見せる。

まったくよくわからねえ女だ。

「では、失礼いたしました。」

「おう。」

水瀬は一礼して去って行った。

ちくしょう。

なんで女一人にここまで俺様が動揺させられるんだ。  
俺は水瀬にかけてやった羽織を引き寄せると、羽織からはかすかに  
女の甘い香りがして俺を落ち着かせなくさせた。

### 第三章 8・守りたい：沖田総司

自分が恋をするなんて考えもしなかった。

水瀬真実という人間に出会うまで。

知れば知るほど彼女は不思議な子で、つかみどころがなかった。

ただまっすぐで純真で、時におどろくほど強靱で、そしてまぶしいくらいに輝いていた。

毎日同じ部屋で、寝起きして、くだらないことで笑いあって、一緒に剣術の稽古をして…

そしてごく自然に好きになっていた。

それこそ水が高いところから低いところへ流れ落ちるように、四季が移り変わるように、ごく自然に当り前のように好きだと実感して、そんな感情を何の抵抗もなく自分が持つことに驚きと戸惑いさえ感じた。

恋いなんぞ武士の志の前にはそんなもの邪魔になるだけだと思っていた。

それは2年前の出来事を境に私の中で大きくなっていった。

試衛館で、住み込みで働いていた女中さんが私のことが好きだと告白してきたのだ。

その頃は恋とか、そういうものが全く理解できなくて、剣術を極めることこそが自分の使命だと信じて疑わなかったから、思いを受け止めることはできないと断った。

そして彼女は命を断とうとした。

目の前で喉を短剣で突いたのだ。

幸い命は取り留め、けがが治ると彼女は他家に嫁いでいった。

恋とは何故かようにも人を狂わせ、狂気に走らせるのか。



私は決して女子になんぞ関わるまい、そして自分も恋なんぞ一生することはないだろう。

そう思つてずっと女子とは関わらずに生きてきたのに。

だからまことが女だと知つた時、落胆と拒絶の気持ちが残つた。

女子というめんどくさくて、正体の知れぬ不安定な生き物がこの壬生浪士組に入るなんて冗談じゃない、と。

それなのになぜなのだろう。

今は彼女が女だとかそんなことはどうでもよく、ただ水瀬真実という一人の人間が大事で、彼女とともにいる時間が幸せで輝いていて、泣きたくなくなるくらいに優しい気持ちになれる。

守りたい、ただひとえにそう思う。

一番近い場所を守ることを自分は望んでいる。

なのに最近どこかこの子との間に壁が出来てしまったように感じるの。やはり仕方のないことなのだろうか。

たぶんまことは人を斬るのをはじめてみたのだろう。

そのせいで私のことを、浪士組のみんなを怖いと思うのも仕方のないことだと思う。

剣術に優れているとはいえ、やはり女子。

血に濡れ、いつ死ぬともしれないそんな世界に身を置くのははばかられることだろう。

もしそうならば、ここを抜け、どこか違うところで、幸せに暮らせばよいのだ。

人斬る痛みも、斬られる恐怖も、何も知らぬままただ安全な場所で幸せに過ごしてくれればいい。

それは当然といえば当然で仕方のないことなのかもしれないけれど、ほんの少しだけ胸が痛んだ。

それは私が彼女にここにいてほしいと望んでいるからであり、とどのつまり彼女のこと好きだからだ。

自分がこの気持ちに気付いてしまったのは、つい数日前のことである。

寝ぼけてまことを抱きしめてしまい、目が覚めた時はかなり動揺した。

夢を見ていて、なんだか温かくて幸せな気分で、起きてみたら私はまことに覆いかぶさっていた。

今思っても見ても恥ずかしくて申し訳なくて、穴があれば入りたいくらいだ。

サノさんはそんな私の動揺を見てあえて茶化してくれたのだと思う。あの人は昔から、どこまでも能天気に見せて、誰よりも情に厚く優しい人だから。

サノさんが茶化してくれなかったら、まことと向き合えなかったと思う。

柔らかい華奢な体と甘い香りは妙に記憶に残っていて、なんだか落ち着かない。

抱きしめたい、自分が生まれてこのかた感じたことのない不思議な衝動が生まれ、私を動揺させた。

そして…

私は、水瀬真実を愛おしいと思っている、と気付いた。

あの後結局まことは「友達なんだから全然気にしてない」と笑って許してくれたわけだけど。

”友達”その言葉には正直ちょっと傷ついた。

すくなくともまことは私ほどは、このことに関して何のわだかまりも持っていないということだ。

わだかまりを持ってほしいわけではないのだけれど、

なんとなく悔しくて、まことが二十歳になっても嫁がない理由を、

ぶしつけだとは思いつつも聞いてしまった。

気になったのだ。

まことがこれまでどんな人を好きで、なぜ今も独りなのか。それは今もまだ恋仲の人がいるからなのか。

まことが好きになる人、それが無性に気になった。

とどのつまり、私は嫉妬していたんだと思う。

見たこともない存在に。

いるかいないかもわからぬ存在に。

まことは少し答えにくそうにしていたが、自分が恋をするのが苦手だと言っていた。

その表情があまりにもせつなそうなものだからつい言ってしまったのだ。

「もしまことが嫁にいけないのなら自分がもらう」と。

まことは驚いていたようだけれど、すぐに冗談だと受け止めて「ありがとう」と笑いながら言った。

だから私も冗談にするしかなかった。

いつものように、つかみどころのない自分になるしかなかった。

少しさみしかったけれどそれで良かったと思う。

私に変に先走って言った言葉で、変なわだかまりを残して困らせたくなかったから。

困らせるくらいなら

冗談でいい。

まことが笑ってくれたなら、それでいい。いや、それがいい…

ただ願わくば、まことの一番近い場所で、一緒に笑っていたい、そう思う。

あのあと長州浪士に会って、不覚にもけがをしてしまった。  
まことを人質に取られたことで刀を置くななんて自分でも馬鹿な選択  
をしたと思う。

もっとやりようはあったはずなのに。

まことがとらわれた、その事実以外は何も見えなくなった。

まことは斬りあいにかわいそうなくらい動揺していて、私がどんな  
に茶化しても笑わなかった。

その日からずっと見えない壁がある。

言葉をかければ笑って返すものの、

ぼんやりとすることが多くなった。

夜も眠れていないようだ。

でも、私にはどうすることもできない。

私がいくら言葉をかけたところで、まことが自分自身で乗り越えな  
い限り、

根本的な解決にはならないだろうということとはわかりきっていたか  
ら。

まことはここを出ていくかもしれないな。

漠然とそう思った。

それはさみしいけれど、それでけがすることもなく、幸せに暮らし  
てくれるのならそれでもいいのかもしれないな。

夕飯の後、まことはなかなか帰ってこなかった。

私と顔を合わせずらいと思ってるのかな。

早めに布団を敷いてごろりと横になって取り留めもないことを考え  
ていた。

「開けるよ」

まことの声が出て障子が開いた。

「ねえ、総司。起きてる？」

「起きてるよ。」

私はまことのほうに体を向けた。

まことは私の布団の横にちょこんと座ると、頭をぺこりと下げて言った。

「総司、あのね、この前のこと、ごめんなさい。」

「なんのこと？」

私はなんのことが、つかめずに首をかしげる。

「総司は逃げろって言ったのにそうしなくて、拳句の果てにけがさせて本当にごめんなさい。」

「それは、もういいよ。」

わたしにも原因はあるから。」

「それから、ありがとう。」

まことは静かに、けれど染み入るような優しい笑顔で言った。

「え？」

私は何の事だかわからずに聞き返す。

「守ってくれて、本当にありがとう。」

「当然だよ。」

何を言いだすかと思えば。

当たり前のことだ。

まことは女子で、私は武士なのだから。

「ううん、当然じゃない。」

あたし総司や土方さんのおかげでここに居られるんだもの。」

まことはつきものが落ちたようなすつきりとした顔で言った。

「なにかあったの？」

あまりに晴れ晴れとした様子なものだから何かあったのか知りたくなかった。

誰がまことにこの笑顔をもたらしたのだろう。

私は自分が小さな嫉妬をしていることに気付いた。

「今日、山南先生に話を聞いてもらったの。」

ずっと自分がここにいる意味がわかんなくて、みんなの迷惑にしか  
なれないことに悩んでた。

でも山南先生がここに居たいと思うことだけで、十分ここにいてい  
い理由になるんだって教えてくれたから。迷惑だっただけで悩んでる暇が  
あるんだったら、自分ができることを、できそうなことを探してす  
ることのほうはずっと大切だっただけで気付いたから、だからあたしは強  
くなる。ここに居るために。総司にあんなげがさせないように覚悟  
を決めたい。」

凜としていて、覚悟と本気を感じさせるまなざしだった。

「まことは私が怖いと思ってたんじゃないの？」

「怖い？」

まことが形の良い瞳を見開く。

「私たちは人を斬って、時には殺したりしてるんだよ。」

人殺し、壬生狼と後ろ指さされることもあるし。」

「正直、目の前で人が斬られて、死んで行くのはすごくこわかった。  
なんで平気なのって思ったよ。」

でも、だからあたしは今生きていられる。」

総司はあたしの分まで、人を斬って痛みを請け負ってくれてるんだ  
ってわかったから、

総司を怖いと一瞬でも思った自分が恥ずかしい。」

まことは唇をかねて俯いた。

「まこと……」

私は言葉が続かなかった。

こんな風に自分たちのことを見ていてくれたのか。

世の中の大義のために自分たちは闘っている、そう言い聞かせても、  
心のどこかで人を斬ることにおびえ、後ろめたさが私たちの中には  
多かれすくなかれあった。

ただおびえたものが斬られ、命を散らすのだ。だから人斬りとさげすまれても、揺らぎを見せることは許されなかった。

揺らげば自分が、仲間が死ぬ。

そう言い聞かせて自分を律し、人々に人斬りと、鬼とさげすまれることもはねのけてきた。

平気だと思っていた。

でも、ただ一人でも、こんな風に私たちの誠を理解して見ていくれる、その事実がたまらなくうれしい。

「総司にお願いがあるの。」

まことが顔をあげて真剣な目をして言う。

「何？」

「あたしに真剣の扱いを教えてください。」

私はかすかに驚いた。

「真剣を持つということは、人を斬り、自分もまた斬られるかもしれない、その覚悟をもつことだよ。そんな中に身を置けるの？」

この華奢な手で剣を振るい、自ら白刃と血の修羅の道に身を投じようというのか。

「今すぐにはできないかもしれない。」

でも何かあった時、あたしは自分の身を自分で守らないといけなの。

ここに居たいから。」

「今のままで、みんなまことをまもろうとするよ。」

まことが一生懸命なのはわかってるから。

それでもだめなの？」

「うん、それはだめなの。」

わたしもここに以上、みんなと同じものを背負いたいから。

たとえば、目の前で仲間の身に何かあった時、刀でその命を救えるなら、あたしはそれを選びたい。」

まことの目に一分の揺らぎも見られない。

その眼は凜と澄んでいて、覚悟を映し出していた。

「…辛い思いもきつとするよ。」

「それでも。」

「分かった。私が教える。」

でも、厳しくするよ。」

「うん、お願いします。」

まことはぱつと花が咲いたような笑顔で大きく頷いた。

その瞳は一点の曇りもなく、強い光を宿していた。

ああ、これが私が惹かれた理由なのかもしれないな、

どこまでもまつすぐで、壁にあたるたびに強くなる、それが水瀬真実という人間なのだ。



## 第四章 1・島原事変

あれから1か月、季節は夏に移り変わっていた。あたしは総司から真剣の扱いを教えてもらうことが日課になっていた、

始めはこわごわおっかなびっくりだったのがだんだん刀の扱いに慣れてきた。

柄の握り、構え、刀の手入れの仕方。

すべてが自分の命、ひいては仲間の命につながるのだと思ったたら身が引き締まる思いのだけけれど。

それでも幸いなことにまだ実戦では使ったことがないわけで、甘えとは分かっているものの願わくば刀を抜かずにいられますようにと願わずにはられない。

そんな中、浪士組に会津から給料みたいなものが支給されたらしく、サノさんや永倉さんは朝っぱらから「島原に行くぞ」と大騒ぎしている。

島原って何があるんだろ？

「島原って何があるんですか？」

あたしは永倉さんに素朴な疑問をぶつけてみた。

「水瀬、おまえ、浮世離れしてると思ったが、なんだそんなことも知らねえのか。」

島原ってのは男の憧れ、楽園よ。」

「？それじゃ答えになっていないですよ。」

「いい女がわんさかいるんだよ、島原には。」

なんか良くわかんないけど…。

「水瀬、おまえも行こうぜ。」

「私は女ですけど…それでもいいんですか？」

「おまえは女に見えねえから大丈夫だよ。」

「はあ。」

このひとこの軽ささえなかつたらクールなイケメンなはずなのに。あたしはこっそり溜息をついた。

ということ夕方、サノさん、永倉さん、平助君、総司、土方さん、そしてあたしの6人で島原に赴いた。

なんだかみんなで飲みに行くみたいで楽しいな。

こんな雰囲気は大学の飲み会を思い出す。

みんなどうしてるんだろ。

元気でいるかな。

「なんでこんなに大所帯なんだよ？そろそろ大勢で行くもんじゃねえだろ。」

「よりにもよって何で水瀬も一緒なんだよ。」

土方さんは機嫌が悪い。

「あたしが一緒じゃだめなんですか？永倉先生はいいっておっしゃいましたよ。」

「まったくサノさんも永倉さんも何で島原なんかにまことをつれてきたんですか？」

総司もぶつぶつ言ってる。

「水瀬にも社会勉強が必要だろ？」  
と永倉さん。

「そうそう、まあ、今日は座敷でみんな飲んで、帰りたい人は帰って残る人は……って感じていいんじゃない？」

珍しく平助君がウキウキしてる。

「ああ、久しぶりの女だぜ！」

サノさんはもはや聞いてはいない。

島原ってどういうところなの？

あたしたちは鏡屋というお茶屋さん？と呼ばれるお座敷に入った。  
一室に案内されるとそこにはすぐきれいな女の人がいた。  
島原って芸者さんがいるところなんだ。

要するに銀座の高級クラブみたいなものと思っただろうか？  
その人は雪乃さんという天神（芸者さんの位を表すものらしい）で、  
小顔に黒目がちの切れ長の瞳に常に笑みをたたえたような口元がす  
ごく色っぽくて頭の先から、着物の裾まで優雅で女らしかった。

雪乃さんには吉乃さんというお付きの15、6の女の子がついてい  
て、その子も小柄で砂糖菓子みたいに儂くて守ってあげたいような  
雰囲気だ。

ああ、美っ人っ！！

同じ女に生まれてこうも違うものか。

なんか女として自信なくすなあ。

「お久しゅうおわすなあ。土方せんせ。

最近は全然おいでにならしまへんさかいさみしかったえ。」

「そうか」

雪乃さんは色っぽさ満点で、土方さんにお酌しているけど土方さん  
は妙にそっけない。

！

この人土方さんのことが好きなんだ。

きつとこれは営業スマイルなんかじゃない。

だって土方さんに会えて本当にうれしくて仕方ないって顔してるし。

土方さんは背も高く、アイドルもまっさおのかなり整った顔をし  
ているから、雪乃さんみたいな美人と並ぶと絵に描いたように様な  
似合いの美男美女カップルになる。

なんか胸が痛い。

この二人があまりにもお似合いだから？

それをあたしがうらやむことなんて何も無いのにな。

あたしはこの気持ちを表す言葉を知らない。

雪乃さんと吉乃さんのほかにも何人か芸者さんが来てくれてあたしたちにお酌をしてくれていた。

吉乃さんは男のあたしに興味を持ってくれてお酌や料理をとってくれる。

「水瀬はんはほんまに美しゅうおわすなあ。

髪結いあげて化粧しはったら太夫にもなれますえ。」

「はあ、どうも。」

あたしは苦笑しながら受け流す。

吉乃さんは無邪気で妹みたいな感じ。

完全にあたしを男って思ってるのが悲しい限りだけど。

「なあ、水瀬はんはどないな女子がお好きどす？」

「え？」

あたしの好みって？

「うーん、そうですね、強いて言えば強い人かな。」

「強いつてなにがどす？」

「心かな。凜としてて芯が通ってて揺らがない、そんな人。」

あたしは自分の理想の女性像をなぞって言った。

そんな人になれたらいいな。

凜として揺らがない、大切な人を守れるくらい大きくて強い心を持った人になれたらいいな。

「うち、そないな人になりたい。」

「え？」

「そしたら、水瀬はん、うちのこと好いてくれはる？」

なんて純粹で無邪気でまっすぐな子なんだろう。かわいい。

「吉乃ちゃんはいまでもすごく魅力的だと思うよ。」

「ほんまに？」

「うち、うれしおす。」

「吉乃ちゃんはどこまでもまっすぐで可憐だった。」

そしてあたしたちは2時間ほど鏡屋さんでお酒を飲み、今日のことろはみんなで屯所に戻ろうということになった。

お茶屋さんを後にしようとしたところで、思わぬ人と出会った。

それは芹沢鴨だった。

「あ、芹沢先生だ。」

「え？」

「ああ、本当だ。また問題起こさねえといいけどな。」

永倉さんたちは面倒くさそうに言った。

いつものように取り巻きの新見とひよろひよろの平間を連れている。

芹沢はべるべろに泥酔していてあたしたちには気づいていない。

しかし鏡屋の軒先まであたしたちを送ってくれていた雪乃さんを見

つけると獲物を見つけたような目をして千鳥足で近づいてきた。

「なんだか嫌な予感がした。」

「おぬし、なかなかよいおなごじゃな。」

「今宵わしのもとへあがれ。」

「な！」

いくらあたしがこの時代に疎くてもあれが何を意味するのかは分かった。

要するに夜の相手をしろってことだ。

島原はそういうところなんだ。

お金を出して女の人たちの夜を買った。

総司や土方さんがあたしを遠ざけようとしてたのも

サノさんや永倉さんが男の楽園と言ったのも、  
そういうことだったんだ。

なんだか…複雑。

現代とは感覚が違うにせよ、やっぱりこれは売春なわけで、  
雪乃さんも吉乃さんもどんな気持ちでお座敷に上がってるんだろう。  
でも何も知らないあたしが彼女たちに同情したりすることはとんで  
もなく失礼なことです…

「うちは島原の天神や。

そないな無作法な申し出受けるわけにはいきまへん。」

雪乃さんの凜とした声が響く。

雪乃さんは島原の天神であることに誇りを持つてるんだ。

きれいな人だとは思っていた。

でも、こんなに凜として美しいのは、この人の中に女子の誠がある  
からなんだ。

けど、あんなふうになつこうから言ったら今の芹沢先生には火に油  
だ。

「貴様、武士に恥をかかすとは何事じゃ！

そこに二人ともなおれ！

無礼打ちにしてくれるわ！！！」

雪乃さんと隣にいた吉乃ちゃんも一緒に座らされた。

野次馬はひそひそ話をしながら遠巻きに見ているだけだ。

芹沢はするりと不気味に光る刀を抜いた。

「だめッ」

あたしは駆けだそうとして総司に止められる。

「やめなさい。」

いままことがいったところで何もできない。」

「！」

でも…！

雪乃さんと吉乃さんが死んじゃう！

「芹沢局長、お待ちください。」

その時意外な人の声が聞こえた。

## 第四章 2・女の命

「芹沢局長、お待ちください。」  
そういったのは土方さんだった。

「土方か。なんだ。」

わしは今この無礼な女を手打ちにするのじゃ。」

「たかが、女の戯言でしょう。」

刀の錆にするまでもなきことです。」

「わしはこの女に恥をかかされたのじゃ！！」

邪魔をするな！土方！！

断じて手打ちにする！」

完全に血が上ってる！

やめて！！

こんなバカなこと！

許されていいはずがない！

「局長、無力な女子を斬るは士道にそむきます。」

ほかの方法で処断してはいかがか。」

「他とはなんじゃ！」

「髪は女の命と言います。」

髪を切らせ、それを罰とするはいかがか。」

土方さんは揺らくことなく何でもないことのように冷たく言った。  
野次馬たちからざわめきと非難の声が上がる。

でもこれが土方さんの精一杯なんだ。

どうにかして罰を加えねば気が済まぬ芹沢先生を抑えるにはそれ相  
応の傷を負わねばならない。

顔や体に傷をつけるくらいならと、選んだのが髪なんだ。



雪乃さんも吉乃ちゃんも震え、吉乃ちゃんに至っては泣いていた。鏡屋の主人が雪乃さんの近くに行ってささやいている。たぶん「こらえてくれ」ということなんだろう。

「ふん、よし、命ばかりは助けてやろう。

坊主の天神とはとんだ笑い草よのお。

土方、おまえが髪を落とせ。」

「承知。」

土方さんは雪乃さんに近づきその髪に手を触れた。

だめだ。

雪乃さんは土方さんが好きなのに。

あんなに大好きなのに。

ほかの誰にでもなく、土方さんにだけはこんなことされたくないはずなのに！

あたしは総司の拘束を振り切って人の輪から抜け出た。

体中を熱い怒りが駆け巡る。

こんなことつてあるだろうか。

雪乃さんが無礼なら、芹沢先生のほうがもっと無礼じゃないか！

何で女だけがこんな目に合わなきゃいけないんだ！

なめんなよ！

「お待ちください！」

「水瀬！さがれ！！」

土方さんの厳しい声。

あたしはそれを無視して地面に膝をつき芹沢先生に向き直る。

「やめてください。」

「水瀬、わしに意見する気が。」

「天神のことを無礼とおっしゃいましたが、それを言うなら島原の

規則を無視しての先生のおふるまいも無礼にごぞいます。」

「なんだと！このガキが！！」

芹沢先生は刀をあたしの顔先までつきつける。  
だからなんだ！

あたしはまだまだき一つせず芹沢先生を凝視した。

「さがれ！水瀬！！局長に無礼なるぞ！」

土方さんが切羽詰まった厳しい顔であたしに怒鳴る。

斬るなら斬れ！

あたしは開き直りにも似た妙にすがすがしい気分だった。

怖くはない。

ただ、この真つ赤になって震えているこの男に一言言ってやりたい、  
そんな気分だった。

「先生が日本のために、武士道に殉じて闘っておられるように、女子も闘っています。」

「女子と武士が同じだと！！貴様は武士道をぐるぐるするつもりか！」

「男に嫁ぎ、支え、子供を産み育てることは、武士の志と同じくらい尊いことです。」

女も命がけで闘っているんです。先生だってお母さんが死ぬ思いで生んで育ててくれたからこそ、今ここに居るんです。それを武士道に劣っているなんて絶対言わせません！」

野次馬の中から小さな拍手が起きる。

「それでもまだ女の命がほしいと言っなら、」

あたしは脇差しをさやから抜いて

ポニーテールの根元に刃を当て、

躊躇なく引き切った。

髪は何の抵抗もなく切れ、パラパラと幾房も地面に舞い落ちた。

「つまりぬものではありませんが、この髪先生に差し上げます。」

髪束を芹沢の前に差し出し、挑むように笑ってから手をついて下を向く。

そして言った。

「無作法いたしました。」

不快だというのならこのまま私を手打ちにしてください。」

あたしは確信していた。

芹沢先生は絶対にあたしを斬らない。

この人はあたしが女だと知っている。

そしてあたしが本気でいつも行動してるのを知っている。

この人は無茶苦茶だけど、武士だ。

無礼なことは許さなくても、こっちからぶつかれば、絶対に斬らないだろう。

「ふん、水瀬、おまえの覚悟に免じて許す。」

そう言っつて芹沢は背を向けて人が道を開けるのを悠々と去って行った。

「「水瀬」」

「「まこと」」

みんなが走り寄ってくる。

みんな真っ青になって狼狽している。

「おまえ、なんてこと…！」

「髪切るなんて…なんだってそこまで…」

珍しくサノさんや永倉さんが動揺している。

総司は黙って羽織をあたしの頭からかけてくれた。

そのときあたしを甘い香りが包んだ。

「勘忍、勘忍な。」

雪乃さんだった。

雪乃さんは泣きながらあたしを抱きしめるととりあえずお茶屋さんの一室に案内してくれた。

「あなた女子やろ？何でなんなことしたん。」

雪乃さんは泣きながらあたしの髪にはさみを入れてざんばら髪を整えてくれている。

「何でつて、雪乃さんや吉乃ちゃんのきれいな髪を落としたくないと思っただけだよ。」

「あなたやつて女やろ？」

「うん、でもあたしは男として暮らしてるからあんまり髪とかそういうのは関係ないじゃん、でも雪乃さんたちにとつたら髪って武士で言う刀と同じくらい大切なものだから。」

それに：好きな人に女の命を切られるなんて思いさせたくなかったから。

あたし雪乃さんの優しいたおやかな美しさにすっごく憧れた。

でも芹沢先生に啖呵きつた凜とした美しさはもっと憧れた。

その美しさは誰かをいちずに思う女の誠だからこそそのものだと思うたから。

そんなことさせたくなかった。」

「阿呆」

そう言っただけ泣きながらあたしを抱きしめた。

雪乃さんからは優しく泣きたくなくなるくらいせつない甘い恋の香りがした。

## 第四章 3・ショートカットとえくぼ

島原での断髪騒動があつてから、あたしはこの界限で時の人となつた。

傍若無人の芹沢鴨に啖呵を切つて、髪をかつ切つた命知らず。

とまあこんなところだろう。

図らずもあの行動で、あたしが女だということが周りに知られてしまい、正直隊の幹部以外のみんなは動揺していた。ちなみに吉乃ちやんもかなり驚いていたようだけど、「まこと姐さんと呼ばせてください」と言つてくれて、あたしを笑わせた。

でもそれもほんの数日のことで、結局内心はどうあれ何事もなかつたように接してくれるようにはなつてきて、ホツとしている。

あたしは雪乃さんに髪をそろえてもらい、結局耳より少し長いくらいのショートボブにもらった。

ここまで短くしたのは中学生以来だけど、鏡を見た感じ、そんなに悪くないと思う。

ここに来て以来、ずつつつとポニーテールだったからちよつと髪型変えられてうれいいかも、なんて軽く考えていたのはあたしだけで未来では、あたりまえだけど女性の髪がたなんてそれこそ千差万別でベリーショートなんかもざらだから正直短くなつたところで、「イメチェン」としか思わなかつただけけど、

あたしが女だつて知つている浪士組の幹部のみんなは、女がここまで髪を切り落とすなんてゆゆしき事態、恥辱以外の何物でもない！と当の本人を置き去りにして芹沢先生に対して息まいていた。

「半年もたてば伸びますし、別にそんなに大騒ぎするほどのことじゃないですよ。」

とあんまりみんなが大げさに悔しがるもんだから軽く流すつもりで

言うと、

「おまえはなんでそんなに人ごとなんだ。」「女の命が絶たれたんだぞ。」「ふつうはここで泣いたりするもんだ」とか普段は冗談しか言わないみんなに真剣に言われてちよっとびっくりした。なんというか、150年っていう時間はやっぱりいるんなところで文化や価値観何かを激変させたんだなあ、と実感してしまふ。

ふと一陣の風が通り抜けた。

ああ、気持ちいい。

やっぱり短いと頭が軽い、楽だなあ。

あたしは短くなった髪に手をやった。

風が髪をなびかせ、耳の下を通って行く。

風が夏のおいを含んでいる。

若葉の色がだんだん濃くなり、雲の形がますますはつきりしてきた。

もう夏なんだ。

縁側で足をぶらぶらさせながら空を見上げてぼんやりしていると、

「気になるか？」

と低い声が後ろからした。

「え？」

あたしは体をひねってその人物を見ようとすのだけれど、

目が明るいとこに慣れすぎて、建物の中は真っ暗に見える。

目が慣れてくると、そこには土方さんがいて、あたしはその一分の隙もない整った立ち姿になんだか、ドキドキした。

「土方副長、気になるってなにがですか？」

「…だからおまえの…髪。」

「ああ、短いと風が通って楽だなあと思って触ってたんです。

半年もすれば結えるくらいには伸びると思いますし、特に気にして  
ないです。

むしろみんなに心配掛けて気を遣わせて申し訳ないですよ。」

「おまえ、何であの時、あんなことしたんだ？」

「何でって…よくわかりません。」

でも雪乃さんたちの髪と、ここで男装している私の髪どっちがっ  
つてなったら、あたしの髪切るほうが、後に禍根を残さなかなあと。

まあ、あの時にそんなこと考えたわけじゃないですけど。

ただ、雪乃さんや吉乃ちゃんにそんなことさせたくなかったん  
です。あたしは芹沢先生に言いたいことが言えてすっきりしたんで逆に  
すがしいです。」

雪乃さんは土方さんが好きだからそんなことさせたくなかった、  
って言いそうになって慌てて言葉を飲み込む。これは雪乃さんの大切  
な想いなんだからあたしが口にすべきことじゃない。

「おまえ、不思議な奴だな。」

土方さんは少し口の端を引き上げて笑った。

笑うと総司ほどではないけどかすかにえくぼが出来る。

今まで笑った土方さんをこんな近くで見たことなかったから知らな  
かった。

えくぼなんて土方さんには似合わない、

うつん、逆に土方さんらしいのかな。

それを見てたらなんだかくすぐつたい気分になった。

「不思議ですか？」

「あんな状況で、芹沢にあんなこと言えば、手打ちにされんのがお  
ちなのに、堂々と言い切つて髪までかつ切つてみせんだからよ、な  
かなかの度胸だつってんだよ。」

「芹沢先生は、あたしのことは斬らないだろうなって思いましたか  
ら。」

芹沢先生はすごいさみしがり屋なだけで、全力でぶつかって来る相手には道を譲る人なんじゃないかと思うんです。

あの人の傍若無人っぷりにみんな引いてるじゃないですか。

おびえて腫れものにも触るようなそんな感じだから、人との距離が縮まらないのにいら立って無体なこととしてよけいに孤独になる、そんな気がしたんです。

まあ、完全にあたしの勘なので、外れたら命はないんですけどね。」

「ホントに、なんつーか、たいした女だぜ。」

呆れたように笑う土方さんはいつもの眉間にしわを寄せた気難しい副長とは全然別人で、

あたしを落ち着かなくさせる。

土方さんの笑顔を見ていられなくて、視線を下にやると、土方さんの手が目に入った。

土方さんの手は美形の、整った顔立ちから考えると意外なほどごつごつした節くれだった手をしていた。働く大人の男の人の手なんだ、と思うと、ちよつとドキドキした。

副長のめつたに見せない小さなえくぼも、節くれだった武骨な手も、きつとこんな近くに話さなかつたら気付かなかつた。

ずっと見ていたような、でも見続けるはずかしいような、そんなくすぐったい気分にした。

あたしたちの間に初夏を思わせる爽やかな風が通り抜けた。



#### 第四章 4・梅の香

島原の一件からふた月あまり、あたしの髪は少し伸びて、だけどやっぱりまだ結いあげるには十分ではなかった。

もう季節は夏で、少し動いただけで汗ばむようなそんな季節になっていた。

買い出しの帰りに八木邸の前を通りかかるとききれいな女の人とすれ違った。

少しつり目気味で大きな瞳はキリリとして勝ち気な印象を与えらる。真っ赤な口紅をさした口元はぞくりとするほど艶やかで、深紅の大輪のバラみたいなのだと思った。

きれいなひと。

あたしはぺこりと会釈をするとその場を通りすぎようとしたのだけれど、すれ違いざまにその人に話しかけられた。

「あんた、芹沢先生に啖呵きってみせた子だろう？噂どおりバツサリいったんだねえ。」

その人はいじわるそうに、けれどさばさばして笑って言った。あたしの髪の短さは目立つから知ってもおかしくはないのだけれど、こんな風に話しかけられたのは初めてだ。

「っと、あなたのお名前は？」

「菱屋のお梅さ。芹沢先生とはちよいとした知り合いだね。」

何かを含んだような意地悪なくすくす笑いは悔しいくらい艶っぽくて、でもちよつと感じ悪い。

「菱屋のお梅さんが私に何かご用で？」

「そんなに警戒しなくてもって食やしないさ。それにしてもあん

た、先生の言つてた通りいい目してんね。あと2、3年すりゃいい女になるよ?」

さも面白いとでも言うようにそのセクシーな口元をにいつと歪めて不敵な笑みを浮かべた。

「芹沢先生があたしのことなんか、言つてたんですか?」

「自分に噛みついてくる小生意気なガキがいるってね、でもまっすぐで言葉に嘘がないって。」

「芹沢先生がそんな風に?」

あの人がそんな風にあたしのこと話すなんて意外だ。

「あんたと少し話がしたいんだけどいいかい?」

「お話ですか? あたしあんまり時間が無いんです。」

「小半時もとらせやしないさ、女同士ちよいと話したいだけさ。」

「…じゃあ…少しだけ。」

あんまり八木邸に近づくなつて言われてるけど女のひとだし、少しなら大丈夫だろう。

\*

お梅さんはあたしの手をひいて八木邸に連れて行つた。

お梅さんは六畳くらいの部屋にあたしを案内すると、お茶をもつてくると言つて部屋を後にした。

なんだか落ち着かず部屋をキョロキョロ見回していると、お梅さんがお茶をもつて部屋にもどってきた。湯飲みの載つたお盆を畳の上に置いたその瞬間だった。

急に体が反転したと思うと、呼吸ができなくなる。

お梅さんがあたしに馬乗りになつて首をもものすごい力で絞め上げたのだ。

！！

何？！

苦しいっ！

あたしはとつさのことに何がなんだかわからない。

ただその手をはなそうともがくのだけれど、女のひとは思えない力でぐいぐい締め上げてくる。

「バカだねえ、隙だらけの甘ちゃんだ、おだてられてのこのこ付いて来るなんて。

芹沢先生もこんな薄汚い小娘の何がそんなに良かったんだろうねえ。

「つく、んん！」

頭がガンガンいつて痛い。苦しくてだんだん視界がぼやけてくる。

「渡さないよ。芹沢先生は。」

知らない！

なんのことよ！

あたしは無我夢中で手足をばたつかせ、偶然つかんだお梅さんの帯を横に思い切り引いた。

ふいのことでこらえきれなかったのか、お梅さんはあたしから離れ畳の上に転がる。

「っほっほっほっ！！」

急に空気が気管に通ったもんだから涙目になりながら咳き込む。

あたしは喉を押さえながら、呼吸を整えお梅さんを睨み付ける。

相当あたしが暴れたからお梅さんの髪も乱れて、ほつれた髪が藍色に白の緋の柄が入った着物にかかっている。白い手には引っ掻き傷

がついていてかすかに血がにじんでいた。

お梅さんはさして動揺することもなく、むしろ開き直ったような尊大な態度で、ほつれた髪を撫で付けていた。

「何、すんのよ!!」

喉が締め付けられたせいで喋るとヒリヒリする。

「芹沢先生が惚れた女がどんな奴なのかと思ってね、そいつを殺してやったときのあの人を見たいと思ったのさ。」

「なにいつてんの?! 惚れたって意味わかんない!! 芹沢先生となんて何かあるわけないでしょ! むしろあげるって言われても要らない、変な勘繰りで首絞めるってどういう神経してんのよ!!」

「あの人は…あんたに惚れてるよ。」

さきほどの激情が嘘みたいに静かに、悲しくもない、ただ事実を言っているのだとも言うように妙に確信めいて言った。

「なにいつて…」

「あんたは普通の女じゃない、度胸も潔さもそこの男以上だ、でも何よりまっすぐで嘘がなくて全力であの人にぶつかっていけるから、あの人みたいな不器用な人は落ちるのさ。」

嘘がないなんて、あたしがここに居ること自体が嘘で塗り固められてるのに。

「…お梅さんは芹沢先生と、その、恋仲なの?」

「恋仲? そんなんじゃないさ、あたしは菱屋の…女房だからね、旦那を一番愛してるさ。」

あたしは…芹沢を憎んでるよ。」

お梅さんは静かに目を伏せてあきらめたように言った。

憎んでる?

嘘…

だつて渡さないって

あんな激しい独占欲好きでないとできないもの。

「渡さないなんて言つて殺そうとするくらいだから、あたしが芹沢さんを死ぬほど好きだと思つたかい？」

おかしそうに笑つお梅さんに凶星をつかれてあたしは素直に頷く。

「あんな青いね。あたしは世の中で芹沢先生を一番憎んでいるさ。ただそれでもあたしはあの人から離れられない。

そうしないと生きて行けないからね。だから渡したくないと思つたのさ。」

なんだかよくわからない。

「菱屋のご主人がいちばん好きなのに、芹沢先生のことでも好きなの？」

「…心がね、呼んでるのさ。」

「呼んでる？」

「あたしたちはね、欠けた心を埋めあつて生きてるから、憎くても離れられないのさ。」

「…うーん。なんか良くわかんないけど。」

でもお梅さんにとつても、芹沢先生にとつても、

お互いに切つても切り離せない存在なんだろうな。

まるで長恨歌のなかの、比翼と連理の約束みたいだ。

「まるで長恨歌みたい。」

「え？なんだい？」

「比翼の鳥と連理の枝だつてな。天にありては…つてやつ。

どちらもかたつぽだけじゃ生きていけないものたよだよ。」

「博学だねえ、あなたは。そんな御大層なものじゃあないさ。

あんたも恋をすりゃあ、きつとわかるようになるよ。きれいなばかりじゃない、むしろ裏切つたり駆け引きだつたり…生臭くて汚いことばかりさ。」

そうさねえ、旦那の一番はあたしじゃないけどあたしはそれでもいいと思ってる。でもそのせいで無理なきゃいけないことも多くてねえ、虚勢はってんのさ。でも芹沢先生は…あたしのすべてを受け入れてくれる。汚いところも弱いところも、だから離れられないのさ。どんなに憎くてもね。」

だれに言うでもなく、自分に言い聞かせるようにお梅さんは言った。

「あんたに頼みがある。」

「え？」

「本当のあの人を見てあげてほしい。」

「どういう意味？」

「あんたから見てあの人はどう見える？」

「傍若無人だし、暴力的だし無茶苦茶な人。」

でも不器用で孤独な人だと思う。

人と距離を縮めたいのに腫れものみたいに扱われて、見えない壁で固められて、そのやりきれなさを、暴力とかでしか表現できないでいるみたいに見える。」

お梅さんは目を伏せてほほ笑んだ。

「だから…あんたに落ちるんだ。あの人は。」

そうやってあんたはあの人のもろさを、真実を、見つめ続けてくれればいい。」

意地悪で妖艶で悔しいくらい美人で、でも悪女なんだと思ってた。

人のこと殺そうとするし、意味わかんないし、正直あんまり関わりたくない。

なのに今目の前にいるお梅さんは、どこまでも一途で、もろい少女のようで、

なぜかすごく泣きたくなった。

「それは、お梅さんがすることだよ。」

あたしがすることじゃない。

あたしは理解はできても一緒に分かち合うことはできないもの。」

「あたしじゃあ、一緒に堕ちてくことしかできないのさ。」

お梅さんの言うことは謎かけみたいで、わからないことだらけだ。

「あたしはあたしの信じる道に進むだけだよ。」

「それでいいさ。そのほんの端で、一瞬、芹沢という人間を見てくれればいい。」

「…うん。」

「あなたと話せてよかった。」

お梅さんの笑顔は晴れ晴れとしていて、なのにどこまでも儚げで消えてしまいそうだった。

#### 第四章 5・嵐の前の静けさ

お梅さんか…

不思議な人…。

あたしはあのあと屯所に戻って、夕ご飯のあとに縁側で今日のお梅さんを思い出してぼんやりしていた。

「まこと、なにぼんやりしてるの？」

「隣いいかな。」

部屋に帰る途中の総司と平助君が通りかかってあたしを挟んで隣に座った。

「あ、総司、平助君、どうぞ。」

ねえ、2人は菱屋のお梅さんって知ってる？」

「ああ、芹沢先生の妾でしょ。なんか雌狐みたいな感じの。」

「そのお梅さんがどうかしたの？」

平助君は少し辛口で、総司は興味がないらしく、そんな人もいたかなあくらいの感覚みたい。

二人は同じ年なのに与える印象は全然違うのがおかしい。

「今日会ってちょっと話したの。」

すっごい憎んでるのにも、こころがその人を求めているから離れられないなんてそんなことあると思う？」

「なんか難しい話だなあ、私にはよくわからないよ。」

「憎愛って言葉があるくらいだから、憎しみと愛おしい気持ちってどこか似てるってこともあるんじゃないかな？そんなことお梅さんが言ってたの？」

「うん、芹沢先生を憎んでるって。でも離れられないって。」

「ああ、それは芹沢先生とお梅さんの馴れ初めを考えたら当然じゃあないかな。」

もともとお梅さんは菱屋のお妾さんで、それを芹沢先生が無理やり



自分のお妾さんにしたんだから。」

平助君は苦笑しながら軽蔑したように言う。

「ええ?! そうなの?」

お梅さん女房だつて言つてたから、てつきり…」

「まあ、あの菱屋を盛りたてたのはお梅さんなわけで、女房としての働きをしているのは自分だつていう自負があるのさ。本妻を別宅に追いやつて隠居みたいにさせてるらしいけど。」

たぶん平助君は恋愛とかにも一途で一本気でまっすぐなんだろう。だから、お梅さんや芹沢先生の恋が許せないのかもしれない。

「お梅さん、菱屋のご主人がよっぽど好きなんだね。」

それまで黙っていた総司がぼつんとつぶやいた。

「え?」

「だつて周りは敵だらけなのに、その人がいるから、その人の役に立ちたいから、がんばつてるんでしょう? それつてすごく一途で私はすごいと思うけどなあ。」

「でも一方じゃあ、芹沢と浮気してるなんて、俺はちょっと理解できないな。」

「あたしは理解できるかも…」

「え?」

「総司が言うみたいにお梅さんが一番好きなのは菱屋のご主人なんだと思う。だから精一杯虚勢張つて頑張つてるけど、辛くてすがりたくなつた時にそばにいてくれるのはもしかしたら芹沢先生なのかもなつて。だから芹沢先生と憎くても離れられないんじゃないかな。」

「そんな恋つて、なんか辛いな。」

平助君はしみじみ言った。

「うん。」

「でも恋つてうまくいかないことだらけだし、辛いことのほうが多いと思うな。」

珍しく総司もしみじみ言った。

「総司が恋を語るなんてなんか意外なもん見た気がする。  
総司好きな子でもできた？」

平助君は大きな目を一瞬見開いて、そのあとはからかうように総司を覗き込んだ。

「さあ、どうでしょうね。秘密。」

はぐらかすようにくすくす笑いながら総司はごろんと縁側に寝転がった。

あたしたちはそれぞれ想いを馳せながら心地よい夏の夜風に吹かれて時を過ごした。

心地よい沈黙だったけれどそれが嵐の前の静けさだということをおたしたちは知らなかった。

## 第四章 6・大和屋焼き討ち

文久3年、8月12日

事態は何の前触れもなく起こる。

「大変だ！大和屋に火がつけられたぞ！」

「なに?!」

屯所の中があわただしい。みんなバタバタ走りまわっていて情報が錯綜している。

夕餉が終わってそろそろ寝る準備をと思っていたところで、突然あわただしくなったのだ。

「まことはここでおとなしくしててよね。」

総司は子供をあやすようにあたしに言うと足早に部屋を出て行った。

あたしはなんだか落ち着かず、部屋の中でぼんやり考えていた。

大和屋ってなんか聞いたことある気がする…

!

大和屋焼き討ちだ！

あたしは資料館で見た歴史表が頭に浮かんだ。

これが決定的な出来事になって、芹沢鴨は暗殺されるんだ。

そう、お梅さんと一緒に。

お梅さん…芹沢先生と一緒に死ぬんだ…

そう思ったらなんだかやりきれない…

あたしは唇をきつく噛み締めた。

あたしなんでものとき資料館なんて行ったんだろう。

あき兄の新撰組の話なんて聞いたんだろう。

歴史なんて知らなければ、あたしは全力で思った通りに走っていくことができたのに。

ダメだ、じつとしてられない！

あたしは袴を身に付け、芹沢先生からもらった脇差しを掴んで駆け出した。

夜の京は暗いけど、大和屋の場所はすぐにわかった。

炎が生き物みたいに高くあがっていて近づくに連れてその熱さを感じるほどだったから。

あたしは息を切らしてその炎を見上げた。

蒸し暑くて、汗で着物が湿っているのが気持ち悪い。

野次馬を押し分けると浅黄色のダンダラの羽織を着た芹沢先生が大和屋の屋根の上で高笑いをしていた。

全身総毛立つのを感じる。

何かに憑かれたように笑い続ける様はさながら鬼のようだけれど、先生は身体中で泣いているみたいにも見えた。

自分ではどうすることもできない激情の波にのまれ翻弄されている。そんな風に見えた。

「水瀬っ！」

呆然と大和屋を見上げるあたしは不意に腕を掴まれた。

「おめえ、なんでこんなとこにいんだ！あぶねえから帰れ！！」

いつになく切羽詰まった感じの土方さんがそこにいた。

いつもきれいになでつけてる鬚が少しほつれて汗で額に張り付いている。

目は血走っていて顔も紅潮している。

きつとこの火事場を奔走していたのだろう。

「芹沢先生が…」

「ダメだ、今あいつに近づけば本当に殺されるぞ。

ああなつた奴はもう止められねえ…！」

ちくしょう…、近藤さんがどれだけ尻拭いしてやってると思ってるんだ…！」

苦々しげにうめくように呟いた。

「火が廻る…！」

「だれか止める！早く、火が廻らないうちに建物を壊せ…！」

「ダメや！人が屋根に乗って動かへん！」

あたりには怒号が響き渡っている。

！

このまま芹沢先生は死ぬつもりなんだ！

ダメだ！お梅さんが…！」

あたしは回りに気をとられていた土方さんを振り切って走り出した。

「あ、水瀬！馬鹿、戻って来い…！」

土方さんの怒鳴り声が追ってくるけど、それどころじゃない。このままにしたら芹沢先生も死んで、火事が町中に広がる！

暑い…汗で髪が額に張りつくのが気持ち悪いけどそれどころじゃない。

あたしは流れてくる汗を手の甲で拭い、前髪を掻きあげた。

呼吸をするたび煤が喉に入り、ヒリヒリする。

大和屋の蔵はもうほとんど燃え落ちそうだ。

時間は幾ばくもない。

ふと野次馬の中にお梅さんの姿を見つけた。

「お梅さん!!」

お梅さんの大きな黒目がちの目に、蔵を燃やす炎が揺らめいて、その様子はこの世のものとは思われないほどの美しさを湛えていた。不意にお梅さんの瞳に映る炎が揺らぎ、まぶたを閉じた瞬間に涙の雫が零れ落ちた。

「お仕舞いだね…、あの人こんな馬鹿なことして…仕舞いだよ…。馬鹿だねえ、本当に馬鹿だ…!!」

お梅さんは手で顔を覆い、嗚咽した。

そんなお梅さんはどこまでも儚く、まるで夢から覚めた少女のように頼りなかった。

お梅さんは確かに菱屋のご主人が一番で、それを無理やり引き裂いた芹沢先生のことを憎んでいたのかもしれない。

でも同時に魂の片割れとして深く愛していたんだと思う。

「あたし、連れ戻して来ますから!!だから待っててください!!」  
あたしは走り出しながら声の限り叫んだ。  
火事の煤で声はガサガサにかすれている。

あたしは芹沢先生がいる母屋のはしごを野次馬の制止を振り切ってよじ登った。

芹沢先生は嘘のように頼りなげに立ち尽くしていた。  
いつもぎらぎらした野心に燃えているその目はうつろで何も見えない。

蔵を焼く紅蓮の炎は竜のようにうねって夜空を照らす。  
不謹慎きわまりないけれど、その様子はどこまでも神々しくて美しかった。

「芹沢先生、降りてください。じきにここも火が回ります。」

「ほおつておけ。このままでよい。」

「良くないです!!こんなこととして、街が火事になったらどうするんですか!先生も危ないんですよ!」

「うるさい!!わしに意見するのか!?斬るぞ!!」

芹沢先生はいつももっている鉄の扇子をあたしに向かってふりおろす。

あたしはとつさに右手で払い除けると、手ももげるくらい痛かった。ジンジンと痛みが増してくる。

眉をしかめて左手で、右手をかばう。

時間がない。

早く!!

あたしはふつつつと怒りがこみ上げてくるのを感じた。

「いい年してやっていいことと悪いことの区別もつかないんですか、あんたは!!」

いくらやりきれない不満や思いがあるからってこんなこととして言い分けないでしょう!!」

あたしは手の痛さに苛々も手伝い、怒鳴り付けた。

もうあとがどうなるうと知ったことか!

「こんなこととして、あなたは何のために新撰組に入ったんですか! ?こんなことするためじゃありません! !それにお梅さんは、先生がいないと、生きていけないんです! !」

「お梅は…菱屋の主人に命を賭しておる…。」

「…甘えんな!!辛いのは、苦しいのはあんただけじゃない! !テメエのケツくらい、テメエで拭け! !」

あたしは完全に頭に血が上り、芹沢先生を怒鳴り付ける。

何故だかわからないけれど、感情が高ぶって涙がぼろぼろ出てきた。

これは火事の煤だけではないのだろうと思う。  
この感情を言葉にするならば、やりきれなさ…だろうか。

お梅さんは菱屋のご主人が死ぬほど好きで、でも菱屋のご主人の一番はたぶんお梅さんじゃない。

お梅さんはお店の切り盛りと新撰組への盾に利用されて、でもそれすらもお梅さんは知ってて甘んじて受け入れている。  
好きだから。

そんなお梅さんが芹沢先生は好きで、でも芹沢先生は暴力や脅しみたいな方法でしか、自分の思いを表現できなくて…

だから大嫌いなのに、大好きなんだ。  
ううん、好きとは違うのかもしれない。

比翼の鳥みたいに、連理の枝みたいに、  
決して離れられない宿命なんだ。

お互いに欠けた心を埋めあっているから。

なんて不器用で、なんて苦い恋なんだろう。

「…わしにそんなこといつてただで済むと思うのか？」

芹沢先生は激昂するわけでもなくいたぶるでもなく、静かに言った。  
「刺し違えてでも必ず連れて帰ります。処断されるなら降りてから  
お願いします」

一分、二分…沈黙は永遠にも感じられる。

梯子の下では野次馬の声に交じって近藤先生や総司の声も聞こえる。

芹沢先生はいきなりふつりと糸が切れたように先生は吹き出すと大口一杯あけて笑い出した。



「ははははは、水瀬、お前ほど馬鹿な女もおるまい！！操のために自決しかけ、髪を失い、今度は共に死ぬ気か！！どれほど愚かなのだ！」

「死にません！あたしは生きます！！先生も生きます！！あたしは、あたしが死ぬときは：誰のためでもなく、自分で選んで、自分が望んで死ぬと、そう決めていきます。」

そして：今はその時ではない。」

「：ふん、なぜだろうな。お前のような生意気で無礼なガキ殺してしまいたいと思うのに、何故か逆らえん。おまえには負けてばかりだ。」

そう言った先生の目は火事の煤ばかりでなく潤んでいるのに気付き、あたしは見てはいけないものを見てしまったようなばつの悪い気分になり、とっさに目を逸らした。

「：降りるぞ！！水瀬！」

「はいっ」

芹沢先生は梯子から降りるのを待って、火消したちが蔵と母屋をすぐに取り壊した。

ギリギリのところまで延焼は免れたようだ。

とりあえず、良かった。

野次馬たちは徐々に散開していきその中に目をはらしたお梅さんの姿を見つけた。

お梅さんはあたしと目が合うと、一瞬目を見開き、そして妖艶な笑みを浮かべて口パクで「ありがとう」と言った。

そのあとはいつも通り皮肉っぽく口を歪めて笑う意地悪そうなお梅さんがいた。

「まこと！！！」

「水瀬ツ！！」

「うへ？」

あたしは怒りのオーラを感じて振り返ると鬼の形相をした土方さんと総司が仁王立ちで立っていた。

「おとなしくしてろっていつもいってんだろ！！！！」

「ごめんなさい……」

それからみつちり、しっかり二人にお説教をされたのは言うまでもない。

大和屋焼き討ちの夜はこうして更けていった。

#### 第四章 7・新たな一面

大和屋の焼き討ちから2日、徐々に平静を取り戻していた。そしてあたしは今、道場の拭き掃除をしている。

固く絞った雑巾で床を何往復もして、正直腕も脚もガタガタだ。ましてこの夏の暑さの中。

汗が伝って道場の床に落ちる。

「ふうっ」

あたしは雑巾を床に置き、休憩体勢に入った。

ああ、つかれた。

なぜこんなことをしているかと言えばそれは、大和屋の夜、勝手に屯所を抜け出した罰と、副長命令を無視して危険な行動をしたことへの罰なのだ。

あたしは当然ながら総司と土方さんにこっぴどく叱られ、土方さんからは平手打ちをもらい、罰として、道場の掃除をすることになった。

ただ、2人ともあたしをすごく心配してくれたのが伝わってきて、申し訳なかった。

2人にしたら、あたしが何でそこまで芹沢先生にぶつかっていくのか理解できないのだろう。

傍若無人で、気に入らなければ手打ちにされることも覚悟しなければならぬのになぜって感じなのだろう。

あたし自身にもよくわからない。

お梅さんに、”芹沢先生自身を見て”と言われたからなのか、でもそれだけじゃないと思う。

ただうまく言えないけど。

あの大和屋の夜を冷静に考えたとき、あたしはなんて軽はずみなことをしてしまったんだろうと思う。

歴史上の”大和屋焼き討ち”がどんなものとして伝わっているのかはあたしは詳しく知らない。

ただその事件が芹沢鴨暗殺の決定打になった、としか。

でも、未来の人間のあたしが、あの事件に介入したことは間違いのない事実で、

そのことがこの先未来にどんな風に影響を与えるんだろうか、と思うと、あたしは正直怖くてたまらない気分になる。

150年後の未来に伝わっている歴史では、大和屋焼き討ちのあとまで、芹沢鴨は生きていた。そのあといつかはわからないけど、試衛館派に暗殺されるんだ。

でもおとこの夜、芹沢先生はあのまま死ぬつもりだったと思う。

ただ、お梅さんが悲しむのを見たくなくて、あんな人でも芹沢先生が死んでほしくなくて、

あたしは止めた。

もしあたしがあのまま芹沢先生を止めなければ…どうなっていたんだろう？

歴史は…？

あたしは自分の知っている歴史に進めようとしているのだろうか。それが正しいと信じて？

これからこんなことが幾たびも訪れるだろう。

その時、あたしは、どう行動するのだろうか…。

そんなことを考えて暗くなっていると、道場の戸が静かに開いて斎藤さんが入ってきた。

あたしはそれを確認するとぺこりと頭を下げた。

「お疲れ様です。」

「…何してる？」

斎藤さんは一瞬間をおいてから問いかけた。

あたしはだいたい斎藤さんと話せるようになってきたと思う。

とはいえ、まだ、軽く挨拶するだけがほとんどなのだけれど。

「おととい、勝手に屯所を抜け出したので、罰を受けているんです。」

「…ああ、あなたは無茶をしすぎるからな、副長も沖田さんも気が気ではないのだろう。」

斎藤さんはおかしそうに言った。

「確かに心配をかけたことは反省してます。」

「あまり無茶をするな。」

と言っても無駄なのだろうな。」

いつもは仏頂面なのに、こんな時の斎藤さんは意外にも少年ぼくて、普段の老成した様子からは想像できない。

「…水瀬は、男の恰好をして、髪を切って生きること…その、ためらいはないのか。」

いくら身寄りがないとはいえ、ほかに生き方はいろいろあるだろう。なのに何故、そうまでしてここに居ようとするのだ？」

斎藤さんの疑問はもっともなのだろう。

「さあ、あたしにもなぜそこまでするのかよくわかりません。」

でもここはあたしの心の故郷なんだと思います。」

「心の故郷？」

「心が求めてやまないんです。ここで生きること。」

「おまえは…ときどきおかしなことを言う。」

俺たちの理解が遠く及ばないような不思議な理論を突いてきて、それに動かされてしまう。

おまえは何者なんだ。」

あたしは一瞬動揺が走る。

斎藤さんは鋭い。

あたしのこの時代にそぐわない行動や言動に不信感を抱いているのだろうか。

「わたしは…何者でもないです。  
水瀬真実というただ一人のちっぽけな人間にすぎません。」  
あたしがこの時代で持っているもの、それは新撰組についてのほんの少しの歴史と水瀬真実というこの名前だけだ。  
もつと詳しく歴史を知っていたら、  
逆に全く知らなければ、  
あたしはどんなふうに行動できたのだろうか。  
こんな風中途半端にしか知らないから、自分がこの先歴史に及ぼす影響におびえるのだろうか。  
これがタイムスリップしたものの宿命なのだろうか。

黙ってしまったあたしを怪訝そうに見つめ、斎藤さんはふとあたしから視線をそらしてつぶやいた。

「水瀬は…ちっぽけなんかじゃない。」

皆がおまえの勇氣ある行動に驚き突き動かされる。皆、おまえのことを認めている。

だから、胸を張ってここに居ればいい。」

斎藤さんがあたしを認めてくれたんだろうか。  
だとしたらうれしい。

「…ありがとうございます。」

斎藤さんは顔を赤らめると「別に」とつぶやいた。

「…それよりも…髪が伸びたな。」

「え？」

突然の話題の転換にびっくりする。

「いや…一時期の尼か子供のように短い頃よりは伸びたなと。」

「もうすぐ結えるくらいにはなるので、さすがに目立たなくなりませんね。」

「水瀬は…女髪は結わないのか。」

「結えないです。ここでは必要ないし。」

「そうか。」

斎藤さんは少し顔を赤くして照れてるのがなんだか可愛い。

「…今度…」

「え?」

「近々、長州勢力抑制のために御所の南門を会津藩の一隊として出兵することになってるんだが、それから帰ってきたら、一緒に買い物に付き合っしてほしい。」

「え?ええ。いいですよ。」

あたしは突然のお誘いにちょっと戸惑いながらもOKする。どうしたんだろ?斎藤さん。

「そうか。すまん。」

「出兵、気をつけてくださいね。」

「ああ。」

いつもより饒舌で、少し赤くなった斎藤さんは、いつもよりもずっと少年っぽく見えた。

一分の隙もないような斎藤さんよりもずっと親しみやすく、新たな一面を見つげられたことがうれしくて、悩んでいることから少し浮上することができた気がした。

#### 第四章 8・八月十八日の政変：斎藤一

ここ最近、京都では、久留米藩の真木和泉と長州藩士たちの倒幕運動が活発になっっている。

長州系の公卿らと孝明天皇の攘夷親征の詔を得ようと画策しているのだ。

攘夷親征の詔を得、攘夷を決行しない幕府の政策は天皇の詔に反しているという大義名分をえて、それを理由に幕府を一気に滅ぼしてしまおうという算段なのだろう。

そして8月13日、長州藩のでつち上げで決定された大和行幸。

大和行幸とは、大和国の神武天皇陵、及び春日大社で攘夷を祈願し、さらに攘夷親征の軍議を行い、伊勢神宮まで参宮するというものなのだが、孝明天皇は確かに攘夷思想ではあられるが、倒幕派という考えはお持ちではないはずであり、このような決定はあり得ぬ。

しかし、過激尊王攘夷派は、こんなとんでもない話でも都合のいいようにとらえているもので、天誅組などは京都五条の代官所を襲撃するなど暴挙ばかり起こしている。

全く頭の痛いことだ。

そこで会津藩や薩摩藩は、長州系尊王攘夷倒幕派を一掃、京都から追い出し、締め出そうという計画を画策した。攘夷親征に疑問を持ち、長州藩に政局を乗っ取られることを危惧した薩摩藩は、8月13日の夜、会津藩に接近し、まず双方、攘夷親征は偽勅であるに違いないと考えが一致。

さらに天皇の意志に反する偽勅を出してまで、天皇を味方につけようとする無礼な長州系の者たちを京都から排除してしまおうという考えで合意したのだ。攘夷親征が偽勅であることが分かり、長州藩を処断するため、18日未明、会津藩、薩摩藩、淀藩によって御所の全ての門を封鎖し、長州系の者が中に入れないようにすることを画策したのだ。



そして8月18日正午、俺たち壬生浪士組にもついに出兵の要請が来たわけだが、全くいつまで待たせるのだ。甲冑はただでさえ重いのに、この暑さだ。まったく会津藩も頭が固い。

俺はふと嘆息して

数日前、水瀬と話したことを思い出した。

水瀬は珍しく揺らいでいた。

「自分は何者でもない」そう目を伏せて言った水瀬はどこまでも儚く悲しげだった。

水瀬とはいったい何者なのだろう。

おおよそただの女とも思えぬ。

浪士組の無法者、芹沢鴨に真つ向から立ち向かい、あの非道ぶりにもひるまず正面からぶつかっていく強靱さ、島原の妓をかばい女の命ともいえる髪を一分のためらいもなく切り捨てる潔さ、それはさながら武士のようだ。

192

俺にもよくはわからぬ。

だが水瀬が何者でも良いような気がしている。

たぶん俺は水瀬を好いているのだ。

女子として愛おしいと思っているのだ。

水瀬には笑っていてほしい。

だから珍しく物思いに沈んでいる水瀬をとっさに買い物などに誘ってしまったのだろう。

どんな状況でも己を保つ自信はあった。

なのに水瀬が絡んだ途端このざまだ。

恋が見せるこの揺らぎはまさに愚の骨頂。

我ながら未熟なこの精神に腹が立つのを通り過ぎて俺はそんな自分に苦笑した。

「どうしたんです？斎藤さん」

同じように甲冑を身につけ流れ出る汗を手の甲で拭いた沖田さんが怪訝そうにこちらを見た。

「いや、何でもない。」

少し思い出し笑いをしただけだ。」

「珍しいですね、斎藤さんが笑うなんて。」

沖田さんはからかうように言ったので、俺は眉を寄せた。

無言の俺を怒りととったのか弁解するように沖田さんは言葉を継いだ。

「いえいえ、からかったわけではないのですよ。」

ただ、斎藤さんは誰も寄せ付けないような雰囲気の高孤高の存在だから、同じ年なんだしちよつと嬉しかったんです。」

沖田総司と言う男は全くつかみどころがない。

普段は能天気なくらいふわふわしたクラゲのような男で、だが刀をもった瞬間刃え刃えとした月のように冷たく豹変する。時折恐ろしく残忍になることもあるし、どちらがこの男の本質なのだろうか。ただ水瀬とじやれたり、稽古をしているときの沖田さんはこの上なく穏やかで、幸せそうで、水瀬のことをただ一人のかけがえのない人間として思っているであろうことは紛れもない事実として感じられた。

おそらく沖田さんも水瀬のことを好んでいるのだろう。

「俺もまだまだ未熟だ。」

「斎藤さんがそんなことを言うなんて明日は槍が降りそうですね。」

何があつたんです？」

「：水瀬のことを考えていたのだ。」

水瀬の名前に反応したのか、沖田さんは一瞬目を見開いた。

「あの、おおよそ普通の女では持ち得ないような武士のような度胸や強靱さ、潔さは何なのだろうと。俺たちの常識とは根本的に違う次元に生きているようなそんな気がするのだ。」

だから、皆惹かれるのかと考えていたのだ。」

「…斎藤さんは…」

「…特別に思っている。」

好いているとは言えなかった。

「沖田さんもだろう?」

「…ええ。」

視線をやると、沖田さんはふと花が咲いたように小さく笑った。

\*

なかなか門の中に入れない。

「われらは京都守護職預壬生浪士組である。門をあけられたし。」

近藤局長が声をあげるが会津藩士は全く耳を貸そうとしない。

「素性の知れぬ浪人どもを通すわけには行かぬ。去れ。」

「なんだと?!」

「無礼な!!」

「ふざけるなよ!」

もともと血の気の多い浪士組の面々であり、まさに一触即発という状況になったその時。

空気を震わすような声が後ろのほうから響いてきた。

「我慢ならん!何故おぬしらは報国忠信のために働くわれらにこのような無礼をいたすのか!

ここを通せ!」

芹沢が雄々しく会津藩士が固める門扉に詰め寄り、槍でけん制してくる藩士に例の鉄扇子を振りかざし一括した。

会津藩士たちはみなその堂々とした物言いにひるみ、一瞬水を打ったようにその場が静まり返った。

どんなに傍若無人な男でもこの堂々たるたたずまいと潔さにこのと

きばかりは皆感嘆した。

これが芹沢鴨という男なのだろう。

俺たちはその後無事門を固め役目を果たすと、会津藩から解散の指示を承り屯所へと戻った。

この働きが認められ、壬生浪士組に会津藩から新撰組という新たな名を拝命したのである。

#### 第四章 8・八月十八日の政変：斎藤一（後書き）

8月18日の政変については「偏差値50からの【新撰組年表】」様を参考にさせていただきました。

## 第四章 9・恋のち自覚

八月一八日の政変での働きが認められ、それから数日後、壬生浪士組はついに「新撰組」の名前を会津藩から拝命した。

近藤先生がそのことを隊士たちに伝えたとき、

あたしは鳥肌がたつのを感じた。

ついに「新撰組」になったんだ。

これからどんなふう to 歴史は進んで行くんだっけ？

池田屋事件はいつ起こるんだらう？

芹沢鴨はいつ暗殺されるんだらう？

総司はいつ結核になるんだらう？

あたしは中途半端にしか歴史を知らない。

その時、あたしはどんなふう to 行動できるだらう？

ともあれ、そんなわけで今日はその祝賀会として、宴会になったわけなのだけど、みんなは程々 to 言葉を知らないのかな？

あたしはそんなに弱いほうじゃない to 思ってたけど、みんなの飲みっぷりは正直ハンパない。

水かっ to くらいぐびぐびいくんだから。

あたしはサノさんや、平助君と飲み比べをしてしまい、

2人はただ今撃沈中。

サノさんは腹踊りの体勢のままつぶれてしまった。

なんでも昔切腹しかけた傷がおなかにあっ to 「俺の体は金物の味を知ってるんだぜ！」 to 自慢げに腹踊りを披露してあたしを笑いで悶絶させた。

平助君は何でも、好きな子がきたらしく告白するべきかと悩んでいることをあたしに相談してきた。

どんな子が聞いても恥ずかしがって言わないものだからあたしは得意技の地獄攻めをしかけてようやく聞き出した。

どうやらその子は「お春」という町方の娘さんらしい。うまくいくといいな。

あたしはほのぼのした気分で聞いていた。

ああ、さすがに飲みすぎた…

頭がぐらぐらする。

顔も熱いし…

ふと席を立って周りを見渡すと、

あちこちで死人は出てる。

でも、総司や永倉さん、斎藤さんなんかは顔色一つ変えずにまったりとした雰囲気飲んでる。

日本酒って飲みやすいから…

うーん、暑い…

とにかく風に当たって酔いを覚まそう。

あたしは宴会部屋を這うようにでると柱に頭をくっつけて大きく息を吐いた。

夜風が火照った身体にはきもちいい。

！

ふと横を見ると土方さんも柱にもたれて同じようなかっこうを眠っていた。

顔がかすかに紅潮していて、閉じた瞼を縁取る睫毛は男の人とは思えないくらい長い。

着流しと言う浴衣みたいな着物の首元が少しはだけていて浅い呼吸に合わせて鎖骨が見え隠れする。

うわ、色っばい…

男の人なのにきれいな顔。

決して女性っばいってわけじゃないけど土方さんの寝顔はどこまでも優しく、仏頂面して鬼副長と呼ばれているときは別人みたい。

夏とはいえ酔っ払ってこんなところで寝たら風邪をひくと思い、あたしは土方さんの肩を叩い

た。着物の上からでも土方さんの肩には筋肉がついていることが分かり、あたしはお酒のせいばかりでなく、赤くなった。

「こんなところで寝ちゃダメですよ。」

あたしは何でもないのでように装って肩を掴んで揺さぶる。

「うーん」

土方さんはうるさそうに唸り、あたしに背中を向ける。あたしは先程よりも少し力強く揺さぶってみる。

と、その時

土方さんがあたしの手を引っ張って床に押し倒した。

「土方さん、ひじ、きゅっ」

ど、

どわっつ何何何!?

こんなきれいな顔犯罪!!!

ああ、やばい、鼻血でそう!

あたしの心拍数はMAXまで上昇する。



さらに、土方さんの整った顔が間近に来た、  
と思った瞬間、  
あたしの唇は土方さんのそれで覆われていた。

！！！！！

キスされてる？！

マジかよ！

ヤバいつ！！

土方さんは舌はあたしの唇を侵食してきて、あたしはこらえきれずに口を開いた。

「ん……」

それは容赦なくあたしの歯や、唇の裏にその痕跡を残し、あたしの頭の芯まで甘く痺れさせた。

それは優しく、甘くて泣きたくなるくらいあたしを幸せにさせた。

どうしよう……

あたし……

嫌じゃない。

キスなんてそんなに経験あるわけじゃないのに、なのに嫌じゃない。

あたしは今……

死ぬほど幸せだもの……

永遠みたいに感じられたその時間は終わった。

ふと唇が離れ、あたしは急に現実に戻された。

土方さんはうっすらと目を開いた。

おきてた!?

あたしは途端に恥ずかしくなって動揺した。  
顔に血が上って行くのを感じた。

とその時

「…こと」

あたし?

そう言っただんごつごつした腕であたしを抱き締めた。

「お琴…」

!

胸に鈍痛が走る。

なんだ、そういうことか。

あたしが誰かわかってしてることじゃないんだ。  
当たり前じゃん。

お琴という人と間違えているだけなんだ。

なんか馬鹿みたい。

舞い上がっちゃって。

あたしは少し力を込めて土方さんの腕をもぎ離した。

「…あ?…水瀬…?」

土方さんが今度は覚醒して目の前の状況を確認しようとはんやりしていた。

「土方さん、お酒飲んで寝ちゃったんですよ？」

声が震えるのをどうにか押し殺して振り絞るように言った。

あたし、自分でもびっくりするくらい落胆している。

「…ああ、そうか…。」

…水瀬、なんかあったのか？」

「いいえ、別に…何もありませんよ。」

泣くな！

笑え！

あたしは無理やり口の端を引き上げた。

「じゃあ、きちんとお部屋で寝てくださいね

それじゃっ！」

あたしはそれ以上平静を装っていられなくてその場を逃げるように立ち去った。

あたしは廊下を速足で歩きながら道場へ向かった。

今ならきつと誰もいない。

視界が揺らいで涙で前が見えなくなる。

あたしは唇をかみしめて声が漏れないように右手で口を覆った。

馬鹿じゃん、あたし。

一人で馬鹿みたいに舞い上がっちゃって…

なんでこんなに動揺してんの？

なんでこんなに辛いのか？

土方さんがもてるっていうのはわかってた。

苦み走った大人の男の人で、雪乃さんだけじゃなくて、ほかにもたくさんの女の人がモーシヨンかけてるんだらうなって。

でもどんな女の人から手紙が来ても、どこ吹く風でそっけなくて、だから安心してたんだ。  
土方さんから女の人の名前なんか出てくることなかったのに…  
でもいざ、土方さんの口からあんなに優しく、愛おしそうに女の人の名前を呼ぶのを聞いたら、  
あたしの胸が悲鳴を上げた。  
見たこともないその女の人に嫉妬してる。

あたしは…  
土方さんが…

…好きなんだ。

ばかみたい。

こんなときになって気付くなんて。

いつから？

縁側で優しい笑顔を見たときから？

芹沢先生に迫られたときに心配して駆け付けて抱きしめてくれたときから？

うっん、出会ったときから…

否、もしかしたら、

現代の八木邸で、

パンフレットに載っていた土方さんの名前と写真を見つけた

あの瞬間から

あたしは土方さんのことを好きになっていたのかもしれない。

そんな錯覚さえ覚えた。

もう、気付いたと同時に既に失恋じゃん。

それ以前にもともとあたしたちの間には150年っていう時間の壁があるんだから。  
失恋も何もない。  
かなうはずもないんだから。

大丈夫。

明日になればあたしはきつと笑える。

だから…今日だけ…今だけでいい

泣かせてください。

神様。

あたしは月明かりの埃っぽい道場で  
嗚咽が漏れないように口を手で押さえ  
泣き続けた。

第四章 10・嫉妬、見えない心：沖田総司

まことがなかなか帰ってこない。

先ほど、飲みすぎたのか涼みに行ったまま宴会部屋から消えたまま戻ってこないのだ。

もう部屋に戻ったのだろうか。

そろそろ宴会もお開きなのだろう。

雑魚寝をしている人以外はほとんど部屋に戻っている。

起きている人は私のほかには永倉さんと、斎藤さんだけだ。

斎藤さんは一人ぼんやりと月を見ながらちびちび杯を傾けていた。

わたしは様子を見に行こうと席を立った。

廊下にてで先に進むと…

私は自分の行動を…

死ぬほど後悔した。

そこには土方さんとまことが口づけを交わしている所だった。

まことは土方さんの腕の中で、羽織をつかんで幸せそうにその口づけにこたえていた。

！

私は一瞬瞠目した。

胸に鈍痛がじわじわと広がっていく。

なんだ？

これ  
二人が？  
いつの間に？

私は背を向けて走り去った。

見たくなかった。

こんな光景は。

ただ苦しくて…

苦しくて…

痛かった。

\*

眠れない。

私とまことは相部屋なのだけれど、まだ帰ってきた様子は無い。

まさか土方さんの部屋に居たりするのだろうか？

土方さんか…。

確かに土方さんは役者張りのあの見目だし女子に絶大な人気がある。

島原や祇園からの女の人からの文も絶えないし…

まあ、本人も女子が好きであることに違いないのだけど、どんなに女子と関係を持ってても、女子に惚れるとかそういつたことは、長い付き合いの中で、たった一人を除いてはいなかったように思う。

お琴さん

土方さんの許婚で、親の決めた仲ではあったらしいけど、

はたから見る限り、二人は確かに心を通わせていたと思う。

二人はすごく幸せそうで、何より土方さんのあんなに優しい眼差し

は見たことがなかったから。

当時の私は恋なんて生きる上で何の役にも立たないと思っていたから正直そんな土方さんが理解できない時もあったのだけれど。

二人の間にどんないきさつがあつて離ればなれになつたのかは詳しくは知らない。

ただ、決して憎くて別れたのではないと思う。

でも思うに、きっと土方さんは上洛で武士になるのに際して、自分の弱みになりうるもの、愛とか家族とか、優しさとか、そういったものを封印するために、お琴さんをあきらめたんだと今になってはそんな気がする。

見た目とは裏腹に自分にも人にも厳しくて、誰よりも自分の感情を殺して、冷徹になれる人だけど、本当は誰よりも照れ屋で優しい人なのだ。土方さんと言う人は。

それが分かるから、土方さんには人がついてくるし、私自身も一生ついて行く覚悟もあるし、誰よりも幸せになつてほしいと思つている。

だからまことといういささか不思議なことが多いとは言え、凜とした芯の強い女子が土方さんのそばにいることは祝福すべきことなのだ。

そのはずなのに…

いざまことが土方さんと恋仲なのだと思うと、ドロドロとしたどす黒いものが心の中に渦巻くのを感じる。

まことが幸せで居てくれるのなら、いいと思つていた。

でもそれは自分が一番まことに近いところにいるとどこかで思つて高をくくつていたのではないだろうか。

斎藤さんがまことに惚れていることを知つた時、小さな波紋が心に現れた。

そして今、土方さんとまことが、と思うとそれは確かな波となつて心に押し寄せてくる。

これが嫉妬というものなのか。



私は嫉妬している。

土方さんに。

斎藤さんに。

まことの目に映るものに。

まるで狂気だ。

なんで恋なんかしたんだ、私は。

こんなことで自分を見失い、一生ついていく覚悟を決めた人をあまつさえ憎いと思うなんて。

なんて未熟なんだ。

己は。

これが恋の狂気なのか。

私はきつく布団を引きかぶっているのだけど、耳鳴りがしてなかなか眠れない。

シュッ

どれくらい時間がたったのか…

障子が開く音がして目が覚めた。

ガサガサとついたての向こうで物音がする。

まこと、帰ってきたんだ。

「まこと?」

小さく声をかけると息をのむ気配が伝わってくる。

「!

総司、起しちゃった？」

「ううん、起きてた。」

あからさまに動揺している声色。

そんな様子に心がささくれ立つのを感じる。

「こんな時間まで、どこにいたの？」

「飲み過ぎたから酔いを覚まそうと思っただけだよ。」

「一人で？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「土方さんと一緒だったんじゃないの？」

「…なんで副長？」

いらいらして、嫉妬して、醜い自分にいら立つ。

まことにこんなこと言う権利はないのに。

「…見たから。」

「…何を？」

まことの声が震えている。

そんなに動揺するなら、何であんなところで…。

「あんなところで、やめときなよ。」

ほかの隊士が見たら大変なところだったよ。」

「…。」

「…ねえ、まことは土方さんが好きなの？」

「…!!」

息をのむ気配。

それだけで肯定したと伝わる。

「今、私たちは新撰組を拝命して…隊士も増え、これからが…大切な時なんだ。」

そんなときに、幹部と隊士が恋仲だなんて知ったら…基盤が揺らぐ。だから…やめてほしい。」

ひきょう者!!

この言葉にわずかでも私心がないかと言われればそれは否だ。

これで二人の仲が違えてしまえばいいと思っっている自分がどこかに

いた。

こんな風に正論よろしく言って壊そうとするなんて！

私はなんて…！！

私は自分を殺したくなった。

「…ぶ…」

「え？」

「だいじょうぶ、総司が気にしてるようなことは何も無いから…だから…心配かけてごめん…」

泣いていると思ってた。

声は意外にも小さいけれど落ち着いていて…

なぜか心配になった。

「まこと、ごめん。今は私心だ。まことにも土方さんにも幸せになつてほしいと思ってるよ。でも私はまことのこと…」「総司」「私の言葉を静かに、少しおかしそうにさえぎった。

「あたしは…ここで誰かを好きになることはないから。安心して。」

やっぱり総司が言うみたいにあたしがここに居られるのはそういうことだと思つから。

あたしは誰も…好きにはならない。

そもそも、総司が見たのは…土方さんが寝ぼけた結果だし

…土方さんは…何も…覚えてないから。

だから総司も忘れて。

嫌な思いさせたならごめん…。」

まこと、今どんな顔してるの？

まことはゆっくりかみしめるように言った。

本当に？

寝ぼけただけ？

だったら何で…そんなに悲しそうなの？

まこと、笑つて…

お願い。

「まこと…?」

「…。」

ついたての向こうからは息を殺しているような雰囲気伝わってきたけれど返事は帰ってこない。

「ごめん、変なこと聞いて。お休み。」

まことはきつとすべてを殺してここで生きようとしている。

だから、自分も何でもない振りをしなければ。

わたしは布団を引きかぶったけれど、己のふがいなさや罪悪感でなかなか寝付かれなかった。

空はうつすらと白み始めている。

#### 第四章 11・露見、見果てぬ夢

一夜明け、あたしはいつも通り、朝食の準備と朝稽古を済ませた。何も変わらないけど、でも決定的に違う。

総司もいつもと変わらなかつたけれど、きっとあたしたちはこのままではいられないのだろう。

いくらあたしに恋愛経験が乏しいって言っても、

昨日の総司の様子を見れば、総司があたしのことをたぶん好きでいてくれることはなんとなく予想できた。痛いくらいに想ってくれていることは伝わってきていて…でもあたしはその想いにはきつとこたえられないと思う。

あたしと新撰組のみんなの間には150年という時の壁が、歴史の壁が立ちはだかっている。

初めから、わかっていたことだ。

だから悲しくなる必要なんてない。

あたしはここにタイムスリップした時、決めたんだけ。

歴史を変えないと。

きつと現代に戻って、家族のもとへ帰るんだと。

だから誰のことも好きにならない。

昨日の土方さんのことは事故だと思って忘れることにする。

だって土方さん自身も絶対に覚えていないんだから。

非番で屯所の近くをぶらぶら散歩していると不意に一陣の風が通り過ぎた。

風が秋めいてきた。

雲の形がどんどんはつきりしてきて、空が高くなっていく。

天高く馬肥ゆる秋。

昔の人はうまいこと言ったもんだなあ。

「水瀬ではないか。」

ふと声をかけられて振り返るとそこには芹沢先生がいた。

「芹沢先生、おはようございます。」

芹沢先生は珍しく酔った雰囲気を感じられない。

お酒の入らない芹沢先生は感じのよい人で、その変わりようには驚いてしまう。

「ぼんやりしておるといつ斬られてもおかしくないぞ。」

くすくすと笑いながら意地悪そうに言った。

「水瀬、たまには一緒に飯でも食わんか？」

「浮気ですか？お梅さんに叱られますよ？」

あたしは酔っていない芹沢先生がなんだかおかしくてからかってしまった。

「お主さえその気ならば、応じてやつてもよいぞ？」

「ふふ、遠慮しておきます。お梅さんと恋敵にはなりたくないですから。」

「まあ、あがれ。お梅も水瀬に会いたがっておる。」

「ではお言葉に甘えまして。」

八木邸に上がらせてもらうと、お梅さんが出てきてあたしたちは三人で一緒に昼食を食べた。

こんな穏やかな時を芹沢先生とお梅さんと過ごせるとは思わなかった。

二人の間には穏やかで、それだけで完結しているようなやさしい空気が流れていて、なぜか泣きたくなるくらい幸せな光景だった。

「：時にお梅、少し席をはずせ。」

「はい、先生。」

ふと芹沢先生は静かに言っつて、お梅さんは異を唱えることもなくふすまを開けて出て言った。

「水瀬、わしはおぬしに聞きたいことがあって今日ここへ呼んだ。」

「なんでしようか？」

あたしは少し緊張し警戒した。

「おぬしの正体についてだ。」

「…何のことですか？」

あたしは心臓が跳ね上がるのを感じた。

この人は何を知ってる？

「お主の正体はなんなのだ？」

身寄りのない江戸の医者娘…ではないであろう？

会津藩の送りこんだ密偵か？新撰組の何を知っておる？」

芹沢先生の口調は静かだったが、眼光は鋭く、決して言い逃れできない雰囲気だった。

なぜ急にこんなこと言いだしたんだろう。

「急に何のことかわかりませんが。」

下手に突っ込んだら墓穴だ。

とにかくどこまで芹沢先生は知っているのだろうか？

「ふん、先だつての大和屋で、おぬしわしに”こんなことのために新撰組に入ったのではないでしょう”と言ったであろう。」

「…そう言っただかもしれません。」

なにぶん血が上っていましたので記憶が定かではないですが。」

「そこだ。われらが新撰組の名をたまわったのは禁門の警護での働きを会津藩がかったことがあつてのこと。大和屋の時点で、新撰組の名前は表立っては、世にあるはずがないであろう。おぬしが会津の幹部と懇意なのか、もしくは先の世が読めるのか？」

芹沢先生は静かに、けれど面白がるように言った。

「…！」

しまった！

あの時は完全に頭に血が上ってしまっていてすっかり口走ったんだ。

あたしは自分のつかつさに齒ぎしりしたい気分だった。

どうこたえる？

下手な言い訳は通用しない。

本当のことを言うしかないのか。

「おぬしは嘘をつくのが下手じゃな。」

ここで生きていくならば、心にどんな澱を持っていても笑って人を斬り、笑って裏切ることができくらいでなければ務まらないぞ。」

…。

今から話すことは信じられないようなことですが、それでもいいですか。」

「信じるか信じないかは話を聞いてからだ。」

それが嘘でもよい。わしを信じさせて見せる。」

「私は…この時代の人間ではないんです。」

今から150年ほど先の、未来から来た人間なんです。

こんなことを言えば怪しいと斬られるか、拷問されて死ぬのがおちだと思い、そのことだけは死んでも隠そうと思っていました。だから素性を偽りました。」

1分、2分…

沈黙が重い。

不意に芹沢先生は不敵な笑みを浮かべた。

「ふん…時渡りしたと申すか。」

まあ、とても信じられるものではないなあ。

しかしおまえはおおよそ女子の常識から外れたような度胸を持っているし、妙に浮世離れたような不思議な考え方をするしな。

まあ、面白いではないか。

だが、新撰組はこの先どうなる？

未来から来たのならわかるであろう？」

「…詳しくは知らないんです。ただ、新撰組の名前と、歴史に残る大きな事件位はなんとなくわかりますけど…。」

「まあ、よい。」

しかし、これだけ答える。

新撰組は未来にはどう伝わっておる？

野蛮な人斬り集団か？」



「そんな…！！新撰組は私の時代でも、憧れてる人が多いです。」

誠の武士だと。日本人の美意識を具現化したみたいだ。日本のことを真剣に思っ、志のために生き抜いたそんな人たちだという認識だと思えます。」

「そうか…。」

そう言った芹沢先生はどこまでも穏やかで染みいるような笑顔を見せた。

「おまえの時代は平和か？」

「はい。いろんな問題とかはありますが、とても平和だと思います。」

それは、今こうして新撰組のみんなが、日本の未来のために必死で闘っていてくれるからです。」

「おぬしの話がたとえ作り話でも、先に来る世がそんなものであったらよいと思う。」

先の世が新撰組を誠の武士と言ってくれる、そんな夢をみられるのなら、わしも喜んで死んでいける。」

「芹沢先生、死ぬなんて！」

「まだ死なんわ。阿呆。」

ただ、おまえの話を聞いて、そういう夢のためなら死ぬのも悪くないと思つたまで。」

「やめてください！縁起でもない。」

「ふん、話は終わりだ。水瀬、帰れ。」

「はい。あ…とお食事ごちそうさまでした。」

「水瀬、おまえの言うことが嘘でも真でもどちらでもよい。」

ただ、今、ここに、こうして生きている。それだけは紛れもない真実だからな。

それだけで十分だ。

おまえはおまえで、誠を貫き、思いのままに走っていけばよい。」

「…はい。ありがとうございます。」

あたしは風の冷たくなった夕方ごろ

八木邸を後にした。

あたしは知らなかった。

これが芹沢鴨の遺言になるうとは。

今思えば、このとき芹沢先生は知っていたのかも知れない。

自分が死ぬ運命にあることを。

#### 第四章 12・芹沢鴨暗殺：土方歳三

雨が降っている。

絹糸のような雨が、音もなくただ闇に溶けるように、永遠にも似た静寂の中、降りしきっていた。

ふと震えが全身を走る。

これは武者震いなのだと己に言い聞かせた。

ついにやるのか…。

芹沢鴨を暗殺する。

つい先日、近藤と自分が呼ばれ、会津の肥後守様から密命を受けた時には、ついに来るべくして来た、そんな風にも思ったが、曲がりなりにも筆頭局長として立ってきた者を暗殺することに一抹の後ろめたさを感じているじぶんがいた。

今更何言ってやがる。

新見を切腹に追い込み、これから芹沢を殺すのに、正義感ぶってんじゃねえ。

迷うな！

迷えばこれは失敗する。

すなわち死だ。

むろん暗殺要員として選んだ総司、山南さん、サノ、源さんも。

皆を引き込むのだ。

俺が動揺してどうする！

鬼になれ！

これは踏み絵だ。

会津の御偉方が自分たちを幕臣としてふさわしいのか、百姓が武士

になれるのか

、それを試そうとして踏み絵を踏ませようとしているのだ。  
やってやるうじゃねえか。

上等だ！

踏んでやらあ。

武士になる

この雲をつかむような、虹に届くような途方もない夢のため、  
俺と勝ちゃんは血反吐を吐く思いでここまで来たのだ。

あと一步、あと一步でかなうかもしれない夢

そのためなら、鬼にでも修羅にでもなつてやる。

ここより先は修羅の道。

進めば二度とは戻れぬ。

新見を切腹させ、芹沢を殺す。

行ってやるうじゃねえか。

おもしれえ。

甘さや優しさなんざ犬にくれちまえ！！

\*

文久3年9月18日

昨日から降り続けている雨は今日未明になってさらに強まった。

島原・角屋

「珍しいのう。土方が酒席におるとは。」

「先日の新撰組の拜命は芹沢先生の働きあつてのこと。」

その祝いの席に同席させていただけるとは恐縮にござる。」

「何とも殊勝な態度じゃ。この雨が明日には雪に変わる。」  
どっと笑いが生まれ、少し安堵する。

俺はいつもどおりにふるまえているか？

俺は口に笑みを張り付けたまま杯を傾ける。

苦さと甘さの混じった独特の酒の味に内心舌打ちをしながらそれを流し込む。

意外に思われることが多いが、俺は酒が苦手だ。

普段からほとんど飲まないし、飲めねえ。

だが、あの日、前川邸で行われた祝賀会では柄にもなく杯を重ねてしまい、廊下で酔いを覚まそうとして眠ってしまった。

水瀬に起こされるまで、全く気付かなかったが、まったくさまあねえな。

あの時、俺は夢を見ていた。

まだ俺が多摩の田舎にいたときの許婚でお琴と言う、きりりとした涼しげな器量よしの女の夢だ。

上洛するときに別れてきたが、あいつは穏やかでこちらまで柔らかな気分にさせる女だった。

この血のにおいに満ちた京や武士の道をあいつに見せるのは耐えられねえ。

武士になる、この果てしない夢をかなえるための険しい道にお琴という女を巻き込みたくなかった。

そしてまた、この修羅の道に甘さや柔さを持ち込むわけには行かなかった。

きつと土壇場で俺は弱くなってしまっただろう。

だからお琴と共に在ることはできねえ、そう思った。

お琴は沁みいるようなほほ笑みをたたえ「夢をかなえられるのですね。どうぞご無事で。」そう言って俺を送りだした。

ただ、風のうわさにあいつは江戸の商家に嫁いだことがしばらくたって知れた。

胸にかすかな寂寥感がよぎるものの、お琴はきつと嫁ぎ先で幸せに暮らしているだろう、そう思うと俺も幸せな気分になれる。あれは恋か。

そう人に聞かれれば俺は「そんなんじゃない。親同士の決めた許婚だ」と全力で否定するだろう。

けれどあの穏やかで、どこまでも柔らかな気持ちは照れくさくはあ  
るものの、不快ではなくて、あの気持ちは人は恋と呼ぶのやもしれ  
ぬ。

ただあんな気持ちを持つことはもう二度とできないだろうと漠然と  
感じていた。

俺はもう戻れない。

あの頃には。

地獄の釜があいてやがる。

さあ、行こうじゃねえか、修羅の道へ。

島原での酒宴は五つ半にいったんお開きにさせ、

芹沢、平山、平間を八木邸に帰らせた。

この時点で、芹沢はかなり正体を失っていたのだが、用心に越した  
ことはない。

八木邸でも酒宴の続きと言うことで、芹沢にしこたま酒を飲ませた。  
完全に千鳥足になって、妾の女と一緒に屋敷の自室に消えていった。

夜九つ。

土砂降りの雨はやむことを知らずただ暗闇に雨音だけが響いていた。  
「源さん、山南さん、サノは、平山、平間を。俺と総司は芹沢をや  
る。やったらすぐに屋敷を出ろ。」

八木邸の人間にみられんじゃねえぞ。」

俺は緊張でかすれそうになり、咳払いをして指示をした。

「では。」  
俺たちは季節外れの土砂降りの雨の中間にまぎれて八木邸に侵入した。

黒の袴も着物も雨を瞬く間に吸い、ぐっしより濡れていて、歩くたびに不快に体にまとわりつく。

芹沢の居室である離れの障子に手をかけ、総司と目くばせして一気に障子を開け放つ。

！

泥酔して眠りこけてばかりいるであろうとふんでいたが、なんと、芹沢は暗闇でもわかるくらい不敵な笑みを浮かべて布団の上に端座していた。

「待っておった。」

ちっ、予想外だ。

芹沢は北辰一刀流の使い手。

真剣を持たせれば、総司でも危ないかもしれねえ。

だが、やるしかない。

もう後戻りはできぬ。

芹沢が動いた。

と思つた瞬間目の前に奴の刃があつた。

俺は反射的に刀を払い、奴の胸を狙つて突く。

総司も目にもとまらぬ速さで足を払おうとした。

芹沢はあの恰幅の良い体のどこにそんな俊敏性を秘めているのかと思われるほど、身のこなしが早く、無駄がなかった。

芹沢は、俺たちの剣を受けながら隣の部屋へ移動すると、不意に笑つた。

「そんなに動揺しては間合いがずれる。

ましてこの闇。目で見えるな。感じる。その程度では俺は斬れん」

「！」

なんてやつ。

これが芹沢鴨と言う男か。

と、その時、芹沢が暗闇の中の何かに足を取られ不意に体勢を崩した。

その一瞬の隙に総司の剣が真一文字に闇を斬り裂いた。

ザシュ

生温かいモノが飛び散り頬や腕を濡らし、芹沢の体躯が闇の中で揺らいだ気配を感じていた。

やったのか…

「…ひじか…た」

「！」

「しん、せんぐみと、み…なせの、こと…たの…むぞ。

鬼に…なれ。しん、せんぐみの…鬼に…なれ…。」

芹沢はそれきり動かなくなった。

この人は知っていたのだ。

自分が俺たちに殺されることを。

そのうえで、この結末を選んだのだ。

畜生！

最期までなんて野郎だ！

カタン



物音がして思わず刀を構えてそちらを向くと、芹沢の妾、お梅とが言ったか、その女が呆然とした様子で立っていた。

そして芹沢の体に近づき膝について愛おしそうにその体をさすった。「死んだんだね。」

「……」

「馬鹿な人。」

こんな血のにおいに満ちた修羅場に似つかわしくないような凄艶な笑みを浮かべて思わず鳥肌が立った。

とその刹那、刀を引く暇もなく、女は抜き身を素手でつかみそのままそれを喉に突き刺した。

「!!!」

女は刃をためらいもなく引きぬくと、血が吹き出し、むせかえるような鉄錆のにおいが部屋に充満し、それは闇に解けた。

「……あなたたち……あの、子の……こと……頼むよ……。」

声を出すたびに女の喉からひゅうひゅうと隙間風のような音がでた。

「……承知。」

俺が絞り出すようにかすれた声を出す……

女は小さくほほ笑んだ。

月も星もないこんな暗闇なのに、わかった。

女は少女のようなあどけないほほ笑みを浮かべたと。

そして女の喉から風音は聞こえなくなつた。

俺と総司は何も言わず八木郎を後にした。

ただこの土砂降りの雨が俺たちについた血を洗い落としてくれる。

でもどんなに雨に打たれても、俺の手は血で真っ赤に染まっているような錯覚を覚えた。

芹沢の暗殺は成功した。

暗闇にきらめく白刃。

刃を合わせる音。

その中で芹沢鴨は死んだ。享年34歳。

雨はやまない。

暗闇にふる季節外れのこの土砂降り雨はまるで甲い雨のようだと俺は感じていた。

#### 第四章 13・手紙

朝起きると屯所が妙に騒がしかった。

「…だ！」

「早く…る！」

切れ切れにしか聞こえなかったけれど、”芹沢”という言葉は端々に聞こえた。

あたしはついたての向こうに居る総司に声をかけた。

「総司？起きてる？」

返事は返ってこないのので、着物を整えてついたての向こうに回ってみると

布団がきれいにたたまれていて、総司の姿はそこにはなかった。

その時、なぜかあたしは直感した。

否、気付かないふりをしてたのかもしれない。

先日新見錦が切腹した。

理由は土道不覚悟、どういうことがよくわからなくて平助君に聞いてみると、要するには武士としてあるまじき行動をしたってことらしい。

新見錦は芹沢鴨の腹心。

その人が死んだとなれば

次は芹沢先生の番なのかもしれない。

もしかして昨日がそうだったんだらうか。

昨日が歴史上の芹沢鴨暗殺の日だったんだらうか。

あたしは居てもたつてもいられなくて部屋を背に走り出した。

\*

芹沢鴨は暗殺された。

お梅さんも一緒に。

どうやら表立っては賊に侵入され、暗殺された、ということになっているらしい。

でもあたしは知っている。

本当に芹沢先生を殺したのは、土方さんや総司たちなんだということ。

だからあたしはまともに顔を見られなかった。

目が合いそうになると、あわててそらしてしまった。

お梅さん、やっぱり一緒に逝ったんだ。

なぜか、納得してしまった。

きつとお梅さんはこうなることを予想していたに違いない。

あたしは…こうなることを知っていたのに…

ずっと気付かないふりをしていたんだ。

罪悪感を感じないために…

あたしは臆病者だ。

自分を守るために芹沢先生やお梅さんを犠牲にしているのだから。

どうして土方さんたちが芹沢先生を暗殺しなければならなかったの

かはよく分からない。

ただ、そうしなければいけない事情があったのだろう。

でも…芹沢先生たちも人の命であり…

あたしは…知ってて何もできなかったんだ、ううん、何もしなかったんだ。

自分が当事者になりたくなかったから…

あたしは胸を押さえてしゃがみ込んだ。

あたしには、泣く資格もない…

\*

それからしばらくして芹沢先生の追悼式も終わり、徐々に屯所は平穩を取り戻しつつあった。

ただあたしはずっと苦しかった。

あたしは歴史を知っていたのに、何もできない。

そしてこれからもこんなことがずっと続いて行くのだろう。

池田屋事件、鳥羽伏見の戦い、総司の結核…

あたしはただ、何もできない自分にいら立ちながらみているしかできないんだ。

帰りたい。

現代に。

逢いたい。

家族に。

どうやって？

わからない。

沈んでいたあたしをしり目に、土方さんは新撰組をいよいよ強固に結束させるために局中法度を作った。土方さんはそれまで以上に眉間にしわを寄せ、笑わなくなった。

その姿はまるで無心になることで、何かを忘れようとしているようにも見えて、その背中が周りを拒絶しているようにみえた。

それでもあたしは土方さんを目で追ってしまう自分がいて、気になつてしまつていて、そんな自分にあきれてしまう。

どんなに一緒にいたくても土方さんにはきつと今も心を占める人がいる、そしてあたしはこの時代にははいはいけない人間で。

こんな気持ちここで生きていくには邪魔なだけなのに。

馬鹿だ、あたし…。

\*

その日は朝から快晴で、風はすっかり冷たくなっていた。

掃除に使う井戸の水もすっかり冷たくなっていて、雑巾を絞る手がかじかむくらいだった。

「水瀬、おまえに文がきてんぞ？」

隊士の村田さんが声をかけてくれた。

「私にですか？」

あたしにここ以外に知り合いは雪乃さんと、吉乃ちゃんくらいしかないけど、それならそう言ってくれるはずだし……誰だろ？

「なんか菱屋のお梅とかいう女の知り合いだって言ってたけどおまえ知ってんのか？」

「お梅さんは何度かお話したことがありますから、知ってますけど、そういう知り合いの方は知りませんよ。」

誰だろう？お梅さんの知り合い？

「まあ、とりあえず危なくはなさそうだから受け取つといたぞ、はいこれ。」

村田さんはあたしに封がされた少し厚みのある手紙をよこした。

「どうも。ありがとうございます。」

あたしは掃除を手早く片づけると、縁側に座って手紙を開いた。

！

それはお梅さんからの手紙だった。

お梅さん、こんなきれいな字書くんだ。

あんなにちやきちやきした江戸っ子だから、もっと豪快な字なのかと思ったら、

すぐく線が細くて柔らかい女文字だったから少し意外だった。

もしかしたら、お梅さんの本質はこういう柔らかい穏やかな女らしさにあるのかもしれない。

あたしお梅さんのことも、芹沢先生のこと何も知らないままだったな。

水瀬真実様

この文を読むとき、あたしはもうこの世にはいないでしょう。

多分芹沢先生と一緒に死んでいるから。

芹沢先生がたぶん死ぬと言うことは以前から薄々感じていました。

あんな傍若無人な振る舞いがいつまでも続く訳はないと思っていたからです。

それがいつかいつかと怯えていたけれど、それは先生が死ぬことに対する怯えではなく、自分が一人になること、遺されることへの怯えでした。

以前まことは私と芹沢先生との関係を長恨歌の中の”比翼と連理”だなんて言っていたけれど、芹沢先生が居なくなれば、私も生きていられないという点ではあながち間違いじゃない、とそんな風にあなたが言ったことを今思い返しているところです。

今あなたにこんな文を書いているのは、私が死んだとき、誰かに私という人間の人生を知っていて欲しい、いざ死が近づいてくると、そんな風に無性に感じてしまったからかもしれません。

あなたにとつては至極迷惑なことだとは重々承知ではありますが、どうか聞いてください。

そしてすべてを読んだらこの文は燃やして下さいますようお願い申し上げます。

あたしは物心ついたとき、女郎小屋にいました。

だから男に抱かれることになんの疑問もありませんでした。

散々男を騙し裏切ってきたことに何の後悔もないのです。

あたしにとつて生きるとはそういうことだったからです。

散々男を手玉に取ってきたあたしが生涯で唯一恋に落ちた相手は菱屋の旦那でした。

優しくて、商売下手で、どうしようもない男なのにあたしは惚れてしまいました。

自分が騙されていたことに気づくまでに早々時間はかからなかったけれど、あたしはそれでもよかったです。

本妻が別宅に居ることを知って、別れるように詰め寄っても、のりくらりと言い逃ればかり。ずるい人でした。でもあたしは旦那のためならなんでもできたんです。

それが恋の狂気であり、愚かさなのでしよう。

そんな頃に出会ったのが芹沢先生です。芹沢鴨という人間に初めて会ったとき、強烈なまでの孤独を感じ、惹かれるのを感じました。

菱屋の旦那があたしを芹沢に対する盾にして店を守ろうとしたのを知り、あたしは絶望しました。でも芹沢先生に無理やり抱かれた後、憎しみと共に、芹沢という人間の仄暗い負の部分をもっと見たい、そんな嗜虐的な気分になつたのです。

以前あたしはまことに芹沢先生とは憎いけど離れられないと言いましたがあの言葉に全く偽りはありません。

強いて言うならば菱屋の旦那とは一緒に死ねないけれど、芹沢先生とは一緒に死ねる、否、死にたいとさえ思うのです。

あたしたちは欠けた心を埋めあつて、どこまでも闇に堕ちていった、だから死にたいと思つたのでしよう。

これがあたしの下らない恋と、愚かな人生です。

だから今私は芹沢先生と共に殺されていて、後を追っていてもどちらにしても、満足はしていないけれど後悔はしていません。

まことにこんなことを聞いてほしかったのは、あなたがあたしに似ていると思つたからかもしれせん。

あたしに似ているなんていやかもしれないけど、不器用で、死ぬほど意地っ張りで、うまく世の中を渡って行けない所はすごく似ていると思います。



この前、一緒にご飯を食べた時、まことがずいぶん大人の目をするようになったのを感じ、びっくりしてしまいました。恋でもしているのですか？

まことのことだから辛くてもすべてを飲み込んで苦しくても人前では笑うのでしょうか。

私が言うことではないですが、それが不憫で、心配でなりません。まこと、泣いていいのです。

あたしと決定的に違うところ、それはあなたの周りにはたくさん仲間がいるのだから、きちんと甘えなさい。意地っ張りのまことには難しいのやもしれませんがこれだけはいいたかったのです。

それから大人の女子なのだから、きちんと化粧をして、いい着物を着て、いい髪飾りをつけて、きれいでいなさい。

そして誰のためでもなく、自分に胸を張れる恋をしなさい。

あたしがまことに着てほしい着物を、あたしの知り合いのお宮という女性にこの文と一緒に託しました。まことの話してあります。

余計なおせっかいと笑ってください。

最後に、芹沢先生が、まことと出逢い、自分の誠を信じられた、幸せな未来の夢のために笑って逝けると言っていたことを伝えます。あたしも、自分と同じくらい気が強くて、強情で、向こう見ずな女に会えたこと、すごくうれしかったです。

いろいろ世話になりました。

梅

正直古文は得意じゃなかったし、文字同士がつながっていて大体で

しか読めないけど、こんな感じで書いてあるのだと思う。  
手紙に涙がパタパタ音を立てておち、しみを作った。  
ほんと、最後の最後まで嫌みな人。

でもまっすぐな人

そして、悔しいくらいいい女。

あたしは手紙を抱きしめて嗚咽した。

温かい涙は頬を伝い、心の澱まで洗い流すような気がした。

お梅さん、あたしあなたが嫌いだった。

でもすごく好きだった。

ねえ、芹沢先生の孤独を分かち合えるのはやっぱりお梅さんだけなんだと思うよ。

どこまでも一緒に、離れることなく、死の国までも一緒に行きたい  
と思える。

そんな激しい思いはやっぱり恋なんじゃないのかな。

でも意地っ張りのお梅さんはやっぱり認めないのかな。

ねえ、お梅さん、あたし、今好きな人がいる。

それは別の人がきつと好きで、その人の心の中にあたしの居場所は  
かけらもないのかもしれないけれど、でもすごく好きだよ。

そしてあたしはこの時代にはいてはいけない未来の人間で、だから  
こそ、この気持ちは絶対に伝ええないし、この胸に収めるつもりだけ  
れど、でもお梅さんの言葉嬉しかったよ。

自分に胸を張れる恋、

そんな恋にするよ

お梅さんの着物、今はまだ使えないけれど、

きつとそれを使う時は

お梅さんが悔しがるくらい

いい女になって見せるから。

たとえどんなふうにもこの先運命が進んでも、  
あたしはあたしに恥じない恋を、生き方をすると誓います。  
だから、見ていてくださいね。

#### 第四章 14・想ひ人

お梅さんからの手紙をもらってから数日、あたしは菱屋さんに行つてお宮さんという女性の居場所を教えてもらい、その女性に会いに行つた。

その人はお梅さんと江戸にいたところからの知り合いで島原の太夫で、名前を夕霧太夫といった。お梅さんとは対照的な儂げな美人だけど、眼差しの強さが印象的だった。

あたしはお梅さんの知り合いだと言うと、島原のゆつたりとした京ことばからちゃきちゃきの江戸弁になってその変わりようには驚いた。

きつと夕霧大夫という島原の女の顔と、お梅さんの友達のお宮という女性の顔と二つの顔を持っているのだと思う。

「お梅が頼み事するなんて初めてでさ、なんかあつたのかつて聞いても、答えやしない。

でも虫の知らせってあるんだねえ、こんなに早く逝つちまうなんて

」

お宮さんはさみしそうに笑いながら言った。

その笑みは世の中の悲しみや辛さを知りつくしたような妙に悟りきつた静謐な表情だった。

「お梅があんたが尋ねてきたら渡してくれて頼まれたんだ。」

そう言つてお宮さんは

あたしに風呂敷包みを渡した。

包みを開くと、そこには紺色に白の桜の小花があしらつてあるとても上品な着物と、白い帯、赤の帯締めとそろいの帯枕が入っていた。お梅さんはどちらかというと派手で、蝶や扇子みたいな大柄のあでやかな着物を着ているイメージだったけれど、こんな落ち着いた控え目な着物が好きだったんだなあと思う。

「あんたにきつと似合うよ。」

お梅によく似てるから、こつこつけないう着物がきつとよくにあう。

今はまだ髪が短いけど、これで女髪を結って化粧して、この着物着たら、京の町中の男どもがあんたに振り向くよ。島原は商売あがったりだね。」

お宮さんはからかうように笑いながら言った。

「そんな、やめてくださいよ。」

「また、きなよ。」

お宮さんは柔らかく笑って言った。

「はい。」

あたしは風呂敷を受け取ってお茶屋さんを後にした。

お梅さんはこつこつ生きて続けている。

あたしはすごく温かい気分になった。

その日の午後、あたしは延び延びになっていた斎藤さんとの買い物に出かけることにした。

ただ行きがけに永倉さん、平助君、サノさんに会って、結局5人で京の街に出かけることになり、斎藤さんはいつにもまして仏頂面になってあたしたちを笑わせた。

「今日は何の買い物なんだよ？」

サノさんがぼさぼさの頭をかきながら言った。

「斎藤さんの買い物ですよ。」

あたしはみんなの歩幅に合わせるために少し速足で歩きながら言う。

「斎藤の？お前、水瀬に買い物に付き合わせるってことはなんだ、惚れた女でもいるのかよ？」

サノさんはからかうように言った。

「…ああ。」

斎藤さんは仏頂面には変わりないけれど、少し顔を赤らめて言った。

「なんだよ、おまえみたいなお朴念仁にそんな奴がいたのかよ。」

「斎藤さん、俺口固いから教えてよ。」

とたんに永倉さんと平助君は食いついて斎藤さんを左右から囲んで質問攻めになっている。

あたしはその様子をみて笑い、ふと空を見上げた。

鰯雲が遠くの山まで続いていて、空が高かった。

風が金木犀の香りを運んできて、その甘い香りが胸の奥まで沁み渡るようだった。

「おい、水瀬、おいてくぞ。」

永倉さんの言葉に我に返り、あわててみんなのもとに走って行った。

\*

小物屋さんに入ると色とりどりの簪や櫛、巾着なんか所せましと並んでいる。

「わあ、可愛いー!!」

あたしは一気にテンションが上がる。

一応女だしこういう細々したものを見ているだけで楽しくなってくる。

いつの時代も女子はこういうオシャレなものが大好きなんだよね。

あたしも未来にいたころは渋谷とか原宿の小物屋さんでブラブラしてたなあ。

どんなに時代が変わってもきつと変わらない人間の本质がある。

そう思ったらなんだか嬉しいな。

「水瀬も女だったんだな」

サノさんがからかうように言った。

「どっからどうみても女じゃないですか。」

あたしは憮然として言う。

「そこらの男よりよっぽど男らしいぜ、格好も、度胸も。」  
永倉さんがその横から言った。

「そうそう、普通の女子は柔術なんて使わないし。」

この前かけられた絞め技で俺3日は腕上がんなかったし。」  
平助君もかぶせるように言う。

「そんなに力こめてないもん！平助君が大げさなだけじゃん。」

「「「あはははは」」」

例によつて三馬鹿トリオは大笑い。

完全にからかわれてんじゃん。

まあ、いいけど。

「あたしだつて女の格好すればそれなりになりますから。」

馬子にも衣装つていうでしょ？」

「はははは、それ自分で言っちゃう？まことはホント面白いよ。」  
平助君は大きなネコ目に涙を浮かべて笑っている。

ふーんだ。

見てろよ、お宮さんに美人になるって言われたんだから！

あたしは憮然として、三馬鹿トリオのもとを離れて斎藤さんの所へ行く。

「元気でしたか？」

不意に聞かれてびっくりして斎藤さんを振り返る。

「永倉さんたちはああ見えていつもおまえを気にしている。」

あまり心配掛けるなよ。」

「…はい。」

斎藤さん、そんな風に見ていてくれたんだ。

「ありがとうございます。」

ところで、どんな贈り物考えているんですか？」

「何がいい？」

「水瀬だったら。」

斎藤さんは無表情に聞いた。

この斎藤さんが好きになる人っていったいどんな人だろう。

その人の前ではこの仏頂面がどんな顔するんだろう？

そう思ったらなんだかほほえましい気分になる。

「私だったら、好きな人がくれるものなら何でもうれしいですよ。

どんな人ですか？」

「まっすぐで、どんなことがあってもくじけない、芯の強い女だ。

」

「へえ。素敵な人ですね。」

斎藤さんは彼女にどんなものを送りたいんですか？」

「その女が俺の選んだものを身につけてくれたら嬉しいと思う。

しかし女の喜ぶものはよくわからんからな。」

「だから水瀬に選んでもらいたい。」

「櫛とかかんざしとかなら身につけてもらえるんじゃないですか？」

「そうか。じゃあ、水瀬、好きなものを選び。」

「だめですよ。斎藤さん自身が選ばないと。」

彼女が身につけている姿を想像して選んであげてくださいよ。」

「俺は…こういうものはどうかと思うが、いや、やはり水瀬がも

らってうれしいものを選んでくれ。」

斎藤さんは近くにあった銀細工の本体から何本も細い板が下げられている精巧な作りのそれを手に取った。一見ほかのかんざしに比べたら地味だけれど、透かし彫りの本体に青いガラスがはめられている精巧な作りで、上品で、ぐっと女らしさが増すだろう。

「わあ、素敵。それ、いいと思います。あたしもそれ選んでたと思うし。」

「そうか。」

斎藤さんははにかんだように笑ってそれを手に取り、お店のご主人にお会計を頼んでいた。



お会計を終えて店を出ると、永倉さんたちはなじみの女の人たちに向けてかんざしやらなんやらを買ってもう外で待っていた。

「ずいぶんなげえな。」

「待ちくたびれたぜ。」

永倉さんたちはぶつくさ言いながら前を歩いている。

あたしたちの背中には夕暮れが迫っていた。

\*

夜夕食を終えて廊下を歩いているとあたしは斎藤さんに話しかけられた。

「水瀬」

「はい？」

「今日は、助かった。」

「いえいえ、全然。小物屋さんすごく楽しかったし。」

あたしは笑いながら言うと、斎藤さんはふとまじめな顔になってあたしを注視した。

「水瀬、手を出せ。」

「え？」

「いいから早く。」

「はあ。」

あたしはわけがわからないながらも両手を出した。

斎藤さんは怒ったような顔をして乱暴に和紙の包みをあたしの手のひらの上へのせた。

？

これって、

昼間斎藤さんがお店で買った奴じゃない？

「え？これって…」

「そう言うことだ。何も言わんで受け取ってくれ。」

斎藤さんはあたしのほうを見ようともしないで真っ赤な顔をして言った。

「…！」

斎藤さんの好きな人って…

もしかして…

あたし！？

どうしよう。

全然気がつかなかった。

受け取れない。

だって…

「斎藤さん、あたし…」分かってる。「」

「お前にそんな気がないのは知っている。こんな思い迷惑だということも…」

…だが伝えずにはおれんかったのだ。

…すまん。未熟だと笑ってくれ。」

「そんな笑うなんて…！」

「使わなくてもいい。捨ててくれても構わん。今だけただ受け取ってくれたら他は何も望まん。…頼む。」

こんなまっすぐな思いぶつけられるなんて、

思ってもみなかった。

あたし全然気がつかなかった。

なんで、あたしなんか…

あたしは胸の前で包みを抱きしめ一度ゆっくりと瞬きをしてから斎藤さんをしっかり見据えた。あたしはこの思いにきちんと答えなけ

れば。

「…斎藤さん、あたし、気持には応えられません。ごめんなさい。」

でも…ありがとうございます。

…斎藤さんがあたしのことを想って選んでくれたこと、すごくうれいんです。

…いつかあたしが女子の格好をする時が来たらきつとつけさせてもらいます。」

あたしはドキドキすぎて声が上がらないのを抑えられなかった。

「…ああ。」

斎藤さんはいつもと変わらない無表情で言つと後ろを向いた。

「水瀬…」

「はい。」

「ありがとう。明日からはいつも通り仲間として、頼む。」

「…はい。」

斎藤さんはそれだけ言つと静かに去つて行った。

秋の夜。

風が金木犀の香りを運び、月と星があたしを照らしていた。

#### 第四章 15・片恋、それぞれの想い：斎藤一、沖田総司

未熟者だと思う。

言うまいと決めていたのに結局水瀬に伝えてしまった。

水瀬は相当驚いたような顔をしていた。実際俺が好いているのが自分などとは思ひもなかったのだろう。あの小物屋であのかんざしを選んだのは水瀬に一番似合うと思ったからだ。

派手さはないが精巧な作りで、涼しげな水瀬の顔立ちを可憐にみせるだろう。

それを選んだとき、水瀬の顔がパツと輝き、それを見たときああ、俺が見たかったのはこいつの笑顔だ、そう思った。

最近、つまり芹沢が死ぬ（あれらは副長や沖田さんの暗殺なのだが）少し前から水瀬の様子はおかしかった。傍目から気付きにくいのが、目を腫らして朝食の支度をしている日が何度もあった。芹沢が死んだからという理由だけではなさそうだ。

水瀬の、さほど大きくはないが形の良い切れ長の瞳、通った鼻筋、ふつくらとした唇、驚くほど極めの細かい柔らかかそうな白い肌、そのどれもが、ドキリとするほど艶やかに見え、俺はそのたびに冷静ではいられない。そんな未熟な自分に立ちさえ覚える。

ただ水瀬は微塵も俺の気持ちには気付いてはおらず、それが無性に心をささくれ立たせた。

どんなひと？

お前だ。

その場でそう答えてしまいたかった。

想いを伝えて、そのうち俺は、何をするつもりだったのだろう。

水瀬は微塵も俺のことを想ってはいないだろうことは分かりきっていることなのに。

水瀬がここに隊士としていることを決めた以上、そんな気持ちは迷惑極まりないだろう。

なんと愚かなことをしたのだ。この俺は。どれほど未熟者なんだ。

今はまだ想いを断ち切れぬ。

水瀬、お前の心を占めているのは何なのだ？

秋の夜は長い。

今夜は眠れそうにない。

\*

まことは気付いていると思う。

私さまことを好いていることを。

そして土方さんには言っていないけれど、芹沢先生を暗殺したのが私たちだということにもたぶん気づいている。何故だかはわからないけど。

なんであの宴の夜、あんな風に言ってしまったのだろう。

あんなことを言わなければ、私たちはずっと兄弟みたいに仲良くしていられたのに。

一度起こってしまったことはもう元には戻らない。

私達はもうこんな風にギクシャクするしかないんだろうか。

前みたいに冗談を言い合ったり笑ったりすることはもう二度とできないのだろうか。

衝立の向こうにまことがいる。でも私たちの間には沈黙の帷しか無

くて、まことの姿は遠かった。

「…まこと？ちよつとそつちに行つてもいい？」

「…え？あ、ごめん何？聞いてなかった。」

ゴソゴソ物音がして驚いたような声が聞こえた。

「あ、うん。そつちに行つていい？つて。」

「ごめん、ぼんやりしてた。…どうぞ。散らかつてるけど。」

私は衝立を越えていくと畳んだ布団の上には風呂敷が広げられていて、中には紺色の着物と白い帯やら赤い帯締めやら女性ものの着物が入っていた。

まことの持ち物だろうか。こんなものを持っているなんて知らなかった。

「こんな着物持ってたの？」

「お梅さんがね…知り合いの人に託して…あたしに遺してくれたの。」

「へえ、お梅さんつて芹沢先生の妾さんでしょう？」

まことその人とそんなに仲良かったんだね。」

「ううん。仲いいとかなんてことはなかったと。ただあたしたちはすぐ通じるころがあつて、気にかけてくれたんだと思う。もつと仲良くなれていたら、つて思う。死んでから気づいても遅いつて話だけど。」

「それで着物をくれたんだ。きつとまことのこと身内みたいに想つてたんだろつね。」

「身内？」

「着物を遺すつていうのは、母親から娘に…娘から孫に…つて自分の家族や身内、すぐく近しいと思う人にすることでしょう？」

だからお梅さんもそんな風に想つたと思うよ。」

私はお梅さんの最期の姿がふと脳裏に浮かんだ。”あの子を頼む”

そう言つて芹沢先生の後を追つたあの人はきつとまことのことを本当に大切に想つていたんだろつ。

私はその人の命を奪つたんだな。

私は武士だ。

主君の命令の前には私心など持たない。

自分の心を殺す、それはひどく孤独で時に心が引き裂かれそうになるのを感じる。

「お梅さん、あたしのこと、そんな風に思っていてくれたんだ。」

「…まことにその着物、すごく似合うと思うよ。」

私は心の闇を打ち消すように言った。

「お宮さん、あ、お梅さんの知り合いなんだけど、その人にもそう言ってもらえて嬉しかった。」

まことは伏し目がちに小さく花が咲いたように微笑んだ。

そんな顔をするるとどんな格好をしていても、どんなに髪が短くても可憐な一人の女性にしか見えなくて、私は自分でもおかしくなるくらい動揺した。

未熟者！

私は平常心ではいられなくてまことからそつと目を離すと文机の上の銀細工のかんざしが目に入った。銀の透かし彫りが施された本体から細い同じように銀の板が鎖状に何本も出ていて、髪に挿せば揺れて涼やかな音を響かせる様が想像できた。

きつと凜としたまことの美しさをぐつと引き立てることだろう。

「これもお梅さんからもらったの？」

私は場を繋ぐためにそのかんざしを指差して言った。

「それは…その…斎藤さんから貰ったの。」

「斎藤さん？」

「あ…と、今日買い物に付き合っただけで、そのお礼に貰ったの。」

まことは嘘が下手だ。

きつと…

…斎藤さんが想いを伝えるために渡したものののだろうか。

斎藤さん、

まことのことよく見ているんですね。

女髪に結いあげて、これを挿したらハツと目の覚めるような涼やかな美人になるだろう。

まるで完成された一枚の絵のように。

近頃まことが妙に女子に見えてしまうのは、私が変わったからなのだろうか。

それともまことが変わったからなのだろうか。

斎藤さんが想いを伝えるとは思わなかった。

そこまで想っているとは思わなかった。

「まこと、斎藤さんに好きって言われたんでしょう?」

「な…!」

「まことは嘘が下手だから。」

ほんとに分かりやすい。

顔を真っ赤にして、こんな肯定したと同じだよ。

「でも…あたしは…応えられないの。誰も好きにならないって決めてるから。」

まことは目を伏せて言った。

「それは、新撰組に隊士としてしているため?」

「…うん。」

「…土方さんのことは?」

「…!」

「好きでしょう?」

こんなこと聞いてどうする?

こんな風に逃げ道のないように追い詰めて、私はどうしたいんだ。

まことは誰のものでもない。

なのに独占欲が、嫉妬が、猜疑心が、

己の心を支配する。

そんな自分が情けなくなるくらいにふがいない。

なのに苦しい。

自分の気持ちを伝えようとは思わない。

だって、まことは土方さんのことが好きだって気付いてしまったか



ら。

「…総司は、世の中に結ばれてはいけない恋つてあると思う？」

まことはかんざしをいじりながら、私の方を横目で見ながら言った。「不倫とか、不義密通とか、血縁とか？倫理的にいけなくても、絶対に結ばれてはいけないなんていないと思うけどな。」

「…あたしはね、結ばれてはいけない恋つてあると思う。」

その人との恋がかなったら、自分の予想もつかないくらいのたくさんの人の生き死にも影響を与えてしまう。まるで歴史を根本から変えてしまうような…。」

まことは静かに笑ってたけれど、それは同時に全身で泣いているようにも見えた。

どうもまことの言っていることはよくわからない。

不義密通や近親相姦とかそういう倫理的なことではどうやらなさそうではあるものの、私の想像では想いも付かないような次元で、話していて…

それはひどく儂げで苦しそうだった。

私は思わずまことの手をとって自分の胸の中に引きよせ、背中に手をまわした。

小さな手も、華奢な肩も、その柔らかな体を抱きよせていると愛おしさと共に鈍痛が胸の奥にじわじわ広がっていく。

なぜかつんと鼻の奥が痛くなり、不覚にも涙ぐみそうになった。

好きだな。

守りたい、

ただそう思った。

「総司。ありがと、慰めてくれて。」

そのままどれくらい時間がたったのだろう。

まことは私の胸を手で押しやって私のほうをしっかりと見据えた。その瞳にもう、揺らぎや弱さはない。

「あたし、好きな人がいる。」

総司も気付いている人。でも、この恋は結ばれてはいけない恋だから、あたしはその人に自分の気持ちを伝えることはしない。でも、いつかこの恋をしてよかつたって思えるように、自分に胸を張れるような恋にするんだ。」

まことは静かな、沁みいるような静謐なほほ笑みを浮かべた。

どこまでも清らかで、温かくて、でもせつなくて、

まるで穏やかな秋の日だまりの黄金色の光の中のような、何かを悟つたような笑顔だった。

その笑顔を見たとき、

私の心の中にあるドロドロした嫉妬や独占欲といった醜いモノが一瞬にして洗い流されたような気がした。

ああ、私はこの笑顔が見たいんだ。

だから、何があってもきつとまことを見守ろう。

今はまだ完全に想いきることはできないし、強がりだけれど、でも、この子の幸せを守ろう。

それを私の恋のあり方にしよう。

わたしも自分の恋に胸を張れるようにするんだ。

武士として、一人の男としてこの誠を貫こう。

秋の夜は長い。

そのことに感謝した。

きつとこんな風にまことに向き合えたのはこんな穏やかな夜だからだとおもった。

## 第五章 1・密命、あたしにしかできないこと

朝起きたら、季節外れの雪が降っていた。

寒いと思つて障子をあけると、

庭の木々はうつすらと雪化粧していて、ちらちら雪が舞い、

厚い灰色の雲の間から光の筋が幾本も伸びていて、とても荘厳な気分させた。

「わあ、さつむーい。」

息を吐くと空気が白くなって空へとけた。

部屋に戻るとついたての向こう側に回り、布団に頭まですっぽり埋まって丸くなっている総司の体を揺らす。

「総司、起きて！早く起きないと朝稽古始まるって。」

「うーん、さむい。」

「早くおきなよ。」

こんな押し問答が続けていると、

総司がようやくのっそり起きだしてきて

庭の雪景色を見て言った。

「ああ、この冬初めてだねえ。じゃ、」

そう言つてまた布団に戻ろうとする総司の腕をつかみ、ひねり上げる。

「毎朝、毎朝、なんでそんなに寝起き悪いの！早く起きなさい！」

「いただだ、わかつたつて。冗談！」

あたしがこちらに来てから早10ヶ月。

年が明けて季節は春になり、文久4年は二カ月足らずでつい先日、

元治元年になった。

あたしは21になった。

この時代では年が明けると年齢が一個増える。

おじいちゃんが数え年って言ってたけど、あたしは誕生日が4月なので、なんだか数カ月分早く年をとってしまった。

総司との間にあった気まずさは、氷解し、あたしたちは仲良しの兄弟か、喧嘩仲間みたいに毎日こんなやり取りを繰り返している。

斎藤さんは表面上は何も変わらない。

あの出来事は夢だったんじゃないかっていうくらいいつも通りそっけなくて無口で、そこにはいつもの斎藤さんがいた。分かってる。

ただ総司も、斎藤さんもあたしに気を使っていてくれて、あたしはそれに甘えているだけだということ。

あたしたちは毎日朝稽古をして、あたしは内向きの雑務をこなし、総司や斎藤さんは隊務をこなし、たまにサノさんたちと飲みに行ったり、山南さんに勉強を教えてもらったり、総司と甘味屋さんに行ったり、近所の子供たちと遊んだり、すべてが穏やかで、ゆったりと時が流れていた。

現代に帰るということを最近あまり思い出さない。いつの間にかあたしはここで生きることを現実として受け止め始めていた。

ここは夢でも過去でもない。

あたしにとっては、まさに今起きている現の出来事なのだ。

あたし自身の恋も今はなりを潜めている。

むろん土方さんを見たり、話したりするとドキドキしてしまうのはまだ変わらないし、時々、鈍痛がはしるのだけけど。

でも、こんな風にだんだん風化していけばいいと思う。

そうしてああ、あたしこんな恋してたんだなあ、と笑いながら話せるようになったらいい。

\*

朝稽古と朝食を終えて後片付けをしていると、土方さんから声をかけられた。

なんでもないように装うけれど、やっぱりドキドキするな。

「水瀬、ちよつと後で、副長室に來い。」

「はい。かしこまりました。」

何なんだろう？

副長室の前に来ると、声をかける。

「水瀬です。失礼します。」

「はいね。」

副長室に入ると、近藤先生と土方さんが火鉢を囲んで座っていた。

この二人は幼馴染なんだと言うけれど、

こんな風に仲良く寄り添っている姿をみるとそれも納得だ。

「まあ、座れ。」

「はい。」

あたしは居住まいを正して下座に正座して二人に向き直った。

「おまえを呼んだのは新しい任務を命ずるためだ。」

土方さんはキセルを吸いながら言った。

「今まで、小姓になって内向きの雑用をやらせていたが、今回の任務はおまえが適任だから、任せたい。その任務は密偵だ。」

眉間には深くしわが刻まれていて、目は鋭さが増している。

芹沢先生が亡くなってから土方さんはずっとこんな感じだ。

「密偵？」

「ああ、近頃長州の奴らの動きがなりを潜めている。これは何か企

んでいる証拠だからな、奴らがよく出入りする島原の置屋に張り込んで探ってもらいたい。」

「トシ、本当に水瀬君に頼むのか。女子にそんな危険な。」

近藤先生がまだ決めかねているように言った。

「女だからいいんだ。島原の置屋まではさすがの山崎でも限界があるからな。」

遊女姿で張り込んで、必要があれば、どんな手遣っても構わないから、情報を得ろ。」

” どんな手を使っても ”

それはたぶん女にしかできないことなんだろう。

つまり色仕掛けでもその先までも、必要なら何でもやってこいと。

土方さんの口からそれを言われると、少し胸が痛い。でも土方さんにとって新撰組はすべて。

新撰組を盛りたて、近藤先生と共に熱い志のために走り抜くことが土方さんの誠だから。

誠とはすなわち志。

自分より、命よりも、大切なモノだから。

だからあたしもここへ来た時決めたように、自分のできることを精一杯するんだ。

自分が正しいと思うことを全力で信じ、尽くすと決めた。

だからやりたい。

この任務を。

「トシ！」

近藤先生が眉をひそめて言う。

優しい人。

あたしのことを慮って言うてくれてるんだ。

人情家で熱血漢の近藤先生らしい。

「こいつは女だが、新撰組に居る以上、任務に合った適任を選ぶ。

ここはこいつを使うのが妥当だ。当然だろう。」

「だが、「構いません。」「

あたしは二人のやり取りをさえぎって言った。

「やります。」「

「水瀬君、」「

「私じゃなきゃできないことなのでしょう？

だったらやらせてください。」「

「危険だぞ。」「

「もとより承知の上です。」「

「近藤さん、これは水瀬が隊士として成長する時だ。

これで死ぬなら、こいつの武運がなかっただけの話。」「

土方さんは淡々と、けれど少し口の端をあげて皮肉っぽく笑った。

「うむ。だが、水瀬君、重々身の安全には気をつけるんだぞ。」「

近藤先生はしぶしぶと言った表情で頷いて、あたしの身を案じてくれた。

まるでお父さんみたいだと思う。

やっって見せる。

あたしにしかできないことをやるんだ。

あたしがここで動くことで、歴史が変わるのかもしれない。

でもあたしはあたしでできることをするしかないのだと思う。

## 第五章 2・秘密、山崎丞という男

密命に際して、あたしは監察方（情報収集隊みたいなものらしい）の山崎さんという人に会うことになった。山崎さんという人は、ほとんどの隊士にその存在が隠されている。山崎さんを知る人は、組長以上の幹部のみらしいのだ。そんなわけで、山崎さんは屯所をうろろろするわけにはいかないらしくあたしは今、山崎さんの隠れ家みたいな民家に居る。

今回のミッションは連携が胆になる。島原へ潜入するのはあたしだけど、新撰組とあたしをつなぐパイプ役は山崎さんだ。

そんなわけで、近藤先生と土方さんがあたしと山崎さんを引き合わせたのだけど、山崎さんはあたし完全に敵視している。

切れ長の瞳は鋭くて、武士というよりも忍者みたいな身のこなしだと思う。

武骨なところは一切なくて、大勢の人の中に入ったら一瞬にして溶け込むことができそうだ。

あたしが女だから？

それにしてもちよっとでも身動きしたら殺されそうなほど睨まれているのはなぜだろうか。

「あの…」

「なんや」

「今回の密命なんですけどその詳細について教えていただけませんか？」

「フン、ほんまに協力する気あるんか？」

山崎さんは軽蔑したようにあたしを横目で見た。

「…どういうことです？」

「ほんまはおまえ自身が中から新撰組をぶち壊そうと思うとるんや



ないんか？」

「は？」

いわれのない誹謗を受ける余地はあたしにはない。

あたしは思い切り眉を寄せて不機嫌な顔をした。

「フン、すつとぼけるんもつまいな。」

お前…何もんや。素性偽るんは知られたらまずいことがあるからやる？」

「…」

この人は何を知ってる？

どこまで知ってる？

あたしは山崎さんを見据えた。

「副長に頼まれてな、おまえが言う江戸の水瀬という医者、三人の兄、一人娘、を調べたがそんなもんおらんかった。壬生寺の近くのお前がじいさんちや言った荒れ地に過去に人が住んどったゆう記録はないしな。長州や薩摩の間者やおもつとったけど、言葉に訛りは一切見られんし、怪しい行動も今んとこはおこしとらん。お前の目的はなんや？」

もつと不思議なことは、おまえには壬生寺で沖田はんと会った以前の存在がないんや。人間はどんなに隠そうとしても生きておればその痕跡ゆうもんがどこかしらに現れるもんなのにお前にはそれが無い。まるで人智を超えた力でいきなりその場に現れたようなもんやおまえは何もんや？」

「…」

あたしは答えることができない。

だって山崎さんの言うことはいちいちその通りで…

あたしは本来この世界に居てはいけない人間で

歴史を変えることが怖くて、

新撰組のみんなに気味悪がられたり嫌われるのが怖い…。

だから…言えない。

「俺は副長や近藤先生ほど甘ない。」

お前がどんな事情抱えとろうが怪しいおもたら、排除すべきやと思  
う。

そう進言しようとした矢先にこの仕事や。お前みたいな怪しい奴、  
潜入につかおうなんて何考えてんねや。」

潮時なんだろうか。  
こんな風に素性をいつまでも隠し通せるとは思えない。

みんなに言うべきなのか、こんな突拍子もないことを。  
でもあたしが先のことを知っていると知ったらみんなはどうするん  
だろうか？

そう思うと怖くて話せないよ。  
でも…

「…もし…ある日いきなり今まで自分が生きていた世界と全然違う  
世界に来てしまったとしたらどうします？」

「は？何ゆうてんのや？」

「もしそれが…自分が生きていた時代よりもずっと前、たとえば1  
50年も昔の世界だったら、どうしますか？」

「阿呆か？そんな馬鹿なことあるわけないやろ。おちよくってんの  
か？」

山崎さんは話にならないと言ったふうで、眉をしかめてあたしをに  
らんだ。

そうだよ、これが当然の反応なんだ。  
信じてもらえるはずはないんだ。

あたしだって受け入れられなかったもの。

「ふふ、ですよ。冗談です。」

あたしは無性に泣きたくなくて、無理やり笑った。  
ここで自然に生きていくためにはどんなに疑われても、話さないほ  
うがいい。

「…確かに山崎さんが言うみたいに怪しい要素しかあたしにはない。  
このこと副長にも近藤先生にも話してもらって構いません。ただ、  
あたしは今までの行動を信じてくださいとしか言えません。それで

処断されるのであれば仕方ないことですから。」

「…副長はこの仕事にお前を使うと言った。それには従わねばならんからな、この密偵中にお前を監視する。怪しければそのまま斬る。それだけや。」

山崎さんは眉根を寄せて一つ嘆息した。

山崎さんなりの最大の譲歩なのだろう。

「ありがとうございます。」

「信じたわけやない。」

「でもありがとうございます。」

ありがたかった。

あたしは信じてもらえるように行動するしかないんだもの。

あたしたちはそのあと、明日から張り込む島原でのあたしの身の振り方と、仕事内容を細かくチェックした。

がんばるんだ。

あたしがここに生きるために。

\*

芹沢先生はどうしてこんな突拍子もないことをあんなふうに信じてくれたんだろう？

否、信じたわけではなかったのかもしれない。

信じたいと思ったのかもしれない。

今になってみると思う。

芹沢先生はきつと新撰組のこれからのために、日本の未来のために、悪者になつたままで

あえて殺されようとしたんだ。

先生はずつと死に場所を探していた。

大和屋でも。島原でも。

暴れているときの芹沢先生は狂気じみでいて、でも圧倒的な孤独の

中に居て、常に死にたがっているように見えた。

切腹っていう手段もあったはずなのに、でも隊士たちに何のわだかまりも、疑問もなく近藤先生を頂点にして人望を集め、土方さんに手腕をふるわせ、新撰組を未来に託すために、自分が悪者になって嫌われぬいて表舞台から消えることが必要だと考えたんだろう。

そして、その行動の引き金はあたしの言葉だったと思う。

未来は新撰組が誠の武士として認識され、平和だと。

” そんな未来が来ると思えば誠を貫いて死んでいける。 ”

あの言葉は芹沢先生の本心だ。

あたしの言葉が芹沢先生を歴史上の悪者にして、殺したんだ。

でもきつと芹沢先生もお梅さんもあたしがめそめそすることを何一つ望んでいない。

” すべては新撰組のために ”

” すべては芹沢先生と共に ”

これが二人の真実であり、誠だ。

だからあたしはこの罪悪感をは自分の中に閉じ込めて、この二人の誠を引き継ぐことこそがあたしのなすべきことだと思っている。

秘密がだんだん増えていく。

秘密って重くて苦しい。

誰かに話して楽になりたいって思う。

未来から来たこと、

これからの歴史を少しだけ知っていること、

芹沢先生たちのこと、

この気持ちを共有してもらえたら、わかってもらえたらって思う。でもそれは許されない。

だから笑うんだ。

あたしに任された仕事を精一杯やって頑張るしかない。

あたしの誠を信じてもらうために。

### 第五章 3・遊女、華雪

元治元年三月。  
季節はすっかり春だ。

島原のお茶屋である華屋に見習いとして入ってから一か月がたった。あたりまえだけど、新撰組の男所帯の屯所に慣れたあたしにはこの女の園はびつくりすることばかりだ。いまのところは何の問題もなくいろいろあたしの身にはこれと言って変化がない。

あたしはお真（”おしん”本名の真実からいちもじとって。某テレビの昔のかわいそうな苦労人の名前だというのが泣ける。）、17歳（21は歳が行き過ぎらしいので）と名乗ってこの島原の置屋である華屋に来た。

身寄りが亡くなり、江戸から親戚を頼ってきたものの、親戚も既に亡くなり、女術（売春斡旋業みたいな人）の紹介でここに流れ着いた。という筋書きでここに居る。

なぜ年齢詐称の必要があるのかと、山崎さんに聞けば、21なんて（まだ二十歳だけど）そもそもこんな年の行ってから見習いなんて無理とのこと。出戻りか、よほど体に不具合があるとみなされ、追いつ返されるのが関の山なのだという。

全く失礼な話だ。

あたしにしてみればまだ二十歳、でもこの時代にしてみれば完全にもう、行き遅れどころか欠陥品扱いだ。

失礼と言えば、さすがに17は無理があると言ったら山崎さんは色気がないから大丈夫と妙な太鼓判を押してあたしを絶句させた。

山崎さんという人はあたしを信用しているわけではないけれど、とりあえずは仕事を任せていてくれるらしく、大阪人の気質なのか、

芸人みたいなことを時々言う。

ちなみに新撰組での水瀬真実は病氣療養のため江戸下がりをしてい  
るということになっており、幹部にもこのことは伏せられているら  
しい。

だから島原で新撰組の隊士にあっても

”絶対に気付かれずに他人のふりを貫くこと”

それが山崎さんとあたしが交わした約束だった。

一応、年の近い遊女のお手伝いとして紛れ込んだけど、そもそも袴  
や道着なら着なれているけれど、女物の着物なんて成人式くらいし  
か着たことないあたしは着付けら危うくて、（潜入前夜山崎さんに  
あきれられながら叩き込まれた。）、そんなあたしができることは  
屯所の中と同じように掃除とだけだったけれど、京言葉と所作を置  
屋のおかみさんにスパルタで叩き込まれて一週間前辺りから、華香  
大夫という、花屋の看板太夫について、華雪という源氏名でお座敷  
に上がってお酌とかをするようになった。

酔ったおっさんはいつの時代も質が悪い。

尻や胸をさわられたりしてあやうく投げ飛ばすところだった。

触られるだけでも気持悪いのだから、好きでもない人と体を重ねる  
なんてやっぱりあたしにはできそうにない。

でもそれはあたしの甘えだ。

実際にいろんな葛藤や苦しみを化粧と美しい着物の中に隠してみん  
な笑って、自分たちの芸に誇りをもって仕事をしているプロなんだ  
もの。

「華雪、今まではうちと一緒にあがったけど、今日は一人でお  
座敷にあがれる？」

「はい、じゃなくて、へえ。」

慌てて言い直したあたしに華香太夫はくつくつと笑う。

「華雪はほんまおもしろいなあ。ええよ？お客さんの前でだけ、気をつけてくれたら。」

首を少し傾げて袖で口元を隠す姿は本当にどきりとするくらい艶っぽい。

華香大夫は歳は19なのだというけれど、あたしとは色気が天と地なのだ。

くつきり二重の黒目がちな目はいつもうるんでいて、小さくて控え目な口元は普段はまだ少女のあどけなさを残しているのに、紅をさすと危険で人を酔わす妖艶な生き物に変化する。

儂げで、たおやかで、美しい。

ああ、鼻血でそう。

華香太夫本当にきれい。

なんていうかこう、ぎゅっとして守ってあげたい、保護欲を刺激されるんだよね。

あたしはおっさんみたいなことを考えながら目の前の華香大夫に見惚れた。

「華雪？」

華香大夫に呼ばれて我に返る。

「はい。」

「今日は、ほかのみんなが出払ってしまっくんよ。せやから華雪には一見さんのお相手お願いしよう思っくんやけどだいじょうぶやるか。」

一見さんとは初めてこのお店に来るひとのことだけど、一見さんと体の関係になることはほとんどない。たいていはお酌して、舞いとかを見せるだけだ。たぶん華香太夫はそういうことに躊躇しているあたしに気を使っていてくれるんだろう。

「へえ、やらせてもらいます。」

あたしは慣れない京言葉で答える。  
華香大夫は一瞬目を見開くと、すぐに顔を破顔させて笑った。  
こういう顔を見ると華香大夫はまだまだ年相応のあどけなさとかわいらしさが垣間見える。

\*

夕方、あたしは見習いとは言え一人の遊女としてお座敷に上がるということでいつもよりも念入りに支度をされた。鏡をのぞくと慣れないおしろいや口紅で自分の顔は正直別人に見える。

あたしは斎藤さんからもらったかんざしをお守りとして挿した。

告白を断った人からもらったものをつけるなんて間違っているかもしれない。

でも斎藤さんはあたしにとって大切な人であることは間違えようのない事実で、

たとえ想いには応えられなくても、伝えてくれた思いは大切にされたかった。

これは、あたしのおごりなんだろうか。

「華雪、お客さんお待ちえ。」

おかみさんがあたしを呼ぶ声がする。

「へえ。」

あたしは迷いを振り払うように顔をあげ、重い着物の裾をさばきながらお座敷に向かった。

にしても、見習いでもなんでもいいから、なんて投げやりなお客さん珍しいな。

お代は決して安いわけじゃないのに…



まさか、とにかく女を抱きたいんだとかそういうんじゃないでしょうね。

あたしは緊張で顔がこわばるのを感じた。

「お客さんがお待ちどすえ。きちんと笑い。可愛がってもらっておなじみさんになってもらいや。」

お茶屋のご主人はあたしに耳打ちすると、ふすまに手をかけ、静かにあけた。

あたしは手をついて重い頭を下げた。

「華雪どす。よろしゅうおたの申します。」

「ああ」

華香大夫がしてたみたいに挨拶をするとひどく無愛想な返事が聞こえてあたしはゆっくりと顔をあげた。

そしてお客さんの顔を見て、絶句した。

その人は、

…土方さんだった。

## 第五章 4・初仕事、二セモノの…

一見さんのお客さんはなんと土方さんだった。

！

土方さん。

なんでここにいるの？

あたしはおもわぬところで思わぬ人に会い、内心完全にパニックだった。

「どうした？」

土方さんと言えばびっくりするくらい落ち着いていて、無愛想で、何の驚きもなさそうだ。

え？

まさか気付いてない？

マジで？

ううん、さすがにそんなわけないと思う。

知ってて会いに来た？

山崎さんから連絡は言ってるはずだから、気付かないふりということもありうる。

ここでは水瀬真実という人格は消して、華雪として接するべきだ。

あたしはそう思い直して膝を進める。

「へえ、えろつすまへん。」

あたしはとりあえず土方さんの隣に行って用意されたお酒をお酌しようとして、ふと思いいたる。

土方さん、お酒ほとんど飲めないんじゃないかな？

お茶のほうか飲みたいんじゃないかな。

でもここで酌やめるのは不自然だし。

あたしは少しだけ杯にお酒を注いだ。

土方さんは何も言わずに杯を傾けると

あたしに目を移して無表情に聞いた。

「慣れぬのか？」

「え？」

「この仕事はまだ日が浅いのかと聞いておる。」

「へえ、その、初めておす。」

「そうか。」

それきり何も言わずに窓の外を見ている。

あたしと知っててこの質問はない…よね？

ホントにわかんないのかな？

あたしはこの状況を測りかねて、何も言えなかった。

でも沈黙だけど、あまり気づまりじゃない、

むしろ心地いいとさえ思っているのはあたしだけだろうか。

ふと杯を見るともう空になっているけれど、お酒を飲めないのを知っているからあたしは酌することはできなかった。

こんな時土方さん絶対お茶がほしいと思ってるにきまつてる。

あたしは土方さんに断ってトイレに立った際に部屋の外で待機している付き添いの人にお茶の用意を頼んだ。

お茶の用意を持って帰ってきたあたしを見て土方さんは形のよい目を見開いた。

「！」

何カ月もあなたのお茶を毎日淹れ続けてるんですからさすがに分か

りますって。

あたしは心の中で笑いながら、お茶をいつもどおり淹れて差し出した。

「どうぞ。」

「…ああ。」

土方さんはそれだけ言うと、湯呑みに手を伸ばした。

「…うん。」

土方さんが”うん”って言う時は必ずおいしいか、満足って意味なんだよね。

毎日ご飯作ってお茶淹れてるから、こんなこともわかるようになってきたのがうれしい。

あたしたちの距離はきつとこれ以上縮められないけど

こんな風に土方さんのこと、もっと見ていたい。もっと知っていきたい。

とその時、

カサ

かすかな物音がした。

！

誰かに見られてる？

あたしはすぐに周囲に気を走らせたのだけど、どこに人がいるのか測りかねた。

土方さんもその気配を感じ取っていて、

一瞬その瞳に緊張が走ったけれどすぐにその空気が変わった。

「…華雪、そろそろこっちに来い。」

今まで聞いたこともないような甘い声。  
？

あたしは怪訝に思いながらも膝を進めて土方さんの隣に来ると  
土方さんはそのままあたしの肩を抱き  
後ろに押し倒した。

！！

「あっ」

思わず驚いて声が出た。

「華雪……」

土方さんの声は低くて甘くて少しかすれていた。  
あたしはその甘い響きに酔いそうだった。

そして土方さんはあたしの耳元に口を近づけ  
聞こえるかどうかくらいのかすかな声で囁いた。

「（水瀬、少し我慢しろ。本気ではやらん。）」

「！！」

土方さん、気付いてたんだ。

我慢って……一体？

そう思っていると、あたしの唇は土方さんのそれで静かに覆われた。

あの歓迎会の夜の出来事が思い出され、あたしはせつなさが増す。  
でもその一瞬ののち、すぐにその甘美さに酔いしれた。

あの夜よりもずっと柔らかくて、情熱的で……そしてせつなかった。  
何も考えられない。

何もいらない。

今この瞬間は。

「ん、あ……」

あたしは我慢できなくなって吐息を漏らす。

「そんな声出すんじゃないわねえ。どうすんだ…もう我慢できねえぞ。」  
土方さんの甘い声があたしを包む。

何何何？

エロすぎでしょ、そのセリフ！！

経験ないあたしには刺激強すぎだし！！

シュッ

土方さんはあたしの体の前に複雑に結われてある帯を手慣れた様子で、衣ずれの音をさせながら解く。

「あ、ダメっ！」

あたしは思わず土方さんの手をつかんだ。

とその時土方さんは耳に口元を近づけて再び囁いた。

「（そうやってもっと聞こえるように演技しろ。）」

「！？」

演技？

！！

その意図するところに気付いたあたしは赤面する。

誰かはわかんないけど、土方さんか、あたしが探られている。

ここで黙っていたり、知り合いだみたいな雰囲気は相手に感じられたら、この密命自体がおじゃんになる。だからあたしは遊女になりきってお客さんとエッチしてるように見せかけてこの場を乗り切るしかないってことだ。

経験ないあたしには情事の演技なんてどうしていいかわかんないし。

つまりはニセモノ。  
この遊女姿も、この情事も、  
そして土方さんのこの表情も、声も…  
全部ニセモノなんだ。

でも土方さんの声もしぐさもずるいくらい優しく甘くて…  
あたしはニセモノでもこの時間にこの上ない泣きたくなるほどの幸  
せを感じ、それに酔っていた。

「…ひ、お侍さま、もつと優しく…あ！」  
土方さんと言いつうになつてあたしはあわててお侍さまと言ひ直す。  
スパイがどこまで知っているかは分からないけど、土方さんはこの  
空間で一切名乗ってはいないのだ。  
土方さんはあたしの言ひかけた言葉をさえぎつて耳に口を近づけて  
あたしの耳を噛んだ。

！

「ぎゃ」  
かすかな痛みの後は甘い快感があたしをしびれさせた。  
わざとなのだらうけど

そんな音をさせて耳なめるって反則じゃん！

「や、いや…あ…！」  
あたしは演技どころではない。

自分の口からでているなんて思えないような恥ずかしい声が漏れる  
恥ずかしくて、甘くて…。

やだ、こんなの知らない。

だってこんな感覚初めてなんだもの。

あたしは目じりに涙が浮かぶのを感じた。

「華雪はん、お時間どす。」  
時間を知らせる下働きの子供の声がしてあたしはハッと我に返り、息を乱している自分が無性に恥ずかしくなった。  
あたしは土方さんに背中を向けると解かれた打ちかけを引き合わせ、帯を無造作に縛った。  
別に裸を見られたわけではない。  
ただスパイをだますためにキスをしただけ。

それなのに動揺してしまつて、でも大好きな人に触れられていることがすごく幸せで、うれしくてこんな自分が恥ずかしくてあたしは泣きそうになつた。

ふと土方さんの固くて節くれだつた武骨な手があたしのほつれた髪をひと房手にとって耳にかけた。

その仕草はうつとりするほど優しく勘違いしてしまいそうになる。「無理させて悪かつたな。」

その声はいつも通りの土方さんで、あたしは急速に自分の熱が冷えていくのを感じた。

あたしは目の前の視界がぼやけていくのを感じた。  
あたしは胸が詰まつて何も言うことはできない。

土方さんが身支度を整えてふすまを開けて部屋を出ていくのをただ背を向けて黙っていることしかできない。

ダメだ。  
きちんと笑つて言わないと。

だってあたしはここに遊女として、仕事としているんだもの。

あたしは顔をあげ土方さんがたつた今出て行つたばかりのふすまを乱暴に開け、玄関まで駆け下りた。



その行儀の悪さにお茶屋の主人は一瞬眉をひそめるけれど、お客さんの手前なのか笑顔をとりつくつているのを横目で感じた。

「お待さま」

あたしは今まさにお茶屋を出ようとしている土方さんに声をかけた。土方さんはその広い背中をひねってあたしに顔を向けた。

「またよろしゅうお願いいたします。」

あたしは精一杯の笑顔を向けた。

その拍子に涙が一粒零れ落ちたのを土方さんは気づいてしまっただろうか。

「ああ」

そう言った土方さんは一瞬ほほ笑んだように見えたのはたぶんあたしの錯覚で、

土方さんはすぐに暖簾をくぐって店を出て、その背中はずぐに見えなくなつた。

## 第五章 5・独白：土方歳三

芹沢が死んでから、俺はまともに熟睡した記憶がない。芹沢は俺たちの壁だった。

超えられない、けれど超えなければいけないそんな壁だ。

あの人は知っていた。

自分が殺されることを。

それでも切腹ではなく敢えて暗殺される方を選んだ、それは悪者に徹することで周囲に自分の死を悲しませず、近藤さんに円滑に頂点を譲り、さらに新撰組の未来のためにそうしたのだと思う。

滅茶苦茶な振る舞いも、暴力も全部ではないにしろその布石だったのかもしれないと今になればそう思う。その考えをあのととき読めなかった自分が悔しい。

最期の最期までなんて野郎だ。

芹沢さん、あなたは確かに武士だったぜ。

俺は鬼になる。

あんた以上のな。

あんたの屍を踏み越えて先へ先へと進んでいく。

近藤さんのために、新撰組のために、おれはあんたの役引き受けろぜ。

「トシ」

「！」

はっと目が覚めて自分が暫し眠っていたことに気づく。

勝ちちゃんが俺の肩に手をおいて心配そうに除きこんでいた。

「寝るならよこになれ。そんなところでは疲れも取れんだろ。」

「いや、まだやることがあるからな。」

「トシ！いい加減休め。お前はここ数ヶ月取り憑かれたように走り

続けてるじゃないか。

こんなことしてたらいつかガタが来るぞ。」

「じいじやねえんだから大丈夫だよ。」

「トシ、これは局長命令だ。明日は1日何も考えず休め。」

そして島原でも祇園でもいいから女を抱きに行け。」

勝ちちゃんのあまりに深刻そうな顔を見て思わず嘖き出してしまふ。

敵つい武張った顔の男が捨てられた犬みたいな顔すりゃあ情けなさが増すだけだ。

「笑い事じゃないぞ、トシ。俺は本気だ。」

勝ちちゃんは本気で怒っているらしく眉をしかめて俺をにらんだ。

近藤勇という男の最大の長所はこんな風に感情をむき出しにして恐れることなく、全力で物事にぶつかっていけるところだと思う。

相手がどんな人間だろうが、まっすぐに嘘無くぶつかっていけるから人はこの人に否応なしに惹きつけられる。

騙されても裏切られてもこの人はきつとこの生き方を変えないだろう。

ばかなやつ、でもあんたはそれでいいんだぜ、大将。あんたはどっしり構えて真っ直ぐに輝き続ける。

俺が影になって負の部分をすべて請け負ってやる。

「ああ、わかったぜ。明日は1日休暇を貰う。久々に島原にでも行ってみらあ。」

「ああ、すっかり休めよ。」

勝ちちゃんは満足そうにでっかい口をおっぴろげて破顔した。

\*

そんなわけで、俺は今島原にいる。

十代や二十代の初めの頃は女遊びも人並み以上にしたもんだが、今

となつては正直、面倒くささしかない。もちろん体の欲求として女が欲しいと思う時もあるが、色恋なんざとんとする気にはならねえ。それよりもやらなければいけないこと、考えなければいけないことは山程ある。

新撰組こそが俺のすべてだ。

だから女とか甘さとかそういうもんは邪魔にしかならねえ以上俺の今後には必要ない。

そんなわけだから正直島原に来るのは面倒くさかった。

適当に置屋を選び、どんな女でもいいとなげやりに告げた。

俺は茶屋の一室で待たされていたが、出窓から見える春の朧月がたおやかで美しかった。

春の月、一句作るか…

発句でもするかと思案していた時茶屋の主人の声が聞こえて女が来たことが告げられた。

「華雪言います。どうぞよろしゅうおたのもうします。」

ふすまが開くと、小柄な女が頭を垂れているが見えた。

浅黄色の着物に、結びあげた黒髪にはかんざしが小さく揺れている。顔は見えないがたたずまいに緊張感が感じられて、俺はげんなりした。

なんでこんながちがちに緊張した女めんどくせえだけだろ。

「ああ」

俺は無愛想に返事をする。女が顔を上げた。

その瞬間

心臓が

大きく一度跳ねた。

そこに居たのは水瀬だった。

第五章 6・演技：土方歳三

切れ長の形のよい瞳はくつきり際立ち、目尻に引かれた赤い紅、紅を挿したふつくらとした口元は控えめだが凄艶さを称えていた。

たおやかで儂いのに、凜とした雰囲気を醸し出し、息を飲むほどに美しかった。

確かに綺麗な顔立ちをしているとは思っていた。

ただ、袴をはいて男装し、竹刀を握っている姿しか見ていなかったから、女だということをつい忘れていたのだ。

こいつ下働きとして潜入したんじゃないのか？

こんな姿でうるついでたら一発でやられんだろ！

俺は無性に心がささくれ立つのを感じた。

ただ、ここで知り合いということを見せるわけにはいかない。

遊里と言つのはどこにどんな目があるのかわからないのだ。

俺は勤めて他人のふりをして、こいつがこんな風に客の前にかかるのが初めてであることを知り、安堵した。

こいつ自分がどんなふうにも男の目に映っているのか気付いてないのだ。

俺は水瀬の酌した酒を飲むけれど、正直、こいつが気になって気が気ではない。

俺が黙りこくっていることにさして気にするでもなく着物の袖をいじっている。

ふと水瀬がたちあがって

「お侍さま、手水いかしてもろてもよろしやるか。」

と言った。

ここに入って叩き込まれたのであろう京ことばもなかなか様になっている。

「ん、ああ。」

水瀬が優雅な振る舞いで出て行った。

ちくしょう。

なんでこんな姿見てしまったんだ。

よく考えれば水瀬は総司と同じ年なのだから二十一になったのだ。普通に暮らしていればとっくに嫁に行き、ガキがいてもいいころなのに。

こいつは何で、新撰組にとどまろうとする？

問者：

その可能性は常に頭の片隅にある。

だが、こいつはさして怪しい行動を見せるわけでもなく、毎日を楽しそうに過ごしている。

女だと隊士たちにはばれたときはどうなる事かとも思ったが、皆、こいつの真意を測りかねていた。

そうこうするうちに女だとかそういうことを意識することもなく、ごく自然にここになじんでしまったのだ。

山崎に素性の調査を頼んだが報告はまだない。

仕事の早い山崎にしては珍しい。

とそんなことを考えていると手元の杯が空になった。

俺は意外に思われることが多いが酒が飲めねえ。

正直二杯目を飲む気にはなれなかった。

俺は杯を膳に戻すと片膝を抱え、出窓から月を見つめた。

と、その時、ふすまが開いて水瀬の奴が戻ってきた。

腹が立つくらい、女姿は美しく色気があっておれを落ち着かなくさせた。

俺は水瀬から目をそらし、再び窓の外に目をやった。

ああ、茶がほしい。

「どうぞ。」

水瀬の笑いを含んだような声が聞こえ、視線を向けると、熱い茶を入れた湯呑みを差し出していた。

「！」

俺は心底驚いてしまう。

水瀬は屯所でもああ、茶がほしいと思うと、たいてい何も言わなくても茶を差し出している、そんな奴だった。

俺はなぜかすぐく照れくさくて、熱い茶をすすった。

「…うん。」

水瀬の淹れる茶は渋みや苦みがちょうどよくてうまかった。

水瀬はパツと花が咲いたように笑った。

そんな笑顔を見ると、こいつの美しさが際立ち、凜としていてどこまでも可憐だった。

俺はなぜか妙な錯覚をした。

水瀬がもし嫁だったら、こんな風に俺がほしいと思ったときにうまい茶を出し、そばで、いつも笑っていてくれるのではないかと。

そしてそんな自分にあきれた。

馬鹿な。

女なんてめんどくさいといましがた思ったばかりではないか。

とその時、



カサ

！

誰だ？

俺は瞬間的に刀に手を伸ばしかけ思い直す。

探っているのはたぶん俺だ。

さっきから窓の近くに居すぎたせいで姿を見られたか。

俺は内心舌打ちした。

馬鹿か、俺は。

いつもと違う水瀬に心を揺らされすぎた。

おめえらの好きにさせるかよ。

「…華雪、こつちへ来い。」

俺はことさら甘い声を出し、水瀬の肩をつかんだ。

水瀬は目を見開いてびっくりしている。

俺のこんな姿に気味悪がっているのが伝わってきて苦笑が漏れそうになる。

そのまま水瀬を押し倒し、口づけをした。

！

俺は瞠目した。

なんだ、これ。

俺、なんでこの感じ知ってたんだ？

水瀬とこんなことしたことあったか？

「や、…ん。」

水瀬が漏らした吐息に俺は現実引き戻された。

こいつ…

こんな声出すんじゃない。

「そんな声出してどうすんだ。もうとまんねんど。」

俺を探ってる奴に聞かせるつもりで言ったが、正直本心でもある。

こんなに目を潤ませてそんな顔されたら自制心が揺らぐ。

おれは内心舌打ちをしつつ、意識を外にいるネズミに向けた。

長州の奴か…？

俺は自分へいい含める意味も込めて水瀬の耳元で囁いた。

「（水瀬、少し我慢しろ、本気ではやらん。）」

「！」

水瀬は顔を真っ赤にしたまま硬直している。

水瀬着物の帯をわざと衣ずれの音をさせて解く。

シュツッ！

「あ、ダメ！」

水瀬が顔を真っ赤にして切羽詰まった顔で俺の手をつかんだ。

ばか、いくらなんでも本気でやるわけねえだろ！

なんてえかおしやがる

本気で、俺に抱かれると思ったのか。

全くうぶすぎんだろ。

こいつ分かってねえのか。

ただ本気で困って泣きそうな顔をしている水瀬を見るとさすがに気の毒な気もして

俺は外の奴に聞こえないように水瀬の耳に口もとを近づけて言った。

「（そうやってもっと聞こえるように演技しろ。）」

「!?!」

演技の意味がわかったのかあからさまにホツとしている水瀬にあきれてしまう。

そんなに怖いならこんなに誘うような表情するんじゃないぞ。まったく。

「…ひ、お侍さま、もっと優しく…あ!」

水瀬が密偵に聞かせるために言いかけた言葉をさえぎって水瀬の耳を甘噛みしてみる。

「ぎゃ」

水瀬が小さな悲鳴を上げたがそれからは眉を寄せてそれを受けていた。

おれはふと体の奥から湧き上がってくる熱い感覚を振り払うようにわざと音を立てて、耳をなめてみる。

「や、いや…あ…!」

水瀬は演技とは思えない甘い声をあげて、それが俺の理性を霧がかかったようにかすませてしまった。

ちくしょう。

やべえ

この先に進みたい。

こいつに俺の痕跡を残したい。

水瀬は目を潤ませ、顔を紅潮させ、俺を上目遣いに見上げた。

ばか!この状況でそんな顔すんな!

本気で止まんねえだろ!

「華雪はん、お時間どす。」  
時間を知らせる下働きの子供の声がして俺はハッと我に返り、完全に欲望に負けそうになった自分が無性に恥ずかしく、水瀬に後ろめたかった。

水瀬は泣きそうになって真っ赤なをして俺に背中を向けると素早く解かれた打ちかけを引き合わせ、帯を無造作に縛った。

怖かったのか、  
当然だろう。

上司に演技しろなんていきなり言われてやられかけたんだからな。  
俺は自己嫌悪に陥りかけた。

これが完全に演技で、あのネズミをだますために聞かせるためだけだったなら、俺はこんな気分にならなかつたらう。

さっき俺は何を思った？

一瞬本気で抱きたいと思った。

水瀬をほしいと思つて、もう少しあのままでいたら、  
きつと最後までいつていた。

そんな私心を持ち込んで演技のふりをした自分が醜くて、水瀬に申し訳なかつた。

俺は水瀬のほつれた髪をひと房手にとって耳にかけた。

その髪は柔らかく軽く触れた耳は小さく、かすかに熱を持っていた。

「無理させて悪かつたな。」

俺は努めて平静を装い言つと、そのまま部屋を後にした。

茶屋を出ようとすると、ふと後ろから呼びとめられた。

「お侍さま」

俺は背中をひねって顔を向けると、水瀬が息を切らせてたっていた。

「またよろしゅうお願いいたします。」

水瀬が輝くような可憐な笑顔を向けた。

！

水瀬の目に水っぽいものが溜まっているように見えた。

その笑顔はまぶしすぎて、自分の邪な心が見透かされそうであまく注視できなかつた。

無理させたな。

「ああ」

俺は小さく頷くと暖簾をくぐって茶屋を後にした。

水瀬、俺はおまえにこんな仕事、正直後悔している。

お前のおんな姿を誰にも見せたくない、

お前がまぶしいくらい笑顔を見せたとき、俺はそう思った。

勝手なもんだぜ。

女としてのお前を散々利用しといていまさらかよ。

俺はお前を行かせた。

俺は新撰組の鬼だ。

だから新撰組の副長として俺はこの選択を後悔してはいけない。  
待つ。

お前を。

春の月はぼんやりとしていて、その光は少し頼りなく見えた。



## 第五章 7・願い、桂小五郎という男

あたしの初一人お座敷はなんとか終わり、そのあとは化粧を落としてぼんやりしていた。

なんか複雑。

こうやって女として土方さんと向き合えて、好きな人とふれあえたことはどういう形でもうれしいのに

それは敵の目をくらます二セモノで、それがせつなくて。

そんなことに一喜一憂している自分がすごくちっばけに思える。

あたしがここに来た理由を思い出さなきゃ！

「ふう…」

あたしは文机という小さな机に突っ伏して悶悶としていた。

「華雪、初お座敷どうやった？」

部屋の入り口から声が聞こえ、あたしはバツと顔をあげた。

華香大夫は床入り（お客さんとエツチすることをそう言うらしい。）のあとなのに、そんな雰囲気は全くなくてどこまでも高潔な美しさがあるだけだった。

一度置屋を探ったら、華香大夫の床入りに遭遇してしまってその物音や声に、動揺したのだけれど、

帰ってきた華香大夫は少しも変わることがなかった。

それは凜としていて本当にきれいだった。

華香大夫はプロなんだ。

お客さんと床入りするときにはわずかな私心も表に見せない。

美しい笑顔の裏に、悲しみも涙も全部封じ込められるくらい、芯の強い女性だから、こんなに凜として少しも揺らぐにいられるんだと思う。

それって本当にすごい。

あたしはここに来て揺らいでばかりだ。

「華香姐さん…どうって別に…」

あたしは顔に血が上るのを感じた。

「ふふ、華雪はホンマ、わかりやすいなあ。

優しいお客さんやったんね。華雪が初めてをあげても惜しくないくらい。」

「初めてって…！違います！！まだあげてません。」

あたしは顔の前で手をぶんぶんふって否定した。

完全に華香大夫は勘違いしてる。

「いややわ。そうなん？」

そやったら何でそんな顔赤くしとるん？」

「…え…と…」

あたしはまさか知り合いだったなんて言えずに言い淀んでしまった。

「まさか…華雪、今日のお客さんのこと好いてしまったん？」

「えっ…そんなこと…」

違うって言わなきゃ。

だってあたしは…

「悪いことは言わんから、やめとき。遊女がお客はん好きになっただって方に一つも成就せんえ、

それこそ虹をつかむみたいなものや。」

そう言った華香大夫は遠い虹を見つめるように虚空を見つめていた。その表情は今まで見たことがないくらいせつなくて儂い悲しい笑顔を浮かべていた。

「…ま、それでもあきらめられへんから、恋なんやけどね。」

華香大夫はふ、と自嘲気味に笑った。

虹に届く恋…

方に一つもかなわない…追いかけても、追いかけても決して届くこ



とはない幻みたいな恋。

華香大夫はそんな恋をしているんだろうか。  
どんな苦しい恋を心に秘めているんだろう。

言えぬ想い。

言わぬ想い。

あたしの恋もきつとそういうモノなんだろう。

あたしは何も言うことができず、華香大夫の凄艶な、けれどとても  
さみしげな横顔を見つめることしかできなかった。

\*

それから数日あたしの身には特に何も起こらず、いつも通り、華香  
大夫のサポートとしてお座敷に上がり続けていた。  
そして思わぬ男と再会することになる。

「華雪、今日のお客はんはうちのおなじみさんえ。華雪がここに来  
てからは初めてやるか。」

華香大夫はうれしそうだ。  
それはおなじみさんが来てくれる、そういったもの以上に華香大夫  
を喜ばせているみたいだ。

もしかして華香大夫はそのお客さんのことが好きだから…  
だからこの前あたしにそんなことを言っただろうか。

そうしてあたしは華香大夫のおなじみさんという人が来ている座敷  
に一緒に上がることになった。

「吉田はん、おまつとさんどした。華香どす。」

歌うように華香大夫は言った。

「待っていたぞ。さあ、入れ。」

ふすまが開くと、そこには男性が2人いた。着流しを着崩した男の

人と、きつちりとした羽織はかまをきたそれよりも年上のまじめそうな男の人が一人いた。

着流しの人の年はきつとあたしよりも2、3歳年上だと思う。袴の人はたぶん土方さんくらいかもう少し年上。

あたしはその着流しの男性のほうに目を奪われた。

線が細く、けつして整った顔立ちというわけではないのに人を引き付けるのはその燃えるような漆黒の瞳によるものだろうか。一重瞼で細くて、常に笑っているみたいに優しい顔立ちなのに、目の奥には言い知れない暗闇が広がっている。

あたしはその人からであるオーラに圧倒されてしまう。

でもこの人どこかで見たことがある気が…

どこかは思い出せないけれど…

「さあ、あんたもあいさつし、吉田はんに桂はんやで。華雪。」

華香大夫に促され、あたしはあわてて居住まいを直す。

「吉田はん、桂はん、華雪どす。以後よろしゅうお願いもうしあげます。」

「華雪か…なかなか美しいな。」

吉田という人はあたしを見てにやりと笑ってよこした。  
ぞくり

言い知れぬ恐怖があたしを包む。

何、これ。

底冷えするような先の見えない恐怖。

「いややわあ、吉田はん、浮気どすか？うちが一番やっていいはりましたのに。」

華香大夫は形のよい頬を膨らましてすねた。

きつとこの吉田と言う人のことが大好きなんだろうな。

「ははは、吝気か。華香。」

どうです。桂先生。華香は可愛いでしよう。」

「ああ。そうだな。」

しかし吉田にこんななじみがいるとは思わなかった。」

桂という人はどっしりとした堀の深い人で笑うととたんに人懐こい顔になる。

それは近藤先生を思い出させるお父さんみたいな笑顔だった。

「で、桂先生、どうです？件のことは？」

「うむ。確実に進んでいるさ。」

例のことってなんだろう？

妙に含んだ言い方するんだな。

桂：吉田：

うくん聞いたことがあるような気がするけど…

残念ながらあたし高校時代地理選択なんだよね。日本史は全く分かんない。

だめだ、ここで考えていてもわからない。

あたしは今ただの遊女見習いになってこの場をやり過ごすしかない。

その後吉田さんは華香大夫といい雰囲気、まったりとした雰囲気でお酒を飲み、二人は床入りのために部屋を変えた。

あたしは桂さんと世間話をしていた。

「華雪は京の出か？」

「いいえ、生まれは江戸どす。」

「なぜ遊女になった？」

「え？」

「まだ見習いと言ったが…」

「生きるためどす。それ以外にありますやるか。」

「剣術をやっているなんてなかなかおてんばだったんだな、君は。」

この人、やっぱりただものじゃない。

あたしの手のひらをたぶん一瞬見ただけで剣ダコを見たんだろう。

一瞬心に走る緊張。

「何でうちが剣術やっとなんてわかるんどすか？」

あたしはさもびっくりしたとでも言わんばかりに能天気な声で聞いてみる。

「剣ダコさ。さっきお酌した時に一瞬見えたのさ。」  
あたしはまじまじと自分の手のひらをみて笑う。

「…実家は江戸で小さな道場やつたんです。父も兄も亡くなって閉めることになりましたけど…」  
小さなころから父や兄と稽古をしてました。女だてらにっついても怒られてましたけど…でも、剣術に女も男もないと思ってましたから…」

これも想定内の範囲内。

山崎さんと打ち合わせをしたとき、もし手のひらの剣ダコについて指摘されたら、と言われたのだ。

ただ、これはほとんどが事実だからすんなり出てきた。  
みんなどうしてるのかな。

つー兄、由紀子さんと結婚したんだよね。

あき兄ちゃんと朝起きれてる？

すー兄、あたしの代わりにちびっこ剣道の先生やってくれてる？  
お父さん、おしんこだけじゃなくて野菜もちゃんと食べて。

懐かしいな。

あたしはふと帰れるかわからないあたしの時代に想いを馳せた。

「つらい思いをしたのだな。」

桂さんはそう言って私を優しい目を見た。

あたしはあいまいに小さく笑って首を横に振る。

なんだか嘘をいろんな人につきすぎていて後ろめたい。

「…華雪、本当の名は何と言う？」

「え？」

何言ってるの、この人。

遊女にとって本当の名前を教えるのは、自分が身請けされるときだけなのだという。

それまでは何があっても言っではいけないのだ。

ここに潜入した時最初におかみさんから言われたことだった。

もつともあたしは二重に偽名を使っているから、華雪はお真なわけだけど…

「私はね、夢があるんだよ。この日本を欧米に負けない近代国家にすることさ。」

「…！」

「そのためには今の腐った幕府では駄目だ。

私と一緒に来ないか？華雪、新しい日本を一緒に作ろう。」

桂さんがあたしに向ける笑顔はまっすぐで、まぶしくて、何の偽りもないように見えた。

どこまで本気なんだろう？

罨？

あたしを怪しんでいるのか…

それとも…

ただ、この人の強烈なカリスマと求心力に嫌でも引きつけられる。

あたしたちの時代の日本の礎を築いた人なんじゃないだろうか。

幕末…桂…桂小五郎？

つて、あ、思い出した。木戸孝允！！

いくら日本史に疎いからつてさすがにあたしも木戸孝允は聞いたことがある。

この人は開国攘夷派、新撰組の対極にいる人なんだ。

この人を探ることがあたしの仕事だ。

でも…

あたしたちの未来の時代を守るためには、

滅びゆく新撰組じゃなく、新しい時代を開くこの人についていく方がいいんじゃない？  
そんな声が心のどこかで聞こえる気がした。

アタシハイツタイナニヲマモリタイノ？

何を…

150年後の日本？

歴史？

未来で待つてる家族？

あたしはそのとき新撰組のみんなの顔がふと浮かんだ。

馬鹿だ…

あたしは今こんなにもみんなに会いたい。

家族と同じくらいみんなに会いたい。

あたしは新撰組と共にありたい。

これがあたしの真実だ。

人の死に泣いた時も、剣をふるう怖さにおびえたときも、

あたしはいつだって、新撰組のみんなと一緒に居たかった。

志とかそんなんじゃない、ただ、みんなが好きだから、あたしにはそれしかない。

だからあたしは、新撰組のために、自分に任せられた仕事をするんだ。

だってそれしかあたしはできないもの。

この世界で何のつながりもなく、何も持っていないそんなあたしが出

来るのは。

…危険でも、この誘いは絶好のチャンスなのかもしれない…。

乗ってみるか…。

「桂先生、女子が泣かんような日本を見たいです。」

桂小五郎はふと笑い

「おいで。一緒に行こう。」

と鮮やかに言った。

第五章 8 春の小川、虎穴にいらすんば…

「華雪、仙吉はんきはったえ。」

「へえ。」

あたしも京ことばがだいぶん板についてきたと思う。返事も自然に出てくるようになった。

ちなみに仙吉さんとは山崎さんのことで、華雪に惚れこんで通ってくる商家のどら息子というわかったようなわからんような設定になっているのだ。

「えらいひさしぶりやなあ。華雪」

ほんとにこの才能にはびっくりしてしまう。

カメレオンみたいにその役になりきって溶け込んで、誰も気づかない。

「仙吉はん、さみしかったえ。」

「元気やったか？」

「ぼちぼちどす。」

「！」

あたしの近況報告をするのだけれどももちろん直接新撰組の話なんかにできないから「元気やったか？」

と聞かれ「へえ。」と言えば何も動きがない証拠、「ぼちぼちどす」と言えば探っていたものに何か動きがあったことを意味する、あたしただけの合図なのだ。

「ぼちぼちか。」

「えらい長いこと仙吉はんきいへんかったから、なんやほかの旦那はんについてこ思ったわ。」

”長い”、”ほかの旦那”、これは長州の男に接触したことを伝える合図。

「…そら悪かったなあ。どや、華雪の好きなどこ行くか？」

「ホンマに？せやったらうち甘味屋さんに行きたいなあ。」



「おっしや、連れてつたる。」

というわけで、あたしたちは同判みたいな感じでおかみさんに断つて控え目な薄紅色の着物に着替えてお店の外に出た。

「たぬきめ。ホンマ化けよつたなあ」

置き屋を出ると山崎さんはさも面白くてたまらないと行った風で噴出した。

たしかに普段のあたしの口調や雰囲気からすると信じられない変貌だろう。

「仙吉さんにだけは言われたくないです。」

仕事とはいえこんな風に山崎さんにべたべたするなんてあたしは激しく不愉快な気分になる。

「どこに目えがあるか分からんで、もつとしなだれかかった方がええんちやうか？華雪。」

ニヤリと意地悪そうに笑いかける。

このおとこ！

あたしは見えないように山崎さんの二の腕を思いつきりつねり上げる。

「いつ！何するん。」

「誰に狙われるかわからへんねやから気をつけてなあきまへんえ。」

仙吉はん。」

あたしはわざとらしく上目遣いでニヤリと色気たつぷりに笑ってやった。

ふーんだ、いい気味。

しばらく行つて、あたし達は鴨川の河原を並んで歩いてた。

ここまでに来るまでにすれ違う人があたしをじろじろ見ていくのが何とも居心地が悪い。

女らしい恰好は似合わないんだろうか。

歩き方もおかしいんだろうか。

あたしはいたたまれない気分ですつむいて足早に進んでいた。

周りからみれば、あたしたちは恋仲に見えるんだろうか？

あたしの隣が山崎さんっていうのが、なんとも残念な限りだけど。

あたしは山崎さんが聞いたらどつかれそうなことを考えながら周りの景色に目をやった。

遠くまで山々は春霞にけぶり、川までも春の装いをしているようで、石の間から伸びる草までも萌えるような生命の息吹に満ちている。

不意に一陣の風があたしの耳元を掠めていき、その春風にまで、柔らかくて、温かい春の装いが感じられた。

風に乗って桜の花びらがどこからか運ばれてきて、あたしはもうこちらにきて一年が過ぎようとしていることに気付き、愕然とした。

みんなどうしてるの？

元気にいる？

あたしはなんとかこっちでやってるよ。

心配しないで。

この春風に乗って、あたしの想いが現代にまで運ばれたらいいな、そんな夢みたいなことをあたしは思っていた。

「で、誰に会ったん？」

山崎さんは、ふいに低いトーンの声色で、ぼんやりしていたあたしを現実に戻す。

感傷に浸っている場合じゃない。

あたしにはやらなければいけないことがあるんだから。

「桂小五郎と吉田って人です。」

あたしも笑みを浮かべたまま小声で言う。

「！」

「なんかの計画が進んでるって。それが何かは結局わからなかったけど。」

「そうか。桂小五郎は攘夷派の中心人物やし、吉田稔磨もその右腕になりうる要注意人物や。」

「吉田稔磨って言うんですね。あの人、あたしもしかしたらどこかで会っているかもしれない…。」

「なんか嫌な目つきが気になりました。」

「男装してた時に会ってたかもしれないへんちゆうことか。」

「まあ、雰囲気も全然違っし、よっぽど大丈夫やと思うけどな。」

「そうだといいんですけど。ああ、あと桂小五郎に身請けを進められました。」

「なんやて!？」

これにはさすがの山崎さんも一瞬瞠目した。

「新しい日本を作るために一緒に行こうって。」

「それで。」

「そんな国見てみたいなあって答えました。危険だけど絶好の機会かと思つて。ただはつきりとは言つてないです。」

「危険すぎるわ。相手の意図も分からんで。罠かもしれないやろ。」

「ええ。だからこそです。何かを企んでいるのは事実ですから。それを知るためにはやっぱり危険を侵すことも必要かと思つて。」

「華雪は、吉田に顔知られてるかもしれないへんねんで。」

「あたしが向こうの罠に気付かずこのこ乗り込んで行ったら、向こうは安心して尻尾を出しそうじゃないですか？」

「！」

「もし、面倒なことになりそうだったら、その時は裏切り者としてあたしを斬ってください。」

「みな、華雪、お前…。何でそこまで…。」

「新撰組が好きだから…。ですかね。」

「…分かった。お前がそこまで言うならやってみ。

ただ殺されるかもしれないし、俺らが殺すことになるかもしれない。

その覚悟でやるんやぞ。今までみたいに、外には出られん。全くの一人になるんや。」

「…はい。」

どうしてここまでやるの？

そう聞かれれば”みんなが好きだから”としか言いようがない。

だから信じてほしいのだ。

あたしのことを。

## 第五章 9・揺らぎ、君のいない日々：沖田総司

屯所の桜が満開に近づいている。まことに逢ったのはこんな桜の季節だった。

もう一年がたったんだ。

今まことは病気で江戸にいるらしい。突然二月くらいまえに元気だったのに病気が見つかったから江戸で療養することになったのだ。まことのいない毎日は張り合いがなくて、無色彩に感じてしまう。

「なんだよ、総司、ぼんやりして。最近元気ねえな。」

縁側でお菓子をつまみながらぼんやりしていると佐之さんと永倉さんに声をかけられる。

「そんなことないですよ」私は曖昧に笑ってひねり菓子を口に放りこむ。

「水瀬か？」

永倉さんが言った一言に思わず菓子を喉につまらせ咳き込む。

「ゴホツゴホ！なんですか、藪から棒に。」

「分かりやすいな、お前。」

永倉さんはニヤリと笑う。

「わかつてるぜ、お前が水瀬を好いてることくれえ。」

「！」

「な、そうなのかよ、総司！ぱつつあんなんでしってたんだよ。」

「佐之は鈍すぎだぜ。女嫌いの総司があんなに水瀬と一緒にいて笑ってたんだぜ。恋があるに決まってるんだろ。」

「そんなんじゃないですよ。」

わたしは努めて冷静を装って言った。

「水瀬、早く帰ってくるといいな。もう二月だる療養ってどこなんだよ？」

佐之さんはどっかりと腰をおろしながら言う。

「江戸だろ、近藤先生の知りあいんどこらしいぜ。」

永倉さんは無精ひげをいじりながら言った。

「そつだよなあ、そのはずなのに水瀬に似た奴見たんだけ。こないだ島原で。」

え？

どういうことなんだ？

「はあ？なんであいつが島原にいんだよ。また佐之はいい加減なこ  
と言つて。」

「だから似た奴だつて。なんかすっげー美人な女だなあつて思つて  
たんだけどよ、どことなく雰囲気かいてんだよ、水瀬に。」

「あいつが島原？似合わねえ。あんな色気の欠片もねえやつがなあ。」

永倉さんは面白そうに笑つた。

「やっぱりぱつつかんもそう思うか。」

顔はいいのに、腕つぶしは並みの男以上つてのがおもしれえよな。  
女だつて聞いてもまだ男にしか見えねえつていうか。」

「ちげえねえ、あははは。まあ、並みの女じゃねえのは事実だろ。」

芹沢さんに啖呵切つたり、髪を斬つて見せたり全く見ててひやひや  
だぜ。」

佐之さんと永倉さんは大口を開けて笑っている。

この人たちの能天気なくらいな明るさを目の当たりにすると、こち  
らまでクスリと笑つてしまふ。

にしても…

まことに似た女。

会つてみたいな。

「佐之さん。」

「ん？なんだ総司。」

「その…まことに似た人つてどこで見たんですか？」

「ん〜どこだったかなあ。何つー置屋だったかな…  
つてなんでそんなこと知りてえんだ？」

「つと…それは…」

「野暮だなあ、佐之、そんなのその女抱いて水瀬がいななさみしさ  
紛らわせるために決まってるんだろ。うれしいねえ、総司が女嫌いを  
克服して。」

永倉さんはにやにや笑いながら私の肩に手を回す。

「っ！違いますよ！ちよつと好奇心から見てみたいと思っただけで、  
そんな…抱くなんて…！」

「別に遊女なんだから構わねえだろ？」

佐之さんは何が問題だ？とでも言うように眉根を寄せた。

「そういう問題じゃないでしょう！」  
まったくこの人たちは…。

自分が色恋に奥手なことは重々承知している。

女子が苦手で…理解が出来ない。

それは今も変わらなくて…

まして遊女なんて私が最も苦手な人たちかもしれないのだ。

だからまことに似た人を少し見てみたいと思っただけで…ほかに理  
由はないのだ。

\*

結局来てしまった。

こんな風に華やかな場所は気後れがしてしまう。

まだ日が高くて、客見せも始まっていないから、遊女らしい姿はま  
ばらだ。

と、その時、前から男と女が二人歩いてくるのが視界に入った。

あれ？

山崎さん？

新撰組の監察方を務める山崎さんは平隊士にはその存在がほとんど

知られていないのだが、島原で、密偵でもしているのだろうか？  
え？

隣に居るのはどうやら遊女らしいけれど、控え目な薄紅色の着物を  
まとったその人は高潔な凛としたたずまいで美しく、どこか面影  
がまことに似ていた。

まこと？

なんで、山崎さんと一緒に…

その人は山崎さんのほうを向くと妖艶な笑みを浮かべていて、  
見ているこちらがどぎまぎしてしまう。

まことじゃない？

まことはあんな笑い方しないし、面影はあるけど、こんなところに  
居るはずがない。

でも…似ていた。

苦しいくらいまことに似ていた。

\*

「ねえ、土方さん？」

「なんだよ。しけたつらして。」

土方さんはうるさそうに眉根を寄せるけど、私は特に気にすること  
なく土方さんに話しかける。

私は昼間のことがもやもやしていて、なんとなく誰かに話したくて  
…副長室に押し掛けたのだ。

「まことは…今本当に江戸に居るんですか？」

「はあ？」

「なんか今日まことに似た人と山崎さんが寄り添ってるのを見たん  
ですよ。」

「だからなんか気になったんです。」

「！ふうん。」

わかるかわからないかくらいの小さな動揺が土方さんに走ったのが



長年の付き合いで分かる。

まさか…！じゃあ、あれは本当に？

「って、土方さん、あれはまことなんですか！？」

江戸に居たんじゃないんですか？なんで島原に居るんです！」

「うるせえ。ちったあ静かにしろ。」

「…密偵ですか。」

「ああ。」

「なんでそんな危険なこと、まことは女子ですよ！？」

「だからだろ。島原に山崎は送りこめねえからな。女のあいつにしかできねえことだ。」

「でも…！島原なんて…！迫られたりするんじゃないですか！」

「あいつはここに居る以上隊士だ。女中として置いてあるわけじゃねえだろ。危険な仕事してるのはあいつだけじゃねえだろ。命かけてんのはみんな一緒だ。」

あいつにやるか？聞いたらやると言った。だから送りだした。それだけだ。」

「…教えてください。まことの居場所を。」

「その必要はねえ。」

「土方さん！」

「総司！！おめえがそれを知ってどうしようってんだ！」

「…！」

「お前が、水瀬を連れて帰り、それで水瀬の安全を確保して？それで？そのあとは？」

お前が代わりに情報とってこれんのか！？

総司、お前は武士だろ、ならたかが女一人に揺らぐんじゃねえ。」

「…」

私は唇をかみしめて

じっとしていた。

土方さんの言うことはいちいちその通りで…

私はこんな未熟な自分がどうしようもなくふがいなかった。

以前はこんなことはなかった。

こんな風に動揺したりすることなく、武士としてなすべきことをすることができたはずなのに……

私はなぜこんなにも弱くなってしまったのだろう。

女子姿で山崎さんに笑いかけていたまことは胸が締め付けられるくらいに可憐で美しかった。

それだけで、わたしは体が引きちぎられそうなくらい苦しくて嫉妬している。

土方さんは何の揺らぎもなく、きつとまことを送りだしたんだろう。

すべては新撰組のために。

すべては近藤先生のために。

きつと土方さんにとってはそれがすべてだから。

まことはそれをどんなふうにも受け取ってんだらう……。……

第五章 10・信じる…土方歳三

「副長、山崎です。」

その場の沈黙を破るように山崎が定例の報告に来た。

「はいね。」

ふすまが音もなく開くと大工道具を抱えた山崎が一瞬目を見開いた。

「沖田さんもいはったんか。」

まったく総司の奴。

総司が一人の勝ちゃんは別にしてこんな風に一人の人間に固執するのは珍しい。

惚れたか。

こいつの女嫌いには勝ちゃんも、山南さんも心配していたものだが、水瀬が来たときはまさか総司が女に惚れるとは思わなかった。

「総司、ぐちゃぐちゃ悩むだけなら他所行ってやれ。」

俺は殊更そっけなく言った。

「…。私にも聞かせてください。」

総司は唇をかみしめてうつむいている。

「だったらしゃきつとしろ。」

「副長、長州に動きが見られました。」

「「！」「」

きたか。

「水瀬が桂小五郎と吉田稔麿に接触しました。」

何かやっぱりたくらんどるらしいですね。まだ具体的なことはわからんらしいですが…

それと…桂が水瀬を身請けするゆうたらしいですね。」

桂に吉田か…。どちらも要注意人物じゃねえか。

やつら何をたくらんでいやがる？！

それよりも身請けだと！？

あいつ、どうしようってんだ？

「なっ…！！」

総司は切れ長の目を見開いている。

「それは…桂は水瀬を…ってことか。」

俺はふつつ湧いてくる怒りを爪を手の皮膚に食い込ませてどうにかやり過ごした。

自分に対して歯ぎしりしたい気分だ。

かつてこんな自分に腹が立ったことはない。

こんな状況に追い込んだのは俺のせいだ。

新撰組副長としての俺のこの判断は確かに成功している。

だが、一人の男として俺は女一人にこんな犠牲を強いている自分に吐き気すら覚える。

「たぶん…そういうことかと…」

水瀬はそのことについては何もいっくらんかったですが。

ただ、畏かもしれんけど探りに行ってみたいゆうてました。」

「危険です！やめさせてください。山崎さん！」

総司はこぶしで畳を叩き、悲鳴みたいな声を上げる。

「もし…敵として対峙しなければいけなくなったら…その時は裏切り者として斬ってくれと。水瀬はそう言っ取りました。」

「…！！」

俺の脳裏に水瀬の泣き笑いみたいな笑顔が一瞬浮かんだ。

そうだった。

あいつは何があっても無理して笑えるような強い女だ。

あのときだって、

本当は嫌だったはずだ。

怖かったに違いない。  
でもあいつは最後には笑って俺を送りだした。  
だから、俺は待つ。  
必ず。

まったく  
なんて女だ。

水瀬、やっぱりお前はただ守られているだけの女じゃねえんだな。  
俺は新撰組を背負うものとしてお前を送りだした。

幕府のためになんて言わねえ。

俺は勝ちやんと新撰組のために。

この選択をした。

この選択を一人の男としては正直後悔していたが、

そんな後悔を抱くことすらお前を侮ったことになるのかもな。

情けねえ。

腹据えて、おめえの働きを見守ってるからよ。

「…やっぱりあいつは、ただの女じゃねえな。  
俺らのほうがうじうじなさけねえ。あいつはよっぽど胆が据わって  
るぜ。」

「まったくです。」

はじめはあんな色気のない女大丈夫かと思いましたがね、着飾れ  
ばなかなかどうしていっぱしの遊女になりきってますよ。」

山崎は水瀬のことを思い浮かべたのか面白そうに言った。

山崎もあいつのことを買っているんだな。

「ただ、あいつは男の目に自分がどう映っているのかを分かったら  
んのが心配ですわ。」

まったく己がどういうふう他人の目に映るかを知ること俺は重  
要やと思いますけどね、まだまだですわ。」

山崎は少し眉をひそめ、嘆息するとぼつりとつぶやいた。

確かに、女子の着物を着て遊女の化粧をした水瀬は俺たちが見なれ  
たいつもの水瀬ではなかった。

たおやかで、美しく、それでいて凜とした気品を備えた白百合のよ  
うで惹きつけられずには

いられないだろう。

不意にあの夜の水瀬が思い出された。

着物ごしでも伝わる細く華奢な体。

化粧のせいばかりではなく、内側から真珠みたいに輝くような白い  
肌。

あの夜、顔を真っ赤にして、目を潤ませて俺を見上げた

あいつは桂にもそんな姿を見せたのだろうか？

ほかの男にも？

冗談じゃねえぞ。

そう思うとふつつつと胸の奥底が沸き立つのを感じ、そんな自分に  
あきれた。

なんだ？

この気持ちは？

まるで恋を覚えたばかりのガキの嫉妬みてえじゃねえか。

恋？嫉妬？

ばからしい。

九つも年若の女に心を乱されてんじゃねえよ。

お琴と決別してから、俺は武士の道、修羅の道を往くと決めた。  
だからそんな気持ちは捨てたんだ。

それに…総司は水瀬に惚れている。

今まで、女を遠ざけることしかしてこなかった総司がまともに惚れ

たんだ。

十年間総司を弟みたいに見てきた俺の努めは、あいつの恋が成就するように見守ってやることだけだろう。

「なあ、総司。おめえの惚れた女はこういう女だ。

意地っ張りで、強情で度胸も潔さも一筋縄じゃいかねえ。

男はどっしり腰据えて待つしかねえだろ。」

俺は煙草の煙の向こうの総司に目をやった。

「そんなんじゃないです！私は武士です。

だからその時が来たら…斬りますよ。誰だろうと。」

総司は顔を真っ赤にして俺に噛みつくように言った。

「ふん、そいつぁ頼もしいな。」

こいつも意地っ張りなガキだからな。

いつまでもフワフワしたガキだと思っていたら、こいつが恋なんかするようになったのか。

勝ちゃんは知っているだろうか。

どんな顔するだろうな。

知らねえ間に恋なんかするようになったんだな。

うれしいようなさみしい気持ちが生まれる。

この気持ちは子供を巣立ちを見守る親の気分なのか、どうなのか、俺には測りかねた。

この春の月をあいつも見ているだろうか。

## 第五章 11 虹を追いかける、華香の恋

誰だったかなあ。

あの吉田って人どつかであったことある気がする。

あのニヤリって冷たい笑顔が気になるんだよな。

うーん

ダレ？

あたしは恒例のお勤め前に朝のお風呂を済ませて、部屋に戻り

お風呂上がりで濡れた髪を手拭いでターバンみたいに包み、畳に大の字に寝転がって考えていた。

ちなみに遊女のお風呂は午前中に済ませるのがこの習慣らしい。

起きぬけに入るからのぼせてしまうけど、これから熱くなってくるから寝汗をさっぱりできるのだけはありがたい。

そんなことより、

ああ、分らないな。

でも…ここで唸っててもしょうがないか。

らちあかないし。

これからどう動くべきかを考えないと。

桂小五郎の爆弾身請け発言から一週間、山崎さんにそれを報告したのはおととい、今日はまた桂小五郎と吉田が来るので、華香大夫とあたしはお座敷に上がることになっている。

「華雪、はしたないえ。そないに寝転がって。」

お風呂から上がった華香太夫は寝転がるあたしを見て呆れたように苦笑した。



濡れた髪をサイドに流して頬を上気させた華香太夫はいつもとはまた違った色気があって、あたしをドキドキさせた。

「華雪、身請け話うけはるん？」

華香大夫は意を決したように聞いた。

「受けようかと思つてます。桂先生はご立派な方ですし。」

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

危険だけど、行くしかない。

あたしはあたしにしかできないことをするんだから。

「…華雪、あんたが初めて1人でお座敷上がったときのお客はん、誰か知つとる？」

華香大夫は無意識なのか手の中の手ぬぐいを握りしめている。

「さあ…名乗られませんでしたし…」

一応そう言つておかないとね。

あの時も他人で通したし。

「あの人、新撰組の土方はんやで。」

「はあ…」

あたしは何と答えていいのやらわからずに、あいまいに答えることしかできない。

あたしの上司です、ともいえないし。

「つて分かつてんの？」

あの人には壬生狼なんやで！ゆうたら桂先生とは敵や。

桂先生の身請け話を受けるゆうことは、土方はんの敵になるんやで。

「こんなに一生懸命になつてくれることがありがたくて申し訳ない。

「華香姐さん、そんな…その、土方さんとはあの時単に一度お座敷に上がったつて言うだけで何もなかったですし、華香姐さんがいうような恋とかじゃない…ですよ。それに遊女がお客さんに恋するのは万が一にも叶わない、虹に届くような恋だつて言つてたじゃないですか。だからいいんです。」

桂先生ともまだ…何も無いですけど、早いうちに身請けしてください。早くそれでいいんです。」

虹に届くような恋…

あたしは今、正にそんな恋をしている。

決して結ばれない人。

結ばれてはいけない人。

その人にはたぶんずっと忘れられない人がいて、

あたしのほうを見てくれることはないと思う。

そしてあたしはこの時代の人間じゃなくて…

世の中の理を曲げてしまうから…

だから伝えてはいけない。

伝えない。

あたしの恋には越えられない二重の壁がある。

歴史の壁と、片思いの壁。

でもあたしは気付いている。

あたしは逃げてるんだよね。

土方さんに伝えれば拒絶されるのは目に見えているから、

だからそれを聞くのが怖いから。

伝えてはいけない恋なんだって正論よろしく思つことで納得させよ

うとしてるんだ。

でも…やっぱり言えない。

あたしは新撰組が好きだから。

ここに居たいから。

だからあたしは、自分にできることを、頑張る。

それだけだ。

「華雪、あんた死んだらあかんえ？」

「…！何言ってるんですか。死にませんよ。」

あたしは嫌な汗が背中を伝うのを感じた。

華香大夫は何を知ってる？

あたしの正体を知ってる？

華香大夫と吉田稔麿とのつながりは何？

「…うちな、吉田先生が全てなんや。」  
ぼつんと華香大夫がつぶやいた。

こんな華香大夫をいつか見たことがある。

「初めておうた時、こない優しくうて、まぶしい人おるんかと思っ  
たんよ。そう思った時にはもう愛おしゅうて、愛おしゅうて、どう  
しようもなくなってしまった。吉田先生はお客さんで、うちは遊女  
で、そこにはどうにもならん壁があるって言い聞かせてもあかんの  
や。それでもうちは…好きなんや。」

せやから、何が何でも、何を犠牲にしてもうちは吉田先生がほしい  
んや。阿呆やる？」

そう、遊女とお客さんの恋は虹に手を伸ばすようなものだど、そう、  
どこまでも儂げで切ない表情でそう言った、あの時と一緒なんだ。

「吉田先生は、華香姐さんのおなじみさんでしょう？」

身請けとかそういうこともあるんじゃないんですか？」

「ふふふ、吉田先生は虹みたいなんや。決して近づけん。近づ  
いた思うたらそこにはおらん。そんな人なんや。」

「それはどういう…。」

「吉田先生は誰も見とらん。決して女子を顧みるような人やない。

あの人が見とるんは一人の女子よりもずっと大きな夢。日本  
の未来よ。」

「…！」

華香大夫とあたし、吉田稔麿と土方さんが重なった。

土方さんが見てるのは武士の誠。

幕府と日本の未来。

そして新撰組。

その男の人の誠の前には女の恋心なんて比べるまでもなく、むしろ  
目にすら入らないのかもしれない。

本当だね、華香大夫。

あたしたちがしてるのは虹を追いかける恋だ。

決して届かない、

届かないことは嫌になるくらいわかっているのに、  
でも追いかけてはいられない、  
その幻にも似たせつない憧憬を。

「うちな、夢があるんよ。」

「え？」

「吉田先生とな、島原の外と一緒に歩きたいねん。」

「島原の外？」

「うん、いつもな、島原大門の外に桜並木が見えるやろ。」

あそこを一緒に歩けたらいいなあと思うんや。欲を言うなら、満開の桜の下やったらなあおいいなあ、そこで一度でいい。本当の名前で呼んでもらえたら、死んでもええわ。

ふふふ、そんな夢、罰あたるな。」

華香大夫は小さくほほ笑んだ。

その笑みはどこまでも澄み切っていて…

そして哀しいくらいまっすぐだった。

あたしは何も言うことができなかった。

ただ胸がいつぱいで…、

油断すると涙がこぼれそうだった。

だって…ただ一度、桜並木の下を並んで歩く、名前を呼んでもらう…  
それが夢だなんて、せつなすぎる。

「さあ、おしゃべりはやめや、華雪、支度すんで。」

軽く手を叩いて腰を上げた華香大夫はいつも通り、あでやかで、非の打ちどころのない美しい華香大夫しかいなかった。

その夜、あたしはお座敷で桂小五郎の身請けの話を受けると桂とおかみさんに言った。

## 第六章 1・桂邸潜入

桂小五郎に身請けされ、桂邸に移ってきて3日。

あたしは桂小五郎の身の回りの世話をしながら何事もなく過ごしている。

毎日何か書き物をしている桂に、お茶を出したりしながら、日本と外国の違いなんかを楽しそうに語る桂小五郎の話を聞いたりしていた。

あたしは不自然ではない程度に、未来ではきつとこんな風になる、と相槌を打っていたのだけれど、

ずつと押さえていた平成の時代への想いが、桂小五郎には素直に話せて…

予想以上に、あたしは桂との話を楽しんでいた。

それが新撰組への裏切りに思えてなんだか後ろめたい。

なんだかその様子は武士になる夢を語り、幕府への想いを馳せる近藤先生に似ていた。

男の人は自分の志を語る時、こんなにも純粹に目を輝かせるんだ。それは土方さん然り、総司然りなのだけれど。

幕府と天皇。

佐幕と攘夷。

決して相容れない二つの考え方なのだけれど、

その志のもと走っていく男たちは同じように目を輝かせて、その夢を語る。

きつとどちらが正しいなんて言えない。

ただ、歴史がどちらかを選ぶというだけなのだろう。

けれどどんな結果になっても、この人たちはきつと自分の選択に誇りを持って、自分の信じたもののために死んで行くのだろうと思う。そして「武士だから」という言葉で納得させられてしまうのだ。

雲が流れている。

季節はもう初夏に移り変わっていて、時折耳元を掠める風が爽やかで、空は抜けるように青い。

あたしここに来てから波瀾万丈な人生送ってるよなあ。

雷でタイムトリップして

新撰組に身をおき、

遊女としてスパイ活動をして、

挙げ句の果てに桂小五郎んとこに潜入するなんて、

スリルとサスペンス満載、おまけに死の危険ももれなく付きまとっている。

\*

桂にお茶を持って行くと、一口口をつけておもむろに口を開いた。

桂小五郎は彫の深い顔をしていて、きりっとした眉や通った鼻筋はなかなかの男前と評されているらしい。あたしはあまりタイプじゃないけど。

「華雪、身請けの話受けてくれて嬉しいよ」

「桂先生、なんでなんですか？」

あたしは思い切って聞いてみた。

「何がだい？」

「だってあたしたちはこないだ初めて会ったんですよ？なのに何で……」

これで喋るとは思わない。

でも糸口が掴めれば…

この人は何を企んでる？

あたしのことをどこまで信用しているのか。

「ふふふ、疑り深いねえ、華雪は。だったらどうして身請けを了承したのかな？」

「先生の話はご立派だと思いましたが、あたしは遊女には向いていないと思ったので、島原から出られるなら正直誰でもいいって思ってたからです。」

このできすぎた身請け話を受ける理由としては一番無難だろう。

「ははは、正直ものだね。」

…華雪は私に惚れているかい？」

「は？」

いえ、あの、ご立派な方とは思いますが…先生のおっしゃる好きとは違うかと。」

あたしは桂の意図が掴めなくて目を白黒させた。

初対面のおじさんをどうやって好きになるって言うんだろう？

何が言いたいのか？

「華雪は正直だ、だから私は華雪がほしいと思ったのさ。」

「それはどういう…？」

「君とは惚れた腫れたとかいう甘い感情のやり取りをしなくてすむと思ったからさ。」

そんなものは今の私には邪魔でしか無いからね。

だから君とは同士として共に往くことが出来る、そう思ったんだ。

それに…君には誰か想う人がいるだろう？」

「…！」

なんで、土方さんのこと華香太夫が言ったんだらうか？

「華雪は本当に分かりやすいねえ。そんなところも大好きだ。おかみに聞いたよ。町方の商家の息子が華雪に入れあげてるって。その簪もその彼からもらったのかい？」

あたしってばバカ。



想う人って言われて即座に土方さんが思い浮かぶなんて。

よく考えれば、土方さんなんて一度気まぐれにふらつと来ただけのお客さんなんだから、おかみさんが覚えてるかどうかもわからないの。

にしても山崎さんのサポートの賜物だ。

いつもお守りがわりに着けている斎藤さんの簪のこともそんな風に解釈してくれたら儲けものだし。

「そんなんじゃないです。仙吉さんは…確かに良くしてくれますけど、あの人では、いくら下っ端でも遊女を身請けしたり出来ないでしょう?」

身請けには莫大なお金がかかる。あたしはまだ入ったばかりの下っぱだから太夫に比べれば全然だけれどそれでもほいほいできるよ  
うなものではない。

「ふふふ、華雪はなかなか現実的だ。華雪くらいの年なら恋だの愛だの騒ぎたいんじゃないのかい?」

なんで恋愛ことになるこの人は女を見下したようになるんだろう? 日本  
の将来について語っているときはあんなにさわやかで素敵なの  
に。

「別に恋ってしようと思っ  
てするものじゃないでしょう。気づいた  
ら目で追ってる。気づいたらその人の事ばかり考えてる、そんな感  
じじゃないですか?」

そう、恋はするもんじゃない、墮ちるもんだと思う。

自分ではとてもコントロールできない。

感情のすべてがその思いに左右されてしまっ  
て…

まさに狂気。

でもその人を想う時、苦しいのに至福なのだ。

「恋なんて一時の熱病みたいなもんだら  
う? 喉元を過ぎればなんと  
やらってね。」

「確かに恋って狂気みたいだっ  
て思います。でもその人にとっての

本気の想いを否定することなんて誰にも出来ないと思います。みんながそれぞれ自分の想いに一生懸命なんだと思うし。」

「なるほどね。華雪はさしずめ片恋でもしているのかな？」

「！」

そんなんじゃないです！あくまで一般論としてです。」

なんだかのらりくらりとはぐらかされてる気がする。

この人つかめない。

「いい目をするねえ。挑戦的で凜としていて、何物も侵せない、そんなまつすぐな目だ。

でもそんな目をあまりそこかしこではいけないよ。

華雪は自分が人にどう映っているか考えたことがあるかい？」

「え？」

そんなのはいつも考えていた。

それこそ嫌になるくらい。

ここに来てからあたしはみんなに嫌われたくなくて、居場所がほしくてずっともがいていた。

人からどう見られるのか、あたしはすごく気にして生きてきたと思う。

なのにそんなことを言われるなんて、

あたしは自分をわかってなさすぎなんだろうか？

「ふふふ、そんなに難しい顔をしなくてもいいよ。華雪は女性としての自分の魅力を分かっていないと言いたかっただけだからね。」

「は？」

散々色気がないだの、貧乳だの言われ、

拳句の果てには男に間違われてたあたしに女の魅力??

「やはりわかっていないね。華雪は美しさもさることながら、内面から出る凜としたたたずまいや芯の強さに男たちは憧憬を掻き立てられるのだよ。」

なんかわざとらしいというか、しらじらしいというか、こそばゆい気分になる。

何を狙ってるんだ、この人？

クサイ上にサムイ。

「そんな疑うような顔をするのはやめなさい。

男のほめ言葉は素直に受け取るものだよ。

女子は褒められるほどに奇麗になるからね。」

「ぶっ」

あたしは失礼ながら嘖き出してしまった。

あまりにもキザ過ぎて…

なんか化粧品のCMにありそうだし。

「心外だなあ。私は本気だよ？華雪。この状況で嘖き出されたのは初めてだよ。」

桂は眉根を寄せて憮然とした表情であたしをにらんだ。

その表情は桂小五郎の素の顔に見えてなんだかおかしかった。

敵陣の真っただ中にいるのどこか現実感がなかったのだけれど、あたしはこの後起こる出来事に、この状況の危険さを身をもって知ることになる。

## 第六章 2・吉田稔麿の正体、手の上

元治元年、1864年5月。

季節は夏になった。

あたしがいた現代と違って暦がずれているので、今は夏なのだ。

昨日までじめじめした雨が降っていたけれど今日は珍しく晴天だ。

あたしが身請けされてからはや1か月。

あたしが密偵を始めてからはもう3カ月が経とうとしている。

山崎さんは桂邸を知らない。

たぶん探索を続けてはいるだろうけど、

あたしが自力で抜け出すまでは山崎さんもこちらに接触することができないから早く何らかの情報をつかんで抜け出さないと。

ただあまり具体的な情報がないのが現状で。

何かの計画が水面下で動いていることだけはわかるのだけれど…。

桂邸では定期的にサロンが開かれていて、日本の今後の在り方について語られているのだ。

ここにきてわかったのは、幕府の中にも尊攘派が隠れているということ。

そして尊攘派にも過激派と穏健派があつて、正直みんなそれぞれちよつとずつ意見が異なっているのだ。

桂小五郎を頼つて、何人かが訪ねてきている。

あたしはそのたびに桂小五郎という人間の人脉とカリスマに圧倒された。

桂はその弁と、人間力で多くの人を惹きつけてやまないのだ。

今日は長州の尊攘派一派の会合がある。

それもけっこう重大な話し合いらしいのだ。  
…今日勝負をかけるつもりだ。  
きつとつかんで見せる！

…

\*

月が天中に上がり、虫の声が庭木の合間から絶え間なく聞こえてくる。

あたしは髪を低い位置で結び、浴衣の裾を膝までたくしあげて5センチ幅くらいの白い帯でしっかりと結び、ひざ丈にした。

袖もたすきで結んで、腕まで出して、護身用に蔵から拝借した脇差しと斎藤さんからもらった簪を一緒にしっかりと帯にさすと、いざ床下にもぐりこんだ。

足も腕も出し放題。

この時代にしたら裸みたいなもんで、

今のあたしは露出狂並みの肌の出し方だ。

もう女にあるまじき格好だけど、背に腹は代えられない。

これは賭けだ。

もし露見すれば確実に死ぬ。

ほこり臭い床下に眉を寄せたまま注意して低い姿勢で桂の部屋の下を目指して進む。

肌を出した部分を蚊に食われて猛烈にかゆいけど我慢だ。

「…だ。」

話し声がする。

あたしは全身を耳にしてその話し声に注意を向けた。

「あとは柵屋…古高の情報…だな。」  
ふるたか？

ますや？

誰？

「火薬…銃創の確保は…？」

「滞りなく」

なに？

武器集めてどうすんの？

耳がだいぶ慣れてきた。

聞こえる。

けど何なのかわからん！

「…玉は？」

「鷹司殿に…ご誘導いただこう。」

ぎよく？

たかつかさ？

「肥後と中川宮はだれが？」

「…がいいだろう。」

「これで決まった。」

なんのことはよく分からないけど、でも何かをたくらんでいて、その経過報告会なのは間違いない。

ますや

ふるたか

火薬や弾薬などの武器の収集

鷹司

ぎよく

ひじ

なかがわのみや

たぶんこれらはキーワードだ。

これを伝えれば土方さんや山崎さんはわかるかもしれない。

深入りは禁物だ。

もう十分すぎるくらいあたしは足突っ込んだんだから、とつとつとんずらするに限る。

「…にしても、あの華雪とかいう遊女はどうです？桂先生、何か尻尾を出しましたか？」

!!!!

あたし!?

この声吉田稔麿だ。

「いいや。なかなか骨のある女子だよ。怪しい動きは何もない。」  
面白そうに含み笑いをする桂の声が聞こえる。

「吉田先生、華雪とは一体どういう女子なのです？」

「新撰組のネズミさ。」

!

吉田は気付いてた!?

なんで?

いつから?

「華香に探らせていたんだ。新しく入った遊女をこちらに引き込めるか調べるとね。」

初めて華雪を見たとき驚いたよ。どこかで会ったように感じたから

ね。

それがだれかは確信が持てなかったけれど、華雪のもとに一度だけ上がったお客の名前を聞いた瞬間、ピンと来た。それが副長の土方さ。一年くらい前に五条大橋で新撰組と斬りあいになった時、土方と沖田にかばわれてふるえていたガキがいてね、それが華雪だったのさ。もつとも僕としたことがあまりに雰囲気の違いすぎて気付かなかったが。」

！！！！

あのときだ。

初めて斬りあいには直面して、

あたしのせいで総司にけがをさせたあの時か！

あのとき一人だけ桁違いに強い男がいた。

土方さんが来たことで川に飛び込んで逃げただけけれど。

あいつだ。

なんで気付かなかった？

あたしは自分のふがいなさに歯噛みしたい気分になった。

土方さんのお座敷で、聞いた物音は華香大夫だったんだ。

あたしを探るためにずっと見張ってたんだ。

「なぜそんなネズミをここに置くのです？

桂先生の寝首でも掻かれるやもしれぬではないですか?!」

「あの女はなかなか骨があると言っただろう？

そんなことはしないさ。潔い女だからね。思想はわれらに寄っている、だからうまくこちらに引き込めば新撰組の情報も漏らすかと思っていたが、やはり仲間は裏切らぬか。

まあ、それを差し引いても殺すのは惜しい女だ。

美しさもさることながら、あの凜とした潔さと度胸は見ていてすがすがしいほどだ。」

桂の底冷えするような声に夏なのに全身に鳥肌が立った。



「もうそろそろ潮時ですね、桂先生。責め問いでもしますか？」  
責め問いって拷問？

無理無理！！！！

「まあ、あの顔に傷をつけるのはかわいそうだからね。何も言わないのなら殺せばいいよ。」

まあ、これまでの頑張りをたたえて、褒美をあげたんだ。今日のこの会合のことをちらつかせてみた。

きつと今この下で顔を青くしてるんじゃないかな？ふふ。」

花が咲いてもきつと、人が死んでもこの人はきつとこの調子を崩さないだろう。

！

全身の血が凍った。

全部ばれてたんだ。

あたしは手の上で転がされてた。

罨だということはわかっていた。

あたしってやばくないか？

逃げるに限る！

あたしは物音をたてないようにそろそろと縁の下を移動し、外に出た。

月がだいぶ傾いている。

「おい、いたぞ」

「追え！」

ばらばらと人の気配とどなり声が聞こえる。

あたしは力の限りダッシュした。

かつてこんな走ったことがあるだろうか？

息が上がって心臓が破れそうだった。

でも

逃げ切つてやる。

絶対に！

余裕かましてこの情報漏らしたこと死ぬほど後悔させてやるからな！

あたしは新撰組に帰るんだから。

みんなの顔が見える。

それだけで、あたしは強くなれる。

### 第六章 3 人を斬る、生き残るために

あたしは五条大橋まで走ったところで追い付かれてしまった。

やはりいくら鍛えていても、男と女では体力が違う。もうこれ以上は逃げ切れない！

あたしは橋の欄干を背にして追っ手を迎え撃つことにした。  
敵は吉田を含めて4人。

追っ手Aがあたしに斬りかかる。

「死ねえ!!!」

ガキヤ

あたしは咄嗟に脇差しを抜いてAの剣を受け流し、右の肩口を斬りつける。

狙うは肩口、利き手、足。

それらを傷つければ相手は戦えなくなる。

その返しで追っ手Bの脚を切った。

人の肉を斬り裂く感覚が手に生々しく残る。

吐きそうになりながらあたしは攻撃を防いだ。

でもあたしには進むしか道がない。

生き残るために。

負けられない！

だからあたしは刀を持つ。

追っ手Cは力任せに刀を振り下ろす。

あたしはそれをよけ振り向きざまに利き手の右手に傷をつける。

総司に鍛えてもらったから、真剣も難なく扱えた。

でも…初めてあたしは人を斬った。

気持ち悪くて吐きそうになる。

はあ、はあ。

暑い。

息苦しい。

血のおいと、汗と…

気持悪。

吉田は余裕を見せながら遠巻きに見ている。

あの時と一緒にじゃん。

あたしは既視感に襲われた。

斬りかかってくる男。

冷たい笑顔の吉田。

ただあのときは総司が居てくれたけど、今はいない。あたししかないんだ。

「あのときよりは動けるんだね、華雪。

なかなかいい太刀筋だねえ。」

吉田は腹立たしいくらい余裕の笑みを浮かべている。

あのときから総司に真剣の扱いを教えてもらってはいた。

でも実際に使うのは初めて。脇差しだから木刀や竹刀よりは軽いし使いやすい。

「僕がお相手しようか」

吉田は徐に刀を抜いて静かに上段に構えた。その構えは一分の隙もない。不適な笑みは底冷えするような恐ろしさを湛えていてあたし

はなつなののに全身が総毛立つのを感じた。  
月が刀を青白く浮かび上がらせる。

この人強い。

そう思ったせつな、吉田は信じられない速さであたしの肩に斬りこ  
んできた。

あたしはそれをかるうじて受け流し、その隙に突きを狙うのだけれ  
ど、難なく跳ね返される。

ダメだ。

目で追うな！

空気を感じる！！

(落ち着くんだよ、まこと、深呼吸だ)

(水瀬、お前は自分を信じて進みゃいいんだ)

(真剣に怯えているうちは刀を持つ資格はない、向き合え、水瀬。)

(水瀬君、君は私が信じた子だよ。)

あたまに浮かぶのは総司や土方さん、斎藤さん、近藤先生のことば。

みんなの笑顔。

もう一度、会うんだ。

みんなに。

負けられない！

ヒュ！

風を切る音がしてあたしの左腕スレスレを吉田の剣が掠める。

その返しを受け損ね、右腕に痛みを感じた。

傷口から生温かい血が伝い、刀を持つ手を滑らせる。

傷口に汗が染みてヒリヒリ痛む。

殺されるのは時間の問題なのかもしれない。でも退くことは出来ない。  
進め！！

あたしは吉田の首元を狙って剣を突き立てる。

不意に吉田は空気を凍らせるような笑みを浮かべ…

ガキン！

吉田はあたしの脇差しを手から跳ね返した。

右手が血で滑って、力が入らなかったのだ。

吉田はあたしの首に剣先を突き付け、にやりと笑った。

ドクン、ドクン…

心臓の音が妙に大きく聞こえる。

万事休す。

もはやここまで。

「ダメだねえ、利き手を傷つけさせちゃ。

太刀筋はほめてあげるよ。でも終わりだね。

なかなか骨のある子だから、桂先生も君のこと買ってたんだよ。  
でも残念だねえ。

さようなら、華雪。」

吉田は剣先を一瞬引きあたしを貫こうとした。

あたしは目を閉じる。

ああ、終わったんだ。

これで。

あたし結局ダメダメじゃん。

これがあたしの精一杯の結果だけど…。  
でも死ぬんだ。  
これで。

「その女から手を離せ!!」  
誰かの声が暗闇を引き裂いてあたしの耳に届いた。

## 第六章 4 志、わたしのすべきこと

「その女に指一本でも触ってみろ！！ぶち殺す！」

暗闇でも、目をつぶっていてもわかる。

そのかすれた低い声は…

…土方さんだった。

「土方さん…」

なんで、ここにいるの？

あたしは暗闇を凝視する。

月明かりが土方さんのその端正な顔立ちを浮き上がらせる。  
目だけがぎらぎらと強烈な光を放っている。

土方さんは吉田の首筋に刀を当てて言った。

「汚ねえ手でそいつに触んな。」

その声は聞いたこともないくらい低くて冷たい声で…

あたしはこんな状況なのに恐怖ではなく、  
喜びで泣きそうになった。

ああ、あたし、こんな状況なのに…

死ぬほどうれしい。

不謹慎でごめんなさい。

”その女に指一本でも触ってみる”

土方さん、あたしはその言葉だけで、十分なんです。



「ふふふ、新撰組の副長殿のお出ましとは、光栄だ。華雪はいい仲間に恵まれてるねえ、でも…その甘さが仇になるよ。」

吉田の目に一瞬強い光が走り、

次の瞬間

吉田はあたしの肩を思い切り押した。

あたしは自分の体が宙に浮いた。

視界が反転する。

背中に触れていた橋の欄干の感覚がない。

突き落とされた！！

あたしは腕を伸ばし、橋げたをつかもうとしたけれど、その左手は宙をつかむだけだった。

すべてがスローモーションに見える。

「水瀬！！」

その瞬間

固い節くれだった手があたしをつかんだ。

土方さんは左手で、あたしの左手の手首を力強く握る。

「甘いねえ。副長殿は。僕ならきつと何をおいても志を優先する。仲良しごっこがしたいわけじゃないからね。」

君たち新撰組の志はその程度さ。」

「てめえに説教されるいわれはねえ。」

「ふふ、じゃあ、試そうか。」

吉田は刀を振り上げる。

ガキン！

土方さんはその刀を受け、不敵に笑った。

「てめえなんざ、腕一本で十分だ

。」

「言っねえ。」

吉田は容赦なく土方さんを斬りつける。

ダメだ。

いくら土方さんが強くてもこんな身動きが取れない状態で闘うなんて…！

「土方さん！手を離してください！」

「うるせえ！ぜってえ離さねえから黙ってる。」

「土方さん！！」

あたしは声の限りに叫ぶけれど土方さんは決して離そうとしない。

橋の上では刀同士がぶつかる音が響いている。

あたしのするべきことは？

どうすればいいの？

こんなところで土方さんを死なせるわけにはいかないのに。

あたしの右腕からは先ほど受けた傷からとめどなく血が伝って指先に向かうのを感じる。

血をぬぐうために腰のあたりに手をやると

冷たい金属の感覚。

シャラン

と小さな音が耳に届いた。

斎藤さんにもらった簪  
帯に挿したままだったんだ。

そうか……  
こうするべきだったんだ。

あたしは、裾をたくし上げるために使っていた帯に  
急いで右手に伝う血で文字を書く。  
せめてこれだけは知らせないと。

「マスヤ、フルタカ、カヤク」  
そう書くと蝶々結びの帯を解き、あたしの左手をつかむ土方さんの  
腕に巻きつけた。

浴衣のすそがすんと落ち足元ではためいているのを感じる。

これでいい。

後はきつと山崎さんあたりがきつと何とかしてくれる。

「土方さん、ごめんなさい！」

あたしは浴衣の帯から簪を引き抜くと

簪の柄をあたしの手首をつかんでいる土方さんの左腕につき刺した。  
シャラン

簪の飾りたてる涼やかな音が妙に耳に響く。

「うっ！」

土方さんの手の力が一瞬緩んだ

その瞬間

あたしは左腕を引ききた。

増水した川面を走る水音が耳元に迫ってくる。

橋と土方さんと吉田の影が小さくなっていく。

「水瀬っ！！！！」

土方さんのどなり声をきいたその刹那

その瞬間背中にたたきつける衝撃が走り

体中を冷たさが覆い

あたしは洗濯物みたいに濁流にのまれていった。

土方さん、あたしあなたが大好きでした。

あなたが助けに来てくれたこと

「指一本でも触ってみろ」そんな言葉が

死ぬほどうれしくて…幸福で…、

それだけであたしはこんなにも幸福なんです。

ガツン

頭に強い衝撃が走つたのを最後に

あたしの意識は闇の中に飲み込まれた。

## 第六章 5 ・後悔：土方歳三

「水瀬！」

腕に走る鋭い痛み。

離れる手。

遠ざかる影。

そして水音。

後には増水した川の音しか聞こえぬ。

！！

「水瀬！」

俺は自分の声に驚いて飛び起きた。

夢か。

水瀬はまだ発見されない。

俺は毎日夢を見る。

増水した川は流れも速く深い。

屈強な男でも落ちれば万に一つも助かるのは難しい。

夜の川の暗さは死にも似て

水瀬を飲み込んだ。

水瀬は死んだのか？

俺が殺したのか？

あのあと俺は吉田たちを取り逃がししばらくその場を動けなかった。飛び出した俺を探しに来た総司に肩をたたかれるまで、俺は呆然と立ち尽くしていた。

水瀬が身請けをされてから、山崎は桂小五郎の邸宅を突き止め、水瀬に動きがないか張っていた。

ただ、桂邸の警護は厳しく、中に忍び込むのは無理で、せいぜい遠巻きに屋敷の外から見張るだけしかできなかったらしい。

それがあの日の夜、桂邸はあわただしかつた。

「女が逃げたぞ!」「追え!」「捕まえて殺すんだ。」という声が響いたが、山崎は水瀬を助けることができず、どさくさにまぎれて追手を減らすことしかできなかったらしい。

肝心の吉田や桂はそこ中にはいなかったのだという。

水瀬を探すには、人出が必要だと考え、屯所に走りこんだ山崎の報告を聞き、俺は呼びとめる勝ちゃんの声を背に走り出したのだ。

水瀬…

ちくしょう!情けねえ!!

俺はこんなに弱い人間だったか?

今まで、自分が死ぬことはただの一分も怖くはなかった。

だが、お前がこの世にいないかもしれない、

もう会えねえと思うだけで、

俺は指一本さえも鉛のように重くなって動けなくなる。

お前が残した布の切れ端に血文字で書かれた「マスヤ、フルタカ、カヤク」の文字。

山崎に頼んで今調べている最中だが、

この先にやらなきゃいけないことが山ほどある。

お前が命をかけて遺した情報だ。

何が何でもつきとめてやる。

それなのに

動かねえんだ。

俺の腕が。

お前をつなぎとめることもできなかったこの腕が。

畜生、畜生！畜生！！畜生！！！！

なんで、手を放しちまったんだ。

なんでお前が身請けされるのを黙って見てたんだ。

なんで、お前を密偵として遊女なんかを送りだしたんだ。

なんで、新撰組なんかにいさせることを許可したんだ。

今まで神や、仏がいるなんて思ったことはなかったが、  
今は死ぬほど祈りたい。

水瀬、どうかどうか、もう一度

お前の笑顔を見せてくれ。

そうしたら、

俺はもう二度と

お前を危険な目に合わせはしねえ。

だから頼む。

水瀬を戻してくれ。

俺たちのもとへ。

頼む。

水瀬がもしも戻らなかったら、

俺は生涯笑うことはできないだろう。

俺は血が出るくらいきつく唇をかみしめた。

夜は深い。

俺にはもう二度と朝は来ないような気がした。

## 第六章 6 ・ 闇深き川：沖田総司

まことが行方不明。

私は全身の血が逆流した。

なんで？

まことがそんな目にあわなければいけない？

なぜ、私は何もできなかった？

桂小五郎に身請けされて偵察に入ったのは今から1カ月ほど前。

警戒厳しい屋敷には山崎さんですら近づけず、遠巻きに中の様子をうかがうことしかできなかったらしい。

そしておとこの夜、あれはずっと続いていた雨が上がり、久しぶりに月が顔をのぞかせた穏やかな夏の夜だった。

夜、九つ。

月も傾きかけ、屯所では皆が眠りについていた。

私は虫の知らせか眠ることができずに道場で剣をふっていたのだけれど、血相を変えて、土方さんがいつになく慌てた様子で、副長室から駆けだしていくのを見かけた。

私は嫌な胸騒ぎがして、そのあとを追った。

土方さんがあんなに取り乱す様子を初めて見た。

髪はほつれて、額には汗が浮かび、目だけは異様にぎらついていて、それは地を力強く蹴りあげて走っていくその姿はさながら鬼神のようだった。

散々ゆくあてもなく探し回り、五条大橋まで来た時、立ち尽くす土方さんを見つけた。

ぼんやりと、刀を鞘に戻すこともなく、自らの腕をじっと見つめる



だけだった。

「土方さん」

私は意を決して土方さんの肩をたたくと、土方さんは私の気配に気づきもしなかつたらしく、驚いたように振り返った。

「！…総司。」

「土方さん、何があったんです？」

土方さんは刀を鞘に納めると、左手に持っていたものを私に渡した。

「！これは…！まことの…！」

まことが斎藤さんからもらった簪。

その簪の柄の部分には血が付いていた。

そしてよく見れば土方さんの左腕からもかすかに血が出ている。刀で斬られたものじゃない。

この簪で？

一体どういうことだ？

私は何があったのか全く理解できないでいた。

「どうということなんですか！？」

「…俺の手を離させるために。」

あの時の土方さんの声は確かに震えていた。

「え？」

私が聞き返すと、「いや…何でもない。」と言い、土方さんは一瞬目を伏せると傷のある左腕を右手で一瞬力を込めて握り、目を開けた。

その表情はまるでいつもと何も変わらないように見えた。

土方さんはその瞬間何かを飲み込んだのだ。

「土方さん…まことは…」

「水瀬は…川に落ちた。俺が手を離したからだ。」

「な…！」

「吉田稔麿とやりあって一瞬の隙を突かれた。俺の不覚だ。」

「土方さん！」

私は土方さんの肩をつかむ。

「総司。水瀬が落ちる瞬間に奴らの情報を残した。あいつが命がけでとってきた情報だ。」

何が何でもつきとめる。屯所に戻るぞ。」

「…土方さん!!」

「総司、俺を恨め。」

振り向いた土方さんの顔はいつもと変わらない鬼の副長の顔だった。

\*

私は午後の巡察を終えると、五条大橋から川を下りながら、何かまことの手掛かりはないか河原を歩いている。

川はだいぶ水かさも減って水の流れも緩やかになってきている。

とはいえ、まだ水も濁っていて、流木やら、いろいろなものが流れ込んでいるのが目に付いた。

あの川に落ちたら助かる可能性は万に一つもない。

そんな暗い声が私の心に響くのを私は頭を振って振り切ろうとした。きっと生きている。

まことは、きっと生きている。

私は近くの人に聞き込みをしたけれど、まことの行方は杳として知れなかった。

土方さんは何も言わない。

あの夜、何があったのか測るすべはない。

けれど、推し量るに、まことは土方さんを守るために自分から犠牲になることを選んだんじゃないかと思う。おそらく、土方さんは吉

田と闘いながらも川に落ちかけたまことを助けるためにまことの手をつかんでいたんだ。土方さんが万全の体勢なら吉田に引けをとるはずもない。でもまことの手をつかみながら身動きの取れない状況で闘っていたとしたら？

まことは土方さんの身を守るために、手を離させるために腕にあの簪を突き刺したとしたら…。

そう思い至った瞬間私は全身に鳥肌が立つのを感じた。  
いくなれば強烈な嫉妬、そして絶望。

ここまでまことが命をかけてまで土方さんを守ろうとしたその事実  
に、

遊女として密偵にさせ、身請けを許しても、なおこんなにも想いを寄せられる土方さんに私は嫉妬し、そしてそのわずかに入り込む余地さえない想いの強さに絶望した。

土方さんがうらやましかった。  
妬ましかった。

そして一瞬、まことがこのまま帰らなければ

自分がこんな思いにとらわれることもなく、

土方さんに昔のような純粹な尊敬と敬愛の思いで接することができ  
るのに、

そう考えた自分に吐き気がした。

自分の中の黒くてドロドロした感情が着実に得体の知れぬ生き物の  
ように、いつか自分を突き破って表に現れ、自分はそれに支配され  
てしまうかもしれない。

そしてまことの安否がしれぬのにそんな風に嫉妬する自分に嫌気が  
さした。

私はいつからこんなにも情けない、未熟者になったのだ。

沖田総司、お前は何者だ！

私は武士だ。

ならば、忍べ。

醜い感情に、恋愛というその狂気に支配されるな！

あれから土方さんはとりつかれたように、桂小五郎と吉田稔磨について山崎さんに探らせている。

あの夜あんなに揺らいだ土方さんを初めて垣間見た。

なのに、次の瞬間には新撰組副長としての顔に戻って、揺らぎなど一分もそこにありはしなかった。

土方さんは、きつとこの先も、まことが戻らなくても、顔色一つ変えずに新撰組の鬼であり続けられるのだろう。

あんなにも感情を殺し、鬼に徹することができるのだ、あの人は。それは果てしなく孤独で暗い、修羅の道。

土方さんもまことのことを少なからず想っているはずだ。

けれどあの人は武士だから、恋よりも愛よりも、その誠のためにその想いを一生涯心の奥底に封じ込めて

決してその想いを表に出すことはなく、感情を殺せることだってできるだろう。

まことに逢いたい。

逢いたくない。

逢いたい。

もう一度、あの笑顔を見たい。

私の心にはドロドロとしたあらゆる思いが交錯してまるで、濁流のように心をかき乱していた。

## 第六章 7・降りやまぬ：斎藤一

小降りになったと思ったが、また先ほどから雨足が強くなったようだ。

前川邸の紫陽花が雨に打たれてその薄紫が滲んだように見えた。

「水瀬、まだ見つからないのかよ。」

団扇で乱暴に扇ぎながら、原田さんが思いだしたように言った。

「さすがに…増水した川に落ちたんじゃ…」

藤堂さんが刀のつばを何ともなしにいじっている。

「おい、平助！めったなこと言うんじゃねえ。」

原田さんは膝を団扇で乱暴にたたきいら立ちながら言った。

「俺だつて信じたいよ！まことはいい奴だし、何がどうあっても生きていてほしいと思うよ。でも…！」

藤堂さんは泣きそうになりながら言った。

「そんなこと口に出したら本当になるような気がすんだろ！やめろ！」

原田さんはいつになく厳しい顔つきで言った。

藤堂さんも原田さんも一本気な熱血漢という点では似ている。

二人とも腹の底にたくらみなどはできないのだ。

だから先ほどの幹部会での報告は衝撃的で、納得できぬものなのだろう。

「俺が許せないのは、何で水瀬を密偵として送りだしたかってことだよ。あんな危険なこと女子にさせるなんて。それに水瀬が居なくなっても顔色一つ変えずに淡々としていられるなんてあんまりにも冷たいんじゃないかって思うんだ。俺、土方さんが分からないよ…。」

藤堂さんは居てもたつてもいられないと言った様子で眉根を寄せて言った。

「おめえら、やめろ。俺らがこんなこと言いあつていても何にもな  
んねえだろ。」

「おい、斎藤、お前も黙つてねえでなんか言えよ。」  
それまで黙つてい春画本を読んでいた永倉さんは顔をあげてなんでも  
無いことのように平静に言った。

ただ春画本は先ほどから一枚もめくられていない。  
永倉さんもやはり内心は穏やかではないはずなのだ。

「俺は…副長の采配は正しかったと思う。」

女でなければ島原での密偵はできぬ。その先は水瀬の行動の結果だ。  
水瀬が女だから、危険だから行かせたくないというのは水瀬を隊士  
として見て居ないということのような気がする。水瀬は仲間だから  
戻つてきてほしいが、無事を祈るしかできない。」

本当の気持ち言えば、藤堂さんの気持ちに近い。

なぜ水瀬を密偵として島原なんかに送り出したのか？  
なぜ俺は守れなかったのか？

だがそれは俺の私情だ、

ひとたび出してしまえば俺の中の何かが壊れてしまう気がした。

「俺も斎藤に一票かな。」

永倉さんは静かに言った。

「俺は水瀬を見くびっているつもりなんかはないよ。ただ、仲間とし  
て、水瀬が心配なんだ。」

藤堂さんは不満げに言った。

「平助の気持ちもわかるぜ。だが、あいつは一隊士としてここに  
いたんだ。」

あいつ自身この任務を受けたのは隊士としての居場所を探してたん  
じゃないのか？

隊士が任務中にそれを全うして死んだなら、その志を継ぐのが武士  
だろ。」

泣いてても水瀬が戻るわけでも、なんの解決にもなんねえからな。」

永倉さんはあまり多くを語らぬ。

だが、たまにその口から出る言葉は常に物事の真を突いているようでハツとさせられることもしばしばだ。

「俺はそんなに簡単には割り切れないよ。」

藤堂さんはまだ納得できぬようだ。

「まあな。土方さんも、割り切つてんじゃねえよ。

ただ自分の感情を殺すことにあの人は長けすぎてんのさ。

一切の私情を殺して鬼になることができんのさ。」

諭すように永倉さんが言った。

「それでもやつぱり納得できない！俺、道場に稽古に行つてくる！

佐之さん、一緒に来てよ。」

「ああ？わかつたよ。平助。」

原田さんはそれとなくこちらを見て大丈夫だとも言うように目くばせした。

原田さんは熱血漢だが、やはり大人だ。

馬鹿騒ぎのなかでも確実に人を見ている。

確かに副長は淡々としていた。

水瀬が密偵として島原にいたが、桂小五郎と接触して身請けまでこぎつけ、桂邸に潜入することに成功したと。幹部のみを集めて語ったのはちょうど一か月ほど前のことだった。

そのとき皆「あの水瀬が？」と驚きを隠せぬようだったが、沖田さんはずっと下を向いていてその表情は見えなかった。

そしてつい先ほど、土方さんは幹部を招集して潜入がばれて水瀬が逃げる途中で吉田稔麿につかまり、土方さんの助けも及ばず、川に落とされ行方が分からぬと、報告したのだ。

皆は息をのんで水瀬の行方について聞いたが、

土方さんは「たかが隊士一人行方不明になっただけでおめえら幹部が揺らいでどうする！」と一喝した。水瀬のことにはその後触れず、

水瀬が書き残したという情報について説明した。

街でそれとなく機会があったら、それに連なる情報を探れと任務を言い渡し、幹部会は解散になった。

その副長の対応の冷たさに、藤堂さんは不満と怒りを感じているのだろう。

「あいつはまだまだガキだからなあ。

まあ、しかし、お前が仲間なんてそんな言葉を使うのは意外だったぜ。斎藤。」

道場へ飛び出していく藤堂さんを見送りながら永倉さんがぽつりとつぶやいた。

「何がだ？」

「斎藤は誰とも距離を置いてるっつか、一線引いてただろ。だけど水瀬が来てからお前は変わったよ。」

「……」

俺は何も言うことができない。

確かに俺は水瀬が来てから武士として揺らぐようになってしまった。

「なんだよ。そんな怖い顔すんなよ。ほめてんだぜ。」

「なにがほめ言葉なものか。」

「俺らは結局一人では何にもできねえだろ。仲間同士信頼し合っかねえとでっかい仕事はできねえし。今のお前は血が通ってるっつか、信頼できるっつか、うーん、なんか話してこそそばゆいな。」

とにかくお前は武士としても男としても器がでかくなってると思っただけだ。

それより、お前、水瀬に惚れてただろ。」

急に永倉さんが俗物に見える。

「…なんのことだ？」

「ずっと前に、水瀬と小物屋に行ったことがあったろ。その時言った惚れた女つてのは水瀬だろ。」

まったく、総司と言い、お前と言い、わかり安すぎだぜ。」



永倉さんはさも面白いとでも言うようにごろりと寝ころがって上目に俺を見上げた。

「…未熟だとしても言いたいのだろうか？」

「ああ。ガキだな。」

「！」

「俺が言いたいのは、少しくらい揺らいでもいいんだってことだぜ。恋の想いを武士として抑え通すのは辛れえだろ。揺らいたら俺ら仲間が支えてやるからそんなに無理すんなってことよ。」

永倉さんは無精ひげをいじりながら俺を見ることなく笑った。

不覚にも永倉さんの言葉に「揺らいで」しまった自分が悔しい。

まったく嫌な男だ。

俺は認めぬ。

自分が揺らぐことを、認めはせぬ。

「…いらぬ世話だ。」

「ふん、そうか。」

雨は降りやまぬ。

先ほどよりもさらに強くなったようだ。

\*

水瀬が密偵としてここを出てから3カ月。

俺の心は水瀬と出会う前の平静を取り戻しつつあった。

水瀬に出会う前は、武士としての矜持を持ち、剣の稽古にいそしみ、任務を全うすること、それがすべてであった。何ら揺らぎもなく生きていけるはずだった。

なのに、水瀬という存在が現れてから、俺は揺らぐようになった。

水瀬の一挙一動に自分の心が共鳴し、感情が起伏する。

水瀬という人間のことが気になり、目で追わずにはいられない。

なのに、話すこともかなわぬ。

それが恋だとは分からなかった。

なのに、己が水瀬に惚れている、そう自覚した瞬間、自分の感情がうまく抑えられなくなった。

武士の恋は忍ぶが本道。なのに未熟にも俺はあっけなく決壊。想いをぶつけた。

水瀬は驚いていたようだが、しっかりと向き合い、

そして想いにこたえることはできぬと断ったけれど、そのあとも何も俺に対して接し方を変えたりしなかった。

それがありがたく、一抹のさみしさもあつたが、このまま仲間として水瀬と過ごせるならば、それが一番よいと思っている。だから水瀬がもし、このまま戻らなくても俺は揺らぐことなく武士として、仲間のあいつの遺志を継ぐのだ。

そう思うのに、心が水瀬を求める。

水瀬のあの笑顔をもう一度見たいと、心が求めてやまないのだ。俺は自分が思っている以上に未練がましい情けない男なのだ。俺はそんな自分に自嘲するしかなかった。

\*

「齋藤さん」

夕餉のあと、沖田さんから声をかけられた。

「なんだ？」

「今から試合してもらえませんか？」

「…いいだろう。」

夏の道場は汗と埃の混ざった独特なおいがした。

去年、水瀬が剣を持つことに悩み、泣いていたのもこんな時期だっ

たよつに思つ。

水瀬、今、おまえはどうしているのだ？

生きているのか？

頼む、どんな姿でもよい。

生きていてくれ！

カン、カン！

木刀がぶつかり合う音。

「セイ！！」

「ヤア！！」

互いの気合い。

沖田さんの剣は俺の頬を掠め、

俺の剣は肩を掠める。

聞こえるはただ互いの息遣いのみ。

今日の沖田さんは殺気に満ちている。

いつも剣を握れば人が変わるのだが、今日はまた違った殺気だ。

あんたもまた

一瞬の間ののち、

俺の剣先が沖田さんの木刀をはじいた。

互いに礼をしてから防具をとる。

沖田さんは顔を伝う汗をぬぐうとふと小さく笑った。

「ふう、やっぱり斎藤さんは強いなあ。ありがとついでいます。」

「…礼には及ばん。」

俺たちは道場の隅に並んで腰をおろし何をしゃべるでもなくただ静寂の中に身を置いていた。

時折降りやまぬ雨音が雨樋にあたり、間抜けな音を立てるのをただ何ともなしに聞いていた。

不意に沖田さんが言った。

「…斎藤さん、まことは生きてるんでしょうか？」

「わからん。ただ、生きていればよいと思う。」

「…そうですね。」

絹糸のような小雨が降りしきっている。

永遠に雨はやまぬように思われた。

## 第七章 1・交錯、現代と過去

違和感を覚えた。

目の前にあるのは白い天井。

ガラスの窓の向こうには青い空が見える。

そしてベッドに横たわるのは

… あたし自身。

人工呼吸器をつけられ、点滴やらなんやら体にチューブが何本も取り付けられている。

顔は青白くて、生きているとは思えない。

プシュー、プシュー

器械からは規則的な音が響いている。

何これ？

なんで？

あたしは五条大橋から川に落ちたはずなのに、  
なのにあたしは明らかに現代の病院にいる。

あたしは夢を見ているんだろうか。

ガラガラ

病室のドアが開くと、すー兄が入ってきた。

（すー兄！あたしここにいるよ。）

あたしは声をかけるけれど、届かない。

すー兄はあたしの枕元の椅子に腰かけると、髪をなでながら言った。  
「まこ、もう一か月だぞ。お前が雷に遭ってから。早く戻ってこいよ。お前の飯がないとおやじも明も調子でねえんだよ。」

そのとき病室のドアが開いて白衣を着たお医者さんが入ってきた。  
お医者さんはすー兄の隣に立ち、そして声をかけた。

「水瀬さん、雷の直撃を受けて今こうして生きているのは奇跡的です。しかし脳に相当な損傷を受けています。意識を戻す確率は0に近いでしょう。生命維持装置をつけていても、余命は長くて半年ほどだと覚悟してください。ご家族でよくご相談なさってください。」  
医師はつとめて淡々と言う。

「…わかりました。」

すー兄は苦しそうに頷いた。

(すー兄…ごめん！あたしここにいるよ。心配掛けてごめん！！)  
あたしはどんなに叫んでもすー兄にそれが届くことはなかった。

これは夢？

でも夢と言うには余りにリアルでつじつまが合いません。

あたしが幕末にタイムトリップしたことが夢なのか、

それとも、今ここに居ることが夢なのか、

あたしには測りかねた。

あんなふうにも幕末で、新撰組に身を置いていたあたしは何？

新撰組でのことはあたしが生み出した妄想なんだろうか？

でも、もしあたしの身体は雷に遭ってからずっと眠り続けているのに、

魂だけは幕末に飛んでいたとしたら？

あたしは確かに、血が出たり、痛かったりしている。

それすらも実体のない幻なのだろうか？

あたしは…何？

不意に景色がぐらりと揺らいだ。  
と思った瞬間  
あたしの意識は闇に飲み込まれた。

\*

…  
… 苦しい。

何？  
誰？

「…」  
「…っ！」  
「しっかりしいっ！！」

胸をものすごい力でたたかれる。  
痛い。  
苦しい。

ゲホッ！ゴホッゴホッ！

あたしは胸の奥からせりあがってくるものを抑えきれなくて、せき  
込んだ。  
大量の水をはきだした。

「ああ、生き返ったわ。ホンマに阿呆か！！

なんで身投げなんかしたんや！

せつかく親からもらった命粗末にして罰あたんで！！」

ものすごい剣幕で怒っているこの人は誰？

お坊さん…？

「つと…」

あたしは喉がひりひりしてうまく声が出せなかった。

「こうして生き返ったんも仏さんの思し召しや。とにかく今はゆっくり休み。」

あたしは頷いて目を閉じた。

助かったんだ。

あたし。

じゃあ、あの病院でのあたしは夢だったんだらうか。

とにかく、今は何も考えられない。

眠りたい。

何も考えずに。



## 第七章 2・隠れ家

あたしは小さな禅寺のご住職の玄庵さんに助けられたらしい。

玄庵さんはたまたま通りかかった河原で、流木に引つ掛かっているあたしを見つけてくれて庵まで運んでくれたのだという。

本当に感謝してもし足りない。

玄庵さんはあたしを身投げした娘だと思っっていたらしく、

再び目覚めるとものすごい勢いで「この罰あたり！」と叱られた。玄庵さんは頑固なお父さんと言った感じの人で、太い眉とごつごつした顔で怒るものだから、東大寺にある金剛力士像みたいだと思い、あたしはわらってしまった。

もちろん笑っている場合では無くて、吉田や桂にあたしが生きていることが知られば、あたしが入手した情報はパアになるわけだから、あたしは華雪という人間が生きていることを隠さなければいけない。

あたしは身投げしたわけではなく、追われていて川に転落したのだと言い、あたしのご住職には伏せてほしいと頼み込んだ。

ご住職はあたしをじっと見て探るように見た。

その目は心のすべてを見透かすようなまっすぐな眼差しで、あたしは落ち着かなかった。

「追われてるって何したんや。女郎小屋から逃げたか？」

「...それは...」

「事情も言えんもんを置くわけにはいかん。わしらも自分の身を守らにゃいかんからな。」

その通りだ。

京の都は今、特に治安が悪い。

その中で佐幕派と倒幕派の攻防がいたるところで行われており、巻き込まれて面倒なことになるのは誰もが避けたいところだろう。

この人にはきちんと話すべきなのかもしれない。

そのうえで、新撰組の人間をかくまうわけにはいかないと言われたら、自力で壬生の屯所まで戻るしかないけど。

「私は…」

あたしは真実を口にしようとしたその時、

「いやー!!」

「おとなしゅうせい!!」

扉の外で、女の子の悲鳴。

「く!!」

ご住職とあたしは同時に外を振り向き、ご住職はおもむろに立ち上がり庵の外に出て行った。

あたしも後を追うために布団から起き上がろうとしたのだけれど立ち上がった瞬間に立ちくらみでしゃがみ込んでしまった。

扉の外ではご住職のどなり声が聞こえた。

「何しとんや!!そん子から手え離しや!!!!」

「うるさい!坊主!!われらはお国のために崇高な志を持った志士ぞ。女子に勤めを果たせと言うに何が悪いのじゃ!」

ガタガタともみ合う音。

ちくしょう!!

体がぐらぐらする。

動け!足を床につけると、床がスポンジみたいにふにゃふにゃで頼りなく感じた。

あたしは吐き気と立ちくらみをこらえて出口まで壁伝いに進み、庵の戸を全身で引き開けた。

まぶしい!

夏の太陽に目が慣れずにあたしは目を細めた。

徐々に目が慣れてくるとこ汚いいかにもって男が15、6の女の子

の喉元に刀を突き付けている。

玄庵住職は女の子を人質に取られて手が出せないようだった。地面が揺らいでいるように感じるのが気持ち悪い。

あたしはふらつきながらもこ汚い男に近づくと。

男はあたしの行動が理解できないらしく一歩後ろに引いた。

「近づくんじゃねえ！この女がどうなってもいいのか！」

なんていかにもなわかりやすい男。

あたしは少しも歩みを緩めることなく男に近づいた。

「その子じゃなくてあたしにしときなよ。」

そんな乳臭い子よりもよつぽどいい思いさせてあげるから。」

あたしは妖艶な笑みを浮かべて見せた。

大丈夫。

怖くはない。

あんななんかと修羅場のくぐった回数が違うんだよ！

「へッ、てめえみたいなきたねえ女相手にするかよ。」

男はまた一歩後ろに下がる。

女の子は恐怖で目をいっぱいに見開いている。

大丈夫。

こんな男に負けやしない。

「あなたわかってないね。女を見た目で判断すると、痛い目に遭うよ。」

あたしはにつこり笑うと地面を思い切りけり刀を握る男の懐に飛び込んだ。

「！」

男は一瞬動揺し、身じろいだのを確認した。

あたしは男の腕をとり、女の子を横に押しやると、腕をひねって地面に押さえつけた。

「志だか何だか知らないけど、自分より弱い相手人質に取らないと女に相手にされないなんて情けなさすぎんじゃない？」

「なにを！たかが女子に」

あたしは腕をさらにきつく締めあげる。

「あんたみたいな下衆な男に女だからなんて馬鹿にされるいわれはないんだよ！」

「あだだだ！」

男は地面に顔をすりつけ情けない悲鳴を上げる。

そうこうしているうちに京の見回り組が来てその男を連行していった。

あたしはその後ろ姿を見送ると急に力が抜けてその場にしゃがみ込んでしまった。

ああ、くらくらする。

やっぱり病み上がりは力が出ないなあ。

「あんた、無茶しよるなあ。はよつかまり。」

慌ててご住職があたしに駆け寄り肩をつかむ。

「はあ、すみません。」

あたしは力なく笑うと、庵の中に戻るなりそのまま意識を失うように眠ってしまった。

### 第七章 3・心の内、ただそれだけで

目が覚めると女の子がいた。  
あれ？

この子さっきの。

「大丈夫ですか？」

女の子は泣きそうな顔であたしを覗き込んでいる。

一重の切れ長の目でどちらかと言うとさっぱりした顔立ちの人だなと思う。

「…はい。えつと…」

「うちはお夕言います。助けていただいてほんにありがとうございます。」

お夕さんは笑うと控え目なえくぼが見えてかわいらしい。

「そんな、たいしたことはしてないですから。」

あたしは小さく笑ったその時

ぐくきゆるるる

あたしのお腹が盛大に音を立てた。

「「！」「」

あたしたちは顔を見合わせ、同時に噴出した。

「ぶふふふ」

「うふふふ、すみません。今お食事お持ちしますわ。」

あたしはそのあとお夕さんからおかゆをもらってありがたく頂いた。  
お粥はとろみも塩加減もちょうどよくて何も食べていなかったあたしの胃に沁みる。

「おいひい。」

ああ、何日ぶりのご飯！！

おいしい。

あたしが徐々に食べる食事に感動していると、玄庵住職がふすまを開けて入ってきた。

あたしは箸を置き、居住まいを正して住職に向き直る。

あたし、何にも話してないじゃん。

自分のこと、助けてもらったこの人に何も話していない。

「あのつ、すみません。身元も明らかにしないままずうずうしくお食事いただいてしまって。」

「いや、楽にしい。それだけうまそうに飯食えるんなら大丈夫やる。あなたの啖呵気分良かったで。」

お夕を助けてもろておおきに。あの子は親亡くして身寄りがないさかい、わしの娘みたいなもんやで。」

「お夕さんにけががなくてよかった。…こちらこそ命を助けていただいて本当にありがとうございます。」

「まあ、あなたがただの女子やないゆうことは十分わかったけどな。」

話さなければ。

もう、嘘を重ねるのはつかれてしまった。

「…！」

あたしは水瀬真実と申します。

女子ではありませんが…新撰組の隊士です。」

「新撰組…！！あなた、壬生狼なんか…。」

「はい。」

「…お夕のな、死んだ父親は壬生狼に殺されたんや。」

「…！」

あたしは息をのんだ。

「お夕の親父は尊王攘夷の思想をもった志士やったさかい…。わしは、攘夷派でも佐幕派でもない。」

ただの坊主やからな。けど、攘夷派も佐幕派も殺しあうばかり、

壊していくばかりで、何えらそうに志ゆうてふんぞり返つとるんや、あんな無力な女子泣かせて何がお国のためやと思つとる。」

玄庵住職の顔には怒りが浮かんでいる。

そうなんだ。

今この瞬間にも志という名前の暴力のもとに多くの血が流れている。そしてその蔭ではいつも女子や子供が泣いているんだ。

でも…

「…おつしやることはごもつともだと思えます。攘夷も佐幕も、長州も新撰組も暴力や血が常に付きまとっています。そのせいで泣くのはいつも何の力も後ろ盾も持たない女子なんですよね。それが許されるはずがない。

でもみんな本当に守りたいんです。日本の未来を。攘夷派も佐幕派もどちらも同じように真剣に日本の未来を想い、未来の子供たちが、女子が泣かないような世の中を作るために、みんな鬼になって闘っているんです。どちらが正しいなんてことはないんです。ただその方法が違うだけで、目的は、志は同じなんです。もちろん全部の人間がそんな風に考えているわけでは無い、さつきみたいな下らない下衆男もいますけど。

お夕さんからお父様を奪ってしまったことは申し訳なく思います。許してほしいとは言いません。

どんな理由であれ人の命を奪った私たちはそれを負っていかなければいけないと思うからです。

でも…今この瞬間にも精一杯日本の未来を想って、それぞれが正しいと信じるもの、その志のために命を尽くす人がいる、それによって、100年後、150年後、暴力や戦争なんかで、女子が泣かないような世の中が絶対に来るんです。

それは、それだけは信じてください。」

あたしは一気にしゃべると深々と頭を下げた。

新撰組も、長州派の桂も吉田も、誰もが日本の未来のために正しいと思うことのために命を燃やして走っている。

そのことは分かってほしいと思った。

勝手かもしれないけど。  
ただ暴力に訴えているわけではないのだと。  
ただそう思った。

「…あんだ、なんとも武士のような女子やなあ。  
それにまるで未来を全部知ってるような口ぶりや。」

「…！」

玄庵住職は太い眉を少し下げて穏やかな口調で言った。  
あたしは思わず顔をあげて住職を凝視した。

住職の目は澄みきっていて何の迷いや揺らぎもない。  
深い湖のような静謐がそこにはあった。

「凶星か。なんやいろいろ事情がありそうやなあ。」  
住職はクスリとほほ笑んだ。

事情…。

未来からタイムトリップしてここにいること。

さらにあたしの本当の身体は現代にあるかもしれないこと。

あたしにもなぜここに居るのか、理由が分からない。

ただ、秘密を抱え続けることが辛くて、話してしまいたいと思った。  
ここにきているんなことがありすぎて、あたしは揺らいでいる。

あたしは目の前がぼやけていくのを感じた。

茶鼠の浴衣に涙がぼたぼた落ちていく。

頬を伝う涙をぬぐうこともせずにあたしは黙っていた。

「…。」

「わしはただの生臭坊主や。世の中の動きにはなあんもわからん。  
話してもなんの解決にもならんと思うけど、話して楽になることがあるんやったら言ってみ。秘密は辛いやろ。これもなんかの縁や。」



住職の岩みたいなごつごつした顔がほころぶとどっしりとした安心感が生まれる。

言ってもいいのだろうか。

この心の内を語ってもいいのだろうか。

言えば取り返しはつかない。

でも今ここに居るあたしはあまりにも頼りなくて、その存在感に自分の中で自信が持てない。

あたしは意を決して口を開いた。

「…あたし、この時代の人間ではないんです。

平成って言つ今から150年も先の世から来たって言ったら信じてもらえます?」

「…150年先で、どうやって来たんや。」

「雷に打たれて…気付いたら壬生寺に居ました。それで新撰組の人に拾われてそのまま居付いちゃったんです。」

「命の恩人やから…新撰組は裏切られへんのか?」

「それは違います。あたしは彼らがとても好きなんです。人として大好きなんです。

だから彼らの信じるものをあたしも信じて、一緒に走っていきたくって思ってたんです。」

「愚問やけど帰りたいとは思わんのか?」

「帰りたいですよ。はじめはずっとそう思っていました。今も…時々思います。」

でも帰る方法もよくわからないですし、それに…今ここに居るあたしは本当に実体を持って存在するわけじゃないかもしれないんです。」

「…」

「夢で、自分が死体みたいに寝かされていて、家族がすがっているのを遠くから見ているって…夢を見たんです。でももしかしたらそれは夢じゃないのかもしれないんです。本当のあたしの身体は1

50年後で、雷に打たれた時に意識不明になったままで…今ここに  
いるあたしは魂だけなんじゃないかって思い始めているところですよ。

あたしは川に落ちて死にかけてたときに見た妙にリアルな夢を思い出  
していた。

そう考えるとつじつまの合うことが出てくるのだ。

たとえば生理。

ここにきて1年。

あたしは一度も生理が来ていないのだ。

初めは環境が変わりすぎたせいで体が順応していないからだと思っ  
ていた。

でも1年がすぎ、なぜだかわからないで不安になっていた時、  
川に落ち、現代の病院での光景を夢に見た。

その時、もしかして自分はまだ向こうで意識不明になっているだけ  
で、意識だけがこちらにあるのではないかと考え、そして、言葉に  
することで

それは何の根拠もないのに、妙にしっくりきてあたしを納得させた。

…あたしの本当の身体は現代にある。

この事実はきつとゆるぎない。

なぜかわからないけど、妙な確信を持ってあたしの胸にすんと落  
ちた。

「それでも、あなたは確かにここに体があるやないか？」

「そうですね。私にもよくわかっていないんです。

どうすれば戻れるのか、そもそもこれが夢なんじゃないかって思っ  
てしまうくらいですから。」

「…」  
住職は何も言わずにあたしの肩をゆっくりとなでた。

それは父親が子供をあやすしぐさに似ていて、なんだか泣きたくな  
った。

「大丈夫や。あなたは…今、ここにおるぞ。」

きちんと身体もある。

夢やない。夢やないで。

それに、自分が信じて、好きや、ついていきたいと思える人に出会えたこと、それはとんでもなく幸せなことなんやで。

それだけやあかんか？

あんたは自分を信じてここでしたいと思うことをやったらええ。

誰に遠慮することもないんや。」

視界がみるみる内にぼやけ、堰を切ったようにあふれて頬を伝った。

「う、くっ。」

喉の奥から嗚咽が漏れる。

「無理せんでええ。あんたが言うように、もしかしたらあんたの本当の身体は向こうの世界に残っとるんかもしれん。けど、今ここでわしと話しとるゆうことは紛れもない事実やで。」

とんとんと背中を優しくたたかれると、

その瞬間あたしは我慢することを放棄した。

「うわああああああん」

その夜あたしは久しぶりに、否ここにきて初めて思いっきり泣いた。自分の存在はあまりにも頼りなく、

夢か現実かもわからない。

でも、あたしは今ここに居ること、新撰組と共に有ることを幸福に感じている、

ただそれだけでいいのかもしれない。

住職はあたしが泣きやむまであたしの背中をずっと撫で続けてくれた。

\*

三日後、身体がだいぶ元の調子に戻ってきたので、あたしは住職

に墨染の法衣を借りて頭に笠をかぶり、大好きな仲間が待つ新撰組の屯所に戻るために、玄庵住職のお寺を後にした。

夢かもしれない、幻かもしれない。

でも今ここでこうしていられること、

それがあたしの至上の喜び。

だからそれでいい、否それがいいのだと思った。

## 第七章 4・至上の喜び：沖田総司

日増しに緑が濃くなっていて、気付くと驚くほど日差しがきつくなっていた。

季節は足早にまことを置いてきぼりにして素知らぬ顔をして日々が通りすぎていくのだ。

今朝、まことの夢を見た。

美しく女髪を結び上げ、控えめな薄紅の着物を着て、微笑みながらたたずんでいる。

何を話すわけでもなくただ笑ってこちらを見ているだけなのだけれど私は泣きたくなるくらいに幸せだった。夢の中でも会えたから。

目が覚めたとき頬に涙のあとがあつて、そんな自分が女々しくて苦笑いが浮かんだ。

会いたかった。

ただ会いたかった。

巡察から帰って井戸で手を洗っていながらそんな物思いに沈んでいると「何者！？怪しいやつ！」という声で現実に引き戻された。

声の方へ歩み寄ると小柄で墨染の法衣を纏い笠を目深に被った人間が屯所の前にいる。

門番の当番の隊士がその人物を睨んだ。

その人が笠を徐に取り払ったその時、黒髪がふわりと夏の風に舞った。

そこに立っていたのは、

柔らかな笑みを浮かべた

…まことだった。

！

なんで…

これは夢？

幸せな夢の続きなのだろうか？

ドクン

心臓が高鳴るのを感じた。

「水瀬！」

「水瀬！おかえり！」

「もう体はいいのか！？」

わらわらと隊士たちがまことを囲み帰還を喜んだ。まことが密偵に行っていたことを知っているのは幹部以上だからみなは江戸に療養していたと思っっているのだ。

「…」

私は喉に舌が張り付いてしまったようで声一つ出せなかった。

何か少しでも言葉を発してしまつたら、きつと全てが溢れてしまう。

私はその場に呆然と立ち尽くすしかなかった。

まことは人垣の中で皆に挨拶して会釈しながらそこを離れた。

そしてふとこちらを見た瞬間、私はその真っ直ぐな眼差しとぶつかった。

！

ドクン

心臓がまた一つ大きく跳ねる。

まことは一瞬目を見開き、そして泣き笑いみたいな表情になった。そしてその刹那、私に向かって一気に駆け出してきた。

「総司！！」

柔らかい衝撃。

まことは私に抱きつくと、一度胸に顔を埋め、顔を上げ、輝くような笑みを浮かべて言った。

「ただいま！」

ああ、私はこの笑顔に会いたかったんだ。

日陰に日の光が当たったように急速に心が暖かくなっていく。

私は不覚にも鼻の奥がつんと痛くなったけれど、まことの背中にそつと手をまわし一度だけしっかりと力を入れ、そして震えそうになる声をどうにか押し込めて言った。

「おかえり……」

手のひらから確かに伝わるぬくもり。

ああ、生きている。

確かに生きて、今ここで輝く笑顔を見せてくれている。

華奢なこの身体のどこにこんな強靱な精神力を秘めているのか。

引き裂かれるように辛い痛みもあったにちがいない。

でも、まことがこうして生きて、笑ってくれている。

今この瞬間に勝る喜びと安堵は後にも先にも私の人生に無いように思えた。

## 第七章 5・再会、ゆらぎ：土方歳三

「土方さん、局長室に来てください。水瀬が帰ってきたんですよ！」  
佐之助がそう言うのを聞いた瞬間俺は自分の耳を疑った。

そんな…まさか！

水瀬が本当に…。

俺は動悸が早くなり心臓が早鐘のように脈打つのを感じながら、局長室までのほんの僅かな距離さえももどかしく、足早に局長室へと駆け込んだ。

局長室に入るなり俺は瞠目した。

水瀬…！

生きていた。

水瀬は何故か坊主の墨染の法衣を身に纏い、幹部や勝ちちゃんに囲まれ、輝くような笑顔を笑っていた。少し痩せたか？

もともと華奢な体だか、頬の辺りが少し細くなったように見える。

髪は下ろしてあって、以前よりも伸び、肩を越す辺りまでになっていた。

凜とした真っ直ぐな眼差しはさらにその光を強め、輝きを増したように思うのは俺の錯覚なのだろうか。

「水瀬おかえり！」

「よく生きてたなあ。」

「遊女になった武勇伝聞かせてくれよな。」

「水瀬君、よく戻ってくれたな。無茶しないでくれよ。」



水瀬は皆にもみくちやにされて笑っていた。

水瀬！

俺は目を伏せる。

もう会えないと思っていた。

でもあいたかった。

ただ会いたかった。

この胸の奥底から込み上げてくる切なくて狂おしいほどの気持ちを  
なんと呼べば

よいのか俺は知らない。

俺の胸に鈍痛が走る。

…生きていた

ただそれだけでこんなにも俺は笑える。

「ほら土方君も何か言ってやりなさい。」

山南さんが小声で俺の耳元で囁いた。

言えるかよ、そんなこと。

俺はこいつに無理ばかりを強いて来た。

そんな俺がどんな言葉をかけられるのだろう。

俺は水瀬に近づく。

水瀬は俺を見てはっと息を飲み、向き直った。

もう二度とこんな目に合わせないように守りたい。  
そんな風に思った。

「…土方副長、只今帰りました。ご迷惑おかけして申し訳ありません。」

水瀬は目をふせ、頭を下げた。

その拍子に伸びた髪がさらりと肩から落ち、白いうなじがあらわになる。

女を知らないガキみたいに心臓がはねるのがいら立つ。

畜生、俺はどうかしている。

「…いや、よく戻ってきた。あとで報告を聞く。」  
俺はそれだけ言うつと背を向けて局長室をでた。

これ以上ここにいられない。

きつと何かが溢れてしまうから。

「土方さん!？」

「それだけかよ!」

皆の非難の声が聞こえたが俺は足早に自室に戻った。

一人になったとたん視界が揺らぎ、視線の先の畳がぼやけていくのが分かる。

総司に女一人に揺らぐなんて言ったのはいつのことだ?

俺はあいつが生きている、ただそれだけでこんなにも心が暖かくなつていく。

あいつの笑顔が、声が…俺を人足らしめる。

あいつは俺の心の半分を持っているんじゃないかねえかと馬鹿げた錯覚をした。

俺はこんな夢見がちな男じゃねえはずなのにな。

お琴に遠い昔甘い感情を抱いたことがある。

ただあのときは全てが柔らかく、優しいものだった。

なのにこの気持ちはなんだ?

激しく心を揺さぶる憧憬。

心の奥底からこみ上げる懐かしさと切なさの入り交じったこの狂おしいほどの想いは何だ？

「トシ、素直じゃないな。」

振り向かなくてもわかる。

勝ちゃんが俺を気にして追いかけてきたのだ。

「勝ちゃん、なんだよ。俺の悪口でも言っただくれればいいのによ。」

「トシ、水瀬君が行方不明になって夜も眠れぬほど心配したのも、帰ってきて死ぬほど嬉しいのも

…惚れてるからだろう？」

何言いやがる。

この人は普段は鈍いくせに俺のこととなると妙に深読みをして勘ぐる癖がある。

俺が水瀬に感じているのは…愛だとか、恋だとかそんなことじゃないんだ。

「バカいつてんじゃないよ。あんな九つも年若のガキに惚れるわきやねえだろ。」

ただ、俺を助けるためにあいつは自分を犠牲にしようとした、そいつが帰ってきたんだ、いくら鬼の俺でも動揺くらいするだろう？」

「…総司の為に忍ぶのか。」

「ちげえつつてんだろ。くだらねえこと言っただけじゃないよ。」

俺はいら立って勝ちゃんを睨んだ。

「そうか…ならば、土方歳三、おまえは上司として、武士としてきちんと向き合え。」

あんな言い方があるか。むやみやたらに嫌われ役に徹すればいいってもんじゃねえんだぞ。」

勝ちゃんは俺の肩をたたき、局長としての顔で言った。

「…」

確かにその通りだ。

俺は何者だ？と問われれば武士だと答える。

ならば、そう思うのなら、きちんと水瀬に上司として言うのだ。任務を遂行した水瀬をきちんとねぎらうべきなのだ。

俺は武士として生きる。

だからこの揺らぎを受け止めて見せる。

## 第七章 6 ふたり：沖田総司

夕げのあと部屋でごろりと寝転がっていると、襖があく音が聞こえた。まことが部屋に帰ってきた。いつも一人だったこの部屋に戻ってきたのだ。こんなにも人の気配が恋しくなる日が来るとは思わなかった。

「まこと」

「はい？」

「そつちいつでもいい？」

「いいよ？」

衝立の向こう側に行くと、向こうを向いて風呂上がりの髪を手拭いでガシガシ拭

いているまことがいた。その姿は色気の欠片も無く、前と何も変わらないその姿がなんだか嬉しくて思わず吹き出しそうになった。そんな私を怪訝に思ったのかまことは振り替えて言った。

「何？」

「ふふ：何でもないよ。ただもどつて来たんだなあと思って嬉しくなっただけ。」

まことはここにいる。

それがたまらなく嬉しい。

「うん。なんかこんな風に総司やみんなと普通に話して一緒に時間を共有出来るのがすっごい幸せなんだと思うよ。遊女になっっているんならあって自分の知らない世界がいっぱいあるんだって思った。みんな切ないことも悲しいことも孤独も全部心に押し止めて生きているの。自分は総司やみんなに会えて本当に幸せだったんだと思う。」

「まことは目を伏せて少し寂しげに笑った。

そんな顔を見ると先程とはうって変わって、濡れた髪も相まってはつとすくらしい艶やかだ。

「…まことは遊女の仕事…したんだよね？」

桂に身請けされたということはそういうことなのだということとは分かっているのに確かめずにはいられない。くだらない男の嫉妬だ。

まことは辛い気持ちも押し込めて引き受けたはずだ。なのにこれ以上それを聞いてどうしようというのか。

まことは一瞬訝しげな顔をして、思い当たったように目を丸くすると、みるみるうちに顔を破顔させて吹き出した。

「ふふふ、あたしは見習いだったし総司が気にするようなことは無かったよ。」

まことに私の心を見抜かれたようでもたまらなく恥ずかしい。顔に血が昇って行くのが感じられる。

「いや…ただ身請けなんて言うから心配だったんだよ！」

「ありがと。心配してくれて。でも桂はあたしが新撰組だって知ってて、完全に利用してやろうと思っただけだから、そういうことは何にもされてないから大丈夫。」

まことはにつこりと笑って言った。手の先に血が通っていく。

私は自分で思っている以上にこのことにとらわれていたのだ。「新撰組って何で気づいてたんだろ？どこかで会ってたの？」

「総司と甘味食べにいつて不逞浪士に襲われた時あったでしょ？あのとき川に飛び込んで逃げた男が吉田稔麿だったの。」

「えっ!？」

あの時の不敵な笑みは覚えている。底冷えのするような笑い方をする男で、その殺気はすさまじいものだった。

あの男が吉田稔麿だったのか…。

「多分あたしからなんか引き出そうと思って罫を仕掛けたんだと思

うけど、あたしはずっとずっとぼけ続けたからしびれを切らしたんだろうね。自分達から会合開いて大事な情報流しちゃうなんて。」

「どうやって長州の連中の動きを知ったの？」

「縁の下に潜り込んだの。」

「はあ!？」

まったくまことは私たちが思いもよらない行動をとる。

「それがばれて追っかけられて吉田と対決したんだよね。負けただけ。その時土方さんが助けに来てくれたんだけどあたしがぼんやりしてたせいで川に突き落とされたの。」

「土方さんは…自分のせいだって言ってたよ。まことがいなくなっ  
てみんなには見せなかつたけど死ぬほど心配してたはずだよ。あ、  
そうだ、これ…。」

私はまことに土方さんから預かっていたかんざしを渡した。

「!？なんでこれ総司が？」

「土方さんが自分を助けるために敢えてまことは川に落ちることを  
選んだって…。」

あの時の土方さんは長い付き合いの中でも見たことがないくらい動  
揺していて、弱弱しくて…。

ただただ痛いくらいにまことのことを心配して想っていることが感  
じられた。

「…そんなんじゃない。」

土方さんは新撰組のこれからに絶対に必要な人だもの。

あたしはこれが一番だと思ってやったことだから。

でもこの簪があつたから今あたしはここに居られるんだと思う。や  
っぱり斎藤さんのお守りは強力だよな。」

まことは茶化すように笑ってたけど、目に水っぽいものが溜まって  
いたことに私は気付いてしまった。

土方さんとまことの間には入り込む隙もないくらいの絆がある。

それは目には見えないけれど、強くて深いものではないだろう  
か。

さみしいけれど…まことが死んだと思ったあの暗闇の日々を思えば、たとえほかの人を想っていてもこうして笑っていてくれるだけではない。

そうして私はまことを守ろう。

いつかこの恋が想い出に変わるまで、きつと守り続けよう。

「…さすが斎藤さんだなあ。まことを川の底からこうして無事に帰してくれたんだし。」

きちんと肌身離さずもっていなよ。」

「うん！」

まことは私の大好きな輝くような笑顔を浮かべてうなづいた。

まことはまた強くなって帰ってきた。

辛くても苦しくても笑う。

だから私も笑うのだ。

この小さな背中に少しでもおいつけるように。



## 第七章 7・任務報告、帰る場所

帰ってきた。

新撰組。

あたしの心が求めてやまない場所。

みんなが出迎えてくれてすごうれしかった。

総司が、近藤先生が、山南先生が、佐之さんが、永倉さんが、平助君が、斎藤さんが…そして土方さんが…迎えてくれた。

帰ってきたんだ。

ここがあたしの生きる場所だ。

身体は平成の現代にあるのかもしれない。

本当はここに居ないのかもしれない。

でも、今こうしてみんなに逢えて、みんなのことが大好きで…

心のそこからうれしいと思う。

この気持だけは本物だって胸を張れる。

あたしがずっとここに居れば現代にあるあたしの身体は確実に寿命をすり減らすだろう。

そしてあたしの身体の寿命が尽きたとき幕末のこの時代を生きるあたしの存在はここから居なくなるだろう。

それは予感、ううん、確信だ。

あの夢はきつとそういうことなんだと思う。

でも、それでもあたしはここで、新撰組で生きたい。

みんなと一緒に走っていききたい。

みんなが、新撰組が…土方さんが…好きだから。

\*

あたしは帰ってきた翌日、局長室で、近藤先生と土方さんと向かい合っていた。

近藤先生は相変わらずいかつい顔にえくぼを作って笑っていて下さっていて、土方さんは眉をしかめてやっぱり難しい顔をしていた。でもそれでも大好きだと思う。

あの日”こいつに指一本でも触れてみる”そう言ってくれたこと、すごくうれしかった。

あたしを送りだした罪悪感でも、なんでもいい。

ただ全身で守ろうとしてくれた土方さんの優しさが、ただそれだけで、あたしをこの上なく幸福を感じられる。

「よく眠れたかい？」

「はい、久々にぐっすりです。いろいろご迷惑おかけして申し訳ありません。」

「いや、本当によく帰ってきてくれた。いろいろ辛いこともあっただろうに……」

近藤先生は本当に涙もろい。

目頭を押さえる近藤先生を見て、土方さんが口を開いた。

「水瀬、任務ご苦労だった、お前が残した情報の”マस्या、フルタカ、カヤク”は今山崎に調べさせているが、ほかに何かつかんできた情報はあるのか？」

「はい。マस्याのフルタカと言う人が今回のたくらみの一端を担っている様子でした。その計画には火薬や武器が必要とのこと。あとはこれは私にはよくわからなかったのですが肥後守様と中川の宮様の暗殺、それから玉を奪うのだと話していました。」

「なんだと!!」

二人は気色ばんで身を乗り出した。

「……畜生、あいつらここで一気に佐幕派の要人を排除して、帝を奪う気か!」

「何ということだ！断固阻止する！！」

要人暗殺！？

帝：天皇つてことだよね…。

天皇の誘拐！？

ヤバいでしょ、いくらなんでも！

「山崎、聞いているか？」

土方さんが天井に声をかけると、天井の板がずれて音もなく山崎さんが下りてきた。

「うわ！」

あたしは驚いて後ろによろける。

山崎さんつて忍者なの？！

「枳屋の調べは付いとります。ただフルタカという人物についてはまだ…」

「ああ、では監察方をあげて走急に頼む。」

「承知。」

そういうと山崎さんはふすまを開けて静かに局長室を出ようとして振り返った。

「…ああ、副長。言い忘れたことが。」

「なんだ？」

「水瀬の出自が分かりましたよ。」

「え？」

！

山崎さん何を言い出すの？

あたしの存在の痕跡がどこにもないことを言うの？

万事休す。

「江戸に確かに水瀬という医者が2年前まで居たそうです。3人の

男子と一人娘が居たそうですが、父親と兄は相次いで病死、娘の行方はそのあとわかっていないと近所の人間が言っていました。」

！

山崎さん…うそついてくれるの？

あたしのために…

「…そうか。山崎ご苦労だった。」

土方さんは安堵したように表情を和らげて言った。

「辛い思いをしたのだな、水瀬君…。」

近藤先生は柔らかく笑いあたしの肩をポンと叩いた。

その拍子に涙が一粒目からこぼれた。

山崎さんは満足そうに去って行った。

ああ、ごめんなさい。

こんなにいい人たちにうそついていて。

あたしたちの季節はまだまだ始まったばかり。

きつとたくさんのことがまっている。

でも…あたしは大好きなこの人たちのためにきつと走ろう。

## 第八章 1・予感：斎藤一

元治元年六月五日

京の夏は厳しいと言われているが、今日は朝からうだるような暑さ  
でじっとしていても滝のような汗が伝う。

水瀬が手に入れた情報をもとに監察方が力をあげて調べ上げ、枡屋  
喜衛門が古高俊太郎という名の倒幕派であることが判明、今朝屯所  
に連行した。

それから一刻以上この蔵で責め問いが続いているが古高は何も話そ  
うとしない。

蔵の中は特に蒸しており、埃と汗の独特のにおいでむせかえるよう  
だ。

「吐け！てめえが倒幕派の先鋒になって要人暗殺をたくらんでいる  
ことは上がってんだよ！」

木の棒で背や腹を打ち付けても古高はうめき声を上げるだけで一向  
に吐こうとしない。

「ちっ、強情な奴だぜ。」

永倉さんは流れる汗をぬぐい、古高を睨みつける。

そのとき、おもむろに副長が立ちあがった。

「永倉、俺が代わる。皆外に出てる。」  
ぞくり

この暑さなのに鳥肌が立ったような錯覚を起こす。

何だ、このさえざえとした底冷えのするような笑顔は。

古高は遅かれ早かれ吐くだらうな。

あの副長にあんな顔をさせたんだ。

あの人だけは敵に回したくないものだ。

\*

蔵の外に出るとまだ午前中なのに刺すような強い日差しが目を射た。暗い蔵の中にいたものだから明るさに目が慣れず、目が開けていられない。

俺はまぶしさに目を細めた。

目が徐々に慣れてきて歩き出すと井戸のほうから賑やかな声が聞こえる。

「わあ、水瀬はんがかけはった。」

「そんならこつちからかけたる、えい！」

「わ、つめたい！やったな。」

「きゃ〜！！！」

ふと覗き込むと、水瀬と八木邸の子供たちが水掛けっこをして遊んでいた。

水瀬は稽古終わりなのか道着のまま、布が身体の線に沿って張り付き、高く結いあげた髪の手から水が滴っている。

まったく密偵のために三月も遊女として生活していた間何をしていたのだ。

あいつは少しも女らしくなっていないらしい。

あんな姿をしてそれがどれほど男の邪な欲を掻き立てるのか気付いていないのだ。

「あ、斎藤さん。」

水瀬は少し離れて見ている俺に気付くと少し照れたように小さく笑い、子供たちに向き直って言った。

「じゃあ、みんな熱にやられたら大変だから屋敷の中にもどろっか。」

「……はい。」

「じゃあ、またな。水瀬はん。」

「今度は隠れ鬼やで。」

子供たちがわらわらと帰っていく。

急に静かになり、蝉の鳴き声が妙に耳につく。

「まったく…お前は女子なのだから…そんな恰好をして襲われても知らんぞ。」

俺は水瀬の身体から目をそらして手ぬぐいを投げた。

「あ、どうも。ふふふ。」

水瀬は髪を手ぬぐいで拭きながらくすくすと笑っていた。

「何をわらっている？」

「ごめんなさい、なんか今の斎藤さんのセリフ、うちのお父さんみたいになって。」

お父さん、か。

地味に傷つくな。

「そんな歳ではない。」

俺は慚然として言うと、水瀬は我慢できないというように吹き出した。

「わかってますよ。ただ、昔を思い出して懐かしくなっただけです。」

満面の笑みを浮かべる水瀬をみると、父親でもなんでもいいように思えてしまう。

水瀬が俺の隣で笑っている、ただそれだけでこんなにうれしいとは、俺もやきが回ったものだな。

ひとしきり笑うと水瀬が思い出したようにつぶやいた。

「斎藤さん、蔵では何がされてるんです？」

「え？」

「みんな絶対に近づくなつて言うんです。」

そつか。副長も沖田さんも水瀬には知らせなかったのか。

「古高の責め問だ。」

「責め問？」

「強いて言えば拷問して吐かせることだ。」

「！」

水瀬は目を見開き傷ついたような顔をした。

「お前にそんな顔させたくないから皆言わなかったんだろ。」

水瀬は唇を噛んで悔しそうな顔をした。

皆水瀬には甘くなるがこの女はそんなものには甘んじることなくどこまでも強靱な精神を持って走っていくのだから。

とその時、蔵のほうから隊士が一人駆けて来た。

「斎藤先生、水瀬！副長の責め問いで、古高が吐きました。奴ら京の都に火をかける計画を立てていたみたいです！大量の弾薬、火薬が強奪されたそうです。焦った連中は今日にも動き出すかもしれません。倒幕派の会合をしらみつぶしにあたるそうです。ただ今会津に早馬を送っていますが新撰組も至急出陣の準備をせよ、とのことです。」

「！承知した。すぐに向かう！」

なんとということか！

俺水瀬をみると、水瀬も強い眼差しで頷くと、俺たちは駆けだした。

何かが起こる。

何か歴史の大きな流れがうごめいているのを感じざるを得なかった。



## 第八章 2 池田屋事件、武者震い

「では二手に分かれて行動する。

近藤局長、沖田、永倉、藤堂、奥澤、新田、安藤、谷、武田、浅野以上の10名。

山南さん、山崎は屯所を固めてくれ。残りを土方隊とする。

倒幕派の会合が開かれるのが濃厚な四国屋と池田屋を中心に探索を行う。」

池田屋！

これが世に有名な池田屋事件なんだ。

ああ、あたしってなんて使えない。

名前だけしか知らなかったなんて…こんな経緯で起こった事件だなんて！

そつだ！総司…

総司が結核になるのもここ？

そんなの…ダメだ！！

「土方副長！！」

「何だ水瀬？」

「私は？」

「お前は残れ。倒幕派に顔が割れてる。危険だ。」

「私も連れて行ってください。お願いしま」水瀬。「」

土方さんはあたしをさえぎって言った。

「そう言っても無駄だということにはわかってた。いいだろう。死ぬかもしれないねえぜ。」

「もとより覚悟の上です。」

「…フン、ただし近藤さんのほうについていけ。四国屋のほうが濃厚らしいからな。」

「!…はい。」

あたしは知ってる。

池田屋で起きることが。

でも本当に？

歴史は変わるかも知れない。

「土方君、すまない。この大事な時に…。」

山南さんが青くなって言う。

昨日から山南さんは身体の調子を崩して寝込んでいるのだ。

熱と嘔吐で、だいぶやせてしまった。

「いや、あなたはここで屯所をしっかりと固めてくれよな。」

土方さんは山南さんの肩を叩いて言った。

\*

夜がすっかり更けあたしたちは探索に出発した。

武器は予想以上に重くて暑い。

熱中症になりそうだ。

「ご武運を。」

「武運を。」

「新撰組、いざー!」

みんな腕をからませたり、刀を抜いたりしてその健闘を祈っている。死ぬかもしれないのに…。

みんなまっすぐな目をしていて、恐怖などは微塵も感じられなかった。

”ご無事で”じゃないんだな。

無事で帰ることよりも、死んでも志を達成しろってことなんだ。

総司に特に体調の変化はみられない。

ただ厳しい顔でいつももの穏やかさはなくて、冴え冴えとした月のように冷たい表情だった。

初めて総司と立ち会ったときに似ている。

あの時もこんな風に殺気を身にまとっていて、触れることのできないほどの凄烈な空気を身にまとっていた。

子の刻。

あたしたちがしらみつぶしの搜索を始めてからかなりの時間がたった。

汗で武具の中の着物はぐっしょり濡れている。

”池田屋”

そう書いてある提灯の前に立つ。

ついに来たんだ。

歴史の中にみを置いていることに改めてその重みを感じ、あたしは全身が総毛立つのを感じた。

「どうやら土方の予想は外れたらしいな。

では中に入る。先駆けとして切りこむのは沖田、永倉、藤堂、そして水瀬。」

近藤先生があたしをみて不敵に笑った。

「！」

「先生！水瀬は外のほうが…」

皆が意外そうな顔をし、あわてて口を挟む。

「水瀬君の剣の腕と強運はこの中の誰にも負けてはいないからな。」

「でも…！」

「これはわれわれが勝つための布陣だよ。勝つために水瀬は先駆けに必要だ。危険だとしても。」

ここに居る以上安全な者は一人もいない。

それぞれが自分の役割を果たすのだ。」

「……」

みんな一瞬目を見開き、そして互いに頷き合った。  
あたしはうれしかった。

近藤先生は一人の隊士としてあたしを買ってくださっている。  
みんなが認めてくれた。

あたしは一人の人間としてここに居ることを認められている。  
全身にふるえが走った。

怖さと緊張感はもちろんある。

でもこれは武者震いなのだと自分に言い聞かせる。

「武運を。」

みな小声で言いあった。

近藤先生が池田屋の暖簾をくぐる。

「新撰組でござる。旅客改めをされたし。」

「し、新撰組だ!! 逃げろ!!」

私たちは池田屋になだれ込んだ。

歴史の大舞台の幕が今、上がった。

### 第八章 3 池田屋事件、女は恋に死に、男は志に死ぬ

近藤先生、総司、あたしの3人が二階に踏み込むと同時に灯りが消え、一瞬にして闇に溶ける。

怒号

金属の当たる音、

何かが斬られる音、

人のうめき声。

あたしは刀を持ったままただ立ち尽くしていた。

落ち着かなきゃ、そう思うのに震えが止まらない。

なんのためにここにいる？落ち着け！

「逃げるか！！総司、水瀬、二階は任せたぞ！！」

近藤先生は敵を追って外へ出ていく。

敵は何人？

5人？10人？

わからない、怖い！！

「まこと、背中は預けたよ。」

「！！」

総司の声が聞こえた。

否、そんな気がしただけなのかもしれない。

でもそれだけで十分だった。

あたしが土方さんに無理を言ってここまで来たのは、総司を守るためじゃん。

だったら覚悟を決める！

総司の体の熱が空気を通して伝わるような気がした。  
まるで一陣の風のように総司が動く度に敵が倒れる音がする。

とその時。

「う……」

「死ねえ！」

ガサ、ドサ。

隣から総司の気配が消えた。

総司？

「総司！お願い！返事して！……」

何も答えない。

まさか、結核……？

歴史通りに？

血を吐いた？

ダメ……

総司が死んじゃう。

「そこかあ……！」

だみ声がしたと思ったら切りかかって来た。

右！

ガキヤ！

あたしは寸でのところで突きをかわし、返して相手の剣を払った。

この暗闇。

そして倒れている総司。

あたしは今日の前で倒れている死にそんな仲間を前にして、それでも怖いなんて言えるだろうか？

あたしは今なんのために、誰のために戦う？  
総司はあたしを信用して背中を任せてくれた。  
あたしが今守るべき人はここにいる！  
絶対に死なせない！！

あたしは刀を握り直す。

芹沢先生からもらった脇差し。

あたしの手を馴染む。

懐には斎藤さんからもらったお守りの簪。

みんながあたしを守ってくれている！！

だから負けられない！！

なぜだかこの暗闇のはずなのに目が冴え、心がすうっと冷えていくのを感じる。

「オメエも死ね！」

左だ！

あたしは真一文字に刀を引く。

ぐしゃり。

柔らかい、人の肉を斬る感触が手をしびれさす。その刹那、生暖かい血飛沫が飛

びあたしを濡らす。

「畜生！」

「やつちまえ！」

2人。

見える！！

何故かこの墨をぶちまけたような闇の中でも敵の動きが感じられた。

あたしは一瞬低くしゃがみ相手の懐に斬り込む。

あたしの後ろにいたもう一人を振り向き様に袈裟懸けに斬った。

相手はピクリとも動かない。

ああ、あたし人を殺したんだ。  
睨か熱くて痛い。  
あたし泣いてるんだ。

「はあ、はあ…総司？お願い、返事して！」

あたしは肩で息をしながらかがんで、総司の様子を伺う。  
暗い上に、血や汗がついて様子が分からない。  
はやく、総司をここから連れ出して手当てしないと。

「久しぶり。華雪。」

暗闇の中から響く冷たい声。

その声は！

あたしは目を見開いて声のするほうを伺う。

「吉田稔磨！？」

「覚えてたんだ、嬉しいよ。まさか君が生きていたなんておもわなかったけど。」

おかげで多くの同士を失ってしまった。」

暗闇の中でも吉田は不気味な笑い声と存在感を放っている。

吉田はやおら刀を振りかざした。

ビュッ

風を切る音。

見るな、感じる！

ガキヤ



あたしは吉田の剣を受け止めた。  
火花が散ったようにさえ見える。  
かつてないこの集中力。

あたしは今剣と一体になっている。

「へえ、僕の剣を止めるんだ。」

吉田は驚くような早さで刀を操る。

あたしは受け流すだけで精一杯だけど、負ける気は一切しなかった。  
あたしにはみんながついてる。

だから負けない！！

一瞬の間。

吉田の動きがスローモーションみたいに見える。

いける！

あたしは低くかがんでそのまま吉田の胸に斬り込んだ。

その刹那

「吉田先生！」

ザクリ。

肉を切り裂く重み。

顔にかかる血飛沫。

鉄鎧のむせかえるような匂い。

ドサ

「！」

目の前に崩れ落ちる影。

あたし知ってる。

この鈴が鳴るような柔らかな声を。

このかすかに甘い香りを。

「華香太夫…？なんで…」

「言ったやろ…華雪…うちの…すべては…吉田せんせ…やねん。」

華香大夫は浅い呼吸を繰り返しながらも笑って言った。

華香大夫の傷は深い。

闇なのに華香の凄艶な笑みが見えたような気がした。

「華香、よくやった。顔だけかと思っていたがたまには役に立つな。」

「吉田はなんの感慨もなさそうに冷徹に言い、持っていた刀を華香の

胸に食い込ませた。

「…愛…して…る…。」

華香は凄艶で、そして至福の笑みを浮かべ、大好きな人の腕の中で逝った。

「あなたね…！」

あたしはそんな吉田を怒鳴りつけそうになったけれど二の句が継げなかった。

殺したのはあたしだから。

あたしは何も言う資格はないんだ。

ああ、目が痛い。

「おかしな人だな、何故泣くの？君は華香を嘘ついて騙していた。

華香も君を利用していた、いわば敵。その1人を殺したただけだろう

？そんなものは偽善だよ、華雪。」

「！」

「華香は僕がすべてだからね、君と華香は敵同士。決して交わるこ

とはないのさ。それは揺るがぬ事実。僕にとっては…誰が死のうと、何を利用しようとも、全ては志の為にある。その志の前には何者も、自分の命さえも並ぶべくもないのさ。だから僕は迷わない。

さあ、立ちたまえ。決着をつけよう。

君も何かの為に戦うのだろうか？華香の為に動揺して剣を持ってないなんてそんな偽善は言わせない。」

吉田は笑っていない。

いつも気味悪く笑っていた吉田の初めて見る素顔かもしれない。志のために鬼になる武士の顔。

あたしはふらふらと立ち上がった。

華香太夫をだまし、こんな風に殺したのは紛れもないあたしだ。

それで剣を持ってないなんて自分の罪悪感を軽くするためのいいわけだ。

華香大夫のすべては吉田稔麿に。

あたしは新撰組とともに。

そう決めたときから、あたしたちは決して交わることのない対極に居るんだ。

ならば…迷うな。

さあ、行け！

ビュッ！

キンツ、ガキヤツ！！

刀が火花を散らしてぶつかり合う。

身体中の血がたぎっていて燃えるように熱い。

目が痛い。

目から伝うのは涙なのか、汗なのか、もはやどちらでもいいような気がした。

負けられない！！

絶対に。

あたしは守るべきもののために、新撰組のために闘う！

一瞬間合いをとったその刹那。

吉田の剣先があたしの頬を掠めた。あたしはそれに構わずそのまま

吉田の肩口に

踏み込む。

ザシュ！

「く…」

吉田は右肩を押さえて方膝をついた。

傷口から黒い血がじわじわとしみだしているのが闇の中でもわかった。

吉田は浅い呼吸を繰り返している。

あたしはただその場に立ち尽くしていた。

手の甲で頬をぬぐうと汗で傷口が少し滲みた。

「ふ、負けたな。」

…女子は守るものがあると…こんなにも強くなるのかな？肩を刺されてはね…。とどめを刺さないの？捕縛しないの？僕をこのままにしておくのは得策ではないよ？」

吉田はどこまでも意地悪で憎らしい。  
でも…

できない。

あたしは、偽善と言われようとも…

「死にたきや自分で死になよ。あたしは総司を助ける。あんたを殺してる暇はない。」

あたしは壁際で倒れている総司に歩み寄った。

「ふん、本当に…甘いねえ。華雪は。」

吉田がくつくついじわるな笑いを浮かべている。

「吉田稔麿。華香大夫はね、本当にあんたのことが大好きだったよ。騙されても一緒に生きられなくてもそれでもいいって…それは、女の靱さだと思う。あたしはそんな華香大夫の凜とした強さがすごく好きだった。華香大夫はね、夢があつたんだよ。」

「夢？」

「島原大門の外の桜並木をあんたと二人で歩くの。そして華香大夫の本当の名前をあんたに呼んでもらうのが何よりの夢だった。」

「ふん、下らないね。」

吉田はそう言うのと肩をかばいながらゆっくりと立ち上がると、華香大夫の軀に近づき簪を引き抜いた。

華香大夫の死に顔は大好きな人の腕の中で凄艶で至福の笑みを浮かべているように見えた。

そして吉田は自分の髪紐を解くと

その簪にくくりつけ、あたしに放ってよこした。

「…お倫…」

「！」

”お倫”それが華香大夫の名前…

きつと聞こえてる。

華香大夫には聞こえてる。

だから大丈夫だ。

「島原大門まで散歩している暇はないから…君が代わりに行ってくれ。」

吉田は脇差しをやおらさやから抜き、そしてそのまま腹につきたてた！

「吉田！！！」

「う…くッ…」

血が腹からどくどくと川のようにあふれる。

「すべては……こころ……ざし……の……ために……。桂……せんせ……あとは……まかせ……ます……。」  
それが吉田稔麿の最期だった。

あとにはただ静寂が広がり、血と汗のにおいでむせかえるようだった。

そのあとすぐに土方さんや斎藤さんたちが二階に駆け付け、総司を運び出してくれた。

総司は血を吐いたわけではなくて、熱にやられただけだったらしい。新撰組は死者1名、負傷者は総司をはじめ、永倉さん、平助君など数名だった。

空が白みだした頃あたしたちは屯所に戻るようになった。  
長い長い夜が明ける。

こうして歴史の大舞台である池田屋事件は幕を閉じた。

## 第八章 4・病みあけ：沖田総司

池田屋事件から三日、新撰組は事後処理に追われていた。

私はというと情けなくも自室で絶対休養を言い渡されて寝ていた。

昨日のことは熱に浮かされたみたいにあいまいで頼りない。

近藤先生と二階へ斬り込んでいき、めまいがしたと思ったら、視界が暗くなり、そのあとの記憶はない。気付いたら、組合所だった。土方さんたちが池田屋の二階に到着したとき、私は血まみれのまことに抱きしめられていたらしい。

どうやら私は熱にやられて昏倒したらしく、その間まことはたった一人で、倒幕派と闘っていたらしいのだ。

倒幕派の死者の中には吉田稔麿と身元の分からない女の遺体があったらしい。

まことが闘った結果なのだろうか？

私が倒れたせいで辛い思いをさせてしまったな。情けない。

二度とまことを危険な目にあわせたくなんて無かったのに。

暑い。

熱はだいぶ下がったものの、真夏の蒸し暑さで頭がぼんやりしてしまう。

私は浴衣の襟元を開けて団扇で風を送った。

「総司、大丈夫？」

ふすまが開いて水の入った桶と手ぬぐいを持ってまことが入ってきた。

まことは珍しく髪を横で束ねて紺の浅黄色の浴衣を着ていた。

着ているものもそっけないのに、襟元や裾からちらりとのぞく白い肌がまぶしくて、熱のせいばかりでなく、顔が熱くなるのを感じた。

「ん？もうだいたいよいよ。」

私はそんなまことから目をそらし天井の木目に目を移した。まったく私らしくない。

「そっか。新しい替えの浴衣持ってきたよ。手ぬぐい替えるね。」  
桶の中で涼やかに水が跳ね、まことの冷たい小さな手が額の熱を吸い取っていくようで心地よかった。

子供のころに戻ったみたいだな。

もう永らくあっていないけれど、熱を出した時ミツ姉さんがこうしてついていてくれたものだ。

なんだかくすぐつたくて落ち着かない気分になる。

「汗かくようになってよかった。じゃあ背中だして。」

まことは後ろを向いたままとんでもないことを言う。

「ええっ?!」

「何？汗かいたままじゃ気持ち悪いでしょ？浴衣替える前に背中拭いてあげるから。」

まことはさも何でもないことのように言うけど、何とも思わないのだろうか。

それはそれで男としてもらっていないということでも少し哀しい気もするけれど。

「あ、うん。じゃあ…」

私はまことに背中を向けて浴衣を脱いだ。

ひんやりした手ぬぐいが背中を首から腰にかけてゆっくり汗を吸い取っていく。

一瞬まことの細い指が肌に触れ、その部分がやけどしたように熱をもつ。

落ち着け！

なりやめ、心臓！

「ねえ、まこと。」

そうだ言わなければいけないことがある。私は沈黙に耐えられなくなつて口を開いた。



「ん？」

まことは背中越しに私を覗き込んだ。

「昨日ありがとうね。守ってくれて。でも…私は情けないんだ、あんな危険な中でまことを一人にして自分はぶっ倒れてるなんて。そうだ。」

守りたかった。

私にあるのは剣術だけだ。

それは危険な状況でも近藤先生や土方さんや…まことや、大切な人たちを守って切り抜けるためのものはずだった。なのに…一番大切な時に私は役に立たなかったんだ。

近藤先生のように人の上に立つ器や求心力を持っているわけではない、土方さんのように組織をまとめる辣腕があるわけでもない、自分にあるのは剣術だけだ。

今まではそのことにさして疑問を持たなかった。近藤先生や土方さんが表舞台で立ち回るために自分は剣術で、黒子として働いたら、それが一番いいと思っていた。

なのに、いつからだろう。

そんな自分に焦りを感じたのは…。

そのうえ、重要なところで働けないなんて…。

自分の存在意義が見えなくて、無力さが情けなくふがない。

「なあんだ、そんなこと…馬鹿だねえ。あたしいつも総司に守ってもらってるよ？」

まことはなんでもないことのように手を動かしながら笑って言った。

「え？」

私は首を傾げる。

まことはゆったりとした調子で桶の中に手ぬぐいを浸して絞っている。

そして静かに言葉を紡ぎだした。

「背中は預けたよ」ってあの言葉。自分が信頼してもらってるって、任されてるって何よりも強力なお守りだと思う。だって絶対に

負けられないっておもうじゃない？それって十重二十重に守られるよりもずつとずつと嬉しいんだから。総司があんなふうに言ってくれなかったら、あたし、きつと戻って来れなかったよ。だから、信じてくれて…ありがとう。うれしかったよ。」

まことの言葉は飾り気が無くてまっすぐで、私の心の奥どこまでも深くまで沁みこんで行った。

温かくて、でも力強い。

まるでお日様だ。

「そっか…」

私はうまく言葉を発することができなかった。

「あーなんか恥ずかしいね。浴衣ここ置いてく。じゃあ、着替えてちゃんと寝るんだよ！」

まことは照れくさいのか少し乱暴に手ぬぐいを桶に入れて勢いよく立ちあがり、そして部屋を出て行った。

なんていうかしてやられたな。

やっぱりただの女子じゃないんだな。

あーあ、まったく反則だと思う。

そんな言葉、うれしくて仕方なくなってしまう。

どこまで行っても私の想いは片恋なのは目に見えているのにな。

私はまことがもってきてくれた浴衣に着替え、布団に横になると、夕風を感じながら眠りに落ちた。

\*

ふと目を覚ますと夕闇が迫っていた。

部屋全体が薄暗くなっていて、ひぐらしの鳴く声が妙に物悲しさを誘う。

とその時、ドタドタ走ってくる足音が聞こえてきた。

あの足音は…

「よお、調子はどうだい？」

佐之さんが顔をのぞかせる。

「もうだいたいいいですよ。」

「まったく心配させやがるぜ。水瀬が泣きながら総司を抱きしめてたのを見たときは胆が冷えたぜ。」

「え？」

まことがそんな風に？

「いやあ、水瀬のあの取り乱し方見りゃあ、水瀬も総司に惚れてるのが一目瞭然だろ？甲斐甲斐しく世話してるし、よかつたな。熱いねえ。」

「なっ…！！！」

佐之さんは完全に勘違いしてるんだ。

まことは土方さんのことが好きなのにな。

でも自分のことをそんなふうに想っていてくれたならそれはこの上なくうれしい…

「まったく何の騒ぎだよ、うるせえぞ。総司大丈夫か？」

ふすまが開くと土方さんが部屋に入ってきた。

「ああ、土方さん、水瀬も総司に惚れてるって話ですよ。あの水瀬の様子見ればそう思うでしょって話。」

「…そうか。よかつたな、総司。」

土方さんは穏やかに口元を緩ませて言った。

「ああ、佐之、その水瀬が飯なのにおめえが居ねえって探してたぜ。」

「マジかよ。飯飯。」

佐之さんはあわただしく部屋を飛び出して行った。

後には沈黙。

「…土方さん。佐之さんは…何か勘違いをしてるんです。」

私は何を言おうとしているんだ。

「…何がだ？」

「土方さん、まことのこと…本当は…」総司「」  
私をさえぎって土方さんが不敵に、意地悪そうに言った。

「俺が九つも年若のあんなガキに本気で惚れるわきゃねえだろ。俺は使えるもんは使うだけだ。」

知ってた…？

土方さんは気付いていたんだ。

まことの想いに。

それでも、まことのあの度胸や演技力、腕っぷしの強さは新撰組にとって利用できるかと踏んだから、だからそれを利用した？

「…土方さん！」

「なんだ？」

「まことはここにしか居場所がないんです。まことの気持ちを利用しないでください！」

「…俺にとつてのすべては新撰組だ。そのためにはなら利用できるものは何でも利用するし、鬼になることも構わねえ。今さらだろ。」

「でも…」

まことはあなたのことが本気で好きなんです。

貴方を見るまことをみれば一目瞭然ですよ。

それに、まことが居なくなつてからのあなたをみれば…あなたがどれほどまことを想っているかわかりましたよ。

なのに、貴方は受け入れることはないんですね。

決して一人の男として彼女の想いに向き合うことはしないのですね。どこまで行つても、貴方は新撰組の鬼の副長、土方歳三なのです。ね。だったら私がもらいます。

私がまことを女子として幸せにします。

闇はその帳をおろし、灯りのない部屋には互いの顔も見えないほど頼りなかった。

## 第八章 5・恋の痛み

痛かった。

胸が、ただ苦しくて痛かった。

…九つも年若のガキに本気になるわけないだろ、使えるもんは使うだけだ…

総司の部屋に夕餉を持っていこうとして聞いてしまった、あの言葉を。

息を殺して、どうにかその場を離れたけれど土方さんの地をはうような低い冷たい笑い声はまだ耳に残っている。

はじめからそうだったんだ。

分かっていたことじゃん。

土方さんはそういう人だから。

女の人にはどうしなくなつてもてるし、土方さん自身から好きになるのはお琴っていう人で…

そしてその恋さえも”すべては新撰組のために”という志の前には並ぶべくもない。

そんな土方さんの心にあたしなんかが入り込む余地は全くないんだ。

馬鹿みたい、あたし本当に馬鹿みたい…

それに、あたしはこの恋をかなえたいって思ってるわけじゃない。だから別にいいんだ。

何よりもとあたしはここにいない人間なんだから、だから別に悲しくなる必要はない。

土方さんは新撰組のためにあたしを利用してただけ、あたしだって未来から来たのを隠してここにいたいからいるだけ。

だから別にいい。いいんだ。

でももしあたしがもともとここにいて、土方さんと普通に逢っていたらあたしはこの想いを伝えただろうか。否、あたしはやっぱり伝えられなかっただろう。

今のこの関係を壊すのが怖いから。世の中の恋愛している人のほとんどは多分この悩みを抱えてるんだろうな。

あたしなにやってんだろ。泣きたくなんかないのに……。視界がぼやけ、涙が溢れてくる。

あたしは縁側に端座して足をぶらぶらさせながら夜空に浮かぶ月を見上げた。

月が涙できらきらしてるけどぐにやりと歪む。

華香大夫は天国で吉田と向かい合えてるだろうか。

あたしを憎んでるよね？恨んでるよね？

吉田稔磨を、貴女の最愛の人の命を奪ったのはあたしだから。

華香大夫は自分のすべては吉田と共に有ると言った。

だから自分の命で吉田を守れたことは何も苦ではなかったのだと思う。

吉田さえ生きて、本懐を遂げてくれるのならば。

でもあたしは吉田を死に追いやった。

許してなんて言わない。

あたしはあたしの守るべき人が居たから。

だからあたしは貴女の命を、吉田の命を奪ったことを負って生涯生きる。

あたしにはそうすることしかできないから。

ねえ、何であたしたちは敵同士だったんだろうね。

未来で会っていたら、きつとあたしたちは友達になれたと思う。

でも、この幕末では、決して交わることがない平行線にあたしたちはいた。

でも、あたし、貴女が好きだった。貴女の生き方に惹かれた。誰に笑われようと、愚かだつて言われても、自分の恋に胸を張つて、惚れた男のために敢えて利用され続ける。それは決して犠牲なんかじゃなくて、そうすることが至上の幸せで…。

その凜とした靱い生き方は貴女じゃないとできないよ。いつかあなたは言つていたよね。

これは虹を追いかけるような恋だと。

目に見えるのにけつして届かないモノに恋焦がれるのは苦しくて、でもそれでも求めずにはいられない。そんな恋なのだ。

今あたしもそんな恋をしてる。

大好きな人はあたしじゃなくて、もっと大きな、もっと遠くにある志を見続けている。

その隣に並ぶことも女子として試してみてもらうことすらできない。

あたしはその背中をずっと追いかけることが精一杯。でもそれでもよかった。

大好きな人と同じ空の下で、生きてゆけるなら。

その人のために、その人が笑えるように、何かが出来るのならそれが一番うれしい。

だから凜として、顔をあげて、自分の恋に誇りを持って生きていきたい。

なのに…あたしは弱虫で、臆病だから、土方さんの言葉にこんなにも動揺してしまう。

ツヨクナリタイ。

自分の恋に胸を張つて笑つて土方さんの背中を押しだせるくらいツヨクナリタイ。

この涙を流し切つた時、あたしは強くなれるかな？

「水瀬？どうしたのか？」

不意に肩を叩かれて、あたしはあわてて袖で涙をぬぐい、振り向くと、そこには永倉さんがいた。

「なんだよ、水瀬。総司となんかあったのか？」

永倉さんは特にからかうでもなく自然とあたしに問いかけた。

「なんで総司…？」

あたしの頭にははてなが浮かんでいたと思う。

「お前、総司に惚れてるわけじゃねえの？」

は？なんでどこからそんな話が…？

「違います！」

あたしは顔をぶんぶんふつて否定する。

「池田屋で、お前あんなに必死だったじゃねえか。」

永倉さんはいつになく真剣な様子で言った。

「そんなんじゃないです！！それは総司が死んじゃうと思ったから

で…あたしは…あたしの好きな人は…！！」

何言おうとしてるの？

それを言っでどうする？

あたしは二の句が継げない。

なんて言っでいいかわからない…。

「なあ…お前、好きな奴いんだな？」

ずっと黙っていた永倉さんが口を開く。

「…はい。」

ここまで言っというて居ませんなんてしらじらしすぎる。

「それは…総司でも、おそらく斎藤でもないんだよな？」

「…はい。」

永倉さんは鋭い。

ふと嘆息して永倉さんは上を向いた。

「そっか…。うまくいかねえよな。色恋つてのはよ。」

水瀬はさ、気付いてんだよな？総司の気持ちも、斎藤の気持ちも。」

「…！」

「まあ、わかるよなあ。」



あいつら隠すの下手そうだからなあ。  
なあ、水瀬、厳しいこと言うかも知んねえけど、お前もつと自覚しろ。

自分が女だってこと。しかもあの一筋縄じゃない男2人を惚れさせるくらい魅力のある女だってこと。お前自身は意識していなくてもあいつらはお前をどうしたって女としてみてしまっただ。それがあいつらには苦しくなってしまうこともあるんだ。俺はさ、お前は新撰組にとつてはかけがえのない仲間だと思ってる。お前がただの女だと思つてたらこんなことは言わない。今はそれでもいいかもしんねえ。ただこの先、お前らの危うい均衡が崩れたら新撰組の屋台骨も揺らぐんじゃないかと思う。俺が恐れているのはそこなんだ。

「あたし…ただの女です。自分の恋にこんなにも揺らいで…大事な人を傷つけるばかりで…なんであたしは人を傷つけないと生きていけないんだろう…」

「水瀬、おまえは傷つけてばかりじゃないぞ。それ以上に俺らを守つたり、支えたりしている。」

お前が居ることによって総司は守られたし、武士として成長している。斎藤もな。

だからお前は自分を自覚して、そのうえで堂々と胸張って自分を正しく見つめる。」

「…はい。」

そうだ。あたしは甘えていた。

総司や斎藤さんから想いを寄せてもらっていることは知っていた。でも二人が普通に接してくれるから、あたしはその想いに気付かないふりをしてずっと二人の優しさに甘えていたんだ。

卑怯だな…。

「それにしても…お前もつれえ片恋してんだな。叶わないのか？」  
永倉さんはおどけるように言った。

「叶わないですよ…。ていうかかなえちやいけない…かな。」

この恋は虹を追いかける恋。

届くはずはない、それでも求めずには居られない恋。

「なんでだよ？別にかなえようと努力をしてもいいんじゃないか？別にそれでもお前がいいならいいけど傷つくの怖がってたら後悔するぜ？俺らもお前も新撰組居る限りいつ死ぬかわからない。お前の片恋の相手もいつ死ぬのかわかんねんだぞ？」

あたしがこの時代の人間ならそれもできる。

でもあたしはここに居ない人間なんだ。

そんなあたしがどうして心を伝えられるだろうか？

「…」

何も言えないあたしをみて永倉さんが背中をポンとたたいた。

「まあ、お前が後悔しないようにしろよ。いろいろぐちぐち言ってるわりいな。じゃあ、明日も早いし早く寝ろよ。じゃな！」

「はい。おやすみなさい。」

月が優しい光を放っている。

いつかあたしはこの恋を叶えるための努力をするのだろうか？

叶わないとわかっていてもあたしはその恋に向き合って華香大夫みたいに凜とした強い生き方をすることができるだろうか？

あたしは華香大夫みたいに虹を追いかける恋をしていると思っただ。

でもあたしはこの恋に、この想いに向き合おうとしているわけじゃない。

ただ遠くで指をくわえて虹をうらやんでみているだけなんだと思う。

いつかその虹を追いかける日が来るだろうか？

すべてを受け止め、凜として自分の恋を誇りに思って、その虹に届くまで、走り続けることができるだろうか？

## 第八章 6・修羅の道：土方歳三

水瀬が俺に対して淡い恋心を抱いているのを気付いたのはあの五条大橋での吉田稔磨との対決の時だった。あいつは俺の腕を傷つけることで、自分が増水した川に捨て身で身を投じてでも俺を助けることを選んだ。川に水瀬が落ちる瞬間、あいつの目には確かに恋情があり、俺は全身総毛立つのを感じた。

あいつは女として、武士以上の選択をした。まったくなんて見事な女。

あいつが居なくなつて…俺は自分の中にある激情に気付いた。狂おしいまでにせつなくて、遙かなたの昔からこの女に逢うために生きていた…そんな狂気にも似た錯覚を起こしてしまいそうなほどの激しい想いだつた。

俺はかつてこんなにも心を揺さぶられるほど激しい恋情を女に抱いたことがあるだろうか？

恋情：

そう、俺は水瀬に惚れている。

どうしようもないほどに。

池田屋で血だらけになつて泣きながら総司を抱きしめる水瀬を見たとき、俺は胸にかつて感じたことのないほどの鈍痛を覚えた。

それは嫉妬。

だが同時にこのまま総司を好きになつて、総司の嫁になつてくれればとも思つた。

俺はそうすれば揺らぐずに鬼になれる。

だから総司をたきつけた。

俺が女としての水瀬を、居場所がここにしかない水瀬を、そして俺への淡い恋心をもつた水瀬を今まで、利用し続けたのは事実だ。

だから事実を言ったまでなのだが、きつと総司はあいつを守ろうとするだろう。

そして全部の危険から遠ざけてきつとあいつを幸せにできる。  
あいつはほかのことならどこまでも冷徹になれるくせして、恋愛にはどこまでも潔癖だ。

だからこそ、水瀬のような女がそばに居れば、どこまでも人間として大きな男になれるだろう。

そして水瀬自身も総司みたいなまっすぐな男が似合う。

鬼になるのは俺だけでいい。

そのために俺は芹沢を殺し、局中法度を作り、血を浴び、修羅の道を進んできた。

そしてこの先もそれは変わらねえ。

今更揺らぐなんて今まで俺に殺されたやつらの無念はどうするんだ？  
いったん鬼になったのなら、最期まで、戦場で力尽きるその最期の瞬間まで鬼であり続ける。

水瀬、総司にしる。

あいつならお前を幸せにできる。

俺はお前を守ることも、幸せにすることもできねえ。

お前よりも俺は迷わず志を選ぶ。

だから、総司と幸せになれ。

\*

池田屋事件のあと俺らの名は全国に響いた。

近藤勇の名が、新撰組の名がこうして歴史に刻まれたんだ。

だが倒幕派は焦っているだろうな。

倒幕派がこのままで終わるはずはねえ。

長州が軍勢を集結させている。

何かが起きる。

この先俺らはどこまで血を浴びるのだろうか？

その先には俺たちの志が達成される日が来るのだろうか？

「土方！」

近藤さんが会津肥後守様の御屋敷がある黒谷から戻ってきた。

にしても、何あんなに焦ってたんだ？

俺はふすまを思いきり開けた。

「どうした？あんたは大将だ。みつともなく騒ぐんじゃねえよ。」

「ああ、すまん。」

近藤さんは汗を拭きながら俺の前に腰を下ろした。

「土方、長州が動き出した。すでに、伏見、山崎、嵯峨野の三方に布陣している。京の九条河原に新撰組も出陣のお達しを受けた。われら新撰組も長州軍を迎え撃つ！」

「ついに来たか！」

ついに来た。

さあ、さらなる修羅の道へ行こうじゃねえか！

「近藤さん、至急幹部を副長室に集めるぜ！」

「おう！！！」

俺にはこんな生き方しかできねえ。

色恋なんざ、必要ねえのさ。

## 第八章 7・禁門の変：斎藤一

ついに長州が動き出した。

倒幕派の急先鋒が京の伏見、山崎、嵯峨野に布陣しているのだ。

新撰組もそれを向かい打つべく九条河原に布陣することになった。

体調を崩している山南さん、額のけがが治りきらない藤堂さんは屯所固めをすることになった。

最近山南さんの表情が浮かない。

何かを思いつめたようなそんな顔をする。

どこまで皆そのことに気づいているのだ？

明日は出陣、ささやかな宴がが屯所で行われている。

俺は厠へ行くためふと縁側に出ると水瀬が山南さんと並んで座っていた。

ここからでは話し声は聞こえぬが山南さんがいつになく穏やかな表情で笑っていて俺は少し安心した。

水瀬には人を元気づける力がある。

水瀬の笑顔は太陽に似ている。

燦爛と輝き、ふつふつと湧き立つ力を与えるのだ。

不意に胸が熱くなるのを感じた。

ああ、惚れている。

俺は池田屋事件のあの日がなぜか不意に思い出された。

水瀬はあの日、沖田さんを妙に気にかけていた。

まるで、沖田さんの身体に変調が起こるのを知っていたかのように。時折思う。水瀬はいつたい何者なのかと。

俺たちの予想もつかぬ次元に生きているのではないかと思ってしまう。

俺と副長が池田屋に応援に駆け付けたとき、水瀬は血だらけで意識のない沖田さんを抱きしめて泣いていた。その時、胸をかきむしられるような焦燥に駆られた。

それは強烈な嫉妬。

醜い。なんと未練たらしい。

想いは受け入れられぬと水瀬の口から聞いている。とうに片恋に終わることは承知済みではないのか？

時折思う。

この恋は底の見えぬ沼のようだ。いったん足を踏み入れればどこまでも際限のない激情に翻弄され、息もできぬほどその感情におぼれていく。

果てしなく終わりの見えぬ恋の道。

あきらめたいのにあきらめられない。

いつぞ憎むことさえできたなら楽なのに、水瀬の見せる笑顔はそんな苦しみを一瞬にして消し去り、喜びだけを残す。そしてまた苦しみの深みにはまっていくのだ。

明日、水瀬も戦場に行くのだという。

まったく危険のあるところにはかり行きたがる…

なんとという女だ。

決して男に守らせない。

女子なのに…いやそんなことは水瀬には全く関係ないことなのだろう。

俺たちの男としての、武士としての矜持すら揺るがされてしまうほどの凜とした強さとまばゆい輝きを放って水瀬はこの先も白刃の中を走り続けるのだろうか。

願わくば水瀬のそばでお前に恥じることなく、笑顔でお前を支えられる強さがほしい。

お前と想いを通わせることは望めまい。

ならば、お前と同じ時を生き、同じ方向を向いて走って行ける、こ

のことを至上の幸福に想い生きて往きたい。そのように潔くありたい。  
この気持ちは今はまだ虚勢でしかない。  
だが、きつと心の底からそう思えるような武士になって見せる。  
お前に恥じぬ武士になるのだ。

\*

元治元年七月十九日。

俺たちは京の九条河原で来るべき長州軍との対決に備え野営を張った。

幕府の総指揮は一橋慶喜公。

尊王攘夷に同情的な水戸の慶喜公がどこまで采配を振れるのか？

果たして肥後の守様はどうしていらっしやるか。

俺は案じていた。

京の夏は暑い。

昼ともなればまるで蒸し風呂のようだ。

九条河原に来てからもうすぐ十日立つが、長州の軍勢はすぐそばまできているというのに、幕府は長州の入洛を待っている。

それにしびれを切らした副長と局長は一橋公に詰め寄ろうと邸宅に押し掛けたのを肥後の守様にとりなしていただいたのだ。

まったく、熱血漢の局長はともかく、冷静沈着な副長までそんな暴挙に出ようとは思ひもなかった。

あの人は冷徹な鬼の仮面をかぶっているが本質は誰よりも熱い想いを持った不器用な男なのではないかと思う。

本人に言ったら「切腹させる！」とどやされるだろうか？

そんなことを考えていたら不意に笑いがこみあげてきた。

本格的に暑さで頭がいかれてきたのかもしれない。



夜明け。

「藤の森の大垣藩と長州軍が開戦した模様！」  
ついに来た。

「新撰組いざ出陣！！！」

「おお！！！」

隊士たちが鬨の声を上げる！

「ご武運を」

「武運を！」

俺たちは走り出した。

歴史の波がうねりをあげて俺たちを飲み込んで行くのを見た気がした。

## 第八章 8・禁門の変、怒号

血と汗と風に舞いあげられた砂埃で全身が埃だらけになる。ただ怒号だけがあたりを埋め尽くしていた。

これが…戦。

あたしは前線ではなく山崎さんと共に救護班という位置づけで前線の後ろで負傷した隊士の手当てにあたっていた。

お父さんが医者だから普通の人よりも少しだけけがや病気の知識がある。

それでも平成の時代に比べたら衛生も医療環境も全然整っていない。そんな中あたしにできることは本当に少なく、でもあたしには後ろを向いている暇なんてない！

1964年7月19日早朝に開戦したこの戦は午後になって長州軍が京都の御所に向かって砲撃を開始したことで幕府軍は驚愕した。この時代天皇は神様。

長州軍はその神様に弓を引いた逆賊になったのだ。

とその時、幕軍のどこかの藩の人が叫んだ。

「長州が屋敷に火を放って逃げたぞ！」

！

「あいつらとんでもねえ置き土産おいてきやがった。この風の中焼き討ちだなんてなにかんがえてやがる！京を火の海に沈める気か！」土方さんが苦々しい顔で言った。

そつえば高校の時歴史でやった。

江戸時代、何よりも恐ろしかったのは火事だったと。

木造の家屋は風向き次第でどこまでも燃え広がる。

いったん燃え始めてしまえば燃え尽きるのを待つよりほかにすべがないのだと。

「火を食い止める！」

近藤先生がお腹に響くような声で言った。

「止めるな！総督のご命令だ！！一刻も早く戦を止めよとな。そのために焼き討ちを行う。」

馬上からそれを制する声。

幕軍のお偉いさんだろうか？

馬鹿か、この男は！

「何故！この風の中、さらなる火を入れるなど短慮な！！」

近藤先生が食ってかかった。

「口を慎め！！一橋公の戦略になんと無礼な！？」

「民の生活はどうでもいいのか！」

「百姓上がりの東夷が！」

「！！」

近藤先生の歯ぎしりが聞こえるようだった。

「近藤先生！行きましよう。新撰組は新撰組としての仕事をするのです！」

あたしはその男を一瞥して近藤先生の袖を引き走り出した。

男はまだ後ろでごちゃごちゃ言ってる。

「うっさい！くそおやじ！あんたに近藤先生を笑うことなんてできないんだよ！てめえの血も流せねえ奴がごちゃごちゃ言ってるじゃねえ！」

あたしはこの逃げ惑う人々の喧騒に乗じて言った。

どうせ聞こえやしない。

こんな風でしか悪態をつけないのが悔しいけど。

「水瀬君……」

近藤先生は走りながらその敵つい顔を破顔させて吹き出した。

「まったくなんて女子だ。ありがとう。君の悪態で元気が出てきた。新撰組諸君！被害が最小限に収まるように手を尽くせ！市民の避難誘導に手を貸すのだ！」

「「おう……」」

敗走する長州勢が市民に手を出さないように食い止めながらの避難誘導！

走り出したあたしの目には新撰組の隊士の姿が目に入った。

あれは…新之助君？

まずい押されてる！！

あたしはそこへ向かって身体を滑り込ませる。

「うわぁ！」

「新之助君！」

清水新之助君は19歳で隊の中でも最も若い。

今回が初陣なのだ。

涼やかな美形でいつも佐之さんや永倉さんに歌舞伎役者とからかわれているおとなしい男の子だ。

「死ぬ！幕府の犬が！！」

ガキン！

あたしは敵の剣を受け流し、新之助君を背に庇う。

刀の返しで相手の鎧の隙間を狙って突きを入れる。

噴き出す鮮血。

この血の生温かさに、臭いに慣れていく自分がたまらなく恐ろしい。でもそれでもあたしは闘うことを選ぶ。

怖くても苦しくても、仲間を守りたいから！

「新之助君立つて！あたしの背中は新之助君に預けたから！早くここを抜けるよ！！火が回る！！」

「はい！」

悲鳴。怒号。

きな臭い煙の匂い。噎せ反るような血の臭い。

そして血の赤、赤、赤。

どこまでこの朱の大地は続くのか？

人が往来にあふれ皆逃げ出している。

その時子供が一人泣いているのが見えた。

あたしはその子に駆け寄ってご両親がどこに居るのかを聞いたその時、

「水瀬さん！」

「死ね、壬生狼！！！」

一瞬意識を奪われたその瞬間、潜んでいた敵の刀が防具の間からあたしの左の肩口に入った。

ズン

骨にまで響く衝撃。

！

しまった！

強烈な痛みと血がだらだら伝っていく。

ダメだ。こんなところで…。

「水瀬さん！」

新之助君の必死な声が聞こえる。

まだ倒れる訳には行かない！

「あたしは大丈夫！！それよりその子をお願い！急ごう！」

あたしと新之助君は必死で白刃を掻い潜り、迷子を避難小屋まで届けると、新撰組の陣営までたどり着いた。

その頃にはもう自力で立つていられなくて新之助君に支えられながらの帰還だった。

「水瀬！」

「まこと！」

総司と佐之さんがあたしを血相変えて迎えた。

ドクン、ドクン…

心臓の鼓動に合わせて傷口から血が滴る。

浅い呼吸をする度に傷口が疼く。

血が止まらない。

もう感覚すらなくなっている。

「水瀬さん！しっかりしてください！！山崎さん！！早く手当てを！！お願いします！！」

新之助君があたしの腕を必死で押さえてくれている。

紺色の着物が血でさらに濃くなっていて肌に張り付いている。

「水瀬！！しっかりせえ！！」

救護班である山崎さんの顔を見た瞬間

あたしの意識は闇へ落ちた。

## 第八章 9・真実、タイムトリップの理由

コエガキコエル。

「患者の容態急変しました！バイタル下がっています！！」

「除細動の準備！！」

「まこ！」

「まこと！」

「ご家族の方。大変危険な状態です。覚悟してください。」

「そんな…まこ、戻ってこい！」

ドコニ？

アタシハイマドコニイルノ？

シヌノ？

いいえ、まだ貴女は死んではない。

生きるのです。

コレハユメ？

いいえ。

夢ではありません。

アナタハダレ？

私は時を司る者。

カミサマナノ？

いいえ、時空の番人です。

神は貴女に辛い運命を赦しました。

貴女は平成の世に生を受けながらも魂は幕末に生きるよう定められているのです。

それは貴女自身がそれを望み、ある人物もまた強く貴女を望んだからです。

ダレガ、アタシヲヨンダノ？

貴女の魂の半分を持つ者。

それは貴女自身の魂が知っています。

貴女の想いが、その人物の想いが時空の理を歪めてしまった。

あの落雷でできた時空の歪みに貴女の魂は飛ばされたのです。

身体は平成の世に残っているのに魂だけが離れて実体化したのです。

貴女は現代と幕末両方に生きている。

幕末でいきる貴女も、現代で眠る貴女もどちらもあなた自身。表裏

一体の存在です。

ただ幕末での貴女は言わば魂だけが離れたもの。現代の身体が死ねば幕末での貴女も、逆に幕末での貴女が死ねば現代の貴女も死にます。

貴女の命が尽きるとき再び身体と心は一つに戻る。

アタシハナニヲスレバイイノ？

命尽きるまで、この世界を、仲間たちの最期を見届けること。

それが貴女の使命。

そして時空の理を歪めてしまった罰として、

貴女を望んだ、あなたの魂の半分をもつ人物とは

この世では決して結ばれぬ運命を背負い、生きてゆくのです。



イツマデアタシハイキレルノ？

身体と心が離れていられるのは貴女の生きる幕末の時間で5年くらい。

でも未来は常に変容するもの。

無理をして魂をすり減らせれば死期は早まる、その逆もあるのです。

選択の可能性は無限にあるのですから。

さあもう時間です。

生きなさい。

貴女の魂の赴くままに。

その命続く限り魂を燃やして走り続けるのが貴女の使命です。

…

…

…。

…って…！

…戻ってこい、水瀬…！

お父さん…？

あたしはうつすらと目を開けた。

誰？

あたしを呼ぶのは？

「水瀬…！気がついたか！」

土方さん？

そこには額から汗を滴らせて血走った目であたしを除き込んで睨む土方さんがいた。

「まったく心配させんな、馬鹿野郎…！」  
怖い顔。

そんなに睨まないで。

大丈夫ですから。

「ひじかたさん…つつう！！」

あたしは起き上がるうとして全身に激痛が走った。

「馬鹿！あと一寸ずれてたら死んでたんだぞ！今は血が足りねえからもういっぺん寝ろ！」

「…はい。」

あたしの額に水で濡らした手拭いを山崎さんが置いてくれた。

ひんやりとした手拭いが心地よい。

「まあ、目が覚めたなら大丈夫や。暫くは熱が出るかもしれへんけど飯持ってくるさかいそれまでゆっくり休み。」

いつになく優しい山崎さんの声。

ああ、あたしここに帰ってきたんだ。

あたしは貧血も手伝ってすぐに意識を手放した。

第八章 10・水瀬の謎：土方歳三

なんだったんだ？  
一体？

瀕死の重傷を負って帰ってきた水瀬を手当し、目覚めるのを待っていたとき、俺たちは目に映るものが信じられなかった。

目の前で眠っている水瀬の身体が内側から蛍のような光を放って輝きだしたのだ。

そして身体が透けて向こう側にある障子が透けて見える。

人間が光る？

どういうことだ？

一体水瀬は何者なんだ？

この世の人間なのか？

これを見たのはちょうどその場に居た俺と山崎、斎藤、総司の4人だけだった。

ただ何か人智を超えた世界に水瀬が行ってしまふ。

あの水瀬が川にのまれたあとの暗黒の地獄みたいな日々が繰り返される、そう思った時には啞然とする山崎達を脇に水瀬の手を握って叫んでいた。「戻ってこい！」と。

俺は水瀬がこの世から消えることを何よりも恐れている。  
生きていてほしい。

ただ笑って居てくれればそれでいい。

自分が幸せにすることができないのに全く俺はなんて勝手な野郎なんだ。

でも、俺以外の誰でもいい。

ただあいつを幸せに、守って、あいつがこの空の下どこかで笑っていてくれたらそれが一番いい。

そんな風にさえ思うのだ。

水瀬はどうか意識を取り戻し、再び眠りに落ちた。

そんな水瀬はいつも何も変わることはなくて、俺は、自分がみたものが夢だったのではないかとさえ思った。

「これは…一体…。土方さん、まことは何者なんですか？」

総司が呆然とした様子で口火を切った。

何者…。果たしてそれにはどう応えていいのかわからない。

「山崎、水瀬は江戸で確かに身元が明らかになったんだよね？」

「…それは…」

山崎が言い淀んだのを見て俺は詰め寄った。

「山崎！！答える！！」

「副長、私は嘘の報告をしました。それは全て私の一存です。私は始めは水瀬を問者だと疑つとりました。出自を調べても水瀬が生きて存在した痕跡が全くない。それは江戸も、長州も京も同じでした。人間は生きていればどこかでその痕跡が残るもんです。それを全く残さないなんて忍びでもなかなか出来ない。何者かと詰め寄れば話さない。だから俺はこのことを副長に報告して処断してもらつつもりでした。だか島原で密偵をしている水瀬をみるうちにこいつの出自がなんであろうと新撰組にとってこいつを残すべきだと判断しました。だから俺は問題なしと報告しました。」

生きていた痕跡がない…。

俺は山崎の胸ぐらを掴み一発殴った。

鈍い音が響き、拳にもびりびりとした痺れが伝わる。

こいつが嘘をつくなんて水瀬も随分見込まれたもんだ。

山崎は任務に妙な仏心を出すやつじゃねえ。よほど水瀬を信頼し、守りたいと思つた結果なのだろう。

「二度とこんな真似済んじゃねえ。馬鹿野郎。」

「…申し訳ありませんでした。」

「では…水瀬が本当は何者なのかは誰にもわからない、ということなんですな。」

斎藤が珍しく狼狽して言った。

そうだ。

水瀬が何者なのか誰にもわからないのだ。

…この世に生きる者ではない…？

そんな可能性が一瞬頭をよぎるがすぐにその可能性を打ち消した。

まさかな…。

そんなことがあるはずがない。

「でも…まことが新撰組の為に必死に、並みの男以上の働きをしているのは確かでしょう？ だったら何も問題ないでしょう！？」

総司が必死になって声を上げた。

ただ誰も何も言うことができない。

「…直接聞くしかねえだろ。本人に。」

「土方さん！？」

「仕方ねえだろ…あんなもん見せられたらそのままにしとくわけにはいかねえし。とにかくこの事は俺らだけの胸のうちに留めろ、いいな…！」

3人は小さく頷いた。

\*

七月二十日。

昨日長州の連中が放った火は燃え広がり、結局今日の正午まで火は燃え続けた。

京の街のほとんどが焼け野原になり、火が消えた今も焦げ臭いにおいが町中に立ち込めている。

水瀬が再び目を覚ましたのはその日の夕刻あたりになってからだ。た。

「副長、水瀬さんが目を覚ましました。」

水瀬の看病をしていた清水新之助という隊士が俺を呼びに来た。水瀬が目を覚ましたら呼ぶように言いつけてあったのだ。

新撰組陣営の組合所にけが人と数名の看病人が残っていた。

俺は人払いをして水瀬のが寝ている部屋に声をかけてはいる。

俺が来たことには気づかなかつたらしい。

水瀬は髪を横に流し、白い浴衣に着替えて布団の上に座って団扇で風を送っていた。

夏の夕方は物悲しい。

水瀬の白い浴衣と、首筋が迫りくる夕闇に浮かび上がり、それは夏の宵を彩る夕顔のように可憐で、同時にどこまでも儂げだった。

物思いに沈むその姿は普段の輝く笑顔からは想像もつかぬほど切なげで、このまま消えてしまうのではないかとすら俺は思った。

「調子はどうだ？寝ててもいいんだぞ。」

俺は努めて平静を装いながら言うと、驚いたように俺に向き直り、その動きに傷が疼いたのか顔をしかめた様子に俺は安堵した。

ああ、いつもの水瀬だと。

ここにいと。

「土方さん、ご迷惑おかけしました。この傷は私の不覚です。」

水瀬は凜とした調子で背筋を伸ばし、俺に頭を下げた。

水瀬はきつぱり「仕事の」顔で言った。

こいつは俺に対して「私」という。

総司や佐之達には「あたし」と、打ち解けたように言うが、これはこいつの線の引き方なのだろう。

だから見事だと思う。

どんな時もこいつは揺らぐが、凜として向き合い続ける。

「いや、ガキかばつてのことだと清水が言っていたし、そいつは清水が捕縛したから問題はねえ。」

おまえは早く良くなって隊務に戻れ。」

「はい。」

明らかにホツとした様子で水瀬は顔をほころばせた。

「なんだ？」

「切腹させられるかと思っただんです。戦場で気を抜くなんて土道不覚悟って言うて。」

「馬鹿だな。」

俺はふつと笑った。

水瀬を切腹させるなんて考えは俺には一切なかったな。

こいつが俺たちのもとに来て一年以上が過ぎた。

そういえば俺はこいつを男だと思いついてたんだよな。

恰好も袴だったし、剣術も総司に引けを取らないくらい強くて、全然色気がなくて…。

でも一年たった今では男になんてどうやったって見えねえ。

太陽みたいに輝く笑顔。

遊女になった時のどきりとするような艶やかさ、

夕闇の物思いに沈む儚さ。

何物も侵すことのできない凜とした静謐。

こいつはいろいろな表情を俺たちに見せてきたがそのどれもに俺は感情を揺さぶられている。

まったく…大した女だぜ。

水瀬、おまえはこの先どんな表情を俺たちに見せるんだ？

「…水瀬、お前本当は何者なんだ？」

俺はついに口火を切った。

もう戻れないかもしれない。

何も知らない頃には。

知らないふりをすればきつと楽に生きられるかもしれない。でも、それでも、俺達は知らなければいけない気がした。

こいつの秘密を。

## 第八章 11 潮時、嘘と真実

再び目が覚めたとき、部屋の中は薄暗くて夕闇が迫っているのが感じられた。

「水瀬さん、大丈夫ですか？無茶しないでくださいよ！」

新之助君があたしを看っていてくれたんだ。

「…うん、ごめん。」

新之助君が部屋から出て行った。

夢の中であの人が言っていたことは紛れもない事実なんだろう。

あたしは魂と身体が時を超えて別の時空にある。

こんな突拍子もないことを聞いても驚かない自分が不思議だった。

ああ、やっぱり。

あたしは心のどこかで気付いていた。

そんな風にさえ納得できた。

あたしは…本当に…

魂だけがここに居るんだ。

身体は目覚めることなく生きる屍として平成の世で眠り続け、魂が燃え尽きるとき、一緒にその生を止める。あまり長くは生きられないとあの人は言った。

あたしの身体が先に朽ちればあたしは幕末の今から消える。

逆にここで死ねば平成の世で眠るあたしの身体はその機能を止めるんだ。

そしてそれはあたし自身が望んだことなのだという。

そのために時空の理を歪めた罰として魂の半分を持つ人とは決して結ばれないという運命を背負って。

あたしの魂の半分…

誰？

あたしは一瞬土方さんの顔が思い浮かんだけれど…



すぐに打ち消した。

土方さんがあたしを望むはずがない。

彼の心を占めるのは今もお琴さんのだから。

でもそんなことはどうでもいいのだ。

だって結ばれないのだから。

あたしは矛盾してる。

自分の心の片割れが土方さんならいいと思う一方でそうじゃないことを望んでいる。

土方さんと両想いになりたいから。

そんなことは望めない。

…

なんで？

あたしはそんなこと望んだ覚えはないのに。

そんなの辛いだけじゃん。

身体は傷はこんなにじくじく痛むのに、

なのにこの身体は本物じゃない。

なんで、神様？

あたしはここに生きてここに死ぬ。

自分が死ぬまで大切な人たちの死を見届けること、それがあたしの役割なのだという。

ただ、わかること、それは家族には二度と会えないということ。

平成の現代にいる家族には生きてはもう会えないんだ。

せめてもう一人のあたしがこの幕末に生きていることを伝えたい。

どうしよう…

痛すぎて…涙さえ出ない…

「調子はどうだ？つれえなら寝てもいいんだぞ？」

ハツとして振り向くとそこには土方さんが居た。

全然気がつかなかった。

土方さんはいつになく優しい調子で言った。

ああ、あたしやっぱりこの人が好きだ。  
無愛想なのに、照れ屋で…不器用。  
なのに誰よりも熱い魂を持っている。  
広い背中も、時折見えるえくぼも  
剣ダコだらけの節くれだった手も…  
びっくりするくらい長いまつげも…  
全部全部大好き…。  
利用されてても、例え結ばなくても…それでもあたしはこの人が  
全身で大好き。

土方さんはさつきからずっと黙っている。  
あたしも目を伏せてじっとしていた。  
この時間が苦しいようでうれしい。  
今同じ空間に居られることがこんなにもうれしい。

「…水瀬、お前本当は何者なんだ？」  
「！」

あたしは息をのんで突然の質問に驚いた。  
なんで…？今…？  
身体が固まってしまふのを感じた。

「…」  
あたしは言葉を発することができなかった。

「昨日…」  
不意に静かな調子で話し出し、あたしはびくんと身体が震えた。  
「お前が怪我で倒れた時にさ、お前の身体が蛍みたいに光って身体  
が透けていったんだ。」

このまま消えて無くなるかと思うくらいに。なあ、教えてくれ。水  
瀬…お前は…何者なんだ？」

潮時だ…

隠しきれない。

何より蟠りをもったままではここには居させてもらえないだろう。

…みんなに話そう。

「…話します…。みんなに。真相を。」

「じゃあ明日屯所に戻ったら話せ。」

「…はい」

「…あの時…」

「え？」

「お前がまた消えるかと思っただらいてもたってもいらなかった。

人間が光るなんて気味悪いと思っただが、だかそれ以上にお前が居なくなるのが怖かった。」

「土方さん…あたし…！」「水瀬」「

「また明日。」

土方さんはあたしの言葉を遮って静かに立ち上がると部屋を出ていった。

あたし何を言おうとしたんだろう？

土方さんが遮ってくれてよかった。

土方さんがあたしがここに居ることを望んでくれたからと言ってこんな動揺してる中でおかしなことを言うべきじゃないもの。

でもずるいなあ、そんな風に言われたらますます好きになっちゃっ  
じゃん。

明日、全てを話した時、みんなはどんな風にあたしを見るだろう。

嫌われたくない。

ここにいたい。

でもそんなのは都合のいい願望でしかない。

もし追放されても、斬られても覚悟を決めて凜と笑って受け入れる  
のだ。

だってこの1年はすごく幸せだったもの。

辛いことも苦しいこともあったけど、みんなに逢えて本当に良かったと思える。

だから明日話そう。

ありのままを。

今度こそ嘘をつかなくてもいいように。

## 第八章 12・真実の告白、家族

翌日、あたしは屯所に戻り、幹部以上がいる副長室に入った。総司や斎藤さんは緊張した面持ちであたしを見て、そして目をそらした。

珍しく山崎さんもいる。

そういえば山崎さんにはあたし本当のことを話しかけたんだっただ。

あの頃は自分でも真実がつかめないままだったけど。

でも全然信じてもらえなかったっけ。

そのままはぐらかしたけど、今日はどんな反応をされてもあたしのありのままを話そう。

あたしは一番ふすまに近い下座に左肩をかばって座ると一度頭を下げる。

「今日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。」

今日こうして集まっていたいたのは私の本当の出自について皆さんに話さなければならなくなったからです。」

「…続けなさい。」

近藤先生がいつになく厳しい顔であたしを促す。

「今からお話することは信じてはもらえないかもしれませんが真実です。」

あたしはそこまで言うのと一区切りして深呼吸をし、そして口を開いた。

「…あたしは…この時代の人間じゃないんです。」

今から150年先の日本からここに来ました。」

「…！」「…」

誰もが目を見開き息をのむ音が聞こえた。

「あたしはもともとは東京…今の江戸のことなんです、東京の生まれです。母はあたしが小さい頃に亡くなったので、医者のお父さん

人の兄と一緒に暮らしていました。一番上の兄が結婚することになったのでその報告のために京都の祖父の家に行くことにしたのです。祖父は剣道道場を開いていて、その影響であたしたち兄弟は小さいころから剣道や柔道を習っていて、よく手合わせしてもらってたんです。あの日も祖父と立ち合いをしていました。外は季節外れの大雨で、雷が鳴っていました。道場の外に出たときあたしは落雷が直撃したんです。目が覚めたとき、あたしは壬生寺の境内に倒れていました。そのあとは…総司に助けてもらってここにきました。未来から来たのを隠したのは自分の身を守るためでした。新撰組にとって都合が悪かったら殺されるかもしれない、と思ったからです。」

「…まさか…そんなことが…」

「うそだろ…」

「時渡り…ってことか？」

みんな当たり前だよな。

「…それから…本当のあたしの身体はまだ150年後で眠ったままなんです。」

「な…！」

「つまり…魂と身体が離れた状態で今ここにいるあたしは仮の身体を持った心だけの存在なんです。」

「…戻れないの？」

総司が沈黙を破る。

「…！」

みんな一斉にあたしに目を向ける。

「たぶん、戻れない…。死ぬまで。」

あたしは小さく笑って首を横に振った。

「そんな…！」

「魂が身体を離れるっていうのは、命をすり減らすんじゃないのかい？」

死ぬまでってそんなに長く居られるのですか？」

山南さんが言った。

鋭い人。さすが博学な山南さんだと思う。

「…死がいつ訪れるかなんて誰にもわからないでしょう？明日かもしれない、10年後かもしれない、それはみんな同じだから。でも身体が先か、魂が先か、どちらかが力尽きたとき、もう一人の自分も死ぬことだけははつきりしてます。」

あたしは具体的な時間を口にするのが怖くて笑ってごまかした。  
5年…

それが長いのか、短いかわからない…。

でもそれをここで話す必要はない気がした。

だってみんなだっていつ死ぬのかわからないから。

自分の死よりも仲間の死のほづがずっと堪える。

遺された人のほづが辛いんだから。

「なんと…!!」

近藤先生などはうつむいて表情が見えない。

これは現何だろうか？

「みんなを偽ってきたこと本当にごめんなさい。

でもあたしは…ここが好きなんです。だからここに居させてください。」

あたしは頭を深く下げた。

畳の目が近くなつてかすかに草の香りがする。

「水瀬君…」

ふと呼ばれて顔を上げると、近藤先生が近くまで来ていた。

まっすぐにあたしの目を見つめてその瞳にはあたしが映りこんでいた。

そしておもむろに口を開いた。

「俺はかなり怒っている。」

「！」

仕方がない。

ずっと黙っていたのだから。

「なぜ、こんな大事なこと、話さなかつたんだ!？」

「!？」

「初めに自分の身を守るためと言うのはわかった。しかしそのあといくらでも話す機会はあるだろうか？俺たちは君を仲間として、家族のようにも思っている。そんなに俺たちは信用ならなかつたのか？」

「!違います!!ただ…怖かつたんです。自分の存在もあいまいで、生きているのか死んでいるのかも…今ここにいる自分は何なのか…なにが真実なのかそれすらわからなくて…ただ…ただあたしは…新撰組が、みんなが大好きで、そのことだけは自信を持って真実だと言える。これだけは信じてください!」

あたしは自由の利く右手で近藤先生の着物をつかんだ。

「約束しなさい。」

近藤先生はあたしの背中に手をやり優しい声色で言った。

「もう二度と一人で抱え込むんじゃない。君は無茶をしすぎる。もう二度と…ご家族には会えぬのだろうか？ならば、私たちを家族として思い、甘えてはもらえぬか？」

近藤先生の言葉は乾いた大地に降る恵の雨のようにあたしの心に優しく沁みいる。

ぱた、ぱた…

畳に涙が音を立てて落ちる。

ああ、あたし、本当に幸せ者だ。

あたしのもう一つの家族がここに居る。

「…はい…。」

あたしは喉から声を絞り出すと深く頷いた。

その拍子に両目から涙のしずくがまた一つ畳に音を立てて落ちた。

「よし、皆見ての通りだ。水瀬真実は改めて新撰組の仲間だ。君が死するその時まで、ここを家と思い、家族と思いなさい。」

「はい!」

「おう!」



みんなありがとう。

こんなあたしを受け入れてくれて…。

あたしここにきてよかった。

きつとあたしは自らここに来ることを望んだのだろう。

だからあたしは命尽きるその瞬間まで、みんなと共に有ることを誓う。

きつとみんなの志を何があっても見届ける。

ねえ、みんな聞こえてる？

あたし、幕末で家族が出来たよ。

みんな優しく不器用で、でもあったかい。

だからさみしくないよ。

お父さんみたいな近藤先生、

つー兄みたいな永倉さん、

あき兄みたいな総司

すー兄みたいな斎藤さん

ほかにも家族がいっぱいいる。

親不孝者でごめんなさい。

あたしは幸せです。

だから心配しないでください。

遙か彼方の幕末から真実より

## 第八章 13・凜として…土方歳三

水瀬の衝撃の告白から数週間、傷もだいぶ良くなり、水瀬は台所にも立てるまでに回復していた。

久しぶりに剣の稽古に参加してその感触を確かめ、総司や平助と子供のようにしゃいでいた。

水瀬は未来から来た人間だった。

それはあまりにもぶつ飛び過ぎていて、水瀬が消えかけたあの姿を見なければ到底信じられるものではなかっただろう。

未来、水瀬は”平成”と言っていたが、その時代では女までも剣をとる時代なのだろうか？

だとしたらとても殺伐とした世になっているのか？  
俺は水瀬の居たという平成という時代に想いを馳せていた。

稽古を終え、水瀬は井戸で顔を洗っていた。

爽やかな風に長くなった髪をなびかせて気持よさげに目を細めた。

こいつは確かにここに居るのに…でも本当はここには居ない存在なのだ。

見えるのに手を伸ばしても届かない。

届いたと思ったら指の間からすり抜けていく。

こいつはいつかなくなる。

そしてそれは水瀬自身の死を意味するのだ。

この前山南さんが言っていたこと

…身体と心が離れれば命が削られる…

それは本当だろうか？

あのと水瀬はつきりとは答えなかった。

それが何よりの答えだろう。

”水瀬は長くは生きられない”

それを目の当たりにしたとき、俺は内臓を引きちぎられるような激しい衝撃に襲われた。

水瀬が何者でもいい。

未来でも、過去でも、幽霊でも、妖怪でも…

ただここに生きていてさえいてくれたら。

ただ、あいつが笑っていてくれたら、それだけでいい。

おれはそんな風にさえ思っている自分に驚き、そしてあきれた。

俺はこんな風に弱くなりたくなかった。

だから女なんて、恋なんて不確かで人を冷静で居られなくする厄介なものにとらわれるつもりはなかった。

なのに、この様は何だ？

水瀬はこんなにも俺の中に入り込み、俺の心は揺さぶられる。

畜生、情けねえ。

こんなに一人の人間にとらわれ揺らぐなんて。

「土方さん？どうしたんですか??」

水瀬がいつの間にか近くに来て縁側で胡坐をかいていた俺を覗き込んだ。

稽古の後で顔は上気していて、額に汗で髪が数本張り付いていた。

その姿に俺は以前島原の茶屋で遊女になったこいつを図らずも押し倒したことが急に思いだされ顔が熱くなるのを感じた。

ああ、畜生。

まるでガキみてえに。

馬鹿らしい。

「なんでもねえよ。」

「土方さんそんなに眉間にしわ寄せてるととれなくなりますよ?」

水瀬は額を指でたたきながら言った。

「うるせえよ。」

俺は水瀬を睨むと、水瀬は意に介した様子もなくくすくす笑っていた。

「なあ、水瀬、お前、新撰組がこの先どんな風に進むのかしってるのか？」

俺は水瀬の後ろ姿に声をかけた。  
ずっと気にかけていたことだ。

「おおまかにはですけど…。あたし歴史は苦手だったんです。だから大きな事件しか覚えていないし、それもどんな経緯で起きたのかわからないんです。知りたいですか？」

水瀬は少し首をかしげて言った。

「いや知ったところでぐちゃぐちゃ悩んじゃまうのは目に見えてる。

だから知らなくていい。だが歴史が苦手だっていうお前まで新撰組のことはしってるのか…。」

未来がどうなるかと俺らはただ俺らの信じる道を進むだけだ。

ただ水瀬は新撰組の存在を知っていたのか？

「有名です。それにファン…と、憧れる人がすごく多いんです。この激動の時代を志の為に駆け抜けた誠の武士の集団だって。あたしの兄もすごく尊敬してます。」

「そうか…。お前のいた時代は平和だったか？」

「そうですね、簡単に病気なんかでは死なないし、刀を持たなくても、安全に安心に暮らせます。物も豊富になったし、技術も進歩しました。平和だと思えます。でも日本以外の国ではまだまだ戦争も貧困も飢餓もたくさんあります。」

「日本が豊かになつて平和になるなら俺らが今こうして血を流す意味もあるんだろつな。」

「！」

日本は平和になる。

豊かな時代が来る。

そして刀は必要なくなる…。

俺がふと日の傾きかけた空を見上げて言うと水瀬は泣き笑いみたいな顔をした。

「どうした？」

「芹沢先生と同じことを言うんですね。」

「あ？」

なんでここに芹沢さんが出てくんのだ？

「日本の明るい未来の為なら喜んで死んでいけるって。」

あのおっさんそんなこと言い遣したのか。

まったく、嫌なひとだぜ。

でもどこまでもあの人らしいぜ。

「ああ、あの人らしいな。だがここにいる連中も誰もがそんな風に思ってるだろうよ。日本国の未来の礎になる為に死んでいくなら本望なんだよ。」

水瀬は何も言わずに小さく笑ってうなずいた。

「それよりも水瀬、お前なんでそんなに冷静なんだ？」

いきなり違う世界に放り込まれて普通ならもつと取り乱すんじゃないかねのか？

それになんだってここまで新撰組にこだわるんだ？」

俺はこの世界に必死に溶け込もうとしていた水瀬の姿を思いだし、何気なしに聞いた。

どうしてここまで新撰組に居ようとしたのか？

「取り乱しましたよ。刀とかなんて未来では持たないし、人を斬るなんて考えられないから……。」

ふふふ、土方さんはめっちゃくちゃ怖いし。

…初めから新撰組にこだわってたわけじゃないんです。でも、あたしがここにタイムスリップ…その時渡りしたのは新撰組が力ギだつて確信したんです。直感ですけど……。」

だから未来に還るために、新撰組に居るべきだつて思ってたんです。

まあ、そのあとで還れないって分かったんですけど……。」

水瀬はふと口元を緩め、儂げに言った。

「だったらなんで…なおさらけがまでしてつれえ思いしてここにい

るんだ？」

「好きだから…。」

水瀬は目を伏せて静かに言った。

…好き…

こいつの口から発せられるその響きに俺の心臓が音をたてた。

「！」

水瀬はそんな俺の動揺に少しも気付くことなく言葉をつづけた。

「新撰組の人達が好きなんです。とても。

だからあたしはみんなと共に走って志を見守るんです。自分の命のあるかぎり。

それがあたしがここにいる理由なんです。」

水瀬は…こちらが直視できないくらいまっすぐで凜とした顔で前を向いていた。

水瀬、お前それでいいのか？

危険すぎるんじゃないか？

女として幸せを見出す生き方がここでもできるんじゃないのか？

俺の中にいるんな言葉が浮かんで口の上る前に消えた。

俺が今言おうとしたようなことは水瀬は数え切れぬほど思い、悩み抜いたに違いないのだ。

どれほどの恐怖が、艱難辛苦が、孤独があっただろう？

そのひとつひとつにこいつは悩み、悩み抜き、向き合い、そしてその答えにたどり着いたのだろうか。

だからこいつはこんなにも凜として美しく笑い、まっすぐに己の運命と向き合い、前に進んでいる。

こいつは誰も追いつくことすら叶わない高みに居るような気がする。それは未来から来たというその数奇な境遇のことではなく、それ以上その強さなのだと思う。

こんなにも凜と美しく自分の運命と向き合い、なおも走り続けるその強さと、大きさは、男として嫉妬しそうなほどだ。

だから自分の揺れる心など、殺して見せる。

水瀬は俺たちの行く末を知りながらもここに残り、俺らの志を見守るといふ。

ならば俺たちはこの志に命を賭して最期の時まで走りきってやろうじゃねえか。

そして水瀬が笑ってすこしでも長く生きられるように支えるのだ。

「…水瀬、ありがとよ。」

ふいにこぼれた言葉に自分自身が驚く。

何を言っているのかわからなかったが、ただそう思った。

「何がですか？」

水瀬は目を丸くして俺に問う。

「さあな、自分で考える。じゃ、そろそろ俺は戻る。」

俺は照れくさくなってキョトンとしている水瀬を残しその場を離れた。

女に負けてたまるかよ。

あいつに負けねえくらいの武士になって見せるぜ。

蚊に食われた腕を掻きながら、熱い決意を秘めて俺は自室に戻った。

## 第九章 1・山南先生

夜ともなると風が冷たくなってきて秋の気配がすぐそこまで迫っていた。

縁側では山南先生がぼんやりと虚空を見つめ一人頬杖をついていた。最近、山南先生の様子がおかしい。

ぼんやりと独り物思いに沈んで、食事も残しがちになっている。

どうしたのですか？と問えばなんでもないですよといつももの穏やかな笑みをたたえて返すので、こちらは何も言えなくなってしまっただけれど。

「山南先生？もう夜は冷えます。お風邪を召されますよ。」  
あたしは山南先生に声をかける。

山南先生はハツとしたようにあたしに向き直る。

「…水瀬君か。すまないね。ぼんやりしてしまった。」

「まったく元気で居てくださいよ。山南先生。」

「水瀬君は…強いね。」

「なんですか、いきなり。」

「辛いことが多かったらどう？誰にも言えずに悩んでいたんだろう？そんなそぶりは少しも見せずに。」

君は強いなと考えて居たんだ。」

「…みんながいたからですよ。山南先生がおっしゃってたから。新撰組が好き、ただそれだけでここに居る理由になるんだって。山南先生の言葉、すごくうれしかったんです。」

「いや、あの頃は思いあがっていたな。私は何もできぬのだよ。新撰組のために。池田屋の時も、禁門の変のおりもずっと身体を崩してここに居ることしかできなかつた。なんて役立たずなんだと思つたよ。」

「あたし、今山南先生の言葉返したいです。  
それに本当に役立たずならこんなみんなに慕われるはずがない。」



平助君なんて二言目には「山南さんの言うことなら間違いない」って。

土方さんだつて近藤先生だつて絶対の信頼を置いてるんですよ？そうでなかったら二人ともあんなふうに甘えないです。」

「…ありがとう。水瀬君。そうだな。道は自分で見つけなくてはね君のように。」

山南先生の笑顔はどこまでも優しくて儂げだつた。

どうして何もできないなんて考えるの？

みんな大好きなのに。

「…ところで、水瀬君。明日、買い物に付き合ってくれないか？女子の目で選んでほしいんだ。」

山南先生が不自然なくらい明るい声で言った。

山南先生は乗り越えようとしている。

だからあたしは少しでも明るい気分で見られるように笑って居よう。

「はい！」

\*

翌日は爽やかな風が初秋を感じさせる日だつた。

街には秋を感じさせる紅葉柄の着物やはぎ模様の着物を着た綺麗な女の子たちがいる。

あたしは山南さんと連れだつて京の町を歩いていた。

「水瀬君が着たらさぞ似合うだろうね。」

「え？」

「ああいう艶やかな着物を着て女髪を結った水瀬君を想像したんだよ。先だつての密偵の時は島原で遊女見習いをしていたんだろう？」

山崎君が見事な女子ぶりだと言っていた。私も見てみたかったよ。」

「やめて下さいよ。あたしはもともと顔が男顔なんで、こつこつさっぱりした着物のほうが合うんです。」

今日のあたしはやっぱりポニーテールに矢車模様の浅黄のひとえに

紺の袴で、いつものように男装している。実際あたしはよく街の女の子に恋文なんかをもらったりしていたから本当に少年に自然に見えるのだろう。

「未来ではどんな格好をしているんだい？」

「みんないろいろですね。もちろんこういう着物も着ますけど、それはもう結婚式とかお正月とかとk別な日だけであとは洋服ですね。女の子も髪を短く切ったりしますし。」

「へえ、なんだか想像できないなあ。だから水瀬君は島原で髪を切り落とした時もけりりとしていたのんだね。」

「そうですね。ああ、髪洗うのが楽になつたなあくらいです。」

「あはは、まったく君は本当に不思議な子だねえ。」

「うーんこれが普通だったんであんまり笑われると辛いです。あたしは冗談めかして言った。」

山南さんが明るく笑って居てくれてうれしい。

あたしたちは屯所からほど近い前田屋というかんざしやら櫛ややらと売っているお店に入った。

色とりどりの小物が売っていて自然に顔がほころぶ。

ずっと前に、斎藤さんと一緒に買い物に行つた時もあった。

あのときは斎藤さんの気持ちに全然気がつかなくてずいぶん傷つけたんだろうな。

「ところで、山南先生、誰に何をかうんですか？」

あたしは思い直して山南さんをつついてみる。

昨日から何も教えてくれないのだ。

「ふふ、いつも世話になつていいるなじみの島原の天神に何か贈りたいたいんだ。それを水瀬君に選んでほしいんだよ。」

山南さんは観念したように言った。

「ええ！？つて山南先生の恋人ですか？」

「違う違う、向こうにとつてはただのお客だからね。ただ彼女と居るととても安らげるんだ。だからそのお礼なんだよ。簪や鏡なんか

はもういろんな人にもらっているだろうからね…ただ私は女ごころに疎くて…」

「櫛はどうですか？いつもつけていられるし。」

「水瀬君、女子に櫛を贈るのは正式に求婚するときだけなんだよ。」

山南さんは苦笑して言った。

「ええ？そうなんですか？そんなこと、全然…ってあたしが知らなかっただけかもしれないですけど。」

「ふふふ、櫛は”苦死”という字を充ててね、苦しみや死までも共にしてほしいという男の覚悟の気持ちなんだよ。戦国の世のいつ死ぬかもしれない武士たちが、贈ったのが始まりと言われているがね。だから…櫛は贈れないんだよ。」

櫛は命を共にする夫婦の契のしるし。

だから遊女に贈ることはできない…

この時代にはまだまだあたしには理解できないような土農工商の身分のしがらみが残っている。

だから農民の近藤先生や土方さんが武士になるっていうのは時代が時代なら口に出すのもはばかられるような夢なのだと、総司は言っていた。

だから武士の山南さんと彼女は正式に夫婦と言う形にはなれないのだろう。

なんだかそんなのってやりきれない。

「その人を身請けしたりはできないんですか？」

「うーん、私には戦国武将のような覚悟もなければ甲斐性もないからね。」

私たち新撰組はいつ死ぬかわからない。私たちは幕府と日本の未来のためにあるからね。そのことには何の迷いもないけれど、遺されるほうは辛いだろう？だから言えないんだよ。このままでいいんだ。彼女を幸せにしてくれる人が現れるまでね。」

「好きだから…言えないんですね？」

「ぶがいないだろう？」

山南さんは自嘲するように言った。

「…いいえ。」

そんなこと思えるはずがない  
きつと山南さんはその人のことがすごく好きなんだ。

だからもし自分が居なくなつた後愛しい人を独りに遺すのが怖いからだから、自分の気持ちも彼女の気持ちも言わないし、聞かないんだらうな。

いったん手にした幸せを手放すならもともとないほうが傷つかないから。

きつとこれが山南さんの精一杯の優しさで愛の気持ちなんだらうな。  
伝えられない想い。

だからプレゼントに想いをこめて贈るしかないんだ。

どうか、彼女と山南先生が少しでも長く共に居られたらいいな。

「…じゃあ、これはどうですか？」

あたしは近くの陳列棚にあった匂い袋を手にとつた。

なんの匂いかわからないけれど、上品な柔らかい香りが心地よい。

「匂い袋か…。これは白檀だね、優しいいい香りだ。」

山南先生は優しい顔を見せて淡い薄紅の布地に桜模様の刺繍の匂い袋を手にした。

きつと彼女はこの匂い袋みたいに上品でしつとりとした女性なんだらうな。

山南先生はそれを贈ることに決めたようで、お店のご主人にお会計を頼もうとしていたので、あたしは山南先生の袖を引く。

「山南先生、待ってください。はい、これ。」

あたしは同じ白檀の香りの色違いの匂い袋を山南先生に渡す。

「なんだい？」

「彼女とお揃いで持つんです。離れてても一緒に居られるでしょう？」

「なんだか私のような武骨な男が気恥ずかしいな。」

山南先生は照れたように顔を振って笑った。

「きつと彼女も喜びますから。」

「わかった、わかった。」

あたしの押しに負けたようで山南先生は匂い袋を二つ買った。

櫛は贈れないけれどもこのお揃いの匂い袋が二人の絆になればいい、

あたしはそんな風に想った。

## 第九章 2・墓参り、ただ心だけを寄り添わせて

あたしと山南先生は小物屋さんを出た後川沿いの桜並木を歩いていった。

どうしても行きたいところがあると山南先生に頼んだのだ。

それは華香大夫と吉田稔磨の御墓だった。

ばたばたしててずっと行けていなかったからこの機会に行っておきたいと思ったのだ。

あたしは歩きながら華香大夫のことを山南先生に話す。

「前に島原に密偵に入った時、華香大夫っていう人がいたんです。すごくきれいであでやかで、誰もが振り向くような美人でした。でも凜として芯の強い女性でした。華香大夫は恋をしていたんです。お客さんに。でもその人は華香大夫のことを少しも振り向かない人でした。その人には恋よりも愛よりももっと大事な志があったから、だから華香大夫の恋心を利用してそれを果たそうとしたんです。華香大夫はそれを知っていて敢えて利用されたんです。その人が笑って本懐を遂げられるならそれが一番だっと思ってたから。そして華香大夫は最期までその人をかばって、その人の腕の中で笑って死にました。」

あたしは一気にしゃべると息を吐いた。

「なるほどね。その華香大夫と言う人はとても難しい人に恋をしたんだね。ただまるで彼女の思い人は土方君のような人だね。志のためならば、恋も愛も感情さえも排除して、鬼になることができる、そんな人だね。」

「…そうですね。」

山南さんは静かに笑いあたしに話しかける。

あたしはうつむいたまま小さく笑うことしかできなかった。

そう、恋をするにはとても難しい人なんだ。

土方さんも、吉田も。

虹みたいに決して追いつけない届かない存在。

あたしたちは今日の伏見の近くにある小さなお寺に入った。維新志士とは思えないほど質素なお墓、ここには吉田稔麿のお骨はない。

幕府のお偉方に遺体は引き取られてしまったから。

だからここには見落としてしまいそうなほど小さな石碑があるだけだ。

近藤先生があたしの話を聞いて天涯孤独の華香大夫のためにここに吉田のお墓を建ててくださった。

”勝手なことして”と眉をひそめる吉田の顔が不意に思い浮かんであたしはなんだかおかしくなってしまった。

あたしたちは敵だった。決してわかりあえることなどできないと思っていた。

でも…今こんなにも穏やかに吉田のことも、華香大夫のことも思うことができる。

それが不思議だった。

石碑には戒名の横に見落とすくらい小さく”吉田稔麿、倫”と刻んである。

春になったら吉田が最期に遺した簪と髪紐を持って、島原大門の外の桜並木を歩こう。

満開の桜の木の下で、二人に想いを馳せるのだ。

あたしの自己満足だけど、赦してくれるかな？

大丈夫だよね？

どうか、二人があのお世では寄り添って幸せに暮らせますように。

山南先生とあたしは静かに手を合わせてしばらく二人とも黙っていた。

秋めいた風が頬を掠めていく。

不意に山南先生が立ち上がった口を開いた。

「水瀬君、私はね、君がここに居るのは偶然ではないと思っています。だから、ここで…君も想いのままに生きればいい。誰に遠慮もいらない、そして願わくば土方君の近くに居て彼を支えてほしい。」

「山南先生…あたし…」

気持を伝え合うわけでもない、身体を重ねるでもない、まして夫婦の契りを結べるわけではない。でも熱い志だけのために、同じ方向を見て心だけを寄り添わせて共に走り続ける、それをあたしの恋の形にします。それを至上の幸せに思えるように。」

「君は…なんて女子なんだ。まったく。私などよりもずっと武士だな。」

「…絶対に報われない想いを抱えてその人のそばに居ることにすごく辛くなることもあるんです。」

でもあたしは…同じ時を生きられた奇跡に感謝して生きていきたいんです。」

山南先生はにっこりと穏やかで優しい笑みを浮かべてあたしの頭に手をのせた。

それは父親の手のぬくもりに似ていた。つながっている。

目には映らなくても、150年の時を超えて平成の家族のもとへ、この想いがどうか届きますように。

「さあ、そろそろ帰ろうか？」

「はい！」

あたしたちは並んで日の傾きかけた境内を後にした。

…ただ心だけを寄り添わせて同じ志のために走り続ける…

あたしはこのためにこの時代に居る。



何度苦しみに陥ってもあたしの戻ってくる帰着点はここだ。  
向き合えなくても、  
伝えられなくても、  
ふれあえなくても、  
ただ同じ時を生きられることを幸せに想い、  
共に走ることができるとを至上の喜びにして、  
ここに生きよう。  
命が燃え尽きるその瞬間まで、  
一ミリも後悔を遺すことがないように。

### 第九章 3・噂

元治元年十一月

その人は新撰組に入隊した。

その人の名前は伊東甲子太郎と言って、平助君が江戸へ東下した折、その博識さと熱い志に惚れ込み是非にといいことで、新撰組に入隊したのだという。

すらりと整った鼻梁と涼やかな目元は武士というよりも歌舞伎役者のように美しく、洗練されていた。

土方さんもよく役者のようだなんて馴染みの女性から言われるらしいけど、あたしからすれば土方さんは精悍で男らしいけれど、伊東さんは中性的で妖艶な美しさなのだと思う。人当たりも良く、いつも紅を挿したような口元に妖艶な笑みを浮かべていて隊士たちには上々の人気らしいのだけど、あたしは何だか苦手だった。時おり見せる猛禽類みたいに鋭い視線と皮肉な物言いが何かを秘めているようで不気味だった。

「水瀬君」

あたしは洗濯を終えて桶や板を片付けていると後ろから声をかけられた。

「伊東先生、どうされました？」

伊東さんが一人の時のあたしに声をかけてくるなんて珍しい。

「君はおなごながら隊士として身を置き様々な働きをしているそうだね。全く感服するよ。」

何が言いたいの？

「恐れ入ります。」

あたしは不審に思いながらも小さく頭を下げた。

「君のような華が新撰組のような男所帯にいるんだ、幹部の皆は特

別に目をかけるだろうね。」

「！」

伊東さんが含むような言い方をするのに力チンとくる。あたしが体を使って取り入っているとも言うのか。

「何がおっしゃりたいのかわかりかねますが、ここは実力の世界。それだけだと思います。」

あたしはさらりとかわしながらけれど釘をさす。

やっぱりこの人嫌いだ。

この人が来てから山南さんはますます塞ぎ込むようになったし。

「ふふ、そんな怖い顔をしては美人が台無しだ。」

完全な上から目線にあたしは内心不信感で一杯だった。

「別に私は女子としてここに居たいわけではありませんから。」

「頼もしいね。」

意地悪なくすくす笑い。

ねっとりとした粘着質な視線が気持ち悪くて、あたしは会釈すると足早に伊東さんのそばを離れた。

\*

近頃隊のみんながあたしを避ける。

初めはわからなかった。

けどさすがに食事なんかをあたしの給事だけあからさまに避けられたり、稽古の相手を避けられたら嫌でも分かっってしまう。

なんで？

あたし何かした？

あたしの困惑は日に日に増していて、幹部のみんななんかは別に気にすることないからほっとけなんて言うけどあたしは気になってし

まうのだ。

あたしはこんな時、自分の胆の小ささを実感してしまう。

「はあ…」

あたしはいつもの縁側でため息を一つ。

よくないな。

どんだんマイナス思考になる。

「どうした？水瀬。」

「斎藤さん。お疲れ様です。」

巡察帰りの斎藤さんに声をかけられた。

あたしは無理やり笑顔を作り顔を上げる。

「最近稽古も上の空だ。飯も味が薄い。何があった？」

斎藤さんは本当に鋭い。

あたしの揺らぎをこんなにも見透かしているのだから。

こんな風に心配をかけたいわけじゃないのに。

「…最近、みんなの様子が違うっていうか…。避けられてる気がしてて。」

「…妙な噂が流れている。お前が副長を始め幹部と寝ていると。それで女でもここに堂々としているのだと。前からそんな風に思う連中は確かに居たが、ここまで表立って皆出さなかったただけだ。」

「！」

あたしが？

みんなと寝てる？

だからここに置かれてるって？

そしてそれは以前からうわさされていた？

「まあ、女が新撰組に居ること自体奇異なことではあるからな。そんなうわさが立つことはある程度は想定していたが、今になってこう大げさになるとは思わなかった。だれかが故意に流していると考えたほうが自然だろう？」

「あたしは…！」

目の前が怒りで白くなる。

そんなことしてない。

だいたい情婦としてここに居るのなら密偵や剣術なんて必要ないし、それ以前に自分の上司信用できないのかよ！

これは幹部のみんなに対する侮辱なんだつつうの！

「水瀬、おまえはお前で堂々として居る。」

熱くなつたあたしを見越したように、言った。

「！」

「皆、心の中ではお前を認めている。

そんな風に下らぬことを言うのは女のお前の力に男としての矜持を揺らがされてしまい、それを認めたくないが故だ。だからこんなことに負けるな。」

斎藤さんはあたしの目をじっと見据えて静かに言った。

こんな風に向き合つと斎藤さんの背が伸びたのわかる。

ここにきて一年半、前は10センチくらいしか違わなかったのに、今は頭一つ分違う。

みんな大人になって行く。

だからあたしも負けないようにしなくちゃ。

こんなことに揺らいでる場合じゃない。

あたしはあたしで堂々と仕事をするんだ。

ここに来たその時から楽な道じゃないことはわかっている。

「はい！斎藤さん、ありがとう。元気が出ました。

今日のご飯はおいしく作りますからね！」

あたしは力強くうなずき、夕食の準備に走り出した。

## 第九章 4・農

あたしはあの後台所に移動して夕食をトキさんと一緒に作っていた。今日のメニューはいもの煮っ転がしと大根とみず菜のじゃこ和え、小魚の甘露煮だ。

気合い入れて作ろう！

斎藤さんと話して少し元気がでた。

あたしは信じてもらえるように自分のできることをするしかないんだ。

夕食もほぼ完成してあとは大部屋に運ぶだけだ。

「うん、われながらいい出来。」

「じゃあ、まこっちゃん、うちちょっと出かけてくるからあとよろしゅうな。」

「はい、わかりました。」

トキさんがたすきと手ぬぐいを外して外へ出ていく。

あたしは完全に油断していた。

自分の夕食の出来にまんぞくして普段なら注意すべき人の呼びかけにも完全に気がつかなかったのだ。

「水瀬」

ふと名前を呼ばれて振り向くとそこには伊東さんと一緒に上洛してきた人が居た。

名前は忘れたけれど、腰巾着みたいに伊東さんについている姿はよく見かける。

小柄でいつも一重の鋭い目と常に眉間にしわを寄せて口を引き結んでいる様子は不機嫌そうで、あまり話したいとは思わない風貌だ。

「何かご用でしょうか？」

あたしは少し警戒した。

こんなに近くに来るまで気がつかなかったなんて。

「そんなに緊張するな。近藤局長が呼びだ。」

「近藤先生が？」

何の用だろう？

「火急の用だとのことだ。つれてくるように言われておる。」

「承知しました。」

あたしは水のついた手を拭いてたすきをはずし、その人の後について台所を出た。

外はすでに暗くて風が沁みるように冷たい。

もう冬がそこまで迫っていた。

あたしは暗闇に一步踏み込んだその時、

背中から何者かにはがいじめにされた。

何！！！！

あたしはとつさに充て身を食らわさせて相手がひるんだすきに裏剣で殴りつける。

何が起きたのかわからない。

ただ相手は複数であたしは圧倒的に不利な状況だということは分かった。

図られた！！

「きゃっ！！」

あたしは肩を掴まれその場に押し倒される。

しまった！

間合いを取っていれば柔道の技をかけることもできるけれどこんな風に身体を押さえつけられてたら逃げられない！

「なにす……」

口を覆うごつい手。

この野郎！！

何するんだ！

「ん！んん！んん！！」

あたしは手足をばたつかせるけど、びくともしない。

「早くっ！」

あたしの腰の上に馬乗りになっている男が指示を出すにあたしの口を今度は無理やり開けて素早く白い粉と水を流し込む。

毒だ！！

再び手で口を覆われあたしはそれを飲まないように必死になるのだがけれど抵抗むなく苦い液体が喉を流れていく。

何これ！！

嫌だ、嫌だ！！！！

気持ち悪い！！

ドクンドクン…

心臓の音が妙に大きく聞こえ、胸が苦しくなる。

手足が猛烈に重い。

目の前の視界がぐにやりと歪み、涙があふれてくる。

あたしを拘束していた手はすでに離されていたけれど、身体が重くて動かすことすらできなかつた。

「だいぶ効いてきたようだな。手間取らせやがって。」

ドサ

あたしはいつの間にかどこかの部屋に運び込まれていた。

ドクンドクン…

動悸が激しく、息が浅くなる。

「あ…」

あたしはなんとか身体を動かそうとするけど手も足も痙攣が走っていて力さえ入らなかつた。



シュツ

誰かがあたしの袴や着物を剥いでいく。

さらしが乱暴にずらされて肌の上を手が通る。

嫌だ、嫌だ…。

なのに何もできない…。

肌に触れるごつごつした手の感覚があるのに、どこか人ごとみたい  
ですべてが遠かった。

何これ…

気持ち悪い…

あたしに触らないで！！！！

あたしは声の限りに叫んだけど声はかすれて少しも出すことはでき  
なかった。

…

………！

「…せ！

水瀬！！」

目を開けると斎藤さんと総司があたしを心配そうに覗き込んでいた。

あれ？

なんで、あたし何してたんだっけ？

身体を起こそうとするけれど、全身に痛みが走って顔をしかめる。

「水瀬！」

「まこと！」

二人が同時に声を発し、

総司があたしの手首をつかんだ。

「！」

その瞬間記憶がフラッシュバックする。

ナニガアッタ？

あたしは…

なにをされた…？

「…いやっ！」

あたしは思わず総司と斎藤さんを振り払い耳をきつくふさいで痛む  
体を見捨てて身体を丸めた。

何も聞きたくない。

何も聞かない。

お願いだからあたしをほおっておいて。

「…つつっ！」

あたしは声にならない悲鳴を上げ続けた。

## 第九章 5・怒り、衝撃：斉藤一

水瀬が夕餉の場に姿を見せぬ。

夕方あったときには少し元気になったように見えたが。

大丈夫だろうか？

妙なうわさが流れている。

水瀬が夜な夜な幹部の色子になって床を共にしているという不快なものだ。

まったく大方水瀬の働きをねたむ器の小さな連中の戯言だと思っていたが、なぜ今になってそんなうわさが流れ出すのか、誰かが故意に流しているとしたら考えられん。

水瀬を邪魔に思うものが？

幹部たちは皆水瀬が”平成”という未来から来たという複雑な事情を承知している。

突拍子もない話だが、体が光を放って消えそうになったあの姿を見せられては信用せざるを得ない。

それ以前に、皆水瀬がもはや何者でもかまわぬという気になっていたのやも知れぬ。

だからいまさらそんなうわさを聞いたところでまるでぴんとこない。

ふと茶碗から顔を上げると伊東参謀が山南さんに親しげに話しこんでいる姿が眼に入った。

伊東甲子太郎：あの人はきな臭い。

おそらくあの人の誠と新撰組の誠は別のところにある。

あの人は新撰組をのつとろうとしているのやも知れぬ。

どちらにしる要注意だな。

そのとき俺の後ろで小さな声で話す隊士の声が耳に届いた。ふと耳に届く「水瀬」という単語に俺は耳をそばだてた。

「だから本当だって…」

「マジかよ？」

「俺さつき見たんだ。水瀬が男とやってたんだ。」

「じゃあ、あのうわさは本当なのか？」

「幻滅したぜ。ただの女じゃねえと思ったたら色子かよ。」

「俺も世話になりてえぜ。」

「あんな女俺はごめんこうむるぜ。誰と兄弟になるかわかんねえだろ。」

「はは、ちげえねえ。」

俺は目の前が真っ赤になるのを感じた。

何を見たと？

水瀬が？

男と？

やっていた？

ふざけるな！

吐き気のようなこの会話の主をすんでのところで殴りかかるところだった。

「おい、滅多なことは言わぬが身のためだ。二度言えば斬る。」

俺は低い声で言った。

「ひっ、斉藤先生！」

「い、承知しました。」

この男たちのおびえようにいらだつ。

「…どこで見た？」

「え？」

「何度も言わせるな。どこで見た…!!？」

俺は苛立ちを隠すことさえできない。

早く言え！

「あつ…西の離れです。」  
場所を聞くや否や俺は走り出した。

\*

どん！

「うわ！」

誰かにぶつかる。

暗闇のなかぶつかったのは沖田さんだった。

「斉藤さん？どうしたんです？そんなにあわてて。」

「…今は話している暇はない。御免！」

俺は話す暇も惜しいとばかりに西の離れに向かって走り出した。

「な、ちよ、ちよつと…」

後ろから沖田さんの声が聞こえるがかまっている暇はない。

あの男の話の真偽を確かめたい。

水瀬が自分から行くはずはない。

水瀬の身に危険が迫っているのかも知れないのだ。

カサリ

西の離れの一室から聞こえる物音。

ここは物置のはずだ。

まさか…！

「斉藤さん！何があったんです？」

沖田さんが俺に追いついたのか、肩で息をしている。  
俺は一気に扉を開けた。

そこにいたのは

乱れた着物で苦しそうに浅い息を繰り返す

水瀬だった…！

「…！」

俺も沖田さんも息を呑む。

水瀬は袴を着けておらず、単も前がはだけておりその白い肌があらわになっっている。

髪も乱れ顔にかかってその表情は見えないがどうやら気を失っているようだった。

「水瀬！」

「まこと！」

俺たちはかわるがわる水瀬を呼ぶがみなせは苦しそうに浅い息を繰り返すだけで目を開けない。

「水瀬…！」

俺はもう一度強く揺さぶってみる。

すると水瀬はゆっくりと長いまつげに縁取られた目を開け、少しの間視線は定まらず、虚空を見ていた。

ようやく焦点が合ったかと思うと体を起こそうとし、痛みが走ったのか顔をゆがめる。

とっさに崩れそうになる体を支えるために沖田さんが手首をつかんだ。

「…！」

水瀬は目をいつぱいに見開き、その目には恐怖とおびえが走った。  
「嫌っ！」

水瀬は沖田さんの手を振り払い、俺に背を向け何かから逃げるようにその場から這い出ると動かない体を丸めて耳をふさぎ、声にならない悲鳴を上げた。

「水瀬、落ち着け！」

「まこと！」

俺たちは水瀬に近づこうとするがその背中には圧倒的な恐怖と拒絶で俺たちを拒んでいる。

そして水瀬は糸が切れたようにぷつんと黙り、そして気を失った。

「…これは…いったいどういうことですか？」

沖田さんは今までに見たこともないほど怒りと殺気を噴出させてその声を絞り出した。

「あのうわさだろう。」

俺はのどに張り付いた舌を無理やり引き剥がして言った。

俺たちを拒む水瀬は何者も見えてはいなかった。

何をされた？

どれほど怖かったのか？

「っ！絶対に許さない！」

沖田さんはこぶしを自らのひざに打ちつけ暗闇をにらみつけた。

俺は心の奥底からじわじわと湧き上がってくる冷たい怒りに身を任せそうになるのをどうにかして抑えていた。

なぜ水瀬がこんな目に遭う？

こんな下衆な噂のせい？

冗談じゃない！！

水瀬が目を覚まさないことを確認してから俺は水瀬の単を合わせて白い肌を隠した。

と、そのとき、俺は妙なことに気がついた。

犯された痕跡が…ない？

水瀬の足の間には、その行為を行えばあるはずの痕跡がなかった。

これは…どういうことだ？

水瀬の体を奪うことが目的ではない？

そういえば物置とはいえ、西の離れは幹部の部屋がある。

こんなところで襲っては見つけてくれとっているようなもの…

そこまで考えて俺ははっとした。

噂を本当にすることが狙いか？

水瀬が隊士でありながら幹部と関係を持っているという噂を真にして隊士たちにいっそう不信感を植え付けることが目的だったとしたら？

まぶたの裏が怒りで燃え上がるようだった。

捨てては置けん。

許さぬ！

それは衝動。

怒りはじわじわと体を侵食して、青白い鬼火が自らの体を焼き尽くすような錯覚を覚えた。



## 第九章 6・激情、見たくないもの：沖田総司

まことが何者かに襲われた。

なぜ、そんな目に遭わなければいけない？

まことは生まれ育った時代も家族からも引き離されてここに連れてこられたのに、この上なぜこんな目に遭わねばいけないのだ？

乱れた着物からのぞくまことの白い肌を見たその瞬間体のそこから得体の知れぬ衝動が突き上げてきた。それは独占欲。そして怒り。

自分にこんなにも激しい感情があるとは知らなかった。

私はこれまでにないほどの激しい怒りで自分を抑えるのがやっとだった。

そして、まことが怯えて私の手を振り払ったとき、言いようのない喪失感に襲われた。

壊れてしまった。

私たちはきつともう戻れない。

そんな絶望が体中を包んだ。

\*

まことはあの後部屋に移されたが、熱が高くなかなか目が覚めず、ようやく起き上がれるようになったのはそれから三日後だったけれど、私は会いに行っていない。

まことに会ったとき、私はどんな顔をしていいかわからないから。会いたいけれど、会えなかった。

外は凍えるような冷たい雨が降っていて、巡察から戻ったとき、私の体は芯から冷え切っていた。

私は自分の部屋のふすまに手をかけてしばしとどまった。中は見慣れぬただっ広い空間が広がっている。

まことの荷物は局長室の横の小部屋に移してあるのだ。さすがに誰かと同じ部屋では目が覚めたときにまた怖がらせてしまつと、近藤先生が配慮した結果だつた。まことの看病はトキさんに任された。斉藤さんは会つただらうか？ まことに。

あの日、斉藤さんは見たこともないくらい狼狽していた。けれど、まことを見つけた後斉藤さんは怒りながらも、冷静に行動していた。

ただ己の激情に震えていた私となんて違うんだ！ 己の小ささを痛感した。

だから会えない。

私は男としても武士としても中途半端な未熟者だ。

どんなときでも感情に流されずに行動できる、そう信じていた。なのになんだ、この体たらくは。

外の曇交じりの雨に打たれ体はすっかり冷え切っている。

この体を蝕む激情も一緒に冷めてしまえばいいと思う。

この自分で制御することもできない、この衝動を氷つかせてしまいたい、そう思った。

\*

「沖田さん、何してる？」

ぼんやりしていた私に斉藤さんが声をかける。

「…ああ、ぼんやりしてましたよ。」

私は小さく笑つてふすまを開けた。

「沖田さん！水瀬がお前に会いたがつた。」

「！」

背中に覆いかぶさる斉藤さんの言葉に私は瞠目する。

私が行っても怖がらせるだけだ。

それに、あの傷ついているまことに会うのが怖い。

私の知っているまことじゃないから。

「…行けません。今行っても怯えさせるだけですから。」

私はのどから言葉を搾り出した。

「！」

そのとき、

斉藤さんが私の肩をつかみこちらを向かせると、胸倉をつかみあげた。

「ふざけるなよ！怯えているのはお前だろう！」

水瀬と向き合うことすらしないで避ける。水瀬の気持ちを考える！

これ以上あいつを傷つけることは俺が許さん！」

斉藤さんは見たこともないほど激情を見せ、つかんでいた私の襟元を離した。

「！」

「あいつはきつとますます強くなって戻ってくる。そういう女だ。

だから…惚れたんだろ。俺もあんたも。だったらきちんと逃げずに

向き合え！」

斉藤さんは私を一瞥すると去っていった。

動けなかった。

斉藤さんの言うことはいちいちその通りで、私は自分の知らないまことを見たくなかっただけで…。

自分という人間はなんて浅はかで…卑怯で…！

私は刀を片手に外へ飛び出した。

資格がない。

まことに会う資格が。

こんな風に思うこと自体、もはや逃げている証拠なのだろうけれど。

自分を罰してほしかった。

私は霏交じりの雨の中ただひたすらに剣を振り続けた。

手の感覚はすぐに無くなって着物が雨を吸って体に張り付くが、私は剣を振る手を止めなかった。

無駄なことはわかっていたが、絶え間なく落ちてくる雨を斬り続けた。

## 第九章 7・泣き方

目が覚めたとき、あたしは見知らぬ部屋に寝かされていた。頭がもやがかかったようにあいまいで、頼りない。

トキさんが額に乗せられた手ぬぐいを替えてくれた。

「大変だったね。まだ熱が下がっていないからゆっくり休みな。あたしはあいまいにうなずいて目を閉じた。」

ああ、あれは夢じゃないんだな。

体を抑える男の手。

のどを伝う苦い液体。

自由にならないからだ。

体中を這い回る手。手。手。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

嫌い、嫌い、嫌い！！

でも何より嫌いなのはこの男所帯の新撰組に身をおく時点でそういう危険性だつてあつたはずなのに、油断して逃げることもできなかつた自分自身だ。

自業自得。

あたしがこうなつたことで、きつといるんな人に迷惑かけてる。

悔しい、悔しい。

あたしの意識は暗闇に引き込まれていった。

\*

それから2、3日たつてあたしはだいぶ元通りに動けるようになった。

表面上は何も変わらない。

どうやらあたしの身に起きたことはごくわずかな人とどめておい  
てくれたらしい。

発見者の斉藤さんと総司、そして近藤先生と土方さんだけらしい。  
あとの人には急病で昏倒したとだけ伝えてくれたみたいで、それが  
有り難かった。

あたしは徐々に日常に戻りつつあった。  
でもあたしは何かを失ってしまった。

人に触られると、動悸が急に激しくなって、体が動かなくなってし  
まうのだ。

理由なんてわかりきっている。

でも…それでもそのことをただでさえ気を使ってくれているみんな  
に言えるはずがない。

笑わなきや。

笑わなきや。

そう思うと不思議なもので、感情がだんだん麻痺してくる。

あたしは意識しないでも笑えるようになった。

この調子だ。

きっとこのまま戻れる日が来る。

\*

カタン

「！」

小さな物音ひとつにもびくついてしまう。

振り向くと、そこには伊東さんが立っていた。

「あんなことがあっても笑っていられるなんてやはりあなたは普通の  
女子ではないらしい。」

くつくつと蛇のような笑いを浮かべていた。

「！」

あたしは瞠目したまま指一本動かすことができなかつた。  
普通？

普通って何？

あたしはここにいる時点でもう普通じゃないのに。

「あなたのような異分子がいるから新撰組は乱れる。それがわかりきっているのに、局長や土方君が君を置くのはやはり君の体が惜しいのかな？」

「…取り消してください。」

ふつふつとわいてくるのは怒り。

「みんなを馬鹿にするような発言は許さない！」

あたしは伊東さんをにらみつける。

「ふふふ、どの口がそれを言うのかな？」

伊東さんが一歩あたしに近づく。

あたしは後ずさってそれでも目線はずすまいと思った。

「そその目をするね。水瀬君は。」

そのときあたしの背中が壁に当たるのを感じた。

ドクンドクン

心臓の鼓動が早くなっていく。

落ち着け、落ち着け！

伊東さんは不意にあたしの右手をつかんだ。

「！」

いやっ！

あたしはとつさに顔を背けた。

「君は自分が新撰組に必要だと思っている？」

ずうずうしいね。今の君はお荷物でしかないんだよ？君の存在は毒だ。

近藤君も、土方君も、君には甘いからねえ。君は女であること、そしてその優しさに甘えているだけだ。沖田君や斉藤君が君のせいだ。惑っているのを君はわかっているのかな？  
それともそれを楽しんでいるのかな。

君がいなければ彼らは武士として揺らぐずに生きていけたのにねえ。

「もうやめてっ！」

息ができない。

苦しい。

あたしは伊東さんにつかまれた右手を必死で解こうとするけれどつめたい笑顔を張り付かせた伊東さんの手はあたしの手首をぎりぎりと締め付けている。

「前みたいなのがもう一度おきるかも知れないよ。それでも君はまだここにいろの？」

「みんなに迷惑をかけ続けて？」

言葉がナイフみたいにあたしの心を切り裂いていく。

どうしてこの人はあたしの弱い部分をめった刺しにするんだろう。

もうやめて。

知ってる。

ホントはここにいてはいけないことは。

あたしが一番知ってる。

だから…もうやめて！！

「よく考えなさい。水瀬眞実君。」

伊東さんはあたしの手を離すと小さくささやいて去っていった。

あたしは立っていられなくてずるずるとその場にしゃがみこんだ。

ひざを抱えてきつく目を押し当てる。

どうしよう。

こんなときなのに、泣けない。

笑いさえ浮かぶ。

ああ、本格的におかしくなっちゃったよ。

泣いてどうしたらでるんだっけ？

泣き方忘れちゃった。



独りなのに泣けない。

「ふふふ…。」

あたし、もうここにはいられない…。

第九章 8・歯がゆさ：土方歳三

あいつを見るたびにやるせなくなる。

声をかけるたびに身体を震わせ、一呼吸置いてから無理やり笑顔を作っている。

笑っているのに全身でないようにも見えて、それが痛々しかった。

あいつが何者かに襲われた…

斎藤と総司からその報告を聞いたとき、俺は自分を抑えることで一杯だった。

他の男があいつに触った？

ふざけんじゃねえ！！

ぶっ殺してやる！

そんな激情が体中を駆け巡った。

そしてあいつを守れなかった自分も殺してやりたくなった。

どうすればいい？

どうすればあいつを傷つけずに、守ることができる？

ふと水瀬の部屋の前を通りかかった時、かすかな物音に足をとめた。ふすまが開いている。

「？」

「くっ…っ…っ…」

「！」

うめき声が聞こえて、俺はふすまをぶち開ける。

「水瀬！！」

部屋の隅に水瀬が身体を丸めて倒れている。

俺は水瀬に駆け寄ると肩を掴んで様子を見ようとした。

「はあ、はあ、はあ…」

浅く呼吸を繰り返しているがひどく苦しそうで眉をしかめて胸を押さえている。

「おい！」

畜生！

「だれか！居ないか！医者を呼べ！！」

俺は声の限りに叫んだ。

水瀬の小さな手が俺の着物を握りしめている。

\*

医者の見立てによると水瀬は”過呼吸”に陥っていたらしい。

過呼吸とは息を吸うだけで吐くことができなくなってしまう症状らしく、何か辛いことなどがあると若い娘がなることがあると医者は言っていた。

薬でだいぶん落ち着いては居るものの、あの出来事が水瀬をこんなふうにしてしまった以上、これ以上男所帯の新撰組にさせさせることは果たして水瀬にとつては辛いだけではないのだろうか？

俺は水瀬が眠っている部屋からそっと出た。

「トシ、水瀬君は大丈夫か？」

近藤さんが見計らったように心配そうに眉を寄せて言った。

「ああ、薬でようやく落ち着いたところだ。」

俺は水瀬の部屋を離れながら小声で返した。

「こんなになるまで…怖かったんだろうな。」

「俺ら男にはどうしても想像でしかないがな…。」

「あのあと水瀬君はずっと無理して笑っていただろう？頼ってくれてもいいのに…だがやはり本物の家族ではないから甘えられないのだろうか？」

「勝ちちゃん、あの噂、耳に入ってるだろう？水瀬はたぶん、あの噂

に利用されたんだ。」

「利用？」

「斎藤の報告では水瀬は完全に身体を奪われたわけではなかったらしい。だが襲われてる水瀬を目撃した奴がいるってことは噂に乗じてわざと襲って目撃させたんだろ。隊士の中に不信感を植え付けて新撰組を中からぶっ壊そうとしてやがんだ。そんなことするのは伊東しかいねえだろ。」

「！」

「ぜってえ赦さねえ。」

「だが、まだなんの証拠も……」

「だから齒がゆいんだよ！畜生！あいつがあんなふうにしんじけるのに俺らは黙って指くわえて見てることしかできねえんだ！！そして実際平隊士の中に水瀬のことで不信感を持つてる奴らが出始めている。俺らは伊東の書いた筋書き通りに進んでるんだ。」

俺はいら立って、壁をこぶしでたたいた。

こぶしはジンジンと熱い痛みを持っている。

「トシ……」

勝ちゃんがおれの肩に手を置いた。

新撰組のことだけを考えれば水瀬をこれ以上ここに置くべきではないのだろう。

だが…水瀬はここに居ることを望んでいた。

そして俺らも水瀬と共に有ることを望んでいる。

どうすればいいのかまったくわからなかった。

## 第九章 9・引き際、武士の如く

暫く膝を抱えてぼんやりしていた。

あたし…どうしてこんななんだろう？

どこにも行けない。

…キミガシンセングミヲコワス…

あたしが…あたしの存在が、不信感を産み、新撰組の均衡を壊す…

伊東さんの言葉を咀嚼して胸に落とし込んだ時、心が壊れる音を聞いた気がした。

ここに居ちゃいけない…

胸の奥に砂を詰め込まれたようにどうしようもなく苦しくなる。

不意に息がうまくできなくなって胸を押さえて体を丸めた。

「あ、うっ…」

過呼吸だ。

きちんと息吐かなきゃ。

「はあ、はあ…」

ダメだ、苦しい。

誰か…助けて…！

ううん、誰かを求める訳にはいかない。だってあたしに近づいたらその人に迷惑がかかるもの。

自分でなんとかする。

これ以上迷惑なんてもう無理。

あたしは一層体を丸めて息を吐こうと試みる。

スパン！

「水瀬！」

襖が開いて誰かが入ってきた。

誰？ダメ、あたしに近づかないで！

「おい！しつかりしろ！水瀬！」

あたしを抱き抱える大きな手は、土方さんのものだった。

「おい！誰か居ないか！医者を！！」

あたしは土方さんの着物をきつく掴んだ。

「やめ……」

大丈夫ですから！

あたしに構わないでください！

そう言いたいのに、

言えない。

これ以上空気なんか吸えないのにも容赦なく空気の塊が胸の中に割り込んでくる。

あたしは力強い土方さんの腕の感覚に身を委ねて意識を手放した。

\*

目が覚めた時、隣の部屋から人の話声が耳に入ってきた。

「……から……だろ？」

「……の……じゃないか！」

幹部会……だろっか？

耳鳴りがして上手く声が聞こえないけれど目を瞑って集中して耳を澄ましていくうちに徐々に聞こえてくるようになった。

「水瀬を除隊させるってなんでだよ！水瀬は誰よりも新撰組の為に思っただけで行動してるじゃないか！」

平助君の声だ。

予想はしていた。

除隊…か。当たり前だ。真偽はどうあれあんな風な騒ぎを起こしたんだから。

でも…胸が…痛いな。

「私は藤堂さんの意見に賛成だ。水瀬君の噂の真偽がどうあれ彼女の今までの働きを見ればこれからも組の為に働いてくれるでしょうし。」

この声は伊東参謀？

声を聞いただけで吐き気がしてくる。

まさか、なんであんなにそんなことをいう？

ここにいるのを反対しているんじゃないの？

「真偽とはまた聞き捨てなりませんな。ここにいる者は水瀬君の真偽など疑ったことありませんが。」

「！」

揺らぐことのないまっすぐな声…。

近藤先生…！

信じてくれていた…。

あたしは…それだけが怖かった。

あたしは口を手で覆った。

そんなふうにあたしのことを思ってくれたことがうれしくて。

誰に疑われても平気だと思ってた。

でも…ここにいるみんなにだけは信じてほしかった。

みんな信じてくれてる。

あたしを…

あんなうわさがあつて、あんなことがあつて…なのに信じてくれていた。

それだけで…十分だ。

だから…もう迷うまい。

隊を離れよう。

みんなに迷惑をかけないために。

あたしの存在が隊の均衡を乱すことはどう取り繕っても抗いがたい事実だ。

ならば…きちんと身を引くんだ。

「だが現に水瀬君が男と同衾している所を見ている隊士がいるのですよ？」

伊東さんの地を這うような声色に身体中に悪寒が走る。

あの時の感覚が蘇る。気持ちが変わるい。

「水瀬は同衾などしていませんよ。噂に利用されて襲われたのです。」

齊藤さんのいつもと変わらない声。

「なんと！」

「水瀬の噂が真実だと隊士に印象付けることが目的なのでしょう。」

「なぜそのようなことが言えるのです？」

「助け出した水瀬の身体にはそんな痕跡がありませんでしたからな。」

同衾の様子に見せかけたただど考えるのが自然でしょう？」

「しかし…」

「伊東参謀、貴方は水瀬の噂をどうにかしてでも真にしたいのですか？」

齊藤さんとのやり取りに痺れを切らしたように土方さんが言葉を継いだ。

「！いえ…私はまだここにきて日が浅いもので。」

そこまで信用している水瀬君を何故除隊にするのです？」

伊東さんは一瞬の揺らぎをすぐさま胸に収めて言った。

「そつだよ！俺も納得できない。」



「私もです。皆その気持ちは同じでしょう。」  
平助君や総司がひざを詰めたのか衣擦れの音が聞こえた。

「…隊の平生の為だ。幹部連中は水瀬の噂なぞ誰も信じちゃいない。だが皆がそうだというわけではない。隊の中には伊東参謀のように不信感を持ち始めている者も出てきた。このひずみがいずれ隊全体の結束を破るとも限らぬ。事態を收拾するためには水瀬を除隊させるしかないだろう。」

まったく…少しも揺らがないんですね。

土方さん…。

低くて少しかすれていて、ぶっきらぼうで、でも…時々すごく優しく。

どこまで行っても鬼の副長。

でも…さっきあたしを支えてくれた無骨な手の暖かさは…あたし、ずっと忘れません。

「土方さん！まことは…まことの気持ちは…！」

総司が必死にかばってくれるのを感じる。

あたし総司の手振り払ったのに…。

ありがとう、総司。大丈夫だから。

だから笑って。

「あんな状態の人間を隊に置いとけるわきゃねえだろ。足手まといになるだけだ。」

何の感情もない土方さんの声。

足手まとい…か。

どうしてだろう。

そんな風に言われてもあまりつらくない。

むしろすがすがしい。

自分が往く道を決めているからかな。

さつきまであんなにつらかったのは迷っていたから。

自分の存在が新撰組の毒になることがつらくて認めたくなくて、みんなに迷惑なつて嫌われるのが怖かったから。

でも今は違う。

みんながこんな風にあたしを信じてくれた、ここに居て良いって言ってくれた。

だからあたしは自分の行くべき道を見誤らずに進むことができる。

新撰組のために、どうすればいいかがわかる。

今は自分の弱さを認めて引く時だ。

ここに残れば伊東参謀の策略に利用されるとも限らない。

ならば、覚悟を決めて引くんだ。

「そんな言い方！近藤先生も何かおっしゃってください！」

「隊の為にも、水瀬君のためにも今はそれが一番だろう。」

近藤先生の低い声。

「……！」

皆一瞬息をのんで沈黙した。

あたしはふらつく体を支えながら、沈黙している隣の部屋へと続くふすまを静かに開けた。

「……水瀬……！」

土方さんも、近藤先生も、山南先生も、総司も、斉藤さんも、平助君も、佐之さんも、永倉さんも、源さんも……あたしが起きているとは思わなかったのか目を見開いて驚いている。

そんなみんなの驚いた顔がおかしくてあたしは思わず顔がほころんだ。

ああ、あたし、みんなが……大好きだな。

だからみんなのために、自分のために、きちんと自分の弱さと向き合って身を引くんだ。

武士みたい……。

潔く。

## 第九章 10・絆、ここに居られた幸せ

みんなが突然現れたあたしを凝視している。

あたしはゆっくりとひざを折ってその場に正座した。

「勝手に申し訳ありません。目が覚めて皆さんの会話が聞こえてしまいましたので。」

このたびのこと皆さんにご迷惑とご心配をおかけしたこと本当に申し訳なく思っています。」

あたしは手をひざの前に持つてくると深く頭を下げた。

「水瀬君……」

近藤先生が辛そうな顔をしている。

いかつい顔で、見た目はすごい強面なのに、人情家で、涙もろくて誰よりも優しい人。

「私は、除隊の件、謹んでお受けいたします。局長や副長のご厚情感謝いたします。」

「……!」「……」

「副長がおっしゃったみたいに、私は今、新撰組で……ここできちんとして暮らすことはできません。それは私が不覚にも襲われたからで……そのこと自体は自分の弱さが招いた結果なので仕方がないと思っています。でも……私のことでみんなが不信感を持たれて、そのことで新撰組の結束が揺らいでしまうことだけは絶対に許さない。だから隊を離れます。」

あたしはみんなの顔を見回しながらゆっくりかみ締めるように語った。

「水瀬! そんなことで新撰組は崩れねえ! ここにいる! 絶対に守ってやるから!」

「そつだよ。水瀬が居なくちゃ!」

佐之さんや平助君や言ってくれる。

でもそれじゃあだめなんだ。

今ならわかる。

このままあたしがここに居ればきつとまた伊東さんの策略のために利用されかねない。

それにまだ男の人が完全に怖くなくなつたわけじゃないし、もしまた同じことが起きたとき、あたしは戦えない。自分の身さえ守れない。

それが原因で新撰組に迷惑をかけるなんて、あたしは自分自身が許せない。

だから身を引く。

これはあたしが決めたこと、だから絶対に揺らがない。

あたしは自分の弱さときちんと向き合うんだ。

「水瀬君、貴女の意気込みはすばらしいが、こんなにも皆が言うんだ。残つても良いのでは？」

伊東参謀が一見優しそうな笑顔を見せる。

だけど目は決して笑っていないで、あたしをねめつけている。

この笑顔に誰がだまされると思ってるんだ！

あんたの好きに誰がさせるかよ。

あんたの脅しなんてもう怖くない。

あたしは傷つかない。

みんながあたしを信じていてくれる。

だから迷わない。

「伊藤先生に置かれましてもご心配いただいてありがとうございます。けれど、先生も以前からおっしゃっていましたがね。女子の身で危険では」と。ですからきちんと自分の弱さにむきあいたいと思います。」

あたしはまっすぐに目をそらさずに伊東さんを見据えた。

あんななんかに負けるもんか！

「では、水瀬も納得したようですし、水瀬は除隊の方向で。では解散。」

土方さんが淡々となんでもないことのように皆に告げると近藤先生と連れ立って部屋を去っていった。

それを待って伊東さんが一瞬悔しそうな顔をして、去っていく。

山南先生が一瞬辛そうな笑顔をあたしに向けて、源さんと連れ立って部屋を出て行った。

ふすまが閉まった瞬間、総司があたしに向き直った。

「まこと！足手まといだなんて誰も思わない。もうまことにあんな思いさせない、だからここにいなよ。」

「そうだけ！水瀬！土方さんの言い方はいくらなんでも言いすぎだ。」

「水瀬、ここにいなよ。みんなそう思ってる。」

みんながこんな風に必死になってくれることがうれしくて有り難い。

「ありがとう。総司、佐之さん、平助君。でもそれじゃだめなんだ。

みんながそういつてくれるのすごくうれしい。でもだからこそ隊を

辞める勇気が、きちんと自分の弱さに向き合う勇気ができた。」

あたしはみんなに向き直ってしっかり笑った。

「…。」

総司も佐之さんも平助君ももう何も言わない。

「水瀬、今のお前は無理して笑ってるわけじゃねえな。だったら大丈夫だろ。」

もう無理しすぎて倒れんなよ。」

永倉さんが口の端を皮肉っぽくあげて笑った。

ほんと鋭い人。

あたしが無理してることバレバレなんだ。

当たり前か。

でも、今のあたしは、自然と笑えるんだ。

「大丈夫だ。永の別れじゃねえ。すぐまたあえんだろ。それに、俺らは時の理をぶち曲げてここにこんな風にあえてるんだろ？だから大丈夫だ。こんなことでは絶対に俺らの絆は途切れねえよ。」

永倉さんは無精ひげをいじりながら淡々と言った。

そんな永倉さんの言葉が胸にしみていく。

不意に鼻の奥がつんと痛くなる

ふと下を向くと畳と自分の足が涙でぐにやりと曲がった。

条件反射的に唇をぎゅっとかみ締めて目をきつく瞑って涙を我慢しようとした。

「我慢するな。」

その淡々とした声に思わず顔を上げた。

斉藤さんが穏やかな顔で言った。

「お前はこの前から柄にもなく我慢しようとしすぎだ。やめる前に泣ききつてしまえ。」

その静かな声色を聞くうちに涙がとめどなくあふれてきた。

止まらない。止まらないよ…。

パタパタ畳みに染みを作っていく。

この涙は辛いとか苦しいとかじゃない…

みんながあたしを信じてくれて、仲間だと思ってくれたことがうれしくて有り難くて…。

本当はみんなと一緒にいたいよ。

離れたくなんてない。

でもあたしはみんなを見守るほうを選ぶ。

だから今この涙を流しきってしまったら笑ってバイバイするんだ。

無理して笑うんじゃない。

心からみんなの健勝を祈って笑ってさよならしよう。

あたしは膝を折って泣き続けた。

今までの心の澱を流しきるように。

みんなはそれをいつまでも優しく見守っていてくれた。

## 第九章 11・訣別の朝、新たな道へ

翌日あたしは隊を離れることになった。急な決定だったけど土方さんの判断で早い方がいいだろうとの事でその日のうちにすぐに荷物をまとめて出発する準備を整えた。一年以上ここにいるのに呆気ないくらい荷物は少なくて、あたしのいた痕跡はすぐに部屋からなくなったのが少し寂しかった。でもいいんだ。これで。このままみんながあたしなんかの事で悩まずに揺らぐことなく走ってくればそれでいい。

「これで 全部。」

あたしは嘆息して風呂敷包の口を縛って独りごちた。

包みの中身は少ない。お梅さんからもらった着物一式と斎藤さんの簪、それからずっと壬生寺に隠しておいたお母さんの形見の指輪。

この中であたしが平成から持ってきたものってこの指輪だけなんだなあとと思う。でも確かにあたしはここに一年半以上生きてきてその思い出は抱えきれないくらい大きくて、その事に胸がいっぱいになる。

ここにいられてよかった。みんなに逢えてよかった。

あたしはふいに込み上げてくる感情に心が揺らいで目から涙の雫となって溢れてきた。

もつといっしょに居たかった。みんなと一緒に走りたかった。

命が削られても、好きな人と結ばれなくても、ただ一緒に側にいて、同じ方向を見て走っていければそれでよかった。

でも今のあたしではいっしょにいられない。

あたしの存在が必ずあだになる日が来るから。

だからサヨナラするんだ。みんなが揺らがずにいられるように笑って笑顔だけを覚えていられるように今のうちに泣き切ってしまうおう。斎藤さんや、永倉さんには意地っ張りで強情っていわれるんだろうな。



そう考えると苦笑が漏れる。

でもそれは性分だからどうしようもない。

小さい頃にお母さんが死んであの家族の主婦だったんだから。

甘え方も下手になるってもんじゃない？

だからどういわれようとあたしは頑固で強情で不器用な生き方を貫こうと思う。

「さあ、行かないきゃ。」

あたしはえいっと掛け声をかけて立ち上がり、襖を開けた。

最後にもう一度だけ振り返り何もない部屋に向かって小さく呟く。

「バイバイ、新撰組……。」

\*

八木邸や前川邸の御主人や子供たち、お女中さんのおトキさんに挨拶を済ませて最後に局長室に挨拶に行った。

「失礼します。水瀬です。」

ああ、この部屋にこんな風にはいるのももう最後なんだあ。

「水瀬君、入りなさい。」

近藤先生の声が聞こえて、あたしは襖を静かに開けた。

部屋の中には近藤先生が1人で火鉢を抱えるように座っていた。

その姿はなんだか丸まったクマみたいであたしはおかしくなってしまうった。

近藤先生はこう見えてすごく寒がりて去年も紅葉の時分から火鉢を出して土方さんに呆れられていたのを思い出す。

「お暇の挨拶に上がりました。今までこんな得体のしれない私をこちらに置いていただき本当にありがとうございます。皆様のご恩情には感謝してもし切れません。」

あたしは手について深々と頭を下げる。近藤先生はあたしに向き直

つて辛そうに眉をしかめた。

「水瀬君、君が辛い思いをしたのに、ちからに成れず本当に申し訳ない。」

「いいえこれは全てあたしの未熟さが招いたことですから、これからは遠くから新撰組を見守り ます。」

さみしいけど大丈夫だ。みんなを思い出せば生きていける。  
あたしは笑って言った。

「そこでだ水瀬君、また新撰組に戻る気はあるか？」

近藤先生の思わぬセリフにあたしは目を丸くした。

「えっ…それはどういう？」

「君の身柄を山崎君に預けたい。そこで監察として影から新撰組を支えてはもらえぬだろうか？この騒ぎになって表立っておなこのキミをここには置いておけぬが君の力は新撰組にとってなくてはならぬものなのだよ。」

「！」

あたしは突然のことに声を発することができなかった。

「もちろん身体と心をよく休めて休養をとってまた元気になったらいい。また新撰組にもどって来て欲しい。」

鼻の奥の方がツンとして視界がぐにやりと曲がる。

あたしは耐えきれなくなつて下を向くとパタリと一粒涙が零れ落ちた。

だつてそんなこと言ってもらえるなんて…思つても見なかったから。

「近藤先生…！」

あたしは思わず近藤先生に抱きついた。

近藤先生はがっしりしてお父さんみたいに大きくて暖かかった。

「水瀬君、君はどこに行つても何があつても私たちの家族だからね、だから忘れないでくれよ。」

君を傷つけることしか出来ないかもしれない、でも…私達は君を大切に思っているんだよ。」

近藤先生はあたしの背中をさすりながら優しくゆっくりと言った。

「近藤先生……あたしここでみんなと共に走りたいです。あたしは嗚咽をこらえながら声を絞り出した。」

「水瀬君ありがとう。任せたよ。」

近藤先生はお日様みたいに笑って言った。

あたしはまだ新撰組にいられる事が死ぬほど嬉しくて、涙でクシャクシャの笑顔を浮かべてみせた。

「では、先生、行ってまいります！」

あたしは涙をこらえて精一杯の笑顔で力強く言っていると、局長室を後にした。

## 第九章 12・決断、心のゆくえ：土方歳三

「トシ、水瀬君が行ったよ。良かったのか？」

勝ちちゃんが襖を開けて俺の部屋に入ってきたが言った。

「何がだよ？」

俺はさして興味も無いように言った。

「あんなに心配して、水瀬君を守るために隊を離れさせる決断をしたんだ。もうなかなかあえないだろう、いいの見送らなくて。」

「別にあいつは使い勝手のいい隊士だからただやめさせるだけじゃ勿体ないだろ」

俺は会津から来た書類から目を離す事なく言った。

さつきからずっと同じ箇所ばかり目で追ってしまつて俺は苛立つて舌打ちした。

「全く素直じゃないな、トシは…。あんなに心配して、付きつきりで看病したのはどこのどいつだよ。」

トシ、お前水瀬君を女子として好いているんだろう？水瀬君もお前にあんなに頼り切っているんだ。好いているのは目に見えているじゃないか。」

勝ちちゃんがあんまり真剣な言い方をするもんだから、俺は書類から目を離して苦笑した。

「そんなんじゃないやねえよ。九つも年若のガキになんで俺が惚れるんだよ。」

役に立つ、利用できそうだと思つたから引き止めた。それだけだ。今の俺に新撰組以上に大切な物なんざねえよ。」

「トシ、別に誰に遠慮する事なんかないんだぞ？俺らはいつ死ぬか分からないんだぞ。想いを遂げてもいいんじゃないのか？」

「こつぱずかしいこと言つてんじゃないやねえよ。色恋なんざくだらねえ。ガキじゃあるめえし。」

勝ちちゃんは小さくため息をつくど部屋から出て行った。

まったくいつまで経っても兄貴ぶりやがって。

俺は書類を文机におくと、ごろりと横になった。

見送りなんか行ってみろ、余計なことを言っちまうかもしれねえじやねえか。

あいつが伊東の汚ねえ策略から守られるならそれでいい。

本当はこの手で守りたかった。どんな危険からも俺の手で守りたかった。

でも俺の誠と立場はそれをさせねえ。

新撰組の不信感を払拭して、水瀬を伊東の野郎から守るためには隊を離れさせる事が必要だった。

でもあいつは新撰組と共にある事を望んで居たし、俺らも水瀬と共に居たいとおもっていた。

この並び立たぬ両者の選択に俺は悩んだ末、表向きは水瀬を除隊させ、影から監察方としてかわらせる事を選択した。

俺は結局中途半端なんだよな。

本当に水瀬をこの先全ての危険から遠ざけたいのなら、新撰組から一切の関わりを断つべきなんだ。

それをしねえのは…水瀬が特別だからなんだろうな。

新撰組にとつても、俺にとつても…。

勝ちゃんが言うように俺は水瀬に惚れている。

あいつの笑顔を見るたびに、俺は泣きたくなるほど　の懐かしさと暖かさが心を揺さぶる。

それはさながら魂の記憶で出逢うことを渴望していたようなそんな錯覚さえ起こさせるものだった。

水瀬も俺の事を憎からず想っていることは流石にこの年まで伊達に生きて来たわけじゃねえから気づいていた。

でもたとえどんなに互いが想いあっても、俺はこの先この気持ち成就させたいとは思わない。

この想いは終生伝えてはいけないものだ。

水瀬に想いを伝え、身体を重ね、夫婦の契りを交わし、子供を産み育て、共に老い、共に死ぬ…。

それは泣きたくなるくらい幸せで決して来る事はない甘美な夢。

水瀬を思う時不意にそんな幻に想いを馳せてしまう…。

でもそうしたら俺は誠の為に走れない。

その人間らしい柔らかい幸せに身をおいてしまえば修羅の道を行けなくなる。

上洛した時、新撰組を拝命した時、芹沢さんを殺した時…俺は鬼になると、修羅の道を往くのだと決めた。命が尽きるその瞬間まで、新撰組の為に鬼になると…そう決めた。

多くの人間を斬り、血を浴び、ひと斬り毎に人間から遠ざかって行く。

その事に少しの後悔も無いし、己もその様に死ぬのだと思っている。ただ水瀬を想うとき、水瀬と相生の契りを結び、あいつの笑顔が一番近い所を見て、あいつを幸せにしたいと、そんな人並みな幸せを求めたくなるのだ。

俺はこの想いを成就させてしまえば、きっと俺ではなくなる。鬼でいられなくなる。

俺は誠の為に走り誠の為に死ぬのだ、それは水瀬と出逢う事と同じように俺の魂に刻み込まれている宿命なのだ。

柔らかな幸せを享受して生きる人間ではない。

だから終生この想いは胸にしまい、決して伝えまい…

これが水瀬以外の女なら俺は抱くことも娶ることもきっとできるだろう。

でも水瀬だけは、ダメだ。

幸せにしたいから…否、幸せであって欲しいから俺は謂わねえし、抱けねえ。

「達者でな…頼んだぜ。水瀬。」

俺は今頃山崎にあっっているであろう水瀬に想いを馳せ、そっと言葉

を吐き出した。

## 第九章 13・見送り、変わらぬもの

近藤先生に挨拶をし終えて、玄関にいくと、みんながそこに居た。

「おう行くのか？」

「なげえんだよ、待ちくたびれたぜ。」

非番の佐之さんはいつにもまして着崩した着流しで、永倉さんはやつぱりボサボサの無精髭で無頼姿だった。一応除隊で別れの朝なのに、全然変わらないのがこの人達らしい。

「監察方に配属替えするんだってね、近藤先生から聞いたよ？」

平助君が耳元でこっそり言った。

「うん、そうなの。隊のみんなには秘密でお願い。」

「わかってる、水瀬、絶対また会おうね。」

「うん！」

平助くんはクリツとした猫目を細めて笑って言った。

この時代のひとはあまり背が高くなくて初めは全然あたしと背が変わらなかったのに、5センチくらい目線が上になっている。女の子みたいって初めは思ったのに、池田屋でも誰より勇敢に斬り込んで行って額に傷を負っていてその傷までも今では男ぶりをあげている。

「水瀬、山崎さんの所に行っても、あまり無茶をするな。辛くなったら必ず泣け。」

斉藤さんがいつも通り無愛想に言った。でも本当は誰よりも優しくて、芯の厚いひとだって知ってる。

「はい、ありがとうございます！」

あたしはしっかりと斉藤さんの切れ長の目を見て言った。

ほんの少しだけ、斉藤さんが口の端をあげて微笑んだのが見て取れた。

「なんか斉藤って……」

「……父親みたい」「」

三ばかトリオがハモってあたしは思わず吹き出してしまった。



「俺は水瀬と同じ年だ。」

斉藤さんは面白くなさそうに眉をしかめて言った。

「ぶ、あははは。笑わせないでくださいよ。」

あたしはがまん出来ずに顔を破顔させた。

みんなが安堵したようにあたしを見つめた。

「よかった。水瀬が笑えるようになって。辛かったろ、ゆっくり休めよ。」

永倉さんがにつと笑って言った。

「大丈夫、あたしはもつと強くなってもどつて来ますから」

「おうよ、まあそれ以上強くなられても後が怖えけどな。」

佐之さんが茶化すように言ってみんなが苦笑した。

「佐之さんはその時は地獄攻めで締め上げますから」

あたしはこんな軽口をたたける自分に驚いていた。

その時、稽古終わりの総司が息を切らして走って来るのが見えた。あの事件以来、総司とはずっと話していなくてギクシャクしたままだった。

「じゃあ俺らは行くから。」

「達者でな！」

「またな」

みんなが笑顔で手を振って屯所の中に入って行く。気を利かせてくれたんだろう。

総司は紺色の稽古着に竹刀を持ったままで走って来る。

「まこと、行くんだね。追いついてよかった。」

「総司…見送りに来てくれたんだ。ありがとう。」

「まこと、ごめん…。」

「何が？」

あたしは何の謝罪が分からなくて首をかしげる。

「あの時守れなくて…。」

「！」

あの事件の事を言っているんだ。そう思うと、一瞬暗闇に心が引き込まれそうになる。

あたしは一生この事を忘れないと思う。

結果的に身体を奪われたわけではなくてもあの自分ではどうしようもないくらい抵抗が出来なくて、怖くて絶望的なあの感覚はあたしを苦しめ続けるのかもしれない。

でも…。

「大丈夫、あたしは傷つかない。守りたいものが有るから。だから時分の弱さと向き合ってもっともっと強くなるから。」

あたしは暗闇を振り払うように真っすぐに総司を見つめた。

「まこと…。本当に…くやしいな。斎藤さんの言う通りだ。」

「え?」

「まことは辛くても壁にぶつかってもその度に強くなって帰って来るって。だからお前が揺らいでどうするって。」

「斎藤さんが…そんな風に。」

あたしを信じてくれるひとがいる。

それだけでこんなにもあたしは笑える。強くなれる。

「わたしも負けないよ。まことや斎藤さんや土方さんみたいに。」

物事の本質を見極められるように、揺らがぬ様に…武士だからね。」

総司は恥ずかしそうに小さく笑うとえくぼが見えて、あたしはこの総司の笑顔が大好きだと実感した。

「うん。」

あたしは笑って言った。

「土方さんには会った?」

総司がふと思い出した様に聞いて来た。

「ううん、会ってない。」

「会わないままでいいの?」

総司は怪訝そうに眉根を寄せて言う。

「いいの。会わなくても同じ方向を見てるのを感じるから。」

あたしはあたしのなすべき事をする。」

あたしは笑って言った。

本当の気持ちを言えば逢いたい。

でもそうしたら余計なこと言っちゃいそうだし。

それにあたしは土方さんとはきつと結ばれない。

でもただ心だけを寄り添わせて同じ方向を向いて一緒に走れることを自分の至上の幸せにして生きて行くと決めたから、だからいいんだ。

「まったく、かなわないなあ、二人とも。本当に入り込む余地も無いんだから。」

総司はすこしさみしそうに小さく笑ってから、一切を振り切る様子を言った。

「じゃあ、山崎さんの所までは送れないけど、気をつけてね。」

「うん。じゃあね。」

あたしは大きく手を振って屯所の門を出た。

季節は冬になるうとしていて、冷たい北風があたしの横をとおりにぎって行った。

## 第十章 1・春遠し、衝撃の告白

「お倫、ちよつとええか？」

山崎さんがあたしの部屋をのぞく。

「はい」

あたしは繕い途中の羽織を横に置いて顔をあげた。

あたしは屯所を出てから二か月、年も明けて暦の上ではもう春なのだけど、まだまだ寒い。

あたしは22になった。

あたしはあのあと山崎さんの隠れ家に移り、監察の仕事でも、もっぱら内向きの仕事をずつとしていた。ただ、山崎さんと二人で暮らすのに、散々もめた末（山崎さんは夫婦がいいと言った）、あたしは山崎さんの従妹と言うポジションに落ち着いたのだった。ちなみにあたしはここではお倫という偽名を使っている。

これは華香大夫の本名で、あたしは山崎さんに名前はどうしたい？と言われたとき、迷わず「お倫」の名前を選んだ。言いたくても言えなかった、呼ばれなくても呼ばれなかった、許されなかった名前だから。あたしが彼女の名前を使うのはおこがましいのかもしれない、でもやっぱりあたしにとっては忘れられない大切な人の一人だから、華香大夫の名を使わせてもらうことにした。

あたしのここでの任務はまだ未定なのだけど、山崎さんの話だと、屯所の移転計画が出ている西本願寺を探ることになるだろう、とのことだった。

いよいよ仕事か？とあたしは居住まいを正すと、山崎さんはそんなあたしを見越したのか、苦笑して言った。

「ちやうちやう、仕事の話しやない。お倫に会いたいゆう人がおんねや。鍵膳で、その人がまತ್ತるから昼ごろに行つてくれ。」

「あたしにですか？どなたです？」

あたしは心当たりがなくて首をかしげる。隊のみんながむやみにここに来るはずはない。初めはさみしかったけど、でもそれも仕事なのだからと、割り切れるくらいにはここでの生活に慣れてきたと思う。

「山南さんや。おおかた水瀬が慣れたかどうかみんなに見てくるように頼まれたんやろ。まったく新撰組はいつからこんなに過保護になつたんや。」

山崎さんはからかうように半ばあきれて言った。

「山南先生が：ぜひお会いしたいです。」

あの優しい穏やかさに触れるとすごく懐かしい気分になる。

あたしは顔をほころばせた。

「ああ、会いにいったれや。一応男装して行けや。お倫の姿で会うんはどこに目があるかわからんからな。」

「はい！」

あたしは立ち上がって行李の奥にしまつてあつた単衣と袴、そしてそろいの羽織をとりだした。

久しぶりに山南先生と会える。

そのことがあたし浮足立たせた。

\*

家を出ると冷たい風が吹き抜けて行つた。

「うづさむ！」

あたしは首をすくめた。

久しぶりに男装をして髪もポニーテールにしたのだけれど、女の子の着物よりもやっぱりあたしにはこのほうがしっくりくる。

鍵膳は老舗の甘味どころで屯所に居たころは総司とよく来たところで、すっかりご主人とも顔なじみになっている。

「水瀬はん、久しぶりやなあ。」

いつも眉毛を下げていて困ったような顔をしている人のよさそうなご主人があたしに笑顔を向ける。

「ご無沙汰してます。」

あたしは小さく会釈をした。

「今日は沖田はんはご一緒やないんで？」

甘味と言ったら総司なんだなあ。

あたしは苦笑して首を振った。

「今日は総司じゃなくて、総長と待ち合わせして居るんです。」

「総長つて…どなたはんやっただけ？」

山南先生は内向きの仕事をしてるから街の人にもなじみがないんだよね。

「山南さんと言っていますが、とても穏やかで優しい…あ、山南先生！こつち、こつちですよ！！」

ご主人に山南先生の説明をしようとしたとき、肩越しに山南先生が走ってくるのが見えた。

「ああ、水瀬君、遅れてすまないね。」

鍵膳のご主人に会釈してお団子とお茶を頼むと山南先生はあたしの隣に腰を下ろした。

「元気だったかい？」

山南先生が小さな笑顔を浮かべて言った。

どうしてだろう？山南先生の顔が笑っているのにすごく哀しそうに見えるのは。

「はい。山崎さんの従妹としてうまくやっていますよ。今日はどうなさったんですか？屯所で何かあったんですか？」

あたしはそのことには触れずに言った。

「…いや、何も無いよ。強いて言えば皆が水瀬君が居なくなっさみしがっているくらいかな。水瀬君が今元気がみんな知りたがっていたからね。」

「ああ、それで。」

気のせいだろうか？今の山南先生はいつも通り優しい笑顔を浮かべ

るだけだった。

「水瀬君、この後少し歩かないか？」

山南先生の笑顔はいつもと変わらないようでもどこかさみしげに見えた。

「ええ、大丈夫ですよ。」

あたしは何か胸騒ぎがして居た。

\*

お勘定を払ってお店をでると山南先生とあたしはまだ鴨川の川べりを歩き始めた。

「まだ男装しているんだね。」

山南先生がぼつりと言った。

「普段は女子の格好をしているのですが、やっぱりこっこのほうがあたしらしいですよ。」

あたしは苦笑しながら言った。

「君の花嫁姿はきつときれいだと思うよ。」

山南先生は茶化すように笑い、空を仰いだ。

「やめてくださいよ、相手もいないのに。」

あたしは苦笑して山南先生のほうに顔を向けると、目が合い、互いに吹き出してしまった。

ひとしきり笑いきると、後には妙な沈黙があたしたちの間に流れ、少しだけ気まづかった。

「…水瀬君、屯所に戻りたいかい？」

山南先生が不意に言った。

「ええ。とても。山崎さんも良くしていただいていますけど、やっぱりみんなにも会いたいです。」

山南先生は立ち止り、意を決したようにあたしに向き直った。

「水瀬君：私は君に話さなければならぬことがある。」

「え…？」

「君を…この状況に追い込んだのは私の…せいだ。」

「は？」

正直どういうことなのか、全く分からない。

「水瀬君、私は君を伊東さんに売ったんだ。」

「！」

ナニヲイツテイルノ？

「私が君を追い込んだんだ。全ては私が伊東さんを信じてしまったことが原因だ。」

伊東さんの知識の豊富さと思想は正直私を虜にしたよ。私の理想だと思った。

いつからなんだろうな、私の思想と新撰組の誠は少しずつ違ってしまった。

近藤さんも土方君もかけがえのない盟友だと思っている。だが、彼らの誠と私の理想はこの時流の中で少しずつ隔たってしまったのだ。禁門の変の焼き討ち、六角獄舎での罪人惨殺：幕府に忠誠は誓えぬ、そう思ってしまった。

そんなとき、伊東さんの柔軟な考え方にひどく引かれた。

だから伊東さんがこれからの世にはおなごの意見も必要だから君と話したいと言った時、何の疑いもせず同門の加納さんに引き合わせただのだ。

そしてあの時私も側にいた。止めようとした時、伊東さんが来て言ったのだ。

「明里天神、なかなかの女ですね」と。

その時なって初めて伊東さんの思惑を見た気がした。彼は私を足掛かりにして内部に取り入り、なおかつ隊士の不信感を煽るために君を利用したのだと。

そして私は天秤にかけたのだ。

明里の命と君の身を。



そして私は君を助けなかった。いや、そればかりか卑怯にもこれまで同様に新撰組にとどまろうとしたのだよ。

水瀬君、すまぬ。

謝って済むことではないが、君にだけは真実を告げねばと思ったのだ。」

「…。」

あたしは言葉を発することが出来ない…

だって…何で…

考えがまとまらない…。

シヨックすぎて。

何が？

山南先生が伊東さんの思想に依っていたこと？

あのとき山南先生があたしのそばに居たこと？

分からない。

ただ手の先まで石のように固まり、時がとまったようにさえ感じた。

山南先生はただ静かに目を伏せ、あたしに向き直っている。

先生の顔は記憶の中のそれよりも痩せていて、心なしか顔色が悪い。

「…山南先生…。」

何を言えばいいのだろう。

こんなにやつれて全身で苦しんでいるこの人に。

正直、あたしにとってあの出来事は悪夢以外の何者でもない。

それに山南先生が意図せずに関わっていたことはシヨックだった。

でも…山南先生は死ぬほど苦しんでいる。

自分の誠と新撰組の誠との隔たりに。

そして非道だと思ふのに伊東参謀の思想に強烈なまでに惹かれていくことにも、苦渋の選択をしたことにも。

あたしは枯れ草の生い茂る土手に腰を下ろした。

枯れた草のおいが鼻につく。

「山南先生…あたしは…傷つきません。みんながあたしを信じてく

れているから、それにこうして今また新撰組に居られるから。だから1ミリも傷ついてないんです。

だからこのことは先生だけの胸に秘めて、近藤先生や土方副長には言わないでください。先生は前におっしゃってましたよね。剣を持つことは痛みも恐怖も背負うことだと。自分が殺されるかもしれない、相手を殺すかもしれない、仲間が斬られるかもしれない、そんな恐怖と痛みを背負うことが刀を持つ者の覚悟であり、宿命なのだ。

先生が罪悪感を感じるのならば、それを背負って生きてください。傷ついていないというのは嘘だ。でもそれはあたしが背負っていい問題で、山南先生に話したところで解決もしなければ、和らぐわけではない。あたしが時間をかけて向き合っていく問題だから。

「水瀬君…。」

山南先生の目に水っぽいものが溜まって行くのが見えてあたしはそっと目をそらした。

「あたし…先生のこと大好きですから。確かにびっくりしたし、少しさみしい気もしたけど、でも…やっぱり大好きですから。」

あたしは今度は先生のほうを向き直り、顔をしっかりとあげて言った。何があるかとあたしにとってこれは紛れもない真実だから。

「水瀬君、君に会えて話せてよかった。

今日は本当にありがとう。

では…行くよ。」

山南先生は目を細めて穏やかな笑みをたたえて言うと、一度だけしっかりと握手をすると背中を向けて歩いて行った。

山南先生の笑顔はどこまでも穏やかで、優しい笑顔だった。

哀しいくらい澄み切った冬の空にひよどりの物悲しい鳴き声が響いていた。

## 第十章 2・脱走、どこにも続かぬ道

また一つ寝返りを打った。

もうすぐ夜が明けてしまふ。

でも眠れそうになかった。

昼間の山南先生のこと気がなつて。

なぜ、山南先生はあんなことを言っただらうか？

あたしだけには知ってほしいと言った。

でも…今までの山南先生なら話さずに心に留め置いていたのではないだろうか？

今までと違う…？

あたしはまた一つ寝返りを打って考えを廻らせていた。

そしてある可能性に思い至った時はっとして目を見開いた。

山南先生は…もう新撰組にいるつもりが…ない…？

あたしは布団を蹴飛ばして起き上がった。

部屋はまだ暗く少しの光も見えない。

…もう二年近く前だけど、現代の八木邸で、新撰組の年表を見た。

その時、あき兄はなんか言っただけ？

総長、山南敬助について。

あの頃は全然新撰組なんて興味なかったから、話半分にしただけ聞いていなかったけど…。

思い出せ！

何か事件はあった？

”：土方歳三と山南敬助はさ、互いに鬼の副長、仏の副長って言われて仲悪いつて言われてたんだよ。

そのせいで、山南敬助は脱走して土方歳三に切腹させられるんだ。

…”

「…！！」

あたしは不意にあき兄の言葉を思い出し、全身総毛立った。

山南先生は脱走、そして切腹させられる。

なんであたしは…！！

こんなになるまで思い出さなかった！？

これまでも、山南先生の様子はおかしかった。

疑う余地はずっとあったのに！！

止めなきゃ！

…山南先生は脱走するつもりなんだ。

どこに？

そんなの知らない！

でも、どういふ経緯かは分からないけど、見つかって連れ戻される。

士道不覚悟は切腹…！

いや、むしろ初めから死ぬつもりなんじゃないだろうか？

昨日の山南先生の様子はどこまでも静かで落ち着いていた。

山南先生の目は、生にたいして執着する者のそれではなく、悟りき

ったような静かな目をしていた。

あたしに話したのももう死ぬつもりだからだったとしたら？

新撰組の誠と山南先生の誠が少しずつ違ってしまったこと…

伊東参謀の攘夷の思想と、山南先生の誠が近いところにあること…

明里さんの命を盾に伊東参謀の企みに、乗らざるを得なかったこと…

きつともう…山南先生は新撰組に居るつもりがない…。

山南先生は新撰組を抜けてまで…生き延びようしない。

だって武士だから。あの人は。  
仏と言われても…でも、やっぱり武士だから。

あたしはきつくこぶしを握りしめ、暗闇を凝視した。  
どうすればいい？

死んでほしくない。

山南先生は大事な人だもの！

歴史なんて…くそくらえだし！

夜が明けようとしている。

空気が身を切るように冷たくて冷え冷えしている。

部屋はまだ薄紫で薄暗い。

あたしはパジャマ代わりの着物をもどかしく脱ぎ捨てて、単衣と袴  
を身に付けた。

まどろっこしくて構っちゃいられない！

あたしは山崎さんの部屋のふすまをぶち開けた！

「山崎さん！」

「！」

「なんや…お倫か。どないした。」

山崎さんは刀を鯉口に切つてあたしを鋭く睨みつけると、すぐにその手を緩めた。

こんなにバタバタしてたら起きるにきまつてるのかもしれないけど、  
とつさのことも刀に手をかけることができるあたり、やっぱりこの人も武士なのだと思う。

あたしは山崎さんの着物の袖をつかんで言った。

「山南先生が…脱走するつもりです…！」

「止めないと…！」

「！なんやて？昨日そんなこといってたんか？」

あたしは首を振る。

「何も…。でも様子がおかしかったんで気になってたんです。そしたら思い出したんです…歴史を。」

「…！」  
それは…総長が脱走して…そのあと死ぬちゆうことが、後の世に伝わったちゆうことなんか？」

「…！」  
あたしは静かに目を伏せた。

「とにかく屯所に行ってくる。水瀬はここでまっとれ！」

山崎さんは着流しの上に羽織をはおると、足音もさせず滑るように部屋を出て行った。

どうか…どうか…間に合いますように！

山南先生！

生きてください！

明里さんから、私たちの前から居なくならないでください！！

\*

そしてあたしの祈りもむなしく、山南先生脱走の一報はそのあと一時もせずに山崎さんの口から告げられた。

”思うところがあって江戸に帰ります”その一言を残して居なくなっていたのだという。

総司が後を追うように命じられたらしい。

大津まで行って見つけれなかったら戻ってこい、との命令付きで。これが近藤先生と土方さんの精一杯なのだろう。

無事に逃げ切ってほしい、と。  
戻ってくれば切腹以外の方法はないから。

でも、あたしはなんとなくわかっていた。

もう山南先生はどこにも往くつもりがないことを。

明里さんを連れて、逃げ切ることだってできる。

新撰組に残ってもう一度総長として過ごすことだってできる。

あるいは伊東参謀と共に山南先生の誠の道を往くことだってできる。

でも…山南先生はその中のどの道も選ばなかった。

どこへも続かない道を選んだのだ。

なんで…なんで…!!!

あたしは文机に突っ伏して嗚咽した。

### 第十章 3・風花、願い：土方歳三、沖田総司

寝耳に水だった。

山南さんが：脱走。

悪い冗談だと思った。

だが：どこかで最悪の可能性が起きてしまったと感じた。

近頃：あれは水瀬が隊を離れるころだっただろうか、そのころからふさぎこむことが多かった。

でも、大丈夫だと、どこか油断していた。

「山南さんだから」と。

あの人はいつも無理して笑うから…。

あの人は博学で、剣の腕も確か、おまけに人格者。

誰からも好かれる類の人間だった。

試衛館時代はそんなあの人と自分との差にひがんでつんけんした態度をとることもあったが、あの人はどこまでも「いい人」だった。

”君はどこまでも熱い魂を持っているね、まるで戦国の世の武士のようだ”

そんな俺にあの人はしみじみとあの毒気を抜かれるような笑顔でそんな風に言うもんだから、素直に慣れなくて”百姓の俺に皮肉かよ”と毒をこめて返してやったら、あの人は気分を害した様子もなくこう言った。

”土方君や近藤さんと一緒なら形骸化した「武士」ではなく、真の「武士」になれると思ったんだ。

志のためにどこまでも走っていける武士にね。”



俺は”よせやい、恥ずかしいこと言ってるじゃねえ”と返すことしかできなかったが。

愚直でまっすぐな近藤さんがいる。

人格者で穏やかな山南さんがいる。

だから俺は鬼になれる。

汚ねえことも、残忍なことも…どんな泥だっつかぶっていける。

あんたがいなきや悪ぶれねえんだよ、山南さん。

この前も屯所の移転の件で話していて意見が対立したが、どんなに意見が違っても俺はあの人を信頼していたし、あの人もそうだと思っていた。

だが…違ったのか？

追い詰めていたのか？

俺が…新撰組が…あんたを苦しめていたのか…？

総司には「大津まで行って山南さんを見つけられなかったら戻ってこい」と言い、追いかけた。

あいつならば、その真意を汲み取るだろう。

山南さん、どうか帰ってくるな。

戻ってきたら…俺は副長として、あんたに切腹を命じなければいけなくなる。

だから…頼む。

俺は外をちらつく風花を見ながらただ祈っていた。

\*

どうか、居ませんように。

私は大津に馬を進ませながらただ一心に願っていた。

”大津まで”

それが土方さんの、近藤先生の精一杯だから。

私は道草を食いながら殊更ゆっくりと馬を進ませた。

今朝、山崎さんが急に屯所に来た時、もう山南先生は屯所を出た後だった。

なぜ山崎さんは山南先生のことを知っていたのか聞くと、「水瀬が歴史を思い出したゆうたんや。」と小声で耳元で言った。

…山南先生が脱走することは歴史として後世に伝えられているのか

…。

私は殊更重い気分になった。

「総司！」

え？

私は思わず顔をあげた。

大津の関所の前にある茶屋に、

…山南先生がいた。

山南先生は笑っていた。

穏やかで優しい、いつもの山南先生だった。

「…んで…なんで居るんですか!？」

なんで…この関所で引き返そうと思っていたのに…。

なんでよりもよりによってこんなところに居るんですか…!?

「ふふふ、遅かったね。」

それよりもこの団子なかなかうまいんだ。総司も食べなさい。」

山南先生はそれには答えず、笑って団子を差し出した。

「…行ってください。」

私は山南先生の手首をつかみ、喉から声を絞り出して言った。

「え？」

「お願いですから！近藤先生も土方さんもそれだけを願っています

！だから…!!」「総司」「

山南先生は小さく笑って私をさえぎる。

「これは私のけじめなんだよ。武士としては未熟にも揺らぎ続けた

この私だが、最期くらいは武士として逝きたい、それが私の願いだ。

「

山南先生は穏やかで、でも揺らぎのないまっすぐな目をして言った。

「そんな…!!」

私は食い下がろうとすると、いつになく山南先生に厳しい目で見つ

められる。

「総司、君は武士だろう。近藤さんを守り、土方君を支え、共に走

ると決めているのだろう？」

ならば惑うな、揺らぐな。」

「!!」

武士…その一言で、私は身がぴりりと引き締まるのを感じた。

もう決めている。

山南先生は自分の往く道を決めている。

でなければこんな風に微笑めるはずがない。

それは凜とした静謐。

冬の道場の空気のようにだ。

何者も侵すことのできない神聖な精神の世界。

「…さあ、食べなさい。本当においしいから。」

山南先生は子供をあやすようにみたらし団子の皿を私に差し出した。  
「…いただきます。」

私は小さく笑ってひと串口に運ぶと、それは優しい甘さで、確かにうまかった。

でも私は何も言わずに団子を口に運び続けた。

何か一言でも発してしまつたら何かがあふれてしまいそうだったから。

「総司」

「はい」

私は口にはおぼつたまま顔をあげた。

「ありがとう…。」

「…」

私は無理やり笑って頷いた。

私たちの願いと、山南先生の願いは別のところにある、それはもう決して交わることはないのですね。

でも私は泣きませんよ。揺らぎませんよ。

…武士ですから。

はらはらと風花が舞った。

空は哀しいくらい澄んでいるのに…

こんなときに降る雪を風花と言うのだと、教えてくれたのも…先生でしたね。

あれはいつのことでしたっけね？

その時におっしゃってましたよね。

風花が舞う空の色はまるで、新撰組の隊服みたいだと。

切腹袴のごとく潔いあさぎ色ですね。

私の一番好きな色です。

さあ、屯所に戻りましょう。

## 第十章 4 決めた道、笑顔だけを覚えていられるように

山南先生は結局総司につかまったと山崎さんが言った。

あたしは屯所には入れないから、屯所から少し離れた手前の橋のたもとで待っていた。

山崎さんに屯所の近くに行くのなら他の隊士にみられたらまずいから、

女の着物を着て行けと言われ、お梅さんからもらった着物に初めて袖を通した。

紺色に小さな桜の小花模様、白い帯。

髪には斎藤さんの簪をつけた。

角を曲がって歩いてくる人影を見つけたあたしはもどかしくて駆けだした。

足に着物の裾が絡みつく。

たくしあげて大股で走りたいのを我慢して小走りでその人のもとへ行く。

総司と並んで山南先生は歩いてきた。

総司は馬を引き、その横をゆったりとどこまでも穏やかな様子で山南さんは歩いてくる。

その表情は晴れ晴れしている。

そして総司も悟ったようなそんな表情で笑っていた。

あたしは屯所でいつもみられた風景に泣きそうになった。

山南先生…もう決めてるんですね。

何もかもを。

「山南先生！総司！」

二人はあたしに気付くと同時に目を見開いた。

「まこと…！」

「やあ…これは…水瀬君なのかい？驚いた。すっかり別嬪さんになつて…誰かと思つたよ。」

山南先生はきゅっと目を細めて言った。

「先生…」

あたしは口を開くけれど何も言うことはできなかった。

「君にも心配をかけたね。すまない。」

山南先生はあたしの肩にぽんと手を置いた。

そのいつも通りの山南先生の様子にあたしはポロリと涙がこぼれる。

「ダメだよ、せつかくきれいにお化粧してるのに…涙で流れてしまふ…。」

先生は子供をあやすみたいにあたしの顔を覗き込み、背中をとんとんとたたいた。

「先生…明里さんは…知ってるんですか？」

「…。」

何も言わない。

明里さんは知らないんだ。

「総司、少しだけ時間をいいかい？水瀬君と話したいんだ。」

「…はい。」

総司は小さく笑ってそこから少し離れた木の下に腰を下ろした。

「先生…切腹するつもりなんですか？」

どんな答えが帰ってくるのか、もう分かりきっていた。

なのに、聞かずに居られない。

「これはけじめなんだ。最期くらい武士として死にたいんだ。」

死を悟りきつた人の笑顔は何でこんなにも澄んでいるのだろうか？

「武士として生きることができないんですか?!」

あたしは山南さんの袖をつかんだ。

「君は…新撰組を守りたいから隊を抜けると言ったね。守りたいものがあるから、自分はこの道を選ぶのだと。それを見たとき、私はもう決めていたんだ。私も自分の最期はこんな風に潔くあるうとね。君の凜とした潔さ、決して傷つかないと言ったあの靱さ、まぶしかった。

私の攘夷の思想が新撰組の誠と違ってきてしまっていることについては一分の後悔も、間違いでないと思っっている。ただ、それでも…私は新撰組が好きなんだよ。人情家のまつすぐな近藤さんも、不器用だが熱い魂を持った土方君も、みんな生涯の盟友だと思っっている…。

彼らにはどこまでも走って行ってほしいんだ。

伊東さんは私を取り込もうとしている。

彼の思想には共感できるが、私の心はやはり新撰組と共に有るのだよ。私の存在が新撰組の毒になりうるならば、私は喜んで身を引く。これは私の選んだだけじめなんだ。」

「!」

”心は新撰組と共に”

あたしは同じ状況になった時、やっぱり山南先生と同じ道を選択するだろう。

自分の譲れぬ志、仲間、そのどれもが大切で…だからこうするんだ。

…明里には言っていないんだ。

でも、彼女ならきつと大丈夫。

水瀬君、すまないね。明里を見守ってやってくれ。」

「そんなの…勝手です!あたしじゃだめです!山南先生じゃなきゃ、どうやって伊東参謀から守るんですか!」

「私が居なくなつたあと、わざわざ人質に手を出すほど彼は暇じゃないよ。」

自分の命のことなのに何でこんな風にひょうひょうとしていられる



の？

「先生…！」

「そろそろ戻らねばね。おい、総司！待たせてすまん。」

山南先生は伸びあがって大きく手を振り総司を呼んだ。

総司は何も言わずほほ笑みをたたえたまま頷いた。

山南先生は去り際にこちらを一度だけ振り向いて茶化すように言った。

「今日の水瀬君は本当に綺麗だね。まるで花嫁のようだ。」

山南先生がいつか言っていた。

”君の花嫁姿が見たい”と。

あれはいつのこと？

まだ2日しか経ってないのに…。

瞬きした瞬間に涙が一つこぼれた。

もうこれで二度と会えない。

ならば笑おう。

山南先生があたしの笑顔だけを覚えていてくれるように。

先生は自分の誠を貫いて往こうとしているんだ。

だからあたしは精一杯の笑顔で見送ろう。

「山南先生…！」

あたしは手を口に当てて先生を呼んだ。

先生はちょうど土手を上がりきったところでこちらを振り向いたの

であたしは大きく手を振った。

あたしは精一杯の感謝をこめて笑った。

目を細めた瞬間に涙に夕日が反射してキラキラ光った。

山南先生は何も言わず笑って手を振り返す。

そして背を向けて去って行った。

あたしはその後ろ姿が見えなくなるまでずっとてを振り続けた。

冬の夕闇が迫っている。

川面にきらきら光る夕日はこの世のものとは思えぬほど奇麗で鮮やかだった。

## 第十章 5・格子戸の別れ

元治二年、二月二十三日、その日は朝から曇っていて、今にも泣き出しそうな空だった。

山南先生の切腹の日。

あたしは屯所にはいけないから、山南先生の最期には立ち会えない。あたしは朝から屯所の方にむかって手を合わせていた。目を閉じると山南先生の笑顔が思い浮かぶ。

”明里なら大丈夫。きつと見守ってくれ。”

あたしははつとして顔をあげた。

このままでいいのだろうか？

明里さんは本当にこのまま会わずに別れていいのだろうか？

あたしだったらそんな事後報告耐えられるだろうか？

気付いたときには何もかも終わっている、そんなの絶対嫌だ！

これは正しいのかどうかわからない。

でも何も知らないなんて良くない！

あたしは袴と単衣に着替えると、家を飛び出した。

山崎さんの声が聞こえた気がするけど構っちゃいられない。

北風になびく髪を走りながらくっくってポニーテールにすると島原に向かって全速力で駆けだした。

「はあ、はあ。」

島原大門にたどり着いたところであたしは膝に手を置いて呼吸を整えた。

しまった。

明里さんがどこの天神なのか分からない。  
島原は広い。

どこの置屋の天神なのか分からないと探しようがない。  
あたしってなんてうかつなんだ。

「あれ？水瀬はんやないの。」

ふと名前を呼ばれて振り向くとそこには浴衣を着て流し髪の雪乃さんが居た。

雪乃さんとは一年半前に芹沢先生に髪を切るように迫られたのをかばって以来だった。

「雪乃さん！」

「どうしはったの？こんなところで。」

「雪乃さん、明里天神って知らない？」

「明里はんは桔梗屋の天神やで？ほんに上品でええ人や。」

雪乃さんは小さく笑って言った。

「その人に会いたいの。」

「なんで急に……。」

雪乃さんはあたしの剣幕に押されてたじろぎながらも教えてくれた。

「お願い！」

「その角まつすぐ行ったら、桔梗屋よ。たぶんまだお支度してる最中や思っけど。」

「ありがとう!!！」

あたしは挨拶もそこそこに走り出そうとすると雪乃さんに呼び止められた。

「うちの知り合いやゆい。そうすれば会えるかもしれへん。」

「うん！」

あたしは桔梗屋にむかってダッシュした。

桔梗屋と書かれたのれんをくぐる。

「すみません！鏡屋の雪乃天神の知り合いですが、明里天神居らっしゃいますか？」

息を整えながら怒鳴る。

「なんやの？あんだ。」

ぼてつとした女将さんらしき女の人突然乱入したあたしを見て眉をひそめる。

「新撰組です。」

あたしはいらいらしながら言った。

「ひい！壬生狼！」

「お願いします。火急の用事なのです。」

こくこくと頷いておかみさんは明里さん呼びに行く。

ほどなくして明里天神が階段の下に降りてきた。

明里さんはしつとりとした美人で、切れ長の瞳が凜とした張りつめたような美しさを見せ、あたしの背筋を伸ばさせた。

昔おばあちゃんちで見た月下美人の花みたいな人。

「うちになんの御用どす？」

警戒したように明里さんが言う。

「私は…新撰組の水瀬と申します。」

「水瀬、つてあの水瀬はん？」

「え？」

「山南はんからいつも聞いてますわ。匂い袋えらんでもろておおきに。」

山南先生の名前を口にしたときの明里さんはこれまでの張りつめた空気から柔らかな春の日差しみたいに暖かい笑顔で笑った。

この人は本気で山南先生が好きなんだ。

あたしは胸が締め付けられた。

「明里さん、屯所に来てもらえませんか？」

「え？」

「お願いします。」

明里さんは一瞬目を見開き、でも何かがあったのだと悟ってこころ頷いた。

「承知しました。山南はんになんかあったんやね。」

明里さんは知っていたのだろうか？

一瞬目を伏せ、そしてあきらめたように小さく笑った。

その美しいけれどどこまでも哀しい笑顔は華香大夫の笑顔に似ていた。

\*

明里さんにはかごに乗ってもらい、あたしはその横をダツシユした。そんなに遠くないはずなのに、全然進んでないみたいに感じる。

足を泥に取られたように進まない。

畜生！！

かごやさんをせかしてあたし達は屯所までたどり着いた。

門番を蹴散らす勢いで迫る。

「あ、おい！！」

「つて水瀬！」

除隊されたはずのあたしが乱入したのを見てびっくりしているみたいだけど、今は構っちゃいられない。

「ごめん！見逃して！！」

あたしは明里さんの手を引いて屯所の庭をずんずん進む、とその時。

「水瀬？！」

永倉さんが不意に現れた。

「永倉さん！山南先生はどこです？」

「つてお前、この女は……。」

「早く！」

「こつちだ。」

永倉さんはあたしの剣幕に気圧されたようにその細い目を少しだけ見開くと、身をひるがえして中庭へと進んで行き、屋敷の奥の格子戸のついた小さな部屋の前に来た。

「山南はん！」

明里さんがいとおしい人の名前を呼んだ。  
とその時

パタン

格子戸があいた。

格子の間から山南先生の顔がのぞいた。

「明里！」

「山南はん！！逢いたかった！！！」

明里さんが格子ごしに山南先生の手を握ったのが見えた。

あたしと永倉さんはそつとその場を離れた。

せつかくの逢瀬なんだから二人きりになったほうがいい。

あたしがいるといろいろ面倒なことになるからと、永倉さんが言うてくれてあたしは屯所の外に出て

昨日山南先生と最期の別れをした河原まで来て枯れ草に腰を下ろし、目をきつく引きつむって膝に押し当てた。

さよなら、山南先生……。

そしてその一刻ののち、山南先生は総司の介錯で見事な最期を遂げた。

## 第十章 6・介錯、武士の涙：沖田総司

夕刻、重い曇天の雲間から血の様に赤い夕焼けが射し込んできた。切腹は夕刻か夜と決まっていた。

今日の朝、近藤先生と土方さんが脱走の真意について詮議したけれど、山南先生はただ笑って自分のけじめの問題だと言っただけだった。もう決めているのだ。

山南先生は。

昨日先生は屯所を出た時から、否、もうずっと前から己の死に方を決めていたのだろう。山南先生は己の誠を貫く為に死に往くのだ。けじめなのだといった山南先生の顔は死に往く覚悟をした者のそれで、凜とした静謐がそこにあるだけだった。その笑顔はなぜかまこととが時折浮かべる儂い笑顔に似ているきがした。そしてその時に悟ってしまったのだ。もう同じ道を歩くことは出来ない。そして道すがら介錯を頼まれたその頃にはもうそれがずっと前から決まっていたかのような妙な錯覚をしてしまった。

だから私は揺らがない。

最期の時を託してくださった山南先生に精一杯の感謝と尊敬をもつてこの役目を努めるのだ。

昨日まことと二人で話していた時山南先生は何を話したのだろうか？まことは未来から来ているから私達の最期を知っているのだと言う。それはなんと過酷な道なのだろうか。だから山南先生のこのことも知っていてどうにかして来るべき運命を変えようとしたのだ。

途切れ途切れに聞こえたのはまことの悲しいくらい必死にすぎる声だけだった。

でも別れる時にはもうまことは泣いてはいなかった。

精一杯の輝くような笑顔を浮かべて山南先生を見送ったのだ。

”あの子はなんて女子なんだろうね、彼女の誇り高い凜とした潔さがあったから私は今こうして自分の誠を貫ける。水瀬君に会えて本



当に…よかった。”

山南先生はこう言つて笑つた。

「沖田先生、時間です。」

「承知しました。」

わたしは正座を崩すと黒い羽織袴を身に付けると紐でたすきがけにして立ち上がった。

目の前の愛刀を手にし、部屋を出た。

垂れ幕で覆われた囲いのなかに入ると、一連の手順をふんだ。

山南先生は無紋の白装束に浅葱の切腹袴を身につけて静かに穏やかに微笑んでいた。

近藤先生と土方さんが並んでそこに居た。

これから死にゆくものと生きるもの。

昨日杯を交わした者が今日には彼岸のものとなる…。

この両者の道を分けたものは果たしてなんだつたのだろうか。

「近藤局長、最期に一言良いでしょうか。」

「うむ。」

山南先生は大きく息を吸つて、よく通る声で言った。

「此度は私如き者に切腹申し仕り真にありがたき幸せ。

我人生にて貴殿に出会えし事至上の喜びにてござればただ彼岸にて再び合間見える事約すのみにござり候。」

皆目を見開いて必死に拳を握りしめて耐えている。

「ふたさしにて頼み申し上げます。」

ふたさしはもつとも痛みを伴う切腹の仕方。

形だけの切腹が多くなっている今、この方法をとるものはほとんどいない。

「承知致した。」

ああ、この人は武士だ。

私は抜き身に水をかけ、八双に構える。

山南先生は白装束を割り肩を出す。

流れるような手つきで脇さしを取り、深々と突き立てた。

私はそれを確認すると、刀を振り下ろすその刹那青眼にした。

山南先生が前のめりになって倒れる。

ドサ

白石に血が染みて赤が目刺さる。

不思議と心は穏やかだった。

思い出すのは試衛館での泣きたくなくなるほど穏やかな光の日々。

「かの浅野内匠頭でもこう見事は果てまい……。」

近藤先生は目を伏せて声を震わせて言った。

土方さんは何も言わずに去って行った。

あの人は泣かない、否、泣けぬのだ。

でも大丈夫ですよ、山南先生。

あの人もまた武士ですから。

山南先生、彼岸にてお逢いしましょう。

待つて居たかのように空から氷雨が降ってきた。

きっとこれは泣けぬ武士たちの代わりに天が泣いているのだと思っ  
た。

## 第十章 7 氷雨

雨が降って来た。

音もなく氷みたいに冷たい雨が枯れ草に落ちてカサカサ音を立てる。あたしは薄暗くなった天を仰ぐと目に雨粒が当たって痛かった。

山南先生、逝ってしまったわけですね。

これはきつと天が代わりに泣いているのだと思う。

この屯所の中にいる多くの泣けない武士たちの代わりに。

土方さんも、総司もきつと静かに、心の内に全てを飲み込んでこの時を受け入れたのだ。

「水瀬！」

あたしは振り向くといつの間に近くまで来て居たのか、土手の上に斎藤さんが傘をもって立っていた。

「斎藤さん……。」

ザクザク

枯れ草を掻き分けながら斎藤さんが近づいて来てあたしに傘を差しかけた。

「見事な最期だった。」

ばた、ばた……

番傘に当たる雨音が妙に大きく耳に響く。

「そうですね。明里さんは……どうされてますか？」

あたしは一人残す事になった明里さんの様子が心配になった。

自分の自己満足で連れて来てしまったけどそれは果たして良かったのだろうか……。

「大丈夫だ。あの女はきちんと総長と別れを済ませる事が出来た。」

もうしばらくやすませてから永倉さんが送る。だから案ずるな。」

「きちんとお別れが出来たなら…良かったんでしょか。」

「なにも知らずに後で知らされれば、後悔が深まる。なぜ何も言わずに逝ったと行き場の無い恨みを持たねばならぬやもしれぬ。俺なら大事な人の最期を見届けたいと思うし、見届けて欲しいと思う。」  
斎藤さんはしつかりと頷いて言った。

「あたし…なんで止められなかったんだろう…」

あたしは歴史を知っていて、みんなが死んで行くのを黙ってやり過ごす事しか出来ないのだろうか、今更ながらそれが重くのしかかる。どんなに先を知っていても、あたしは未来を変えられない。

大事な人の死を止められない。

以前は歴史を変える事の方が怖かった。

でも今は歴史が歴史通り進む事の方が怖い。

歴史は連鎖と続く過去の一瞬一瞬の積み重ね。

だから誰かの死もいろいろな一瞬の積み重ねの結果。

気づいた時にはもう抗いようのないほどにその死は決まってしまうている。

いつから…？

悩んでいる予兆はあったのに、それを見過ごしたが為にこんな事になってしまったのだ。

あたしはこんな風にこの先やりきれない思いを抱えて生きて行くんだ。

「…水瀬にとつては…俺たちの事は過去の事かもしれないが、俺たちにとつては総長の事もまだ起きていない未来の出来事だった。だから”もしあの時”という概念は存在せぬのだ。お前の時代にどう伝わっているかは知らぬが、今己がここに居ること、己が生き抜いて来たこと、それが全てなのだと思う。」

だからその時の最善を尽くし、一瞬を精一杯に生きることしか出来ぬ。

その上で死が訪れるのならば、それもまた運命。

それに総長は幸せだったと思う。

己の誠を貫き、己の死に方を己で決めたのだ。

そして武士として見事に逝った、これ以上の幸せはあるまい。」

「斎藤さん…：そうですよね、あたし思い上がってました。」

人の生き死にを自分がどうにかできるなて、思い上がりもいいことだ。

あたしはあたしの最善を尽くすしか無いんだもの。

ぱた、ぱた…

「水瀬、お前はそのままが良い。お前は泣きたい時に泣いて、あとは笑っている。」

感情を殺さねばならぬ武士の代わりに、たくさん泣いてたくさん笑え。

ただそれだけで良い。もっともお前はそんなタマじゃないだろうがな。男に守らせない、武士の様に潔い。漢の中の漢。」

斎藤さんはそう言って呆れたように笑った。

「酷い！」

あたしは大げさに目を見開いてみたけど、斎藤さんがこんな風に茶化すなんて信じられないう気分だった。

気遣ってもらってるんだな。

そう思ったら、元気が出て来た。

「もう暗い。送ろう。」

「はい」

あたしたちは薄墨色の氷雨の中を歩き出した。

## 第十章 8・男の志、女の愛

明里さんから永倉さんを通してあたしのもとに手紙がとどいたのは山南先生の切腹から一週間経った時で、新撰組が西本願寺に屯所を移転することが決まった頃のことだった。

土方さんが移転を強行採決したらしく、幹部のなかでも時期尚早なのではないかという意見があつたくらいだと永倉さんが言っていた。永倉さんは試衛館派の幹部の中でも近藤先生に対して批判的な目をもつて苦言を呈したりできる人で、こういう人はすごく大切な存在だと思う。

ともすればトップに権力が集まりがちな組織に置いて自分たちの行動を客観的に見られることは腐敗を防ぐ為に絶対に必要だと思うから。

永倉さんはいつもは無精髭の無頼姿でお酒と女が大好きでなんて俗者だとおもうけど、たまにさりりといい事を言う。しかもそれはたいていものごとの真をついていて、それがこの人の本質なのだと思う。

どんなときでも的確に相手に、真を言う、でもそれは決して冷たいわけじゃなくて信頼と敬愛に基づくものなのだ。この人を見ると、ああ、大人だなんて思う。

「あの明里って女がお前と話がしたいって言ってたぜ。会いに行つてやれよ。」

永倉さんは手紙を渡しながら言った。

「そうですね。そうします。」

あたしは手紙を開けると、女らしい繊細で流麗な文字が書かれていた。

水瀬真実様

山南さんの最期の時に引き合わせていただき誠にありがとうございました。  
貴女のおかげで、ようやくあの人の真に近づけた様なそんな気がしています。  
もしご都合がよろしければ貴女に再びお会いしたいのですがいかがですか。

明里

ぱたり

涙が一粒こぼれ落ちて手紙に当たり、墨を滲ませて薄墨色に染めた。明里さん、どうしてこんなにも穏やかに、先生の死を受け入れることができたんだろう。

否、受け入れられた訳では無いのだ。  
でもそんな風に見えるのはやっぱり明里さんが凜として潔いからなのだろう。

\*

あたしはそれから一週間後、明里さんと清水寺で待ち合わせていた。清水寺は春を待ちわびる木々の中に幕末でも、現代でも変わらずその重厚な佇まいで京都の街を見守っている。

なに建築って言うんだっけ？  
釘を一本も使わないんだっけな？

修学旅行で行ったのになあ、あの頃は、全然歴史とか興味なかったし。

清水寺っていつから建ってるんだろう？

もっと昔は清水の舞台から屍体を投げ捨ててたっっておじいちゃんが

言っただけど本当だろうか？

あたしはそんな取り留めもないことを考えながら、春めいてきた浅葱色の空を見上げた。

この空の何処かにきつと山南先生がいらっしやる。そう思うと穏やかで優しい気分になれる。

「おまたせしました。」

そこには略装姿の明里さんが微笑んで立っていた。

薄い黄緑、それは芽吹きの色で、目になんとも鮮やかだった。

喪服とはいかない物の地味な色の着物の方がいいのではないかとチラリと思っただけけれど、そんなあたしの表情を読み取ったのか、小さく笑って言った。

「山南先生とうちは表立っては何んのつながりもあらへんかったから、客と遊女やゆうだけで。」

せやから悲しむことも許されへんのや。」

「！」

その笑顔は儚く、涙一つ零さなかったけれど、笑えば笑うほどに心から血を流しているのが見える様だった。

好きな人が亡くなってもそのことを表立って悲しむことすら許されないなんて…そんなのたまらない。

「水瀬はん、今日は有難うね。お礼が言いたかったんや。」

「お礼だなんてあたしなにも…。」

あたしは口ごもる。だつてこんなにつらい思いをしている明里さんに何も言うことができない。

「あの人と最期に会えて気持ちと言えたこと、ほんまに嬉しかった。山南はんが死ぬつもりやゆうことは薄々気づいてた。でもあの人は何も言わんで逝くことを決めてはったからうちも知らんふりするしかなかったんや。もう道を決めてはるから、うちは笑って送り出すしか無いやん。笑顔だけを覚えていてくれればそれで良かったから。」



せやから最期に会えてよかった。笑った顔見せられて良かった。

おおきに……。」

明里さんは染み入るような優しい笑顔を見せた。

武士は感情を殺して涙を殺して生きねばならないの運命。

そんなのなんて辛いんだろうつて思ったけど、その武士を愛す女性  
は、自分の想いや苦しみの他に更にそういう武士の運命の全てを受  
け止めてまるごと愛すんだと思った。

男たちは辛い思いをさせないように、しないように、愛する女性を  
遠ざける。

でも女たちはそんな男の志も不器用な思いも全部受け止めてどこま  
でも鮮やかに笑って死への旅路へと送り出す。

女の人はこんなにも強い。

「ほんまに武士つちゅう生もんは阿呆やなあ。誠つちゅうものた  
めにやせ我慢ばっかりして、死ぬ為に生きてるんかって言いたなる  
わ。……でもそんな人やなかったらここまで惚れへんかったて思うわ。  
うちも相当の阿呆やつちゅうことやな。」

明里さんは春の空を仰いで泣き笑いみたいに自嘲気味に茶化すよう  
に笑って言った。

その笑顔がなんだかやりきれなくてあたしは思わず明里さんの背中  
を抱きしめた。

「明里さん、泣いてください。もう、大丈夫ですから……。山南先生  
はきつとわかってくださいますから。」

「ほんまに……？山南はん……もう泣いても……ええ……？」

声が震えたと思ったら、あたしの着物を掴む手に涙の雫が明里さん  
の形の良い頬を伝ってこぼれ落ちた。

「先生は本当にお幸せだったと思います。だって愛した人に最高の  
笑顔をもたらって逝けたんだから……。」

明里さんは一瞬目を見開き、みるみる内に目に涙を溢れさせると、  
そのあと子供みたいに泣き出した。

「なんで……死んでしまったんや……！！山南はん……！！山南はん……！！山

南はん！！」

きつと明里さんにはこういう時間が必要だったんだ。  
あたしはただ黙って背中をさすり続けた。

## 第十章 9・恋の形、星の数だけ

夕焼けで朱に染まった空が夜の群青に覆われるまで明里さんは泣き続けた。

凜として少しの涙さえ見せない強い女性だと思っていた。

でも、それは本当に割り切っていた訳じゃなくて、大好きな人の為に、ただ笑顔だけを心に刻んでもらう為に、全てを心に封じ込めて我慢していたんだ。それを人に気づかせないくらいに明里さんは山南先生を愛していたのだ。

だから止められなかった、否、止めなかったのだろう。

山南先生の全部を、そういう武士としての不器用で馬鹿馬鹿しいくらいの潔い生き方も全部全部愛位していたから。

あたしはそんな風にはなれない、やっぱり大好きな人が志の為であっても、死ぬことがわかってしまったら、全力で止めてしまう。無駄だとわかっていても、決めていても、やっぱり死んで欲しくないから。

明里さんみたいに我慢してあんなに綺麗に笑うことなんて出来ない…あたしはやっぱり中途半端なんだろうな…。

明里さんは泣きつかれて目を腫らしていたけれど、不思議とつきもの落ちたようなすつきりとした顔をしていた。

もうすっかり日が落ちて空には一番星が輝いている。

明里さんはその夜空に顔をあげ、そして言った。

「もう大丈夫や。山南はんはここに居てる。」

「明里さん…。」

「また泣いてしまうかもしれんし、まだまだやっぱり会いたいと思うけど…彼岸までの辛抱やな。」

明里さんはそう言って笑った。

その笑顔は凜としていて一点の曇りもない、その人の死を超えてもなお愛す覚悟を決めた人のそれだった。お梅さんの強さとも、華香太夫の強さとも、違うでも凜としてつよい綺麗な女性。

「うち、ほんまは山南はんの後を追おう思ってたん。」

「！」

「でもうちは生きる。山南はんの分までとかそんなんじゃない、ただ生きなあかなあと思うただけなんやけど。うちはこれからきつと幸せになる。自分に恥んように、山南はんを好きになった自分に恥んようにきつとつよいきる。」

ああ、山南先生、明里さんは大丈夫です。

きつと眩しいくらい、凜と美しく幸せになります。

「明里さん、きれい……。」

あたしがポツリと言つと、明里さんは顔を歪めて吹き出した。

「なんなん？藪から棒に。うちは天神なんやからきれいで当たり前や。」

勝気に少し鼻をつんと上げて言った。

これがきつと本来の明里さんなんだと思った。

あたしはこの芯の強い勝気な女性がだいすきだと、嬉しくなる。

「水瀬はん、ほんまありがとう……！」

明里さんはあたしに向き直り、どきりとするくらい艶やかで輝く笑顔を見せた。

きつと大丈夫、そう思った。

\*

明里さんを送るともうすっかり夜になって街の人通りも少なくなっていた。

あたしは島原大門をくぐって外に出ると、そこには見慣れた人影。

「よう、水瀬。こんなところで会うなんて奇遇だな。」

永倉さんが軽く手を上げる。

「永倉さん！来てくれたんですか？」

「偶然、遊びに来たらお前が山南さんの女と連れ立って歩いてたからな。」

嘘ばかり。

きつと心配して見ていてくれたんだろう。

この人のこんなさりげないところがだいすきだと思っ。

あたしたちは暗い夜道を提灯の灯りを頼りに山崎さんの自宅へと向かって歩いてた。

「永倉さん、明里さんは大丈夫です。きつと幸せになりますよ。」

「ああ、そうだな。」

永倉さんは穏やかに、笑った。

！

あたしはその時気づいてしまった。

永倉さんのその笑顔には明里さんへの気遣いと優しさに満ち溢れていて…

ああ、明里さんを好きなんだ、そう思った。

「永倉さんは…」

あたしは口をつぐんだ。

だってそんなこと聞いたところで、あたしはなにも出来ないし。

自分の好奇心を満足させるために、そんなこと聞くべきじゃない。

「水瀬は意外にするどいよなあ。俺も総司や斎藤のこと言えねえな。」

永倉さんは少し笑って続けた。

「別に今は言うつもりもねえしな。まあ、山南さんを思い出にでき

るくらいまでになってそんなときまだ俺がおっ死んでなくて、まだ好きなら言うかもな。」

永倉さんはあっけらかんと笑っていたけれど、やっぱりさみしいだろうな。

あたしたちは山崎さんの家の近くまでくると、ここでという感じで離れた。

「永倉さん！応援してますからね」

あたしは永倉さんの耳元にこっそり耳打ちした。

「おめえみたいながきに応援されたくねえよ。きちんと自分の恋のけじめつけやがれ！！」

永倉さんは一瞬びっくりしたような顔をしてからその後は顔を赤くしてあたしの頭をワシヤワシヤとかき混ぜて、背中を向けて去っていった。

この世には人の数だけ恋がある。

きつとみんな同じように虹を掴む思いで恋をしている。

武士も、農民も、女も…みんなみんな苦しい思いとつらい思いをしながらそれでも恋をし続けるんだと思っただら当たり前なのに、なんだか嬉しくなった。

## 第十一章 1・新たな仕事

あれからめまぐるしく時が過ぎた。

新撰組はその本陣を西本願寺に移転し、土方さんと伊藤参謀が東下して新しい隊士を募集し新撰組はその人数を100あまりに増やした。

世間と言うと年号が元治から慶応へと変わり、京都の街では相変わらず攘夷の名の下に天誅といつての辻斬りが行われていた。

季節は流れ、あつという間に桜が散り、鼓膜の震えが感じられるほどの蝉時雨が止んだと思ったら、何時の間にか赤トンボやオニヤンマが野山を飛び回るようになった。

あたしは山崎さんとうまく暮らしている。つかず離れず喧嘩したりしながらもパートナーとしてうまくやってると思う。監察の仕事も中々慣れて来て不逞浪士の摘発の為に張り込んだり隊士の素性を調べたり中々忙しい毎日を送っている。

ここでのお倫という呼び名もすっかり違和感がなくなってもう山崎さんも私のことを水瀬と呼ぶことはなくなった。

新撰組の誰ともあつてはいない。

ただ街に出た時に巡察中の皆を遠くから見ただけだ。

どうぞご無事で。そんな風に心の中で思うだけだった。

「お倫、仕事やで。」

「はい」

山崎さんが仕事の顔をしている。

あたしも気を引き締めた。

今回の仕事は長州浪士の会合場所と思しき場所に張り込むのだということだった。

ただその場所というの盆屋という場所らしいのだけど、宿屋みたいなもんやといったまま山崎さんは教えてくれない。しかも山崎さんと夫婦役になって張り込むのかと思ってたら、山崎さんは近藤先生と広島出張に出かけるらしいので、総司と組んで今回のミッションをする事になった。

斎藤さんか総司とという事だったけれど、普段あまり殺気を見せない総司の方がいいと山崎さんは判断したらしい。

筋書きとしては、あたしと総司は夫婦で子宝祈願のたびの途中で体調を崩して盆屋に世話になる事になったという筋書きだった。

子宝って…なんか生々しいと思ったけど、リアルに見えるから大丈夫だと言われた。

しかも総司と夫婦役なんてちょっと気恥ずかしい。

でもこれは仕事な訳だしとにかくつつがなくやらないと。

でも動揺は総司の方が激しくてなんだかわいそうになった。

「私は密偵なんて向かないのに…」

「大丈夫だよ。夫婦役はよくやってるから。」

狼狽する総司にあたしはそんな明後日の方向の答えしか出来なかった。

そうしてあたしたちはそれから一週間後総司と夫婦になって京の外れの盆屋とやらに出発した。

\*

「この辺になるともう家もまばらだね。」

「うん…。」

「ここを抜けると東海道に続くんだって。」

「うん…。」

あたしはこっさりため息をついた。

さっきからずっとこんな感じだ。



なにが気に入らないのかうん、しか言わない。

飯にも夫婦なんだからもつと中良さげに見せないと、現場に入った時にぎこちなくなる。

総司はあたしに目を向ける事なくずんずん進んで行く。

女性の着物に慣れたとはいえやっぱりそんなにはやくは歩けないのにあたしは競歩並みの早さで総司を追いかけるのだけどどんどん離れて行く。

小走りになって追いかけたその時、草鞋の緒が音を立てて切れた

あたしはまえのめりになって地面に手をつく。

砂利が手のひらをこすり、ピリリとした痛みが走った。

ああ、こんな時に！

あたしは眉を顰めて鼻緒を直そうとするのだけれど、なかなか上手く行かない。

「まこ…お倫、すまない。気がつかなくて。」

何時の間にか総司があたしのまえにしゃがみこんで困ったように笑い、草鞋を直してくれた。

あたしはその間近くの石の上に腰掛けて総司が器用に草鞋を直すのを見ながら思い切って口を開いた。

「ねえ、何怒ってるの？あたしは自分に与えられた仕事をきちんとやりたいと思ってる。だからなんかあるなら言っただけ欲しい。総司とはわだかまりなんて残したくないから。」

総司はまじまじとあたしの顔を見つめてからきゅっとその切れ長の目をまたすこし細めて困ったように笑った。

「ごめん、そんなつもりじゃないんだ。ただ夫婦役なんてちょっと気恥ずかしいし、まして盆屋なんて…と思って動揺して黙ってしまった。きちんとするよ。」

盆屋ってそんなに動揺するところなんだろうか？

「ねえ、盆屋って何？」

「！」

総司は目をいっぱいに見開いて絶句し、みるみるうちに顔を赤くした。

「山崎さんは行けばわかるって。」

「あのね…盆屋っていうのは…男と女が…その…する…。」  
「ごによごによと歯切れが悪くいう。」

男と女が何を…

！！！！

それに気づいた瞬間顔に血が登るのを感じた。

ああ、総司が言い淀むのも無理ないかも…

盆屋っていうのはラブホの事なんだ…。

ああ、あたしってばなんて無知。

「ごめん、知らなくて…そりゃあ嫌だよな。」

「あー、まことは未来から来たんだった。すぐ忘れちゃうんだよ。こっちこそごめん。」

でもまことが言うみたいになんと任務遂行しなきゃね。」

そう言っつて総司は小さくため息をつくと直してくれたあたしの草鞋をおき笑っつて手を差し出した。

「行きましようか、お倫。」

「はい総司様。」

あたしは照れくさかったけど総司の手をとって歩き出した。  
今からあたしたちは夫婦。

絶対ミツシヨウ成功させる！

## 第十一章 2・動揺：沖田総司

まことと組んで盆屋に密偵なんてどんな顔をすればいいんだ。

だいたい私は嘘をつくのも演技もましてや夫婦の真似事なんてできるはずがないのに。

まことは平気なんだね。こんな風に好きでもない男と夫婦の真似事をする事も。

そう考えたらしばらく会わぬうちにまことが遠くなってしまった気がして、それが無性に焦らせた。

そんなふうに考え事をしていたら、まことを置き去りにしてしまっていた。

どうやら草履の鼻緒が切れて難儀をしているらしい。

私は自分の事ばかり考えてまことを顧みていない。

まったく未熟だ。しっかりとしろ！

あのあとまことが私と向き合ってくれたおかげで、自分の腹を据える事ができた。

そして盆屋についてまったく知らなかったようで、そこについては絶句していた。

なんだ、何も変わらないじゃないか。

どんなに美しい若妻姿になっても、どんなに辛い体験をしても、きっと彼女の中には何も変わらぬ真がある。何を恐れたのだ、沖田総司、武士ならば、きちんと人の真を見極めよ。

あの時、山南先生を介錯したときに誓ったはずだ。

決して揺らぐ事なく、武士としてあの人のように潔く生きると。

それから私たちは会えなかった時間を埋めるようにたくさんのお話をした。

そしてこの任務を成功させようと誓った。

そうこうしているうちに遂に例の盆屋の手前まで着いた。

ここではまことが急に具合が悪くなってどうしようもなくなり、やむなくへやを貸してもらおうという筋書きで潜入する事になっている。まことは目を伏せて苦しそうに浅い息を繰り返した。

なるほどずっと監察の仕事をしていただけあって、なかなかの演技だと思ふ。

私はまことの膝と背中に手を差し入れ抱き上げる。

まことは小声で「重くてごめん」と言っただけど全然重くなんかない。確かにおなごにしては背も高いけど、冬物の厚い着物越しでも私の手に華奢だけど柔らかな輪郭が伝わって来て心臓が跳ねた。

私は動揺を押し隠して、盆屋の前までくると、戸の向こうに向かつて声をかけた。

「すまぬが誰かおらぬか。」

ぱたぱたと走ってくる足音。

ガラリ

木格子の戸が開くとそこには、恵比須顔の人の良さそうな女が立っていた。

「どうなさいました？」

私は努めて平成を装い、打ち合わせした通りの事を言った。

「拙者は水瀬総司と申す者ですが、子宝祈願の道中妻の倫が持病の癩に倒れてしまい難儀をしておるのです。どうか床を貸していただけないでしょうか？」

私は切羽詰まった様子で一氣にまくし立てた。

腕の中ではまことが胸に手を当てて浅い息を繰り返している。

「そらあ、えらい難儀ですなあ。はよ入りやす。」

女将は細い目を目一杯見開いて私たちを招き入れた。

「恩に着ます。」

私はすこしだけ頭を下げると盆屋の中に入った。

女将は離れの方に私たちを案内すると、襖を開けた。

そこには、広めの布団に枕が二つ並んでいた。

「今日はお客さん居てはらんさかいにゆっくりお休みやす。奥様の帯緩めて浴衣に着替えさせて差し上げてください。あとでお腹にええもん作りますさかい。」

「お言葉に甘えます。ありがとうございます。」

女将の気配が遠のいたのを感じて私は小さく息を吐いた。

「第一段階成功だね。ほかにお客さんがいないってホントかな？調べてみる価値ありだね。」

まことがほとんど声を出さずに言った。

私は小さく笑って頷く。

女将に嘘をついた様子はないが調べてみる価値はあるだろう。

「にしても…エロい…この布団。」

まことは呆れたように蒲団の端をつまんで眉をひそめた。

「えろい…？」

まことが発した言葉がわからなくて繰り返す。

「え…！ああ、なんていうか扇情的だ…だって真つ赤な布団に枕が二つなんて…。」

まことは無意識に未来の言葉を発したのか顔を赤くして恥ずかしそうに笑った。

私も無意識にその行為を連想して赤が移った。

確かに緋色の布団は扇情的だ。

私は恥ずかしくなって顔を背けた。

「さてと、着替えますね、総司様。」

まことはわざと明るく言って着物の帯を解きだした。

私は慌てて後ろを向いた。

衣擦れの音がへやの中に妙に大きく響いた。

「総司様。」

まことの声に振り向くとそこには、白の襦袢一枚になったまことが

いた。

「！」

白い肌が襟元から覗き、薄い布のせいで、身体の線までがくつきり見て取れた。

ドクン

私は顔に血が上るのを感じたけど、まことは少し眉を寄せただけで後ろを向いて言った。

「申し訳ありませんが髪紐を解いてくださいますか？」

病人だから、髪を下ろすのは自然なのかもしれないけど、正直勘弁して欲しい。この姿でうろつろつされたら心臓がもたない。

私は黙って髪紐を解くと長船に結び上げていた髪が扇の様に背中に落ちた。

髪：こんなに伸びたんだな。

まことの髪は背中の中半ばまでを覆うほどに伸びていた。

「ありがとうございます。」

そう言うと、不意に私ににじり寄って耳元に口を近づけて言った。

「（夫婦なんだからいちいち動揺しないでよ、あたしだって恥ずかしいんだから。）」

「！」

まことは茶目つ気たつぷりに目を細めて恥ずかしそうに顔を赤らめて言った。

確かにそうだ。こんな事で動揺していたら、この先の任務は務まらない。おなごにこんな事をさせてるんだから私が揺らいたらまことがかわいそうだ。

「じゃあ、あたしはちょっと休むから情報収集よろしく。」

まことは髪を横で結びながら小声でいうと病人らしくそのまま緋色の布団に入って少し立つと規則正しい寝息が聞こえた。

私は女将に会うためにふすまをそっと開けて、廊下に滑り出た。ため息を一つつく。

動揺せずにはいられない。

しばらく会わぬうちにまことはますますきれいになっていて、目を奪われずにはいられないのだから。

この気持ちは恋なのだろう。

どこまで行っても報われない虹を追いかけるような恋なのだ。

まことと離れているとき、彼女を愛おしく思うことはあっても、こんなに激しい衝動を覚えたことはなかった。なのにいざ再会したら、胸を締め上げるような熱い感情がこみあげてきてどうしようもなくなる。

ただ同じ空の下にいらればいいと、そう思っていたのに。

私はこんなに未練たらしい男なのだ。

私は自嘲気味に口の端をあげて盆屋の女将のもとに急いだ。

第十一章 3・君：愛おしくて：沖田総司

眠れない。

私はお隣のまことを起こさない様に少し身を動かした。なんで一緒の布団に入ることを承知してしまったんだ。私は自分の選択を激しく後悔している。

それは時を遡ること一刻ほど前。

今日のところは不審な動きがないので、床をとって体を休めることのできただけけれど、私たちは今夜の床をどうするかでもめていた。病気なんだから、一人で休むべきだという私と、連日一人で床で寝るのは体力的にも心配だし、夫婦と銘打っている以上不自然だと言うまこと。

結果的には私が折れたわけだけど、襦袢一枚でしかも寝相悪く私にくっついてきたりするまことの隣で眠れるはずがない。挙げ句の果てに高い枕は眠れないって言って、布団に直接頭をおいて眠っている。

その横顔は穏やかで、長いまつげが頬に影を落とす。整った鼻筋とふっくらとした口元を月の光が照らす。神々しいくらいに完成されているのに、どこかあどけなくて愛おしい。

「ん…」

私に背を向けて寝返りを打った。

髪が背中に滑り落ちてその拍子に月明かりに照らされたうなじが目を射抜き私はいたたまれなくなってごろりと上を向いた。

天井の木目を何ともなしに見ながら取り留めのないことを考える。

夫婦か…。

なんて言うか、くすぐったくて少しだけ胸にチクリとしら痛みが走



る。

どこまで行ってもそれは偽物で、任務上仕方なくのことなのだけれど、「妻」その永遠に言うことは出来ないその一言を口に出せたとはいわなくもあり、嬉しくもあつた。

別に夫婦になりたいなんて思ったことはない。

自分にとっては新撰組が、近藤先生が一番で、そのために死ぬと心に決めている。

ならば俗世の末練になりうる妻や子などいらぬ。

なのに、このまがい物の夫婦という器にどこか喜んでいる自分がいた。

私が身じろぎした拍子に手がまことに当たりまっげを震わせて目を薄く開けた。

「ごめん、起こした？」

「ん…眠れない？」

まことはかすれたような声で私に問う。

「少し…おなごと床を一緒にするなんて今までなかったし。」

私は照れ隠しに小さくつぶやいた。

「あたしは…初日の夜を思い出すよ。」

ふふふ、総司のへやでやつぱり布団はひと組み敷かなくて一緒に寝たね。

あれからもう二年半以上経ってるなんて信じられない…。」

誰にともなくそう言うと、ゴロリと私の方を見てくすぐすと小さく笑った。

その頬に小さなえくぼを見た瞬間、私は鼻の奥がつんと痛くなり、急に胸に突き上げるような鈍い痛みが走った。

私は堪らずにまことの華奢な身体を抱きしめた。

「！」

まことが息を呑んで身体を強張らせたのを感じたけど私も自分がし

たことが信じられなかった。

ただこの衝動をどう言い表せばいいのかわからなかった。

ただ狂おしいほど愛おしくて、たまらない。そんな感情…。

ドクンドクン…

お互いの心臓の音が身体を通じて聞こえる。

ただこのまま時間が止まってしまえばいいと感じる。

どれくらい時間が経ったのかまことが身じろぎしたのを感じ、私は  
我に返る。

「ごめん…！」

私が慌てて身体を離そうとした瞬間、

「！」

信じられなかった。

まことは私の背中にぎこちなく手を回して優しく背を叩いた。

それは記憶に朧げな母の手ににいて、私の涙腺をさらに緩ませた。

まことは何も言わなくて…ただ一定に私の背を叩いた。

まるで幼子をあやす母のような優しさで。

でもこの沈黙が全てを語っている気がした。

きっと彼女は誰の想いも受け取ることがないだろうと。

それは例え土方さんであっても、きっと結ばれようともしないだろうと。

彼女は私たちと共に志のもとに走ることを決めている。

だからこんなにも凜と澄んだ微笑みを浮かべられるのだ。

私は妙に納得した。

彼女の笑みが山南先生の最期の笑みと似ているのを。

死の際にいるからじゃない。

揺らぐ事なくその道を決めているからなのだ。

この凜とした笑みは道を決めた者だけがもつものなのだろう。

もしまことに怯えられたり怖がられたりしたら、きっと私は自分の想いを伝えてしまっていた。

無理やり自分の気持ちを押し付けていた。

でもこの優しい沈黙はまこと決意を感じさせ、けれども愛おしさなお増した。

愛してる…と思う。

この狂おしいほど激しくて、でも優しくて柔らかかなこの気持ちを人は愛と呼ぶのだろう。

願わくは幸せにしたい。

でもまことをおなごとして幸せにすることよりも今は共に走れることの方が何倍も嬉しいと思う。

私は再びまことに向き直り今度はそっと抱きしめた。

激しい感情じゃない。

ただただ愛おしくて大切に、今この瞬間の幸せを私はきっと生涯忘れないと思った。

## 第十一章 4・愛でもなく、恋でもなく

総司と一緒に寝ようとしたのはこれまでの関係を意地でも続けるためだった。

あえて離れたらきつと気まづくなってきたと普通のふりが出来なくなる。だから、平気なふりをして寝た振りをした。

自分が総司の気持ちから逃げてるのは嫌でも感じている。ずるいと思う。卑怯だと思う。

でも壊したくなかった。

だから総司が言わない限りあたしは普通の振りを続けると思う。そして願わくば言わないでくれることを願ってる。

だから総司に急に抱きしめられた時、あたしは正直これで私たちの関係が終わったとおもった。

もう前には戻れない、そう思った。

あたしは自分の行動が総司を追い込んだんだと思って自分に腹が立った。

あたしは結局総司の優しさに甘えてるだけで、この関係を壊したくないのも全部自分のためだったから。

でも総司は自分で自分の行動に驚いているみたいで、迷子の子供みたいに泣きそうで、あたしは…あのときどうしてあんな行動をとったのか分からないけどただ総司を抱きしめたいって思った。

ただこの沖田総司という人間が愛おしくて支えたいって思った。間違ってるのかもしれない、こんなことは。

ふしだらだって言うひともいるかもしれない。

でも総司と抱きしめあっているあの時間はすごく優しく、それだけで完結したものだっただ。

強いて言うのならばぎりぎりの必要性。

愛じゃない、恋じゃない…

それを定義する言葉はみつからない…

でもこのどこまでも優しい泣きたくなるような気持ちはなんなんだろう。

総司はあたしに覆いかぶさる様な形であたしを優しく抱きしめてくれる。

ふと視線が絡まった。

沈黙…

やおら総司はふっと笑った。

「ありがとう…ここに居てくれて…」

かすれた様な低い声で総司が言った。

「…うん。いつか…きつとみんな志の為に走って誠の為に死んじやうかもしねなくても、あたし…きつと見守るからね。あたしきつとその為にここにいる。」

いつかそう遠くない未来、みんな死んで行くのだろう。

あたしはその時きつと泣くし、止める。みんなが生きられるように、でもそれでも目を逸らさずにどんなことがあっても、みんなの志を見守る。

それがそれだけがあたしのここでの生きる意味だと思っから。

総司は何も言わず小さく笑ってもう一度しっかりとあたしを抱きしめた。

あたしたちは、その夜怖いくらいの静寂の中でただ互いの手を握り合って眠りに落ちた。

## 第十一章 5・再会、憂国の志士

その翌日、あたしたちの間には昨日までのわだかまりはなくなって、静かな、けれど完結した空気が流れていた。

「おはよう。」

「おはよう。」

あたしたちは小さく笑って穏やかに挨拶を交わした。

と、その時階段の下から人の気配が伝わってきた。しいて言えば殺気のようなもの。

「「！」「」

きた！

ビンゴだ。

573

あたしたちは目くばせを交わした。  
総司の目から優しさが消えて、凍えるような冷たい武士の目になった。  
きっと今夜あたり何かが起きる。  
そんな予感がした。

\*

総司が調べた結果、討幕派の会合に間違いなさそうだとのこと。  
人数は5人。

あたしたち二人でぎりぎりといったところか。

「まことはくれぐれも無茶しないで。って言っても無駄なんだろうな。」

「大丈夫、剣の腕は衰えてないから。」  
あきらめたように苦笑しながらいう総司にあたしは不敵に笑って答えた。

「頼りにしてるからね。お倫さん。」

\*

夕闇があたりを覆った。

あたしは久しぶりに単と袴をつけて髪を結わえ、芹沢先生からもらった脇差しを手に総司とともにふすまの前に準備した。

「まったく幕府のぼんくらどもめ！こんな弱腰だからメリケンの天狗どもに侮られるのだ。」

「声を抑えよ。かの禁門の変以来われらは天下の朝敵になりつつある。時期を待て。」

桂先生がおっしゃったように今は下準備を重ねて力を蓄えるべきだ。

「

「この際將軍を排してでも…！」

「若い者は血の気が多くて行けない。もっと論理的に、冷静に行かねば、それこそ日本国は滅びる。」

「桂先生…。」

「！」

中から聞こえる声にあたしは声をあげそうになった。

この低くて他を圧倒するような威厳のある声…

桂小五郎だ。

前に遊女として身請けされて日本の未来やあり方について語られた。その圧倒的なカリスマ性は鳥肌が立つほどだった。

こんなところで会うなんて…。

「よく考えてみなさい。ここで無能な將軍を排したとてなんの得も

なかるう。幕府の中で今一番厄介なのは一橋だ。あれは頭もよければ才気もある。排するとしたらあれであるう。」

ちよつと厄介かも。

桂がここにいるってことは取り巻きもそれなりに腕の立つのをそろえてるってことだし。

でもここで引くわけには行かない。

一橋公つてのちの徳川慶喜だよね。大政奉還して幕府に無血で幕を下ろす人だ。

あの人がいなければこの先もつと血が流れる。だからだめだ！

ふと顔をあげると総司が力強く頷いた。

そうだね、大丈夫だ。

一人じゃないから。

きつと大丈夫だ。

行こう。

総司は思い切りふすまを開けた。

「御用改めである！新撰組一番隊組長沖田総司、参る！！」

「同じく新撰組隊士水瀬真実参る！」

あたしは高鳴る心臓を抑えて言った。

この新撰組の名を口に出せることがあたしの心をこんなにも強くする。

だから負けない！

中の人たちは突然のことに驚いているようだ。

勝った、そう思った。

喧嘩は初めが肝心。それでほとんどが決まる！

そう言ったのは佐之さんだった。



あたしたちは互いに背を向け、切りつけてくる敵を向かい撃った。総司は舞うように剣を扱い、あたしは速さで敵の懐に飛び込んで急所を外して切りつけた。

キン！

ガキヤ！

金属のあたる音。

舞う火花。

いつしか、立っているのは、あたしたちと桂だけになっていた。

「思わぬところで再会したね、華雪、いや、水瀬君とお呼びしたほうがよいかな？」

そして初めまして、沖田総司君。君のうわさがかねがね聞いている。新撰組の人斬り鬼と。」

桂はさしてあわてることなくあたしに向き直った。

「ご無沙汰してます。桂先生。」

あたしもまた心は静かだった。

「光荣ですよ、名前を憶えていただけ。」

総司もまた静かに言った。

悲しいこともつらいこともあれからたくさんあった。

でもあたしは負けない。

こんなところでこの人に負けたくない。

「相変わらず潔い目をする。君を手放したことは今でも悔いているよ。君のおかげで、私たちは多くの同志を失い力をそがれたのですから。」

桂は不敵に笑った。

「あたしの生きる場所は今も昔も、これからもずっと新撰組だけだから。」

あたしは間合を詰めて一気に斬りこんだ。

桂はそれを難なくかわすと窓のふちまで下がって一気に外へ飛び降

りた。

「また会おう、華雪、その時は今度こそ私のものになってくれ。」  
憎たらしいくらいに余裕の笑みを浮かべて桂は走り出す。

「しまった。まことはその人たちに縄をかけて。私は桂を追う!!」  
総司もまた窓からひらりと飛び降りると後を追った。

見る見る間に二人の影は見えなくなっていく。

あたしは桂の取り巻きたちを手当てしながら縄をかけると慌てふためく女将に事情を話し、西本願寺に連絡を取ってもらった。そうこうしているうちに総司が帰ってきて、桂を取り逃がした旨を言い、悔しそうな顔をした。

あたしは何となくそうなるだろうと思っていた。

だってあの逃げの小五郎だもの。

あの人もまた本気で日本を想う憂国の志士だから。

だから目的のためにはどんなに逃げてもどんなに辛酸をなめてもきつと最後まで走り続ける。

そういう人だ。

あたしは後の処理を総司に任せ、手早く着物を着換え、髪を結わえると新撰組のみんなに会う前にするりと盆屋を滑り出た。

時代は動いている。

どうすることもできぬほどに。

冷たい晩秋の風に吹かれながらあたしはいやというほどそのことを実感していた。

## 第十一章 6・行く先：土方歳三

門扉のほう騒がしい。巡察を終えたやつらが帰ってきたのか。俺は目を通していた書類を文机において顔をあげた。

ふすまの向こうに人の気配。

「土方副長、恐れ入ります。沖田です。ただいま戻りました。」

ふすまの向こうで総司の声がした。

総司のやつか：無事に帰ってきたか。

「入れ。」

音もなくふすまが開くと、総司のやつが膝を進めてきた。

「長州の会合に踏み込み、四人捕縛。一人は取り逃がしました。逃がしたのは：桂小五郎です。」

申し訳ありません。」

総司は眉を顰め、苦虫をかみ殺したような顔をして悔しそうにいった。

桂か：やっぱりあいつは一筋縄ではいかねえか。

「捕まえたやつ吐かせるしかねえだろ。」

それより、水瀬はどうだったよ？変わりなかったか？」

水瀬との密偵に総司を選んだのはわけがある。

嘘はつけねえが普段の殺気を見せない総司なら山崎ほどじゃあねえがうまく使えば密偵に向いているだろうと思っただからだ。

山崎が近藤さんに附いて広島に出張に行っている以上、こいつが一番だと思っただ。

それに、こいつははた目から見てもわかるほどに水瀬に会いたがっていた。

こいつにとつちや、初めての恋だ。

だから会わせてやりたかった。

こんなことを言えばこいつは怒るだろうか？

「元気でしたよ。お転婆なところは相変わらずでしたけれど。」  
総司は穏やかに笑っていった。

穏やかで満ち足りたような優しい顔をしてやがる。  
こんな顔をするのは一つしかない。

「ついに抱いたか。」

俺は思い当ったことを口に出していった。

「！何を言っんです！そんなことあるはずがないでしょう！！」

総司は真っ赤になって目を見開いてかみつかんばかりに否定した。

「違うのか？せっかくいい機会をやったのによ。」

俺は意地悪く笑っていった。

「土方さん！悪い冗談はやめてください！まことは新撰組とともに  
あるうとしているんです。そんなのは彼女にとって侮辱です！！」  
総司は俺に詰め寄ってどなった。

俺は総司の手を払いながら言った。

「…昨日、近藤さんから文が来た。よくねえ知らせだ。」

「え？」

「いつ戦が始まるかわからねえ。あいつは確かに強いが女だ。しか  
もこの時代に何の後盾もねえ。」

もし何かあった時のために新撰組以外で生きる手立てをそろそろ考  
えるべきかと思っつてな。

あいつを…本当に抜けさせようかと考えている。」

そうだ。

俺たちが追い風に乗っているときは新撰組と共にいてもいいだろう。  
だが時代の波がどうやら俺らを嵐に巻き込もうとしている。

もしかしたらとんでもない危険な目にあいつを合わせるかもしれないね  
え。

それをあいつは望まねえかもしれねえが、だが先はどうなるかわか  
らない。

その時のために選択肢を残しておきたい、そう思った。

総司か、斉藤のどちらかに、あるいは新撰組とは何のかわりもない人間にあいつを託したい。

近頃そんな風に思うようになった。

俺らしくねえが、時代は必ずしも俺らに味方をしないだろう。

「…なら、なぜ貴方がそうしないのです？」

総司がのどから声を絞り出して言った。

「俺は新撰組の副長だ。」

「そんなのは言い訳です！私だって一番隊長です！

本当に彼女のためを思うのなら、あなたが彼女をすべての危険から守って幸せにしてあげてください！

土方さん、私は…まことに惚れてます。一生をささげたいと思うほどに。」

土方さんもそうでしょう？あなたもいい加減に認めてください。」

総司はまっすぐに俺を見て言った。

曇りのないまっすぐな目をしていた。

こいつは昔から小生意気な餓鬼だった。

人の心を見透かすようなそんなことばかり言う。

水瀬に惚れてるか…？

惚れている。

それは揺らがない事実。

だが俺は守れない、守らない。

水瀬か、隊かと問われれば、俺は間違いなく隊をとる。

選ぶとかそういう次元にはすでになく、もはや新撰組は俺にとっては宿命、命そのもの。

だからどんなことがあっても俺は新撰組をとる。

「…惚れてる。そういうえば満足か？」

「！」

「総司…俺はあいつを幸せにはできない。だがお前ならできる。いざとなったらお前か斉藤が、あいつを新撰組から抜けさせる。」

「できません。」

「総司！」

「貴方はまことの何を見てきたんですか！！まことだって貴方に惚れてる。」

でも彼女は何も望まない。遠くで幸せになることよりも、近くで辛苦をとにもすることを彼女は選ぶはずです！私がそうすることで彼女が本当に幸せになるのなら、私はとつくに思いを告げて娶っていません。

それをしないのは、まことが望まないから。どんなことがあっても、ともにいられずとも、まことは貴方だけを感じて生きている、貴方の誠を、志を感じて同じ方向に走っていくことだけで、彼女はあんなにも笑えるんです。」

総司は泣きそうな顔で俺の胸倉をつかんだ。

「…」

何を見てきたのか…か。

俺はあいつの恋心をさんざん利用して…危険な目に合わせて…。

あいつを幸せにする資格なんてどこにもない。

あいつは望まない。

ただ一つ新撰組と共にあること以外は。

そのことだけがあいつの幸せなのか？

俺は近頃思うことがある。

あいつはもしかしたら元の時代に戻ることも可能なのではないかと。根拠はない、俺のただの勘でしかないが、直感で感じるのだ。

いつの日か、そんな日が来るかもしれない、その時、俺はあいつをけがさせないで、傷つけることなくあいつを家族や友人のもとへ、もしかしたらこの先出逢うはずの恋人のもとへ返したい。

そんな風に思うようになってきたのだ。

その時まで、あいつが還るその日まで、幸せにただ安全にあいつを守ってやるそんな存在がいると思うのだ。

あいつ自身は望まないかもしれない、でもあいつには傷つかないで

ほしい。

自分勝手なことを言っている、総司にも酷なことを強いているのか  
もしれない、でも俺があいつにしてやれる精一杯だから。

俺たちはそのあと一言も口をきかなかつた。

晩秋の北風が扉の蝶番を軋ませ、まるで悲しい悲鳴のような音を立  
てていた。

## 第十一章 7・武士のとる道

盆屋での張り込みからしばらくして、山崎さんは出張から帰ってきた。た。

何やら難しい顔をしていて、せわしく動き回っていることが多かった。

組で、何かあったんだろうか？

あたしは何やらいやな予感がしていたけれど、何も言い出せなかった。

その日、朝餉を済ませると、あたしは繕いものをしていた。

山崎さんが広島から着て帰ってきた着物はあちこちに切り傷があつてあたしはちくちくそれを繕っていたのだ。その傷は物騒な旅を思わせてあたしは無意識に眉を寄せた。

「お倫、仕事や。黒谷にこれを届けてくれ。」

不意に声をかけられて振り返る。

山崎さんが柱にもたれかかって手紙をあたしに差し出していた。

「呆けた顔すな。お前までピリピリした顔してこっちまで鬱々した気分になるっちゅうねん。」

山崎さんは眉を下げていつもと変わらない憎まれ口をたたいた。

「山崎さん…新撰組で何かよくないことでもあったんですか？」

あたしは我慢できずに山崎さんの袖をつかんだ。

「気にせんでいい、ゆうても無理やるなあ。」

山崎さんは苦笑しながら座ると低い声で言った。

「家茂公がご病気や。それもあまり芳しくない。」

「えつと將軍様…ですか。」

「そや。今のこの情勢で將軍様が倒れたんは幕府にとっては頭の痛い話なんや。」



それと伊東甲子太郎、あの人がなんやたくらんどる。きな臭いこつちや。」

將軍が倒れるってことは幕府全体の屋台骨が揺らぐってことなんだ。將軍の病氣、そして桂が言っていた一橋公の暗殺。

幕府は一気に崩れる。

そして伊東参謀。

あの策士がまたどんな罠を張り巡らしているんだろう？

「わかりました。えっと、この手紙を黒谷に届けるんですね。」

あたしは話題を切り上げて、山崎さんから手紙を受け取った。

ちなみに黒谷とは新撰組のオーナーである会津肥後守松平容保様がいらっしやるのだ。

監察の仕事をするようになってからあたしは黒谷に出入りするようになった。

初めは女のあたしが新撰組にいることにすごく驚いていたけど、そこはさすがにあの荒くれ者たちを束ねているだけあって肝が据わっていらっしやった。

最近では手紙を届けに行くたびにねぎらいの言葉をかけてくださる。まだお若いけれどさすがだなと思う。

\*

「では行ってまいります。」

あたしは山崎さんに挨拶をすると門扉をくぐって外に出た。

しばらく朱雀大路を行くと荒れたあばら家なんかが目に入るようになる。

京都の町は禁門の変の大火の後から大きく様変わりをした。

天皇の御膝元ということ差し引いても幕府に対する信用や尊敬は薄れつつあるように感じるのだ。

そこかしこに時代の不穏な波が垣間見えるようで、不安を掻き立てる。もう少しで黒谷だといつところ近づいたころ、男のどなり声が耳に届いた。

「何をする！無礼な！」

あたしはその声に振り向き人だかりになっているほうへ近づいてみた。

そこには4、50くらいのでっぷりと太ったタヌキおやじが顔を赤くして息巻いていた。

脂ぎった顔が気持ちが悪い。

「も、申し訳ありません！どうぞお許してください！」

地面に女の人が震えながら手をつけて謝っているのが見えた。

「ならん！このガキは無礼にもこのわしにぶつかって羽織に水をかけたのだ。無礼打ちじゃ！！！」

男は息巻いて怒っている。

よく見ると女の人の近くには5、6歳の男の子が泣きながらお母さんらしきその女性の袖をつかんでいる。

そんな！！

たかが水かけたくらいで…！！

子供のミスなのに…

これが身分？

これが武士？

これが新撰組のみんなが守ろうとした幕府？

こんなの許されていいはずがない！

あたしは思わず一步踏み出したその時、

「お待ちください！」

聞きなれた声の先には、

左之さんと平助君がいた。

「なんだ貴様らは！！！」

男は顔を真っ赤にしていきり立っている。

「拙者は京都守護職御預新撰組十番隊長原田左之助と申すもの。どうかそちらの親子をお許し願いたい。」

「同じく新撰組八番隊長藤堂平助。貴殿への非礼はもつともなごとなれど、どうぞお許しお願い申し上げます。」

左之さんも平助君もお腹に響くようによく通る声で言った。人垣からざわめきが起きた。

言葉は丁寧だけど、もしもの時は剣を抜くことも辞さない構えだった。

いつもの冗談ばかり言っている二人ではない。

目の前にいるのは守るものために剣をとる誠の武士。

一分、二分…

沈黙の中ならみ合う視線が火花を放っているようにさえ感じる。

不意に男はにやりと不敵な笑みを浮かべると、剣を鞘に納めた。

「新撰組か、覚えておこう。」

男は踵を返して人だかりから去って行った。

その後涙を流しながら二人にお礼を言う女性に、二人は困ったように笑って足早にその場を離れた。

あたしはそんな二人の様子を影からずっと見ていた。

あの人たちは誠の武士だ。

どんなに時流が崩れようと、きっと己の信念のもと、守るもののために刀を握るのだらう。

そう思うと心が熱くなるのを感じる。

彼らに恥じぬようにあたしもあたしの誠のために生きよう。

それこそがあたしの唯一の生きる道なのだから。

あたしは手紙を握りなすと、黒谷へ向かって再び歩き出した。

## 第十一章 8・選択、捨てる覚悟

年が明け、慶応二年になるとあたしは23になった。

この冬は特に寒くて、ようやく寒さが緩みだしたのは弥生に入ってからのことだった。

今日は珍しく小春日和で、ストールもいらなくらいに暖かった。あたしはいつものように黒谷へ手紙を届けた後、少し時間があるので市場で、夕食の材料を見ていた。

「お倫ちゃん、今日は小松菜が安いで。」

八百屋のおじさんはもうすっかり顔見知りだ。

「ありがとう、じゃあ、もらおうかな。」

あたしは小松菜を大根と、豆腐屋さんで油揚げを買おうと品物を受け取った。

こんな風に買い物するのも今では何の違和感もない。わかってる。

これがいつまでも続かないことは。

でも、みんなが元気で、少しでも長く生きてほしいと思うから。

あたしは顔をあげて家路につこうと振り返ったその時、誰かにぶつかった。

どん

「ふぎゆ、ごめんなさい。」

「すまない。」

おかしな声が出て、あたしは鼻を押さえて顔をあげた。

同時にその人も顔をあげ、お互いに絶句した。

「！」「！」

そこにいたのは、桂小五郎だった。

「桂：「やあ」「

桂はあたしを遮ると憎らしいくらいに取り澄ました笑顔で言った。

「久しぶりだね。ここではなんだからこちらへおいで。君に伝えたいことがあった。」

「誰があんたとなんか…！」

あたしは桂の手を振り払って間合をとる。

「君と取引がしたい。こちらにおいで。」

桂はあたしの手をとらえるとその笑顔からは考えられない力でぎりぎりであたしの腕を締め上げた。

「いつ…！」

「女性に手荒な真似はしたくない。こちらにおいで。」

あたしはなすすべもなく桂に手を引かれて路地に入ると近くの貸座敷に連れて行かれた。

そこは奥まっついていて表通りの喧騒がうそのように静かだった。

「離して、よ！なんなの？ここであたしを殺すの？」

あたしは桂の手を振りほどくと向き直って見据えた。

「せっかちなだね、華雪。君は殺さないよ。利用価値があるからね。」

桂は口の端をあげて笑ったけれどそれはぞくりとするくらい底冷えのするものだった。

「利用って何？あたしには何の価値もない。あんたに協力できることなんてない」

あたしは桂の整った顔をにらみあげた。

「君にとっていい情報だと思っよ。」

「何なの？」

「新選組を解散させる動きが幕府の中で出ている。局長の近藤勇、

副長の土方を切腹、隊士たちは禁固、なのだそうだ。」

「なっ…！」

「幕府の老中御用取次松岡祐衛門に、なんでも新選組の隊士が公衆

の面前で無礼を働いたとか。」

「そんなことあるはずがない。」

「信じるかどうかは君しだいだ。事実かどうかなんて関係ないのさ。幕府にとつては。幕府の中にも討幕の動きがあるのを知っているかい？ 邪魔な新選組を消すための材料ならなんでもいい。たとえねつ造あつてもね。要するにそんな隙を作った人間の負けなのだよ。」

何が自分にとつての誠なのか、それ以外を切り捨てる勇気がないものに武士を名乗る資格はない。君の仲間はそれを見誤ったのだ。どんな理由があつたにせよ、この結果を導き出したのは軽率、自覚の欠如以外の何物でもない。」

まさか……  
あの時の左之さんと平助君のあの行動のことを言っているんだろうか？

あの行動がこんなに重い意味を持つものなんだろうか。

あの人を助けたことは人として当然だと思う。

あんなことで人が殺されるなんておかしいもの。

でも、身分が、悪しき因習があたしたちを呪縛する。

「……」

「幕府は腐っている。こんな汚い手を使って身内同士のつぶしあい。大局を見られぬ愚か者ばかりだ……。華雪、いや、水瀬といったか、われらとともに来なさい。君はこの古い因習の中で幕府とともに、新選組とともに沈むべき人間ではないだろう。」

以前、君がわれらの中にもぐりこんだとき、君が新たな時代に必要だといったのは本当だ。時代感覚、大胆さと繊細さ、潔さ、そのどれをとつても幕府の下らぬ役人に引けを取らぬほどの外交感覚を持っていると思っている。

……そして先の世が見える不思議な力がある。

新たな時代がどうなるか君は知っているのだろうか？

なぜならこの世のものではないから。

聡明な君ならどうするべきかわかっているだろうか？」

一瞬すべての音が消えた。

何を言っているのか…

あたしは目を見開いたまま何も言うことができなかった。

「…！」

この人がなんで…！！！！

「その顔は凶星かな？なぜ知っているかって？」

君達のことはよく知っているさ。いい情報を流してくれるネズミを  
もぐりこませているからね。」

スパイ！！

でも誰が？

あたしのことを知ってるのは試衛館の幹部たちだけなのに。

まって、禁門の変のときに怪我をして、あたしのがばれたとき、  
あたしの世話をしてくれてたのは…

新之助君…。

まさか、そんな彼が…スパイ？

そんな…！！

「…！」

「ふふ、気づいたかい？人を簡単に信用してはいけないよ。清水新  
之助、彼はなかなかいい仕事をした。君とおあいこだ。」

さも楽しそうに笑う桂が憎たらしい。

「それでも…行きません。あたしは新選組とともに生きるとそう決  
めてるから。」

あたしはまっすぐに桂を見て言った。

「…君が来ることで彼らの命が助かるといつても？」

「…！」

「君をほしがったのは私だけではないんだ。勝海舟という男を知っ



ているかい？幕府の人間だが非常にこちらとも話の合う人間でね。君がこちらに来るのなら、新選組解散の命は取り消すと約束してくださった。

これは取引だよ。水瀬真実、私は約束は破らぬ。」

これは体のいい脅しだ。

それに乗れば新撰組をこの先窮地に追い込むかもしれない。でも…それでも…

「仮にあたしがそっちに行つたところで、あたしはあなたたちのプラスになることは何一つ何も話さない。何の利用もできないでしよう？？」

「君は真実を見極める人間だから、どこにいようと正しい方向を見極めてすすむだろう？」

「…」

この人は見ぬいている。

あたしが桂の考えや思想にひかれていたことを。

この人の言うことは論理的で、現代に通じる思想をしている。

だから平成で育つたあたしはこの人の考えに否が応でも共鳴してしまふのだ。

「すぐには決められないだろうから、猶予をあげよう。

だからこのような形で君を脅しているかもしれないが、誠意は尽くす。君が首を縦に振ればすぐにも命を解く。それを確認したら君はこちらに来ればよい。」

こんなの脅しにあたしは従うしかできないのか。

あたしは選ぶことすらできない。

あたしはその時が来たらどうするんだろう？

あたしはただ、呆然と立ち尽くすしかなかった。

## 第十一章 9・裏切り、自分のなすべきこと

あたしはどうしたらいいんだろう？

今までこうしていられたのは、隊を離れていても山崎さんと新撰組の為に働いてるっていう実感があつたから。自分が新撰組の名を口に出せるだけでみんなと繋がっていられたからだ。

でも今度は違う。

桂の要求を飲んだらあたしはみんなを裏切つて敵になるんだ。

大好きなみんなを裏切り、あたしはどんな風にこの先を生きていくんだろう。

離れたくなんてない…。

でもあたしが仮にこのまま知らない振りをするれば近藤先生や土方さんは…？

新撰組はどうなる…？

切腹、解散…

ダメ、そんなの絶対嫌だ。

…あたしは初めから選択肢なんてないのかもしれない。

何かを守るためには別の何かを犠牲にしなければいけない、何かを選択するってことは他をあきらめるってことだ。

あたしは何を守りたいの？

誰の為に戦ってきたの？

あたしの誠はどこにあるの？

…そんなの簡単。

あたしの全ては新撰組の為に。

ああ、もう答えなんて出てるんだ。

初めから決まってる。

でもこのことをみんなが知ったら、あたしを止めようとするだろう。どうにかしてそんなことをしなくてもいいようにみんな必死になっ  
てくれるだろう。

でも、それを止めることができるんだろうか？

たとえ、止めることができて、その時、きつと誰かが何かの犠牲  
をこうむる。

あたしはこの時代の人間じゃない。

この均衡を壊したのはあたしだ。

その落とし前は自分でつけなければ…。

でも…みんなを傷つけるだろうな。

このことを誰かに話すべきだろうか…。

話せばきつと止められる。

でも、何も知らないままにあたしが裏切ればみんなきつと傷つく…。  
どうしよう…。

「お倫、どないした？明かりもつけんと。」

「！」

背後から聞こえた山崎さんの声にあたしははつとして振り向いた。

「なんや幽霊見たみたいな顔して…。顔色悪いで、なんかあったん  
か？」

「…いえ、ちよつと風邪気味で…ぼんやりしちゃいました。」

あたしはあえて明るく言った。  
言えない…。

山崎さんは優秀な監察方だから見透かされそうだったけどあたしは  
とっさに嘘をついた。

「もう寝ますね。」

あたしはその場にいるのがいたたまれなくなって立ち上がって部屋  
に戻ろうとした。

その時腕をぐいっつとつかまれた。

「ちよい待ちや。」

「！」

とっさのことでバランスを崩し、あたしは山崎さんの腕の中にすっぽり収まってあたしは山崎さんと抱き合うような恰好になる。

「何隠してんねん。ばればれや。」

「！なんのことですか？」

あたしは声を震わせていった。

「隠すならもつとつまくやね。よおかくせんと、下手な嘘つくんやない。」

耳元で山崎さんは普段よりも一段と低い声を出して言った。

あたし嘘つくの下手すぎる…。

「…ごめんなさい。」

「謝っても何があつたかわからんやないか。順追つて話しや。」  
諭すように山崎さんが言う。

あたしはそのあと、ゆっくりと今日あつた出来事を話した。

桂に会つたこと。

新撰組の解散と、近藤先生と土方さんの切腹のこと。

それが平助君と左之さんが町の女性を助けたことに端を発する濡れ衣だということ。

桂と勝海舟がつながっていること。

あたしがこの時代の人間ではないことがばれていること。

そしてあたしがそちらに行くのと引き換えに新撰組の解散を辞めさせられるかもしれないこと…。

山崎さんはあたしが話すごとに顔色を変えていったけど、一言も話を止めようとしなかった。

すべてを話し終わった後あたしたちはずっと黙ったままだった。

「……」

ただ沈黙だけがあたりを支配して、外からご近所の夕食の団らの声がかすかに聞こえてくる。

それは幸せの象徴みたいに感じられてあたしは思わず泣きそうになった。

どちらに進んでも辛い道になることはわかりきっている。

でも、選ばねばならない、ううん、もう進む道は決まっているから後は覚悟を決めていかなければならない。

あたしは裏切るんだ。

大好きだから。

みんなが大好きだからみんなが誠のために走っていけるようにあたしは後押しをしよう。

あたしたちはそのまま夜が更けるまでずっと一言も口を利かなかった。

第十一章 10・自分の道、守るべきもの

山崎さんはじつと一点を見つめて動かない。

土方さんと同じ年だと聞いたけど、いつも軽口をたたいているからずっと若く見えるのだけれど、ただ眉間にしわを寄せてじっとしている様子は年相応の落ち着きと渋みがあった。

「…なんでなんや。」

山崎さんが言葉を発したのはそれからしばらくたってからのことだった。

「え?」

「なんで幕府はこないにもくさってんねや!幕府の中から倒幕の動きがあるなんてもう…!」

近藤さんも、土方さんも真の武士や。幕府の連中なんかよりもよっぽど日本を憂いてる。

なのにあの人らをつぶして、どないしようんや!」

山崎さんは幕府への怒りをあらわにして畳を拳で叩いた。

その表情は新撰組への忠誠と、近藤先生や土方さんへの信頼と敬愛の深さを物語っていて今更ながらそれを実感した。

そして同時に思う。

やっぱり彼らはこの国に必要なだと。

この先そう遠くない未来に彼らは散る運命にあるのかもしれない。でも彼らが血を吐く思いで、貫き通す誠の痕跡を後世に残さねばいけないと。

そう思うと、心が落ち着いてくる。

悲しいけれど、苦しいけれど、あたしは裏切ろう、みんなを。

たとえ、そのことで、新撰組の誰かに斬られる日が来ても、あたしはみんなの誠を、志を後世に遺すための道になるのだと覚悟を決め

て笑って逝きたい、と思う。

「…させません。」

「？」

山崎さんがあたしの言葉に怪訝そうな顔をする。

「あたし、桂のところに行きます。」

あたしはまっすぐに山崎さんを見据えて言った。

「あかん！罨かもしれないんで。そしたらそれこそ犬死や。」

山崎さんは見たこともないくらいに狼狽していてあたしの肩をつかんで揺さぶった。

「でも、この事態を收拾するにはきつと誰かの犠牲がいる。そしたらそれはあたしがやります。」

みんなは誠の武士として走りぬくことが天に定められた運命です。そしてあたしはそれをきちんと全うさせることが使命です。

…だからあたしは新撰組を裏切ります。

桂のところに戻返って、妾になります。

だから刺し違えても、切腹なんて…解散なんてさせません。」

口に出すことでそれはどんどん事実になっていく。

でもこれがあたしの進む道なのだと思う。

「水瀬…お前…。」

わかってんのか？

この前の密偵の時や、除隊の時とはわけが違うんやで。

もしお前がどんな理由があれ倒幕派に身を置いたら俺らとはもう決して同じ場所には立てん。

俺らはお前を裏切り者として、敵として斬らねばならん。

倒幕派に戻返った裏切り者、スパイとして殺されるんやで。」

「もとより覚悟の上です。」

あたしが裏切ることで、死ぬことで新撰組が誠を貫き通せるなら喜んで行きます。

もしかしたら、あたしはこうするために…みんなの後押しをするために、ここまで来たんじゃないかと思うんです。だから今結構誇ら

しいんですよ？」

あたしは無理やり口の端を引き上げて笑おうとした。  
うまく笑えているだろうか？

「水瀬……」

「……1つだけ、お願いがあります。この事は絶対に新撰組のみんなには言わないでください。後ろめたさなんて一ミリも感じて欲しくないから。あたしは新撰組のあの志が、好きだから。あの志のために全力で走って行って欲しいんです。」

「水瀬、それではあまりにも……」

「いいえ、人は憎しみさえあればそれを力に変えることが出来ますから。」

事実を知ったところで覆す絶対的な手段がなかったら苦しいだけでしょう？

どうすることもできずに指をくわえて人の死を見送る辛苦はみんなが嫌ってほど味わってます。

ならばいつそ憎んでくれたほうがまだいい。

だからそれでいいんです。

それに、桂たちのの思惑はどちらにしる幕府の力を削ぐことでしよう。

あたしはできる限り中に入ってそれを防ぎます。新撰組は絶対にこんなことで崩れてはいけません。

だからお願いします。あたしを憎んでください。恨んでください。

それを力に変えて走って行ってください。

そしてあたしに会ったら斬ってください。

勝手な言い草だとは重々承知です。

でも、お願いします。」

あたしは前を向いてキツパリ言った。

「……承知した。」

山崎さんは拳を握りしめて、震える声で言った。

「ごめんなさい。山崎さんにだけ、こんなこと……。でも、おかげで



心が決まりました。

本当にありがとうございました。」

あたしは畳に手をつけて頭を下げた。

「…阿呆…！」

山崎さんはあたしににじり寄ると、やおら腕を引いてあたしを抱きしめた。

山崎さんの腕は見た目よりもずっと力強くて骨が軋むくらいにきつく抱きしめられて少し痛かった。

鼻の奥がつんとして目の前の景色が揺らぐのを感じたけど、あたしは無理やり口の端をあげて笑った。

今泣いたらきつと止まらなくなる。

だから笑おう。

泣くことはすべてが終わってからでいい。

絶対に下を向きたくは無かった。

これはあたしが選んだことだもの。

これはあたしの闘いだ。

一世一代の勝負。

裏切ってやろうじゃないか。憎まれてやろうじゃないか。

みんなが前に進む原動力に少しでもなれるように。

あたしが未来から来たのはこの為なのかもしれないと思う。

あたしは妙に落ち着いている自分にびっくりした。

これがここに来たばかりの頃なら納得できなかったと思う。

でもあれから2年たって、人を失う痛みを知り、人を殺す痛みを知り、志という熱いものの為に翔け、そして散っていくことを選ぶことを知った。

今なら分かる。

彼らは決して犠牲になったのではない。

自ら選んだんだ。

だから彼らはこんなにも凜と美しく一分の揺らぎも見せずに散って

いったのだ。

何が正しいのか間違っているのか、そんなものは知らない。  
ただあたしはあたしのこの熱い想いの為だけに走って行くだけだから。

あたしは自分で選んだんだ。

だから最期までこのみちを貫こう。

みんな、ごめんなさい。

こんな風にみんなを裏切って傷つけて、本当にごめんなさい。

でも、みんなならきつと走っていけると思うから、だから行ってください。

武士の道を。

そして、次に会うときは、裏切りものとして斬ってください。

願わくは、みんなが少しでも傷つかずにいられますように。

第十一章 11・約束、戻れぬ道を…

あたしは翌日桂に会いに行った。  
早いほうがいい。  
決心が鈍らないうちに。

出かけるとき、山崎さんは最後まであたしを止めようとした。  
でもあたしはそれに何も答えずに出てきてしまった。  
これ以外にどうすればいいのだろう？  
どっちをとつてもつらいけれど、どちらかを選ばねばならない。  
それならば、あたしはこちらを選びたいと思う。  
世の中はどうにもならないことばかりだ。  
でもそれでもどうにかしなければいけないからこんなに苦しいんだ  
ろうな。

桂の隠れ家に着くとあたしは玄関扉を静かに開けた。

「早かったね、もつと時間がかかるかと思ったよ。」

桂はあたしを見ると言葉とは裏腹に静かに言った。

「貴方はわかつてたでしょう？あたしがこうすることを。」

この男は抜け目がなくくらいに鋭い男だもの。

あたしがあらがえないのを知っているはずだ。

「そうだね。君ならこうするだろうと思っていたよ。」

でも…君はなぜそこまで新撰組にこだわるのかは私には意味が分からないがね。

彼らの行動は時流にはそぐわぬだろう。幕府は遅かれ早かれもう終わる。

これからは刀の時代ではない。

経済力、豊かさこそが日本を救う道なのだ。

君が一番よく知っているんじゃないのか？」

この人は確かに平成の世にいてもおかしくなくらいに柔軟で近代的な考えをする。

きつとこの人がこの先明治維新を迎えた日本を近代国家に導いていくのだから。

「貴方の言うことは確かに正しいし、きつと日本を未来に導く。

でもあたしの魂は新撰組にある。そう定められてるの。

だからあたしはこの時代に導かれたんだと思ってる。」

「君は…。」

桂は何かを言おうとしてそのまま口を閉ざした。

「もういいでしょう。約束を守って。」

新撰組と近藤先生と土方さんの安全が守られたのが確認できたら、あたしはあなたのところへ行く。

それまでは行かない。」

あたしは無理やり話を終わらせて目を伏せた。

「ああ。約束は守ろう。」

君の幸せも守るから新しい日本をともに作って行こう。」

幸せって何？

あんたが奪ったんじゃないか。

あたしは桂の言葉に思わず目を見開いて睨み付けた。

「勝手なこと言わないで！あたしの幸せはあたしが決める！

少なくともあたしの幸せはここにはない！！」

「…」

桂はあたしをまじまじと見てたじろいだ。

あたしは急に冷や水を浴びせられたように冷静になり気まぎらなくなつて下を向いた。

こんなことこの人にあたつても仕方のないことだ。

幕府を倒そうとするのも抗い様のない時代の波であり、その幕府の中にすらそういう動きがあるのだ。

それが新撰組を追い込んでじりじり首を絞めていく。

誰のせいでもない。

思想を縛ることはできないから。

ただ、いろいろなことが積み重なって起こるべくして起きたことだ。左之さんや平助君の行動が招いたと桂は言っただけでそれは違う。こうなると知ってあの時に戻れたとしても、二人ならやっぱりあの女性を助けたと思うし、そうであってほしいと思う。

あのタヌキおやじの行動は腹立たしいし、卑怯なやり方だと思う。でも…このやり方をおかしいといえない悪しき身分の因習があたしたちを縛りつける。

自分の思い通りに生きれないのは…苦しい。

でもどんなに苦しくても選らんだんだ。

あたしはこの道を自分で選んだ。

だから桂に八つ当たりしても何の意味もない。

「…ごめんなさい。私も約束は守ります。新撰組解散の命はいつ解かれますか？」

あたしは黙っている桂を見据えて言った。

「…ああ、十日以内には解かれる。」

勝海舟殿と君を引き合わせるから、十日後にここに来なさい。」

「承知しました。では…失礼します。」

あたしは小さく頭を下げると桂に背を向けて屋敷を後にした。

もう戻れないところまで来た。

進むしかないのだ。

雨が降ってきた。

春先の冷たい雨は徐々に強くなり、みるみるうちにあたしの着物を濡らしていく。

氷みたいに冷たくて、吐く息が白くなった。

でも瞼だけは熱くて自分が泣いていることに気付いた。

ああ、あたし泣いてるんだ。

悲しいとかそんな言葉では言い表せない。

ただ胸をつぶされそうなほど、苦しかった。

道行く人が突然の雨に足早に走り去るのを横目で見ながらあたしはどこに行くともなしに歩き続けた。

こんな顔のまま山崎さんのところには帰れない。

山崎にはただでさえ負担をかけているんだから。

笑わなきゃ。

全部が終わるまで、泣くのを我慢しなきゃ。

でもいったん流れ出した涙はなかなか止まってくれなかった。

気が付くとあたしは壬生寺の近くまで歩いてきていた。

ここは始まりの地。

あたしが倒れていた木は確かこれだ。

境内の中には一際大きな桜の木がある。

今はまだ時期が早くて花が咲いていないけれど、つぼみはだいぶ膨らんで色づいている。

あれから三年。

いろいろなことがありすぎて…

頭がぐちゃぐちゃだ。

あたしは誰もいない境内に入りそつと腰を下ろした。

もう着物の中まで雨は浸みているぐっしょり濡れていた。

寒くて冷たくて歯の根が合わない。

ただ瞼だけが熱くて痛かった。

あたしは膝を抱えて座ると瞼を膝にじつと押さえつけた。

ただ今だけは何も考えたくなかった。

ザク、ザク。

濡れた砂利を踏みしめる足音。

ふとあたしの前で足を止めた気配がして、あたしは顔をあげ、思わ

ず息をのんだ。  
そこには…

土方さんが

立っていた。

## 第十一章 12・雨宿り

「お前何やってんだ、こんなところで。」

土方さんは切れ長の目を少し見開いて困惑しているようだった。

一年ぶりに会う土方さんは少しやせていて、でもそれが逆に渋みを増していて、悔しいくらい精悍でかっこよかった。

「土方さん…。」

何か言わなければと思うのに、あたしは言葉が続かず、またもや視界が揺らいだ。

うれしかった。

ただ、この人に逢えたことがうれしかった。

きつとこれは神様がくれた優しさだと思う。

あたしがこの人に逢うのはきつとこれが最後だから。

「…まったく、世話が焼けるな。」

仕方なさそうにぶっきらぼうに言い、土方さんは自分の羽織をふわりとあたしにかけてくれた。

春の雨で、冷え切ったあたしの体を土方さんのぬくもりを包む。

「すみません…。帰りに雨に降られちゃって…。」

寒さで歯の根が合わずに声が震える。

「それじゃあ帰れねえだろ。着物が乾くまで近くで休んでけ。」

土方さんはそういうとあたしの手をつかんで立たせると歩き出した。つかまれた手首が熱い。

あたしは動揺してあわてて言った。

「…大丈夫です。帰れますから…。」

土方さんはちらりとあたしに目をやると眉をしかめて言った。

「そんなかつこで返したら山崎も困るだろ。まったく…いいから黙ってる。」

「…はい。」

有無を言わせない口調にあたしは黙って従うしかなかった。



あたしたちはそのあと一言も口を利かずにとだずつと雨の中を歩いてきた。  
そしてぽつんと一軒だけ建つ小さな「貸座敷」と看板に書かれている建物の前に来た。

正直寒さはピークに来ていて震えが止まらない。

土方さんは少しだけ眉をしかめたけれど貸座敷のご主人を呼ぶとあたしの着物が乾くまで部屋を貸してくれるように頼んだ。

ご主人はぬれねずみのあたしを見て怪訝そうな顔をしたけれどそのまま部屋に案内してくれた。

案内された部屋は少し奥まっついていて、薄暗い。

「ただいま御着換えの着物と灯りを持ってきますさかい、お待ちや  
す。」

ご主人の足音が徐々に遠ざかっていくのを聞いてあたしは口を開いた。

「すみません。ご迷惑おかけして……。」

「いいから着換えて今日は休んでけ。山崎には連絡しておくから。」

「はい。」

さすがに夕方近くになって暗くなってきたし、まだ雨も強く降っている。

気温もこれからまた下がるだろうと思ったら、この中を帰る気はしなかったので土方さんの言葉に甘えることにした。

「水瀬：おま「お待たせいたしました。」」

土方さんが何かを言おうとしたのを貸座敷のご主人の声で遮られる。

「こちらがお着物です。灯りはもうつけましたさかい、お部屋にどうぞ。」

ご主人は人のよさそうな笑顔で言うのと去って行った。

あたしは部屋のふすまを開けると、目の前の光景に絶句した。

「！」

目の前には蒲団が一組。

そして枕が一つ。

これは…

この見覚えのある光景は…

まさかここって

盆屋！？

「土方さん…」

あたしは助けを求めるように土方さんを見ると、土方さんは何でもなさそうに言った。

「なんだよ？」

「ここって…」

あたしはそのあとが続かない。

「盆屋だが何か問題あるか？この辺にほかに宿屋はねえし、別に寝るだけなら何の問題もねえだろ？」

何の問題もないって…大ありでしょ。

もしかして土方さんてすごく無頓着なんだろうか…。

あたしはシリアスな気分も吹き飛んでしまった。

「ほら、突っ立ってねえで、早く入って着換える。俺は飛脚に文を書いてくるから。」

土方さんはあたしに着物を押し付けるように渡すと踵を返して大股で歩いて行ってしまった。

そのとき、去っていく土方さんの耳が赤いことにあたしは気付いてしまい、思わず笑みがこぼれた。

土方さん、あたしが動揺しないようにわざと何でもないように言うてくれたんだ。

小さな不器用な優しさに心がほっこりとあつたかくなつた。

あたしは部屋に入ると、濡れて重くなつた着物を脱いで、持ってきてもらつた襦袢と着物に袖を通した。

着物は薄紅色で、桜の模様が散らしてあつてかわいらしかった。

そつえば…女の姿で土方さんに会うのは遊女の密偵の時以来だ。

だからあの時、土方さんは驚いていたのか。

「水瀬、入っても大丈夫か？」

土方さんが帰ってきたらしい。

「はい。」

土方さんはふすまを開けてあたしを見ると一瞬目を見開いた。

「どうしました？」

「いや…何でもねえよ。」

それより飯と風呂も用意してくれるらしいから、風呂先入ってこい。

「

なんだか土方さんがそんなことを言うなんて夫婦みたいで気恥ずかしかった。

「じゃあ、お言葉に甘えてお先に失礼します。」

あたしは赤くなっているであろうことを悟られたくなくてぺこりと頭を下げ足早に部屋を後にした。

部屋を出ると一気に動揺が覚める。

馬鹿みたい…

こんなことで動揺して…

湯船につかるとかじかんだ足先や手先までびりびりと熱が伝わってきてほくして生き返るようだった。

「ふう…」

風呂桶の端に顎を載せてため息を一つ。

あったかいな…。

まさか土方さんと盆屋に泊まることになるとは思わなかった。

恥ずかしくてうれしいような複雑な気分。

でも浮かれてる場合じゃない。

だってあたしは十日後には新撰組を裏切るんだから。

土方さんに気付かれないようにしないと。

笑って今までどおりに…不信感を持たれないように。

「よじっ」

あたしは頬を一つたたいてお風呂から上がった。

### 第十一章 13・夢、来ない未来：土方歳三

あの時水瀬は確かに泣いていた。

壬生寺の境内で、雨に濡れて膝を抱えている水瀬は迷子の子供の様に頼りなく途方に暮れたような顔をしていた。

ただ一年ぶりに会った水瀬は薄い水浅葱の着物に身を包んでいてたおやかで美しくもうどうやっても男なんかには見えなかった。

俺は胸の奥に走る鈍痛に気付かぬふりをした。

俺を見た水瀬の目は赤くて泣いていたことが分かった。

何があつた？

俺はとにかくあいつを休ませようと思った。

あいつの手首は折れそうなほどに細くて華奢で、濡れた髪から柔らかな甘い香りがかすかに俺の鼓動を速めた。

近くにはあいにく貸座敷の名をかたつた盆屋しかなくて俺は心の中で舌打ちした。

だが、この雨の中冷え切った水瀬を連れて歩くには気が引けて俺は何でもない事のように言つたが、内心は穏やかではない。

山崎と、西本願寺に飛脚をやり、俺が部屋に戻つた時、水瀬は髪を解いて、盆屋の主人に借りた着物に着替えていた。

薄紅の春を思わせる桜の着物は水瀬によく似合っていた。

畜生。

こいつと今夜一晚過ごすのかよ。

何が何でも、山崎んと共に送り返すべきだった。

俺は自分の行動を悔やんだ。

\*

今水瀬は風呂に行っている。

まったくどんな顔してあいつに逢えばいいんだ。

「ああ、畜生！」

俺は悪態をつくところりと部屋の端に寝転がり、天井の木目を何ともなしに見た。

考えることは山ほどあるのに。

幕府の行く先、俺たちのこれから、伊東の策略…

それなのに、水瀬を見た瞬間そんなことはどうでもよくなった。

ただ、あいつが泣いている姿は儂くて、どうしようもないほどに心を揺さぶったから。

総司の言うことは本当だ。

俺は言い訳して逃げてるだけだな。

惚れた女と向き合うことから、自分の気持ちと向き合うことから。まったく情けねえ男に成り下がったもんだぜ。

俺は自嘲気味に口の端をゆがめた。

「土方さん、ただいま戻りました。」

ふすまが静かに開くと風呂から帰ってきた水瀬がそこに立っていた。温まったせいか血色がよくなり、頬が桜色に染まっている。

首元からちらりと白い肌がのぞき、髪を洗ったのか、濡れた髪からも湯気が出ていて、湯の柔らかな香りが鼻孔をくすぐり俺はあわてて下を向いた。

あほくせえ。

なんでこの俺が、女を知らないガキみてえに動揺しなきゃいけないんだ。

「ああ、俺も風呂行ってくるから、先に飯食つてろ。」

俺は水瀬から目をそらして部屋を出た。

\*

ザバン

勢いよく湯につかると俺は息を深く吐いた。

「ちくしょう……」

なんだってあいつはあんなに無防備なんだ。

上気した肌も、うるんだ瞳も馬鹿みたいに俺の心を乱す。

少し前に総司とともに密偵にやったが、総司のやつにもあんな表情を見せたのか。

総司も心穏やかではなかったらうな。

俺は困ったような総司の顔が脳裏に浮かび思わず笑みがこぼれた。奥手な弟分の顔を思い浮かべたら少し心が落ち着いていくようだった。

\*

風呂から上がって部屋に戻ると、水瀬は夕餉の膳に手も付けずにおとなしく座って待っていた。

「なんだよ。先に食ってるって言っただろ。」

俺の言葉に水瀬は小さく笑って茶化して答えた。

「そんな、鬼の副長より先にいただけませんよ。」

先ほど泣いていた奴の言葉とは思えない。いったいどうしたんだ？

俺は怪訝に思いながらも、特にそれには答えずに鼻を鳴らして水瀬と向き合う形で膳の前に座った。

「食つぞ。」

「いただきます。」

俺たちは夕餉の膳に手を付け始めた。

水瀬はゆっくりかみしめるように飯を食っていた。

俺は味噌汁を飲みながら、箸できんぴらごぼつの人参をよける。

水瀬はそれを見て突然噴出した。

「なんだよ？」

俺は眉をしかめて言った。

「土方さん人参嫌いなんですか？」

水瀬はいたずらっぽく目を輝かせて言った。

「悪いかよ。」

「うふふ、だって子供みたい。」

「水瀬！てめ！」

顔を真っ赤にして笑う水瀬を俺は睨み付けた。

「あははは、土方さん顔真っ赤。」

そんな俺を見て笑う水瀬を見ていたら俺はどうでもよくなった。

なんだよ、この優しいくすぐりたいような状況は。

なんでこいつが泣いていたのか、聞こうと思っていたが、どうでもよくなってしまう。

水瀬がここにいる、ただ笑っている。

それだけでこんなにも俺は救われる。

俺はこころろ笑い続ける水瀬の膳から、卵焼きを一切れつかんで口に放りこんだ。

「あ、あたしの卵焼き！」

「ふん、上司を笑った罰だ。」

「パウハラ！せつかくとしておいたのに！」

「ばわはらってなんだよ？隙を見せたほうが負けなんだよ。」

「職権乱用ってことです！」

こんなふうになんか話したことが今迄であつただらうか？

なんて柔らかで腹が立つくらい穏やかな時間。

まるで夫婦じゃねえか。



俺はこのくすぐったくてこそばゆいような時間を悪くないと感じていた。

俺はずっと修羅の道を歩いてきたしこれからもそうだろう。

俺の死に場所は戦場だ。

そう俺の魂が確信している。

死ぬその瞬間まで俺は走り続けるだろう。

そのことに何の迷いもない。

でも…なんだ？

この気持ちは。

水瀬を思うとき、俺は狂おしいほどの想いに駆られる、そして同時に柔らかで優しい泣きたくなるような気分させられる。

夫婦としてともに老い、共に死ぬ。

それはこんな風に一緒に飯を食ったり、笑いあったりする先に存在する未来なのだと思う。

今俺は、そんな泣きたくなくなるくらいに幸せな夢を見ているようだった。

それは決して訪れることはない切ないくらい幸せなもう一つの未来の姿だった。

## 第十一章 14・叶わぬ約束、さよならの夜

泣きたいくらいに幸せだった。

土方さんと向き合ってご飯を食べ、冗談を言って笑いあう。

まるで夫婦みたいで、少しくすぐったくて甘くて優しいそんな気分  
にさせられた。

時間が止まってしまえばいい。

夜が明けなければいい。

このまま、誰も知らないところに行ってしまいたい。

幸せな思いだけを胸にひっそりとここで生きていきたい。

でもそれはできない。

あたしは選んでしまったから。

裏切る道を。

もうこの先二度とこの人とこんなふうに向き合うことなんかできな  
い。

笑いあうことはできない。

次に会うときあたしたちは敵同志だから。

次に会うときはきつとあたしの最期の時だから。

あたしは笑いながら不覚にも涙ぐみそうになる。

だからはしゃいだ。

土方さんに呆れて「しょうがない奴だな」、そういわれて笑われて、

それにほっとした。

よかった。

笑ってくれて。

よかった。

笑えて。

ただ今だけは笑って過ごさなければいけないと思った。

\*

パタン、パタン…

雨の音が聞こえる。

灯を落としてどのくらい経っただろう。

隣には土方さんがいて、ドキドキして眠れない。

夕食のあと土方さんは盆屋のご主人に蒲団をもう一組持ってくるように頼みあたしたちは別々の蒲団に入って土方さんはすぐに眠ったようだった。

あたしからは背中しか見えない。

広くて大きな背中だと思う。

いろんなものを背負う大人の男の背中…。

あたしはこの人の背中ばかり見ている気がする。

向き合うことはない。

でも、あたしはこの背中を守りたい。

未来に向けて。

みんなが走って行けるように。

だから覚悟を決めなければいけないんだ。

自分の選択に。

不意に胸の奥が痛くなり、目頭が熱くなる。

あたしは寝返りを打って土方さんに背を向け口を覆った。

引きつむった目から熱い涙があふれてきて頬を伝って枕に滲みだ。

大好きだった。

ううん、今もまだ大好き、これからもきつと大好き。

土方さん。

土方さんにあえて本当によかった。

好きになれて本当に幸せでした。

「っ…。」

あたしは口を覆って嗚咽をこらえた。

いったん流れ出した涙は止まらない。

「…水瀬？」

土方さんの声。

あたしは答えることができずに背を向けて丸まっていた。

「どうした？」

土方さんがあたしに近づいて、抱き起すと顔を覗き込んだ。

「…。」

「無理すんな。ばか。」

黙ったままのあたしの肩を抱いて土方さんは小さな子供をあやすようにあたしの頭の後ろにぽんと優しく手を置いた。

その拍子に涙が零れ落ちあたしの膝に落ちた。

「…ごめ…さい。」

あたしは言葉をのどから絞り出す。

「ごめんなさい。」

あたしはあなたを、新撰組を裏切ります。

本当ならもっと気付かれないようにうまくやるべきなのに、弱い私を許してください。

「なんだ？」

「ごめんなさい…。」

「何謝ってんだよ。」

「…ごめんなさい。」

あたしは謝ることしかできなかつた。

「まったく…しょうがねえな。」

土方さんは呆れたように苦笑すると土方さんの着物の袖で、あたしの顔を乱暴にこすった。

そっけなくて不器用で、でもすごく暖かい土方さんの優しさが手のひらを通して伝わってきた。

涙をぬぐわれて目を開けると土方さんの形の良い瞳があたしを射抜いた。

こんなに間近でこの人と静かに向き合ったことが過去にあったら

うか。

あたしたちは何も話さなかった。  
ただ静かにお互いに視線を外すこともせずただじっと見つめあっていた。

雨の音が妙に大きく耳に届く。

パタン、パタン…

先に動いたのは土方さんだった。

ごつごつとした厚い手のひらがあたしの頬を挟む。

手は熱くて剣だこがあたしの頬にかする。

その刹那

あたしの唇は土方さんのそれで覆われた。

「！」

あたしは突然のことに目を見開いたけれどすぐにその甘美で柔らかな感覚に痺れていった。

初めて土方さんとキスしたのは土方さんが酔っぱらって寝ぼけてしたキスだった。

あの時はあたしと別の女性を間違えていて、胸がちぎれるくらいつらくて嫉妬していた。

それで、自分が恋をしていることに気付いた。

二度目は敵を欺くためだった。

あたしは遊女で土方さんは客だった。

だから演出としてのキスにすぎなかった。

それでもさすがに幸せで、そんな自分が切なくなった。

じゃあ、三度目は？

なんのためのキスなんですか？

土方さんの舌があたしの口内を侵食していく。

それは怖いくらいに、優しくて甘くて痺れるくらい幸せだった。

「んっ…」

あたしは苦しくなつて息を漏らした。

土方さんは唇を離した。

あたしは苦しくて肩で息をして呼吸を整えた。

顔も熱くて赤くなつていたと思う。

息を整えていくうちに動揺が広がつてあたしはテンパつた。

なんであたしキス…！

自分のしていることが信じられなくてあたしは口を手で覆つと一気に顔が熱くなつた。

「水瀬…。」

土方さんは低くかすれた声であたしの肩をつかんだ。

怖いくらい真剣な目をしていた。

「…！」

ビクン

あたしは土方さんの視線から目が離せなくなつた。

「…嫌か？」

土方さんは小さく言った。

でもあたしの耳には空気を震わせて十分に届いた。

「っ！」

あたしははつと息をのんだ。

その経験はないけれど、それを知らないふりをするほどあたしはもう子供じゃないし、鈍くもなかつた。

ここで、それをすればこの先、土方さんはあたしの裏切りにもつと傷を深くする。

だからするべきではない。

自分を律するべきなのだ。

でもあたしは結局自分の心にわがままになつてしまった。

嫌か？という問いに首を一度だけ振つた。

土方さんはそれを見て一瞬目を開き、そして次の瞬間あたしを蒲団の上に倒してもう一度、今度は強引に奪うように唇を重ねた。

どうしよう…あたし、今死ぬほど幸せだ。

土方さんはキスをしながら大きな固い手のひらであたしの着物の裾を割って足を撫でた。

一瞬昔の悪夢が蘇りそうになり、体がこわばったけれど、すぐにその甘い感覚に意識が奪われた。

シュツ

衣擦れがしてあたしの腰ひもが解かれる。

胸元のあわせが緩み、あたしの小さな貧相な胸があらわになった。

昔、土方さんに胸も色気もないと言われたことを思い出し思わず横を向いた。

あたしは死ぬほど恥ずかしくて思わず体をこわばらせて着物の胸元を合わせた。

土方さんは首筋にキスを一つ落とすとそれは徐々に胸元へと下がって行った。

土方さんに触れられた部分が熱く熱を持った。

「やつ…あ…」

あたしは我慢できなくなつて吐息を漏らす。

「そんなに煽るんじゃないよ…」

土方さんは切れ長の目を細めてかすれた低い声で甘い声で言った。

その声は頭の先から震えが走るほど甘美で優しくあてははるその幸せに酔った。

ごめんなさい、ごめんなさい。

あたしは今死ぬほど幸せです。

そして同時に自分の今犯そうとしている罪に心が暗くなった。

あたしはこの人を、新撰組のみんなを裏切るんだ。

なのにこんなことをする資格があるの？

あたしは徐々に冷えていく心を感じた。

そして目から一粒涙がこぼれた。

あたしはこの幸せに身を置きたいと思っっている…。  
それは許されないことなのに…。

不意にあたしから土方さんが体を離れた。

あたしははっと目を開いた。

そこには意地悪そうに口の端をあげて笑う土方さんがいた。

「え？」

あつげにとられていているあたしを前に土方さんは笑いながら何も言わずにあたしと自分の着物を整えて向き直った。

「馬鹿だなあ、無理してんじゃねーよ。」

「…。」

「まだ迷ってんだろ。ならやめとけ。」

「土方さん、あたしは…」「水瀬」「」

「その先は次に逢ったとき聞かせてくれ。」

その時は俺も覚悟を決める。

だからお前もそんな時覚悟が決まったらお前の全部を俺にくれ。」

あたしは小さく頷いた。

次なんて来ない。

来るはずもない。

だってあたしは死よりも遠いところに行くのだから。

でも、この約束が叶うことがなくても、それでも、夢を見たかった。土方さんはそんなあたしを見て満足したのか、静かに笑って言った。

「俺もさ、まだお前を抱く覚悟がねえんだ。この先のこと、とか、新撰組のこと考えたら中途半端にお前を抱いて不幸にしたくねえんだ。すまねえな、俺に意気地がなくて。」

こんな穏やかな土方さんは初めて見る。

でも、きつと土方さんの本当の姿はこんな風に優しくして穏やかなんだと思う。

そしてそのあと、あたしたちはただ抱きしめあって眠った。



お互いの心臓の音を聞きながら…

お互いの体温を感じながら…

こんな夜はもう二度と来ないだろうことは十分にわかっていたから、あたしは空が白んで朝が来るまで土方さんのきれいな寝顔をずっと見ていた。

この大好きな人の顔を心に焼き付けておきたくて。

この泣きたくなるくらいに幸せな時間を少しでも多く感じていたくて。

土方さん、

いつだってあたしは貴方の背中を追いかけてました。

この恋は虹を追いかける恋だって思っていました。

でももう届いていたんです。

あたしたちは出逢えるはずがなかったんですから。

それなのに時の理を歪めるくらいにあたしの魂が貴方を求めて出逢えた、これは泣きたくなるくらい、途方もない奇跡なんですよ。

あたし贅沢すぎたんです。

貴方に出会えただけでも奇跡なのに、こんなふうに同じ時を過ごせて、貴方と同じ夢を見て、貴方の寝顔を心に刻めて…本当に幸せです。

だからあたしはこの一瞬の幸せを糧にこのさきの永遠にも続くような修羅の道を歩いていきます。

たとえ、道がそこで分かれたれていても、進むべき方向が違ってしまっただけでも、心だけはあなたを想うことをどうか許してください。

こんな選択しかできないあたしをどうか憎んでください。

さようなら。

あたしは眠る土方さんを起こさないようにそっと蒲団から滑り出ると盆屋を後にした。

最後に一度だけ振りかえると、涙で歪んで愛しい人の姿は見えな

った。

雨上がりの世界は静謐。

そして信じられないくらいにきらきらしていた。  
それはもう戻れない愛おしい世界の光景だった。

水瀬がいなくなった。

山崎と共に住む屋敷の水瀬の自室に「思うところがあり隊を抜けます。お世話になりました。」と書かれた書置きを残していなくなっていたのだという。

それはまさに青天の霹靂、天地が逆転するほどの衝撃だった。

しかし同時にあの夜の水瀬の様子はもしかしたらこれを暗示していたのかもしれないと思い直した。

あの夜確かに水瀬は何かを隠し何かに思い悩んでいた。

それはこのことだったのだ。

なぜだ？

あの夜無理にでも聞き出していればこんなことにはならなかったか？

あの夜は人生の中でも最も優しく幸せな時間だった。

初めは泣いている水瀬を慰めたいと思う、ただそれだけだった。

ただ涙で潤んだ水瀬の黒い双眸が俺を射抜いた瞬間俺は考えるより先に口づけしていた。

ただ水瀬が愛おしくて懐かしくてそれ以外のことは何も考えられなかった。

太古の昔から魂に刻み込まれた記憶でこいつと結ばれたいと渴望していたのだ。

そして水瀬もそれに応えた。

水瀬の華奢で柔らかな体は俺の理性を霞ませた。

水瀬は緊張していたが俺自身も不覚にも泣きそうだった。

愛おしすぎて、こいつを壊しそうで怖かった。

自分にこんな激しい感情が存在していることに驚いた。

でも結局は最後まではしなかった、いやできなかった。

途中水瀬が迷っているのを感じてしまったから。

そして俺自身もそれを見てこのまま中途半端に激情をぶつけてしま  
うことはよくないと思ったから。

恋だの愛だの、そんなものは自分にとって邪魔にしかならないと思  
っていた。

修羅の道を歩む自分には永遠に享受できぬものだ。

だから今までかたくなにすべてを遠ざけていたが、水瀬と飯を囲み、  
水瀬と笑いあい、そして抱きしめ…そういう優しい時間は、俺を走  
らせる原動力なのだと思付いた。

俺はこの笑顔を守るために、こいつが生きた平成という未来へつな  
げるために、修羅の道を走るのだ。

志と新撰組のためだけに走っていると、戦っていると信じていた。

だがそれだけではないのだ。

水瀬を愛おしく思うことと、俺が戦うことは決して相反する道では  
ない。

だから、約束をしたのだ。

未来に向かって、俺が走り続けるために。

次に逢った時に水瀬のすべてをくれと。

あいつはいつか俺たちの前から消えるのかもしれない。

だからこんなふうには結ばれようとするのは間違っているのかもしれ  
ない。

でも…あいつの笑顔を見ているうちに思った。

これは決まっていたことなのだ。

俺がこいつに出逢うことも、

俺がこいつに惚れることも。

これは抗い様のない魂の宿命なのだと思っただ。

なのに…

水瀬、お前はなんでいなくなっただ?

お前は決めてたんだ?

だったらなんであんな約束したんだ!?

次に会うとき、俺は：お前を殺すんだぞ。

監察方のお前が隊を抜けるとき、それは死しかありえない。

なのになんでわざわざ書置きなんて残していなくなったりしたんだ？！

お前は絶対に俺らのそばからいなくなるなんて考えてもみなかった。でもお前は脱走した。

お前だつてわかつてるはずだ。

これは裏切り。

裏切りには死しかありえぬ。

俺は副長としてお前を斬る命を下す。

畜生、畜生！

お前は何を思つて隊を抜けたんだ？

なあ、水瀬：

お前、残酷なことさせる…。

俺はお前を殺して、そのあとどんな風に生きていけばいい？  
教えてくれ…。頼む。

\*\*\*

まことがいなくなった。

山崎さんの家から書置きを残して急にいなくなつたらしい。

覚悟の失踪…

私はそれを聞いたとき、地が揺らぐと思うほどに、動揺し、そして血が逆流するほどの怒りを覚えた。

あんなに新撰組と共に生きると言っていたではないか！

それなのになぜ私たちを裏切つた？

山南先生を私たちが処断しなければいけなかつたとき、あんなに泣いて苦しんでいたのに、私たちにその思いを再びさせてでも、隊を

抜ける必要があったということなのか!?

なぜ何も言わなかった?

どこにいる?

私たちは、君を斬らねばならない。

昨日までかけがえのない仲間だと、そう思っていた君を、明日にでも裏切り者として斬らねばならない。

それすらも覚悟の上で、君はいなくなったのか?

まこと、不思議だね。

誰よりも愛おしいと思っていたのに、今私はこんなにも君が憎い。人は愛おしいと思えば思うほどに、裏切られたときに憎む心が強くなるのかもしれないね。

土方さんにこの選択をさせてまでしたかったことってなんだよ?

あんなに想っていたじゃないか!?

思いあつていたじゃないか?

あんなに私たちを見守るといったじゃないか?

なのに…なんでなんだよ!?

次に逢った時、私はまことを殺すよ。

私は…武士だから。

\*\*\*

水瀬が消えた。

ただ書置きを残して…。

水瀬…お前はなぜこんな残酷な選択をしたんだ?  
俺らにお前を斬らせるのか?

水瀬がいなくなってから、幹部たちの様子は傍目には平常と変わらなかつたが、みな心に深く傷を負って動揺していた。

沖田さんは目に昏い光を宿し、まるで、京に出てきたばかりの頃のように冷たい冴え凍る月のようにただ隊務に没頭した。

副長は「裏切り者には死しかない」そう言い、俺らに追捕の命を下した。

なんの揺らぎも見せずに。

ただそれが血を吐くほどの無理の上に成り立っているものだということを感じけるくらいには俺もあの人の付き合いが長くなっていた。

永倉さんも、原田さんも、藤堂さんも、それぞれに動揺し、副長の命に食つてかかったのは藤堂さんだった。藤堂さんはまっすぐな熱血漢だから、彼の誠が許さなかつたのだろう。

藤堂さんは山南総長の時も人知れず泣いて、総長に取りすがつて逃げるように最後まで説得しようとしていた。あんな風になつてすぐ感情を出して生きることができない藤堂さんに少しうらやましさすら感じた。

次にお前に逢つた時、俺はお前を斬れるだろうか？

俺はきつと斬るだろうよ。

俺はそれを武士の誠と思ひ自分を奮い立たせ、きつと斬るだろう。だがそれをしたとき、俺はもう人ではいられなくなる気がする。

否、もうすでに鬼なのか。

お前を斬つた後、俺は涙を流せるだろうか？

\*

「……う、斉藤！聞いておるのか？」

「！

申し訳ありません。」

不覚だ。

今、俺は黒谷の会津肥後守様のところに報告に来ていた。

「いや、よい。水瀬は余も何度か逢つておる。まっすぐないい目をする女子だった。」

女子にするにはもつたいないほどの潔さと度胸を兼ね備えた人物だった。新撰組の中でも慕われていたことだろう。皆が動揺するのも無理はない」

この方の聡明さには頭が下がる。

俺は肥後の守様に平伏した。

「恐れ入ります。申し訳ありません。」

「時に斉藤。これは他言無用のことなのだが。」

「はっ。」

「以前新撰組に解散の命が下されるといふ命が内々にあつたのだ。」

「なんと!？」

なんだと？

そんな命があつてなぜ俺たちは無事なのだ？

「猶予をとということで、余が上の方と掛け合っているうちにいつの間にか立ち消えたのだが、それがうやむやになった頃と水瀬が失踪した時期が重なっているのだ。」

「…そんな…。」

どういうことだ？

水瀬がまさか、新撰組解散を止めるために動くためにいなくなつたとしたら？

「これは余の推測でしかない。だが水瀬は取引したのではないだろうか？

新撰組解散の命を止めるために。通常ではいっただん決まったことが覆されるなどありえぬ。

よほどの重役が命じぬ限り。

つまり誰かの思惑が働いたのだ。

だが仮に水瀬が命を退けるために動いたのだとしたら、そんな重役



とどこでつながりを持ったのか、わからぬことばかりだ。」  
「なんとということだ！」

符号が合いすぎる。

水瀬：お前は仲間に自分を斬らせる覚悟で裏切ってまで新撰組を守ろうとした？

そういうことなのか？

俺は雷に打たれたような衝撃が体中を駆け抜けた。

こうしてはおれぬ。

事実を調べねば！！

「肥後の守様、水瀬の真実を突き止めて、報告に参ります。」

「うむ。頼んだぞ。」

「承知！」

俺は黒谷を飛び出して足早に屯所へ戻った。

## 第十二章 2・知らぬ苦しみ、知る痛み：斉藤一

俺は黒谷から屯所へ戻ると、監察の山崎さんのところへ走った。

極秘任務が多い中で直接訪れるのはご法度だが今は構っていられない。

「山崎さん！」

俺は戸を引きあげた。

入口に現われた山崎さんは驚いたように細い目を見開くと少したじろいだ。

「斉藤せんせ、困るわ、こんなところに来て……。」

「山崎さん、あんたなんか知ってるんじゃないのか？水瀬がなぜいなくなつたのか。」

俺は山崎さんをまつすぐ見据えて言った。

「なんや……？」

山崎さんは特に表情を崩すこともなく静かに言った。

「俺の知っていることをすべて話す。だからあんたも言ってくれ！水瀬は新撰組のために、俺たちを救うためにあえて姿を消したんじゃないのか！？」

もどかしい。

水瀬を救えるものならその手だてがほしい。

「……」

無言はすなわち肯定か。

「沈黙は肯定ととっていいのか？」

「それが肯定かどうかあんたの応え次第や。

あんたはそんなことどこで聞いてきたんや？」

「……」

俺が会津の密偵だということは誰にも知られてはならぬ事実。

俺が今度は押し黙る番だった。

先に我慢が出来なくなつたのは俺のほうだった。

「俺はとある方から密命を受けておる。だがそれは新撰組を裏切るものではないと天に誓って言おう。」

その方から聞いたことだ。」  
「…ふん、あんたもきな臭いおもったがそういうことか。察する通りや。」

水瀬は新撰組を助けるためにあえて裏切った。それが死を意味するもんでもな。」

山崎さんは腕を組んで目を細めた。

この男はまるで武士には見えぬ。

あるときは商人に、ある時は町人に、ある時は物乞いに、まるで百面相のようにその様相を変える。

だが今俺を見据えるこの目は物事の真を見極める武士のものだった。

「水瀬はどこに行った!？」

痺れを切らして詰め寄る。

「それを聞いてどうするんや!? 水瀬を助けられるんか? あいつはどうにもならんことをしつとる。」

どうしたって新撰組がこの先存続するためには自分が消えねばならんことをしつとるから…

だから消えたんや。そのことを知らせたところでどうにもならんことやから裏切ったんや。」

「…」

ぐうの音も出ぬ。

例えどんな事情があろうとも、水瀬を救う手だてなど、肥後の守様でも無理だったのだ。

たかが浪人風情の俺たちにできるはずがないのだ。

「水瀬がすべてを隠して裏切ったのはほかでもない、俺らのためや。自分が裏切ることで俺らを傷つけることも全部わかったのこともや。」

せやけどそうすることでしか俺らを救えんから…血を吐く思いで離隊したんや。水瀬はそれを知られることを望んどらん。俺たちにて

きるのは水瀬の覚悟を無駄にしんように、務めるだけや。」  
確かにそうなのだろう。

水瀬は自分のためには何一つ望まぬ。

それでもそのことに満足して凜として潔く笑える、そんな女だ。  
だが…。

「山崎さん、あんたは知っているから…知っているが故の苦しみもあるだろうが、思い切ることまでできるだろう。だがただ残された俺らは何も知らん。知らないということは何よりも苦しい。事実がわかっていれば皆それに向き合うこともできるだろう。水瀬がいなくなったことで、裏切られたことに皆苦しんでいる。何よりも真実を欲しているのだ。」

「確かに水瀬一人が苦しむ道理はない。ただあいつは覚悟を決めて何も言わんことを望んだんや。

あいつの想いを俺は受け取りたいと思うとる。」  
「俺らが今以上に苦しむことになったとしても、それでも俺らは知るべきだと思う。自分たちが己の誠のために何を犠牲にしたのか知るべきだ。そうは思わないか？」

沈黙

そして山崎さんはおもむろに口を開いた。

「…水瀬は…桂小五郎のところにおる。」

そして桂の裏には勝海舟が手ぐすを引いてる。長州と幕府は裏でつながつとるんや！」

「！」

山崎さんは観念して吐き捨てるように言い、俺はあまりの衝撃に言葉を失った。

なんだと！？

倒幕派と佐幕派が裏でつながっている？

こんなバカげた話があるのか？

では俺たちは何のために戦っていたのだ？

「…そして水瀬の秘密がばれた。」

「なぜだ?! つまさか、間者か!」

「清水新之助、らしい。」

今は泳がしとるが…。いつでも締め上げるだけの用意はあるで?」

「くそっ!」

事態は思ったよりも深刻だ。

水瀬は…そんな状況もすべて飲み込んで死地に向かったのか?

「これで、満足か…? これを聞いて揺らがん人間はおらんやろ…。」

俺らの存在意義、根本そのものが揺らぐ。こんなこと言えるはずがないやろ…。」

「…。」

何も言えなかった。

複雑に糸が絡み合っていて…

でも見えないようにしていても何も変わらぬ。

時代の波がうねり、容赦なく俺たちを翻弄する。

俺たちは何のために戦ってきたのだ?

幕府を守る、そのために戦ってきたのではなかったか?

倒幕派と幕府の要人が裏で手を組んでいる。

これは何の茶番だ?

知らなければ何も考えずに走って行けたらう。

ただこれが未来のためにできることだと信じて行けたらう。

だがもう知らない頃には戻れぬ。

知らずに水瀬の裏切りを憎むことと、

知ってこの八方塞がりの状況に苦しむことと、どちらが辛いのだろう?  
う?

否、愚問か。

仮にも愛おしいと、惚れた女を憎まねばならないくらいなら、知つてこの状況を打破するために、血を流してでも己の誠を見極めるほうがきつといい。

水瀬…すまん。

知られたくないことを無理やり聞き出して。

だが…お前ひとりに背負わせるわけにはいかない。

そんなことをすれば男がすたる。

お前はお前の戦いをしている。

ならば俺たちも俺たちの戦いをする。

お前の心、思い、確かに受け取ったぞ。

第十二章 3 雪のよじに、涙のよじに…沖田総司（前書き）

長い間更新が滞り申し訳ありませんでした。

ようやく話にも終わりが見えてきました。

どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

第十二章 3・雪のように、涙のように…沖田総司

ヒュッ

ヒュッ…

刀が風を切る音…

あとからあとから際限なく降ってくる桜の花弁を切る。

ただ暗闇に浮かび上がる桜の花弁はまるで涙のように、雪のように降り積もる。

夜の冷気に上気した肌の熱が溶け込んで、闇と一体になる。

眠れない…。

自分の感情が制御できない。

怒りや悲しみや苦しみ…そんな生易しい言葉でこの感情をどう表したらいいのかわからない…。

私をこんなにも揺らがせる人間…水瀬真実。

この世でいちばんいとおしいと思い、そして同時に憎いと思う。どうして私はこんなにも心が揺れるのだろうか？

「何してる？」

不意に後ろから声をかけられ振り向いた。

「斉藤さん…」

斉藤さんが着流し姿で腕を組んで立っている。

この人もまた心を揺らしているのだろうか。

「あんたはいくらも寝ていないだろう。体を崩したら組長は務まらないぞ。」

斉藤さんが低い声で言った。

「眠れないんです。考えてしまっ…」

情けない話だが私はまことがいなくなっしてから寝付けない日々が続



いていた。

「水瀬のことか。」

それしか考えられないと言った風で斎藤さんが言った。

「自分がこんなにも誰かに囚われるとは思わなかった。何故あの子が居なくなっただのか、何故新撰組を裏切ったのか…考えれば考えるほど止まらないんです。」

考えるのは苦手なのに…おかしいですね。」

私は自嘲気味に口の端を無理やり引き上げて続けた。

「わたしはまことを憎んでいるのかもしれないんです。沸いてくるのは怒りなんですよ…いろんな事情があるかもしれないのに、まことが居なくなっただ、その事実は怒りしか生まれないんです、勝手だと思います。もしかしたらここに居たくないのかもしれないのに…。」

次にまことに会ったら私は彼女を憎しみで、怒りで斬ってしまうかもしれない…

そしてもう剣を持ってないかもしれないとさえ思うのです。

そんな自分に吐き気がします。」

私は今までぐるぐる考え続けたことを一気に吐露すると、斎藤さんは鼻で笑った。

「子供だな…」

「！」

顔に一気に血が上る。

「俺にそれを言っただけをなめあおうと思ったのか？」

あんたは結局自分がかわいいだけだ。

水瀬が居なくなっただ、自分が見捨てられたような気になっているだけだろう。」

慰めなどを期待していたわけではない。

ただ、斎藤さんならば分かち合える気持ちなのではないかと思ったのだ。

「違います！！信頼してるから、仲間だと思うから、裏切られたこ

とが苦しいんです…！」

私は思わず捲し立てたが、それは凶星だった。

確かに私は自分の怒りを正当化しようとしたにすぎぬ。

人は凶星をつかれるとこんな腹が立つのか。

「だったら…！だったら何故水瀬が裏切らなければならなかったと  
考えぬ…！？」

斎藤さんは不意に私の襟元を掴みあげて睨み付けて言った。その目にはやりきれなさが浮かんでいて、そしてまたかつてないほどの殺気をみなぎらせ、血走っていた。

なぜこんな目をするのか…

その可能性に思い当たった瞬間私は思わず斎藤さんの肩を掴み返していた。

「斎藤さんは…知っているんですか…？」

「…」

「教えてください！何を知っているのですか…！」

沈黙が全てを物語っている気がした。

「教えてください…！何故なのです！？何故まことが居なくなっ  
たんですか…！」

私はさらに斎藤さんに詰め寄った。

「…俺たちの命を救う為だ。」

「え…！」

「俺たちの命と引き換えに、水瀬は敢えて新撰組を裏切つて敵方に  
渡った！俺た

ちが走れるように…！」

「そんな…！」

全ては新撰組を守るため…

私は雷に打たれたように立ち尽くした。  
全身に震えが走り、総毛立つ。

まことは裏切り者と蔑まれる覚悟も、敵だけではなく仲間に殺される覚悟も…何もかもを失う覚悟をして身を引いたのか…！

…なんてことだ…！

自分の気持ちだけにとらわれて…真実を何一つ見極められなかった。こうして斎藤さんに言われるまで、考えも及ばなかった…。

私はただうなだれてうつむくことしかできなかった。

「だから俺たちは走らねばならぬ。水瀬は血を吐く思いで守ったんだ。だから俺らは水瀬をこの手で殺すことになっても、水瀬の想いを無駄にするわけにはいかぬのだ…！」

こんなところで子供のように震えている暇などどこにもない！  
沖田総司！！貴様も武士ならば覚悟を決めろ！」

斎藤さんはいつになく激しい口調で言う。踵を返して去って行った。

私は雷に身を打たれたように立ち尽くした。

水瀬を殺してでも…

その一言に震えが走った。

真実を知っても私たちがとるべき選択は変わらない。

でもまことの想いを受け取った上で、自分たちがその選択に死ぬほど苦しんだとしても私たちは彼女を殺すのだ。

私はその覚悟をしなければいけない。

まことはそれを私達に託しているのだから。

ねえ、まこと…

君は今どこにいるの？

何を思い、どれほどの決意と覚悟をもって新撰組を離れたの？

次に会うとき、私達は君を殺す。  
これはきつと避けられない運命。  
だから約束する。

きつと君の想いを受け取る。  
きつと君の想いをつなく。

でもね、ただ一つ願いがかなうのならば…  
君に逢いたい。

それは過ぎた願いなのかな？

空にはおぼろ月。

闇夜に浮かぶは枝垂桜。

降りしきる雪のように涙のように花弁が散っていく。  
それは永遠に続くように思われた。

## 第十二章 4・桂邸、格子窓の空

新撰組を抜けて一か月。

いつの間にか桜が終わってしまった。

あたしがここにきて三度目の桜の季節が過ぎた。

桜の時はいつも感傷的な気分させられる。

あたしは土方さんとの一夜を過ごしたあと山崎さんの家に戻り荷造りをしてすぐに隠れ家を後にした。

山崎さんにあてた手紙と、みんなへ向けた置手紙を残して。もう限界だった。

こんな選択しかできない自分も、こんな選択を迫ってくる桂も、こんな状況を作り出したあの役人も、全部に腹が立って、でも、一番悔しいのは、土方さんと近づいてしまったことで自分がどうしようもなくあの人に未練を持ってしまったことだった。

もともと無ければ諦められる。

否、自分の気持ちに折り合いをつけられるはずだった。

でもいったんあの優しさに触れてあの腕を知ってしまった今ではどうしようもなく恋しくて、愛おしくて、あの幸せがほしかった。

あたしはわがままになってしまった。

同じ誠を見て、志を胸にして、共に走っていければ幸せだった。

なのに土方さんと共にご飯を囲み、その腕のぬくもりと、優しさを知ってしまったから…。

一緒に居たいと、離れたくないと望んでしまった。

…結ばれたいと望んでしまった。

馬鹿すぎる。

あたしは自分で裏切る道を選んだのに。

そして決して土方さんとは結ばれない運命なのに。

なのになんでわざわざ自分で自分の首絞めたんだろう。  
未練だけが残って…  
辛いだけじゃん。

家を出た後、あたしは西本願寺の近くに行つて遠くから懐かしいみんなに心の中でごめんなさいとさよならをした。そしてその足で桂の屋敷に赴いて、予定よりも早いけれど、あたしは桂の家に世話になれるように頼み込んでおいてもらった。

桂は驚いていたようだったけれど何も言わずにあたしを部屋に案内してそのあとに、名前を変えろと言った。でも正直どんな名前でもよくて、あたしは偶然庭にある松の木が目に入ったから、「松」だけ言つと、

そんなあたしを見て桂は、遊女を身請けしたことにするから、「幾松」と名乗れと言い、あたしは同意した。

本当の名前はもう二度と名乗れないだろうから、どうでもよかつた。思えばあたし、名前ばかり変えていて、その度にどんどんあたしは自分を失っている気がする。

前にもつとまつすぐでいられた。

自分の気持ちに。

自分の信念に。

それが当たり前だと思つていた。

でもそうじゃない。

自分の気持ちに正直で居られること、自分の大好きな人がそばにいることは、とんでもなく幸せなことだったんだ。

”大切なものはなくしてから気づく”なんて、あまりにもありきたり過ぎて笑つてしまうけど、本当にそうだ。

今ある幸せが明日もあるとは限らない。

今の自分の気持ちが明日も真だとは限らない。

こんなにも物事は移ろいやすくて、足早にめまぐるしく変わつていく。

最近、見張り付の自室で格子戸越しの窓の外に見える瑞々しい若葉を見ながら、ぼんやりと思いをはせる。

この時代に生まれ普通に育っていたらあたしはどんなふうになんか迎えていたのだろうか？

もしかしたら土方さんと夫婦になったりするようなこともあったのだろうか？と。

けれどそれは一瞬のことですぐに自嘲してそんな妄想を打ち消す。

この時代に育ったら、今みたいな価値観をあたしは持たなかった。

きつと新撰組に入ることなんてできなかつただろうし、みんなに出逢うこともなかつたはずだ。

だからあたしはこんなふうなタイムスリップしてきたことを幸せに思うのだ。

家族と会えないことも、好きな人と結ばれなくても、大好きな仲間と最愛の人の生き様を見届けられるのだから、これを幸せと呼ぶな  
いでなんと呼ぶのか。と。

そうしなければ立っていられないから。

居場所も、仲間も失くしてしまった今、自分のこの思いが、行動が無駄ではないと、自分の幸せは確かにあそこにある、今に続いているのだということを確認して奮い立たせなければ、自分の存在が崩れてしまいそうだった。

不意に優しい春の風があたしの耳を掠めた。

もうすっかり散ってしまったはずの桜の忘れ形見をどこからか運んできた。

ハート形の桜の花びらが一枚やってきてあたしの膝に落ちた。

あたしはそのひとひらをそっとつかむとしつかりと胸に抱いて目と閉じた。

目を閉じていてもいつかみんなで行った壬生寺の枝垂桜がありあり

と見える。

みんなの笑顔が思い出せる。

過ぎし日の思い出はどうしてこんなにも泣きたくなくなるくらいに幸せで、輝いているのだろうか。

あたしは瞼が熱くなってくるのを感じた。

新撰組という居場所も、仲間も、家族も、好きな人と共にあるという幸せも失くしてしまった。

でも大丈夫。

この思い出があれば、あたしはまだ走っていける。

離れていても幸せのかけらを拾うことができる。

だからせめて思い出だけは消えませんように。

あたしの記憶に、ううん、できることなら魂に刻み込んで永遠に忘れることがないように、あたしを形作る一部として息づいてほしい。

ねえ、みんな、

きつと走ってくれませんか？

志のために、鉄よりも固い結束をもって。

そしてあたしを斬りに来てくれるでしょう。

待ってるからね。

\*

ここにきてから桂はあたしに毎日未来について聞き出そうとして他愛ない話や、時に日本の未来について目を輝かせながら語った。

その屈託のない笑顔は武士への夢を語る近藤先生とダブって見えてあたしはうっかり気を許してしまいそうになった。



桂郎では座敷牢みたいになったところに入れられていて、外にはいつも見張りがついていた。

何をするにでも見張りが付きまどってきたけれど、ある程度の自由は許されていてたまに外に出ることもあった。

まぶしい太陽と萌える新緑の空気は爽やかであたしを浄化させてくれるような気がして少しだけ気が晴れた。

見張りは男女問わず、あからさまにあたしのことを侮蔑の目で見ていたけれど、それすらもあたしにとってはどうでもいいことだった。毎日することはなくて、ただ格子のはまった窓から見える四角い空を見て過ごした。

四角い空からでも季節の移ろいは見て取れて最近ではもはや初夏の濃い青が目染みだ。

桂は毎日あたしからそれとなく未来の話を引き出そうとしていることが感じられたけれど、あたしは意地でも何も話さなかった。あたしはどのみち詳細な未来を知っているわけではないし、新撰組についても話せることなんて何もなかった。新撰組を裏切ったあたしだけ、でもそれでも彼らに不利になることなんて絶対話したくなかった。

桂が時折あたしの関心を引こうとして新撰組の名前を出したけれど、逆効果だった。

罪悪感が増すばかりで、あたしは俯くことしかできなかった。

「幾松」

音もなくふすまが開いて桂が入ってきた。

あたしは振り向くこともなく窓を見て黙ったままだった。

「強情な御嬢さんだ。」

邪魔な將軍はもはや死の床だ。君の協力が必要だ。

今日こそは話してもらおうか。」

桂の声色がいつもより怒りを含んでいる。

あたしは振り向いて桂の目を見据えて言った。

「あたしは何も知らない。未来から来ても歴史を全部知っているはずないじゃない。」

あたしは何度繰り返したかしのセリフを言い終わったその時、

桂はあたしの腕をとり、畳に押し倒した。

「！」

あたしはとつさのことで体を硬直させ、なされるがままになり、目を見開いた。

畳のい草の香りが濃くなった。

「知っていることをすべて話せ。今が我々にとっても、君にとっても正念場なのだから。」

あたしを覗き込む桂の表情は、桂はいつもの余裕たつぷりのそれではなくて、ぎらぎらと血走った目からは殺気があふれていて雄特有の征服者の気配が感じられて、あたしは本能的に身をすくめた。

あたしは背筋に冷や汗が伝うのを感じた。殺される…。それは本能的な恐怖だった。

「…知らないって言うてるでしょ！！離して！！」

あたしは桂を手で押しやるうとしたけれど、いともたやすく片手で両方の手首をつかむと空いたもう片方の手であたしの顎をつかみあげ息がかかるくらいに顔を近づけて言った。

「君にだけは手荒な真似はしたくない。新撰組の内部情報と、未来の情報をお話すんだ。」

桂の声は静かだったけど、低くて殺気に満ちたものだった。手荒にしたくないが聞いてあきれれる。

笑顔でぎりぎりと言首を締め上げてくる。

今世の中では何が起きているのだろう？

この人は何をこんなにあわてているのだろう？

「…」

「…」

あたしたちは長い間目をそらさずに見つめあっていた。

「あたしは何かあっても貴方に協力なんてしない。」

「…！」

殴られる。

そう思った。

とその時。

「桂先生、お待ちのお客様がいらっしやいました。」

ふすまの向こうから声がした。

「わかった。今行く。」

答えた桂はいつもと変わらない穏やかな調子だった。

「…君も来るんだ。支度をしなさい。」

あたしは怪訝に思いながらも有無を言わせない様子の桂の言葉にうなずくしかなかった。

## 第十二章 5・優しい未来

母屋の客間にたどり着くと、そこにはつり目の切れ長な一重まぶたで、きつちりと羽織はかまを着付けたいかにも官僚みtainなみtainな人と、対照的に、永倉さんみtainな無頼姿にぼさぼさな髪をした人がいてあたしは思わず眉をひそめた。

何？この人たち？

「桂先生、久しぶりやのう？」

ぼさぼさの人は頬にえくぼを作つて満面の笑顔をして見せた。見ているこつちまで笑いたくなるような素敵なお顔で、あたしは最初に胡散臭いと思つた自分を恥じた。

「ああ、坂本さんも、勝さんも変わりないよううで、何よりだ。」

あたしは思わず息をのんだ。

この人たちは…坂本竜馬と勝海舟…？

あたしは全身総毛立つのを感じた。

明治維新の英傑たちが今生きてあたしの目の前にいるのだ。

「幾松は、この二人が誰なのかわかつたよううだね。」

桂はあたしの反応を見て満足そうに言つた。

目の前で、桂と、勝海舟と、坂本竜馬は酒を酌み交わしている。

あたしはただ呆然と感激にも似た思いでその様子を見つめていた。この人たちには言い知れぬオーラがあつて、人を引き付ける。

「幾松、お二人に君を紹介しよう。」

勝さん、坂本さん、この娘は幾松というもので、先日私がお話した例の女です。

幾松にはもうこの二人が誰だかわかつているよううだが。」

桂が悠々とあたしを紹介し、あたしはぺこりと頭を下げた。

「幾松です。どうぞよろしくお願いします。」

この圧倒的なオーラの前についつい及び腰になる。

「幾松とやらは、われらのことをどう聞き及んでいるのですか？」

「そうじゃ、わしらが名乗らんうちにわしらを見極めたっちゅうことは、未来から来たゆうんはホンマ何んか。」

矢継ぎ早に言う二人を見ながらあたしは不思議な気分陥った。

新撰組、桂小五郎、勝海舟、坂本竜馬：歴史の偉人達もこうして目の前に確かに生きているのだと知る。

でもあたしはこの人たちに話すことなんて何も無い。

「あたしは何も話しません。未来のことなんて語れることは何もありません。」

「幾松！」

桂があたしを厳しい声で制する。

「まあまあ桂さん。幾松は新撰組に身を置いていたそうじゃないか。言ってみれば桂君は敵だ。そうそう手の内を語れるものじゃないさ。」

勝さんはつり目を下げてあたしに向き直り続けた。

この人は近藤先生みたいなどっしりとした風格を感じさせる。

「君は俺がどういう人間か知っているだろう。幕府に身を置きながら倒幕派とも通じる裏切り者だ。先の世に私のことがどう伝わっているのかはわからない。だが、私も、桂君も、坂本君も信念のために動いている、君が信じる新撰組と同じように。すべては日本のために。」

今は幕府だ、攘夷だと小さなことで悩む場合ではないのだ。アメリカ、フランス、日本を虎視眈々と狙っている国はごまんとある。日本が外国の植民地になるかどうか今はその正念場だ。

それなのに当の日本の国内ではいまだに古い因習に囚われ大局を見ようともしない。

俺の意見を言おう。俺は幕府は存続すべきではないと思う。そして無駄な血を流さぬように、少しでも外交に体力を蓄えて、外国に向かつていくことがこれからの俺たちには必要なのだ。」

だから桂はなりふり構っていられないのだ。

もうそんな猶予はないということだろう。

「まったく勝先生の言うとおりじゃき。日本は今変わり目にきちよる。今は日本人同士が争うとる場合じゃないが。」

坂本さんが屈託のないまっすぐなまなざしであたしをみた。

その瞳はきつとどこまでも遠い未来を見つめているのだと実感した。勝海舟が、桂小五郎が、坂本竜馬が後世に語り継がれていくその意味が分かる気がした。

まぶしいくらいに未来を語る。

そしてその志は少しもぶれない。

この人たちがいたから、あたしたちは目覚ましい近代技術革新の恩恵を受けた150年後の世界にいられるのだろう。

あたしは気が付くと泣いていた。

頬に伝う涙の意味はあたし自身にもわからない。

ただ、次から次へと流れる涙はとめどなくあふれてきてあたしはただ俯くことしかできなかった。

それぞれに、それぞれの誠がある。

その先にあるものはより良い日本の未来なのに、どうしてこんなにも血が流れるんだろう。

「少しいろいろ言い過ぎたかな。」

桂はあたしを見て苦笑して言った。

「幾松、私たちが君をこちらに招いたのは君の出自を利用しようと思っただけではない。

君はまた怒るかもしれないが君の幸せを考えた末のことだ。

新之助が言っていた。

君は何度も危ない目にあつてきていると。内部に君をよく思わないものが君を貶めようとしていると。だからこれはよい機会だと思つたのだよ。

君は信じないかもしれないが、私は君を良く思っている。意志の高い、同じ未来を見られる人間として、女性としてもね。だからどうしても手元に置きたかつたのだよ。」

桂は土方さんと似ているようで似ていない。

土方さんはそんなふうには齒の浮くようなセリフ言わないし。

あたしは思わず笑つてしまった。

「キザな人……。」

「博愛主義者なんだ。」

桂はおどけたように言う。

あたしが今ここでこうして桂たちと向き合っていることは新撰組とつての裏切りなのかもしれない。

でも、敵かもしれないけど、あたしはこの人たちが嫌いになれない。日本の未来を真剣に思うこの姿はあたしの大好きな人たちと同じだったから。

あたしはそれまで意地になつて言えなかつた言葉を口にした。

意地でも協力したくないと思つていたのに、この人たちの誠に触れてしまつたら、そんな風に意固地になつてることがひどく小さなことのように思えた。

「あたし、本当に詳しい歴史は知らないんです。

だからいつどんな未来が待っているかなんてわからない。

でもこれだけは言える。

貴方たちの考えが、思想が次の日本を創る。

日本の未来を切り拓く。

でも、それは幕府も新撰組も攘夷派も全部があつてその未来が来ることを忘れないでほしいです。

皆それぞれの誠があつて譲れないものがあつて、でもそれは方法は違つかもしれないけど、すべては日本の未来を思つてのことなんです。だから、きつと150年先の未来につなげてください。」  
これが今言えるあたしの精一杯のことだから。

桂が沈黙を破つてあたしに向き直つた。

「これだけは聞かせてくれ。幾松：未来はやさしいか？」

あたしはふと考える。

優しいかどうかなんて考えたこともなかった。

自分の世界に疑問を持つこともなかった。

戦争や腐敗政治、税金、経済……

すべてが遠くて恥ずかしながらそんなことを考えることすらあたしは150年後の世界でしなかつた。

でも、それを考えずに生きていられたことは紛れもなく幸せだったのだから。

それが正しいかどうかと言われれば否だと思つけれど、この時代から考えれば豊かさや人の生死の面においては間違いなく「優しい」だろう。

「はい。日本は飢えることも、病気で早死にすることも、戦争もなくなりました。日本は豊かで、長生きできる世界でも有数の経済大国になっていきます。未来では月にだつて行けるんです。」  
平成の日本には本当はたくさんさんの問題が山積みだ。

この人たちが目指す優しい未来とは違つているかもしれない。

でも今この人たちにそれを言う必要はない。

それは150年後のあたしたちが考えて解決していくべき問題だから。

だから、たとえ敵でもこの人たちが走つて行けるように後押しができたらいと思つ。

「月に行けるだなんてそんな夢みたいな世界が来るか？そんなこと聞いたら力が湧いてくるようじゃな。」



坂本さんは笑って言った。

屈託がなくて子供みたいに無邪気で澄んだ笑顔だった。

「俺たちがやるうとしてしていることは間違っちゃいない。ただ幾松の言うとおり、俺たちだけが正義じゃないってことを胸に止めとかなんといけないな。」

勝さんは静かに笑ってしみじみと言った。

あたしはここにきて今までになく静かな気分でいられた。

あたしが新撰組を裏切ってもあたしはみんなが好きだ。

でもそれでも、あたしは桂や、勝さん、坂本さんの思う未来を応援したいと思う。

これは裏切りかもしれない。

でも、それでも、あの人たちの誠と新撰組の誠はあたしにとってはどちらも優しい未来につながるものだと思えた。

## 第十二章 6 天使の梯子、自分に恥じぬ生き方

勝さんと坂本さんは帰って行くころ、空には満月が浮かんでいた。

あたしは自室に戻ると窓辺によつてそれを見詰めた。

月の光は優しく、雲の間から地上に差し込む光は神秘的で神々しいくらいに美しかった。

あんな風に雲間からさす光を天使の梯子だと言ったのは誰だったろうか。

あれを登れば本当に月にも行けるような気がした。

「天使の梯子…なんてきれい…。」  
誰にともなくつぶやくとあたしは窓べりに額を押し付けた。

「天使の梯子とは何のことだい？」

不意にかけられた声に驚いて振り向くと入口に桂が立っていた。

「入ってもいいかい？」

桂は昼間とは打って変わって穏やかに言った。

この人は本当につかめないなあと思う。

したたかで油断ならない政治家かと思えばどこまでも純粹に未来を語る少年の様で…。

「どうぞ。」

どうしてだろう。

あたしは素直にこの人と向き合えると思った。

桂はあたしの横に腰かけると並んで窓から月を見た。

「で、天使の梯子とは何のことだい？」

桂は再び繰り返す。

あたしは窓の外の空を見ながら記憶をたどりながら答えた。

「西洋には聖書っていうキリスト教…っとキリシタン？の經典みた

いなものがあつて、それには古事記みたいに伝承とかを集めているんだけど、その中で天使っていう神様の使いが地上に降りたのを見たって言われてる話が残っているんです。そのとき天使はあんな風に雲間から地上に伸びる光を梯子にして降りてきたって言われていて、だからああいう風に雲間から伸びる光を天使の梯子とか、天使の階段っていうらしいんです。うる覚えですけど。完全に伝説ですけど、あんなに神々しくて美しいとそれも納得だなあと思つてみてたんです。」

桂があたしを見ているのを感じたけれどあたしは雲間の光を目で追いつけた。

「…ああ、確かに雅だ。」

この地上で同じ日本人が斬りあつてることがバカバカしくなるくらいに神々しいな。」

桂は嘆息してしみじみという。

この人がこんなふうになんて少し意外で、思わず今度はあたしが桂の整った横顔をまじまじと眺めてしまふ。

あたしの知つてる桂はエネルギーで合理主義の現実主義者、そんな人だったから神様とか自然とかそういうものに心を動かされる人だとは思わなかった。

桂は不意に思い出したように吹き出して言った。

「にしても、幾松がそんな風に情趣を解する女性だと思わなかった。いつも山猫みたいに毛を逆立てて私を

にらんでばかりいたからね。」

あたしはその言い様にカチンとくる。

「いきなり脅されてこんなところに来るしかなかったんだから当たりたくもなるでしょう。」

「…あたしはもう二度と会えないんだから。」

不意に思い出された事実言葉の最後が震えた。胸に鈍い痛みが走る。

この選択をしたのは自分なのに。

桂はそんなあたしを見て向き直ると真剣なまなざしを投げかけた。

「幾松：幕府は沈みゆく船：新撰組はその泥船と共に最後まで運命を共にしようとしている。」

それは未来からきた君が一番わかっているだろう？」

「やめて！そんな話したくない。」

あたしは桂を遮って耳をふさいだ。  
知ってる。

大政奉還があつて江戸時代が終わつて、明治維新があつて…それが  
あるから平成にまで続いていくんだもの。

「君は、私たちの未来に共感している。だからこそ、昼間あんな風  
に言つたのだろう？」

幕府の今を存続させることがこれからの日本にとって本当に良いこ  
とだとそう思うのか？

幾松、何度でも言うがこれは私の真実だ。  
君と共に行きたい。

新しい日本を共に創ろう、君の未来につなげるために。」

桂はあたしの両手を、その大きな手で包み、あたしをまっすぐ射抜  
いた。

「…。」

あたしは言い淀んだ。

あまりにも桂の目がまっすぐだったから。

逃げることもなど許されない。

そんな厳しい目だった。

「今の君が長年身を置いた新撰組を裏切れないのはわかっている。  
でもそれは情だろう？」

君は温情を感じ、感情的になっているだけだ。

そろそろその情から離れて君自身の誠を見定めるべきじゃないのか  
？」

情…。

あたしが今迄新撰組に固執したのは情なのか…？  
前にもこんなふう悩んだことがある。

あれは華雪として密偵に入った時のことだ。  
でも今はもつと別の次元。

あたし自身の誠はいつたいどこにあるのだろうか？

不意に浮かんだのはお梅さんと芹沢先生の顔だった。

”自分が日本の未来の礎になれるのなら喜んで死んでいける。”  
進んで汚れ役をかぶった芹沢先生。そして芹沢先生と魂の底で結び  
ついていたお梅さん。

二人はきつと先の世では悪党とのしられようと、きつと気にしな  
い。

そこには二人の誠があるから。

二人の生きざまを思い出すと、胸につかえていたもやもやがすとん  
と自分の中で、消化されたような気がした。

ああ、そうなんだ。

正しいとか正しくないとかそんなものでは測れない。

後の世が、世間がなんと言おうとも、自らが自分に恥じぬ生き方を  
することこそが誠なのだから。

あたしは今自分に恥じない生き方ができているだろうか？

少しでも未来に向かって進めていただろうか？

あたしは進まなければいけない。

どんなに苦しい未来が待っていたとしても。

この選択に後悔しない為に最善を尽くさなければならぬのだ。

「あたし…」

あたしはゆっくり言葉をかみしめて桂に向き直って言った。

「あたしは、貴方とは一緒には行かない。」

「！」

「情だつていうかもしれない。沈む泥船と心中するなんて馬鹿げているっていうかもしれない。」

でも…それでも、あたしの誠はやっぱり新撰組なの。」

「なぜだ！？幾松！君は誰よりも近代文明の恩恵を受けて、その豊かさを身に染みて知っているはずだろう？それなのになぜ旧体制にそうも傾倒する？」

桂はあたしの肩をつかんで詰め寄った。

「幕府とかそんなのは関係ない。」

正しいとか、正しくないとかそんなふうには測れない。

ただ、あたしは新撰組と生きることが魂の記憶で決められているの。だからどんなに離されても、あたしの心はあそこに戻っていく。」

目を閉じれば見える。

あの旗印が、あの浅葱の羽織が。

みんなが。

だから前を向くのだ。

誰に裏切り者とののしられても、あたしはあたしに恥ずかしくない生き方を最期まで貫きたい。

「そんな不確かな感情に揺り動かされて、君は…それでいいのか！」  
桂が珍しく声を荒らげた。

「いつかそう遠くないうちに、彼らがあたしを殺しに来る。裏切り者として。」

その時あたしは自分の選択を誇りに思つて胸を張つて死んでいきたい。

誰になんと言われようともあたしは自分に後悔なく、この選択をしたから。

だからみんなを傷つけたことも、裏切り者として殺されることも全部受け止める。

あたしは自分に恥じない生き方をしたいから。

みんなが志を全うできるように少しでも後押しをすることがあたしの誠なの。」

心は驚くくらいに静かだった。

この美しい月夜があたしの心の澱を溶かしてくれたみたいに。

「…。」

桂は目を見開いてあたしを見つめていた。

「理屈じゃないよ、人の心は。」

損得とか合理とかそんなんじゃない。

古臭くて堅苦しくて…でもすごく大切なものだと思う。

あたしはそれを未来につなげたい。」

あたしは静かに笑って言った。

そう、あたしが新撰組に固執する理由はきつとそれだ。

きつと魂の奥底で新撰組とあたしは結びついている。

だから惹かれてやまないのだろう。

理屈では語れない、得も言われぬ何かがあたしの魂を幕末によこしたのだから。

「…なんというか…愚かで…でも君の生き方は震えるほどに潔い。」

私たちは決して交わらぬ岸にいるのだね。

…まったく私のことを二度も振った女は後にも先にも君だけだよ。」

桂は小さく笑って呆れたように言った。

心なしか少しさみしげに見えたのはきつとあたしの気のせいだと思う。

「世の中の女が全員貴方を好きになると思ってるなんてうぬぼれすぎだし。」

あたしは顎をあげてわざとつんとして見せると桂はたまりかねたように吹き出した。

あたしも笑ってしまった。

強さがほしかった。

虚勢でもいい、揺らがない凜とした強さを持ちたい。

これから前を向いて進むために。  
自分に恥じない生き方をするために。  
新撰組を失くした今、あたしにできるのはその矜持をもつことだけ  
だから。

空には神々しいくらい美しい月。

そして雲間から伸びる天使の梯子。

それは優しくあたしたちを包んでいて、  
これまでになく優しい穏やかな時間が過ぎていた。



## 第十二章 7・夏バテ、進みゆく世界

季節が過ぎ、夏になった。

じりじりと焼けつくような暑さとモウツとした湿り気のある空気が不快な気分させる。

京都は盆地だから夏は焼けつくほどに暑くて冬は凍えるほどに寒いと、おじいちゃんは言っていた。

当たり前だけど、クーラーなんてないから、常に内輪でパタパタ仰いで、過ごしていた。

ここに来て4回目の夏だけれど、今年の暑さは異常とも言えるくらいだった。

あたしと桂はあれからこれまでのぎすぎすした関係がうそのように穏やかな関係を続けていた。

取り留めもない話をしに毎日桂はあたしのもとを訪れ、桂はあたしをからかったり茶化したりして過ごした。

ただ世間の情勢は日に日に不穏になっていくらしく、長年にらみ合っていた薩長が倒幕のために手を組んだらしいことがうわさに伝わってきた。

それを仲介したのが、坂本さんらしく、桂は珍しく興奮した様子で話していた。

夢がもうそこまで来ている、と。

あたしはその様子を見ながら、少し複雑な気分だった。

桂も、坂本さんも、勝さんも、嫌いじゃない。

むしろ熱く夢を語るそのまっすぐな姿は尊敬する。

でも、江戸時代が着々と終わりに向かっていることは、つまり、新撰組が減びの道を進んでいるということであり…、あたしはそのことに胸がつぶれるほどの焦燥を感じていた。

あたしが今彼らのためにできることは何一つないのだと、いやとい

うほど思い知ったから。

そんな折だった。

勝さんが不意に訪ねてきたのは。

何でもあたしに話があるとかで、忙しい仕事の合間をぬってやってきたらしい。

「すまないね、幾松。突然。」

勝さんは額に浮かぶ珠の汗を手拭いで乱暴に拭くと、薄い唇をきゅつと引き上げて笑った。

以前逢った時よりもずっと痩せて、心なしか顔色も悪い。

「いえ。お疲れ様です。」

顔色悪いですが、大丈夫ですか？」

あたしは心配になって言った。

「ああ、今年の夏は特に蒸すからなあ。ちよいと中暑にやられたのさ。食い物がのどを通らなくてねえ。」

中暑とはいわゆる夏バテのことだとここにきて知ったことばだ。

「暑いからって冷たいそばやそうめんばかり召し上がっていると本当に体力を奪われますよ。」

お食事用意するので召し上がって行ってください。」

あたしは少し優しい気分になって言った。

「ああ、ありがとう。」

じゃあ、いただこうかな。」

「支度してくるので、少しお待ちください。」

あたしは勝さんに言うと、部屋を出て台所に行った。

台所は居室よりも更に蒸し暑くて体に生暖かい空気がまとわりつく。あたしは額の汗をぬぐうと、いつものようにお米や野菜を準備し始めた。

桂と並んで月を見たあの日から、あたしは炊事や家事なんかを引き

受けるようになった。

初めは監視役の男に毒でも入れないかと睨まれていたものだけけれど、あたしがあまりにも普通に使っていたので今ではそんなこともなくな

った。  
ただ監視は彼の仕事らしくて、そばで見ていることは続いていたけれど。

京都の夏は暑くて、でもヒートアイランド現象で40度近くまで上がったあの平成の世の中を思えば、あたしはまだ我慢できていた。ただ、もともと京の人間ではない人にとつてその酷暑は体力を奪ってしまうらしくて、来たばかりの時、夏バテで、体調を崩し、そのまま寝込んでしまう人を何人も見て驚いたものだ。

壬生で新撰組にいた時から賄い方はあたしのテリトリーで、夏バテ対策メニューを考案して、総司や永倉さん、左之さんに試食してもらっていた。

もともと、あの人たちは異常なくらいに元気だったから何でもうま

いって言って食べてくれたものだけだ。  
それでも平隊士の人にはかなり評判は上々で、体調を崩す人も居なくて、あたしにもできることがあるんだと思つてうれしくなったのを覚えている。

賄い方の人には屯所を出るときに、夏バテ対策メニューや、病気の人の療養メニュー、個人の好き嫌いをリストにして残してきたけれど、以前に総司に会った時に、「まことの味をみんな恋しがっているよ」なんて言われてほっこりした気分になった。

あたしは小半時、つまりは30分くらいで簡単な夏バテメニューを作つて勝さんのもとへ持つて行つた。

部屋に入ると桂もいつの間にか座つていて浴衣をゆつたりと着て内輪で風を送っていた。

桂は彫の深い整った顔立ちで、こんなふうに着ていると、大

人の男の色気が漂ってくる。

「お待たせしました。」

あたしはいったん座って頭を下げたから膳を勝さんの前に持っていた。  
く。

「ほお、これはなんだい？」

勝さんは珍しそうに膳を覗き込んだ。

「特製の夏バテ対策メニューです。」

「なつばて……めにゅー？ 幾松はまたわけのわからない言葉を使うね。メリケンの言葉かい？」

勝さんは目をぱちくりさせて言った。

「はい。中暑対策の献立っていう意味です。」

「はあ、あんたと話していると飽きないよ。」

勝さんはその細いつり目の目じりをきゅっと下げて笑った。

「にしてもなんだか色とりどりだね。これはなんだい？」

「これは梅しそ粥です。こっちは大根やニンジンやごぼうを細切りにしてかつおだしであんかけにしたのをかけたゴマ豆腐と卵豆腐、それから薄味の菜っ葉のおひたしです。冷たくしてるので食べやすいと思いますよ？」

「へえ。まるで精進料理だな。町医者なんかは精のつくもの食べつつって肉や魚なんかを勧めてきたが。」

「水やお酒ばかりだと胃が弱って食べ物を受け付けなくなるんです。だから初めは胃に優しいもので体を慣らして、悪いものを体の外に出すんです。ガツツリしたものを食べるのはそれからです。」

未来にいた時も炊事は得意だった。

お母さんが死んでからずっとやってきたのだから。

それになんだかんだ言ってもお父さんは医者で、食事療法が一番の薬だと言っていつもいるこの病気には何がいい、あれがいいって言って教えてくれたものだった。

あの時は話半分にはしか聞いていなかったけれど、それが今こうやって役に立っているのだから人生何があるかわかんないものだ。

勝さんは恐る恐るあたしの料理を口に運ぶ。

「うん……！こりゃあ具合がいい。」

細い目を線にして破顔した勝さんはなんだかお父さんに似ている気がした。

「幾松は料理に関してはなかなか才能を持っていてね、私も今年の夏は調子が良いのです。」

桂も笑って言った。

「ああ、それも納得の味の良さだ。それも江戸風だからどうしても懐かしくなる。」

これは坂本君にも食わせてやりたいものだよ。彼ならきつと三杯も四杯も食うんだろうなあ。」

「お口にあつたみたいでよかったです。」

あたしはほっこりした気分で行った。

人が自分の作ったものをおいしそうに食べてくれるのは気持ちがいい。

あたしはここで自分のできることをしっかりやろう。

そう思った。

## 第十二章 8・貴方を変えたもの

「ところで話ってなんですか？」

勝さんがあらかた膳を平らげたのを見てあたしは切り出した。

勝さんはあたしが淹れたオリジナルのお茶を飲みながら顔をあげる。

「ああ、今日は幾松にちと頼みがあつてね。あつてほしい人がいるのさ。」

「どなたですか？」

勝さんがあつてほしい人なんて誰だろう？

「さるお方がね、あんたのことを偉く興味を持ったのさ。どうしても会いたいと。」

勝さんがぼかすなんてよほど身分の高い人なんだろうか？

「…でも…。」

でも桂はそれを許すだろうか？

あたしはちらりと桂のほうを見る。

「ああ、行って来ればよいさ。この子が無理をしないように…勝先生、頼みますよ。」

「承知しましたよ。」

「良いのですか？」

「ああ、これで少し静かになるだろう？」

桂は皮肉っぽく笑って見せた。

絶対ダメっていうと思つてた。

なのにこの人がこんなふうに言うなんて少し意外だ。

\*

あのあと桂は席を外し、あたしは勝さんとそのさるお方とやらといつ会つのかなどを

話していた。

「桂さんは変わっただろうか？」

一息ついて、入れなおしたお茶を飲みながら、勝さんがいたずらっぽく言う。

「正直驚きました。今迄だったら絶対に許さなかっただろうから。合理的で理論派、でもどこかで人とは一線を引いて踏み込まないし踏み込ませない。」

不確かな愛とか情とかそういったものは信じないそんな人だと思っていた。

だから危ない橋は渡らない。

他人を信用しない人だと思っていた。

なのにあたしを行かせるなんてどうしたんだらう？

「ははは、やはり桂さんほどの人でも恋には勝てなかったか。」

勝さんはおかしそうに顔を破顔させていった。

「恋っ！？ないないない…！ありえないです。だってあの人とあたしは絶対に交わることはない対極にいるんですから。」

突拍子のないことを言う勝さんにあたしは首をぶんぶん振って否定する。

「恋も人の心も理屈じゃない、そういつたのはあんだらう？」

「そんなこと言ったこともありましたが…。」

「事實は小説よりも奇なり。ありえないことも起るもんさ。」

あんたが桂さんを変えた。桂さんがあんたを変えた。

人は人に出逢い、惑い、揺さぶられ、時には苦しんで変わっていくのさ。

だから時代が、歴史が変わる。

それでいいじゃないか。」

あたしは飄々という勝さんを見つめた。

やっぱりすごい…。

この人はやっぱり時代の変わり目に現われる英傑だ。

「まあ、いいさ。俺もそろそろ戻らないと。」

じゃあ、10日後頼んだ。

飯と茶ごちそさん。」

にこにこ笑いながら勝さんが立ち上がると呆然とするあたしをのこして部屋を出て行った。

\*

夏の太陽は傾き、部屋を赤く染めている。

西日が当たったほうの頬が熱かったけれどそのせいばかりじゃない。勝さんの爆弾発言のせいで心臓がどきどきする。

桂は間違ってもあたしに恋なんかしないと思う。

あたしをここに呼び寄せたのだからって情報がほしかったからなんだろうし。

そんなこと言われても…というのがあたしの正直なところだ。

「はあ…」

あたしはごろりと横になる。

い草の香りが優しく香ってきて妙にものがなしい気分になる。

逢いたいな…。

土方さんに。みんなに。

あたしは目をつむると土方さんの笑顔が不意に思い出された。

あたしがこんなふうに出て行ったこと、あの人はどう思ったんだろうか。

やっぱり憎んでいるだろう。

みんなを裏切り、土方さんの真心を裏切ったのだから。

あの最後の夜、土方さんと結ばれなかったことはやっぱり運命なのだろうか。

でも、よかったと思う。

結ばれなくて。

きつとあれ以上進んだらあたしはここへは来れなかった。



どうあっても自分の幸せを優先してしまっただらうから。きつと言わない。言えない。

この想いは口に出せば止められなくなってしまふから。だから出逢えたことだけを感謝して心に刻んで生きよう。

なぜだろう…こんなふうにごうしようもないくらいに好きになってしまったのは…。

「…好き…か。」

ぼつんと天井に向かって口に出してみる。

本人にはきつともう一生伝えられないから…。

あたしを斬りに来るのもいい。

だから…会いたい。

ただそう思う。

「誰を？」

え？

不意に上から降ってくる言葉に驚いて跳ね起きる。

桂があたしのあわてぶりをおかしそうに見ていた。

「愛しい恋人のことでも考えていた？」

「恋人なんかいません。」

「君はいつでもまっすぐだから駆け引きとかは苦手だろっね。」

「ほっといってください！」

馬鹿にされたようでもっとしてぶいっつと横を向く。

「…あはは。まるで鉄砲玉だねえ。」

くつくつと意地悪そうにでも楽しそうに桂は笑っていた。

ふと訪れる沈黙。

今迄は別に黙っていても別段気にすることはなかった。

でも…今はそれが妙に気まずい。

「…幾松。」

「え？はい？」

いきなり呼ばれて驚いてしまふ。

「…夫婦にならないか？」

「は…？」

…

…

…はいっつ！？

…今なんてっ？

「必ず守る。だから私と共に来てほしい。」

桂にこのセリフを言われるのは初めてじゃない。

でも、なのに、今までと全然意味合いが違うじゃん。

これは…プロポーズ？

「何言っつて…。」

何冗談言っつてんの？と笑っつてしまおうとしたけど、できなかった。

だっつて怖いくらいに桂は真剣だっつたから。

その眼が土方さんに似てたから。

「…あたし…好きな人がいるんです。

だから…あなたとは一緒にいけない。」

「…うん。そうだろうね。知っていたよ。それでもいいと言っつたら？

君が誰のことをすきでも、それでもここにいてほしいと言っつたら？」

桂はとても穏やかで、そして優しくかつた。

いつもの皮肉っぽい感じも、キザな感じもしない。

ただ真摯でまっすぐな気持ちしか伝わっつてこなかつた。

でも…あたしは…

「それでもだめなんです。あたしは弱い人間だから、貴方のその気

持ちに甘えてしまっつう。

それはあたし自身が許せなくなる。苦しくても、かなわなくても…

あたしは今の自分の恋を最期まで貫くと決めているから。」

「…そうか。君ならそういっつうと思っつていたよ。」

桂はそれきり黙っつてただ静かに笑っつていた。

すっつかり日が落ちて夏の夜風が頬を撫でた。

ただ沈黙だけがあたしたちを覆っていた。

不意に桂が噴出した。

あたしは驚いてそちらを見る。

「まったく… 3度も私を振るなんて、本当に本当にこんな女冗談じゃないなあ。」

さも楽しそうに笑って言った。

「だって…。」

「さあ、食事にしよう。もう用意させてるから。」

桂はあたしを促して部屋を後にした。

きっとこの人は器用に見えてたまらなく不器用なのだ。

夏の夜。

ただ虫の声だけがあたりに響いていた。

## 第十二章 9・それぞれの思惑

桂の爆弾プロポーズからしばらくして、あたしは勝さんと一緒に、あたしに逢いたいというさるお方のもとへいくことになった。

正直桂はまったく変わらなかった。

相変わらず合理的で、つかみどころがなくて、そして穏やかだった。まるであんなことがあったなんてウソみたいに。

「じゃあ、行ってきます。」

あたしが玄関で、桂に挨拶をすると、桂は一言「ああ、気を付けて。」と笑って言っただけだった。

どうしてだろう、桂とはもう二度と会えないような気さえしていた。

\*

さるお方は大阪にいるらしいのであたしは勝さんと一緒に大阪へと歩を進めていた。

京から出たことのないあたしにとって旅の町並みはすごく新鮮だった。

この時代移動は籠か、馬か、徒歩。

もっぱら庶民にとっては徒歩が唯一の移動手段だったらしいけど。

真夏の太陽が照りつける中あたしと勝さんは黙々と歩いていた。

途中の休憩で小さな茶屋にはいると、勝さんはお茶を一口飲み、おもむろに話し出した。

「…桂君と、夫婦になる気はなかった？」

いきなりのことにあたしは団子をのどに詰まらせた。

「んぐっ！何言うんですか！」

「…口止めされているのだが、君は知るべきだと思う。」

桂君がなぜ君を送り出したのか。」

「え？」

「桂君は君を元いる場所に帰そうとして君を送り出したんだ。花は野に咲くのが一番だと、無理やり手折ってきた花は枯れるのが早まるだけだと言ってるね。」

「それはどういう…」

「新撰組のもとへ君が戻れるように。」

「！」

「まったくあの人は不器用なんだよ。」

いきなり何を頼むかと思えば、新撰組の解散を止めてくれと。かわりに役に立つ女を連れてくるから、と。

もともとあんたを手に入れるためにあの事件を利用したのは明白だが、あの人は敵である新撰組の解散を止めてでも、あんたに憎まれてでも、どうしても手に入れたかったのさ。あの人が頭を下げたのは初めてだったなあ。」

何を言っているのだろう。

あの時、幕府のクズ役人が左之さんと平助君の行動を咎めて新撰組を解散させようとした。

でも勝さんの計らいで、それを止めるかわりに桂のもとへ来ることを条件にしたのだ。

どうして気付かなかったのだろう。

桂や勝さんにとって、未来を何も語らないあたしなんて何の価値もなかったはずなのに。

「それが今度はもう飽きたからあの女を連れて行けと。」

まったく気まぐれな男さ。でもそれが言葉通りのものじゃないくらいあんたも気が付いているのだろう？

あの人はさ、あんたが普通の女とは違つと、今までの女に効いていた手管が全く効かないんだと困つたように言っていたよ。幾松にとつて身と生活の安全よりも、新撰組という鬼の棲家で生きることのほうが重要なのだと。そのほうがあの娘は輝くのだと、そういつていた。

だから無理を承知でもとに戻すことを俺に頼んできたのさ。」

「！」

この気持ちをなんとさえいえばよいのだろう。

あたしはこの人たちが嫌いだった。

あたしから居場所を奪った人たちだから。

でも…理屈では説明できなくても、あたしは今この人たちが嫌いじゃない。

この人たちもやっぱり真の武士だから。

「…まったく冗談じゃないですよ。」

人のこと振り回しすぎだし！いきなり脅して連れてきたかと思えば、今度は夫婦になれたなんて、そして今度は新撰組に戻れなんて。勝手なことばかり！」

あたしは泣きそうになったので、あえて顎をつんとあげて言った。

冷静に考えればあの人は身勝手すぎる。

でもそれでも憎み切れないのはやっぱりあたしも桂の人柄を認めているからなのだろうか。

「あんたならそう思うと思った。」

だがどうだい？帰れるんだぞ？」

「帰る？どうやって？裏切りを新撰組が許すはずはないでしょう！？」

あたしは飄々と言葉を並べる勝さんに声を荒げた。

「許すさ。あの集団は忠恕に厚く、情にもろい。それを利用するのさ。」

「何言ってるの？」

「身分というくだらない因習に縛られているならば、今回はそれを利用するまで。」

いったん提言された新撰組の解散が無くなったのはなんでだと思っ？幕府の連中も身分や権力に弱いということさ。」

「…」

「何言ってるかわからない様子だね。今からお会いする方に一声か

けてもらったのさ。

あの人も変わったお方だが、身分と権力はぴかー。効果は抜群だったさ。」

「…じゃあ、今度はあたしはその人のところに行くんですか？」

「ああ、あの人はあんたに逢ってみたいと言ったんだ。」

桂小五郎が、勝海舟が手に入れてみたいと欲した女、新撰組がどうしても手元に置きたかった女とはたしてどのようなものなのかとな。会ってみて決めたいと、おっしやっていた。」

「…そうですか。」

新撰組に戻る？

それは否だろう。

あたしは理由はどうあれ、彼らを裏切ったのだから。

でも、そのさるお方のおかげで、最期に懐かしい仲間に出会えるのかもしれない、そう思うとたまらなくうれしかった。

これは死地への旅路。

この体にまわりつくような不快な蒸し暑い空気も、照りつける太陽も、この世の名残だと思えば、すべてが愛おしい。

やっと戻れる。

その先が死だとしても…あたしは笑ってこの運命を受け入れよう。

ねえ、みんなやっと会えるね。

あたし帰れるんだよ。

あたしたちは照りつける太陽の中笠を目深にかぶって歩き出した。

### 第十三章 1 予兆・沖田総司

ゴホ、ゴホ

朝餉のあと廊下を歩いていたら不意に苦しくなって立ち止まる。

最近咳が止まらない。

顔色が悪いと皆に言われるのを「甘味の食べすぎで」と笑ってごまかすのももう飽きてしまった。

一月前ほどに夏風邪をひいてからだろうか…。熱は下がったと言っのに。

止まらぬ咳。

体のだるさ。

息苦しさ。

咳のし過ぎで腹が痛い。

私の胸には大きな虫が棲んでいて、ざくざくと肺やら腹の臓腑を食い荒らしているのではないかとさえ思うほどだ。

以前は日に二百できていた素振りが五十で息が切れるようになってしまった。

嫌な予感はしている。

おしなべて私のこの手の予感は当たるのだ。

ただ認めたくなかった。

今はその時期ではない。

まことにもう一度会うまでは、まだ剣を握っていたい。まことを殺すのが避けられない運命ならば、斬らなければならぬなら、それは私でいたい。

私には剣しかないから。

ほかには何も無いから。

だから今はまだ立ち止まる訳にはいかないのだ。



「総司、おめえは妙な咳をしやがるな。」  
廊下で口を押さえて咳き込んでいたら、土方さんが後ろから私を覗き込んで言った。  
「覗き込んだというのはもちろん遠慮した表現で、実際はにらんでいるに近い。」

小さな子どもだったら泣き出してしまっているだろう。

この人は見目がいいのに怖い顔しかできない不器用な人間なのだ。珍しく心配している様子が見てとれて心が暖まる。

「鬼の副長が私の心配ですか？真夏なのに雪が降りそうですね。」  
わざと茶化して笑ってみる。

「総司、お前、今日は休みとって松本法眼のところへ行け。」  
土方さんが怖い顔をして言う。

松本法眼とは幕府の御殿医で西洋医学に通じながらも、武士のような豪傑で、新撰組を何かと気にかけてくださる。ついひと月前まで大阪で家茂公についてその治療に尽力していらっしやったらしいが、上様が亡くなり京へもどってみえたらしいのだ。

「ただの風邪ですよ。」

私は下を向いて笑いながら言った。感情を隠すのは得意だ。いつも通り笑えばよい。

それなのにまことの前では上手く感情を制御できない、未熟だと思っ

う。

そんな自分を自嘲する笑みだった。

「だったら早く治して来やがれ。これは副長命令だ。」  
土方さんは引かない。

この人はきつと気付いているのだ。この咳がただの風邪などではないことを。

この人は嫌になるくらい勘がいいから。

「わかりました。」

私はふつと笑みを浮かべて頷いた。  
行くつもりなどない。

この病は命をむしばむ病だから。

「お前は隊の戦力なんだ。くだらねえ風邪なんざ早く治しちまえ。」  
わざと怖い顔をすると土方さんはそれ以上何も言わずに踵を返して  
去っていった。

土方さんが見えなくなったその時、不意に血の味が込み上げてきた。

「ゴホ、ゴホ、ゲホッ！」

思わず激しく咳き込んで口を覆っていた手を見してみる

と掌には赤黒い血がべつとりと付いている。

「！」

全身に震えが走った。

…吐血。

昔、まだ私が試衛館に弟子入りするまえ、日野の五軒隣の優しいお  
ばさんが同じように咳から血を吐いて、やがて亡くなった。

あのおばさんは労咳に冒されていたと、ミツ姉さんは悲しそうな顔  
で言っていた。

子供心には病というものが理解できず、労咳というものはお化けか  
何かだと思っていたが、人を死に至らしめる恐ろしいものだという  
恐怖だけは植え付けられた。

そして今、私は同じように咳が止まらず血を吐いた。これまでも痰  
に血が混じることはあったが、咳のし過ぎで喉が切れただけだと思  
っていた、思い込んでいた。

だが今回の明らかな吐血。無学な私でも分かる。

…労咳…

気付いていた。

ただ気づかぬふりをしていた。

血を吐けば必ず死ぬ、それが労咳だ。

ああ、私は死ぬのだ…。

なのに何故こんなにも心が静かなのだろう。

隊務であまりにも死に近づきすぎて慣れてしまったのか？

死に対する恐怖など微塵も浮かばない…。

ただそこに当然のように存在する未来。

でも、まことにもう一度会うまでは死ねない、そう思うだけだ。

だからまだ死ねない。

彼女を斬るのは私だから。

それを残酷で苦しい運命だと絶望する、しかし同時に私が惚れた女性の最期を私の手で独占できることにゆがんだ残酷な悦びも自分の中にあることに私は気が付いていた。

どうやら本当に鬼になってしまったようだ。

ふと笑みが浮かぶ。

口についた血が私を人食い鬼のように見せているだろうと思うと無性におかしくてたまらなくなる。

私は腹を抱えて笑った。

何がおかしいのかわからぬ。

ただこのばかばかしいほどの運命には笑うことしかできなかったのだ。

自分の死に場所は戦場だと思っていた。

なのに…私は病に侵されてきつと苦しんで苦しんで死んでいくのだろう。

真綿で首を絞めるようにじわじわと少しずつ近づく死の恐怖を味わいながら。

皮肉なものだ。

鬼になった自分への罰なのだろうか。

まことがそばにいたとき、私は人間らしい喜びがあった。

彼女の太陽のような笑みに心は温まり、それは私に泣きたくなるほ

どの優しさと幸せをもたらした。  
それは、恋であり、愛であり、そして生きるということだった。  
だから、今の私は鬼でしかない。

“ 総司は鬼なんかじゃないよ ”

不意にまことの声が脳裏によみがえる。

“ でももし総司が鬼なら世界で一番優しい鬼だね。守るべきもの  
ために悲しいことも辛いこともすべてを背負って飲み込んで優しい  
鬼になってるんだよね。 ”

あれはいつのことだっただろう？

まことに深い意味はきつとなかった。

でもその言葉は優しく心染みて、不覚にも私は泣きそうになっ  
たことを思い出した。

ふと気づくと頬が濡れている。

ああ、私は泣いていたのだ。

まだ私にも涙を流せる心が備わっていたのか。

逢いたい…。

ただまことに逢いたかった。

あの笑顔が見たい、そう思った。

### 第十三章 2・君を斬る覚悟：土方歳三

総司のやつ果たして大丈夫なのか…。

ここ最近あいつはおかしな咳をする。

顔色もよくない。

そして何より、笑わなくなった。

否、常に微笑を浮かべていて、でもその笑みは冴え冴えとした冬の月の様で、何者も寄せ付けようとしない、昔の総司に戻ったようだった。

それもこれも水瀬がいなくなったことが原因だということは火を見るよりも明らかだった。

水瀬はあいつにとつて太陽なのだ。

水瀬がいるからあいつは、新撰組の鬼の沖田総司ではなく、ただ一人の男としての沖田総司でいられた。

それは俺も一緒だが。

まったく…ここまで俺らを揺らがせるなんて…あいつはなんて女なんだ…。

水瀬が消えて三月、行方は杳として知れぬ。

ただ、初めはその裏切に心を揺らしたが…今となつてはこの空の下どうにかして、元気でいてくれればと思うのみだ。

否、むしろあいつの生まれ育った平成という世に戻り幸せに暮らしてほしいという幻想さえ抱くようになっていた。それでもいいとすら思うようになった。

ここまで甘くなつたなんて俺も焼が回つたもんだぜ。

俺は小さくため息をつき、自嘲気味に笑うと、夜風にあたるため、ふすまを開けた。

夏の夜風は昼間と違い、心地よく頬を撫でる。

ふと庭先に目をやると、白い影のようなものがよぎった気がした。

俺は瞬間的に柄に手をやり、人影に目を凝らす。

庭木の間でぼんやりと空を見上げるのは…

総司だった。

俺は柄から手を離し、嘆息する。

まったく人騒がせな野郎だ。

「総司！」

総司は一瞬目を見開き俺に視線を向けて弱弱しく笑った。

「土方さん…」

俺は庭先へ降りて総司の頭を軽くはたく。

「まったくおめえは…調子悪いのなら寝てろ!!」

「やだなあ、大丈夫ですよ…。」

「その顔が大丈夫って面か。」

「ふふふ、心配性ですね。昔と変わらず。」

「馬鹿言っただけじゃねえよ。」

俺たちはひとしきり、いつものようなやり取りを繰り返すとそのあとは縁側に腰掛けてずっと空を見上げていた。

天の川がけぶって見える。

鏡を砕いてちりばめたようだ。

そんなことを言えばまた総司や勝ちちゃんは俺を風雅人と笑うだろう。

「…ねえ、土方さん…。」

不意に声をかけられて俺は総司の横顔に視線を向けた。

「なんだ？」

空から視線を外すことなく真剣な横顔は、俺の知らない男の顔になっていた。

「…もし…まことを見つけたら、貴方は斬ることができますか？」  
「！」

総司は少しやせて目だけがぎらぎらと異様な光を放っていた。

「私はね、ずっと考えていたんです。

自分はその子を斬れるのだろうか。

もし近藤先生や土方さんの介錯だつてつとめる自信はあるのに…あの子を斬るには…どうしても心が揺らぐんです。

それは…私が弱いからなんでしょうか？」

「総司…。」

「土方さん、私は…まことが…まことのことが好きです。でも…だからこそ、まことを斬るのは私でありたいんです。

ふふふ、矛盾ですね。」

もうこいつは初恋に悩む小さな弟じゃねえ。

真剣に一人の女を一途に想う男の顔をしていた。

不意に総司が全く知らない男に見えた。

ガキだガキだと思いながらも、こいつはいつの間にか23になったのだ。

俺らが出逢ってから干支が一回り以上しちまったわけで、そりゃあ、俺も年を取るわけだな。

「…総司、いつか言ったよな。

己の気持ちから逃げるなど。

俺も惚れてるさ、あいつに。

あいつのことは命を懸けて守りたいのに、そうはさせてくれねえんだ。

俺の武士としての誠が。

あいつが望むのは武士として俺が最期まで誠を貫いて走ることだから、俺はあいつのために、あいつが望む未来のために、必要ならば

斬るさ。

あいつはそれを笑って受け入れるだろうから。

罪悪感も、恋情も、嫉妬も…全部自分の胸に納めて、墓に持っていけばいいだけだ。

誰に鬼と蔑まれても、あいつは俺たちの生きざまを見守っていてくれる。

その事実さえあれば十分だ。

お前だってそうだろう？」

「！」

「惚れた女を斬るのにためらわねえ奴がどこにいるよ？」

ただ、あいつはそれ以上の苦しみをもって今もこの空のどこかで生きています。

総司、あいつとお前は、どこにいても、何があっても誠でつながってんだろ。

だったら進むしか俺たちには残されていねえんだよ。」

「土方さん、まことは私たちのために裏切ったんです…。新撰組を守るために…。」

「…だからこそだろ。」

だからこそ、あいつが望むように、すべてを受け止めて、泥でもなんでもかぶってやることしかできねえだろ。」

水瀬が隊を抜けたのは何かの事情、すなわち俺らのためだろうということは落ち着いて考えれば容易に想像できた。

そしてその選択にあいつがどんな艱難辛苦をなめているかも。

俺らは水瀬のその想いを踏み台にして立っているのだ。

ならば進むしかあるまい…。

恋情も、罪悪感も、慟哭も…すべてを飲み込んですすむのだ。

あいつがそうしたように。

水瀬…俺たちは魂の記憶で結び付けられているだろう？

だから大丈夫だ。



お前と想いを伝えずとも、体を重ねずとも、相生の約束を結ばずとも…

それにも勝る絆があると俺は信じている。

願わくはこのままどこかで幸せに生きてほしいが…

仮に敵同士として対峙しても、

俺はお前のために、お前が苦しんだ分だけ、俺も耐えるから。

「土方さんは強いですね…」。

ホントに…新撰組の鬼だ。」

総司は遠くを見つめながら小さく笑った。

目に光るものが見えた気がしたが、俺は決して見なかった。

### 第十三章 3・一橋慶喜

慶応2年八月、あたしは勝さんと一緒に下阪し、大阪であたしに逢いたいという人物について対面することになった。

その人物とは、一橋慶喜。

平成の世でも、徳川最後の十五代将軍、大政奉還を成し遂げ、江戸城を無血開城した彼はあまりにも有名だった。

そんな彼があたしに逢いたいとはどういうことだろうか？

彼もまさか、倒幕派とつながっているんだらうか？

「そんなに緊張するな。」

珍しくきつちりとまげを結び、袴までつけた勝さんが言う。

「ええ、大丈夫です。」

もうここまできたら何があっても驚きませんよ。」

あたしはというと、さすがにきつちりと上品な女らしい薄い水色の夏らしい着物を着てしつかりと髪結いに日本髪を結ってもらった。

「一橋公は桂君のことは何もご存じではない。君が桂君のところの行くに至った経緯も、私が桂君と懇意なものも何もね。」

公武合体をお望みなのは間違いないがね。」

あたしの言わんとすることを察するように勝さんが言った。

大阪の上品な屋敷の一室、華美を抑えて造ってはあるものの、調度品やら何らがすべて上品なものだった。

畳も張り替えたばかりなのか、爽やかない草の香りが部屋を満たしている。

その時、ふすまが静かに開いて、執事みたいなおじいさんが畳に手をつけて頭を下げる。

「勝どの、お待たせいたしました。いらっしやいましてございます。」  
そして衣擦れの音がすると背の高い男の人が入ってきた。

あたしは隣の勝さんに倣いあわてて頭を下げる。

「勝か。久しぶりだな。」

堅苦しい挨拶は抜きだ。面を上げよ。」

高くも低くもないよく通る声でその人は言った。

あたしと勝さんはゆっくりと頭をあげると、そこには切れ長の目に整った顔立ちの「お殿様」がいた。  
年は土方さんくらいだろうか？  
男盛りの色気があった。

「一橋公におかれましてはご機嫌麗しく……」ああ、やめやめ。「」  
勝さんの挨拶を遮って一橋公が言う。

「まどろっこしい挨拶は抜きだ。」

お前の文に書いてあった女子の件だろう。

そのほうが未来からきたとかいう例の女子か？」

あたしのほうに急に話を振られるものだからあたしはとっさにびっくりして声が出せなかった。

「はい。水瀬と申す女子にございます。」

勝さんがあたしを紹介したのであたしももう一度畳に手をついて頭を下げる。

「水瀬とやら、顔を上げよ。」

いかにもな感じで、一橋慶喜はあたしにいう。

あたしはゆっくりと顔をあげて打ち合わせ通りに挨拶をした。

「水瀬まことと申します。お目通り叶い、恐悦至極でございます。」

一橋慶喜は形の良い口元をふつとゆるめて目を細めて笑う。

「ふうん、なかなかいい目をする女子だ。」

水瀬、お前はこの国の未来を知っているんだらう。

どうだ、徳川は滅びるか？」

「！！」

「上様！何をおっしゃいます！」

勝さんがさすがにあわてて言う。

そりゃあそうだらう、いくらまだ將軍になっていないとはいえ、徳川の中枢を担う御三家の人間がこんなこと言えば大問題だし。

「勝、今更だらう？お前もわかつているはずだ。徳川がいかに腐敗しきっているか…。」

今外国が日本を鵜の目タカの目で狙っているんだ。こんな時に幕府だ攘夷だ言っついていられないだらうよ。」

さも当然のように慶喜は笑って言う。

桂や、坂本さん、勝さんと同じことを言う。

この人もまた日本の未来を想う真の武士なのだ。

「…俺はな、この幕府の最後の將軍になるだらうよ。なあ、水瀬そつだらう？」

あたしは答えることができない。

だってそれを答えてなんになるというんだらう。

「それは…上様は、もう決めておられるのでしょうか。」

「徳川家康公は、神とあがめられる。俺はきつと幕府をつぶした能無しとのちの世に遺される。」

だが、それでいい。

幕引きは俺の仕事だ。それもおもしれえじゃねえか。」

さも面白そうに達観した様子で慶喜は言う。

誰が見ても確かに今の幕府の先行きは暗い。

だから將軍なんて誰もやりたくないはずなんだ。

でも、それを楽しむように笑って自分が幕引きをするという。

「…徳川を…愛しておられるんですね。」  
あたしの口から自然に零れ落ちる言葉…。  
「さあな。おれはただ面白がりなだけさ。」  
慶喜は静かに笑っただけだった。  
ただその笑顔は何もかもを知り尽くしているような老成した顔だった。

### 第十三章 4・150光年の奇跡、再会

あれからあたしは一橋慶喜の屋敷に滞在することになり、毎日彼の御しのびに付き合うことになった。

彼はつかみどころがなくて、でもすごく頭がよくて、頭のいいキレイな男って感じで、遊郭から下町の女将さんまで、絶大なる支持を受けていた。

どこまでも粋でいい江戸の男は、上方でもやっぱりモテるらしい。何度女の人に睨まれたことか…。

ただそんな一橋公だけど、未来の世界のことはすごく興味津々で、そういう部分は桂や土方さんや近藤先生にそっくりで、懐かしくて…そして切なかった。

そしてある日。

あたしと慶喜公は屋敷で一緒にお酒を飲みながら他愛ない話をしていた。

どんな話の流れでそういう方向に話が進んだのかはよく覚えていない。

ただあまり強くはないけれど、京都の嵯峨野で作られたお酒はおいしくて、おちよこからちびちび飲んでいたら、いつの間にか徳利が何本か空になった時だったと思う。

ふわふわとした気分で、頭もいい具合にぼんやりしていた。

「水瀬：お前、俺の側室にならねえか？」

慶喜も大分お酒が入っているのに顔色一つ変えずにこんな冗談を言う。

「なりませんよ。」

あたしはバツサリことわる。

「なんでだよ。俺が脅しても？」

「脅されるのはもう慣れました。」

もうあたしに失うものはないんです。ここで上様に殺されるとしても別にかまいません。」

あたしは酔いのせいばかりでなく、開き直っていた。

次にみんなにあつたらあたしはきっと斬られる。

でもそれを少し待ち望んでいる自分もいた。

いい加減帰りがかった、逢いたかった。

あの場所に、あの人たちに。

秋はもうそこまで来ている。

少し冷たくなつた夜風がそれを教えてくれる。

空にはまばゆいばかりの満天の星。

鏡を砕いたみたいにキラキラしてて、悲しいくらいに美しい。

手を伸ばせば届きそうなくらいに近くて、でも絶対に届かない存在…

いつか総司と話したことがある。

この星の光は今光つたように見えても、本当はずっと昔に光つたものなのだと。

だからたとえば150年前の光が今見えているかもしれない。

今どこかの星の光が150年後に届くことだってある。

そう考えたら、あまりさみしくない。

この宇宙が時空を超えて光を運ぶように、きっとあたしの思いも届けてくれる。

そんな夢物語を話したことがあるのを不意に思い出した。

窓の外に思いをさせていたら不意に慶喜の言葉に現実に戻される。

「俺の耳にも入っているさ。老中取次のくそじじいが新撰組に腹を立てて無許可に解散させようとしたらしいな。」

家柄だけで無能な馬鹿な男だ。今の幕府に無条件で、忠誠を誓う便利な男たちを無為につぶそうとしたのだからな。」

「便利…？」

あたしは思わず引つかかかって聞き返した。

「そうだろうさ、この沈みゆく幕府に忠誠を誓うんざり、阿呆で馬鹿な男たちだ。」

だから利用できて便利だろう？」

慶喜は挑発するようにくいつと酒を飲んで皮肉っぽく笑った。

「便利って…なんですか？」

阿呆って、あの人たちの本気の誠を馬鹿呼びわりするなんて誰にもさせません。」

あの人たちがどれだけ国を想い、幕府を想い…それをそんなふうに言うなんて！」

あたしはお酒が大分回っていたのだと思う。

新撰組があんなに嫌われても走り続けたのは幕府、ひいては將軍のためなのに、なのになんでそんな風に馬鹿にされなきゃいけないんだ！

そんな風に考えていたらあたしは感情の高ぶりを抑えられなかった。熱くて涙がばらばらと流れてくる。

感情の高ぶりを抑えられない…。

ああ、あたしってばだいたいぶ酔っぱらってる。

視界がぐらりと揺れてあたしは自分の酔っているのを実感した。

「あーあ、水瀬は泣き上戸かよ。」

幕府に無条件で忠誠を誓う馬鹿な奴らを助けるために、殺されるのも覚悟で隊を抜けたんだってな。

お前のそういう馬鹿正直なまっすぐさがあの男たちをここまでさせるんだろつよ。



あの荒くれ者のやつらを惚れさせ、肥後もお前のことを買っている。合理主義者の勝ですらお前には一目置く。

お前には人を惹きつける何かを持ってんだな。

まったく…おめえは、なんて女子だ。

やはりお前はあの場所に必要なのだろうな。」

慶喜は仕方なさそうにそういうと手を一つたたたく。

すると側近の松浦さんがふすまが静かに開けて誰かを呼び入れているのが見えた。

夢の続きを見ているのだと思った。

だって

目の前にいるのは

懐かしい人たち、あたしが死ぬほど逢いたかった…

新撰組だったから。

近藤先生、土方さん、そして総司…。

なんで…

なんで…ここにいるの？

あたしは目を見開いたまま動けなかった。だって信じられなかったから。

もう一度逢えるなんて  
思わなかった。

星の光が150年先に届くように、あたしの思いが不可能を越えた。  
もう一度逢えた。

あたしは自分がこの人たちに死ぬほど会いたいと思っていることを  
改めて実感する。

だって心がこんなに震える。  
お酒のせいじゃなく、視界が揺らぎ涙がぱたぱた零れ落ちる。

これで思い残すことはない。  
だって会えたもの。  
もう一度。

あたしたちはお互いに見つめあったまま微動だにしなかった。

第十三章 5・遷る場所、もう二度と：土方歳三

目の前の光景が信じられなかった。

魂の底から逢いたかった女がそこにいる。

水瀬は大きな目を見開き、そして見る見るうちにその眼に膜が張ったと思つたら大粒の涙が零れ落ちた。

畳に落ちる涙の音がよく聞こえる。

水瀬は最後に会った時よりも少しやせていた。

でも、薄い藤色に蝶が描かれた美しい着物をまとい、上品に髪をまとめたその姿はたおやかで、そして凜としていて、非の打ちどころのないほどに完成された美しさを湛えていた。

「まあ、感動の再会のところ悪いが、話を聞け。」

一橋公が突然沈黙を破る。

「水瀬は特命のために今まで借りていた。敵を欺くにはまず味方からというように、任務は極秘ゆえ局長の近藤も知らぬこと。無事に任務が終了した故に今日をもってこの任務を解き、新撰組預とする。この娘は一橋家と、ここにいる肥後の守が後見の娘故、新撰組で、しつかり面倒を見てくれ。」

一橋公はいたずらっぽく言う。

俺はただ頭を下げ続けた。

ただこの奇跡が起きたことに感謝しながら。

一橋公は今はまだごたごたしてはいるものの次期將軍最有力候補。

その有力者と、新撰組のとりまとめである肥後の守様に特命と言われたのであれば、俺たちは是とすることしかできぬ。

水瀬を受け入れることは何の障害もなく、むしろ死なせることなど言語道断なのだ。

そのつもりで、水瀬と俺たちをここで引き合わせたのだろう。

「お待ちください。」

水瀬は澄んだ声で、一橋公を呼び止める。

「なんだ。」

「私は、新撰組を……」

「水瀬、お前は生きることが命じられたのだ。」

武士は主君への忠義に篤く、誠を貫くもの。

お前の主君はこの歴史だ。

お前は時代を見極め、人の生きざまを見届けるのだ。

だから簡単に生きることがあきらめるな。」

「でも……」

「水瀬、自ら死をえらぶことが潔いのではない。」

本物の武士は決して己のためには死なぬものだ。

己のくだらない虚栄や外聞などではなく、自分の信じる誠のために

死してこそ、誠の武士だ。

お前が死ぬべき時は今ではない。

何があっても生き延びる。

これは俺からの最初で最後の命令だ。いいか？」

一橋公は笑って、けれど圧倒的な君主の器をもって言った。一橋公はやはり稀代の名君なのだ。

”武士は決して己のためには死なない”

死に際は潔くありたい、そう思っていた。

ぐだぐだ生き恥をさらすのはまっぴらだと思っていた。

だが…どんな姿になっても、最期のその瞬間まで、己の信ずるもののために、守るべきもののために泥をかぶるその覚悟のほつがよほど尊い。

俺もそのようにあろう。  
俺の誠、近藤勇のために、何があっても最期のその一瞬まで俺は俺として走り続けよう。

「承知しました。」

水瀬は声を震わせて頭を下げる。

\*

そのあと、一橋公も、肥後の守様も出て行って、部屋には俺たち4人が残された。

沈黙が転がっている。

総司も俺も何も言えなかった。

あまりに突然で、劇的だったから。

「水瀬君……」

不意に勝ちゃんが水瀬に近づくとその肩を抱く。

水瀬はピクリと肩を震わせ、見上げる。

「近藤先生……」

「……おかえり……。」

「良いのですか……?」

「何のことだい? 密命のことは先ほど肥後の守様にも聞いた。

その任務が終わったなら、君が帰る場所はここだろうか?」

勝ちゃんは穏やかに笑って言う。

「近藤先生! あたしは……新撰組に帰りたいです。」

「帰っておいで。いつでも。」

水瀬は堰を切ったように泣き続けた。

俺たちは身分という因習に縛られ、水瀬を犠牲にして走らざるを得

ない状況に追い込まれた。

斉藤からの報告を聞いたとき、あの時ほど、俺は自分の無力さを呪ったことはない。

敵陣に仲間であり、惚れた女を差し出してまで貫きたいこととはなんでしょうかと、迷い、そして揺らいだ。

だが、俺が走るは修羅の道。

人間らしい感情を持つには俺の手は血に染まりすぎた。

行く先が地獄でも、修羅の道に足を踏み入れたその瞬間から、もはや引き返すことはできぬ。

何があっても揺らぐことは許されぬ。

最期のその瞬間まで。

そうしなければ、俺の手にかかって死んだ奴らに顔向けできねえ。

だが、それをもう一度取り戻すことができた、それは水瀬という人間が人を変え、運命すら変えて、水瀬の力でこの困難を越えたのだろう。

「…水瀬。」

俺はかすれそうになる声をどうにか抑えて声をかける。

水瀬は真っ赤な目を見開き俺を見据えた。

「…よく戻った。」

「…土方さん…」

俺たちはただ何も言わずに見つめ合っていた。

否言えなかった。

水瀬の黒い双眸に俺の顔が写っている。

俺は今どんなに情けねえ顔をしているだろう。

だが、それすらどうでもよかった。

ただ一つの想いを除いては。

ただこいつに逢いたかった。

魂の底から。  
死ぬほど逢いたかったのだ。

もう迷わねえ。

俺にとつてこいつは魂の記憶で、出逢うように定められ、時の理すらも超えて結び付けられた女だから。

もう手放さねえ。

二度と。

俺は水瀬をきつく抱きしめた。

目頭が熱くなつて、鼻の奥がつんと痛くなってくる。

俺が、女一人のことで泣いている。

この鬼の副長の俺が…。

俺も焼が回つたもんだぜ。

水瀬はためらいがちに俺の背中に手を回した。

耳元に水瀬のかすれた息遣いが聞こえる。

「土方さん…、泣いてるんですか…？」

「泣いてねえよ。」

震える声は何の説得力も持たない。

ただこの瞬間を俺は永遠に忘れないだろうと思った。

### 第十三章 6・恋情、魔性の炎：沖田総司

目の前の光景に堪えられなくなってそつと部屋をでる。ふと頬を触れば自分が泣いていることに気付く。

まことが戻ってきた。

次に逢うときは斬るしかない、そう思っていたのに、肥後の守様と一橋公の計らいで、どうやら収まりそうだ。

そのこと自体は死ぬほどうれいはずなのに、なのにこんなにも胸が痛い。

理由ははっきりしている。

土方さんから、迷いが消えたから。

まことを愛しぬく覚悟を決めたから。

まことと出逢って土方さんは変わった。

強くなった。

信じる者のために迷いなく鬼になれる覚悟を決めた。

だから…あんな表情を見せるのだ。

今迄に見たこともないくらいに優しく…あれが本当の土方さんだ。あんな表情をさせられるんだ。

私はずっと自分の想いにとらわれている間、土方さんはきつとすべてを押し殺して鬼になっていたのだ。

まことを愛していたから、だからこそ、鬼になって走ろうと揺らぎすら私たちには見せなかった。

ああ、かなわないな…。

まことの幸せを見守ることができればそれが幸せだと思う。

あとどのくらい生きられるのかわからないが、まことが土方さんと



想いを伝えあつて、幸せになればいいと思う。  
死も怖くはなかった。

きちんと受け止めて、最期まで潔く死んでいくはずだった。  
なのに、私は今猛烈にむなしさを感じている。

まことと逢えたことは偽りなき幸せで、うれしい。  
なのに同時に胸が押しつぶされるような苦しさをもたらす。

それはまことにあつたことで残り限られた生への未練が生じたから  
なのか、

完全なる失恋の痛みなのか、測りかねた。

そうだ。

もういいのだ。

まことは幸せになるのだから。

残りのわずかな時間はまことを見守りながら、最期の時まで願わく  
は剣をふるっていたい。

わたしにはそれしかないから。

それだけが私がここにいる理由だから。

初めからわかりきっていることなのに、なぜこんなにも苦しいのだ  
ろう？

「ゴホ、ゴホ」

咳き込んで手をやると、また血が手に着いた。

血の赤は不吉で、でもどこまでも目に鮮やかだった。  
怖い。

初めてそう思った。

死にたくない。

まことに会って、またあの笑顔と共に歩みたい、そう思ってしまった。

私にとってまことは生きる理由だったんだ。

だからこんなにも私は生きたいと思ってしまう。

近藤先生や土方さんは私にとって死ぬ理由だった。

あの人たちを守って死ぬことこそが私の本望だから。

だから死ぬことなど、怖くはなかった。

なのに、生きたい理由を見つけてしまった。

見つけなければ恐怖も苦しみも味わわずに死んで行けた。

今度こそ本当にあきらめなければ。

自分の恋情と、生への未練と、死に、折り合いをつけて、気持ちの整理を始めなければ。

まことは…私の最期を知っているのだろうか。

知っていたところで、あの子は何の揺らぎも見せないだろう。

だからどうしようもなく彼女に惹かれる。

その強さに、しなやかさに。

恋とは決して消えぬ魔性の炎に似ている。

どんなに消え去ったと思っても、熾火のようにくすぶり続け、ある瞬間また息を吹き返すのだ。

きつと私は生涯、この想いにとらわれ続けるだろう。

だとしたら、なんて残酷な楔なのだろう。

恋情の中の嫉妬に焼かれ、永遠に届かない夢に手を伸ばし続ける…。

不意に肩に手を置かれてみると近藤先生が優しい顔をして私を見つめていた。

「総司…。」

きつと私を心配して見に来てくださったのだろう。

私は苦笑していつもの笑顔を作った。

「大丈夫ですよ。先生。」

土方さんをあんな風に支えられるのはまことだけです。だから安心していたんです。

これで土方さんがようやく落ち着くつて。」

「総司…お前…」

「私は大丈夫です。私には剣がある。新撰組があります。」  
大丈夫。

きつとすべてを受け入れて、凜と背筋を伸ばして、死んでいこう。

そのために、気持ちを整理するいい機会になったはずだ。

だからこの恋を殺そう。

土方さんとまことを夫婦にして、そして自分はその幸せを幸福とする。

私は死の準備をする。

それだけだ。

近藤先生は何も言わずに私の肩を抱いた。

少し照れくさくてでも、昔に戻ったようで心地よかった。

### 第十三章 7・約束、伝えられぬ想い（前書き）

長く更新できずに申し訳ありませんでした。

話の方向性を見失い、しばらく一歩が踏み出せませんでした。更新楽しみにしていますとの言葉いただき、再び更新することになりました。

また亀更新になるかもしれませんが、どうぞ最後までよろしく願います。

### 第十三章 7・約束、伝えられぬ想い

いつの間にか近藤先生も総司も部屋からいなくなっていて広い部屋にはあたしと土方さんだけになっていた。

土方さんはあたしの肩を抱いたまま離そうとしない。

あたしは土方さんの肩におでこを押し当てて涙を見られないようにした。

着物からはキセルの煙のにおいがかすかにしていて、それは泣きたくなるくらいに大好きな土方さんの香りだった。

「水瀬…戻ってこい…俺らのもとに。」

耳元でささやかれる低いかすれた声に、こくと、あたしは小さくうなずく。

土方さんの腕の力が一層強くなる。

「水瀬…俺は…」

お前に惚れてる。

もう迷わねえ。

だから、聞かせてくれ、お前の気持ちを…。」

この甘美な言葉はなんなのだろう…。

夢だと思えない。

涙で視界が揺らぐ。

あの雨の夜のことか思い出される。

”次に逢うときにお前の気持ちを聞かせてくれ。”

あの時土方さんは確かにそういった。

ならばあたしも迷うまい。

伝えよう。

この気持ちを。

あたしは口を開いて伝えようとした。

その時、

ズキッ

こめかみに締め付けられるような痛みが走る。

「うっ」

あたしは体を支えきれずに前のめりになった。

「水瀬!!」

土方さんがあたしを呼ぶ声が遠くで聞こえる。  
あたしは闇に引きずられるように意識を手放した。

\*

昏い。

何も見えなくて…

昏い。

ここは、

どこ？

” あなたは約束をたがえようと思いましたね。”

なんのこと？

あなたは誰？

” 時の番人。

あなたをここ柄連れてきたものです。”

約束って何？

” あなたは約束を交わしました。  
愛する者と結ばれぬことを条件としてこの時代に来ると。

それを違えればあなただけでは済まない、体は一瞬にして朽ち果て、愛する者の魂も共に煉獄に落ちることとなる。”

あたしは…自分の想いを伝えることすらできないの？  
それすらも許されないの…！？

”すべてはあなた自身が望んだこと。あなたは恋情を封じ込めてなおこの世に残ることを望んだのです。”

そんなの…本当に覚えていないの…！！

”私はあなたが憎くてこのような契約を結んだのではないのです。真実…

ならばあなたの命を削る代わりに、一日だけ契約からあなたを開放しましょう。

あなたが死する前日。この契約は解かれます。

あなたは一度だけ、想いを遂げることが許しましょう。

ただでさえ短くなったあなたの命はさらに削られます。

それでも良いですか？”

自分が死ぬときにしか伝えられないのね。

あたしはとんでもない契約をあなたと結んでしまった。

でも、それでもあたしはあの人の側にいたかった。

だからその契約を受けます。

” よろしい。では決して契約をたがえるものではありませんよ。

それをすれば私はあなたを煉獄に連れていかねばならなくなる。

では行きなさい。

私の愛おしい真実よ。”



遠くなる。  
光が、遠くなる。

\*

…

……！

せ！

誰かが呼ぶ。

誰？

「…なせ！」

うつすらと目を開けると光が入り込んできて思わず眉をしかめる。

「水瀬！」

「まこと！」

「水瀬君！」

懐かしい声

土方さんと近藤先生、総司があたしを心配そうに覗き込む。

帰ってきたんだ。

また一つ重い契約の枷を背負って。

「では私たちはしばらく外すから、歳、しっかり看病頼むぞ。」

近藤先生は小さく笑って総司と連れ立って出ていく。

総司は何か言いたげにあたしを見ていたけど、あたしは気が付かないふりをした。

静寂が転がる。

「まったくびびらせんなよ。」

不器用だけど、やさしい貴方の言葉が滲みていく。  
あたしの額を固い手が滑る。

あたしは静かに口を開いた。

「土方さん」

「なんだ？」

「あたし…ほかに好きな人ができました。  
だから…気持ちには応えられません。」

声が震える。

ひどいウソ。

そんな人一生できるはずなのに。  
でもそういわないと契約を破ってしまいそうで…。

土方さんは形の良い目を一瞬見開き、そして視線を外した。

「そうか…。」

そいつはお前のこと幸せにしてくれるか？」

「…はい。」

土方さん、あたしあなたの側にいられば、それだけで幸せなんです。

「…ゆっくり休め。」

土方さんは背を向けて部屋を出ていく。

その背中拒絶に満ちていて…もう二度と戻れないことがうかがいしれた。

終わった。

あたしは選んだのだ。

この道を。

決して愛を伝えぬかわりに、ここに残ることを。

ねえ、神様。

残酷な選択をさせるのですね。

大好きな人からもらった大切な言葉をこんな嘘で汚さなければいけないなんて。

あたしはなんて愚かな選択をしたのでしょうかね。

あたしは枕に額を押し付けて鳴咽を殺して泣き続けた。

第十三章 8・遅すぎた春：土方歳三

”ほかに好きな人ができました。”

なんて滑稽なことか。

愛おしいと、惚れていると思っていたのは自分だけか。

そう思うと自嘲がこみあげてくる。

「遅すぎたってことか…。」

あの雨の夜、確かに水瀬は少なからず俺への想いを持っていた。

だがこの半年の間に変わってしまったということだ。

桂なのか、勝殿なのか、

不意にこみあげるのはどろどろとした嫉妬。

ただわかるのはこの恋がありきたりなもので、世の中にごろごろ転がっている多くの恋の結末と同じ結末をたどったということだけ。ぐだぐだと悩んでいる間に心が移ろった。それだけのこと。もう終わったのだ。

縁側に座り、猪口を口に運ぶ。

甘苦い酒がのどを滑り降りて後には焼けつくような熱さが広がった。

「歳、水瀬君の様子はどうだ？」

勝ちゃんが隣に腰を下ろす。

「…ああ。大丈夫だ。」

「どうかしたか？」

こんな時ばかり勘が良くていやがる。

俺は苦笑して勝ちちゃんの猪口に酒を注いだ。

「水瀬には別に惚れた男ができたらしい。」

「何を馬鹿な。」

勝ちちゃんは笑って取り合おうとしない。

「…そうらしい。」

「まさか。」

「笑っちまう。惚れた女をどこのだれかわからない奴にさらって行かれたというだけさ。」

まったく色男の名も返上だ。」

くつくつ

どうやら酔いが回ったらしい。

笑いが止まらない。

皮肉で滑稽。

なんと間抜けなことか。

惚れていることをようやく自覚して伝えてみれば、もはや心が移ろっていたとは。

情けない男にはなりたくない。

水瀬がもしその男のもとへ嫁ぐというならばそれを見送ってやろう  
じゃないか。

あいつの白無垢はさぞかし美しいだろう。

たおやかな百合の様に凜とした美しさを湛えて、切腹に臨む武士の  
ような潔さで嫁ぐその様子が瞼の裏に浮かぶ。

そうして一生をその男にささげるのだろう。

その隣に俺が立つことは二度とないのだろう。

秋の月が杯の酒に映り動かすたびにやわやわと形を変える。

視界が揺らぐのを俺は慣れない酒のせいにした。

## 第十四章 1・別離、分かれた道

慶応3年、あたしは24になった。  
ここへきて5度目の年越しを迎えた。

時代の流れはよくない。

一橋公が將軍になったものの先は明るいとは決して言えない。  
尊王攘夷の動きは一層強い。

この先、どうなっていくのか、誰にもわからなかった。

あたしが新撰組に帰ってきて数か月、あたしはまた山崎さんのもとへ身を寄せることにした。

西本願寺に來ないかと近藤先生は言ってくれたけど、伊東參謀もいるところへ戻るのは得策ではないと思ったから。

それに土方さんと顔を合わせるのがきまらなかったから。

時の番人と名乗ったあの人と交わした契約を守るにはどうしても離れるしかなかった。

そうしてあの人の役に立てるように陰で働くことでしか、共に生きる道はないように思えた。

土方さんは何も変わらなかった。

近藤さんも何も言わなかった。

ただ総司だけがあたしを問い詰めた。

「土方さんのことあんなに好きだったじゃないか」と。

「どうして簡単に好きじゃなくなれるのか」と。

「その程度の想いだっただのか」と。

そのどれもがナイフみたいにあたしの心をえぐったけれどあたしは何も答えることができなくてただ黙っていることしかできなかった。総司は潔癖だからきつとこんなあたしの不実を許せないのだと思う。

そうしてあたしたちは一度も逢わなくなった。

大切な人を傷つけてでも、それでもあたしはここに残って守りたいものがあつたから、

土方さんのあのまっすぐな魂を、最期の武士の魂を守りたかったから。

だからあたしは泣かなかった。

否、泣けなかった。

\*

「水瀬、せつかくここにおるんなら仕事に集中せえ。ぼんやりしてるうつけならここにはいらん。」

不意に山崎さんにはそういつて怒られた。

「すみません。」

「しつかりせえ。お前は何のためにここに戻ってきたんや？腹すえんとこれから起ることに向かっていけんで。」

「はい。」

山崎さんの言っていた意味が分かるのはその二か月後のことだった。



\*

慶応三年三月。

伊東参謀らの一隊が思想の違いから御陵衛士を結成して脱退したのだ。

新撰組を壊そうとしていることは明らかで、そのこと自体には何の驚きもなかったけれど、その一帯の中に平助君と斉藤さんが参加していたことには驚きを隠せなかった。

あたしは今西本願寺に向かって走っている。  
何をしようというのか。

今更本願寺に言ってどうしようというのか。

夜の闇に季節外れの春の雪がやわやわと浮かび上がる。

平助君や斉藤さんがどうして…。

みんな一緒だと思っていた。

ずっとずっと一緒だと思っていた。

なのに、なんでなんだろう。

わかっている。

武士だから。

これも武士の生き様だから。

目に雪が入って涙が出てきた。

夜の大路を走って本願寺に近づくと、見知った影が見えた。平助君がいさつ回りを終えてちょうど屯所を出るところだったらしい。

「それでは。」

門番の隊士に軽く手をあげ踵を返して二人は歩き出した。

平助君は前まで背の小さいのを気にし手たけど、背も伸びて大人びて、どっしりとした風格が見える。

「平助君！」

あたしは叫んだ。

一瞬目を見開き近づいてくる。

「水瀬。なんでここに。」

「行くの…?」

声が震える。

「うん。俺行くよ。伊東さんにはお世話になったんだ。

同門である人がいたから今の俺の誠がある。

新撰組は好きだけど、でもやっぱり俺には俺の誠があるから。」

「…そう。」

伊東さんがどんなに裏で手を汚していても平助君にとっては紛れもない恩師。

そのことは何にも変えられないのだと思い知る。

「水瀬は泣き虫だなあ。

そんなに泣くなよ。

大丈夫だよ。進む方向が違ってても、やっぱり日本を想う心は同じだから。

永の別れじゃない。

同じ空の下で別々に頑張っているんだ。

だから…泣くな。」

平助君。

いつの間にか大人になったのね。

「うん。頑張つて。

応援してる。」

「ありがとう。」

土方さんと、総司のこと頼んだよ。

やっぱり水瀬がいないと元気ないみたいだからさ。

じゃあな。」

平助君はそういうと夜の闇に消えて行った。

武士が武士たるゆえんは誠があればこそ。

それはきつと長年の友よりも、重いものだから

芹沢先生も、吉田も、山南さんも命を散らした。

その誠のために。

そして陰ひなたで、彼らを最期の最期まで支え守り、包み続けた強い女性たちがいる。

この熱い思いのためだけに走っていくことが不器用な武士たちの生き様なのだろう。

だからあたしは泣かない。

誰を傷つけても

きつとそれでも守りたいものがある。

あたしは夜の闇に舞う春の雪をにらみ続けた。

## 第十四章 2・風に舞う：沖田総司

「ゴホゴホっ」

手のひらに付く不吉な朱。

手拭いを出してぬぐう。

じわじわと忍び寄る死の影。

立っていることが辛くて部屋の壁に背を預けて座ると目を伏せた。

見知った自分の部屋。

なのにこんなにも裏寒い。

まこととくだらないことで笑いあい、あの柔らかな笑顔に毎朝包まれて起きていたことがはるか遠い昔に思える。

あの頃私は確かに幸せだったと言える。

幸せとは遠くにあるものではないのだ。

ただそこに、見えぬ場所に転がっているものなのだと思ひ知る。

過ぎ去った日々はあんなにも美しく輝いている。

山南さんも、平助や、斉藤さんもみんないて…

そして笑顔の中心にはまことがいた。

幸せとはあんな風に輝く過去の何気ない一瞬一瞬に内包されているのだ。

目を閉じればまことの笑顔が瞼の裏に浮かぶ。

太陽みたいにキラキラしていて、

春の日差しのように暖かい。

桜の花のように潔くて、美しく、

百合のように凜としていて、  
そして

風のように自由で優しく決して届かない存在だった。

泣き虫で、でも驚くほどしなやかで強靱な芯の強さを持っていて、  
誰よりも愛おしい人。

別の人を想っていても  
それでも大好きだった。

土方さんと今度こそ夫婦になるのだと、幸せになるのだと思っ  
た。

なのに、別に好きな人間がいると、  
裏切られたような気がした。

土方さんは去る女性を追うことはしない。  
きっと自分の人生から切り離して決して振り返らないだろう。

二人はきつと魂の約束で結び付けられている。  
なのにどうしても結ばれようとしな

それがもどかしくて苦しい。  
自分のことのように。

まこととはもう会えない。

私は傷つけすぎたから。

ひどいことを言って、泣かせたから。  
土方さんのためじゃない。

ただ自分がこの恋情を思い切りたかっただけなのだ。  
死にゆく自分の生への執着を断ち切るために、まことを傷つけたの  
だ。

知っている。

こんなことは何にもならないと。

私は何をしているのだ…

駄々っ子の子供のように。

ただ己の状況すら受け入れることができずに  
愛おしい女性を傷つけ、遠ざけた。

私は弱くなった。

すべてを遠ざけて死地へ向かえば何も怖くはないと思っていた。  
でもそうではないのだ。

手から砂が零れ落ちるように大切な自分の生きていた証たちが無く  
なっていく。

次に目を覚ますとき、私の目に映るものはなんなんだろう？  
無事に朝日を見られるだろうか？

自分がこんなにも生に執着しているなんて思えなかった。

生きたい

ただ生きたい。

そう思った。

「沖田組長、巡察の時間です。」

「今いきます。」

一番隊の隊士の呼びかけに、静かに答えて立ち上がる。

生きている実感、  
今となつてはそれを感じられる場所は白刃ひらめく闇の中でしかないのかもしれない。  
それこそが私の生きる意味。  
生きる場所だから。

屯所の門をくぐった瞬間  
春の風が吹き渡った。

風よ。  
この動かぬ体を、もうしばらく舞い上げてくれ。  
そして自由におおらかに何にもとらわれることなくどこまでも飛んでいきたい。

私は重い体を引きずって夜の闇に向かっていった。



### 第十四章 3・侍、守り抜くもの：斉藤一

慶応3年6月、御陵衛士は山陵奉行・戸田大和守忠至に属すことになり、長円寺から東山の高台寺塔頭・月真院に移り「禁裏御陵衛士」の標札を掲げた。

この時新撰組から離隊して三月が経っていた。

俺は副長の命で御陵衛士に参加することで内情を探ることになっていた。

まったく、われながら損な役回りだと思うが、適任を考えれば俺しかおるまい。

藤堂さんは伊東さんに心酔しているし、

沖田さんや原田さんや永倉さんはこういうことには向かん。

その身にあつた役を果たせばよいだけのことだ。

ただもう新撰組には戻れぬ、

互いの隊士の行き来を禁止している以上やむを得ぬことではあるが…  
自分は捨て駒になるのだ。

そのことを恨む気持ちはない。

ただ思いのほか自分は新撰組を気に入っているのだ。

執着心を持っているのやもしれぬ。

ふと頭に浮かぶのは水瀬の顔。

もう久しく会ってはいないが、無事に戻ってこれたらしい。

肥後の守様に掛け合って良かった。

己が水瀬にしてやれた唯一のことであるようにさえ思っ。

そうか、自分は新撰組と水瀬に執着しているのだ。

だからこの状況に不意に虚無感を覚えるのだろう。

もう会えぬ、

それはこんなにも焦燥に駆られるものなのだ。

だが、俺は俺の仕事をしよう。

ただ武士として、大切なものを守ることができるのはうれしいこと  
だと思っ。

”侍とはそばに控える、さぶらうから来た言葉、大切なもののため  
に命をかけ、守り抜くものこそが真のもののだ”

昔会津の父が言った言葉が今になってようやく実感できる。

守るのだ。

自分を武士足らしめてくれた  
良き人、良き友、良き仲間を。

それこそが俺がとるべき道、  
誠なのだと思っ。

\*

今屯所の一室で伊東甲子太郎は同士たちに高らかに自分の思想を語っている。

「この黎明の時に、徳川の古き思想は必要ではない！  
尊王攘夷、天子様をお守りするためには徳川を排除しなければいけない。」

この人は人の心の奥を読むような不思議な話し方をする。

きな臭い。  
いよいよか。

分離後しばらくはおとなしくしていると思っていたが、  
案外早く動き出すらしい。

「新撰組を倒そう！」

「！」

ついに尻尾を出したか、伊東甲子太郎。

空気が変わった。

さすがに三月前まで自分たちがいた新撰組を倒すということで、隊士たちがざわついている。

藤堂さんを盗み見るとさすがに狼狽しているようだ。拳を握りしめている。

「皆静かに。」

確かに動揺は計り知れないと思う。

だが新たな時代に多少の血が流れるのはやむをえぬこと。

新撰組とは往く道が違っているのだ。

どんなに犠牲を払っても我々は天子様のために義を尽くさねばならぬ。

そうだろう、藤堂君。」

「！

…はい。」

藤堂さんは一瞬目を見開き、そして静かに俯いた。きつく拳を握りしめたままに。

藤堂さんはまっすぐな熱血漢だ。

そして情と義に篤い。

伊東さんとは同門。

それに嫌とは言えぬのだろう。

どこまでも信じてついてゆく。

これもまたもののふの姿なのだろう。

道は完全に分かたれた。

時は来る。

伊東甲子太郎との対決の時がすぐそばまで迫っていた。

#### 第十四章 4・嵐、往く道：土方歳三

山崎の書簡を受け取り、奴らに動きがあったことを知り、副長室に幹部たちを集合させる。

皆が集まったのを確認して俺は口を開いた。

「奴らが動き出したらしい。

近藤さんの暗殺計画が出た。」

「「「「「！」「」「」

皆一様に驚きを隠せないようだ。

「新撰組を崩壊させる算段だろうがそうはいかない。

やられる前にやる。

俺らも動き出すぞ。

伊東派を粛清する。」

猶予はない。

伊東派はこれを機に薩摩、長州側につくだろう。

そうすれば新選組の隊内情報は筒抜け、死ぬことになる。

ようやく尻尾を出したあの男を生かすわけにはいかない。

「まってくれ。」

新八が口を開く。

「なんだ？」

「あつちには平助も斉藤もいる。  
あの二人も殺すのか？」

「「！」「」

はつとしたように皆顔をあげる。

「斉藤は心配ない。

平助は…

…逃げせ。」

俺は一瞬迷い、そういった。  
試衛館時代からのあの懐こい顔が思い浮かぶ。

「目的はあくまでも新撰組を排除しようとする動きを止めることだ。  
平助は…何が何でも逃げせ。」

自分に言い聞かせるように言う。

「土方さん、あんた変わったな。  
以前のアなたなら平助ですら容赦しなかつたらうよ。」

しみじみとしたように新八が言う。

変わった？

俺が？

「俺もそう思うぜ。」

左之も鼻を搔きながらいう。

「ふん。今回は必要ないからだ。  
ただそれだけだ。」

変わったことが弱いと同義に聞こえて、俺は視線を外した。

「だが、今のあんたが俺は好きだぜ。土方さん。」

新八が小さく笑う。

「ふん。いってらあ。」

こそばゆくなつて新八に背を向ける。  
優しいなんざ言われたくはない。  
ただこれが正しいと思うだけだ。

誰を犠牲にしても  
何をしてでも守りたいものがある。

新撰組。

近藤勇

そして水瀬。

守るべきもののために鬼になる。  
迷うことなどしない。  
俺はただ修羅の道をゆくのみ。

もう大切なものを失くさない。

嵐が来る。

その嵐の中で、俺はどんなふうに必要なものたちを守れるだろうか？



## 第十四章 5・向かい風に胸を張る

斉藤さんの報告で近藤先生の暗殺が御陵衛士によってたくらまれて  
いることがわかった。

新撰組は機を見て御陵衛士の肅清を始めるらしい。

斉藤さんや平助君は大丈夫なのだろうか。

きつと大丈夫。

そう思うしかない。

慶応三年、11月。

暮れも押し迫り、北風が骨まで凍えさせるような寒い日だった。

「今日や。」

山崎さんが言葉少なく言う。

「…そうですか。」

「近藤さんが伊東を妾宅に招き、そして暗殺、遺体を油小路に放置  
して、引き取りに来た隊士たちを肅清するゆうんが土方はんの考え  
る作戦らしい。まったく新撰組の鬼やなあ。」

「!」

遺体を放置して…なんてあの人はやっぱりどこまで行っても鬼にな  
ろうとする。

自分がどんなに手を汚すこともいとわない。  
守るべきもの、その道のためにならどこまでも  
泥をかぶって修羅の道を進むのだ。

「俺はだがあの鬼に魅せられとるからな。  
あの人のために少しでも走りたいと思う。」

山崎さんは優しい目をしていった。

「…あたしも、行きたい。」

「あかん。女子に魅せられるようなもんでもない。」

「…山崎さん、あたしはもうふつうの女に戻れない。それに、自分  
の過去の落とし前つけなきゃいけないから。」

一瞬蘇る間。

伊東派に襲われたことは今もまだ消えない、そしてきつと一生傷に  
なる。

そこに図らずも山南先生がかかわって居たことも、忘れようとして  
も忘れられない。

「…」

山崎さんは何も言わずにあたしを見つめている。  
山崎さんはあたしの事情も全部知っているから。

「それに、平助君や斉藤さんを守りたいの。」

御陵衛士になっても平助君は仲間だ。

肅清なんてことさせたくない。

「腕は落ちていない。だから任せて。」

剣の稽古は欠かしていない。

総司に仕込まれたこの腕はこの時代のあたしの数少ないよすがだ。

「…ほんま強情な女やなあ。」

山崎さんが苦笑する。

「山崎さんと同じ。」

あの人が鬼になるのなら、あたしはそれを全部受け止めたいから。

あたしも鬼に魅せられているの。」

「狂気やなあ。」

守りたいゆう男の気持ちも汲んでやりや。」

「そんなに柔じゃないの。」

あたしは自分の道は自分で切り開く。」

あたしはいつだって自分の道を切り開いてきた。

これからだってそうだ。

どんなに時代があたしたちを阻もうと、向かい風に胸を張って進んで見せる。

そうしなければ、いけないから。

あたしがこの世界に来たのはそういうことだから。

## 第十四章 6・油小路事件、闇に散る緋

平助君を助けるのだ。

そして誰よりも愛おしいあの人の鬼としての生きざまを見届けるのだ。

月も星もない闇夜。

あたしは山崎さんと共に息を殺してその時を待った。

伊東参謀は監察の大石さんに暗殺されたいらしい。

その亡骸は白い布にくるまれて今油小路に放置されている。

あたしはその亡骸を見てはいない。

あの人が来てからいろいろなことがあった。

あの人の策略で襲われかけたことも、

山南先生が死を選んだことも…。

恨みの気持ちがあつたと思っただけ、

人が死んだのにおかしいくらいに何も感じない。

ただ、心の中を隙間風が通り過ぎるだけ。

むなしい

ただその気持ちしか無かった。

小さく息を吐くと、

隣で山崎さんが言う。

「水瀬、ゆらぐなら、帰りや。邪魔になるだけや。」

昏くて表情はわからないけれど驚くほどに冷たい声だった。

そうだ、今は個人的な感情に浸っている場合じゃない。迷いは揺らぎは弱さになる。

「大丈夫です。」

武者ぶるいだから。」

「しっかりしいや。」

「はい。」

山崎さんに顔を向けて頷いたその時  
小路のほうで人の気配がした。

「伊東先生！」

なんとおいたわしい!!」

「おのれ!!新撰組！」

「下郎が!!許せん。」

隊士たちが伊東参謀の遺体を見つけたらしい。  
その声に、潜んでいた新撰組の隊士たちが飛び出し、途端に金属のぶつかり合う音が聞こえ始めた。

始まった。

あたしのここでの仕事はけがをした隊士の治療と、逃げ出す御陵衛士の捕獲。

そして平助君を無事に逃がすこと。

どうか、無事で。

その時、永倉さんと左之さんの声が聞こえた。

「平助!!」

あたしは、走って声のほうへ駆け出す。

小路の陰には左之さんに抱えられた  
血だらけの平助君が力なく横たわっていた。

なんてこと!!

「平助君!」

「水瀬!」

「平助を頼む。このバカ逃げなかったんだ。」

左之さんと永倉さんの言葉にあたしは頷いて平助君の顔を覗き込む。暗がりでも血の気のない顔が見て取れて、あたしは唇をかみしめた。傷は深く、とめどなく血が流れていく。傷口を抑えてさらしをまく。

息を浅く繰り返す平助君は、もう誰の目に見てもその命の炎を消そうとしていた。

こんなことのために送り出したんじゃない。  
なのに、なんで逃げなかったのよ。

「水瀬…」

応急処置を終えると、平助君が意識を取り戻したのかうつすらと目を開ける。

「平助！」

「平助君！！」

あたしたちはいっせいに覗き込むと浅い息を繰り返す平助君は口元に花のような笑みを浮かべた。

「みんな…そろってどうしたのさ。ひどい顔だな…。」

「平助！！なんで逃げなかった！！！」

永倉さんが見たこともないほど取り乱して言う。

「敵前…逃亡は…切腹だから…。」

それに…俺は……武士…だから…。」

どこか得意げに笑って言う平助君は昔と少しも変わらなかった。

「わかった。わかったから、何も言うな。平助。」

左之さんが声を震わせていうのを平助君は笑って制した。

「二人…とも…俺が…いなくても、  
ちゃんと…サボらないで…稽古…しなよ。」

「馬鹿野郎。お前が心配することじゃねえ！」  
「まったくだぜ。ガキはガキらしくしてろ！」

永倉さんと左之さんはことさら明るく怒ったように言う。  
この三人の掛け合いが好きだった。

いつもふざけてる左之さん。  
それに真面目につっこむ平助君。  
横から茶々を入れる永倉さん。

屯所を明るくして、大好きだった。

でも今この掛け合いはどこまでも切ない。

視界が揺らぐ。  
胸がちぎれるくらいに痛い。

なのに今この光景はなんなの??  
神様はどうしてこんな歴史を選ぶの？

「ふふ、もう…一度…新撰組に…もどりたい…。」

平助君の小さなつぶやきに涙があふれる。

「ふふふ…水瀬…泣くなよ……………水瀬の…笑顔は…太陽だから…笑  
えよ…………。」



平助君はあたしの手を握って笑った。  
どこまでも澄み切った優しい笑顔だった。

「…うん。」

あたしは涙でぐちゃぐちゃで、唇を引き上げたけれど少しもつまく  
笑えずに顔を覆った。

「益荒男の…七世をかけて…誓ひてし……ことばたがはじ大君のため

…後悔は…ない。

こうして…伊東先生に…ついてきたことも…

でも…この…人生…の、中で…一番の…幸福は…皆に…出逢えて  
…新撰組に…い…られ…た、こと…

ありがたき…幸せ…。」「

一瞬平助君の視線が虚空をさまよい、ゆっくりと目を閉じた。  
浅い呼吸はもう見とめられなかった。

「平助!!」

「平助!!」

「平助君!!」

あたしたちは名前を叫んだけど、平助君が目覚ますことはもう二  
度となかった。

助けられなかった、大好きな仲間なのに。

絶対に助けたかったのに。

” 益荒男の七世をかけて誓ひてし ことばたがはじ大君のため ”

報国と忠信を誠にして魁とあだ名されたまっすぐな平助君にふさわしい辞世の句だった。

藤堂平助、享年24歳。

星も月もない夜、闇に緋が散り、命が消えた。

## 第十五章 1・死なせない

どれほどそのままでしたらう。

小路を隙間風が吹き抜ける。

さきほどまで平助君に握りしめられていた手は血が乾いて、かじかんでしまっている。

「水瀬」

頭上から声がして顔をあげると、永倉さんがそこにいた。

あたしは何も言えずにそっと目を伏せる。

「もう帰営する。お前も来い。」

「…はい。」

あたしはふらふらと立ち上がると永倉さんと共に、歩き出す。  
互いに何も言わない。

ただ沈黙が平助君の死を悼んでいるだけだった。

ふと顔をあげると総司の姿が目に残る。

総司は一番隊の隊士たちに事後処理の指示を出していた。

不意に総司の影が揺らいだと思ったなら崩れ落ちるようにその場にしゃがみ込む。

「沖田先生!!」

「組長!!」

隊士たちが総司の周りを囲む。

「総司のやつどうしたんだ？」

永倉さんと共にその場を駆け出す。

「どうした？」

「沖田先生が急に血を吐いて倒れたのです!!」

「!!」

隊士の言葉にあたしは全身から血の気が引いていくのを感じた。

沖田総司の結核…

歴史上あまりにも有名なその事実が今日の前に起きていることに、今迄気が付かなかつた自分に腹が立つ。

あたしは唇をかみしめて総司のもとに駆け寄る。

「どいてください!!誰か戸板を!

すぐに用意して!!」

総司の横でそう叫ぶと、向き直って頬をたたく。

「総司、起きて!!」

「…!!」

うめき声上がるけれど、苦しそうで、起きる気配がない。

血がのどに詰まって息ができないんだ。  
どうすればいい？

もう、誰も死なせたくないのに…。

あたしは総司の頭を傾けて軌道を確保すると、総司の口に自分のそれを重ねて、のどの血痰を吸い出そうとした。

「「！」「」

「水瀬！！」

皆あたしの突然の行動に驚いているらしく息をのむ声が聞こえた。

血を吸出し吐き出す、

何度かそれを続けると、総司が咳き込んで意識を取り戻した。

周りから安堵の声が生まれる。

「ま…こと？」

「うん、もう死んじゃうかと思ったんだから！」

目を覚ました総司の肩に突っ伏してあふれる涙を隠す。  
総司まで死んじゃったらどうしたらいいのよ。

「幸せな夢の続きみたいだな…。」

「え？」

「何でもない。」

総司はかすれた声でそういうと静かに目を伏せて眠りに落ちた。  
浅い呼吸を確認するとあたしは総司を松本先生のもとへ運んでもら  
うように隊士に頼む。

再び歩き出すころには東の空が白んできていた。  
長い夜が明けようとしていた。

第十五章 2 花は桜木…：沖田総司

目が覚めた時、私は松本先生の仮寓にいて、一瞬ここがどこだか分らなかった。

昨日、あの油小路で血を吐いて倒れたのだ。皆に知られてしまっただろう。

「沖田、お前は労咳だ。」

松本先生の言葉を聞いても、あまり焦りは生まれなかった。ただ、ああ、やっぱりと思うだけだった。聞きたいことはただ一つ。

「先生、あとのくらい生きられますか？」

私があまりに平然としているものだから、松本先生も少し面喰っているらしい。

「沖田、そうやけっぱちになるんじゃないねえ。

労咳は根気よく療養すれば治ることだって可能なんだぜ。」

松本先生は諭すように言うが、一年以上前から患ってきたのだ。血の吐く回数も、体のたるさも増してきている。

もう、死期は近いのだろうと思う。

「いいえ。自分の体のことです。大分悪くなっているでしょう。だったら残された命を有効に使いたいんです。私は近藤先生のお役に立ちたい。」

そういつた瞬間、頭に衝撃が走る。  
松本先生が私を足蹴にしたのだ。

「ふざけんなよ。何が自分の命を有効に使いたいだ。  
笑わせんな！」

いいか。てめえ一人で生きてるなんて思うんじゃねえ！」

「松本先生……」

「いいか。沖田。今てめえがこうやって生きてるのは誰のおかげか  
よく考えてみる。」

昨日、倒れたお前の血痰を吸い出したのは誰だと思う？

水瀬だ。

あいつはお前が労咳だったことも、全部知ってたぞ。  
うつることも、何とも思わない。

それよりも助けたいと、そう泣きながら言ってたんだ。  
女を泣かせる男なんざ、武士のかざかみにもおけねえ。

それを自分一人で生きてるような顔しやがって、寝言は寝てから言  
いやがれ。

このすつとごどつこいが。」

松本先生の啖呵が心を揺さぶる。

まことが……、

助けてくれたのか……。

昨日のことは夢ではなかったのだ。

目が覚めたとき、まことが泣きながら私を心配してくれた、  
あれは夢ではなかった。



労咳だと知っていても、うつるかもしれないのに。

私は無意識に手を口にあてた。

この口にまことの唇が重なったのか。

この締め付けられるような痛みはなんなのだろう。

それを直視することはできなかったがただ、わかることがある。

もう、まことと顔を合わせることは二度としてはいけない、ということだ。

あの子にこの病をうつすわけにはいかない。

まことは誰よりも幸せにならなければいけないから。

いつか、土方さんと共に歩く日まで、きつと守らなければ。

だから、私は剣を振り続けよう。

自分の生きる意味を見失わないように。

「…松本先生、すみませんでした。

もう命を軽んじるようなことは言いません。

治療もします。精一杯生きます。

でも、ひとつだけ、これだけは譲れません。

私は剣を握り続けます。」

「沖田！」

「先生、私は武士です。剣は私の命です。だからこれは誰になんと言われようとも置くわけにはいかないのです。」

「…武士つつつのはなんつつ意地っ張りないきもんなんだ。」

「それから、お願いがあります。」

あの子を、水瀬まことを私に近づけないでください。」

「なぜだ？」

あの娘は、医術の心得もある。

お前もあの娘に惚れてんだらう？

何が問題だ？」

「うつしたくはないのです。

大切だから…誰よりも。

それに、いったんあの手を握ってしまえば弱い私は離せなくなる。

あの子には魂の約束で結びついた運命の人がいるのです。

だから、その幸せを守ってあげたいんです。

私にできるのはそれだけだから。」

「沖田…」

「先生、私はきちんと生きてますよ。治療もします。

でも、私の、沖田総司としての誠を貫かせてください。

どうぞよろしく願います。」

「そうか…。」

松本先生はそういうと、私の肩に手を置いた。

松本先生の手はあたたかくて、私は父というものを知らないが、こんなふうだったのではないかと思う。

厳しくても暖かで優しい。

そんな人だったのではないかと、記憶にすらない、父の面影を探った。

私にできることはいかばかりもない。

ただ、誰かに病をうつしてはいけない。

取り乱すこともなく、まことと土方さんがきちんと結ばれるように見守って送り出すのだ。

もういい加減にしなければいけない。

子供ではないのだから。手に入らないものをねだって駄々をこねるような真似をするのではなく、潔く最期を迎えねば。

散り際は桜のようでありたいと思う。

花は桜木、人は武士。

来年は…桜を見られるだろうか？

私はこみあげる熱いものを抑えるようにそつと目を伏せた。

### 第十五章 3・烈風の中へ

御陵衛士の肅清があり、平助君が死んだ。

あの優しい明るい笑顔を見ることはもう二度とない。

まっすぐで、熱血漢で、好きだった。

視界が揺らぎ、涙がこみあげる。

でも、泣くわけにはいかない。

でも、あたしは知ってる。

このことを誰よりも責めているのは土方さんや近藤先生だということ。

あの人たちはきつともう戻れないことを知っている。

これから待ち受けている道がどれほどの苦難があろうとも、きつと

あの人たちは進んでいく。

ならば、あたしは何事も無いように笑っていなければ。

平助君はあたしの笑顔をほめてくれた。

だから笑おう。

これからの修羅の道の中で、少しでも、あたしが力になれることはそれだけだったから。

あたしは西本願寺の屯所に住んで、総司の看病を任せられたのだけれど、総司はそれを拒絶したらしい。

らしいというのはあたしは一切会えなくて、言葉すら交わすことができなかったから。

相当嫌われたらしい。

もうこれ以上会えないんだろうか。

総司のことは好きだった。

友達でも兄弟でもない、似ているけど違う。すごく近い存在、すごく好きだった。だからこそ、絶対に助けたかった。結核なんて治したかった。

この時代では不治の病、でも労咳は不治なんかじゃない。きちんと栄養のあるものをとれば必ず治る。

なのに、総司は逢おうともしてくれない。

あたしが知っている八木邸の屯所ではなくて、だだっ広い西本願寺はなんだか落ち着かない。

ただその廊下で行き場をなくしていつもうつろつくしかなかった。

\*

今日もご飯を作る。

のどが切れるまで咳き込んでいるだろう総司を思うと、胸が痛くなる。

なるべくやわらかくて食べやすいものを、そう思って雑炊にする。

鳥のだしに細かく切ったささみと人参大根を具にして水分を多めにした雑炊を作った。

唯一の救いはあたしの名前を出さないで出した料理はきちんと食べてくれること。

治ってくれば、それでいい。

「総司のか？」

ふと後ろから声が聞こえて振り返ると、土方さんが立っていた。

ドクン

胸がざわつく。

この人を見るとどうしようもなく心が騒いで熱いものが体中を流れるのを感じる。

「はい。具を細かくして雑炊にしたら食べてくれるようになりましてし。」

あたしは何でも無いように笑う。

「…総司はまだ、水瀬に逢おうとしないのか？」

「ええ。嫌われたのだと思います。それでもきちんとか飯を食べて、薬を飲んで治ってくればそれでいいんです。」

声が震えそうになる。

「あいつは意地っ張りだから許してやってくれねえか。」

土方さんのついぞ見たこともないような優しい顔に少し戸惑う。

「どうかしたのですか？」

「…お前は勘が良かったな。」

戦が始まる。かなりでかいやつだ。新政府軍は幕府の力が残るのが許せないらしい。」

徳川慶喜が大政奉還をしたのはつい二か月前。

江戸城を無血開城したことに、新撰組でもかなり動揺していたが、あたしは慶喜様の覚悟がすごいと思った。

無駄など、流さない、不名誉は自分だけが負うという覚悟が伝わっ

てきて…あの人はまことの武士なのだとそう思った。  
なのに、軍力が残していることが許せないのだ。  
古きものを徹底的につぶさねば気が済まないのだろう。

「…行くのですか？」

「俺らが行かないで誰が行くんだよ。」

「御武運を。」

「ああ。」

もっと言うべきことはたくさんある気がした。

なのに、何も言えなかった。

ただ、この愛おしい人は、きつと振り返りもせず、自分の身を白刃  
の中に投じていくのだろう。

止められない。

武士の誠は誰にも止められない。

互いに沈黙していたその時、

「大変です！！近藤先生が狙撃されました！！！」

切羽詰まった隊士の声が聞こえ、あたしと土方さんは走り出した。

時代の烈風が容赦なくあたしたちを襲う。

そんなことを感じていた。

## 第十五章 4・その笑顔を守るため…土方歳三

勝ちゃんが狙撃された。

犯人はわかっている。御陵衛士の残党だ。

俺はきつく唇をかみしめた。

消毒のにおいが部屋に満ちている。

勝ちゃんはその大きな体を横たえてさすがに青白い顔で眠っていた。

狙撃されたのは左肩。

どうにか屯所まで戻ってきたが、そのあとは崩れ落ちるように倒れこんだ。

松本法眼を小姓の市村に呼びに行かせ、水瀬が応急処置をした。

傷口を強い酒で消毒し、食い込んだ玉を取り出す。

うめき声一つ上げずにじっとしていた勝ちゃんもさすがに終わった後はぐったりしていた。

松本法眼は水瀬の処置に感心して、薬を処方して帰って行った。

その薬を飲むとすぐに眠りについた。

「俺のせいだな…。」

言葉が沈黙の中に転がった。

情けなかった。

ただ。情けなかった。

誰ひとり守れやしない。

芹沢さんも、山南さんも、平助も…死んだ、否、殺した。

俺のせいだ。



あのと看、もしああしていれば、こうしていればと、後悔が胸を巢食う。

力づくでも止めていればこんなことにはならなかったか。

そんなことは何もならない。

終わってしまったことことに、もしなんていう選択肢はないのだから。

俺にできることはただ修羅の道をゆくことのみ。

それは嫌というほどにわかっているのに、不意に足が泥にとられたように重く動けなくなる。

だから止まるわけにはいかないのだ。

「土方さん」

不意にかけられた言葉にはっとして振り返る。

水瀬が血を洗い流して戻ってきたらしい。

「少し休んでください。近藤先生も落ち着いてますし。」

穏やかに言った。

あの勝ちゃんの様子を見ても取り乱すこともなく気丈に手当てをした。

こいつはどこまでも凜として強い。

総司のやつが血を吐いて倒れた時、血を吸い出したこいつを見たとき、胸がちぎられるような衝撃を受けた。

想いの強さに。

敵わないと。

「土方さん、付いていきますから。何があっても。

だから、貴方は貴方の道を走ってください。」

水瀬は小さく笑った。

その笑顔はどこまでも澄み切っていて、このまま消えてしまうのではないかとすら思った。

不意に抱きしめたい衝動に駆られた。

つかんでいないと、消えてしまうような錯覚に駆られたから。

だが、すんでのところを押しとどめた。

こいつには好いた男がいる。

それが総司なのかどうか測りかねたが、俺が入り込む余地はない。

いつまでも、振られた女にすぎるようなことはしたくない。

ただ幸せに。

ただ健勝で。

こいつがこの空のどこかで笑っていれば俺は走っていける。

そう思うと、心の澱が緩んでいくような気がした。

「水瀬、総司や近藤さんを頼んだぞ。」

「はい。」

水瀬が花のような笑顔でうなずいた。

何も言うまい。

この魂から欲するこの渴望感を。

口にすることはない。

この想いを、もう二度と。

ただこいつの幸せを願うのみ。

こいつの幸せを、未来を守るために、俺は修羅の道を往く。

## 第十五章 5・風、想いのままに。

近藤先生の手当てを終えて外に出た瞬間、不意に涙がこみあげてくる。

それは近藤先生が助かったことへの安堵と、一歩間違えば命を落としていたかもしれない恐怖。

あたしは濡れ縁に腰掛けると、膝を抱えて座り込み、瞼を膝に押し付けた。

神様、どうか新撰組の仲間をこれ以上奪わないで。

月だけが憎らしいくらいに美しく輝いている。

「水瀬」

不意に声をかけられて振り返ると、斉藤さんが立っている。

斉藤さんは油小路事件後、改名、山口二郎として新撰組に帰ってきた。

それに動揺している隊士もいたけれど、あたしはただ生きて戻ってきてくれたことがうれしかった。

「斉藤さん……」

「もう斉藤じゃない。」

斉藤さんは苦笑している。

「いきなり山口さんなんて呼べないです。あたしにとっては斉藤さ

「んですし。」

「まあ、いい。好きに呼べ。  
局長はどうだ？」

斉藤さんはあたしの隣に腰掛けて言った。

「ええ、落ち着いて眠っています。」

「そうか。」

「…もうすぐ戦が始まるな。」

「ええ…。」

「怖いか？」

「また皆が傷つくかと思うと、怖いです。」

「自分はまだ指をくわえてみているしかできないことが。」

「お前は、お前にしかできぬことがあるだろう。」

「何もせずに黙って待つのはお前には似合わん。」

「！」

あたしにしかできないこと…。

あたしはどうすればいい？

みんなを助けるために、できることは何？

総司や近藤先生を守ってここに居ることだけか？

「お前は風だ。自由に自分の思うままに走っている時が一番輝いて

いる。」

あたしの望み、それはみんなを守ること。そのためにもまだあたしは何もしていない。泣く前に、崩れる前にまだままだできることはあるはずだもの。できないことを嘆く前に、できることを探そう。

「…斉藤さん、あたしも戦に行きます。みんなを手当てする救護班として。行かなければあたしは一生後悔する。」

力の限り、助けたい。」

「止めたとしても、お前は聞かんだろうな。」

斉藤さんはあきれたように小さく笑った。

\*

あたしは戦に行きたい旨を土方さんに伝えた。土方さんには反対されたし叱られたけれど、後悔したくないと伝えたら「勝手にしろ。」と呆れられた。死に行くんじゃない、守るために行く。

ここに残る総司や近藤先生の看病を屯所に残る隊士に引き継ぐ。総司はあたしがそばにいないことを望まない。顔を出すことも許さないくらいだから。だから、せめて、陰でもできるように遣せるものを、残そう。

総司や近藤先生の療養メニューの献立。傷の手当の仕方。

包帯の巻き方。  
薬の飲み方。

そんなことを細かく書き留めていくと、土方さんの小姓をつとめる市村君に頼む。

市村君はまだ16、でも素直でやんちゃでかわいい弟みたいな存在だった。

「水瀬さん、副長が荒れてましたよ。」

市村君に引き継ぎの書類を渡すと、市村君は苦笑していった。

「新撰組のために自分の力を有効に使える場面を進言しただけよ。土方さんもきつとわかってくれる。」

「水瀬さんは意外に頑固なんですね。」

「うん。頑固でわがまま。」

自分のしたいように、後悔のないように生きる。」

「かつこいいなあ。そんな生き方。」

俺はまだまだ剣も未熟だから、戦には行けない、それが悔しいです。自分の能力に自信をもって行動できるってすごいです。」

そんなんじゃない。

あたしはもう誰も失いたくないだけだ。

自分にできることは少なすぎる。

でも、何もしないで泣いていることはもうできない。

「近藤先生と総司に挨拶してくるね。」

そういつて踵を返す。

もう迷っている時間はない。

あたしはあたしのできることを、あたしはあたしのすべきことをする。

そのためには、言うべきことをきちんと伝えよう。

後悔なんてしないように。

## 第十五章 6・障子越しの…

総司の部屋の前に来ると、あたしは部屋の中の気配をうかがった。眠っているのだろうか…。

「誰です?」

部屋の中から聞こえる声。

やっぱり総司は気配に敏い。

「ごめん、あたし。」

「ここへは近づくなと言ったはず。顔も見たくないから。」

刺さるような総司の冷たい声にひるみそうになる。

「…顔は見せない。」

障子越しでいいから聞いてくれる?」

「…。」

沈黙を諾として、あたしは口を開く。

「あたし戦に行くことにした。救護班として、ついていくことになったの。」

だから行く前に、総司に挨拶をしようと思ったの。」

「…。」



「総司はもうあたしを見たくないって思うかもしれないけど、それでもいいから、きちんとご飯食べて、休んで絶対に治すことを約束して。」

「…うん。」

消え入りそうな小さな声ではあるけれど、答えてくれた。そのことがうれしかった。

「総司と話せてよかった。」

市村君に後のことは任せてあるから安心して。」

「…。」

「じゃあ、あたし、もう行くね。」

あたしは立ち上がって障子から離れようとした。その時、

「まことー！」

総司に呼び止められる。

「何？」

「どうか、健勝で。」

絶対に無理はしないで。必ず、生きて帰ってくると約束して。」

障子越しに総司の声が聞こえる。

総司が話してくれたことがうれしくて、あたしは力強く頷いた。

「うん！」

守りたいものがある。

だからあたしは進もう。

ただ前に前に。

この命が尽きるその瞬間まで、自分のできることをするのだ。

障子越しではあるけれど、総司との溝が少し埋まった気がした。

第一五章 7・障子越しの恋、君のためにできること…沖田総司

まどろみの中で人の気配を感じて目が覚めると障子のむこうに人の影が見える。

誰かと思つて声をかけるとまことがそこにいた。

「ここへは近づくなといったはず。

顔もみたくないから。」

ひどいことを言っている。

まことが私を心配してくれているのはしっている。

でもだからこそすぎるわけにはいかないのだ。

大事だから。

この死病をうつしたくない。

私はてをきつく握りしめた。

骨ばつて痩せた体。

眠れぬ夜。

止まらぬ咳。

溢れる血。

夜眠つたとき、次に朝きちんと目覚められるのだろうか、と恐怖に駆られることを誰にも知られなくなかった。

「顔は見せないから、聞いて。」

障子の向こうから静かな声がきこえる。

「あたし、戦に行くことにした。救護班として、あたしはあたしのやるべきことをするよ。」

！  
私は息をのんで動くことすらできなかつた。

危険にさらしたい訳じゃなかつた。

ただまもりたかつただけなのだ。

それなのに、私はそのちからさえ残されなかつた。  
だから遠さかることしかできないのだ。

「総司はあたしの顔なんて見たくないとおもつかもしれない、それでもいいからちゃんと食べて休んできちんと治して。」

一瞬障子を取り払って彼女の身体を抱きしめたい衝動に駆られる。

違うのだ。

本当は逢いたい。

その笑顔が見たい。

守りたい。

幸せにしたい。

でもそのどれも私には許されないから。

唯一できるのは遠ざけて病気をうつさないようにするだけ。

「うん…。」

このふるえがどうか彼女に伝わりませんように。

先に手を離したのは自分。

手を伸ばせばそこにいるのに、なのに遠ざけて、傷つけて…。

もう会えないかもしれない。

そう思ったら去っていく影を呼び止めざるを得なかった。

「まことー！」

止まる影。

「どうか健勝で。

無理はしないで。

必ず帰ってくる」と約束して。」

こんな女々しいことしか言えぬ自分が齒がゆい。

この手を伸ばせば届きそうなのに、けれど決して届かない。

届いてはいけない。

大切な人を守る唯一の方法だから。

この障子が私たちの運命を隔てているように思えた。

誰もいない暗い部屋で咳き込む。

お馴染みになつてしまった血の味。

私ははをくいしばって泣くのをこらえた。

## 第十六章 1・鳥羽伏見の戦い、源さんの死

新政府は徳川幕府の名残を一切許さないらしい。

徳川慶喜出兵の報告を受けて政府に緊張が走り、3日から緊急会議が召集され、政府参与の大久保利通は旧幕府軍の入京は政府の崩壊であり、錦旗と徳川征討の布告が必要と主張したが、政府議定の松平春嶽は薩摩藩と旧幕府勢力の勝手な私闘であり政府は無関係を決め込むべきと反対を主張。

ついに徳川を賊軍として討伐が決定したのだ。

慶応四年、一月三日

ついに歴史上あまりにも有名な鳥羽伏見の戦いの幕が切つて落とされた。

元日に、徳川慶喜は討薩表を発し、1月2日から3日にかけて「慶喜公上京の御先供」という名目で事実上京都封鎖を目的とした出兵を開始した。旧幕府軍主力の幕府歩兵隊は鳥羽街道を進み、会津藩、桑名藩の藩兵、そして新選組は伏見市街へ進んだ。

3日夕方には、下鳥羽や小枝橋付近で街道を封鎖する薩摩藩兵と大目付の滝川具拳の問答から軍事的衝突が起こり、鳥羽方面での銃声が聞こえると伏見（御香宮）でも衝突、戦端が開かれた。

新政府軍の新式の銃や大砲の威力はすさまじく、次々に人が死んでいく。

弾幕射撃によって前進を阻まれ、伏見では奉行所付近で幕府歩兵隊、会津藩兵、土方さんの率いる新選組の兵が新政府の隊に敗れ、奉行所は炎上した。

血と、悲鳴と怒号、鉄の玉が矢となって飛び交い、救護所はけが人と遺体ですぐにいっぱいになった。

地獄とはまさにこのこと。  
くすりも包帯も一瞬で尽きる。  
片手や足が無くなって、それでもなお泣きわめく人。人。

「いてえよ。」

「母ちゃん!!」

「死にたくねえ!!」

吐きそうなくらいの血の匂いの中、あたしはずっと動き続けた。  
傷口を洗い、包帯を巻く。  
際限なく増え続けるけが人、手当てしたそばから死んでいく人。  
麻痺する感覚。  
自分が怖かった。

救護班の人に教えたのは簡単な応急処置。

そして災害時の救護の基本トリアージ法。

手当ての優先度を決めて色の布を体に付けて判断するのだ。

緊急性の高い人は赤、軽度の人は青、そして手の施しようのない人は黒。

黒の布を巻くとき、無力感と申し訳なさ、罪悪感で頭がおかしくなりそうだった。

でも、少しでも多くの人を助けること、それが自分の戦いだから、  
そう言い聞かせてただひたすらに動き続けた。

「!」

不意に手首をつかまれて驚く。

まだ若い会津の兵士だった。

額や目元に、幼さが残っている。

腕には黒の布。

片腕がなく、お腹からもどくどくと血があふれていてもう誰の目に見ても、助からないことは明らかだった。

「ゆ…き…、いま…かえ…る…」

かすれた声が聞こえる。

あたしは彼の横にしゃがんで肩からかけていた竹筒の水筒から水を飲ませ、血だらけの手を握る。

「ゆ…き、あ…い…して…る…」

この人は今夢を見ているのだ。  
大切な人に抱かれている夢を。

だっただらせめて幸せな夢のままに逝かせてあげたい。  
あたしにはそれしかできないから。

「うん、お疲れ様。頑張ったね。」

あたしは笑顔でその人に笑いかけると、彼は至福の表情でゆっくりと瞳を閉じて、そのまま動かなくなった。

彼の手を重ね、顔を拭いて血をぬぐうと、きれいな顔立ちをしていることがわかった。

一瞬黙とうをささげ、すぐに踵を返して戦場の中へ飛び込んでいく。  
野戦病院という名の命を救うための戦の中へ。

以前の自分ならこんな状況に泣きわめいていただろう。  
なのに今は泣けない。

何十人、何百人もの人がたった一日の中で死んでいく。  
家族や恋人に逢うこともかなわず、無念の中で。



だからせめて、黒の布を巻いて運ばれた人には末期の水を飲ませたり、手を握ったりしてその命を看取った。それが単なる気休めで、自己満足でしかなくても、泥にまみれて、孤独に死んでいかせるのは耐えられなかったから。

泣いている暇なんかない。

ただ必死に手を動かし、手を握り、声を掛け合い、自分のできることをするしかなかった。

\*

一月五日。

新撰組は淀まで退却し、みな疲弊していた。隊士のかかりの人数がけがをしたり、中には亡くなったりしている人もいる。

その時だった。

「水瀬！！」

血だらけの永倉さんに連れられてまだ若い男の子が呆然とした様子でたちつくしていた。一緒にいたのは井上泰助君。源さんの甥っ子で、まだ12、3だった。

「永倉さん！泰助君、けがは！？」

あたしが駆け寄ると、永倉さんが沈痛な面持ちで口を開いた。

「水瀬、源さんが…死んだ…。」

「!!!」

一瞬音がすべて消えた。

源さんが、優しく控えめで、みんなをお父さんみたいに見てくれていたあの源さんが…。

”自分には何のとりえがあるわけじゃないからねえ”と笑っていた源さん。

でも本当は知っている。

あの控えめだけど暖かくて優しい源さんがいたから、みんな馬鹿ができた。鬼になれたことを。

「立派な…最期でした。私にとっては…誰よりも、あの人は武士でした。」

絞り出すように泰助君が声を震わせる。

あたしはたまらなくなつて泰助君を抱きしめた。

小さくてまだ細い肩だった。

臉が熱い。

「首は…重くて持って帰れませんでした…。」

だから、近くの寺に埋めました…。

おじさんを一人にするのは…かわいそうなんです。でも…どうしても持ち帰れなくて…

結局持って帰れたのはこの髪だけです。」

そういつて差し出したのはぎざぎざに斬られた源さんの遺髪だった。

決して泣くまいとする泰助君が痛ましくて、あたしは泰助君を抱きしめて泣いた。

これまでの我慢が堰を切ったように溢れ出し、熱い涙となって流れ落ちる。

「泰助君、源さんも君も、誰よりも立派な武士よ。

源さんはここで泰助君を見てくれてる。よくやったって。

だからもう我慢しなくてもいいのよ……。」

泰助君の肩を抱きながら目を見て言うと、澄んだ美しい目で見返した。

「水瀬さん、私は、泣きませんよ。

だって、私も……武士ですから。」

そういつて泰助君は澄んだ笑顔を浮かべた。

あたしはそんな泰助君がいじらしくて、痛ましくて、源さんの死がつらくて、戦いの理不尽さに涙が止まらなかった。

どうしてこんなにも血が流れ、命が散るのか。

皆家族があり、誰かにとっての大切な人で、簡単に奪われていいはずがないのに……。

あたしは永倉さんや泰助君の見守る中涙が枯れるまでずっと泣き続けた。

いつの間にか夜の闇があたりを多い、空には輝く星が瞬いていた。

この三日間で多くの人の命が散った。

その人たちの魂がどうか、救われますように。

あたしは星に祈るしかできなかった。



## 第十六章 2・海のような人

鳥羽伏見の戦いで敗戦の辛苦をなめた旧幕府軍のありさまは本当に目を覆うものだった。

新撰組は全体の三分の一が戦死したため、京から江戸へと移動して力を蓄えることになったので、大阪で、総司と近藤先生と合流、船で江戸へ向かうことになった。

あたしはけが人を収容した船のほうに乗って手当てをしていたのだけれど、何分医療器具も、薬もなく病気になるって死んでいく隊士たちに何もできなかつた。

そしてもう一つあたしたちを悩ませたのは船酔いと食事のひどさだった。

船酔いで体力を消耗する中、まずい食事はさらにあたしたちの気力をそいだけけれど、船旅ではできるものも限られていて、皆ただ耐え続けた。

甲板の隅に倒れかかるように座り込む。

冬の刺すように冷たい空気が逆に心地よい。

船酔いに吐き続けて、体力もいい加減なくなってくるのだけど、けがをしている人たちはさらに苦しんでいる。

そう思つてけが人の見回りを終えたところだった。

膝を抱えて寝不足の目を膝に押し付ける。

総司や近藤先生は大丈夫だろうか？

きちんとご飯は食べられているだろうか？

橋本の戦いでけがを負った山崎さんは？

どうにか江戸まで持つてほしい。

そうすれば松本先生がいる。

神さま、どうかお願いします。

皆を助けて。

「水瀬さん！大変です。山崎さんの容体が！！」

！

あたしはふらつく足に鞭をうって船室へ駆け出した。

部屋ははいると、全身に包帯を巻かれて横たわる山崎さんが目にはいる。

橋本の戦いで全身に傷を負った山崎さんには薬が無くて簡単な応急処置しかできていなかった。

山崎さんは震えが止まらないらしく、目の焦点が合っていない。

かつかつと歯の根もあわず震え続けている。

「！

だれか、気づけの焼酎持ってきて！！あと暴れないように男手を！！」

どうすればいいかわからない。

ただショック状態に暴れる山崎さんを押さえつけてその手を握って名前を呼び続けることしかできない。

「山崎さん、大丈夫、側にいるから！！」

しばらくたつと、震えが収まり、少し症状が落ち着いたようだった。あたしの手には山崎さんの爪の跡がくつきり残っていた。

その夜遅く、不意に山崎さんが目を覚ました。

さつきショック症状で暴れた人とは思えない穏やかで落ち着いた表情だった。

「山崎さん、わかる？あたしだよ。」

「水瀬…か。」

「うん。寒くない？」

「なんや、痛くはないんやけど…少し寒いなあ…。」

顔は紙のように白くなっていてまるでもうこの世のものではないみたいだった。

あたしは山崎さんの命を引き止めるように手を握り頬にあてる。

そうしないとすぐにでも彼岸に逝ってしまうような気がしたから。

「女子に…手えにぎられんの悪くないな…。」

小さく笑った山崎さんに思わず泣きそうになる。

「その減らず口閉じてさっさと治してください。」

「ふふ…なつかしいなあ。お前と監察の仕事できて…おもしろかったです。」

「まだこれからです！まだまだ教えてほしいこといっぱいあるんだから。」

「危なっかしくてみてられなかったわ。でも…お前のそのまっすぐさに救われとった。」

せやから、おおきに…。

局長や副長にもお世話になりましたて伝えて…な。」

山崎さんの目はもうここではない遠いところを見ている。

その命の炎を消そうとしているのが見て取れて、あたしは一層手に力を込める。

「そんなの自分で伝えてください！！逝っちゃダメです。

一人だけ一抜けなんてずるいです。」

「次は…別の形で…お前に、逢いたい…。」

別の形…

山崎さんの目があたしをとらえる。

黒い瞳にあたしの泣きはらしたひどい顔が写っている。

一瞬手に力がこもり、そして手が滑り落ちた。

「山崎さん、山崎さん！！だめです。

逝っちゃダメ、お願い…！嫌です。いや…逝かないでください…。」

あたしは山崎さんの肩を揺さぶり続けたけれど、山崎さんが目覚めることはなかった。

あたしの手にはさっきまで生きるために必死にもがいていた山崎さんの爪の跡が痣になって残っている。

その痕跡を手でなぞりながら、さっきまで生きていた人が今はもう彼岸にたたずんでいることへの不条理さにしばらく動けずに、土方さんが入ってくるまで、ずっと泣き続けた。

\*



山崎さんの遺体は海に流されることになった。

忍びの流れをくみ、決してひとところにとどまらない山崎さんにふさわしい最期だと思う。

土方さんや近藤先生、そして新撰組の隊士たち、総司も病を押して葬儀に参列した。

白い布にくるまれた山崎さんの遺体が波間を揺蕩いながら海に沈んでいく。

「山崎は良い奴だった あいつはアこんな大勢の人に見送られて幸せだ」

遠くなる白を見つめながら土方さんが隣でつぶやく。

「お前が看取ったんだろう。」

山崎を……。礼を言う。

あいつも水瀬に看取られて幸せだったさ。」

視界が揺らぐ。

泣かないと決めていたのに、いったんあふれ出した涙は止まらない。

「見事な男だった。」

正装した近藤先生が肩をかばいながら声を震わせた。

もう波間に隠れて山崎さんの遺体は見えない。

でもこの雄大な太平洋に山崎さんは揺蕩う、それでいい気がした。

あの人は海みたいな人だから。

優しく、厳しくて、すべてを包み込むそんな人だったから。

山崎さん、あなたは海みたいでした。

優しく、でもすごく厳しくて…

あたしあなたのおかげで、ここまでこうして生きてこれたんです。だからありがとうございます。

怒られ続けたけれど、パートナーって言うていいですか？

あたし水瀬は、新撰組一の監察の相棒だったって胸を張ってもいいですか？

「別の形で逢いたい」って最後の最後にそんな告白するんです。

大好きでしたよ。その厳しさも、優しさも…。

また逢いましょう、この時空のどこかで。きつと。

深い濃い群青に雪が解ける。

それは際限なく永遠を思わせるものだった。

## 第十六章 3. それぞれの戦い

江戸に着くと、土方さんや近藤先生たちは、土方さんのお姉さんの嫁ぎ先の佐藤家に身を寄せ、今後の動き方を決めるといった。

総司は千駄ヶ谷に身をうつし療養することになった。

新政府軍にとって沖田総司の存在は、危険極まりない。

暗殺の動きも出てくるということで、総司は名前を変え、あたしと夫婦ということにして千駄ヶ谷に潜伏することになった。

総司は最後まで反対し続けていたけれど、近藤先生に説得されてしぶしぶ了承したようだった。

水瀬総司、お倫といういつかの密偵のときと同じ名で身を隠すことになり、それは昔の幸せだった時を思い出させ、もうあのころには戻れないことを実感させ、切なかった。

総司は前みたいに顔も見たくないと、遠ざけることはなくなったけれど、あまり会おうとしなかった。

もう自分で起きることもままならなくなってあたしに逢いたくないなんて言う余裕が無くなっただけなのかもしれないけれど。

食事や掃除以外には総司の部屋へは立ち入らないと約束し、ただ顔を合わせた時はあたしは昔みたいに話した。

たくさん。時を取り戻そうとするように、面白おかしくいろんなことを。

総司ははじめは何も話さなかったのだけれど、少しづつ相槌を打ったり、笑ったり、反応を見せるようになった。

あたしたちは世間の激動がうそのように、静かに、穏やかに時を刻んでいた。

慶応四年三月。

寒さが緩んできて、総司の調子が今日は少しいい。

最近はまだあまり食べ物も受け付けなくなってきたいるけれど、薄味の雑炊くらいなら、のどを通るだろうか。

そう思いながら、食事の支度をしていたその時だった。

勝手口に、人影が見えて、緊張が走る。

手元に置いてある脇差しを手を取って、構えた。

人影が動いたその時、

「何奴！」

相手の鼻先に脇差しを突き付ける。

驚いて、目を見開いているのは、永倉さんと原田さんだった。

「驚かせるなよ、水瀬。」

「まったく肝が冷えたぜ。」

あたしは謝りながら脇差しを鞘に納めると、二人を家にした。懐かしくて二人のサプライズ訪問は心を浮足立たせた。

総司の居室の前に来ると、あたしは静かに声をかける。

「総司、永倉さんと原田さんがお見舞いに来てくれたよ。」

二人を通すと、総司が痩せこけた顔に笑顔浮かべ、二人を迎え入れた。

二人とも総司の痩せように驚いているようだったけれどすぐに笑顔になって冗談を言って総司を笑わせた。

あたしは二人のためにお茶を入れて持つていくと、台所へ戻り、食事の準備を続けた。

きつと男同士積もる話もあるだろう。

総司が二人に逢えるのはこれが最後かもしれないから。

松本先生にも言われた。

もう総司は永くはないと。

いつ発作を起こしてそのまま息を引き取るかわからないほどに悪化しているのだと。

そして総司自身そのことに気が付いている。

でも総司はあたしがそれを知っていてほしくないと思っている。

だからあたしは笑う。

能天気なくらいに。

こみあげてくる死の恐怖と、虚無感に心が吞まれそうになることもあるけれど、でも、総司の前ではめそめそした姿は見せたくなかった。

\*

夕方になり、原田さんと、永倉さんが帰るのを玄関まで送り出していた。

「じゃあ、土方さんや近藤先生によろしく伝えてください。」

二人は一瞬黙り込んで顔を見合わせる。

そしておもむろに永倉さんが口を開いた。

「実は、俺たち新撰組を離隊したんだ。」

！

二人が？

あたしは信じられない思いで言葉が継げなかった。

「新撰組の進む方向と俺らの想いが違っていたから。誠を偽っては戦えねえから。」

原田さんがいつになく真面目な顔で言う。

みんな離れていく。

雲がちぎれて空に溶けるように、ばらばらになっていく。それはとてもさみしくて、切なかった。

「そうなんです。でも、武士は誠のために生きる生き物だから。心を偽っては戦えないのでしょうか？だから応援しますよ。」

武士とはもののふ。守るべきもの、その誠のためだけに走る、とんでもなく不器用で、哀しい、でも美しく潔い存在。だから止められない。

さみしいけれどこの時世でもなお誠を追い続けるこの真の侍にあたしが何を言えるだろう。女子にできることはすべてを飲み込んで笑って送り出すことだけ。

「ありがとう、水瀬。俺らは進む方向が違っていても、新撰組のやつらは生涯の同志だと想っている。」

土方さんも、近藤さんもそうだと信じている。だから俺たちは戦うよ、総司の分まで。」

永倉さんが最後のほうは声を震わせて言った。

「あいつ、あんなに痩せちまって…見ちゃいらなかった。なのに、馬鹿みたいに昔みたいに笑いやがって…。」

原田さんも目に涙を浮かべた。

「総司は、総司の戦いをしているんです。武士として、必死に戦っています。」

だから私たちは総司を笑顔で支えるんです。」

あたしに今できることは精一杯の笑顔で総司を見守ることだけ。

「水瀬：総司のこと頼んだ。」

お前にしか、総司を支えることはできねえから。」

「はい。任せてください。」

「じゃあ、俺らは行く。俺らの戦いを。」

水瀬もお前の戦いを必ず勝て！」

二人は片手をあげて歩き出した。

あたしは大きく手を振り言った。

「御武運を！！二人ともいつてらっしゃい！」

女子にできることは笑って戦う男たちを送り出すことだけ。

それが女子の戦い。

皆戦っている。

それぞれの戦いを。

あたしは二人の影が見えなくなるまで手を振り続けた。

## 第十六章 4・心の闇を照らす光：沖田総司

「ゴホ、ゴホ…」

咳をするたびに胸がえぐられるような痛みが突き上げる。

口に当てた手拭いにべっとり血が付く。

痩せてしまった手。

力の入らないからだ。

先ほど、見舞いに訪れた永倉さんも、原田さんも私を見て一瞬言葉を失っていた。

いつまで生きるのだろう。

前はいつまで生きられるのかと、生に執着していたのに、今となっては虚のように頼りない。

時折、早く楽に、終わりにしたいとさえ思ってしまう自分がいる。

そうすれば、まことは私にとらわれずに生きていける。

今となつては咎人のように名を伏せ、身を隠し、まことを妻をした隠れ蓑に守られ、いつまで、生き恥をさらし続けるのだろう。

それが申し訳なく、ただただ辛かった。

そんな闇に心がとらわれるとき、まことは暖かな光のように私の心を照らし出す。

まことは私とこの千駄ヶ谷に身を隠すことになった時、「一緒にやった密偵の時みたい。」と無邪気に笑った。

私と一緒にいれば病がうつってしまつかもしまつかもしれないのに、独りでいい。



こんな病に侵されるのは、自分一人で構わない。

そう思つてまことをどれだけ遠ざけようとしても、まことは笑つて側にいた。

陽だまりのような暖かな笑顔を浮かべて、ただ静かに側にいてくれた。

それがいけないとわかつているのに、手放しがたかった。

わたしはどうあがいても、まことを傷つけることしかできないのに、もう少し、あと少しだけと望んでしまう。

あの笑顔を。

近藤先生は以前見まいに来てくださったとき、こういった。

「水瀬君の為に遠ざかろうとしているのかもしれないが、それが彼女を傷つけていることを自覚するんだ。総司、お前は強い武士だ。

だから彼女と自分の気持ちに向き合つて病を治せ。そうしてまた共に走ろう。」

その言葉に、年甲斐もなく近藤先生にすがつて泣いてしまった。

そのころからだ。

もう自分の気持ちに嘘がつけなくなったのは。

まことの笑顔を受け入れ、それに救われている自分を受け入れたのは。

ふと香るかぐわしい香り。

床の間に目を向ければ目に鮮やかな紅梅。

まことが今朝持つてきてくれたものだ。

部屋には近づいてはいけないと言っているのに、「春を少しでも感じられるでしょう」とあの美しい笑顔で笑つて言った。

まことはこの部屋に来たとき、今日あった取り留めもない話をする。鈴を転がしたような心地よい声で、その話を聞くのが私はとても好きだった。

あまり近づかないようにと言つてあったので、食事のときと、着換

えの時くらいなのだけれど、まことが来るたびに光がさすようになるくなる。

ありがとう、ただこの苦しみの中で、まことは私の光。ごめん、もう少し、この愚かな私に付き合ってほしい。側にいてほしい。

この家にまことの気配を障子越しに感じるだけで、私は幸せだったから。

\*

夕刻。

ふと人の気配がして目覚めると、まことが食事をもって部屋に入ってくる場所だった。

「起こした？ごめんね。

ご飯持ってきたよ。」

なんて美しく笑うのだろう。

「永倉さんも、原田さんも全然変わらないよね。

吉原と島原の女の人がどっちがいいって笑ってるの。」

「まこと」

かすれる声で呼び止める。

移さないようにめったに声を出さない私が呼び止めて驚いているよ。うだった。

「どうしたの？調子悪い？」

「うめん…。」

言わなければいけない気がした。

遠ざけているだけでは伝わらない。

もう今更まことを手放すことなどできないのだから。

「何が？」

きよとんとしてまことが目を丸くする。

「傷つけて…それなのに、嘘でも夫婦なんてさせて。」

「総司があたしのことを想って遠ざけてくれたんですよ。」

それに、昔みたいで、全然嫌じゃないよ。」

まことははにかんだように笑って茶碗に雑炊をよそった。

全部知っていたのだ。

すべてを知ってなお私の側で笑ってくれるこの子に私は何を返せるだろう。

「でも…。」

「じゃあ、もう少しあったかくなったら、一緒にお団子食べにいき。昔言ってたでしょ。四谷のお団子屋さんがすごくおいしいんだって。お団子おごってくれたら許してあげる。」

何でも無いように笑うまことのこの光の笑顔が愛おしくて涙が出そうになった。

「…ありがとう。」

言いたいことはたくさんあったはずなのにただ零れ落ちた言葉はその一言だった。

「…総司、あたしね、この世界に来て、総司にあえて本当に良かったって思ってる。あたしがこうしていられるのは総司がいてくれたからだから。だからあたしこそ、ありがとう。」

剣に誰より真剣で、一途で…誰かを守るために優しい鬼になれる総司は本当に武士なんだって思う。

今は病気と戦ってる総司が誇らしいよ。」

「…」

私は何も言えずただ目を伏せるだけだった。

これ以上何か言ったら崩れてしまいそうだったから。

幾度心が闇にとらわれても、この言葉とこの笑顔がある限り、生きよう。

精一杯に。

彼女は私を照らす光だから。

## 第十六章 5・武士の誇り、男の意地：土方歳三

切りそろえた髪が額にかかる。

俺は江戸を出た時から、洋装に変えて髪を切った。

もう古いものに縛られるわけにはいかない。

刀の時代はもう終わったのだ。

これからは銃だ。

新政府軍に勝つためには、覚悟を決めて捨てなければならぬものがある。

どうする。

新政府軍は流山を囲んでいる。

今俺は内藤隼人、勝ちゃんは久保大和と名乗り、ここに潜伏している。

俺たちが新撰組ではないかと新政府軍に疑われている。

俺は、新政府軍に恭順する幕府の方針に従い脱走兵や一揆を鎮圧する鎮撫隊であり、新政府軍に不敬はしないと主張したが、新政府軍は、「鎮圧は新政府軍の任務、すぐに兵器を差し出し誠意を示せ」と迫って来ていたのだ。

「歳、もう切腹しよう。武士たる者、真実を欺いて生き残るのは怯懦だ。」

勝ちゃんは眉間にしわを寄せて言う。

この男はどこまで行っても不器用で、愚かなまでに武士道を貫こうとする。

だから惹かれる。

愚直で、まっすぐなこの男に。

だからこそこんなところで、終わらせられるかよ。  
あんたを大名にする。  
あんたを高みに連れてく。

「勝ちちゃん、ここで死ぬのは犬死だ。死ぬことなどいつでもできる。今ここで俺らが死ねば、労咳で戦っている総司は、山崎や源さん、平助にどう説明するんだ。大久保大和として、あくまでも鎮撫が目的であった事情を説明しろ。もし出頭するようなことになったら、その間俺は政治工作をし、救出する。」

「…そうか。まだ俺たちにできることがあるのか。」

必死に説得する俺に、勝ちちゃんは小さく笑った。

俺は勝ちちゃんを説得し、納得した勝ちちゃんは新政府軍の前に出頭した。

四月三日のことだった。

\*

四月四日、俺は勝海舟のところへ出向いていた。

鋭い眼光の男。

幕府の要だった男。

「勝どの。」

近藤勇の救出に協力願えぬか。」

俺は勝に頭を下げる。

人に頭を下げることは苦手だが、心底惚れた男のためなら、少しも

惜しくはない。

「あんたが土方か。

近藤を助けるには、条件がある。

新政府軍を刺激しないことと、江戸付近での暴発をせぬことだ。それが約束できるか？」

「武士に二言はござらん。」

機を見ればいい。

俺たちはまだ終わらない。

「約束しよう。」

勝は細い目を引き下げて言った。

「感謝申し上げます。」

そう、この時までは計画通りに運んでいたのだ。

これで、勝海舟の進言で近藤勇は解放されるはずだった。計算外の事態が起きるまでは。

\*

「なんだと！」

俺は寸でこのところで報告に来た島田につかみかかるところだった。

新政府軍に伊東派の残党、加納鷲尾がいただと！  
畜生。

勝は手の打ちようがないと言いやがった。

手のひらを返したように。

「近藤局長は板橋に連行、審議されるそうです。」

島田の報告を聞きながら気が遠くなりそうだった。

あのとき、俺が止めなければこんなことにはならなかった。

誰よりも武士としての矜持を重んじるあの男にとって、どれほどの屈辱だろう。

ちくしょうちくしょう。

あきらめねえ。

絶対に助けるからな！

勝ちゃん！！待ってる！！

俺は、夜の闇のなか、江戸へと馬を走らせた。



第十六章 6・別れ、幸せの幻影：土方歳三

あのときなぜ、武士として死なせてやれなかったのだろうか。こんなふうになら、なるのなら、武士のまま死ねたほうがあいつにとっては幸せに違いないのに。

勝ちゃんが近藤勇だとばれた。

伊東派の残党が新政府軍にいるとは思わなかった。

勝海舟は手のひらを返したように無理だといった。

できるだけのことはするが期待はするなど。

俺のせいだ。

あの時死なせてやれなかった俺のせいだ。

…

千駄ヶ谷まで馬を走らせると、町の喧騒から外れた一軒の家の前にたどり着いた。

俺は玄関の前にたつと声をかける。

「すまん、だれかおらぬか。」

ぱたぱたと聞きなれた足音。

「はい、どちらさ……っ！」

勢いよく開いた扉から出てきた女は俺の顔を見てその形の良い目を見開く。

質素な藍染の着物、髪は簡単に結わえているだけだが、凜とした静謐の美しさが光る。

水瀬：

こいつを見るたびに締め付けられるような甘い痛みと懐かしさに駆られる。

互いに何も言わずに見つめ合っていた。

ただこの時間が永遠に続けばいいと思いつながら。

水瀬の瞳にみるみるうちに膜が張り、涙のしずくとなって零れ落ちた。

夕日に零れ落ちる涙が光る。

俺は思わずその頬に手を伸ばして涙をぬぐう。

きめの細やかな肌は驚くほど柔らかい。

「…ひじかたさん…どうしたんです？」

ようやく水瀬が口を開く。

「ああ、総司に会いに来た。」

お前にも、とは言えなかった。

「総司が喜びます。さあ、上がってください。」

水瀬はぱっと花が咲いたように微笑み、俺を家の中へ案内した。

総司はこぎれいに整えられた部屋に寝かされていた。

水瀬に案内されて部屋に入ると、総司は痩せてしまった顔をこちらに向けて小さく笑った。

頬にできるえくぼだけは昔と変わらないもので、やりきれなさが胸を突き上げた。

枕元には大小の刀。武士の命。

こいつもまたどこまで行っても武士なのだ。

涙腺が緩みそうになるのを奥歯をかみしめてこらえた。

水瀬は「お茶を入れてくる」といい、部屋を後にする。

「土方さん、来てくださったんですか。すみません、こんな姿で。」

総司はもう起き上がるのも難儀な様だった。

「いや。」

「にしても、やっぱり土方さんは新しい物好きですね。その西洋の服、似合っていますよ。」

今度は吉原の女子がほおっておきませんね。」

くすくすとさもおかしそくに笑う。

「言ったらあ。戦うのに合理的なものを選んだだけだ。」

「…土方さん、近藤先生はお元気ですか？」

！

動悸が一気に激しくなる。

総司のまつすぐな瞳はどこまでも澄んでいて、まるですべてを見透かすようなそんな視線で俺は一瞬たじろぐ。

「ああ、連戦連勝とはいかないが忙しく動いてる。」

あの人は大将だからな。お前のこと、気にかけていたさ。」

「…早くお会いしたいです。」

遠い目をする総司に、俺は一瞬こいつはこのまま死んじゃうんじゃないのかとさえ、思った。

それくらい総司は儂い笑みを浮かべていた。

「そんなもんお前が早く治せばいいだけのこと。まったくお前がいねえから、皆大変なんなんだ。」

俺はあえてぶっきらぼうに言う。

「ふふ、優しいですねえ。」

総司はひとしきり笑った後、呼吸を落ち着けて言った。

「…土方さん、もう少しだけ夢を見させてください。」

俺は何のことだかわからずに眉をひそめる。

「まことをあと少しですから、貸してください。あの子の笑顔の側にいられることだけが私を生きていると実感させる、まるで夢の中にいるように穏やか気持ちでいられる。」

だからもう少しだけお願いします。」

なにいつてんだと冗談にすることはできなかつた。

こいつがどんな思いで、刀を置いたのか、どんな気持ちで水瀬の側にいるのかを知ったから。

「総司、俺は会津へ行く。戦いが始まる。だから水瀬の面倒をみる暇はねえ。しばらくはおめえがついててやれ。」

勝ちゃんのためにできることは最期まで戦い続けることしかできないから。

だから、敵しければ敵しいほどいい。

どこまでも、どこまでも、血と、白刃と、銃弾の嵐の中を走ろう。

修羅の道を最期まで、この命が果てるその瞬間まで走ることですか俺が勝ちゃんの為にできることは何も無い。

「ああ、土方さんはやっぱり戦いの鬼なんですねえ。いつだって修羅の道を走り続ける。まぶしいくらいに。」

総司はおかしそうに笑った。  
少しだけ切なそうに。

「ふん、お前だってすぐに追ってくるんだろ。早く来い。でないと戦が終わっちゃうぞ。」

「がんばります。」

総司は澄み切った優しい笑顔で笑った。

「じゃあ、そろそろ俺は行く。  
またな。」

俺は軽く手を挙げて口の端をあげて笑って見せた。

「ええ、また。」

「また」が来ないことは痛いくらいにわかりきっていた。  
俺はもう二度と江戸の土を踏むことはないだろう。  
そして総司もはや剣を握れない。

それでも、幸せな夢が見たかった。  
もう二度と来ない幸せな未来の夢が。

勝ちゃんが大将、俺や総司、試衛館のやつらが周りを囲んで、大樹  
公を守る…

その傍らでは水瀬が笑って待っている…そんな愚かしいくらいに幸  
せな夢の幻影が瞼を閉じれば見えるようだった  
。

## 第十六章 7・さらば愛しき人よ

かたん：

扉の音が聞こえてあたしは玄関へ、急ぐ。

土方さんが外に出ようとしているところだった。

「土方さん！」

あたしは思わず声をかける。

夕日の逆光で土方さんの顔がうまくみえない。

「…邪魔したな。」

徐々に目が慣れてくると、土方さんがブーツを履いて、こちらを向いて小さく笑った。

短く切った髪をかきあげて鮮やかに笑う土方さんは、平成のあの八木邸で見た「土方歳三」だった。

土方さんはやつぱりおしゃれであか抜けている。

あたしは顔が熱くなるのを抑えながら、聞く。

「もう、行くのですか？」

「ああ、俺は会津へ行く。」

不意に泣きたくなるのを感じた。

土方さんの目が遠くて、それは死へ向かうものの目。

それは山南先生の切腹の時になぜか似ていて、落ち着かなくさせた。

「…何か、あつたんですか？帰ってきますよね。」

「…水瀬、近藤さんが新政府軍につかまった。」

！！

あたしは息をのむ。

全身の血が引くのがわかった。

「勝海舟に身柄を開放するように説得したが、だめだった。今度の25日に斬首が決まった。」

「っ！！」

斬首…

なんてこと…！！

近藤先生が、あの優しい近藤先生が…！！どうして…！！

地面が揺らぐように感じる。

あたしはふらつく体を支えきれずに思わず、よろめくと、土方さんがあたしの腕をつかんで、その広い胸の中に閉じ込めた。ふわりと香る煙草とお日様の香り。

服の上からでもわかる厚い胸板。

「ひじ…」

あたしは何かを言おうとしたけれど、何も言えなかった。土方さんの腕も震えていることに気付いてしまったから。

「…すまねえ…！！」



土方さんは手負いの獣みたいだった。

この人は自分の無力さを誰よりも悔いている。自分を殺したいくらいに後悔している。

心底惚れぬいた親友いや、真友を救えなかったことを。

「土方さんのせいじゃない」なんてありきたりな慰めなんて口にするはずもない。

あたしはただ彼の大きな背中を手を回し、一度だけ抱きしめた。

腕の力が緩み、手が離れていく。

あたしたちの間を風が通り抜け、うらさみしい気分させた。

「水瀬、総司には言わないでくれ。」

言えるわけない。あんなに近藤先生に会いたがっているんだもの。

「それから、万が一のことがあった時には日野の佐藤家を訪ねてくれ。お前のことは話してあるから。」

誰に「万が一」？

そんな哀しいもしもなんて聞きたくない。

それを聞いた瞬間、「ああ、この人は死ぬつもりなんだ」と思った。もう二度と戻らない。

近藤先生を助けられなかった自分を罰するみたいに、どこまでも戦場を駆け抜けて、そして戦場で死ぬつもりなんだ…。と。そんな幻にも似た場景が浮かび、胸がちぎれるような痛みが突き上げる。

あたしは「はい」とは言えなかった。

なんで

なんで

なんで！

神さま、もうこれ以上みんなを苦しめるのはやめて！

近藤先生を、総司を、土方さんを助けて！！！！

目の前がみるみるうちにゆがむ。

「…そんな悲しいこと言わないでください。

もうこれ以上誰かが死ぬのは嫌なんです…！！」

平助君の時も、源さんの時も、山崎さんの時も…

こらえようとしたり。

みんな誠を貫いたのだからと。

でももう限界だった。

涙があふれて地面に滲みを作る。

「嫌です…！！」

「水瀬…！！」

静かだけれど、有無を言わせない声色。

「頼む…。」

「っ」

あたしは一瞬息をのみ、目を伏せる。

「頼む」だなんて…土方さんがあたしに頼みごとなんてきつとこれが最初で最後だ。  
ずるい…、そんな風に言われたら、「はい」というしかなくなってしまふ。

「はい…。」

「ありがとう…。」

ああ、お別れだ。

ここで別ればもう二度とは逢えない。

あたしはこんなふうにごの人を送り出すために、時を越えてこの時代に来たの？

土方さんは踵を返して去っていく。

死にいく男たちを、女たちはただ笑って送り出す。

引きちぎられるほどの胸の痛みをかかえながら、それでも精一杯の最高の笑顔をはなむけにする。

そうしなければ、あたしも「御武運を」って言って笑わなきゃ。

なのに、なのに、浮かんでくるのは涙ばかり。

いっちゃん、土方さんが。

もう会えない。

これでいいの？まこと？

こんな終わりでもいいの？

あたしは思わず裸足で駆け出した。

土方さんはすでに豆のように小さな陰しか見えなかった。

「土方さん！！！！」

声の限りに叫ぶと、その声に反応して土方さんが振り返るのがわかった。

あたしは全力で走ってその陰に追いつく。

「どうした？」

「はあ、はあ……」

あたしは膝に手をつき、息を整えると、土方さんに向き直る。まっすぐと。

あたしはずっと首からかけていたお母さんの形見の結婚指輪のネックレスを外した。

以前は壬生寺に隠していたのだけれど、江戸に来るときにこれだけは、と思って持ってきていたものだった。

「これ、お守りです。」

怪訝そうにしている土方さんに渡す。

「なんだ、この輪っかは？」

結婚指輪ってまだ文化ないんだね。

当たり前か。

でもそれすらも愛おしい。

文化も、価値観も、時代すらも違う。

そんな中で、貴方に逢えたこと、貴方に恋をしたこと、この奇跡が泣きたいくらいにうれしい。

だから、笑うの。

「母の形見です。あたしをいつも守ってくれてました。だから今度は土方さんを守ってくれるように…守って、御武運を…あげられるように…」

最後まで言えなかった。

土方さんがあたしを抱きしめたから。

きつく、きつく。

いつそのままくっついてしまえばいいのに。

「水瀬…」

耳元に聞こえる愛おしい人の声。  
かすれたような、低い、甘い声。

「ありがたく受け取る、

お前は…健勝で、必ず幸せになれ。」

「…はい。」

土方さん、もうとっつくの昔からあたしは幸せですよ。

やっぱり女心、全然わかってない。

あたしはくすりと笑う。

でもいい。

この運命の人とのこの別れに、後悔の無いように、この人に巡り合えた幸せを想い、最大の笑顔を贈ろう。

どうか、あたしの笑顔だけを覚えていて。

土方さんは腕の力を緩めると、お守りのネックレスを首にかけ、つないであった馬に乗る。

「土方さん、御武運を。」

あたしは最大の笑顔を土方さんに向ける。

土方さんは「ああ」と短くいい、あたしに顔を向け凄艶な笑みを浮かべた。

女の人でもこの笑顔にはかなわないと思うくらいに、鳥肌が立つくらいに美しい笑顔だった。

死へ向かう男の顔。武士の顔。

「さらばだ。」

一言そういうと馬の向きを変えて去っていく。

少しも振り返らずに。

夕日の中、あたしは自分の恋が遠くなっていくのをいつまでもいつまでも、その影が見えなくなっても見送り続けた。

## 第十七章 1・走ること、生きること

土方さんが北へ旅立った翌日から、総司は目に見えて体が悪くなっていた。

ほとんど蒲団から起き上がれなくなり、眠っていることがほとんどだった。

起きていても、ほとんど話さない、ぼんやりと宙を見つめているだけの総司を見ているのはつらかった。

痩せて骨ばった手。

こけた頬。

青白い顔。

でもそんな総司の枕元にはいつもずっと愛用の刀が置かれていて…。もう総司は刀を握れない。

自分の体の一部だと言っていた武士の命を。

それでも目が覚めると、あんなに澄んだ笑顔をあたしに向ける総司の優しさが暖かくて…。うれしくて。

どうか神さま、お願いします。

奇跡を起こして。

近藤先生に、総司に…。

命を助けて。

どうか、もう一度、総司に剣を握らせてあげてください。

そしてもういちど、近藤先生に合わせてあげてください。

ただ祈るだけしかできなかつた。

\*

四月の半ば。

あたしは町で思いもしない人に会った。

買い物帰りに近道の裏路地を歩いていたときのこと、すれ違いざまに、あたしの荷物が笠を目深にかぶった男とぶつかった。

どん！

「あ、ごめんなさい！」

「いいえ、こちらこそ」

そういつて顔をあげたその時。

「！」

あたしは自分の目が信じられなかった。

そこにいたのは…

桂小五郎だった。

桂とは京で別れて以来一切会っていなかったから、もう二度と会わないだろうと思っていた。

大政奉還をした幕府と新政府。

新撰組と桂小五郎…。

分かたれた道はこんなにも隔たれている。

だからこそ、もう二度と会わないだろうと思っていた。

「驚いた…。

まさか江戸にいるとは…。」

桂も狼狽を隠せないらしい。

細い目を大きく見開く。



「総司が…いるから…」

あたしは目を伏せて言う。

「…ああ、聞いている。労咳だと…。本当に…心から見舞い申し上げる。」

桂は静かに、けれど誠実に答えた。

それはあたしの知っている、皮肉屋でとらえどころのない人には見えなかった。

「…うれしいでしょう。あなたたちがのぞむ世界が来て。」

ふと零れ落ちたのはそんな言葉。

負け惜しみみたいなやつあたり。

こんなこと言うべきじゃないのはわかっている。

なのにこのどうすることもできないこのやりきれなさに、悲しみに泥沼の状況に、誰かを攻撃していなければ立つていられなかったのだ。

「君は変わったな。私の知っている水瀬という女はどんな状況でもそんなひがみつばいことは言わなかった。」

桂は皮肉気に口を歪める。

「…ごめんなさい。」

声が震え、不意に涙がこぼれる。

総司の前では泣くまいと思っていた。

左之さんや永倉さんを送り出すときも、土方さんと決別する時も、最後は、やっぱり泣かないで笑おうと思っていた。それしか自分にはできないと思っていたから。でも本当はいっぱい泣きたかった。いっぱい引き止めたかった。

すがって、もう戦になんか行かないでと、どこでもいいから、みんなと一緒に暮らそうと、そっぴいいたかった。

あの京の八木邸での楽しい、幸せな時をもう一度、取り戻したかった。

「素直なところはそのままだ。」

桂は小さく笑ってあたしの頭を一度撫でた。

それは小さな子供をあやすお父さんみたいで、あたしは涙を止めようとすることをやめて泣き続けた。

\*

あたしはしばらく泣き続けた後、桂の屋敷に連れて行かれた。

奥さんと思しき人が出迎えてくれて、泣きはらしているあたしを見て驚いているようだったけれど、穏やかに笑って奥に案内してくれた。

きれいな優しいそうなひとで、その笑顔を見れば、桂が大切にしている様子が見て取れた。

「落ち着いたか？」

だしてもらったお茶を一口飲むと、いくらか気分が落ち着いてくる。

「はい。」

桂が不意に膝を詰めてあたしの目をまっすぐに見つめる。その鋭さにあたしはたじろいだ。

「時に、水瀬。近藤勇が板橋にて斬首される話は君も知っているだろう。」

「!…はい…。」

知っている。

辛くて辛くて自分を支えていられないくらいに…。

「勝さんが明日、板橋の詰所に行くらしい。」

「え、それはどういっ。」

桂が何を意図するのかわからず、あたしは口ごもった。

「私は教えられることは教えた。あとは君しだいだ。」

不敵な笑みを浮かべて言った。

「あたししだい…。」

あたしは桂の言葉を反芻する。その瞬間、脳裏に閃光が走る。そう、

まだ終わっていない。

あきらめるのか。

諦められるのか。

否。

絶対に。

このまま手をこまねいてここにいるだけなんていやだ。

走ろう。

できる限り。

精一杯に。

あたしの大好きな人たちがそうしているように。

何かが変わるかもしれない。

でも、変わらないかもしれない。

でもやらなければ絶対に変わらない。

「さあ、もう暗いから送ろう…。」

「大丈夫です。独りでも。」

奥様にお茶御馳走様でしたと、突然お邪魔して申し訳ありませんでしたと、お伝えください。」

あたしは立ち上がって桂をまっすぐに見据えた。  
そして小さく頭を下げる。

「ふふ、大分目に光が戻った。」

それでこそ、新撰組の水瀬真実だ。」

桂は満足そうに笑った。

きつとこんな時代じゃなかったらこの人とはいい友達になっていた。  
でもそれを敵味方に隔てる時代で出逢ってしまった。

けれど、だからこそ、こんなふうにぶつかったり、まっすぐに向き  
合ったりできるのかもしれない。

あたしは薄暗くなった道を歩く。

暗い空からは突然大粒の雨が落ちてくる。

冷たい雨は髪や顔を濡らすけれど、それがかえって心地よい。  
目が熱かった。

そして胸の中を熱い塊が暴れているようだった。

助けよう。

近藤先生を。

どんな手段を使っても。

だから走ろう。

雨はいつそう強くなるけれど、あたしはただ前を見て歩き続けた。

## 第十七章 2・負の遺産、たどり着く未来

あたしは、翌日板橋の詰所に走った。

世話役としてずっとついていてくれたおばあさんにすべてを伝えて帰れないかもしれない。

でも少しでも可能性があるのなら走りたかった。

走らなければいけないと思った。

板橋の詰所は刑場も近いこともあって禍々しい空気に満ちていた。

ここに来たものは生きては帰れないと。

松本先生はそういつていた。

門の前まで来ると、ガラスの悪そうな男が退屈そうに構えている。

「なんだ、おまえは。」

睨み付けられたところで全く怖くはない。

こちらら修羅場のくぐった数が違うんだっての。

「勝どのに御取次ぎを。」

水瀬が会いに参りましたとお伝えください。」

まっすぐに見据える。

「何を申して居る!」

唾を飛ばしながら怒鳴るけれどかえって間抜けさがまずばかりだ。

警棒みたいなのを振り上げて鼻先に突き付ける。

瞬き一つしないあたしに動揺したのはその男のほうだった。

「勝殿にお伝えを。」

「っ。」

男は通りかかった仲間に伝えると、二、三分で男が戻ってきた。

「通れ。」

男は悔しそうに言うと、あたしを詰所の奥に通した。

\*

小さな部屋に通されると、しばらく待たされた。

どれくらい時間が経ったかわからない。

ただ時間の感覚なんて少しもなかった。

ふすまが開いて、勝さんが顔をのぞかせる。

勝さんは少しやせたようだった。

「こんなところにまで…。ホントに、君という人は…。」

「勝さん、お願いです！近藤先生を助けてください！！」

あたしは手をついて頭を床につけて叫ぶように言った。

これで、覆るはずもないことはわかっていた。

でもそれでもすがりたかった。

絶対殺させない。

近藤先生を逃がす。

ただその思いだけを心に。

「勝先生!!! お願いします!!!」

「できない。」

勝さんはにべにもなく斬り捨てる。

「どうしてですか!!! あの人は、近藤先生は幕府のために、ただただいぢずに働いてきただけです!!! お願いです!!!」

あたしは畳に額をこすり付けた。

いぐさの青臭いにおいが妙に際立って鼻につく。

「新政府は新しい時代に何も残さないつもりなのだ。近藤を後の時代に残せばきつと新政府に仇なすだろう。」

旧体制の負の遺産を残すわけにはいかない。」

勝さんの静かな切り捨てるような言い方にあたしは思わず顔をあげてにらんだ。

負の遺産:!!!

そんな言い方あんまりだ!

「負の遺産? あの人はあんなにもただ一途に誠の武士として生きてきました。確かに刀の時代は終わりました。義理や忠義なんて: 古臭い過去の産物なのかもしれない。」

でも: 全力で生きてきて、全力で守るもののために武士として生きてきたその生き方を否定することなんて誰にもさせない!!!

: 勝さん、鳥羽伏見の戦いを、流山の戦いを見ましたか?



銃や大砲で人が馬鹿みたいにあっけなく、簡単に死んでいくんです。それが正しいんですか？

あれが勝さんや、桂さんのしたかったことですか？！誠なんですか！…近藤さんは新しい時代に必要な人です。

刀はなくなっても武士は、武士の魂はなくなったりしません！不器用で、優しくて、合理性とか損得なんかじゃ説明できない人間の大切なものを新しい時代に伝えなければいけないんです。」

「…できない。人心は天下の揺らぎに不安に満ちている。だからこそ、一分の不安も新しい世には残せぬ。」

やっぱり取りつく島もない…。

近藤先生をいけにえにして、悪をすべて着せて葬り去るつもりか…。

「…近藤先生を犠牲にするんですね…新選組を悪の化身に仕立て上げて、自分たちの身を守るために！切腹さえ近藤先生は許されない…。なんて卑怯な…！」

「わかってくれ。日本の未来のためには古きは去らねばならぬ。」

日本の未来…。

そんなものは知らない…。

こんなにも血が流れ、純粹にただただ一途に走ってきた人たちが闇に葬られる世の中なんて、いらぬ…。

ぱたり…。

ぱたり…。

あたしは流れ落ちる涙をぬぐいもせずにとただただ一点を見つめていた。

体の中を熱いものが駆け巡る。  
血が怒りで沸騰しそうだった。

「近藤先生を…助けます。  
どんなことをしても…。」

「やめろ！お前も死ぬぞ！」

勝さんがあたしの肩をつかんだ。

あたしは静かに勝さんを見つめ返す。

眼だけが異様な熱を持っていて火を噴きそうなくらいに熱かった。

「…それが何？この時代に来ていつだって死は隣にあった。怖いものなんか何も無い！

坂本さんが言ってた。

武士は死ぬ理由は己にあつてはならぬと。

自分の信ずる誠のために死ぬのだと。

だったら、あたしは近藤先生を助けることに命を賭する。」

心は決まっている。

歴史なんか知らない。

あたしは今を生きているのだもの。

「水瀬。お前はなんという…。」

勝さんは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。  
きつとこの人も苦しいのだ。

この人はこの人の精一杯を生きている。  
だからこれ以上背負わせるわけにはいかない。

「もうお話はありません。お時間とらせて申し訳ありませんでした。」

あたしは立ち上がってふすまを開ける。

「…死ぬなよ…。」

後ろから勝さんの静かな声が聞こえた。

「勝さん、あなたの見たかった優しい未来ってこれですか？」

あたしは振り返らずに言った。

ただそれだけが聞いてみたかった。

「…ああ。」

「そうですか。わかりました。最後までそれを貫いて、必ずいろんな人にとって幸せな未来を作ってください。それが…未来に生きる者の務めです。」

未来に生きる者。

新撰組は死するもの、滅びゆくもの。

そんな風に歴史の闇にのまれていくのだろう…。

あたしはそれを止めるためにここにいる。

今なら胸をはってそう答えられる。

「承知した。必ず…。」

誠がある。

それぞれに譲れぬ思いがある。

だから争いがある。

どちらが正しいとも、間違っているともわからぬ。

ただ負けたから悪い。

悪いから負けたのではない、負けたからすべての悪と負の部分の背

負和されるだけなのだ。

ただあの人には生きていてほしいから…だからあたしは走る。

それが間違っついても…あたしは止まらない。

自分に残された時間はもう僅かだから。

今更怖くはない。

ただ悔しいだけだ。

あたしは誰一人として救えなかった。

芹沢先生も山南さんも、お梅さんも、平助君も…みんな死んでしまった。

そして総司は不治の病の床に着いている。

日に日にやせ衰え、血を吐き続ける総司…。

あたしを拒み続ける総司…。

あたしができることなんて何も無い。

でもそれでも走らなければいけない。

そう決められているから。

魂の約束で…。

### 第十七章 3 仰げば尊し

夕刻、闇に紛れてあたしは近藤先生がとらえられている牢屋へ走った。

知ってる。

ここにこうして来られるように勝先生が取り計らってくれたことは……。

人が来ないように遠ざけてくれたのだろう。

勝さんができる精一杯のことをしてくれたことに感謝する。

それを巻き込んでしまったことはとても申し訳ないけれど、あたしは心の中で、手を合わせた。

何個か続く牢屋の一番奥に近藤先生は居た。

「近藤先生！」

あたしは駆け寄って格子の中を覗き込む。

「水瀬君！なぜここに……！」

近藤先生はひどく汚れてところどころ殴られたような痣ができていて思わず泣きそうになった。

ひげも伸び、着物は薄汚れて、餓えたようなつんとした臭いが鼻につく。

近藤先生は目を見開いて狼狽している。

「いいから、早く今鍵を開けます！」

あたしはピッキングの要領で南京錠を開けようと試みる。

手が震えてうまくいかない。

「水瀬君…」

近藤先生が呆然とした様子であたしを呼んだ。

「闇にまぎれば絶対に逃げ切れますから！」

「水瀬君！」

今度は強くあたしを咎めるように言う。

「総司も、待つてるんです。土方さんも、斉藤さんも、島田さんも…早く大将が戻らないと…」「水瀬君！」「」

格子越しに近藤先生の骨ばった傷だらけの大きな手があたしの手を包んだ。

泥に汚れた冷たい手だった。

その手を見て、またしても視界が涙で揺らいでいく。

「水瀬君、こんなことしちゃいかん。」

近藤先生はどこまでも静かだった。穏やかで優しい目をしていた。

「先生は悔しくないんですか、こんな…！こんな罪人みたいな扱い…ひどい…！」

あたしは近藤先生の手で顔を押し付ける。

「…悔しいよ。だがね、逃げることは最も恥ずる行為だと思ってい

る。

それにここまで新政府が新選組を目の敵にしているということは、幕府にとって役を果たしたということだろう？

私は大将だ。

だから武士らしく自分の運命を受け入れる。」

「だめです。だめ…だめです…!!」

あたしは近藤先生の手を握りながら叫ぶように言った。

「切腹して自分の引き際くらいは潔いものにしようと思っていたのだが…。俺が新しい時代に残れば人心が揺らぐ。

敗者は潔く、すべての悪を引き受けて憎まれて死ななければいけない。それが大樹公であってはならん。

それは俺にしかできないことだと思った。

大樹公の御為に俺ができることはそうして悪を引き受けて死ぬことだ。

後の世にいかにも悪名が残ろうとも、いや残すために、咎人として死ぬ、それだけが今俺にできる最期のことだからね。だから切腹ではなく斬首で。

勝さんには俺からそう頼んだのだ。

俺が次の世に残せるものはそれくらいだからね。」

全部の悪を引き受けて死のうというのか。

この人は。

後の世になんと呼ばれようとも、世の中の非難を徳川に向けない為に、上様を守るために…そのためだけに罪人として首を斬られることもいとわないという。

こんなにも見事な武士の生き方をあたしは知らない…。

「水瀬君、今まで本当にありがとう。  
君がいてくれたおかげで私たちはまことの武士になれた。」

「そんな…やめてください…近藤先生、あたし近藤先生が認めてくださったから今こうしていただけるんです。

本当に感謝してもしきれないくらいに…。本当にありがとう、ごじぎいまして…。」

冷たい地下牢の地面に涙が滲みを作る。

「総司や歳を頼んだ。あいつらはどこか意地っ張りでまだまだ頼りないからなあ。」

新八、斉藤、左之、平助、源さん、山崎君、島田君…そして歳…永遠に仲間だ。

新八にはすまないことを言ってしまったな。歳にも迷惑をかけたばなしだ。…水瀬君、伝えてほしい。

新選組がそこにある限り、俺も共にあると。

誠の旗印がある限り、俺たちは終わらないと…。

頼まれてくれるか？

最期の頼みだ。」

「…承知…しました…。」

うなずくしかなかった。

その拍子に涙がまた一粒地下牢の地面に落ちてシミを作った。

そして…不意に脳裏に浮かんだのは、武士としての最期を選んだ山南先生を送り出した開け里さんの言葉だった。

“男はんはほんに阿呆ばかりやから…ただ笑顔だけを覚えていられるように女子は笑うんやで。”

誠という不確かで、でも限りなく尊い思いのために死にゆく武士た



ちを送り出す女子の笑顔はきつとこの世で一番美しいと、あの時思  
った。

だからあたしも笑わなければ…。

近藤先生が少しでも心が慰められるように…ただ笑顔だけを覚えて  
いられるように。

ふと頭に浮かんだのは、卒業式で歌うあの歌…。

今見事に潔く武士として旅立とうとしているこの土を送るのにふさ  
わしい歌だと思った。

まるで総司の心みたいだと。

病と闘っているあのもう一人の武士の心を表している歌だと。

「近藤先生、未来では…旅立ちの時に歌を歌うんです…。

これは総司の代わりに歌わせてください。」

” 仰げば尊し、わが師の恩、教えの庭にも、早幾年。

思えばいととし、この年月。今こそ、わかれめ、いざさらば。 ”

最後のほうは声が震えて歌えなかった。

でも総司の心を伝えたかった。

「ありがとう。水瀬君。本当に…ありがとう。

君にあえて本当に良かった。

さあ、行きなさい。人が来る。」

近藤先生が涙の浮かんだ目じりをきゅっと下げて笑った。

「近藤先生！あたし絶対に伝えますから！先生の誠を必ず後世に伝  
えますから！」

あたしは精一杯笑った。

近藤先生はもう何も言わない。

ただ静かに笑うだけだった。

あたしは振り返らずに走って牢を後にした。

## 第十七章 4・さよならの先へ

四月二十五日、

朝からよく晴れていて、哀しいくらいに青い空が広がっていた。

今日、近藤先生は逝ってしまふ。

歴史の海にのまれて。

まるで、罪人のように首を斬られて。

それすらもあの人は誇らしいと笑って。

結局何もできなかった。

あたしは。

どんなに走っても、どうしようもできなかった。

だから、せめて見送りたい。

あの人の最期を。

土間にすべるように降りて、外へ出る。

春から初夏へ移り変わる風の匂いがした。

この世界に来て何度も感じるこの季節。

もうどれくらい経っただろう。

ここへ来たばかりの時、はじめは帰りたくて仕方がなかった。

刀が怖くて。

人を殺すのが怖くて。

仲間が死ぬのが怖くて。

歴史を変えるのが怖くて。

でも、いつからか、歴史通りに進むことのほうが怖くなった。  
みんなを失うのが怖かったから。

だから変えたいと思った。  
助けたいと思った。

なのに、結局あたしは何一つ変えられなかった。  
ただ風のように通り過ぎるみんなの命を見守ることしかできなかった。

だから、せめて、最期まで、この命が尽きるその瞬間まで、みんなの生きざまを見守りたい。

近藤先生のこと、総司のこと、…土方さんのことも。

あと、どのくらい自分が生きられるのかはわからない。

でも、最期まで走らなければ、いけない。  
そう思う。

ジャリ

砂道に一步踏み出す。

とその時。

「どこへ行くつもりだ？」

後ろを振り向くと、そこには懐かしい顔、  
永倉さんがいた。

「永倉さん!」

あたしは思わず駆け寄る。

緊張の糸が緩んで泣きそうになるのをぐっとこらえた。

「お前、…行くつもりか？」

どこへ？なんてわかりきっている。  
刑場へ。

「はい。」

「お前、そのあと総司の前で笑えるか？」

「！」

見なければいけないと思っていた。  
でも、恩師の首が落ちるところを見て、そのあとあたしは歩いていけるだろうか？  
あたしは唇をかみしめてうつぶいた。

「行くんじゃないねえ。近藤さんは俺がきちんと見送ってやるから、お前は総司についててやれ。」

眉を寄せたまま永倉さんが言う。

「斬首なんて見て、その先お前は苦しむだろう。何でもかんでも片意地張って突っ走ればいいってもんじゃないねえ。」

「ここは俺に任せろ、いや、任せてくれ。」

その瞬間はっと思に至る。

近藤先生と喧嘩別れみたいな形で別れた永倉さん。  
きつと後悔している。

自分がそばにいれば逃がせたかもしれないと。

この人は死ぬほど後悔している。

だからこそ、大切な仲間の最期をみとろうとしているのだ。

永倉さんは静かな目をしていた。

だからこそ、託さなければいけない気がした。

これも、また、武士の生き様なのだ。

私は所詮時のさすらい人。

私の居場所は大切な人たちの心の中にある。

だからこの人たちの生きざまを、覚悟を、見ていきたい。

「…はい。」

あたしは俯いたまま、うなずいた。

\*

それから数刻後、板橋の刑場で、新撰組局長近藤勇の斬首が執り行われた。

多摩の農民に生まれ、武士を志し、誰よりも強くまっすぐに生きた男の最期は切腹さえも許されない非常なものだった。

…新撰組局長近藤勇、享年三五歳。斬首。

…「近藤勇」の首は逆賊人としてさらされることになったが、その夜、闇にまぎれて首が何者かに持ち去られたという知らせが江戸中に駆け巡った。

永倉さんだ。

あたしにはそれが永倉さんの仕業なのだとすぐに思い当った。

何かあった時、あたしや総司を巻き込まないように、すべてを自分が請け負うために、あたしを行かせなかったんだ。  
永倉さんてばええかつこしいんだから。  
みんな喜んで咎を負うのに。

永倉さんなら、きつと誰にも見つからない、静かなところに近藤先生の首を眠らせてくれていただろう。  
それでいい。

あたしは心の中でそつと手を合わせた。

近藤先生…さようなら。

本当にありがとうございました。

あなたの武士としての生き様、本当にまぶしかった。

きつと伝えます。

あなたの誠を。

あなたの生きざまを。

あなたの命を継いでいきます。

第十七章 5・もう少し、夢の中へ…沖田総司

昏い。

何も見えない。

ここはどこなのだろう？

最近自分が生きているのか、死んでいるのかわからなかったが、ついに死んでしまったのだろうか。

昏い淵の先は何も見えなくて足が鉛のように重く、どこにも行けない。

ふと振り返ると、そこには逢いたくてやまなかつた恩師の姿。

（近藤先生！）

近藤先生は何も話さず、ただ笑ってみている。

（どうしたのです？私ですよ。一緒にお供させてください。）

私の言葉に近藤先生は黙って首を振る。

拒絶されたような気分になり、絶望感が胸を覆う。

近藤先生はふと手を挙げて、まっすぐ私の後ろを差した。

（あちらに行けということですか？私はお供させていただけないのですか？）

近藤先生はただ笑って指をさし続ける。

そうか、まだ、私は生きなければいけないのか。

…じ



……つじ！

誰？

遠くから呼ばれた気がした。

…総司！

声のするほうに一步踏み出すと、その瞬間光に包まれた。

\*

「…じ！

…総司！！」

目が覚めるとまことが泣きそうな顔をして私を覗き込んでいる。そうか、まことが私を生かしてくれたのか。命をつないでくれた私の光。

「…と。」

愛しい人の名前を呼ぼうとしたけれど、咳のしすぎでのが切れてうまく声が出せなかった。

「ああ、よかった。もう心配かけないですよ。なかなか起きないから心配しちゃったんだから！」

まことは頬を膨らませて怒ったように言った。

そのふくれっ面までも愛おしい。

「夢を…見たんだ。」

私は声を絞り出す。

「どんな？」

「近藤先生の…。」

一瞬まことの目に動揺が走る。

「そう、総司が元気かどうか心配だったのよ。」

まことが小さく笑う。

まことは嘘が下手だ。

それなのに、かわいそうなことをしている。

私に心配をさせないように、知らないふりをし続けているのだ。そして私は彼女の優しさに甘える。

…近藤先生はおそらく、もうこの世にいない。

すっとんと、心に落ちる事実。

戦で亡くなったのだろうか？

私がいれば身を挺してでも守ったのに…。

だが、ひとつ確かなことがある。

それは…近藤先生は武士として逝ったのだということ。

私の敬愛してやまない恩師。

きつと雄々しく誰よりも見事な武士として散ったのだろうか。

そのそばにいられなかったことだけは悔しい。

土方さんが最後にここを訪れてから半月、私は昼と夜の区別がつかぬほど眠り続けた。

自分が生きているのかどうかも分からなくなるほどに。

体はますます重く、息をする度に胸が痛んでいて、死はもうすぐそこまで迫っていることを感じさせた。

…あの日、土方さんは死ぬつもりなのだと、あの覚悟の目を見てしまったらそう悟ってしまった。

こんな時ばかり勘のいい自分に嫌気がさす。

近藤先生も土方さんも頑張っている、そう思えたら、そう思い続けられたら、幸せに死んで行けたのに。

なのに、気付いてしまった。

もう昔のままではないのだと。

雲が散らばるように、皆ばらばらになっていく。

それはたまらなくさみしく、寒かった。

また皆で戦いたかった。

あの京の日々のように。

それは遠い日の幸せな夢

もう取り戻せない懐かしい時間。

「また逢いましょう。」土方さんとはそういつて別れた。

もう会えないだろうことは嫌というほどに感じていた。

でも、夢を見たかったから。

もう一度、皆で笑いあう、その幸せな夢の中にもう少しだけいたかった。

「ゲホ、ゲホ！」

のどに広がる血の味。  
粘り気のある血が口の端から零れ落ちる。  
手で、口を覆うけど、指の間から血が流れ出す。

寒い…。

私は自分の体を抱きしめ、背中を丸めた。  
痛くはない。

たださみしくて、寒い、寒くてたまらなかった。

「総司!!」

着替えをもって部屋に入ってきたまことが私に駆け寄ってくるのが見える。

「…ごめん、血がついてしまう。」  
きれいな白い肌を、私の禍々しい血が汚してしまう。

「そんなことどうでもいいから！」

まことは私を抱き起し背中から抱えるようにして、後ろから抱きしめた。

あつたかい。

まるで陽だまり…。

私の手をしっかりと握り、背中をさすり続けた。

ごめん…。

手放せなくて。

あと少し、もう少しだから…

彼女の笑顔を見ることを、赦してください…。

私はもう一度、目を閉じた。

## 第十七章 6・お光さん

近藤先生が亡くなってから、総司の容体はますます悪くなった。

血を吐く回数も多くなって、血がのどをふさがないようにあたしはほぼ、つきつきりで総司の看病をした。

病状は悪くなって行くのに、目を覚ませば、昔みたいな笑顔を浮かべ続ける総司にあたしは不安になった。

場違いなくらいな無邪気な笑顔は、まるでもうこの世から心が離れてしまったようで。

五月に入り、梅雨に入った。

じめじめとした暑さは、総司の体力を容赦なく奪っていった。

大好きな水ようかんもほとんど食べられなくなっていき、もう起き上がることもできなくなった五月の半ば、思わぬ人が千駄ヶ谷を訪れた。

「じめんください。」

玄関をあけると、あたしより十くらい年上のきれいな女性が立っている。

番傘からはぼたぼたと雨のしずくが落ちる。

どこかで見ることがある。

「突然ごめんなさいね。沖田総司の姉のミツです。」

あたしは思わず目を見開く。

そう、この目元や鼻筋なんかは確かに総司によく似ている。

「あ、水瀬真実です。中へお入りください。」

あたしはおみつさんの中へ案内しながら、声をかける。

「よくこちらがお分かりになりましたね。」

「ええ、歳三さんが知らせてくれていたの。訪ねるのがすっかり遅くなってしまうってごめんなさい。」

まことさんにもすっかりご迷惑をおかけして。」

土方さんが…。

よかった。

あたしは総司の実家を全く知らなかったから、連絡の取りようがなかったもの。

「いえ、そんなことないです。総司には助けられてばかりで…。まだまだ少しも返せてないから。」

あたしは何もできていない。

無力感にいつもさいなまれていて、どうすることもできないくらいに。

「あの子に、ついていてくれて、本当にありがとう。」

おみつさんは総司そっくりの笑顔で笑った。

あたしはその笑顔を見て泣きたくなった。

\*

おみつさんが来てくれたから、総司の調子が少し良くなった。病気の峠を越えたのかと、期待したのだけれど、松本先生いわく、死の直前に病状が回復することはよくあることなのだという。だから覚悟をしろと。

それを聞いてあたしは暗くなる気持ちを抑えられず、台所で泣いた。もう近い。

総司が逝く日が。

その時、あたしはどんなふう to 彼を送り出せるだろう。笑って、最高の笑顔を見せられるだろうか。

おみつさんが来て。はじめは驚いていた総司も、久しぶりに逢えたお姉さんと一緒にうれしそうだった。

そういえば前に、自分は末っ子で、大変な甘えん坊だったと総司が笑って言っていた。

だからよかったと思う。

大好きなお姉さんに逢うことができて。

おみつさんはとても強い女性だ。

総司のあの痩せてしまった姿を見ても、総司の前では少しの揺らぎも見せずに、総司そっくりの優しい笑顔で笑っていた。

だから強い人なのだと、そう思っていた。

おみつさんが来て一週間。

夜中にいつものように、寝ている総司を確信して部屋に戻ろうとしたその時、

おみつさんのいる客間から小さな声が聞こえた。

あたしはその部屋へ近づくと部屋に向かって声をかけようと思わずためらった。

「つく、ひつく…。」



部屋の中から聞こえたのは嗚咽。  
おみつさん泣くのを我慢してたんだ。

あたしは「失礼します」と声をかけて暗がりでも声を殺して泣くおみつさんの肩をそっと抱きしめた。

「まことさん、ごめんなさいね。  
こんな恥ずかしい姿。」

「そんなことないです。泣いてください。いいんですよ。」

「ごめん…なさ…」

声が震えて嗚咽がこぼれる。  
当たり前だ。

大切な家族があんな風に苦しんでいるのだから。  
こんなふうには総司の前では泣けないから夜寝静まった後になくしか  
できなかつたんだ。

「どうして…！どうしてあの子が労咳なんか…！あああ…！」

堰を切ったように泣き崩れるおみつさんの姿は痛々しくてあたしも  
おみつさんと抱き合いながら泣いてしまった。

こんなふうには思い切り泣いたのなんていつぶりなのだろう。  
でも、今あたしたちにはこの時間が必要だった。  
もうそう遠くないその日を迎える為に。



第十七章 7・風となつて……沖田総司

気配を感じて、枕元に置いてある剣を取ろうとしたのだけれど、もう指一本動かすことすらできない……。息を吸うたびに走る激痛も吐き続ける血も……まったく現実感のないものになってしまった。

頼んで開け放してある窓から黒猫が入ってきた。

気配の正体はこの黒猫。

こちらを見ている。

笑っているのか？

このみじめな私を。

剣すら手が届かないこの無様な武士を。

もう斬れない……

もう剣を握れない……

自分の死に場所はずっと戦場だと思っていた。

白刃にその身をささげ、近藤先生や土方さんの楯となり、死ぬのだと。

それこそが自分の幸せだったから。

なのに、私は今こんなふうに黒猫に見下げられ、病に侵され死のうとしている。

不意に風が吹き抜けた。

後悔がないか、未練がないかと問われれば、それはもちろんある。

もっと走りたかった。

もっと戦いたかった。

…もつと…生きたかった。  
でも…これだけは言える。  
確かに、私は幸せだったと。  
尊敬する師に出逢い、多くの兄分、仲間を持ち、そして…生涯にた  
だ一度の恋をした。  
時を越え、幾千もの出会いの偶然の中から彼らに出逢えたこと、そ  
れを幸せと呼ばずになんとする。  
出逢えてよかった。  
生まれてきてよかった。  
私はこの人生を確かに精一杯生きたと。  
今ならそういえる。

だから逝こう。

この虹に届くほどの奇跡に感謝して。

風が吹く。

ああ、風になりたい…。

そうして自由にあの大地を駆け巡り、見守るのだ。  
愛おしい人を。

…

「総司！だめ！」

目を閉じようとした私を引き戻す声。  
力を入れて、目を開けると、そこには心から求めてやまない愛おし

い人。

「ま…と」

もう声すら出せない…

愛おしい人の名前すら口に出せない。

「総司…まだ約束果たしてもらってない。

元気になったら、お団子おごってくれるんでしょう？

元気になったら稽古してくれるって言ったじゃん。

約束やぶらないで、一人で行っちゃわないでよ。」

涙を目にいつぱいたためまことは怒ったように言う。

大好きだった。

…泣き顔も、笑い顔も…全部全部大好きだった。

「まこ…と、愛し…てる…」

零れ落ちる言葉。

いうつもりなんてなかったのに。

私は傷つけて、困らせるばかりだ。

でも、ただ伝えたかった。

まことは一瞬目を見開き一度ゆっくり瞬きをした。

その拍子に涙が頬を伝い零れ落ちた。

ゆっくりと目を開けてまことは大輪の笑顔の花を咲かせた。

ああ、この笑顔だ。

私が見つけたかったのは。

女子など絶対に好きにならないと思っていたのに、この光の笑顔に

惹かれ、愛おしくて仕方がなかった。

自分のものには決してならないと知っていたのに、それでも大好きだった。

誰よりも愛おしい人。

「総司…。」

ゆっくりと重なるくちびる。

柔らかな感覚。

私は至福の中目を閉じた。

陽だまりみたいなのその笑顔が、私の生きる道を照らしてくれた。

孤独で、くらい道を歩く私の光。

最期まで手放せなかった。

ごめん。

離さなければいけないのに、結局手放せなかった愛おしい人。

愛おしい気持ちなどとうの昔にはれている。

愛せなくていい、愛さなくていい。

ただ伝えたかった。

この想いを。

もう悔いはない。

この胸いつぱいの愛を抱いて逝ける。

だって私はこんなにも幸せだった。

同じ空の下で、同じ月を眺め、笑いあい、涙を流し、時には喧嘩もして…

そんな日々を、幸せを私にくれて本当に…本当にありがとう…。

今度は私が君を見守る。風になって。

…一陣の夏の風が吹き抜けた。

( 総司、よく頑張ったな。 )

あれ、近藤先生、いらしていたんですか。声くらいかけてくださればいいのに。

( 総司、お前は誰よりも強い武士だ。お前を誇りに思う。 )

近藤先生、照れるじゃないですか。

( 総司、ついてきてくれるか？ )

ええ、喜んで。どこまでも行きましょう。今度こそ、お供させてください。

( ではそろそろ参ろうか。 )

はい。

行きましょう。

風となつて。

どこまでも…。

いつまでも…。

## 第十七章 8・風の人、自由に。

総司が死んだ。

だんだんと、命が削り取られていくように、ゆっくりゆっくり命の炎が消えていった。

総司の体はまだ暖かくて、でも痩せた指の先からだんだんと冷たくなっていく。

命の名残が消えていく。

あたしはこときれた総司の体をもう一度だけ抱きしめた。

「…総司…逝っちゃったの？」

何も言わない。

閉じた目はもう開かない。

「ホントずるいよね。先に逝っちゃうなんて。まだまだ一緒にやりたいこといっぱいあったのに…。」

愛してるなんてずるい。

でもまつすぐなその思いが一番総司らしかった。

ねえ総司、聞こえる？

あたし…総司のことが大好きだったよ。

総司のくれた想いとは違うかもしれないけれど、でも、本当に大好きだったよ…。

大事だった。

ごめんね…ずっと甘えてて…。



たくさんの幸せを…本当にありがとう。

愛じゃなかった。

恋じゃなかった。

恋と呼ぶにはあまりに不器用で、愛と呼ぶには幼すぎたから。

でも確かに総司のことは大事で、大事で、かけがえのない人だった。この優しく、不器用なこの気持ちをなんて呼べばいいのかわからなかったの。

冷たくなりつつある総司の唇にもう一度だけ唇を重ねた。

目を閉じたその拍子に涙が零れ落ち、総司の頬にそのしずくが散った。

総司が笑ったような気がした。

\*

総司の葬儀はひっそりとしめやかに営まれた。

新政府軍に気付かれないように。

葬儀に参列したのは、お世話になった千駄ヶ谷のお宅の御主人と、

松本先生、おみつさんとあたしだけだった。

でも、きつと総司はそれでいいと笑っただろう。

だって総司は今頃近藤先生と会えているはずだから。

葬儀が終わって喪服を着換えると、あたしはいつも二人で話していた縁側に座ってぼんやりと夕焼けに染まる空を見ていた。

もういないなんて信じられない。  
人が死ぬってなんて不思議なんだろう…。  
この世にもう体がないなんて…。  
どれほどそうしていただろう。  
ふとあたしの手を包む暖かな手。

「まことさん…。」

「おみつさん…。」

おみつさんが総司とそっくりなその笑顔であたしの肩を優しく抱いた。

笑うと下がる目じりも、小さなえくぼも本当にそっくりで、思わず鼻の奥がつんと痛くなった。

「本当にありがとう。あの子を最期まで見ていてくれて、本当にありがとう。」

「…ごめ…なさい。」

声が震える。

「なぜ、謝るの？」

「あたし…何もできなかった…。総司が苦しんでいたのに…結局何も…。」

総司の気持ちに気が付いていたのに…何も…ごめんなさい。」

おみつさんはあたしの目を見て言った。

「あの子がね。私にくれた文で言ったの。好きな子ができたんだって。強くてきれいで優しい人なんだって。あなたを見たときああ、本当にその通りの人だって思ったわ。素敵な人に恋をしたんだって…。」

そんなこと言ってもらえる資格、あたしにはない。なのに…。

視界が揺らぐ。

かぶりを振った瞬間に涙のしずくが散った。

「心配だったの。男の人ばかりの試衛館にずっといて、女の子に見向きもしなかったあの子が。」

でも人を愛せる子に育ってくれて本当に良かった…。

だから…あの子を見ていてくれて本当にありがとう。

あの子に出逢ってくれて本当にありがとう。

総司の姉として…心から感謝申し上げます。」

おみつさんが床に手をついて頭を下げる。

「頭あげてください。あたし…そんな資格ないです。」

総司にはいつも優しくしてもらって…優しさに甘えてて…。」

「あの子は幸せよ。だってあなたに出逢えたんだから…。」

「おみつさん…！」

あたしたちは肩を寄せ合ってしばらく泣いた。

おみつさんは子供のころの泣き虫な総司の話聞かせてくれた。

泣き虫で、甘えん坊だった総司。

でも誰よりも負けず嫌いで、「歳三さんになんか負けない！」と泣

きながら剣を振るっていた試衛館時代。  
あたしたちは夜遅くまで、いっぱい笑って、いっぱい泣いた。

不意に夜風が吹き抜け、あたしの前髪を揺らした。

優しい夏の風。

それは無邪気で優しい総司の風だと思った。

総司は風になったのだと思う。

自由に優しくして……何者にもとらわれない風になったのだ。

そして誰よりも逢いたがっていた近藤先生のもとへ、北で戦う土方  
さんのもとへ駆けて行ったのだろう。

新撰組一番隊組長沖田総司芳咳にて死去。

享年25歳。

## 第十八章 1 北へ

総司の死からひと月。

あたしはしばらく魂が抜けたように呆けていたのだけれど、おみつさんに一緒に日野で暮らさないかと言われ、首を横に振った。

あたしのいる場所はここではないと思ったから。

強烈なまでの魂が指し示す。

あたしの居場所。

今はもうこの世にいないかもしれない、あたしの魂の片割れ。

「北へ行きます。」

そう思ったら自然と口に出していた。

会津へ行こう。

土方さんがまだ生きているのかどうかはわからない。でも、行かなければと思った。

あの人の生きざまを、生きた軌跡を追いたいから。

そういうと、おみつさんは何か言いたげに、口を開きかけたものの、すぐに総司そっくりの笑顔でこう言った。

「もう決めているのね」と。

そう、もうあたしは決めている。否、決まっていたと言ったほうがいいかもしれない。

あの人のもとへ行かなければいけないのは、もうずっと以前からそう決まっているような気がしていた。

\*

あたしは会津へ行く松本先生に付いていくことにした。何分戦地へ向かうわけで、危険なことも多いと言い含められていたのだけれど、あたしはやる気持ちを抑えられなかった。

出発の前日、あたしは鏡に向かい、髪を切り落とした。

長旅の中で女とわかると危険も多いからと、女髪に結っていた髪をほどき、肩に付かなくなるまでバツサリ切り落とした。

松本先生はそれを見て大きな目を落ちそうなくらい見開いていたけれど。

もう何も失うものなんてないもの。ただ会いたいだけ。

あの人に。

出発の朝。

夏の日差しが朝から暑かった。

男物も着物を用意してもらい、袴を履き、笠を準備する。荷物はほんの少し。

斉藤さんからもらったかんざしと芹沢先生の脇差し。

見送りにはおみつさんが来てくれた。

あたしの体のことを心配してくれて旅支度を整えるのを手伝ってくれた。

おみつさんはあたしを抱きしめる。

優しい女の人の匂いは少しだけ涙腺を緩ませた。

「まことちゃん、総司のね、荷物を整理してたらね、これが出てきたの。」

そういつて渡されたのは一通の文。

几帳面な総司の字で、「水瀬真実様」と書いてある。

「これ、総司が？」

「ええ。いつの間に書いてたのかしら。出発前に渡せてよかった。」  
文を開くと総司の字でびっしりと、細かい文字が書かれている。

” 水瀬真実様

この手紙を貴女が読む頃、私はもうこの世にいないでしょう。  
もうあまり多く話せないので伝えたいことを書き残すことにします。

大好きでした。

こんなこと今更つたえるなんて卑怯だと思う。  
でもどうか伝えさせてほしい。

もうとっくに気が付いていたと思うけれど、  
本当に好きでした。

なのに、傷つけてばかりで本当にごめん。  
私のせいでここにどめてしまって本当にごめん。

私がいなくなった後、まことのことだから土方さんを追つのでしょ  
うね。

いつも無茶ばかりするから心配です。

でも、君のそのまっすぐさに、ひたむきさに、いつも救われていま

した。

だから今度は私が君を助ける。  
君がくれた幸せに、まだ何も返せていないけれど、風になってまことを見守ると約束する。

きつと土方さんのところまで、私が導く。

だから君の思うままに走って。

どこまでも見届けるから。

そして必ず土方さんと、幸せになって。

どこにいても、まことの幸せを祈っているから。

いつか、またどこかで逢おう。

そしてその時は果たせなかった甘味めぐりをしようね。

その時は笑顔の素敵なまことできてほしい。

最後に、君に出逢えて本当に良かった。

時を越えて、同じ空の下で、同じ時間を歩めたこと、本当に幸せに思う。

出逢ってくれて、たくさんの幸せをくれて  
本当にありがとう。

沖田総司藤原房良”

ぱたぱた…。

白い文に涙が音を立てて落ちる。

「っ…総司っ…！っつく、うっ…」

あたしは嗚咽が止められなかった。



痛いくらいに想ってくれる総司の優しさに胸がいつぱいで…。

「まことちゃん、ありがとう。総司と一緒にいてくれて。

私も、あなたのことは本当の家族みたいに思っているのよ。」

おみつさんが泣き崩れたあたしの肩を抱いてそっと背中に手を置いた。

あたしはしばらく泣き続けた。

おみつさんの笑顔は総司そっくりで、まるで、総司がそこにいてくれるみたいだった。

「おみつさん、ありがとうございます。あたしも総司やおみつさんにあえて本当に良かった。」

あたしは立ち上がってもう一度笠の紐をしめなおす。

「体に気を付けて、無理しないでね。」

お姉ちゃんがいたらきつとこんなふうなのかもしれないと思うと、すぐくすぐったくてうれしい。

「はい。」

あたしは笑って一步を踏み出す。

風が吹き抜ける。

総司が後押しをしてくれたように、体は軽くなっていた。

北へ行こう。

大好きなあの人の待つ北へ。

総司と一緒に。

第十八章 2・戦場の月：土方歳三

夢を見た。

勝ちゃんが桜の下で空を仰いでいる。

俺はそこへ近づこうとすると、肩をつかまれて止められる。振り返ると、そこには総司がいた。

”まだ駄目ですよ。土方さん。あなたにはまだ、出逢うべき人がいるでしょう。”

出逢うべき人？

”もうすぐですよ。きっと逢える。”

その瞬間光がはじけた。

…

「…う！副長！！」

ビクン

目を覚ますと斉藤（今は山口を名乗っているが）が眉間にしわを寄せたまま俺を覗き込んでいる。

一瞬ここがどこだかわからなくなる。

会津に来てしばらくして、新政府軍との戦いになった。

会津は古くから土着愛が強い。

大人も子供も女も男も皆で戦うのだと、若松城に籠城して戦った。

だがいかんせん兵の数も武器も違いすぎた。

敗戦の色は濃厚で、容保様も決断を迫られているところだった。

俺は軍議の後、若松城の近くの陣の片隅で、少し目を閉じていたところだった。

「ああ、なんだ？」

「いえ、今は敵も落ち着いています。すこし横になつては？」

「大丈夫だ。俺はまだ戦えるさ。」

口の端を引き上げてみせる。

勝ちちゃんは死んだ。

殺したのは俺だ。

夢の中ですら近づけぬ。

だから戦わなければ。

走り続けなければ。

あの愚直で、情にもろい、生涯最高の友の魂に報いるには走り続けることしか俺はできねえから。

「…隣良いですか？」

齊藤は言葉少なく隣に腰を下ろす。

何を話すわけでもない。

ただこの昔からの仲間がここにいるというその実感が俺を安心させた。

会津へきて、戦況は苛烈だった。

仲間もボロボロと死んでいく。

新政府軍の兵器の威力はそれほどまでにすさまじかった。

ただその中でも、揺らぐことなく無心に戦い続けるこの男を俺は頼りにしていた。

俺は何ともなしに首から下げている水瀬からもらった銀の輪っかを手に取って眺めた。

水瀬の母親の形見だというそれは何のためのものなのか、よくわからない。

内側には異国の文字だろうか、何かが刻まれている。

ただ、水瀬が元いた世界から唯一持ってきた、どれほど大切にしていたかわからない母親の形見を俺にお守りとして託してくれたことは、俺の心を奮い立たせた。

もう逢えない愛おしい人。

でも目を閉じればこんなにも鮮やかにその笑顔が、瞼の裏に浮かぶ。結局心を通わせることはできないままだったが、それでよかったのかもしれないと今では思う。

離れ離れになってしまつのに未練だけ残してもどうしようもねえしな。

あいつをここへ連れてくるわけにはいかなかったから。

あいつには幸せになってほしいから。

だからこれでよかった。

生涯においてただ一つの恋だった。

こんなにも激しく心がかき乱されて、こんなにも切なくて、優しく、そして何よりこんなにも欲しいと、逢いたいと欲する恋は。いい年こいて恥ずかしいと思う。でもこんなにも焦がれてやまない人間に出逢うなんて想っても見なかった。

「それは？」

斉藤が俺の手元を見て問う。

「ああ、水瀬がよこしたんだ。なんに使うのかはよくわからねえが母親の形見らしい。」

斉藤は切れ長の目を一瞬見開く。

「副長は…いえ。」

そのまま沈黙が落ちる。  
空には満月が輝いていた。

いつ果てるかもしれないこの命。  
でも確かに生きたと言いたい。  
だから走る。  
まだ来るなと総司が言ったように、俺にはまだやるべきことがある。  
だから走ろうと思う。

なあ、水瀬。

今お前はどこにいるんだ？

お前も同じようにこの月を見ているのか？

今お前は幸せか？

笑えているか？

逢いたいよ、お前に。

## 第十八章 3・会津、故郷：斉藤一

慶応四年八月二十一日。

新撰組は母成峠で、敗走。

敗戦の色を一層濃厚にした。

降りしきる銃弾

ひらめく白刃。

怒号と悲鳴。

若松城が墮ちるのも時間の問題なのやもしれぬ。

だが会津は俺の故郷。

この地を俺は離れん。

最期まで俺は会津の人間として、おれの誠を貫きたいと思う。

小休止。

俺は竹筒から水を飲んだ。

火薬や砂で汚れた口をゆすぐと、隣から声をかけられる。

「…斉藤。」

副長が俺を見る。

「なんです?」

「新撰組には北上の命が下った。」



「！」

「だが…お前は残るのだろうか？会津に。」

「俺は…」

「お前はお前の戦をしろ。」

「！かたじけない。」

この人は本当に人を良く見ている。  
俺が会津と命の共にするつもりなのを初めから知っていたのか。

会津…、俺の故郷。

この地を俺は離れられん。

「斉藤、お前と走れたこと、幸せに思う。武運を祈るぞ。さらばだ。」

副長は凄艶な笑みを浮かべる。ぞくりとするほど美しい笑みだった。  
それは鬼の顔。

修羅の道にすべてを投じた男の覚悟の笑み。

踵を返して去っていく。

もうあの人には二度と会えぬ。

あの方は武士であった。

誰よりも。

信ずるものために鬼となり、守り続けたあの方は、最後の最後まで

で武士として逝くのだろう。  
俺は去っていく後ろ姿に、敬意をこめ、深々と頭を下げた。

\*

新撰組と離隊してから、会津は持久戦になった。  
人がボロボロと死んでいく様はまさに地獄だった。

九月に入り、俺は、思わぬ人物と再会することになる。

「山口さん、山口さんに会いたいと申す人物がおります。」

「誰だ？」

「それが、松本法眼の知り合いとかで、我々では判断が付きませぬ  
ゆえ、見分願います。」

「この忙しいときに。」

俺は舌打ちをした。

この籠城中の若松城にどうやって入ってきたのか、汚い身なりをし  
た人間が端座していた。

笠を目深にかぶっていて顔は見えない。

ただ、着物に、血の跡が付いているのが見て取れた。

俺は刀を抜いて鼻先に近づける。

「お前は誰だ？何ゆえ松本法眼の名を出した？」

その人物は笠をゆつくりととった。

髪がはらりと揺れる。

俺はその人物を見て愕然とした。

「水瀬！！」

俺は刀をしまい、水瀬に駆け寄る。

水瀬は髪を短く切り、男装していた。

着物は擦り切れ泥で汚れており、ここまでの旅路がどれほど過酷かを思わせた。

「水瀬：お前：」

俺は言葉を継げなかった。

「：斉藤さん、ごめんなさい。こんなとこまで押しかけて。」

水瀬は小さく笑った。

俺は痩せた水瀬の体をただ黙って抱きしめることしかでき無かった。

第十八章 4・ただ君の幸せを…斉藤一

身なりを整えた水瀬と向き合う。

少し痩せたようだが水瀬がまとうこの完結したような哀しいほどの静謐はなんなのだろう。

凜とした冬の湖のような、静かな何者にも侵せない神聖な空気。

水瀬がここにこうしているということは…

沖田さんは死んだのだろう。

あの、男は安らかに逝ったのだろうか。

「水瀬、沖田さんは…」

水瀬は沁みいるような優しい笑顔を浮かべた。

「ええ。とてもいい顔でした。」

「…そうか。」

きつとあの男は幸せだっただろう。

惚れた女に看取られて逝ったのだから。

風のようにつかみどころのない、けれど剣を持たせれば誰よりも強い、あの好敵手の笑顔が浮かぶ。

沖田さん、

あんたは幸せだったのだろうか。

”もちろんですよ。”という声が聞こえた気がした。

「斉藤さん、土方さんは…新撰組はここにいるのですか？」  
はっと思に至る。

この戦火の中、女子のみでどんな危険があるやもしれぬのに、髪を切り落としてまでここに来たのは何のためなのかを。

「新撰組は北へ向かった。函館だ。もちろん副長が率いている。」

水瀬ははっとしたように目を見開く。

その眼にみるみる内に涙がたまるのを見て俺は胸が締め付けられるような感覚に襲われる。

無理もない。

ここまで来たのに、逢えなかったのだから。

「案ずるな…」

俺は水瀬に向かって言うと、水瀬は首を振った。  
その拍子にはらりと涙が零れ落ちる。

「いいえ、違うんです。うれしいんです。」

「え？」

「生きていてくれたことが…。」

水瀬は目に涙をためて小さく笑った。

全身が総毛だった。

逢えない辛さよりも、無事である喜びのほうが大きいのだ。  
なんとという見事な女…。

副長にわずかながら嫉妬した。

こんなにもこの女に恋慕われていることに。

でも副長の無事に涙する水瀬はこの世の者とは思えぬほどの美しさを湛えていて、愛おしさに胸が締め付けられるほどだった。

この女はひたむきで、一途で、自分のためには望まない。

だからこそこんなにも焦がれる。

この女を守りたいとそう思った。

自分を振り返らずとも好い。

この女の幸せをただ見守りたいとそう思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6290p/>

---

虹に届くまで

2011年11月6日05時09分発行